

一般国道
3号線 筑紫野バイパス関係埋蔵文化財調査報告第3集

仮塚南遺跡

福岡県筑紫野市大字諸田所在遺跡の調査

1995

福岡県教育委員会

かん づか みなみ 遺 跡
仮 塚 南

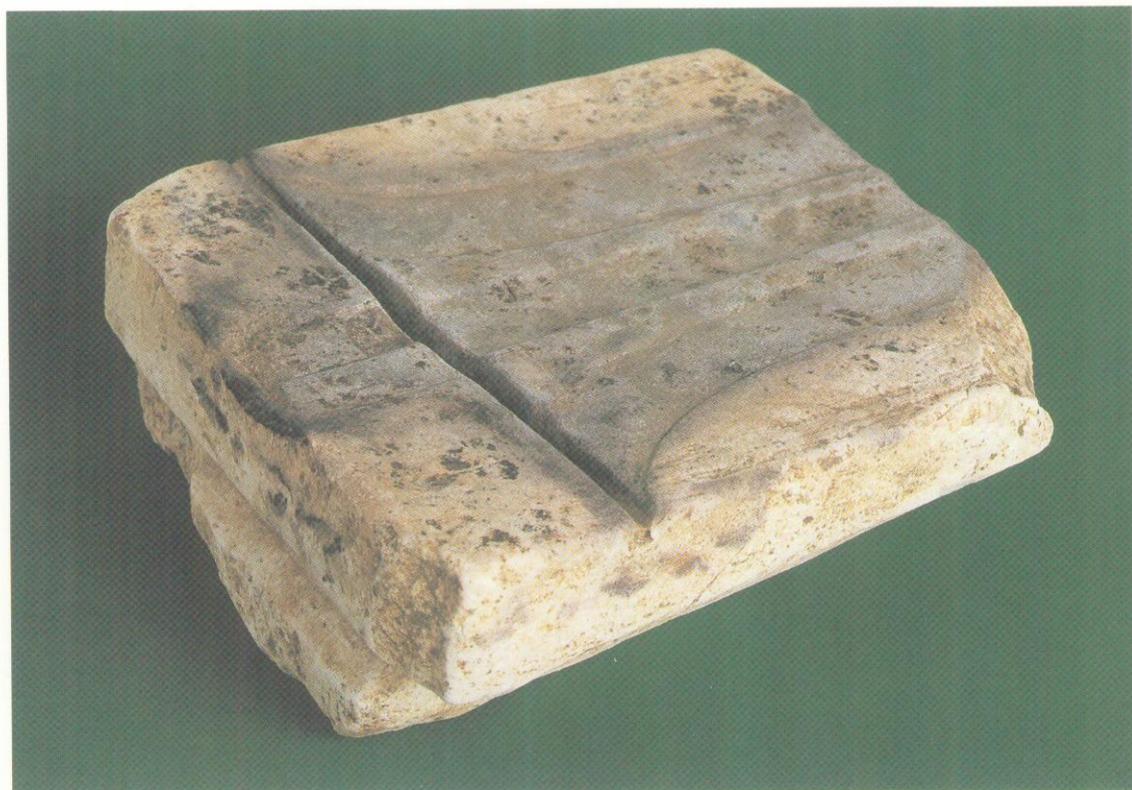
福岡県筑紫野市大字諸田所在遺跡の調査



(1) 仮塚南遺跡北地区全景（南から）



(2) 仮塚南遺跡南地区全景（北から）



(1) 仮塚南遺跡出土広形銅戈連結式鑄型



(2) 仮塚南遺跡出土広形銅戈連結式鑄型（表と裏）

序

福岡県教育委員会では建設省九州地方建設局の受託を受けて、昭和56(1981)年度から一般国道3号線筑紫野バイパスの建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施してまいりました。調査は平成6年度に終了し、平成7年度に筑紫野バイパスは全線開通予定です。

この報告書は、平成3(1991)年度に発掘調査を実施した筑紫野市大字諸田所在の仮塚南遺跡の記録です。二日市地峡と呼ばれるこの地域は古代より筑紫神社が鎮座しており、福岡平野と筑後平野とを結ぶ重要な交通の要所でした。今回、弥生時代後期と古墳時代後期の集落跡が確認され、当時の交流の復原にとって大変意義のある成果を得ることができました。

本書が、地域間交流の研究や文化財保護思想の普及と活用の一助となれば幸甚に存じます。

発掘調査および整理作業や報告書の作成にあたって、ご協力いただいた多くの方々に対しまして深甚の謝意を表します。

平成7年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 光安 常喜

例 言

1. この報告書は、平成3(1991)年度に福岡県教育委員会が建設省九州地方建設局の委託を受けて実施した一般国道3号線筑紫野バイパスの建設に先立つ埋蔵文化財の発掘調査記録で、一般国道3号線筑紫野バイパス関係埋蔵文化財調査報告の第3集である。
2. 本書に記録した仮塚南遺跡は筑紫野バイパス第2地点にあたり、筑紫野市大字諸田字仮塚に所在する。本遺跡の北側には同じ字内に筑紫野バイパス第1地点の諸田仮塚遺跡が存在し、遺跡名の混乱を避けるため本遺跡を仮塚南遺跡とした。
3. 本書に掲載した遺跡図は、小田和利・水ノ江和同・日高正幸が作成した。
4. 本書に掲載した遺構写真は水ノ江が、遺物写真については巻頭図版と多田羅大車田・三雲屋敷出土の広形銅戈鋳型を九州歴史資料館石丸洋が、その他を水ノ江と北岡伸一が撮影した。なお、空中写真についてはフォト大塚に委託した。
5. 出土遺物は九州歴史資料館において岩瀬正信の指導で整理・復原作業を行ない、実測作業は福岡県文化課太宰府事務所において若松三枝子・岡由美子・田中典子・堀江圭子の、図面浄書作業は豊福弥生・原カヨ子・関久江・土山真弓美の協力を得て実施した。鉄器の保存処理は九州歴史資料館横田義章が、旧石器の実測については福岡県文化課杉原敏之が行なった。
6. 使用した方位はすべて真北である。
7. 出土遺物・写真・図面等については、すべて九州歴史資料館および福岡県文化課太宰府事務所において保管している。
8. 本書の執筆ならびに編集は水ノ江が行なった。

本文目次

I. はじめに

1. 調査の経緯と組織…………… 1
2. 位置と環境…………… 3

II. 発掘調査の記録

1. 調査の概要…………… 8
2. 旧石器時代の遺物…………… 9
3. 縄文時代の遺構と遺物…………… 10
4. 弥生時代の遺構と遺物…………… 12
 - (1) 竪穴住居跡…………… 13
 - (2) 土壌…………… 56
 - (3) 溝…………… 61
 - (4) 谷地区…………… 61
 - (5) ピット出土の遺物…………… 81
 - (6) その他の遺物…………… 84
5. 古墳時代以降の遺構と遺物…………… 85
 - (1) 竪穴住居跡…………… 85
 - (2) 掘立柱建物跡…………… 147
 - (3) 土壌…………… 149
 - (4) 溝…………… 166
 - (5) 道状遺構…………… 168
 - (6) 炭焼窯跡…………… 173
 - (7) ピット出土の遺物…………… 177
 - (8) その他の遺物…………… 180

III. まとめ

1. 仮塚南遺跡の概要…………… 182
2. 旧石器・縄文時代について…………… 182
3. 弥生時代について…………… 183
4. 古墳時代について…………… 188
5. 仮塚南遺跡出土の広形銅戈連結式鋳型について…………… 191

巻頭図版目次

巻頭図版 1 (1) 仮塚南遺跡北地区全景 (南から) (2) 仮塚南遺跡南地区全景 (北から)

巻頭図版 2 (1) 仮塚南遺跡出土広形銅戈連結式鋳型
(2) 仮塚南遺跡出土広形銅戈連結式鋳型 (表と裏)

図版目次

- 図版 1 (1) 仮塚南遺跡北地区全景 (南から) (2) 仮塚南遺跡北地区全景 (北東から)
- 図版 2 (1) 仮塚南遺跡北地区北側全景 (南から) (2) 仮塚南遺跡北地区南側全景 (北から)
- 図版 3 (1) 仮塚南遺跡南地区全景 (北西から) (2) 南北地区全景 (南から)
- 図版 4 (1) 16号土壌 (北東から) (2) 17号土壌 (北西から)
- 図版 5 (1) 2号竪穴住居跡 (北から) (2) 3号竪穴住居跡 (南東から)
- 図版 6 (1) 5号竪穴住居跡 (北から) (2) 5号竪穴住居跡炉跡 (北西から)
- 図版 7 (1) 25・31・32・34号竪穴住居跡 (西から) (2) 32・34号竪穴住居跡 (北西から)
- 図版 8 (1) 37～43号竪穴住居跡 (北西から) (2) 38号竪穴住居跡 (北から)
- 図版 9 (1) 40号竪穴住居跡 (北から) (2) 42号竪穴住居跡 (北西から)
- 図版10 (1) 16・45号竪穴住居跡 (東から) (2) 46号竪穴住居跡 (北東から)
- 図版11 (1) 16・44～47・52～55号竪穴住居跡 (北東から)
(2) 47・52号竪穴住居跡 (北東から)
- 図版12 (1) 48～51号竪穴住居跡 (東から) (2) 49号竪穴住居跡 (北東から)
- 図版13 (1) 50号竪穴住居跡 (北から) (2) 51号竪穴住居跡 (北東から)
- 図版14 (1) 55号竪穴住居跡 (北西から) (2) 56号竪穴住居跡 (南東から)
- 図版15 (1) 57号竪穴住居跡 (北から) (2) 57号竪穴住居跡屋内土壌 (北東から)
- 図版16 (1) 59号竪穴住居跡 (北東から) (2) 59号竪穴住居跡屋内土壌 (東から)
- 図版17 (1) 61号竪穴住居跡 (北東から) (2) 61号竪穴住居跡屋内土壌 (北西から)
- 図版18 (1) 62号竪穴住居跡 (南から) (2) 63号竪穴住居跡 (南西から)
- 図版19 (1) 64号竪穴住居跡 (北西から) (2) 64号竪穴住居跡遺物出土状態 (北東から)
- 図版20 (1) 65号竪穴住居跡 (西から) (2) 65号竪穴住居跡階段 (南東から)
- 図版21 (1) 66号竪穴住居跡上層 (東から)
(2) 66号竪穴住居跡上層遺物出土状態.1 (南東から)

- 図版22 (1) 66号竪穴住居跡完掘状態(東から)
 (2) 66号竪穴住居跡上層遺物出土状態.2(南から)
- 図版23 (1) 66号竪穴住居跡焼成部近景(南東から)
 (2) 66号竪穴住居跡素頭環太刀出土状態(西から)
- 図版24 (1) 66・68号竪穴住居跡(西から) (2) 68号竪穴住居跡(東から)
- 図版25 (1) 67号竪穴住居跡(南西から) (2) 70号竪穴住居跡(北東から)
- 図版26 (1) 69号竪穴住居跡遺物出土状態(南から) (2) 69号竪穴住居跡完掘状態(東から)
- 図版27 (1) 10号土壌.1(北から) (2) 10号土壌.2(南東から)
- 図版28 (1) 10号土壌.3(北西から) (2) 13号土壌(北西から)
- 図版29 (1) 14号土壌(西から) (2) 15号土壌(北西から)
- 図版30 (1) 谷地区(北から) (2) 谷地区(東から)
- 図版31 (1) 谷地区遺物出土状態.1(北から) (2) 谷地区遺物出土状態.2(東から)
- 図版32 弥生時代竪穴住居跡出土土器.1
- 図版33 弥生時代竪穴住居跡出土土器.2
- 図版34 弥生時代竪穴住居跡出土土器.3
- 図版35 弥生時代竪穴住居跡出土土器.4
- 図版36 弥生時代竪穴住居跡出土土器.5
- 図版37 弥生時代竪穴住居跡出土土器.6
- 図版38 弥生時代竪穴住居跡出土土器.7
- 図版39 弥生時代土壌出土土器(上)および谷地区出土土器.1(下)
- 図版40 谷地区出土土器.2
- 図版41 谷地区出土土器.3
- 図版42 谷地区出土土器.4
- 図版43 谷地区出土土器.5
- 図版44 谷地区出土土器.6
- 図版45 谷地区出土土器.7
- 図版46 谷地区出土土器.8
- 図版47 谷地区出土土器.9およびその他の弥生土器
- 図版48 (1) 旧石器および縄文土器 (2) 石鏃
- 図版49 (1) 石匙・スクレイパー (2) 弥生時代遺構出土の砥石
- 図版50 (1) 石庖丁.1 (2) 石庖丁.2
- 図版51 (1) 弥生時代遺構出土の鉄器 (2) 弥生時代遺構出土の玉類
 (3) 50号竪穴住居跡出土土器

- 図版52 仮塚南遺跡出土広形銅戈連結式鋳型
- 図版53 (1) 仮塚南遺跡北地区北東部竪穴住居跡群 (西から)
(2) 仮塚南遺跡北地区南部竪穴住居跡群 (北から)
- 図版54 (1) 1号竪穴住居跡 (北西から) (2) 4号竪穴住居跡 (南東から)
- 図版55 (1) 4号竪穴住居跡カマド (南東から)
(2) 4号竪穴住居跡遺物出土状態 (北東から)
- 図版56 (1) 6号竪穴住居跡 (南から) (2) 6号竪穴住居跡カマド (南から)
- 図版57 (1) 6号竪穴住居跡遺物出土状態 (南から)
(2) 7～9号竪穴住居跡 (南から)
- 図版58 (1) 7・8号竪穴住居跡 (南から) (2) 7号竪穴住居跡カマド (南から)
- 図版59 (1) 9号竪穴住居跡 (南から) (2) 9号竪穴住居跡カマド (南西から)
- 図版60 (1) 10～17号竪穴住居跡 (南西から) (2) 10・11号竪穴住居跡 (東から)
- 図版61 (1) 13・14号竪穴住居跡 (東から) (2) 13号竪穴住居跡 (南西から)
- 図版62 (1) 13号竪穴住居跡カマド (東から)
(2) 13号竪穴住居跡遺物出土状態.1 (南東から)
- 図版63 (1) 13号竪穴住居跡遺物出土状態.2 (北から)
(2) 13号竪穴住居跡遺物出土状態.3 (西から)
- 図版64 (1) 14号竪穴住居跡 (南東から) (2) 14号竪穴住居跡土層断面 (南西から)
- 図版65 (1) 14号竪穴住居跡カマド検出状態 (東から)
(2) 14号竪穴住居跡カマド完掘状態 (南東から)
- 図版66 (1) 14号竪穴住居跡遺物出土状態.1 (東から)
(2) 14号竪穴住居跡遺物出土状態.2 (南東から)
- 図版67 (1) 18号竪穴住居跡 (南東から) (2) 18号竪穴住居跡カマド (南東から)
- 図版68 (1) 19号竪穴住居跡 (南東から) (2) 19号竪穴住居跡カマド (南東から)
- 図版69 (1) 20号竪穴住居跡 (南から) (2) 20号竪穴住居跡カマド (南西から)
- 図版70 (1) 20号竪穴住居跡遺物出土状態.1 (西から)
(2) 20号竪穴住居跡遺物出土状態.2 (南から)
- 図版71 (1) 12・21号竪穴住居跡 (南東から) (2) 21号竪穴住居跡 (南東から)
- 図版72 (1) 21号竪穴住居跡カマド検出状態 (南東から)
(2) 21号竪穴住居跡カマド完掘状態 (南東から)
- 図版73 (1) 22号竪穴住居跡 (南東から) (2) 23号竪穴住居跡 (南西から)
- 図版74 (1) 24号竪穴住居跡 (南から) (2) 24号竪穴住居跡遺物出土状態 (西から)
- 図版75 (1) 24号竪穴住居跡カマド検出状態 (南から)

(2) 24号竖穴住居跡カマド完掘状態(南東から)

- | | | | | |
|-------|-----|-----------------------|-----|----------------------|
| 図版76 | (1) | 25号竖穴住居跡(南西から) | (2) | 25号竖穴住居跡カマド(西から) |
| 図版77 | (1) | 26号竖穴住居跡(西から) | (2) | 26号竖穴住居跡遺物出土状態(南から) |
| 図版78 | (1) | 27・41号竖穴住居跡(南西から) | (2) | 20・29・30号竖穴住居跡(南東から) |
| 図版79 | (1) | 29号竖穴住居跡(南東から) | (2) | 29号竖穴住居跡カマド(東から) |
| 図版80 | (1) | 30号竖穴住居跡(南から) | (2) | 30号竖穴住居跡カマド(南東から) |
| 図版81 | (1) | 33号竖穴住居跡(南東から) | (2) | 35・36号竖穴住居跡(北西から) |
| 図版82 | (1) | 37号竖穴住居跡(北西から) | (2) | 39号竖穴住居跡(北西から) |
| 図版83 | (1) | 44号竖穴住居跡(南西から) | (2) | 48号竖穴住居跡(南東から) |
| 図版84 | (1) | 54号竖穴住居跡(西から) | (2) | 54号竖穴住居跡カマド(南から) |
| 図版85 | (1) | 58号竖穴住居跡(南から) | (2) | 60号竖穴住居跡(南から) |
| 図版86 | (1) | 60号竖穴住居跡カマド検出状態(南西から) | | |
| | (2) | 60号竖穴住居跡カマド完掘状態(南東から) | | |
| 図版87 | (1) | 1号掘立柱建物跡(西から) | (2) | 2号掘立柱建物跡(南西から) |
| 図版88 | (1) | 1号土壙(東から) | (2) | 2号土壙(西から) |
| 図版89 | (1) | 3号土壙(北東から) | (2) | 4号土壙(東から) |
| 図版90 | (1) | 5号土壙(西から) | (2) | 6号土壙(西から) |
| 図版91 | (1) | 7号土壙(南から) | (2) | 8号土壙(南東から) |
| 図版92 | (1) | 9号土壙(北東から) | (2) | 9号土壙遺物出土状態(北から) |
| 図版93 | (1) | 仮塚南遺跡南地区全景(北から) | (2) | 11号土壙(西から) |
| 図版94 | (1) | 1号道状遺構.1(西から) | (2) | 1号道状遺構.2(南東から) |
| 図版95 | (1) | 1号道状遺構.3(北東から) | (2) | 1号道状遺構.4(南から) |
| 図版96 | (1) | 2号道状遺構.1(北から) | (2) | 2号道状遺構.2(北東から) |
| 図版97 | (1) | 2号道状遺構土層断面.1(北西から) | (2) | 2号道状遺構土層断面.2(北から) |
| 図版98 | (1) | 炭焼窯跡全景.1(北東から) | (2) | 炭焼窯跡全景.2(東から) |
| 図版99 | (1) | 1・2号炭焼窯跡(東から) | (2) | 2号炭焼窯跡土層断面(東から) |
| 図版100 | (1) | 1号炭焼窯跡土層断面(東から) | (2) | 1号炭焼窯跡完掘状態(東から) |
| 図版101 | (1) | 3号炭焼窯跡.1(北東から) | (2) | 3号炭焼窯跡.2(南から) |
| 図版102 | (1) | 3号炭焼窯跡.3(南西から) | (2) | 4号炭焼窯跡(北から) |
| 図版103 | | 古墳時代竖穴住居跡出土土器.1 | | |
| 図版104 | | 古墳時代竖穴住居跡出土土器.2 | | |
| 図版105 | | 古墳時代竖穴住居跡出土土器.3 | | |
| 図版106 | | 古墳時代竖穴住居跡出土土器.4 | | |

- 図版107 古墳時代竪穴住居跡出土土器.5
 図版108 古墳時代竪穴住居跡出土土器.6
 図版109 古墳時代竪穴住居跡出土土器.7
 図版110 古墳時代竪穴住居跡出土土器.8
 図版111 古墳時代土壙出土土器.1
 図版112 古墳時代土壙出土土器.2
 図版113 古墳時代土壙.3・道状遺構・ピット等出土土器
 図版114 (1) 土玉・土製模造鏡・土錘・土製勾玉 (2) 土製人形
 (3) 手捏ね土器
 図版115 (1) 紡錘車 (2) 古墳時代遺構出土玉類
 図版116 (1) 古墳時代遺構出土砥石.1 (2) 古墳時代遺構出土砥石.2
 図版117 (1) 古墳時代遺構出土鉄器.1 (2) 古墳時代遺構出土鉄器.2
 図版118 多田羅大牟田出土広形銅戈鑄型
 図版119 三雲屋敷出土広形銅戈鑄型

挿 図 目 次

第1図	仮塚南遺跡遠景（南から 1994年12月撮影）	1
第2図	国道3号線筑紫野バイパス用地内の各調査地点（1/10,000）	折込
第3図	仮塚南遺跡周辺の遺跡分布（1/40,000）	5
第4図	仮塚南遺跡調査地点（1/5,000）	6
第5図	仮塚南遺跡遺構配置略図（1/800）	7
第6図	旧石器・縄文土器実測図（1・2は2/3 3・4は1/3）	9
第7図	16・17号土壙実測図（1/30）	10
第8図	石鏃・石匙・スクレイパー実測図（1～17は2/3 18～20は1/2）	11
第9図	2・3号竪穴住居跡実測図（1/60）	13
第10図	3・5号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）	14
第11図	5号竪穴住居跡実測図（1/60）	15
第12図	16・45号竪穴住居跡実測図（1/60）	17
第13図	28・31号竪穴住居跡実測図（1/60）	18
第14図	32・34・38号竪穴住居跡実測図（1/60）	20
第15図	40・41・43号竪穴住居跡実測図（1/60）	22

第16図	16・31・38・40・42号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	23
第17図	42号竖穴住居跡実測図 (1/60)	24
第18図	46号竖穴住居跡実測図 (1/60)	26
第19図	49号竖穴住居跡実測図 (1/60)	27
第20図	50号竖穴住居跡実測図 (1/60)	29
第21図	46・49・50号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	30
第22図	51号竖穴住居跡実測図 (1/60)	31
第23図	47・52号竖穴住居跡実測図 (1/60)	32
第24図	55・56号竖穴住居跡実測図 (1/60)	33
第25図	55・56号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	34
第26図	57号竖穴住居跡実測図 (1/60)	36
第27図	57号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	37
第28図	59号竖穴住居跡実測図 (1/60)	38
第29図	59号竖穴住居跡屋内土壌実測図 (1/30)	39
第30図	59・61～63号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	40
第31図	61・62号竖穴住居跡実測図 (1/60)	41
第32図	61・63号竖穴住居跡炉跡実測図 (1/30)	42
第33図	63号竖穴住居跡実測図 (1/60)	43
第34図	64号竖穴住居跡実測図 (1/60)	44
第35図	64号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	45
第36図	65号竖穴住居跡実測図 (1/60)	46
第37図	65号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	46
第38図	66・68号竖穴住居跡 (1/60) および66号焼成部土層断面実測図 (1/30)	48
第39図	66号竖穴住居跡出土土器実測図.1 (1/4)	49
第40図	66号竖穴住居跡出土土器実測図.2 (1/4)	50
第41図	66号竖穴住居跡出土土器実測図.3 (1/4)	51
第42図	66号竖穴住居跡出土土器実測図.4 (1/4)	52
第43図	67号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	52
第44図	67・69・70号竖穴住居跡実測図 (1/60)	53
第45図	69号竖穴住居跡出土土器実測図.1 (1/4)	55
第46図	69号竖穴住居跡出土土器実測図.2 (1/4)	56
第47図	10号土壌実測図 (1/30)	57
第48図	10号土壌出土鑄型実測図 (1/3)	折込

第49図	10・13～15号土壌出土土器実測図(1/4)	59
第50図	13・15号土壌実測図(1/30)	60
第51図	14号土壌実測図(1/30)	60
第52図	3号溝出土土器実測図(1/4)	61
第53図	谷地区平面図(1/200)および土層断面実測図(1/80)	62
第54図	谷地区出土土器実測図.1(1/4)	64
第55図	谷地区出土土器実測図.2(10～12は1/6 13～15は1/4)	65
第56図	谷地区出土土器実測図.3(1/6)	66
第57図	谷地区出土土器実測図.4(1/4)	67
第58図	谷地区出土土器実測図.5(1/4)	68
第59図	谷地区出土土器実測図.6(1/4)	69
第60図	谷地区出土土器実測図.7(1/4)	70
第61図	谷地区出土土器実測図.8(1/4)	71
第62図	谷地区出土土器実測図.9(1/4)	72
第63図	谷地区出土土器実測図.10(1/4)	73
第64図	谷地区出土土器実測図.11(1/4)	74
第65図	谷地区出土土器実測図.12(1/4)	75
第66図	谷地区出土土器実測図.13(1/4)	76
第67図	ピット出土土器実測図(1/4)	78
第68図	包含層出土土器実測図.1(1/4)	79
第69図	包含層出土土器実測図.2(1/4)	80
第70図	弥生時代遺構出土砥石・台石実測図(1/3)	81
第71図	石庖丁実測図(1/2)	82
第72図	弥生時代遺構出土鉄器実測図(1/2)	83
第73図	弥生時代遺構出土玉類実測図(1/1)	84
第74図	1・4号竪穴住居跡実測図(1/60)	86
第75図	4号竪穴住居跡出土土器実測図.1(1/3)	87
第76図	4号竪穴住居跡出土土器実測図.2(1/3)	88
第77図	4・6号竪穴住居跡カマド実測図(1/30)	89
第78図	6号竪穴住居跡実測図(1/60)	90
第79図	6号竪穴住居跡出土土器実測図.1(1/3)	91
第80図	6号竪穴住居跡出土土器実測図.2(1/3)	92
第81図	7～9号竪穴住居跡実測図(1/60)	93

第82図	7～9号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	94
第83図	7・9号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	95
第84図	10・11号竪穴住居跡実測図 (1/60)	96
第85図	10・11号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	97
第86図	12号竪穴住居跡実測図 (1/60)	98
第87図	12号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	99
第88図	13・15号竪穴住居跡実測図 (1/60)	100
第89図	13号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	101
第90図	13号竪穴住居跡出土土器実測図.1 (1/3)	102
第91図	13号竪穴住居跡出土土器実測図.2 (1/3 21・22は1/4)	103
第92図	13号竪穴住居跡出土土器実測図.3 (1/3)	104
第93図	13号竪穴住居跡出土土器実測図.4 (1/4)	105
第94図	14号竪穴住居跡実測図 (1/60)	106
第95図	14号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	107
第96図	14号竪穴住居跡出土土器実測図.1 (1/3 6は1/4)	108
第97図	14号竪穴住居跡出土土器実測図.2 (1/3)	109
第98図	14号竪穴住居跡出土土器実測図.3 (1/4)	110
第99図	17・18号竪穴住居跡実測図 (1/60)	111
第100図	17・18号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	112
第101図	19号竪穴住居跡実測図 (1/60)	113
第102図	19号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	114
第103図	20・21号竪穴住居跡実測図 (1/60)	116
第104図	20・21号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	117
第105図	20号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	118
第106図	21号竪穴住居跡出土土器実測図.1 (1/3)	119
第107図	21号竪穴住居跡出土土器実測図.2 (1/3)	120
第108図	22・23号竪穴住居跡実測図 (1/60)	121
第109図	22・23号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	122
第110図	24号竪穴住居跡実測図 (1/60)	123
第111図	24・25号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	124
第112図	24・25号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	126
第113図	25～27号竪穴住居跡実測図 (1/60)	127
第114図	26号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3 5～7は1/4)	128

第115図	29・30号竪穴住居跡実測図 (1/60)	130
第116図	29・30号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	131
第117図	29号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	132
第118図	33・35・36・39号竪穴住居跡実測図 (1/60)	133
第119図	30・33・35～37・39号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	135
第120図	37号竪穴住居跡実測図 (1/60)	136
第121図	44・53号竪穴住居跡実測図 (1/60)	137
第122図	44号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	138
第123図	48号竪穴住居跡実測図 (1/60)	139
第124図	48・53・58・60号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	140
第125図	54号竪穴住居跡実測図 (1/60)	141
第126図	54号竪穴住居跡遺物出土分布図 (1/60)	143
第127図	54号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	144
第128図	54号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	145
第129図	58・60号竪穴住居跡実測図 (1/60)	146
第130図	1～3号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	148
第131図	1・2号掘立柱建物跡出土土器実測図 (1/3)	149
第132図	1～3号土壌実測図 (1/60)	152
第133図	1～3号土壌出土土器実測図 (1/3)	153
第134図	4・5号土壌実測図 (1/60)	154
第135図	4・5・8号土壌出土土器実測図 (1/3)	155
第136図	6・8・9号土壌実測図 (8号は1/60 6・9号は1/30)	156
第137図	9号土壌出土土器実測図 (1/3)	157
第138図	7号土壌実測図 (1/80)	158
第139図	7号土壌出土土器実測図.1 (1/3)	159
第140図	7号土壌出土土器実測図.2 (1/3)	160
第141図	11号土壌実測図 (1/120)	162
第142図	11号土壌出土土器実測図.1 (1/3)	163
第143図	11号土壌出土土器実測図.2 (1/3)	164
第144図	11号土壌出土土器実測図.3 (1/4)	165
第145図	1号溝土層断面実測図 (1/20)	166
第146図	1号溝土層断面 (西から)	166
第147図	1・2号溝出土土器実測図 (1/3)	167

第148図	1・2号道状遺構配置図 (1/200 断面図は縦方向に1/80)	168
第149図	1号道状遺構実測図 (1/60)	169
第150図	2号道状遺構実測図 (1/60)	170
第151図	1・2号道状遺構出土土器実測図 (1/3 12は1/4)	171
第152図	1～4号炭焼窯跡配置図 (1/100)	172
第153図	1～4号炭焼窯跡実測図 (1・2・4号は1/30 3号は1/60)	174
第154図	ピット出土土器実測図 (1/3)	175
第155図	包含層出土土器実測図 (1/3)	176
第156図	土製品実測図 (1/2)	177
第157図	古墳時代以降の遺構出土砥石実測図 (1/3)	178
第158図	古墳時代以降の遺構出土鉄器実測図 (1/2)	179
第159図	紡錘車実測図 (1/2)	180
第160図	古墳時代以降の遺構出土玉類実測図 (1/1)	181
第161図	発掘調査風景 (南から)	181
第162図	弥生時代竪穴住居跡形態分類模式図	183
第163図	仮塚南遺跡出土弥生土器の器種構成と型式分類 (1/6 6は1/12)	186
第164図	仮塚南遺跡出土広形銅戈連結式鑄型使用方法推定模式図	193
第165図	京都大学所蔵 須玖岡本遺跡出土鑄型実測図 (1/2)	194
第166図	多田羅大牟田出土広形銅戈鑄型拓影 (1/3)	196
第167図	多田羅大牟田出土広形銅戈鑄型実測図 (1/3)	折込
第168図	三雲屋敷出土広形銅戈鑄型実測図 (1/3)	折込
付 図	仮塚南遺跡遺構配置図 (1/200)	封筒

はじめに

1. 調査の経緯と組織

一般国道3号線筑紫野バイパスは同福岡南バイパス（福岡市東区二又瀬～筑紫野市永岡19.08km）の後を受け、昭和47年度から建設に関わる調査が始まり、翌48年度から事業化した大規模なバイパスである。筑紫野市永岡から佐賀県三養基郡基山町白坂までの総延長4.3kmは福岡市と久留米市のほぼ中間地帯に相当し、九州最大のベッドタウンである「筑紫野小郡ニュータウン」の中心地として、また一般国道200号線冷水有料道路および山家バイパスとの合流地点として、さらには鳥栖筑紫野有料道路の起点として、交通上極めて重要な位置関係にある。工事は昭和59年度に着手され、昭和62年4月には筑紫野市原田～佐賀県基山町白坂間の延長2.04kmを暫定2車線で供用開始しており、残り筑紫野市永岡～原田間も平成7年度には供用開始予定となっている。

さて、この筑紫野バイパスの建設に先立ち、建設省九州地方建設局福岡工事事務所から福岡県教育庁指導第二部文化課に当該地の埋蔵文化財調査に関する依頼があり、文化課は14カ所（地点）の文化財包蔵推定地を昭和51年度までに提示・回答した。そして、建設省福岡工事事務所との協議の結果、供用開始を優先させる筑紫野市原田～佐賀県基山町白坂間（第7～14地点）の調査を先行させることとなった。発掘調査は昭和56年度から59年度までの4ヶ年に亘って実施され、その成果は『一般国道3号線筑紫野バイパス関係埋蔵文化財調査報告第1集 合の原遺跡』（佐々木隆彦編 福岡県教育委員会1986）として纏められている。



第1図 仮塚南遺跡遠景（南から 1994年12月撮影）

第1～6地点（筑紫野市永岡～筑紫）の調査については平成2年度に始まり平成6年度をもって終了した。その所在地および調査期間等については下記の通りである。なお、これらの調査に先立ち、バイパス路線内（第4地点）にあった九州電力の鉄塔の移転地区の調査が平成2年度に実施されている（第2図）。

第1地点	諸田仮塚遺跡	筑紫野市大字諸田字仮塚および大字永岡字原 平成2年8月～平成3年4月
第2地点	仮塚南遺跡	筑紫野市大字諸田字仮塚 平成3年4月～平成3年11月
第3地点	久良々遺跡	筑紫野市大字筑紫字久良々 平成5年6月～平成5年10月
第4・5地点	倉良遺跡	筑紫野市大字筑紫字倉良・天神田 平成4年2月～平成4年5月
鉄塔移転地区	天神田遺跡	筑紫野市大字筑紫字天神田 平成2年5月～平成2年6月
第6地点	以来尺遺跡	筑紫野市大字筑紫字以来尺 平成4年5月～平成7年1月

なお、平成3年度の発掘調査と平成6年度の報告書作成にあたっての組織と関係者は下記の通りである。

建設省九州地方建設局福岡国道工事事務所

	平成3年度	平成6年度
事務所長	清水英治	長谷部正和
副所長	横溝敏治・岩田秀人	中空 進・中馬昌昭
建設監督官	池田勝美・岡山一則	野鶴博任・平川澄雄
調査第二課長	中川蔵太	西原広寿
調査係長	島 義博	芹口臣也
建設技官	清時義雄	桜井俊郎
工務課長	久原義宜	淵 幸一
工務第一係長	永淵 昭	逆瀬川方久
工務第三係長	西島正男	田口 仁

福岡県教育委員会

	平成3年度	平成6年度
総括		
教育長	御手洗 康	光安常喜
教育次長	光安常喜	松枝 功



第 2 図 国道 3 号線筑紫野バイパス用地内の各調査地点 (1/10,000)

指導第二部長	月盛清三郎	丸林茂夫
文化課長	森山良一	松尾正俊
参事兼文化財保護室長	石松好雄	柳田康雄
課長補佐	国武康友	清水圭輔
参事補佐	柳田康雄	井上裕弘
	井上裕弘	橋口達也
	副島邦弘	馬田稔弘
		池辺元明
庶務		
管理係長	毛屋 信	杉光 誠
事務主査	東 勇治	安丸重喜
主任主事	沢田俊夫	久保正志
調査		
主任技師	小田和利	水ノ江和同
技師	水ノ江和同	
文化財専門員	日高正幸	

2 位置と環境 (第3図)

仮塚南遺跡は福岡県筑紫野市大字諸田字仮塚317～319・375・376・397～399番地に所在する。この地域は背振山系から東側へ派生する丘陵の先端部と、三郡山系から西側へ派生する丘陵の先端部とが最も近接する場所で、福岡平野と筑後平野が接する幅約2kmの通称「二日市地峡」と呼ばれる狭い平野部を形成する。本遺跡は一見すると、平野の中でも久良々川の北岸に発達した河岸段丘上に立地しているようにも見えるが、実際は背振山系から派生した丘陵の先端部からさらに東へ細長く伸びる幅約80m、標高38mの微高地的な舌状丘陵に立地している。

この二日市地峡はいつの時代においても、福岡方面から筑後方面へ向かう場合はもちろん、甘木・朝倉方面や長崎方面へ向かう場合でも必ず通過しなければならない交通の要所であり、『延喜式』に登場する筑紫神社や近世の長崎街道（原田宿）の存在がそのことを如実に物語っている。現在でも、JR鹿児島本線や西鉄大牟田線をはじめ九州縦貫自動車道や国道3号線も南北に走り、これらから枝分かれするように北東へ国道200号線山家バイパスや冷水有料道路が、南西には鳥栖筑紫野有料道路が派生していき、九州最大のベッドタウンである筑紫野・小郡ニュータウンもこの地に造営されている。

周辺の遺跡を概観すれば弥生時代以降の遺跡の多さが目につくが、旧石器時代や縄文時代の

遺跡も数は少ないながらも確実に増えつつある。例えば筑紫野市内では野黒坂遺跡・峠山遺跡・原田地区遺跡群・宗原遺跡等があげられ、西北九州と東九州との接点として今後その性格付けが問題になるところである。縄文時代については、断片的な資料は各遺跡で確認されているものの、纏まった資料や集落遺跡となると極めて少なく、草創期から早期を中心とする原遺跡をあげるにすぎない。縄文時代の遺跡は近年かなりの低地においても確認されることが多く、今後の積極的な調査が望まれる。

この地域が最も盛行するのは弥生時代からである。筑紫野市内の遺跡を中心に概観すると、前期に関してはその後半代から剣塚遺跡において貯蔵穴や甕棺墓が、筑紫台団地遺跡では朝鮮系無文土器が出土したといわれる前期末の竪穴住居跡や貯蔵穴が検出されているが、遺跡数自体は少なくその実態は十分に把握できていたとは言い難い。中期になるとこの地域は甕棺墓が急激に多くなる。中期中葉の永岡遺跡や中期後半の道場山遺跡をはじめ、筑紫野・小郡ニュータウン予定地の隈・西小田地区遺跡では中期以降の大甕棺墓群が形成されている。特に、道場山遺跡や峰畑遺跡や隈・西小田遺跡や夜須町の東小田・峯遺跡では銅鏡・銅剣・鉄戈・ゴホウラ製貝輪等、首長の象徴とされる副葬品を有する大形甕棺墓が存在しており、また隈・西小田地区遺跡の中細形銅戈23本一括埋納という事実と合わせて、この地域が福岡平野を中心とした奴国に近接する重要な地域として性格付けすることができよう。また、安永田遺跡や本行遺跡といった鳥栖市を中心とした中期後半の青銅器生産遺跡にも近接しており、この時代から福岡平野と筑後平野とを結ぶ要所として重要な役割をすでに果たしていたことが想定される。後期になると規模や性格において傑出した遺跡は激減するが、本報告の仮塚南遺跡や同じ筑紫野バイパス内の以来尺遺跡では後期後半の大集落が、またやはり筑紫野バイパス内の倉良遺跡では後期前半の土壙墓・甕棺墓群が確認されており、近いうちにその実態が解明されるであろう。この他に、今回仮塚南遺跡で出土した広形銅戈の連結式鋳型と大いに関連するものとして、小郡市津古東台遺跡で出土した弥生時代終末期の広形銅矛の連結式鋳型にも注意を払っておきたい。

古墳時代においても、二日市地峡一帯の重要性は変わらない。三角縁神獸鏡が3面出土した原口古墳は全長約80mの最古級の前方後円墳である。小郡市の津古生掛古墳や三国の鼻古墳、また夜須町の国指定史跡の焼峠古墳等、古墳出現期から展開期にかけての当該地の状況を探る上で重要な古墳も少なくない。仮塚南遺跡の南南東約1.8kmには古墳時代後期（6世紀後半）の装飾古墳である五郎山古墳（国指定史跡）があり、やはりこの地域の特殊性を表出している。

その後、遠の朝廷といわれた大宰府の時代になると国指定史跡の大野城や基肆城に囲まれ、中世にかけては九州における政治的中心地の一角を占めるようになる。このことは、筑前国・筑後国・肥前国の国境に位置し、往来の人々の命を奪い取るという荒ぶる神が祭られた、『延喜式』や『筑後國風土記逸文』に登場する筑紫神社の存在が雄弁に物語っている。また、『今



1. 仮塚南 2. 諸田仮塚 3. 久良々 4. 倉良・天神田 5. 以来尺 6. 合の原 7. 永岡 8. 野黒坂
9. 峠山 10. 常松 11. 御笠地区 12. 老松神社古墳 13. 天山古墳群 14. 仮塚古墳群 15. 大牟田古墳群
16. 大牟田西古墳群 17. 矢倉 18. 筑紫台地 19. 五郎山古墳 20. 旧筑前原田宿 21. 原田地区
22. 隈・西小山地区 23. 津古内畑 24. 津古片曾葉 25. 津古 26. 津古古墳群 27. 津古生掛古墳
28. 津古土取 29. 菊又地区 30. 宗原 31. 東小田峯 32. 東小田 33. 七板 34. 慮木藪 35. 旧筑前山家宿

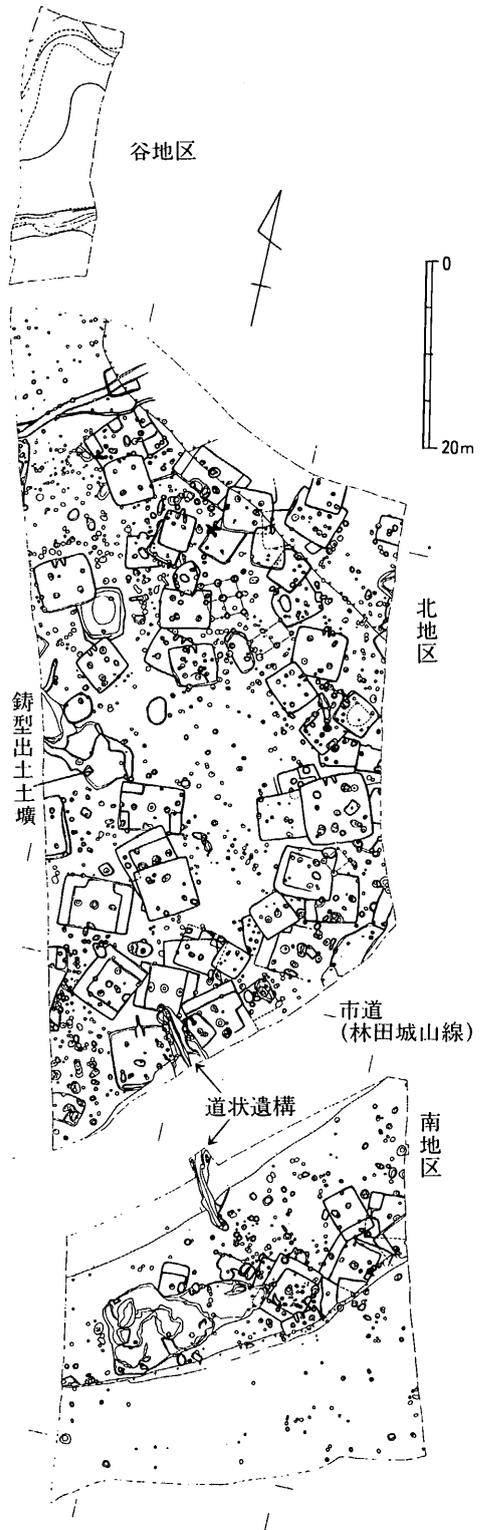
第 3 図 仮塚南遺跡周辺の遺跡分布 (1/40,000)

昔物語集』や『梁塵秘抄』に登場し、大治元年（1126年）銘の経筒が出土した武蔵寺の存在にも注意を払いたい。さらに近世に至っては、長崎街道の筑前六宿の南端で国境に相当する旧原田宿が有名で、筑前国三宿（黒崎・前原・原田）の一つとして関番所が置かれる要所であった。

このように、仮塚南遺跡の所在する二日市地峡一帯は弥生時代から現代に至るまで、福岡平野と筑後平野を繋ぐ交通の要所として、常に歴史のかつ地理的に重要な位置を占めてきた地域である。近年の道路建設やニュータウンの造営に伴う土地区画整備事業は文化財の破壊を伴うものであるが、そこから得られる調査成果を的確に整理・分析することで、この地域の歴史的意義や地域住民の文化財に対する意識はより一層確実に深められていくことであろう。

〔参考文献〕

- 筑紫野市教育委員会編『ちくしの散歩』1989・1991
- 太宰府市史編集委員会編『太宰府市史 考古資料編』1992
- 夜須町史編纂委員会編『夜須町史』1991
- 渡辺正気『日本の古代遺跡34 福岡県』保育社1987
- 筑紫 豊『筑紫文化財散歩』—文化財散歩シリーズ1-1977



第 5 図 仮塚南遺跡遺構配置略図 (1/800)

II 発掘調査の記録

1 調査の概要 (第4・5図)

飯塚南遺跡の発掘調査は、平成3(1991)年4月9日から同年11月16日の約7カ月間に亘って実施された。一般国道3号線筑紫野バイパスの建設に伴う事前調査であるため、調査区は長さ約150m、幅約40mと南北にかなり細長く、様々な遺構が検出される反面、遺跡の全体像の把握に関してはむしろ不十分で困難をきたした。調査の対象になった面積は約6,000㎡であったが、市道等によってすでに削平されている部分もあり、正確な調査面積は約4,100㎡になった。

実際の調査では、この細長い調査区の中央部やや南寄りを東西に分断する市道(林田城山線)を基準に、その北側を「北地区」、南側を「南地区」とした。北地区のさらに北側には弥生時代後期の谷が存在するが、これは現在も本調査区の北側に近接する「諸田池」に関連するものと考えられ、「谷地区」として遺跡の集落部とは別に位置づけた。調査は谷地区→北地区→南地区の順で北から南へ順次南下して進めた。また、この調査の途中、諸田池の北側50mのバイパス用地西端部の急傾斜の斜面において、炭焼窯と推定される遺構が削平によって剥き出しになっている状況が確認され、併せて発掘調査を実施した。本来この地点は筑紫野バイパス第1地点諸田飯塚遺跡の範囲ではあるが、都合により本書にて報告を行なっている(第4図)。

今回の調査中、北部九州を中心に広範囲に亘って多大な被害をもたらした台風17号が9月14日に、台風19号が9月27日に直撃した。調査区内に調査事務所として設営していた重量3tのユニットハウス2棟も横転・大破し、遺物を収納していたパンケースも一部吹き飛ばされ、出土遺構がわからなくなるものも出た。その後の復旧作業には多くの時間を要し、発掘作業の進行に影響を及ぼすことはやむを得ない状況であった。

本遺跡では旧石器時代から中世までパンケース約150箱の年代的に幅の広い遺物が出土したが、遺構の大半は弥生時代後期と古墳時代後期に属する。旧石器・縄文時代については、ごく少量の遺物が包含層から採集されただけで、帰属する可能性のある遺構は陥し穴状遺構だけである。弥生時代については後期後半でも終末により近い年代の遺物に限られ、竪穴住居跡34軒、土壇4基、溝1本のほかに、この時期だけの遺物しか出土しない谷地区がある。弥生時代について特筆すべきこととして、10号土壇より出土した広形銅戈の連結式鋳型があげられよう。

古墳時代も後期(6世紀後半)に限られ、竪穴住居跡36軒、掘立柱建物跡3棟、土壇9基、道状遺構2本、溝2本等が検出された。道状遺構は丘陵上に立地する集落への入口に相当するもので、当時の集落の構造を考える上で興味深い遺構である。このほかに7世紀代や11世紀代の遺物のごく少量があるが、これらが伴う遺構としては、11世紀代の土壇が1基確認されただけであ

る。

なお、調査においては筑紫野市教育委員会と随時に協議を行ない、ご協力・ご配慮を賜りました。発掘作業に従事して頂いた下記の方々を含めて、記して感謝の意を申し上げます。

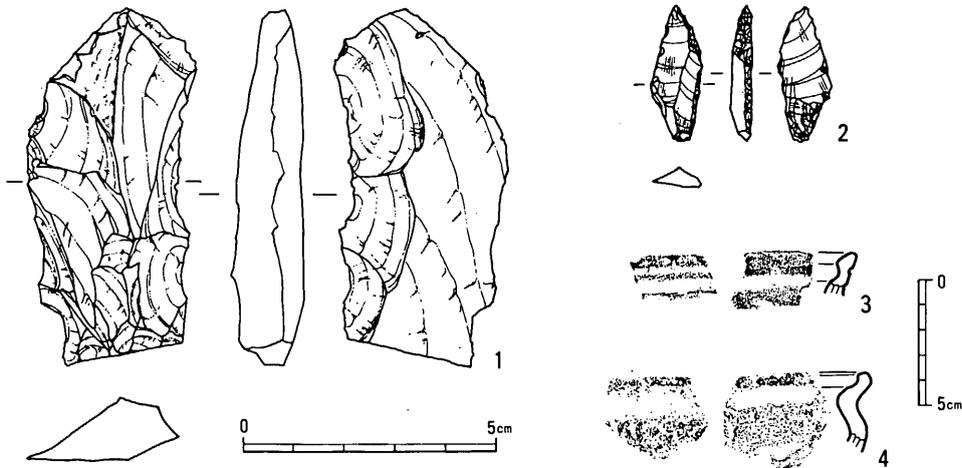
田中泰彦 松田 運 岡部孝徳 中川秀吉 田中紘子 田中キヨ子 田中初子
田中律子 吉田アサヨ 松尾千代子 久保キン子 行徳三佐保 片田清子
相良幸子 牛島充子 原 浄子 中川光子 石原みよし 松田繁春 吉野マサ子
高石弥生 高石美代子 八尋昭子 松田民子 寺崎キヨ子 大西米子

(順不同 敬称略)

2 旧石器時代の遺物

仮塚南遺跡では、ピットと谷地区から2点の旧石器が出土した。しかし、これらはいずれも埋土中に包含されたもので、本来の遺構に伴うものではない。そこで調査終了間際に数カ所のトレンチを設定して深く掘り下げたが、その他に遺物は全く検出されなかった。

第6図1は小形剥片を剥離したサヌカイト製の石核と考えられる。盤状の剥片を素材として背面右側縁に交互剥離を行なうが、使用による微細剥離は観察されない。2は腰岳産黒曜石による二側縁加工のナイフ形石器である。左側縁基部には大きなノッチが、腹面基部付近には平坦剥離が入る。刃部には使用による微細剥離が観察される(図版48)。



第6図 旧石器・縄文土器実測図(1・2は2/3 3・4は1/3)

3 縄文時代の遺構と遺物

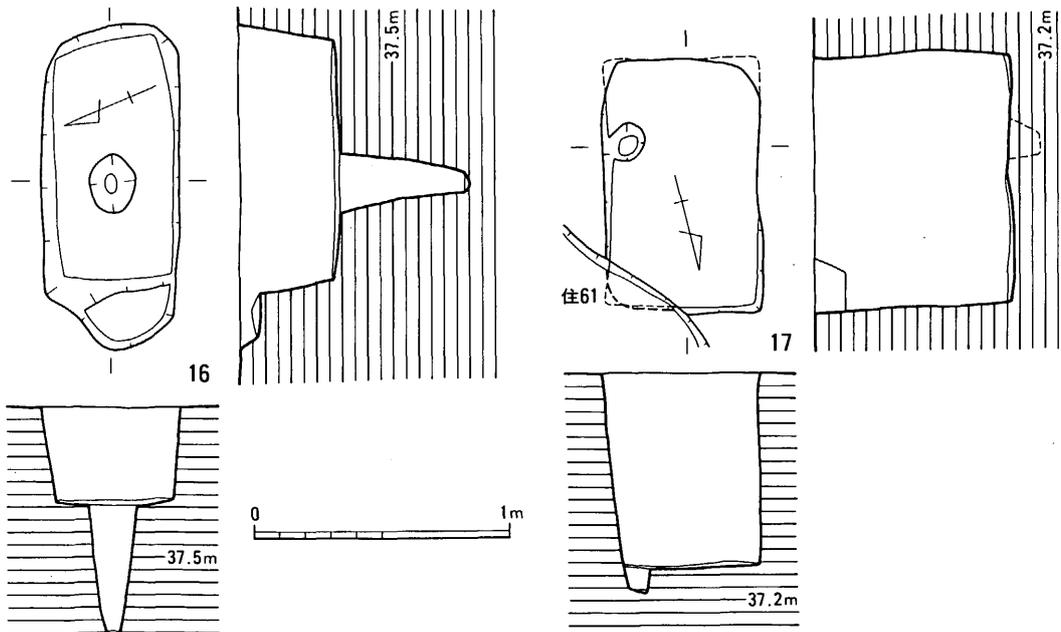
仮塚南遺跡において縄文時代に属する可能性のある遺構としては、2基の陥し穴状遺構が上げられる。遺物としては2点の縄文土器の他に、17点の石鏃1点の石匙と2点のスクレイパーがある。しかし、これらはいずれも弥生時代や古墳時代の遺構の埋土中に包含されたもので、縄文時代本来の遺構に伴うものではない。以下、遺構と遺物の説明を行ないたい。

16号土壙（図版4 第7図）

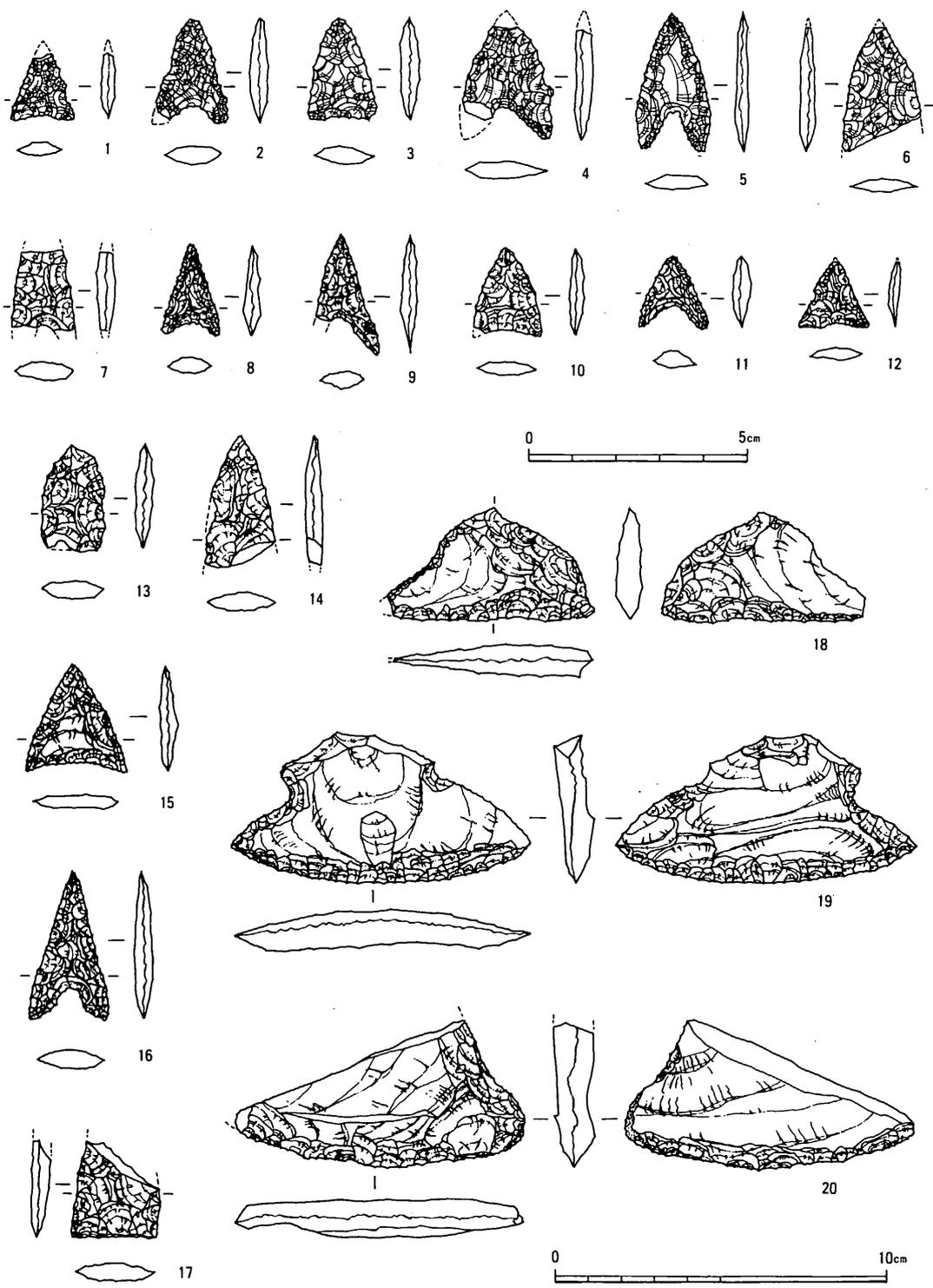
16号土壙は南地区中央部のやや西寄りに位置し、北50cmは古墳時代の11号土壙と近接する。平面プランは129×54cmの長方形を呈し、検出面下10cmのところまで西端に31×18cmのテラスを作る。深さは38cmで95×46cmのほぼ長方形の底面に至り、その中央部には径22cm、深さ51cmの穴がある。埋土は暗黄褐色土で、一見しただけでは地山と区別しにくい。遺物の出土はなく、形態的に陥し穴状遺構とされるものである。年代の決め手になる根拠はないが、とりあえず最も類例の多い縄文時代の陥し穴状遺構としておきたい。

17号土壙（図版4 第7図）

17号土壙は南地区中央部の東寄りに位置し、弥生時代の61号竪穴住居跡に切られる。平面プランは102×61cmの長方形を呈し、直線的に立ち上がる壁は深さ76cmで底面に至る。その底面は平坦で、東壁やや南寄りには径15cm、深さ12cmの小ピットが掘られる。埋土は16号土壙と同じ暗黄褐色土で、一見しただけでは地山と区別しにくい。遺物の出土はなく、形態的に陥し穴



第7図 16・17号土壙実測図 (1/30)



第 8 図 石鏃・石匙・スクレイパー実測図 (1~17は2/3 18~20は1/2)

状遺構とされるものである。年代の決め手になる根拠はないが、弥生時代の61号竪穴住居跡に切られるという先後関係は確実に存在しており、16号土壙と同様に縄文時代に属するものとしておきたい。

縄文土器（図版48 第6図3・4）

仮塚南遺跡で得られた縄文土器はわずか2点だけである。第6図3・4はいずれも縄文晩期の鉢形の黒川式土器であるが、摩滅が著しく器面調整は不明。

石鏃（図版48 第8図1～17）

石鏃は欠損したものを含めて17点に及ぶが、すべて縄文時代に属するものと考えられる。1～4は腰岳産黒曜石である。5・6も黒曜石ではあるが、5は姫島産的で灰白色を呈し、6は黒いが不純物が多く少なくとも腰岳産ではない。重量は1が0.6g、2が1.2g、3が0.9g、4が1.8g、5が1.2g、6が1.2g。7～17はサヌカイト製の石鏃で、形態やサイズのヴァリエーションは多い。13については細かい調整が行なわれず、また厚さも4.5mmと肉厚で未製品の可能性が高い。重量は7が1.4g、8が0.7g、9が0.7g、10が0.8g、11が0.7g、12が0.5g、13が1.3g、14が1.8g、15が1.5g、16が1.8g、17が1.8gである。

石匙・スクレイパー（図版49 第8図18～20）

19はサヌカイト製の石匙で、横長剝片を素材とする。基部以外の縁辺にはほぼ全面に細かい調整が行なわれている。重量は37.4g。18・20はサヌカイト製のスクレイパーで、いずれも横長剝片を素材とする。重量は18が19.2g、20が41.7g。

4 弥生時代の遺構と遺物

仮塚南遺跡において検出された弥生時代の遺構には、竪穴住居跡34軒、土壙4基、溝1本と多数のピットがある。これらから出土する弥生土器はすべて後期後半に比定されるもので、他の時期の弥生土器は全く出土していない。したがって、弥生土器しか出土しないものの小破片のため年代の決め手になるものが見られないいくつかの遺構も、基本的には後期後半に属する可能性が極めて高い。谷地区においても、上部から古墳時代の遺物が少量得られたが、中部や下部からは弥生後期後半に属する遺物しか包含されておらず、やはり他の弥生時代の遺構と時間的に共存していたものと考えられる。遺構の埋土は概して灰褐色で、埋土が黒褐色の古墳時代の竪穴住居跡とは遺構の検出時点において、埋土の色調の違いから弥生時代のものとある程度判別できた。以下、遺構の説明を行ないたい。

(1) 竖穴住居跡

仮塚南遺跡で検出された弥生時代の竖穴住居跡は34軒を数える。これらは基本的にはベッドや屋内土壇を備える2本柱の長方形を呈するものである。大半は北地区南端一带と南地区に集中し、北地区北端にも数軒確認できた程度である。確実な切り合い関係を古い順に記せば、3号→2号、5号→59号、32号→31・34号、43号→42号→40号、45号→16号、47号→46・52号→16・55号、50号→49号、65号→64号→63号→61・62・66号、67号→63号→62・66号、68号→66号、となる。

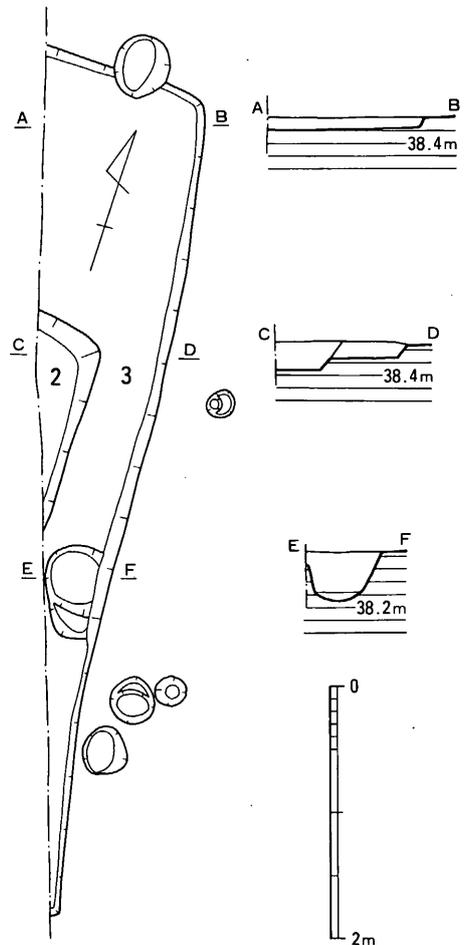
2号竖穴住居跡 (図版5 第9図)

2号竖穴住居跡は北地区北端部に位置し、その西側の大部分が調査区外に埋まったままである。確認できたのは方形を呈する住居跡の北東隅 $1.2 \times 0.5 \times 0.25$ mとごくわずかで、弥生時代に属する3号竖穴住居跡を確実に切って掘り込まれている。遺物は数点の弥生土器片だけであるが、先述したように本遺跡で得られた弥生土器はすべて後期後半に属するものであり、したがって2号竖穴住居跡も後期後半に属する可能性が高い。

3号竖穴住居跡 (図版5 第9図)

3号竖穴住居跡は北地区北端部に位置し、その西側の大部分が調査区外に埋まったままである。確認できたのは方形を呈する住居跡の東壁辺6.6mと北壁辺1.3mだけである。壁高は15mと浅く、ベッドや屋内土壇は検出されていない。遺物は少ないが、第10図9の底部が唯一実測可能な弥生土器であった。この土器から年代を推定することは難しいが、本遺跡で得られた弥生土器はすべて後期後半に属するものであり、したがって3号竖穴住居跡も後期後半に属する可能性が高い。

遺物 (第10図9) 復原底径約8cmの底部。摩滅が著しく器面調整は観察されないが、わず



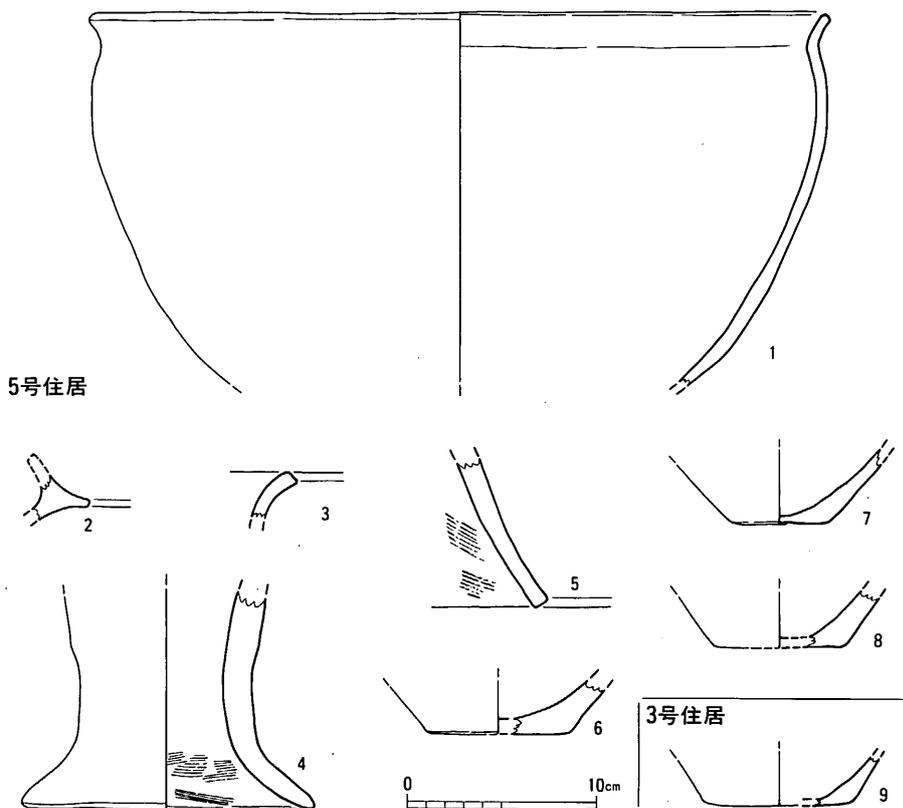
第 9 図 2・3号竖穴住居跡実測図 (1/60)

かに丸底化が窺え、後期後半に属する特徴であろうか。

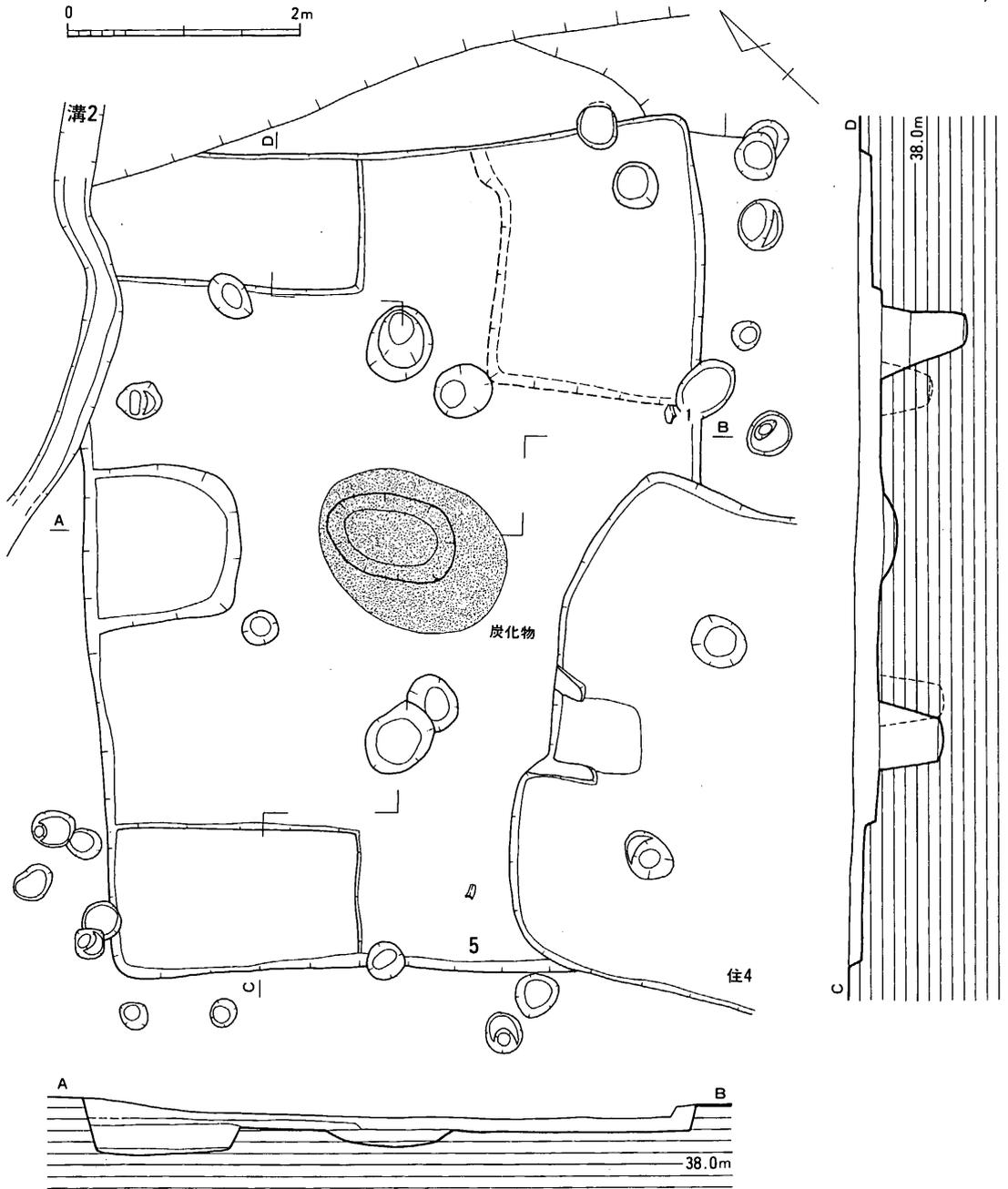
5号竖穴住居跡 (図版6 第11図)

5号竖穴住居跡は北地区の北端部で、弥生時代の2・3号竖穴住居跡の東6m、59号竖穴住居跡の西2mに位置する。北東↔南西方向に長軸がくる7.0×5.3×0.2mの長方形を呈し、古墳時代の4号竖穴住居跡に南隅を大きく切られる。北隅と西隅には2.2×1.2mの長方形のベッドがつくが、いずれも地山を削り出したもので、粘土等で盛ったものではない。この2つのベッドの間、すなわち北西壁中央部の床面には140×120×15cmの規模で隅丸方形の屋内土壇が掘り込まれ、ここからは第10図2の壺口縁部が出土している。主柱穴は深さ50cmと70cmのものが長軸線上に乗っているが、この主柱穴に近接してほぼ同じ位置関係にやはり2つの柱穴が存在しており、あるいはこの住居跡を建て替えた痕跡であるかもしれない。炉跡は115×72×12cmの楕円形で、この半径60～90cmの範囲には炭化物が薄く広がっていた。貼り床を除去した時点で、東隅に2.4×1.8×0.15cmの住居跡の形態に対応させるような方形の堀込みが確認されたが、特に目立った遺物の出土はなく、その性格は判然としない。出土遺物は比較的多い。

遺物 (第10図1～8 第70図1 第72図11 第73図14) 第10図1は復原口径約39cmの甕で、残存



第10図 3・5号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/4)



第 11 图 5号竖穴住居跡実测图 (1/60)

器高約20cm。摩滅が著しく調整は不明、床面出土。2は屋内土壌から出土した壺の口縁部。4は床面から出土した器台で、復原径約14cm。全体的に摩滅が著しいが、内面にハケ目の痕跡がわずかに窺える。加熱により赤褐色に変色。3の甕の口縁部、5の器台の脚部、6の底部については床面からの出土。7・8の底部は住居跡埋土からの出土。第70図1の砥石は残存長11.3cmの粘板岩製。本来は4側面とも使用されていたと推定されるが、その内1面は欠損し、また両端のうち的一方も欠損している。埋土下部からの出土。第72図11の鉄器は長さ13.5cmでL字状に曲がり、断面形態は1.4×1.0cmの肉厚な隅丸長方形を呈する。性格不明で、埋土上部からの出土。第73図1の青いガラス玉は3.5×2.5mmとやや細長く、床面からの出土。14は緑色のガラス製管玉で、長さ1.2cm、幅6mm、孔径2mmを測る。やはり床面出土。

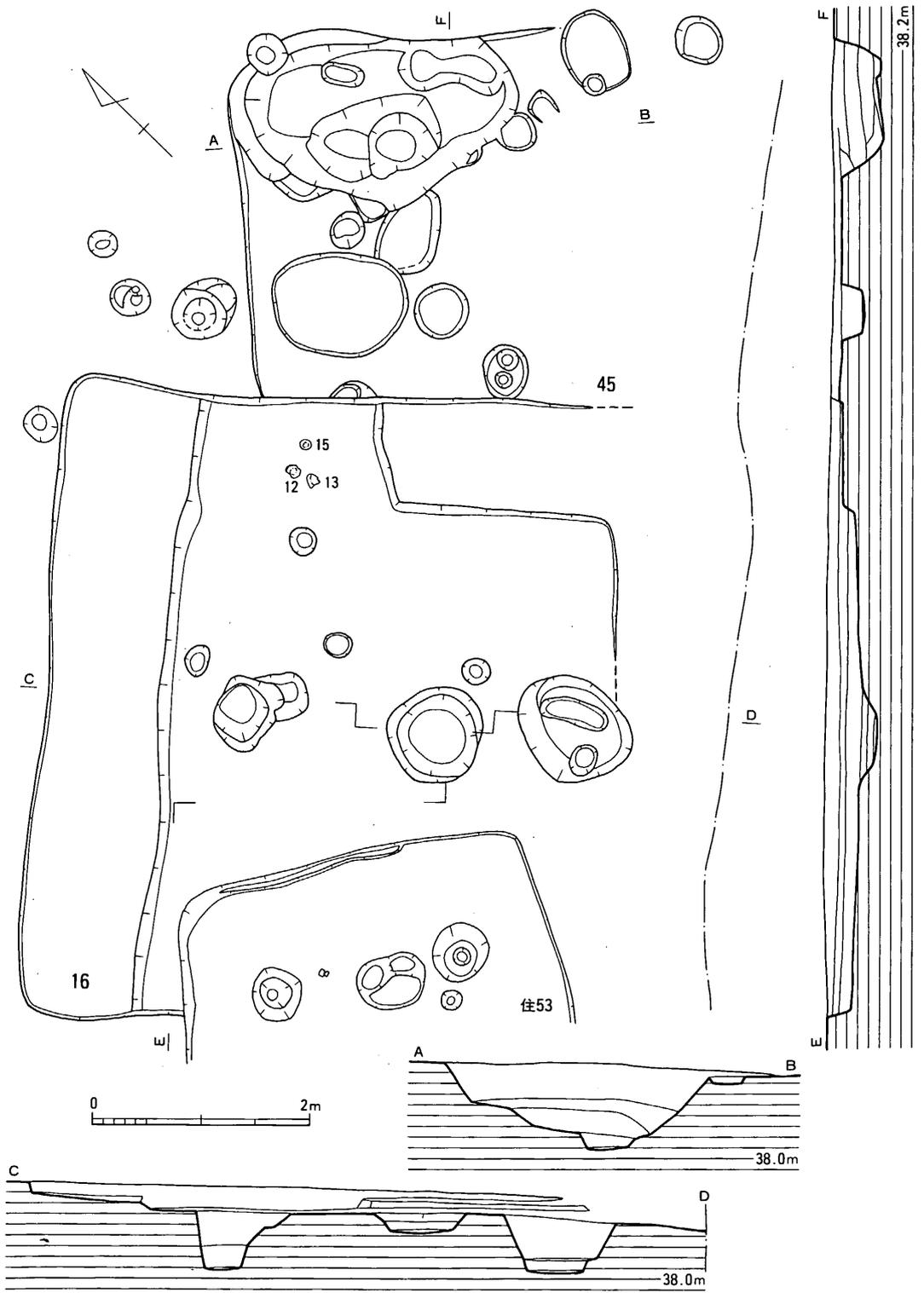
16号竪穴住居跡（図版10 第12図）

16号竪穴住居跡は北地区の南端中央部に位置し、市道（林田城山線）に南側1/4を削平される。古墳時代の53号竪穴住居跡には切られるが、同じ弥生時代の45～47・52号竪穴住居跡を確実に切る。周辺には同時期の竪穴住居跡が比較的密集しており、この住居跡はその中心的な位置にある。削平により正確な規模はわからないが、炉跡や支柱穴や北西壁との位置関係とから、長軸約7m、短軸5.8mを測る。北西壁に沿って幅1.1mのベッドが付設されるが、これは地山の削り出しによる。南東壁にもベッドが存在していた痕跡がわずかに窺えるが、その規模についてはおよそ1.0m程度のものと考えられる。2本の支柱穴はいずれも深さ約60cmを測り、その2本の中央部には90×85×15cmの炉跡がある。屋内土壌も南西壁の中央部付近に存在していたはずだが、53号竪穴住居跡によって削られているのか検出できなかった。出土遺物はそれほど多くはないが、北西壁に沿ったベッドと反対側につくL字状のベッドとの間にボウル状の小形の鉢（第16図12～15）が纏まって出土した。

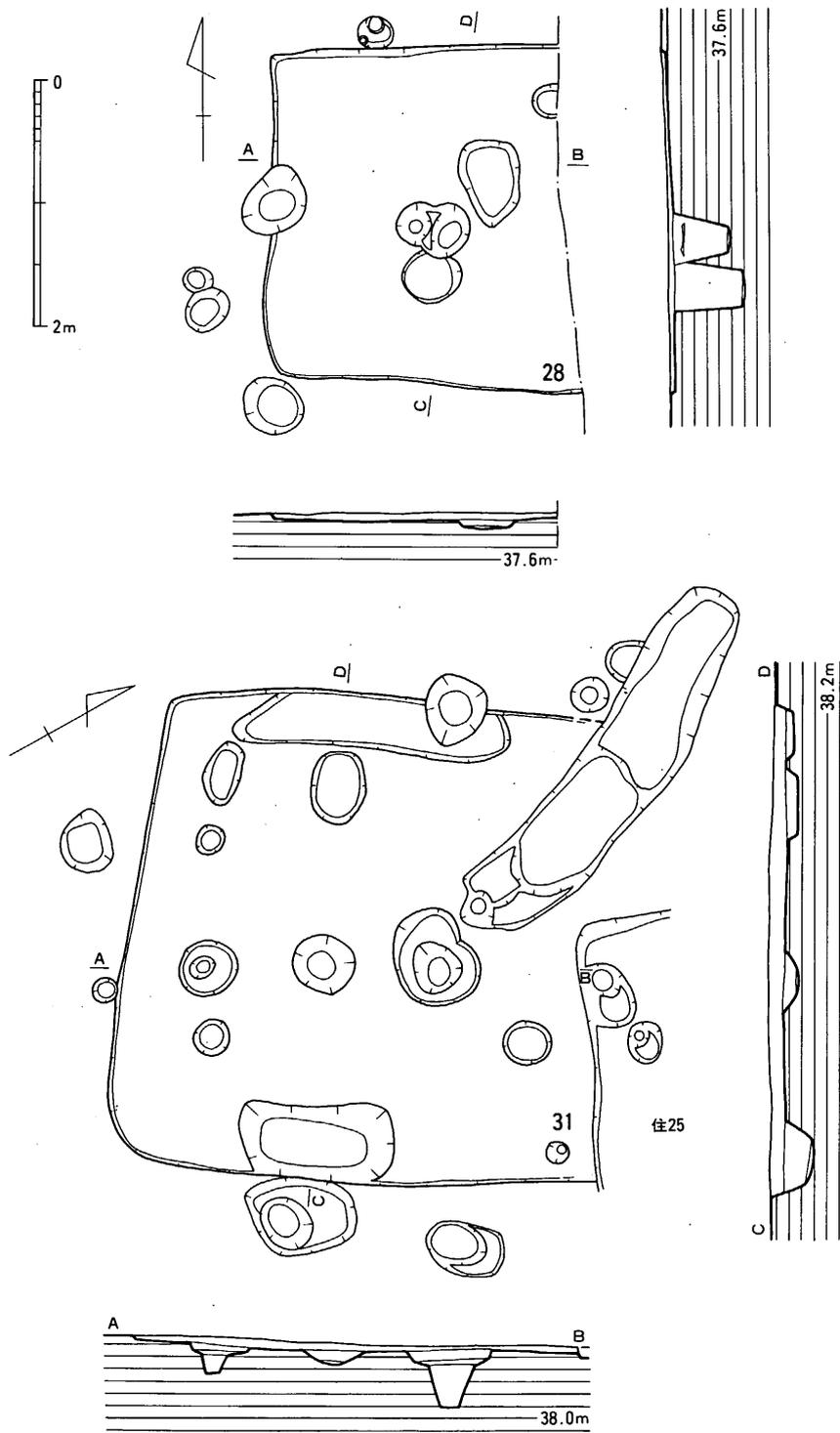
遺物（第16図9～15 第71図11）第16図9は高坏の坏部、10は甕の口縁部で、いずれもハケ目がわずかに残る。11は復原口径約15cmの甕で、器面調整は内外面ともナデ。12～15はボウル状の小形の完形の鉢で、底部外面には不安定な丸底のため擦れた痕跡が観察される。器面調整は基本的にはハケだが、15については工具でナデたような緩やかな擦痕が見られる。口径は12から15へ順に12.4cm、15.7cm、5.4cm、9.1cm、器高は5.6cm、5.5cm、5.1cm、3.8cmをそれぞれ測る。第71図11は片岩質の石庖丁で、刃部中央付近にしか使用による擦れた摩滅が窺えない。

28号竪穴住居跡（第13図）

28号竪穴住居跡は北地区の北東端で、古墳時代の2号土壌の北3m、やはり古墳時代の10・11号竪穴住居跡の東4mに位置する。住居跡の東側は調査区外へ伸びていっているためその全体像は判然としないが、短軸については2.7m、長軸はおそらく4m程度の長方形を呈していたものと推定される。壁高はわずか5cmほどしか残らない。支柱穴や炉跡やベッドは検出されずいささか問題もあるが、取りあえず竪穴住居跡とした。遺物は弥生土器の小片が数点出土した



第 12 图 16·45号竖穴住居跡実測图 (1/60)



第 13 图 28·31号竖穴住居跡実测图 (1/60)

けで、図示に耐えうるものはなかった。

31号竪穴住居跡（図版7 第13図）

31号竪穴住居跡は北地区の中央部東端で、古墳時代の25号竪穴住居跡に切られ、弥生時代の32号竪穴住居跡を切る。北西1.5mには23号竪穴住居跡、南2.5mにはやはり古墳時代の19号竪穴住居跡、同じく南1.5mには弥生時代の41号竪穴住居跡と近接する。北東壁は25号竪穴住居跡や細長い溝状の遺構に切られるため残存しておらず、短軸については4.0mという長さが測れたが、長軸については現存する4.1m以上を有していたものと推定される。もっとも、炉跡や支柱穴の位置から判断して、この住居跡には当然ベッド状の設備が存在していたはずであるが、ベッドが地山の削り出しによるものであった可能性と壁高約8cmしか残らない状況を考慮に入れば、それは削平されたものと考えられる。2本の支柱穴の深さは南側が30cm、北側が55cmとアンバランスで、その中央にある炉跡は径45cm、深さ12cmと比較的小さい。南東壁中央部には120×60×25mを測る隅丸方形の屋内土壌が掘り込まれ、唯一図示できた土器片が出土した。出土遺物は弥生土器の小片ばかりで、口縁部に該当するものはなかった。

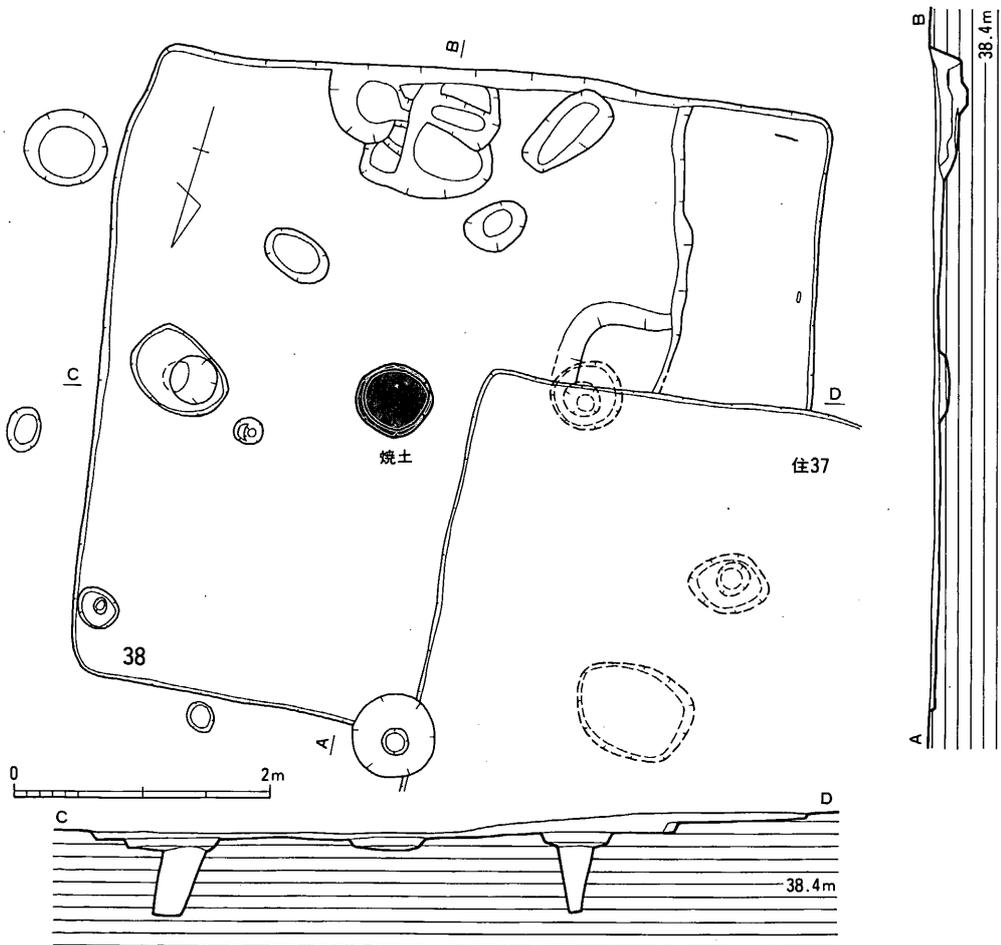
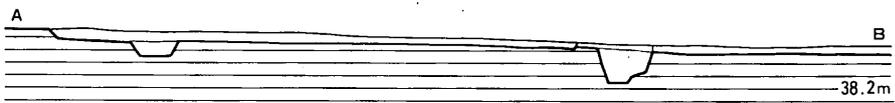
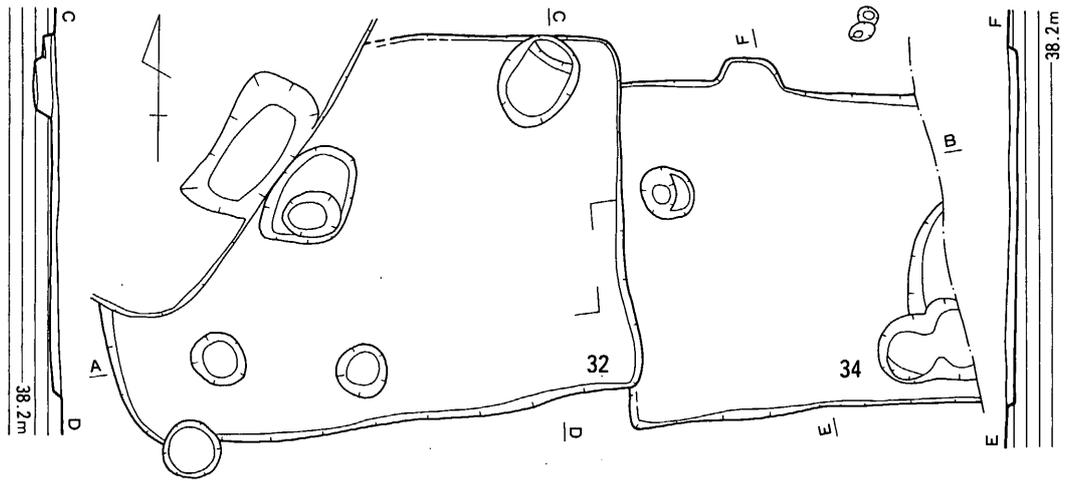
遺物（第16図1）1は甕の頸部から胴部上半部にかけての破片で、内外面ともにハケ目が明瞭に残る。

32号竪穴住居跡（図版7 第14図）

32号竪穴住居跡は北地区の中央部東端にあり、弥生時代の31号竪穴住居跡には切られるが、同じ弥生時代の34号竪穴住居跡は切るといった先後関係を有する。北側には25号竪穴住居跡と、南側には19号竪穴住居跡といった古墳時代の住居跡といずれも1mの距離をおいて近接する。31号竪穴住居跡に全体の1/3を切られているが、4.1×3.1mの長方形の平面プランが確認できる。やはり削平が著しく、壁高は最高で7cmしか残らない。この住居跡については、調査時点においても規模の小ささ、炉跡や支柱穴や屋内土壌が存在しないこと、明確な貼り床が確認できないこと、といった幾つかの理由から住居跡としての取り扱いに疑問を感じていた。しかし、本書では便宜的に竪穴住居の項目で説明することにした。出土遺物はごく少量の弥生土器小片だけで図示できるものはなかったが、31号竪穴住居跡との切り合い関係から弥生時代に属することは間違いない。

34号竪穴住居跡（図版7 第14図）

34号竪穴住居跡は北地区の中央部東端にあり、弥生時代の31号竪穴住居跡に切られる。北西1mには古墳時代の25号竪穴住居跡あり、住居跡の南西隅は古墳時代の19号竪穴住居跡の北東隅とわずか20cmの距離をおいて近接する。南北長は2.6mを測るが、西壁は32号竪穴住居跡に切られ、また東壁は調査区外に伸びるために、東西長については現存する2.7m以上になると考えられる。この住居跡についても規模の小ささや住居として必要な構造が欠落していることから、住居跡として取り扱うことに躊躇を覚えた。出土遺物は図示できないほどの弥生土器小



第 14 图 32·34·38号竖穴住居迹实测图 (1/60)

片が少量出土しただけであるが、32号竪穴住居跡との切り合い関係から弥生時代に属するものである。

38号竪穴住居跡（図版8 第14図）

38号竪穴住居跡は北地区南東隅にあり、古墳時代の37号竪穴住居跡に切られる。住居跡の南西隅は弥生時代の40・42号竪穴住居跡とそれぞれ50cmと80cmの距離で近接し、南東隅については古墳時代の39号竪穴住居跡や5・6号土壌と距離1~2mといった位置関係にある。5.6×5.1mの長方形プランを検出したが、住居跡のプランと炉跡や主柱穴との位置関係が不自然なこと、東側半分は削平が著しく壁高は4cm程度しか残存しないこと、西壁には幅1.05mの地山作り出しのベッドが設置されていること等から、本来は東壁にも幅1m程度のベッドが作られていたと考えられる。2本の主柱穴はいずれも深さ70cmと深く、その中間には60×55×10mの比較的小さな炉跡がある。南壁中央部には不定形ではあるが140×90×20mの規模を有する屋内土壌が掘り込まれる。遺物はやはり少なく図示できた弥生土器は3点だけであったが、鉄器については鉋と鉄製の鋤先が各1点出土しており注目される。

遺物（第16図2~4 第72図7・8）第16図2は器台の裾部で、外面にハケ目がわずかに残る。3は底部。4は復原口径約16cm、器高6.8cmのボウル状の小形鉢で、外面には板状工具によるナデが、内面にはナデが施され、不安定な丸底には擦れた摩滅の痕跡が窺える。第72図7は最大幅1.3cm、現存長13.1cmの鉋。8は一方が欠損する鉄製の鋤先で、縦1.7cm、現存幅6.9cm、厚さ2mmを測る。これについては手鎌の可能性もある。

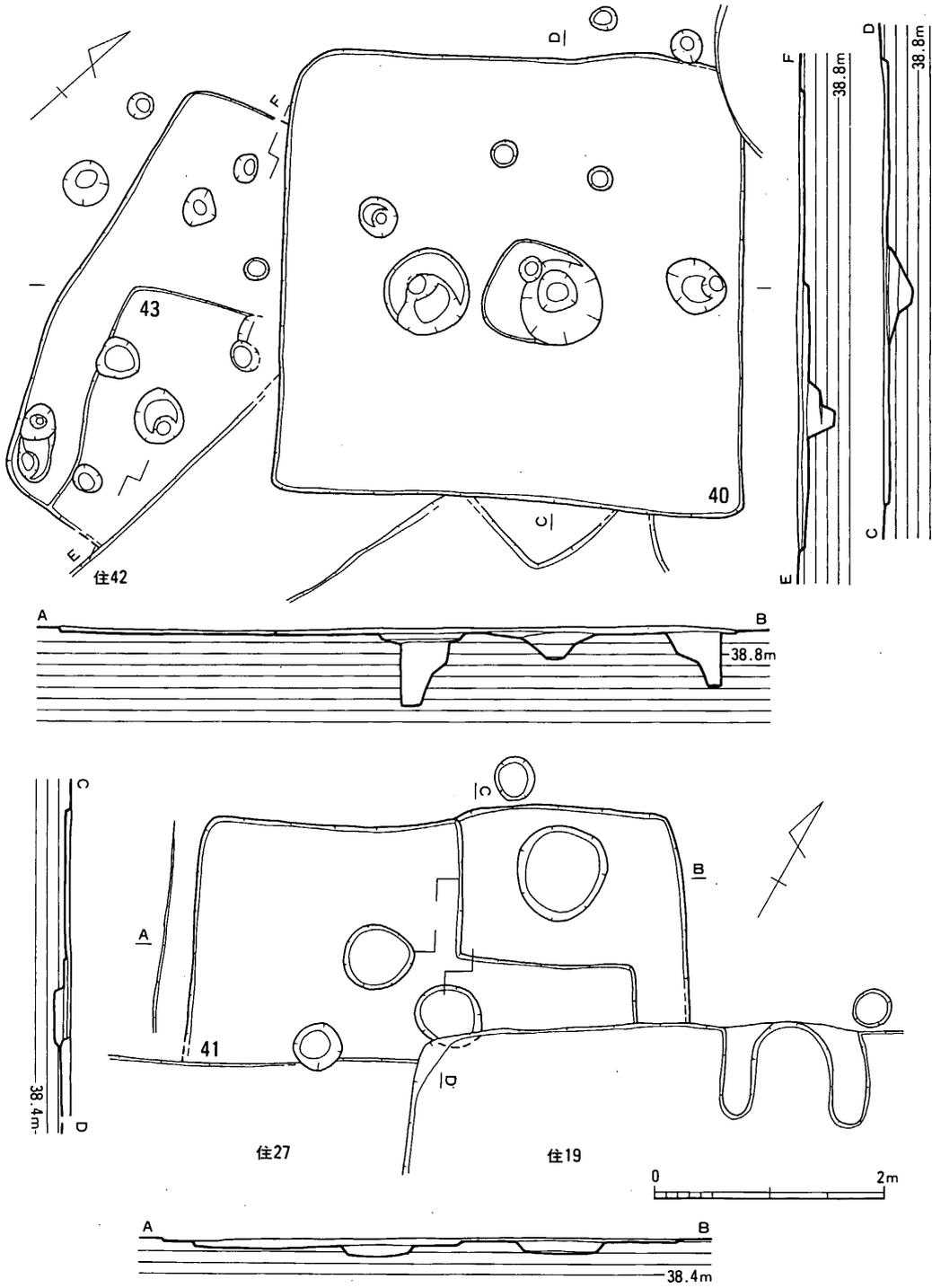
40号竪穴住居跡（図版9 第15図）

40号竪穴住居跡は北地区南端のやや東側にあり、古墳時代の37号竪穴住居跡にはその北東隅をわずかに切られるが、弥生時代の42・43号竪穴住居跡は切る。弥生時代の38号竪穴住居跡とも50cmの距離をおいて近接するが、切り合うことはない。4.0×3.9mのほぼ正方形に近い平面プランを検出したが、主柱穴との位置関係や本遺跡における他の類例から、また壁高5cmしか残らない削平の状況から、本来は長軸両端壁に沿った幅1m程度のベッドが地山に作り出されていたものと推定される。2本の主柱穴は深さ50cmと65cmで、その中央やや南西寄りに、105×90×20mの炉跡がある。北西壁もしくは南東壁の中央部付近には本来屋内土壌が掘り込まれるが、この住居跡では検出できなかった。遺物は極めて少なく、底部が1点だけ図化できた。

遺物（第16図5）5は復原底径約8cm程度の底部で、摩滅は著しいが内面にわずかにハケ目が残る。

41号竪穴住居跡（図版8 第15図）

41号竪穴住居跡は北地区中央部の東寄りにあり、北東1.5mには弥生時代の31・32号竪穴住居跡と近接する。古墳時代の19号竪穴住居跡や27号竪穴住居跡に南側が大きく切られているため、その全体的な規模はわからないが、東西長4.3m、現存する南北長1.9m、壁高8cmを測る。

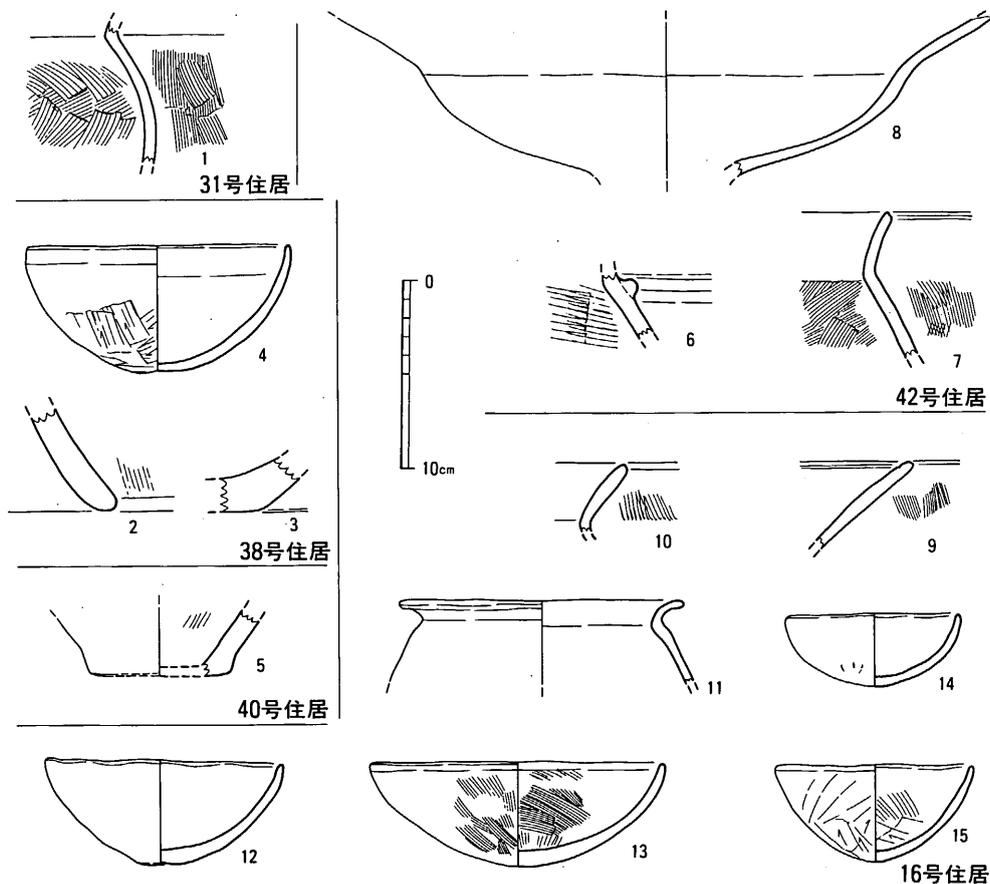


第 15 图 40·41·43号竖穴住居跡実測图 (1/60)

炉跡や支柱穴や屋内土壌は存在せず、またベッドらしき高まりも北壁では幅1.4m、東壁では幅0.5mと、通常のベッドとは大きく異なる。明確な貼り床も確認できず、竪穴住居跡と認定するには幾つかの問題点が存在するようである。遺物は極少量の弥生土器小片だけで、図示が可能な資料はない。

42号竪穴住居跡 (図版9 第17図)

42号竪穴住居跡は北地区南端のやや東寄りに位置し、弥生時代の40号竪穴住居跡には切られるが、43号竪穴住居跡は切るといふ先後関係を有する。同じく弥生時代の45号竪穴住居跡とも切り合っていたはずであるが、その切り合うべき部分が大きく削平されているため、現在はその先後関係を知ることはできない。38号竪穴住居跡とも80cmと切り合うことなく近接しているが、この距離では同時共存していた可能性は少なく、おそらく両者には先後関係が存在していたものと考えられる。この住居跡も壁高は最高で10cmしか残らず、全体的に大きな削平を受けていることを如実に物語る。短軸については5.3mを測ることができるが、東側半分では壁が残らず長軸の正確な長さを出すことはできない。しかし、炉跡や支柱穴との位置関係から、お



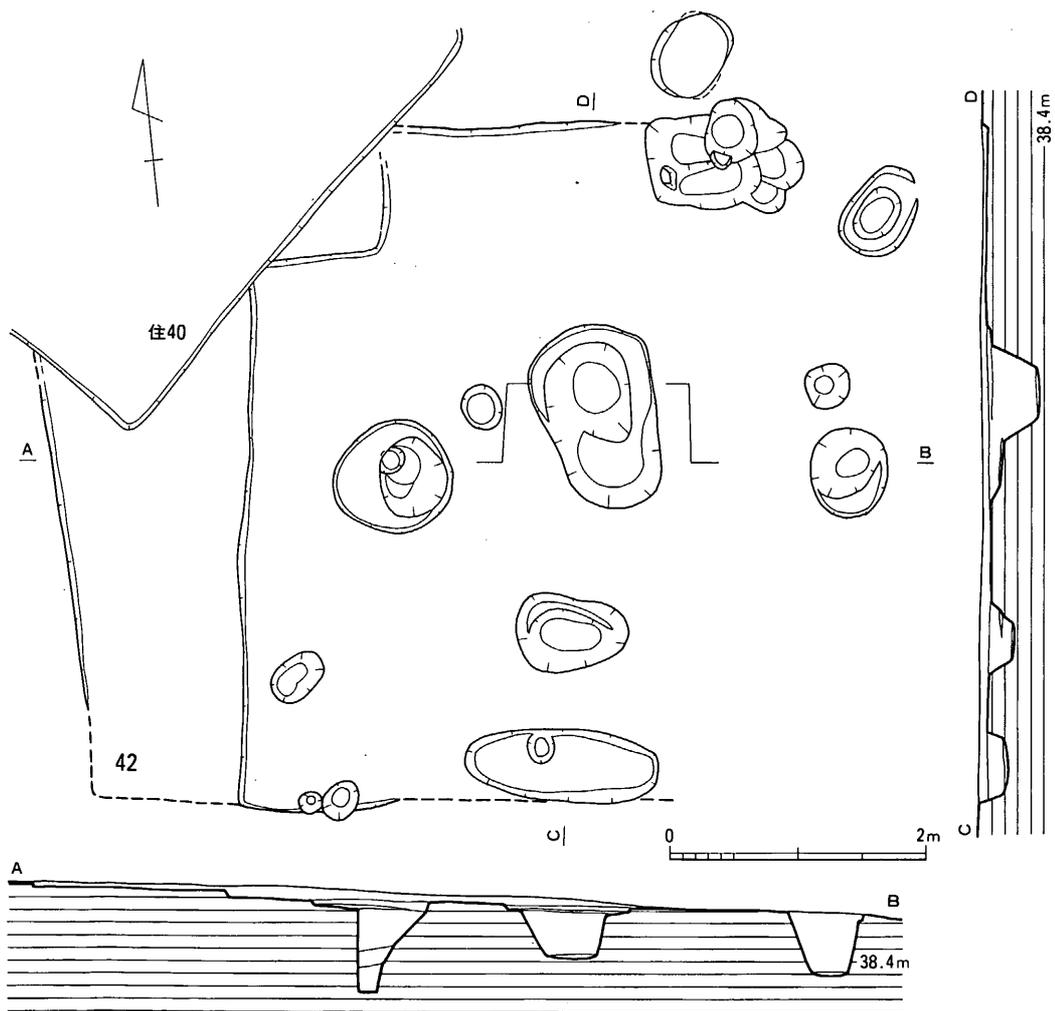
第 16 図 16・31・38・40・42号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4)

よそ7~8m程度のものであったと推察される。西壁に沿うベッドはL字状を呈し、地山を削り出したものである。南壁中央部には150×60×20mの長楕円形の屋内土壌が設置される。2本の支柱穴の深さは50cmと70cmで、その中央部やや北東寄りに150×100×35mの規模で南壁に平坦部を作る炉跡が掘り込まれている。遺物は少量の弥生土器で3点ほど図示した。

遺物 (第16図6~8) 6は頸部に突帯文を有する甕の破片、内面にはハケ目が明瞭に残る。7は甕の口縁部から胴部上半部にかけての破片で、頸部以下では内外面にハケ目が明瞭に残る。8は高坏の坏部で、摩滅により器面調整は不明。

43号竖穴住居跡 (図版8 第15図)

43号竖穴住居跡は北地区南端のやや東寄り、弥生時代の40・42号竖穴住居跡に大きく切られる。45号竖穴住居跡とも切り合っていたはずであるが、削平によりその先後関係は不明。ま



第 17 図 42号竖穴住居跡実測図 (1/60)

た、ごく一部ではあるが古墳時代の44号竪穴住居跡にも切られている。先述したように、40・42号竪穴住居跡に大きく切られていることにもよるが、壁高4cm程度の残りでは全体像を把握することが難しい。短軸については4.0mを測るが、長軸の長さは推定することも難しい。何故なら、住居跡の中央部付近にある炉跡や2本の主柱穴が確認されていないためである。屋内土壌も見当たらず、一見L字状のベッドに見える高まりも幅が一定しておらず、そもそも住居跡として位置づけるべき積極的な根拠に欠けるが、取りあえず住居跡の項目で取り扱った。遺物はほとんど出土していないが、40号竪穴住居跡に切られていることから、弥生時代に属することはまず間違いない。

45号竪穴住居跡（図版10 第12図）

45号竪穴住居跡は北地区南端にあり、弥生時代の16号竪穴住居跡に大きく切られる。16号住居跡と同様に、市道に南東側を大きく削平されている。現在判明している規模は3.5×3.4mで、おそらく方形を呈したプランであったと考えられる。調査時点においては方形になりそうなプランを確実に検出できたが、炉跡・主柱穴・屋内土壌・ベッド等他の住居跡に見られる付帯施設は全く見られず、代わりに性格不明の土壌状の掘り込みが幾つか検出された。遺物はごくわずかの弥生土器小片だけであるが、16号竪穴住居跡との切り合い関係からも弥生時代に属することは間違いない。

46号竪穴住居跡（図版10 第18図）

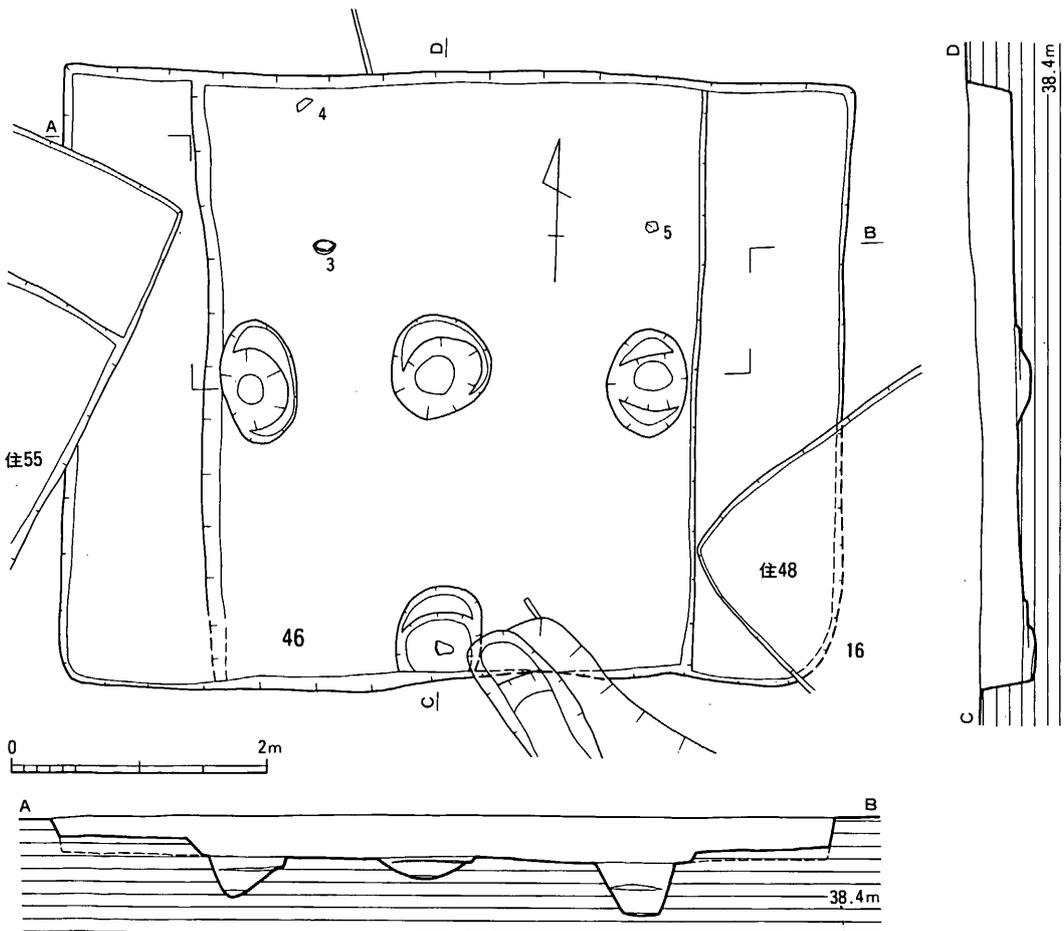
46号竪穴住居跡は北地区南端のやや西寄りに位置し、東端を弥生時代の16号竪穴住居跡に、西側を同じく弥生時代の55号竪穴住居跡に、また南側を古墳時代の1号道状遺構に切れ、北側で弥生時代の47号竪穴住居跡を切る。この住居跡の周辺は弥生時代の住居跡が密集しているが、いずれも単独で存在することなく、同じ弥生時代の住居跡と何らかの切り合い関係を有している。6.1×4.8mの長方形プランで、長軸の両端部にあたる東壁と西壁には幅1.2mのベッドがつく。このベッドは地山を削り出したものではなく、地山の黄褐色土に褐色土を混ぜ合わせたような粒状の粘土で付設したものである。2本の主柱穴はいずれも深さ40cmと比較的浅く、それらの中央部には75×70×20cmの炉跡が掘り込まれる。南壁中央部の屋内土壌は75×65×12cmの小さな楕円形で、第21図3の小形の台付き鉢が出土した。弥生土器の出土はそれほど多くはないが、2点の砥石、2点の石庖丁、1点の鉄器、1点のガラス玉が1カ所に纏まることなく散在の状況で床面から出土した。

遺物（第21図1～6 第70図2・5 第71図8・14 第72図13 第73図2）第21図1は甕の口縁部で摩滅により調整不明。器厚は4mmと薄く、それほど大きな器形にはならないであろう。2は小形の鉢の口縁部で、器面調整はナデ。3は台付きの小形鉢で、外面には指頭圧痕が残る。屋内土壌出土。4は復原口径15cmのボウル状の小形鉢で、摩滅により調整は不明。5は底径4cmの底部。かなり小さな底部ではあるが、器厚1.5cmはそれに比べてかなり厚く、全体の器形が想定

できない。6は復原底径約9cmの底部で、内外面にハケ目の痕跡が明瞭に残る。第70図2は頁岩的な石材の砥石。欠損が著しく現存長9.5cmで、欠損していない2面についてはかなり使い込まれる。5は粘板岩製の砥石で、現存長23.3cmはほぼ完形に近い数値である。断面方形の4面はよく使い込まれる。第71図8は片岩系の石庖丁で、刃部については端部付近までの使用痕が観察される。14は粘板岩製の石庖丁で、両端部は欠損する。刃部の使用痕は直線的な部分だけで、湾曲部分はほとんど使用されていない。貫通孔は2つあるが、穿孔を途中で止めた孔も1つある。第72図13は性格不明の鉄器。厚さは3mmで、刃は持たない。第73図2は半分欠損した青色のガラス玉で、2×3mmの楕円形になる。

47号竪穴住居跡 (図版11 第23図)

47号竪穴住居跡は北地区南端のほぼ中央部に位置し、弥生時代の16・46・52号竪穴住居跡や古墳時代の44号竪穴住居跡に切られるという先後関係を有する。当初、47号住居跡が52号住居跡を切るという認識で調査を進めたが、その途中で切り合い関係の間違いに気づき修正したも

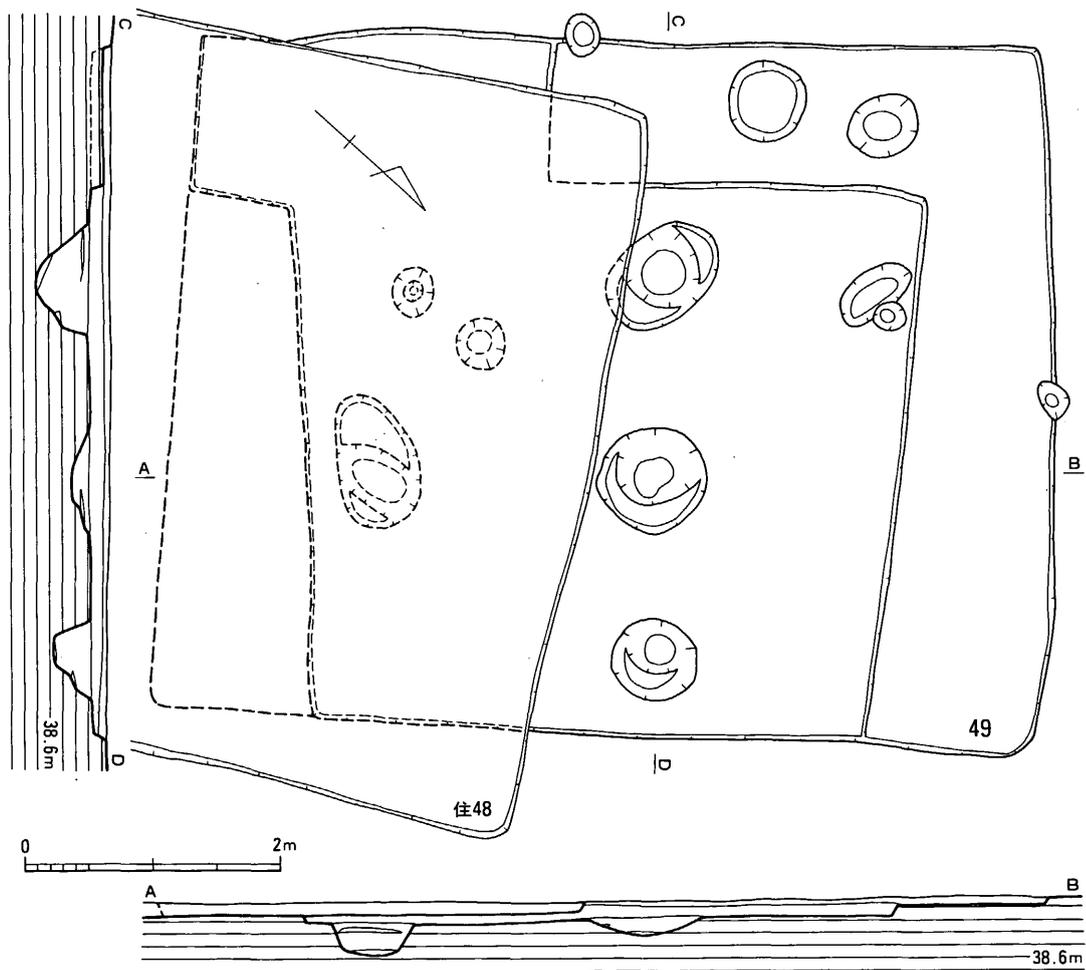


第 18 図 46号竪穴住居跡実測図 (1/60)

の、遺物は47号と52号のもののがかなり混在してしまった。他の住居跡に大きく切られたり切り合い関係を間違えていたために、この住居跡の正確な規模は把握できていないが、長軸については5.8m、短軸についてはおそらく5m程度を測る長方形のプランになると推定される。ただし、この住居跡は床面付近から遺物が全く出土しないこと、炉跡・支柱穴・屋内土壌・ベッドをはじめ明確な貼り床さえ確認できず、果たして住居として機能していたものか疑わしい。出土遺物自体は少なく、図示できるものもなかったが、先述したように52号住居跡のものと混在している可能性が高い。

49号竪穴住居跡（図版12 第19図）

49号竪穴住居跡は北地区の中央部南寄りに位置し、古墳時代の48号竪穴住居跡には切られるが、弥生時代の50号竪穴住居跡は切るという先後関係を有する。弥生時代の57号竪穴住居跡とはわずか10cmの距離をおいて近接するが、これらが同時共存することは考えられず、いずれか



第 19 図 49号竪穴住居跡実測図 (1/60)

の先後関係が存在するはずである。平面プランは長方形を呈し、6.8×5.5mの規模を有する。ベッドは北西壁と南西壁にL字状のものがつくが、南西壁部分については幅1.1mと一定の幅であるのに対し、北西壁の部分については1.1~1.4mとバチ状に開いていく。南東壁につくベッドはL字状ではないが、北西壁のベッドと同様にバチ状に開いていき、結局短軸部を中心に左右対称の形態になる。このバチ状に開く部分のベッドは地山の削り出しであるが、南西壁につくベッドは黄褐色の粘土で作ったものである。すなわち、この部分のベッドは住居を造築する段階において予定されていなかった構造であり、結果としてシンメトリーにならない平面プランができあがったと考えられる。2本の主柱穴は短軸上に設置されており、本遺跡においては他に例を見ない。設置位置も東側によっており、不自然さを感じさせる。したがって、2本の主柱穴の中央部にある85×80×22cmの炉跡も同じように東側に寄ったような位置にある。屋内土壌については南東側のベッドの近くにそれらしきもの(105×65×35cm)があるが、ベッドとは若干離れておりこれも他のパターンとは異なる。このように本住居跡の構造は多くの部分において他の住居跡と異なる構造を呈している点が注意を引く。出土遺物は少なく、図示できたのは3点の弥生土器と1点の石庖丁だけである。

遺物 (第21図7~9 第71図10) 第21図7は頸部に突帯文が貼りつく甕の口縁部で、内外面ともにハケ目が施される。8は胴部の突帯文で、先端部に刻み目が施されるが、この原体はおそらくハケ工具であろう。内外面ともに明瞭なハケ目が観察されるが、外面は突帯文を貼りつけた後にも施されている。9は甕の口縁部で、摩滅により調整は不明。第71図10は片岩系の石庖丁で、端部付近まで幅広く使用されているものの、摩滅はわずかでそれほど長期に亘る使用ではなかったと考えられる。

50号竪穴住居跡 (図版13 第20図)

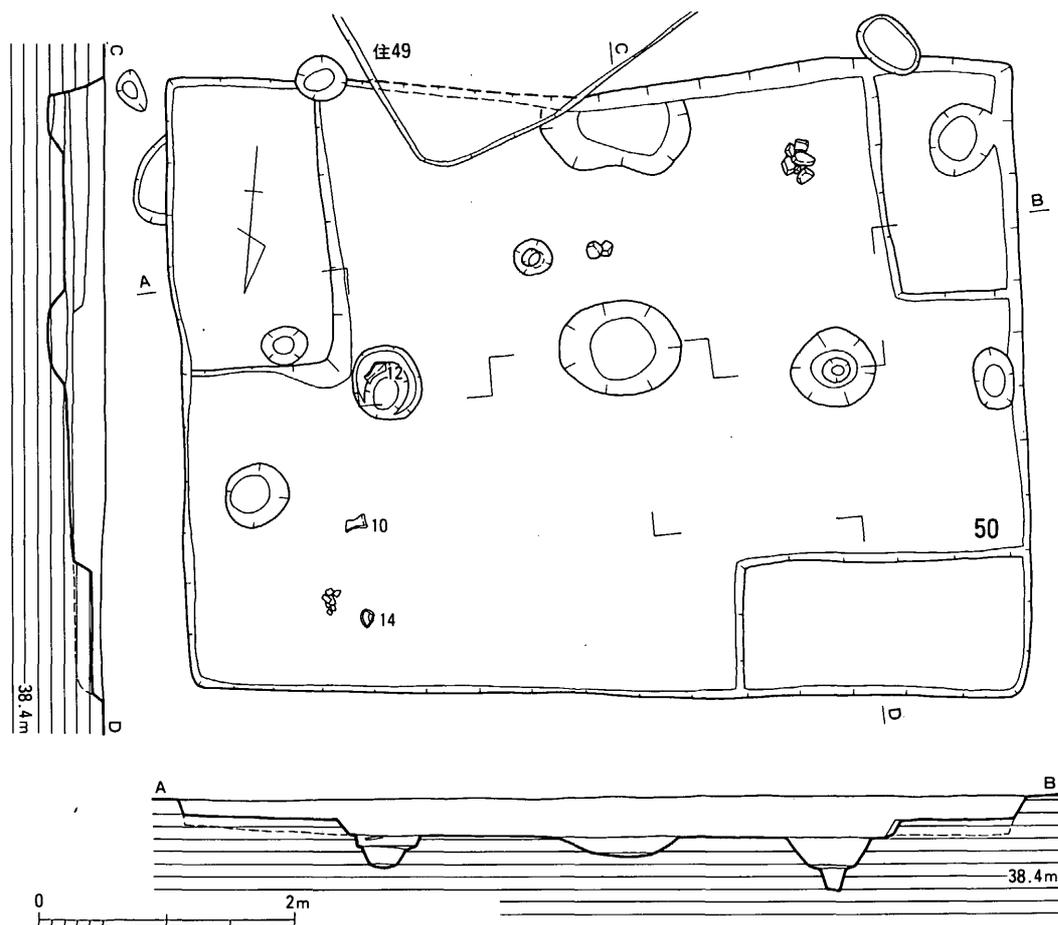
50号竪穴住居跡は北地区の中央部南寄りに位置し、弥生時代の49号竪穴住居跡に切られるという先後関係を有する。南2mには古墳時代の48号竪穴住居跡があり、北西20cmにはやはり古墳時代の7号土壌がある。広形銅戈の鋳型が出土した10号土壌は、西4mに位置する。6.7×4.8mの長方形プランであるが、南壁は中央付近が内側へ湾曲する。北西・南西・南東の3カ所の隅には2.0~2.2×1.1~1.3mのベッドがつくが、これらは地山の削り出しではなく、黄褐色粘土による付設である。2本の主柱穴は深さ30cmと50cmで、その中央部には90×70×25cmの炉跡が掘り込まれる。屋内土壌は湾曲する南壁の中央部で、120×65×15cmの瓢箪形である。床面には焼けた礫の纏まりが2カ所あるが、その性格は不明。遺物は床面から比較的多く出土したが、完形になるものはない。

遺物 (第21図10~16 第70図3 第71図7 第72図3 第73図9・10) 第21図10は復原口径16cmの壺の口縁部で、内外面にハケ目が窺える。11も壺の口縁部。12は甕の口縁部で、内外面ともにハケ目が観察される。13~15はボウル状の小形鉢で、不安定な丸い底には擦れた痕跡が見ら

れる。13の復原口径は11cm、器高4.3cm。14の復原口径は15cm、器高5.7cm。15の口径は9.7cm、器高4.1cmで、両端部に孔のつく横長の耳（把手）が対向する位置に2つ貼りつけられる。16は一見三足高の脚のようであるが、尖った部分は図示したように横位置になる。外面下部にはハケ目が窺え、内面にはナデが施される。器厚4mmという薄さと湾曲の感じからしてそれほど大きなものではなさそうであるが、この破片から想定できる器形は見当たらない。なお、胎土は本遺跡から出土する弥生土器とほとんど差はなく、弥生土器の一種であることはまず間違いがない。第70図3は粘板岩製の砥石。完形品で長さは13.3cm。断面方形の4面はすべてかなり使用されている。第71図7は片岩系の石庖丁で、刃部がわずかに残る。第72図12は性格不明の鉄器。刃部はあるがこれがどのように使用されるのかは不明。第73図9は青色のガラス玉で5×7mm。10も青色のガラス玉で5×8mm。

51号竪穴住居跡（図版13 第22図）

51号竪穴住居跡は北地区中央部のやや南寄りに位置する。西に近接する50号竪穴住居跡とは

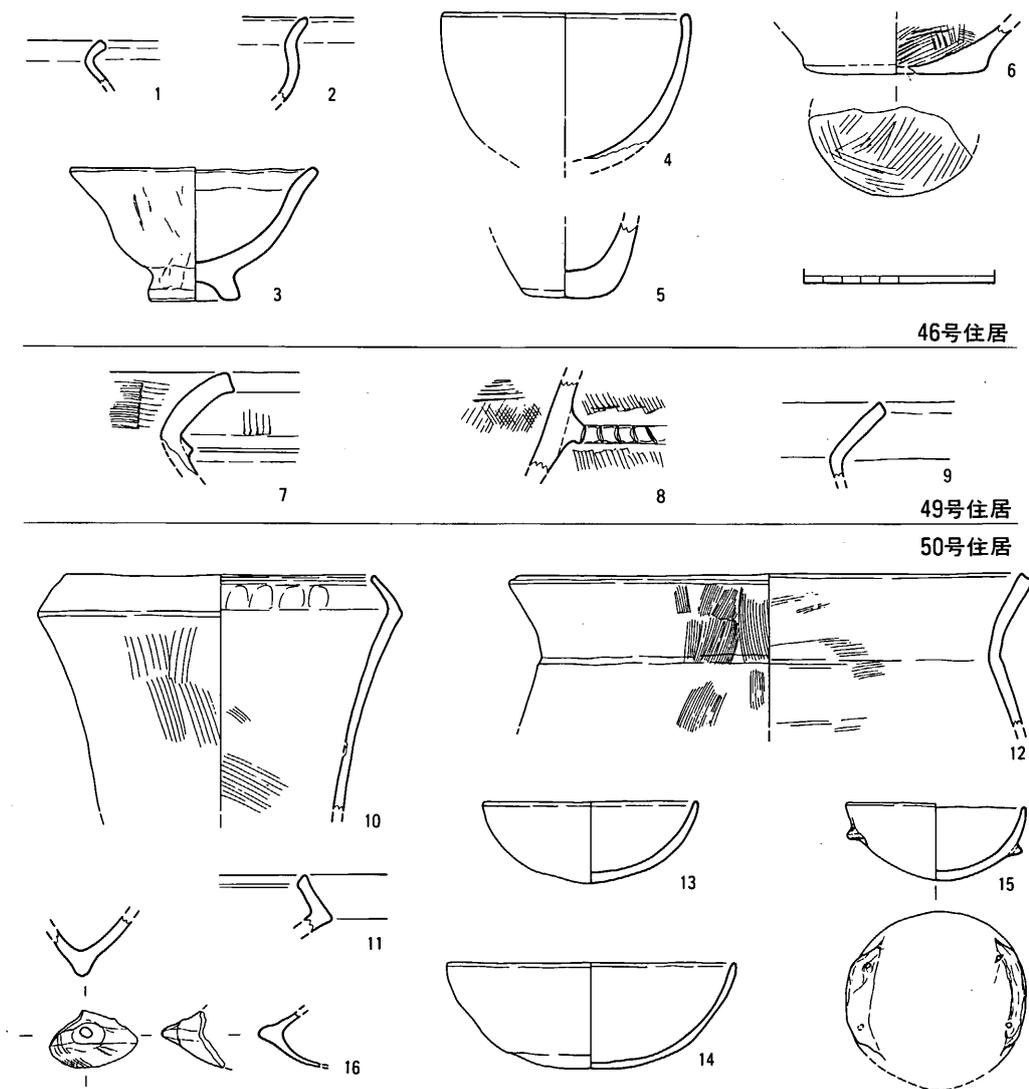


第 20 図 50号竪穴住居跡実測図（1/60）

切り合い関係を有していたであろうが、本住居跡の著しい削平により不明。東に近接する古墳時代の27号竪穴住居跡には当然切られていたはずであるが、本住居跡の削平によりやはり遺構としてそれを確認できなかった。そもそも本住居跡は平面プランや規模は全く不明であり、65×60×12cmの炉跡とそれに対応するであろう深さ30cm程度の2本の支柱穴を確認したにすぎない。したがって遺物の出土は全くない。

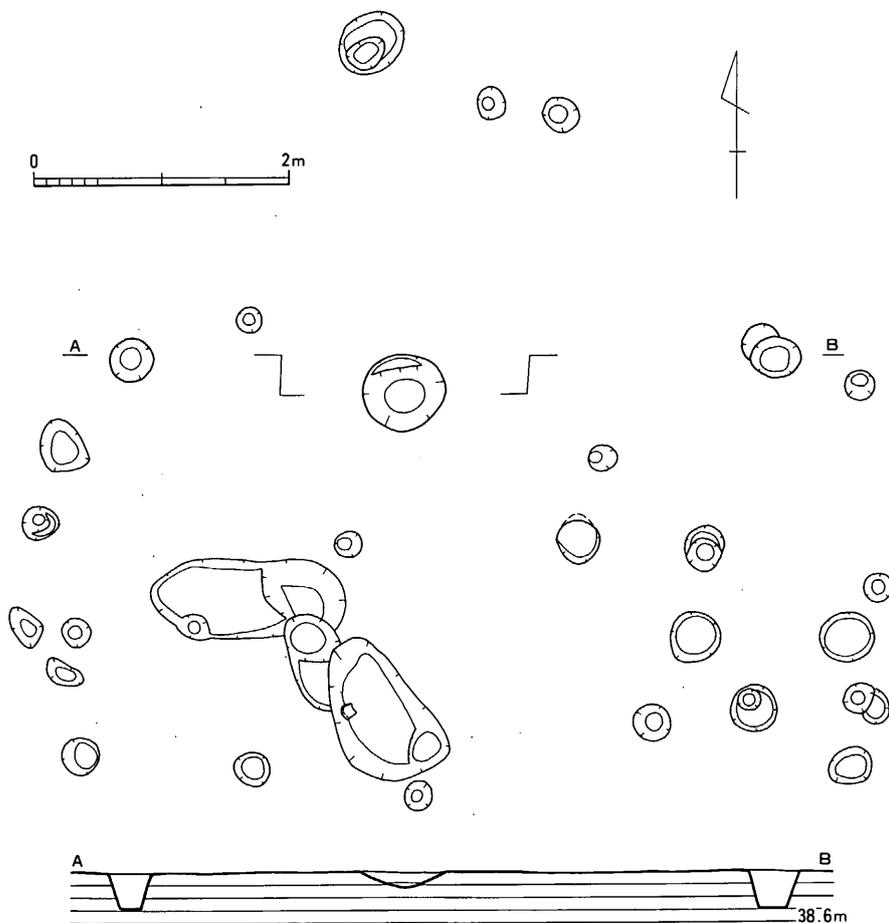
52号竪穴住居跡（図版11 第22図）

52号竪穴住居跡は北地区南端の中央部に位置し、弥生時代の47号竪穴住居跡は切るが古墳時代の44号竪穴住居跡には切られる。この他に弥生時代の16・46号竪穴住居跡ともかなり近接す



第 21 図 46・49・50号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

るが、これだけ近接して同時共存していたとは考えられず、何らかの先後関係を有していたものであろう。47号住居跡の項目でも詳述したが、本住居跡と47号住居跡とは調査において先後関係を間違っって掘り進めたため、正確なプランや規模の把握が十分にできていない。現存するプランは北壁中央部が突出する長方形を呈し、5.0×4.7mの規模を有する。北壁の方形の突出部はその両側にベッドが存在していたことを物語っているが、問題はこのベッドの形態である。すなわち、本遺跡の他の類例から判断して、この場合のベッドは北壁両端に1.7×1.2mの比較的小さなものが各1つずつ設置されるか、あるいは東壁と西壁をも取り込んだL字状のものが設置されるかである。住居プランについては長方形が圧倒的に多い本遺跡の状況から判断して、L字状ベッドの可能性が高いと考えられるが、仮に東壁中央部にある掘り込みが屋内土壇だとしたら、ベッドに接してそれが付設されたことになり不自然さを感じる。このように決め手に欠ける現状においては、いずれの可能性も存在することだけを取りあえず確認しておきたい。主柱穴は当然2本であるはずだが、東側のものについては適当な位置にない。東壁際の掘り込



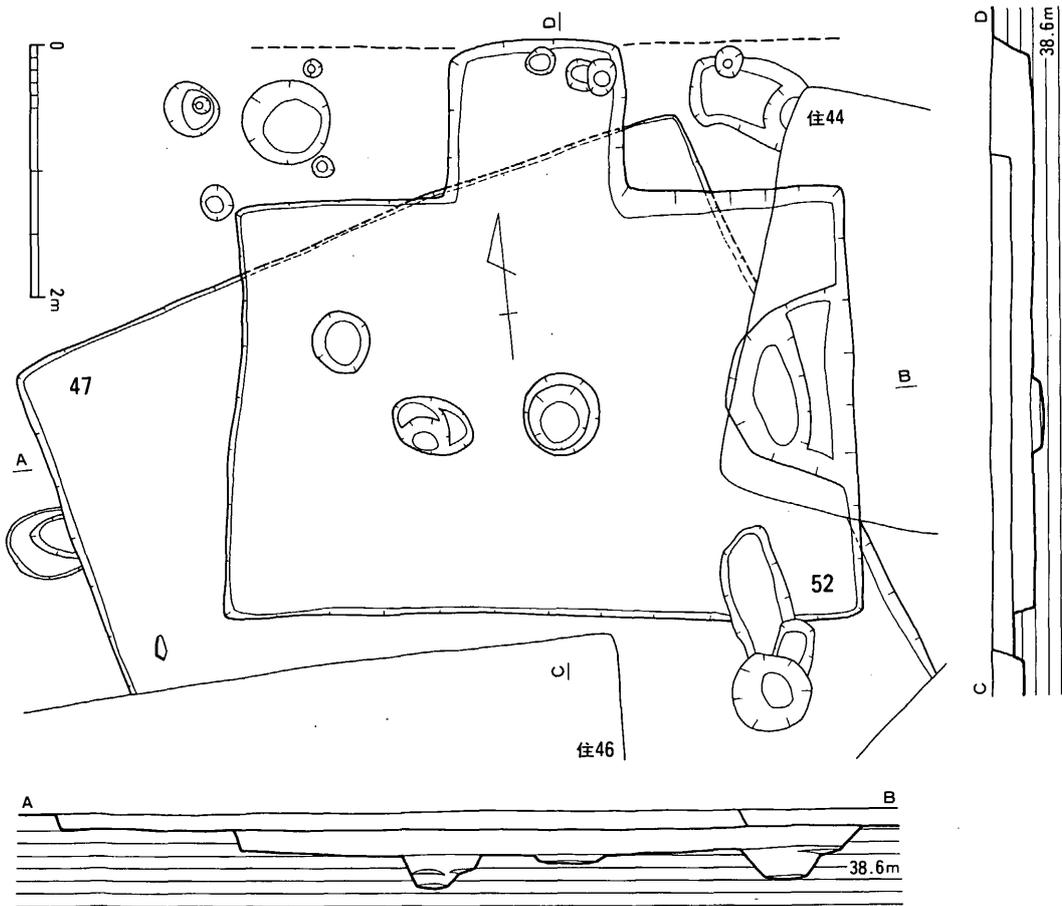
第 22 図 51号竖穴住居跡実測図 (1/60)

みが支柱穴である可能性も完全には否定できないが、あまりにズレているように感じる。炉跡は65×60×10cmで住居跡の中央部にある。遺物の出土は少なく小さく図示できないが、47号住居跡のものとの混在が少なくはないであろう。

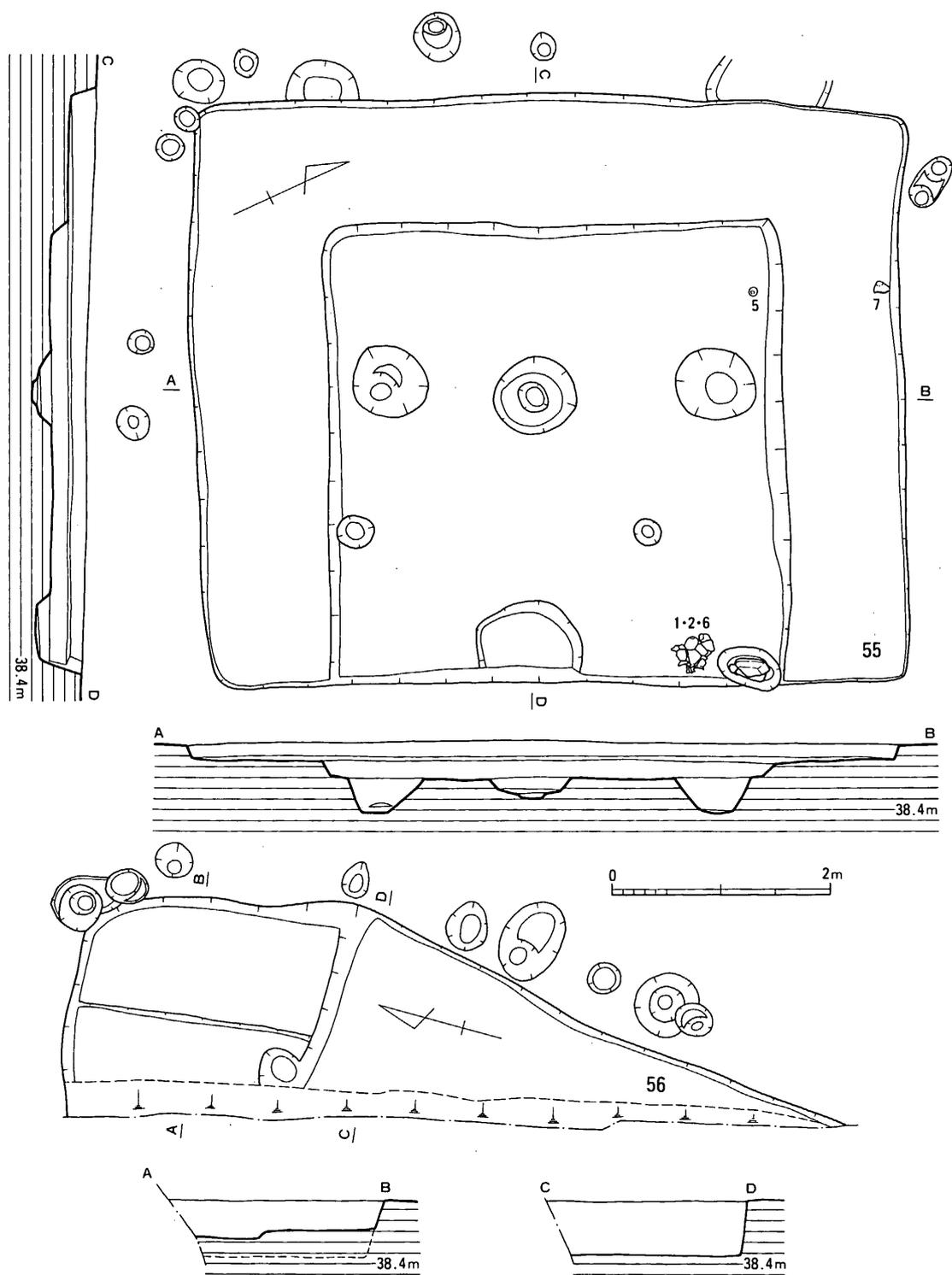
55号竪穴住居跡 (図版14 第24図)

55号竪穴住居跡は北地区南端の西寄りに位置し、東隅が弥生時代の46号竪穴住居跡を切る。北1.5mには弥生時代の57号竪穴住居跡、西1.5mにはやはり弥生時代の56号竪穴住居跡と近接する。平面プランは6.5×5.5mの長方形で、壁高は35cmと比較的残りが良い。幅1.3mで「コ」字状に巡るベッドは地山の削り出しによるもので、このベッドが巡らない東壁中央部に、95×60×15cmの半円形の屋内土壇が作られる。2本の支柱穴はいずれも深さ40cm程度で、これらの中央部には75×70×20cmの炉跡が掘り込まれる。遺物はそれほど多くはないが、東壁のベッドのない部分で3個体分の土器(第25図1・2・6)が纏まって出土した。

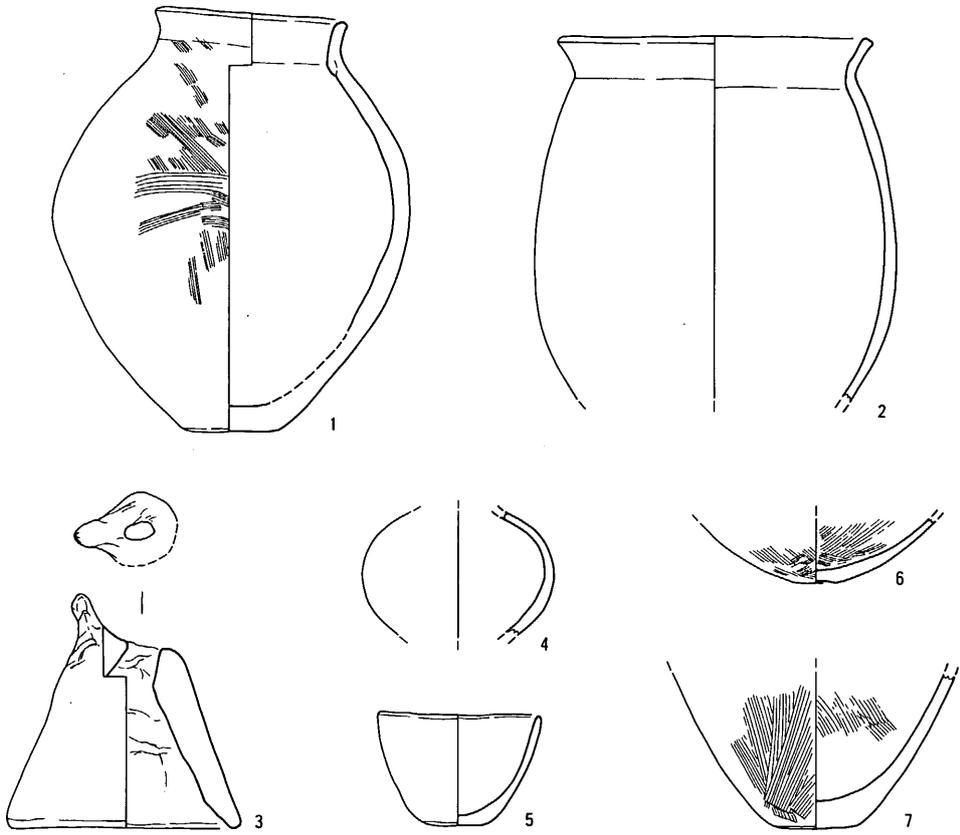
遺物 (第25図1~7 第72図14) 第25図1は完形近くにまで復原できる甕で、外面下半部には



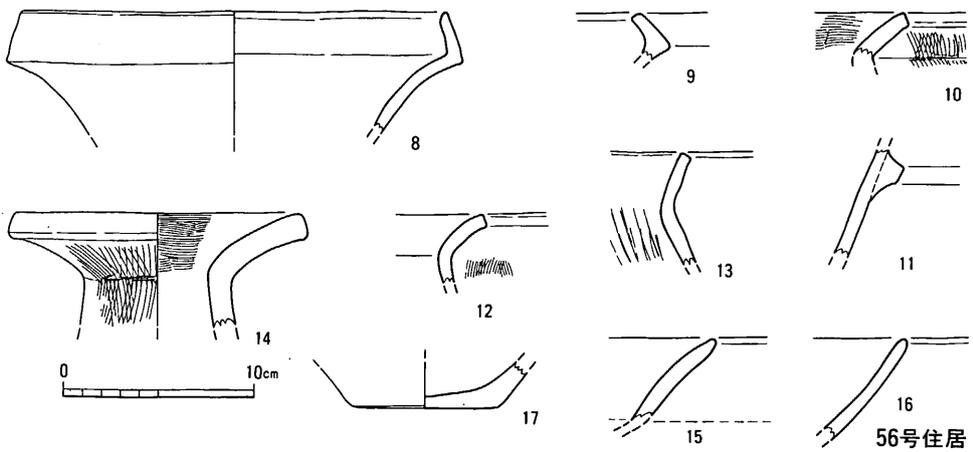
第 23 図 47・52号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第 24 图 55·56号竖穴住居迹实测图 (1/60)



55号住居



56号住居

第 25 图 55·56号竖穴住居迹出土土器实测图 (1/4)

煤が付着する。口径9.8cm、器高22.4cm、最大腹径18.6cm、底径5.0cmをそれぞれ測る。胴部が張る割には口縁部の外反は小さく、一般的な甕の器形とは多少異なる。外面の調整にはハケが施され、内面はナデである。2は復原口径約17cm、残存器高25cmの甕で、口縁部の外反度は小さく、胴部の張りも少ない。摩滅により器面調整は不明。3は裾径12.5cm、器高12.3cmの支脚で、全体的に粗いナデが施される。南側の支柱穴より出土し、加熱による変色は窺えない。4は胴部が大きく張る小形鉢で、復原腹径は約10cm、調整不明。5は口径8.5cm、器高5.9cmの小形鉢で、器面調整は不明。6は比較的小さい器形の上げ底ぎみの底部で、内外面ともにハケ目が明瞭に残る。7は復原底径約5cmの底部で、内外面にはハケが器面調整として施される。第72図14は形態・性格不明の鉄器。断面形態は台形状に開くが、刃部などは特になく。幅2.0cm。

56号竪穴住居跡（図版14 第24図）

56号竪穴住居跡は北地区南部の西端に位置し、その大部分は調査区外に伸びる。東1.5mは弥生時代の55号竪穴住居跡、北2mにはやはり弥生時代の57号竪穴住居跡と近接する。現在確認できている規模は7.4×1.4mで、全体像が明確になれば本遺跡において最大級の竪穴住居跡になろう。北壁に接して検出されたベッドは2段になり、暗黄褐色の粘土によって作られる。遺物は少なかったが、比較的多くの図化が可能であった。確実に床面出土といえるものはなく、いずれも埋土からの出土。

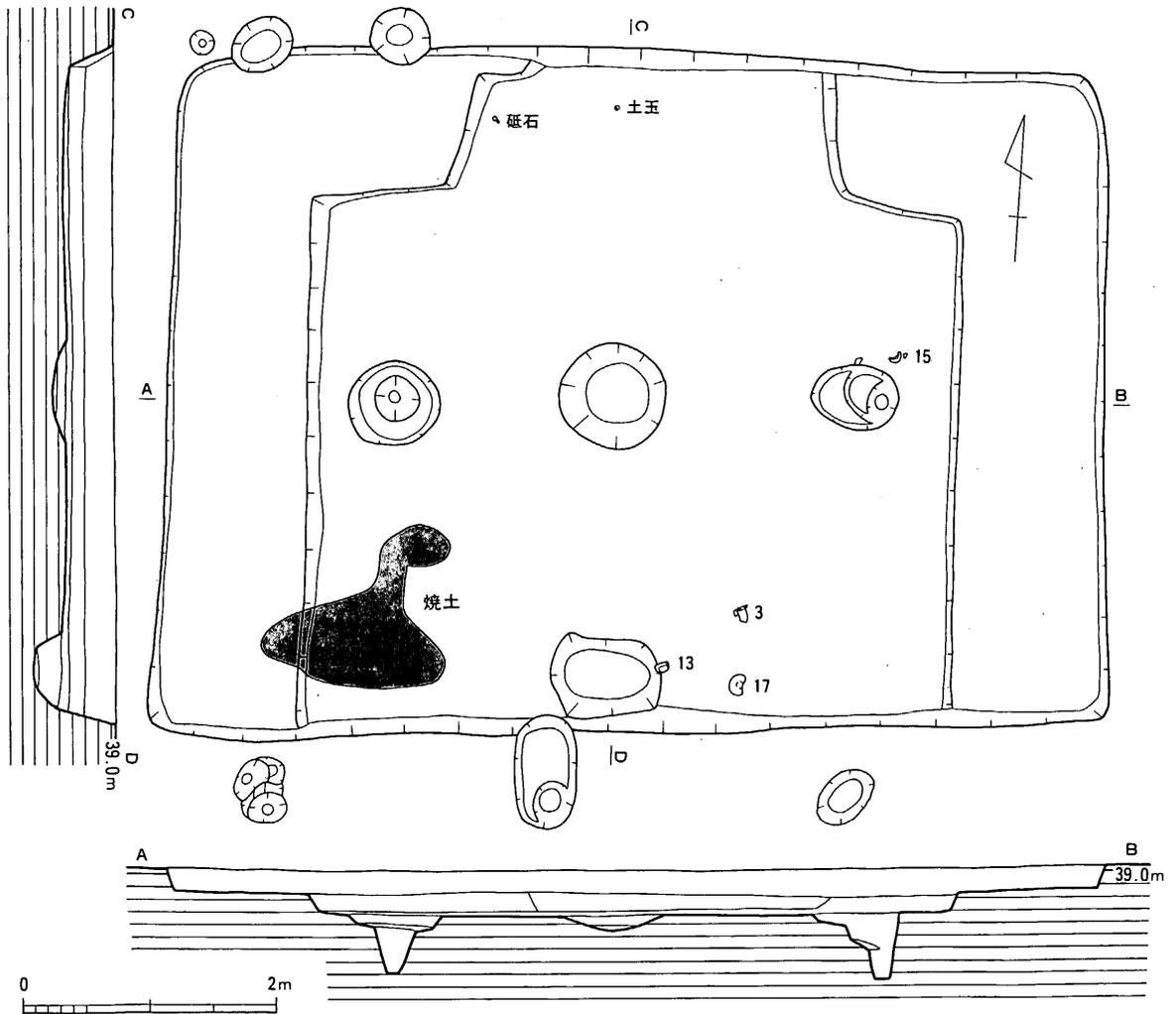
遺物（第25図8～16）第25図8は復原口径約22cmの壺の口縁部で、摩滅により器面調整は不明。9も壺の口縁部。10はおそらく頸部に突帯文がつく甕の口縁部で、内外面ともハケ目が明瞭に残る。11は胴部の突帯文で、摩滅により器面調整は不明。12・13は甕の口縁部で、12では外面に、13では内面にハケ目が観察される。14は復原口径約15cmの器台の口縁部で、内外面ともに丁寧なハケが施される。15は高坏の坏部。16はボウル状小形鉢の口縁部。17は復原底径約8cmの底部。

57号竪穴住居跡（図版15 第26図）

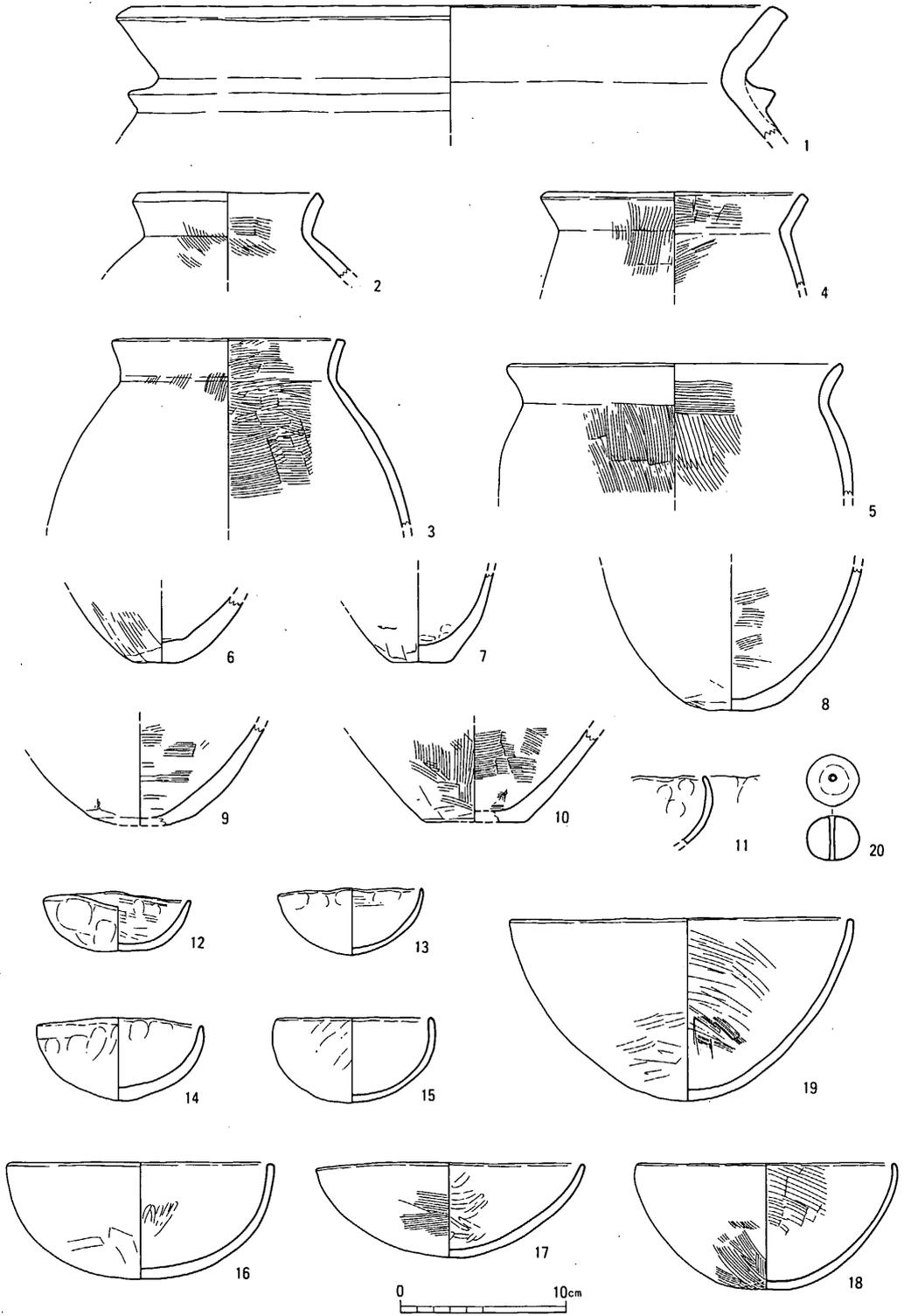
57号竪穴住居跡は北地区南部の西端に位置し、南1.5mには弥生時代の55号竪穴住居跡、南西2mには同じ56号竪穴住居跡、そして北東10cmにはやはり弥生時代の49号竪穴住居跡とかなり近接する。55・56号住居跡はともかく、49号住居跡とはこの近接の度合いから当然先後関係が存在するはずである。平面プランは7.5×5.6mの長方形を呈し、本遺跡においては最大級の規模を有する。幅1.2mのL字状の地山削り出しのベッドが、短軸を中心に左右対称になるように東壁と西壁に造築され、ベッドの巡らない南壁中央部には90×55×20mの楕円形の屋内土壌が作られる。2本の支柱穴はいずれも深さ50cmで、その中央部には90×90×15cmの炉跡が掘り込まれる。住居跡内南西部の床面からベッド上にかけて焼土が1.5mの範囲で不定形に広がるが、床面自体は焼けていないのでこの場所で焼かれたものではなく、他の場所からもたらされたものと考えられる。この住居跡には支柱穴・炉・屋内土壌以外に全く柱穴等はなく、換言

すれば竪穴住居の造築と居住に関してはこれら以上の床面構造が必要ないことを物語っているようである。遺物は比較的多く20点の弥生土器を图示したが、これらはほとんど床面からの出土である。特筆すべきは、ボウル状小形鉢の多さである。

遺物（第27図）1は頸部に突帯文を有する甕の口縁部で、復原口径は約40cm。器厚も1.3cmと分厚く、かなり大きな器形になろう。2～5は復原口径がそれぞれ約12cm、14cm、16cm、20cmの甕で、器面調整はいずれも内外面ともにハケが施される。2・3は口縁部の外反が小さい割に胴部の張る一群、4・5は胴部が張らない一群である。6～9の底部はいずれも丸底に近づくつある不安定なものであるが、10のように安定した底部も含まれる。ボウル状の小形鉢は全部で9個体分出土したが、11～15の口径9～10cm、器高4～5cmの一群は内外面ともに指頭圧痕が明瞭に残る手捏ねである。器面調整としてハケ目が観察される16～19は口径15～20cm、器高6～11cm



第 26 図 57号竪穴住居跡実測図 (1/60)

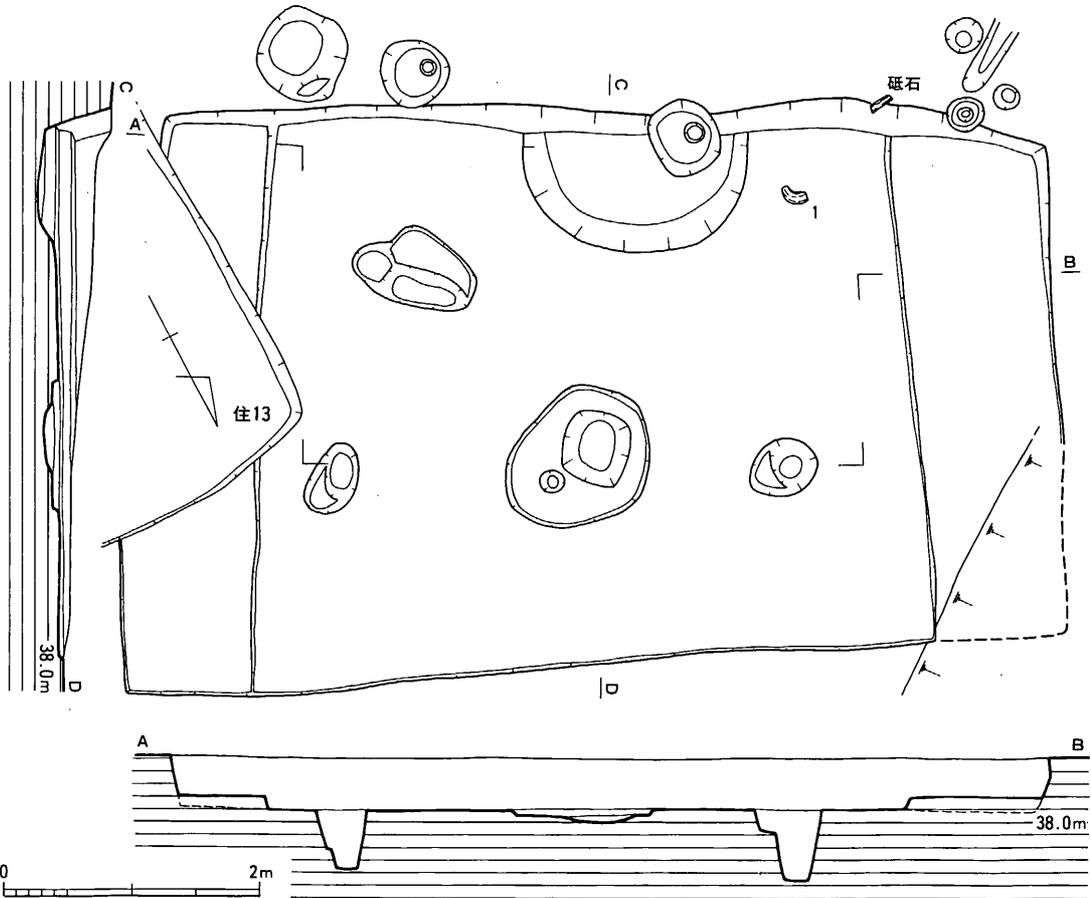


第 27 图 57号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/4)

とバラツキがある。19については外面底部付近にタタキの痕跡がわずかに観察される。これらボウル状の小形鉢の底部は、不安定な丸い底であるため、擦れたような痕跡が窺えることが多い。20は3.1×2.6cmの土製の丸玉で、径2mmの孔がある。

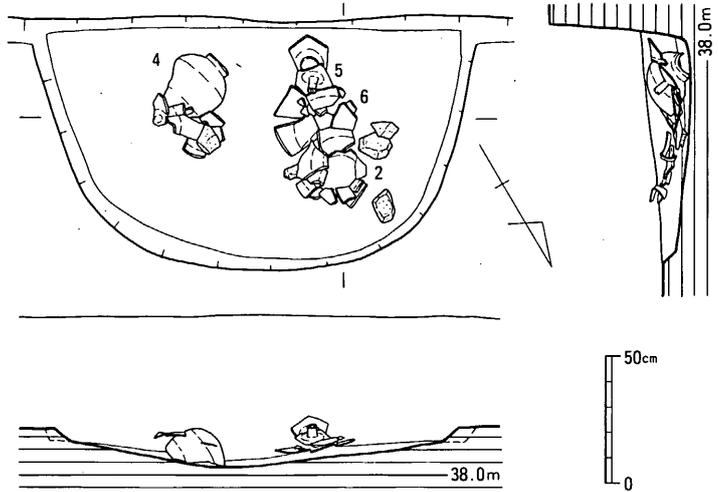
59号竪穴住居跡（図版16 第28・29図）

59号竪穴住居跡は北地区の北端中央部に位置し、弥生時代の15号竪穴住居跡や古墳時代の13号竪穴住居跡に切られる。北西2mには弥生時代の5号竪穴住居跡と近接するが、この一帯にはこれら以外に弥生時代の住居跡が存在しない。平面プランは7.0×4.7mの長方形を呈し、暗黄褐色土で作られた幅1.1mのベッドが長軸両端部に相当する東壁と西壁に沿って作られる。深さ50cmの2本の支柱穴とその間にある炉跡は長軸に沿って一直線に並ぶが、かなり北壁に偏っているのに注意が払われる。屋内土壌は南壁中央部に付設され、150×90×20mの半円形を呈する。この屋内土壌からは第29図で示したように、纏まった遺物の出土が見られた。遺物自体は少ないが、図示した6点のうち床面から出土した第30図1を除いた残りの5点はすべて屋内土壌からの出土である。



第 28 図 59号竪穴住居跡実測図 (1/60)

遺物（第30図1～6 第73図11）第30図1は口径21.9cmの壺の口縁部で、外面の器面調整はハケ。2は口径21.7cmの甕で、胴部の張りは著しく、外面に器面調整としてのハケ目がわずかに残る。また、炭化物の付着が部分的に窺える。3の底部は2と同一個体である。4はほぼ完形近くになる甕で、口径14.3cm、腹径25.9cm、器高27.0cmを測る。口縁部が直線的に立ち上がり、胴部が大きく張るのが特徴的。内面は口縁部を除いて粗いハケが施される。外面のハケは胴部下半部だけに施され、上半部にはタタキがそのまま残る。5の高坏は摩滅により調整不明。6は安定の悪い丸底になりつつある底部で、胴部の張る器形になろう。第73図11は青色のガラス玉で6×4mm。



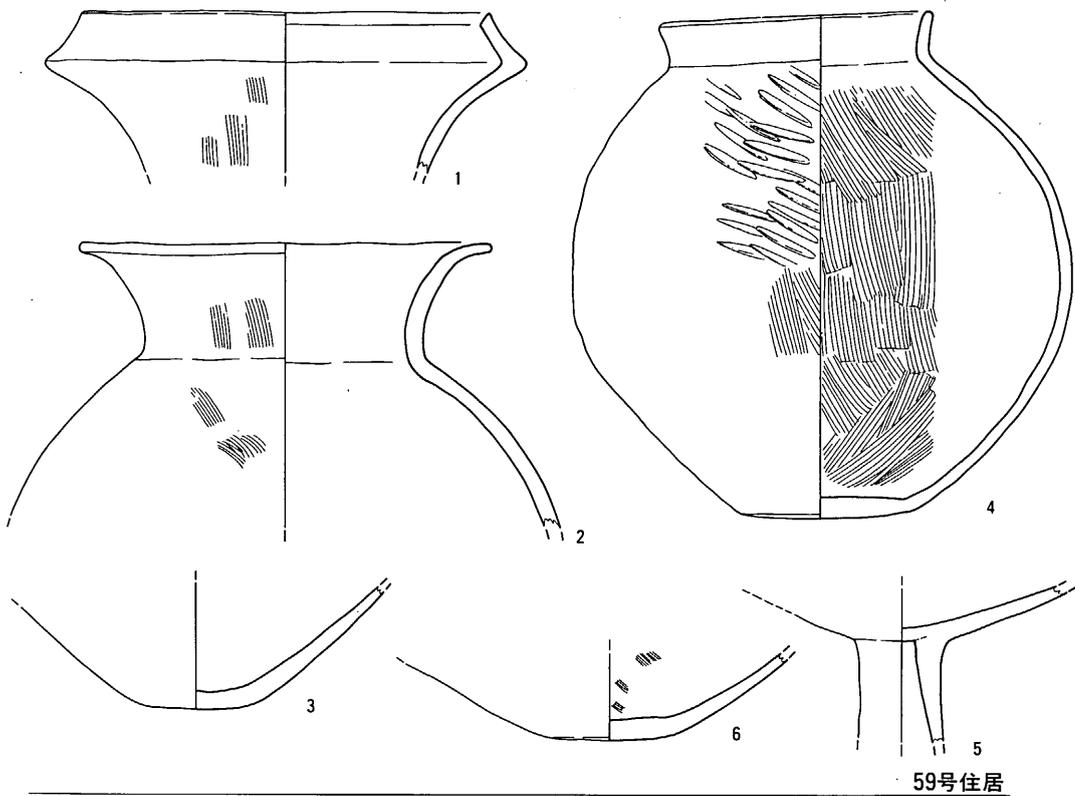
第29図 59号竪穴住居跡屋内土壌実測図（1/30）

り、胴部が大きく張るのが特徴的。内面は口縁部を除いて粗いハケが施される。外面のハケは胴部下半部だけに施され、上半部にはタタキがそのまま残る。5の高坏は摩滅により調整不明。6は安定の悪い丸底になりつつある底部で、胴部の張る器形になろう。第73図11は青色のガラス玉で6×4mm。

61号竪穴住居跡（図版17 第31・32図）

61号竪穴住居跡は南地区東部に位置する。直接的には弥生時代の63・65号竪穴住居跡を切るが、間接的には64・67号竪穴住居跡も切っていることになる。この一帯の切り合い関係については冒頭でも示したが、65・67号→64号→63号→61・62・66号である。4.9×3.5mの長方形プランを呈し、南東壁にのみ地山削り出しの幅1.1mのベッドを有する。2本の主柱穴はいずれも径30cm、深さ70cmと小さくて深く、これらの中央やや北寄りに65×50×8cmの炉跡が掘り込まれる。主柱穴と炉跡とは長軸線上に沿って一直線に並ぶが、住居跡の中心ではなく少し東側に寄っている。南西壁の中央部から20cmほど内側に離れて85×55×20cmの屋内土壌がある。この屋内土壌から炉跡方向へ径80cmほどの範囲で焼土が広がるが、これはここで焼けたものではなく他の場所からもたらされたものである。第32図に示したように、炉跡の底面には焼土と炭化物が混ざったものが広がり、その上に焼土層、さらにその上には炭化物が厚く広がり、そして住居跡の埋土が最上部に入り込んでいる。遺物は土器をはじめ粘板岩製砥石などかなり纏まって床面から出土したが、その多くは調査時の盗難によって消失してしまった。ここでは埋土中より出土した土器を図示することしかできなかった。

遺物（第30図7～10）第30図7はボウル状小形鉢の口縁部で、復原口径は約14cm。8・9は甕の



59号住居

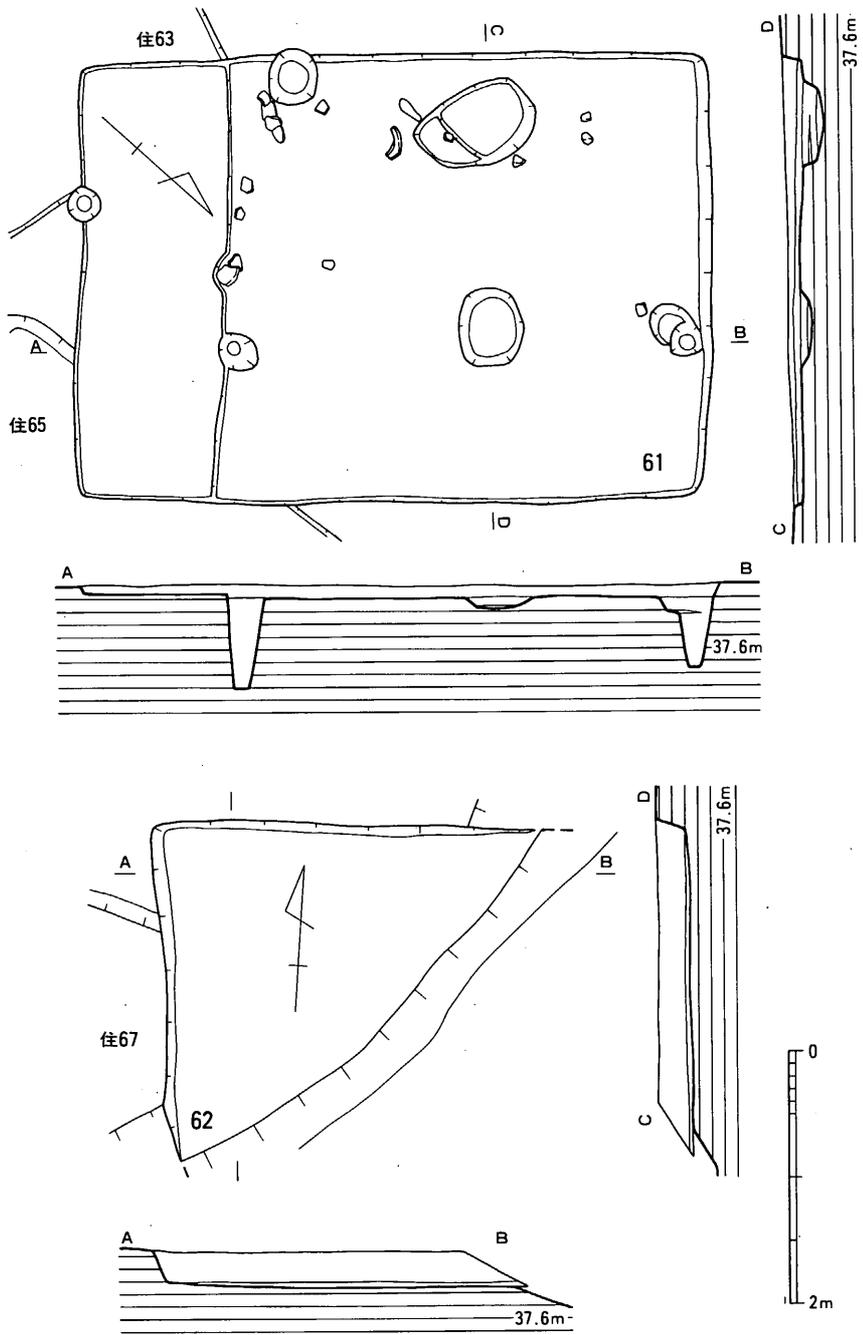
61号住居

62号住居

63号住居



第 30 图 59・61~63号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/4)

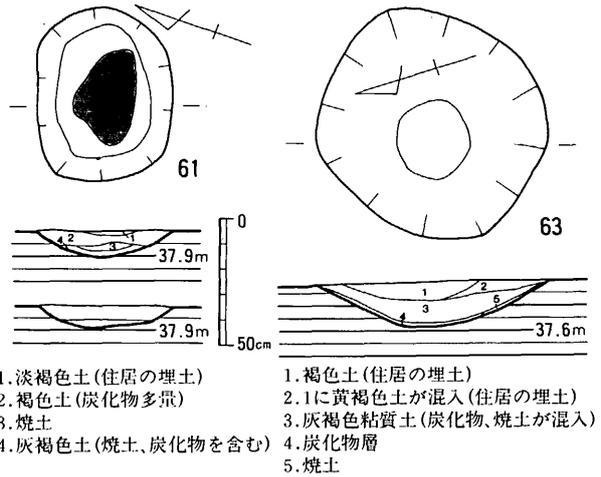


第 31 图 61·62号竖穴住居跡实测图 (1/60)

口縁部で、いずれも外面にハケ目が残る。10は復原口径約7cmの底部。

62号竪穴住居跡（図版18 第31図）

62号竪穴住居跡は南地区東部に位置し、直接的には63・67号竪穴住居跡を切る。開墾による削平のため住居跡の北西隅が3.0×2.7mの三角形状に残るだけで、主柱穴・炉跡・屋内土壌・ベッド等は残らない。したがって、遺物の出土も少ないが、素環頭太刀や鉄鏃が出土しており注目される。



第 32 図 61・63号竪穴住居跡炉跡実測図 (1/30)

遺物（第30図11・12 第72図2・5）第30図11は突帯文が付く胴部破片で、器面調整としてのハケ目が内外面に窺える。突帯文上に施される刻み目はハケ原体と同一の工具によるものであろう。12は底径4.8cmで、内外面にハケが施される胴下半部である。第72図2は素環頭太刀の素環頭部で、現存長7.3cm、断面形態は長方形で厚さ7mm。おそらく素環頭部の一部が切れているはずであるが確認できなかった。5は鉄鏃で現存長7.7cm、最大幅2.9cm、厚さ3mm。

63号竪穴住居跡（図版18 第32・33図）

63号竪穴住居跡は南地区東部に位置し、61・62・66号竪穴住居跡には切られるが、64・67号竪穴住居跡は切る。開墾時の削平により住居跡南東部は現存しないが、6.2×5.4mの長方形プランであることは確認できる。地山削り出しによる幅1.1mのベッドが、長軸両端部に相当する東壁と西壁に付く。東壁のベッドに関しては幅50cm程度のベッドが北壁に沿ってそのまま3mほど伸びるが、西側のベッドには繋がらないという特異なパターンを見せる。2本の主柱穴は深さ30cmと比較的浅く、これらの中央部わずかに東寄りのところに85×80×15cmの炉跡が掘り込まれ、その周囲80~100cmの範囲で炭化物が薄く広がる。第32図に示したように、この炉跡の底面には焼土と炭化物が厚さ2cmで薄く広がり、最上部には住居跡の埋土がそのまま入り込む。遺物は多いものの、図示できるものは少なかった。

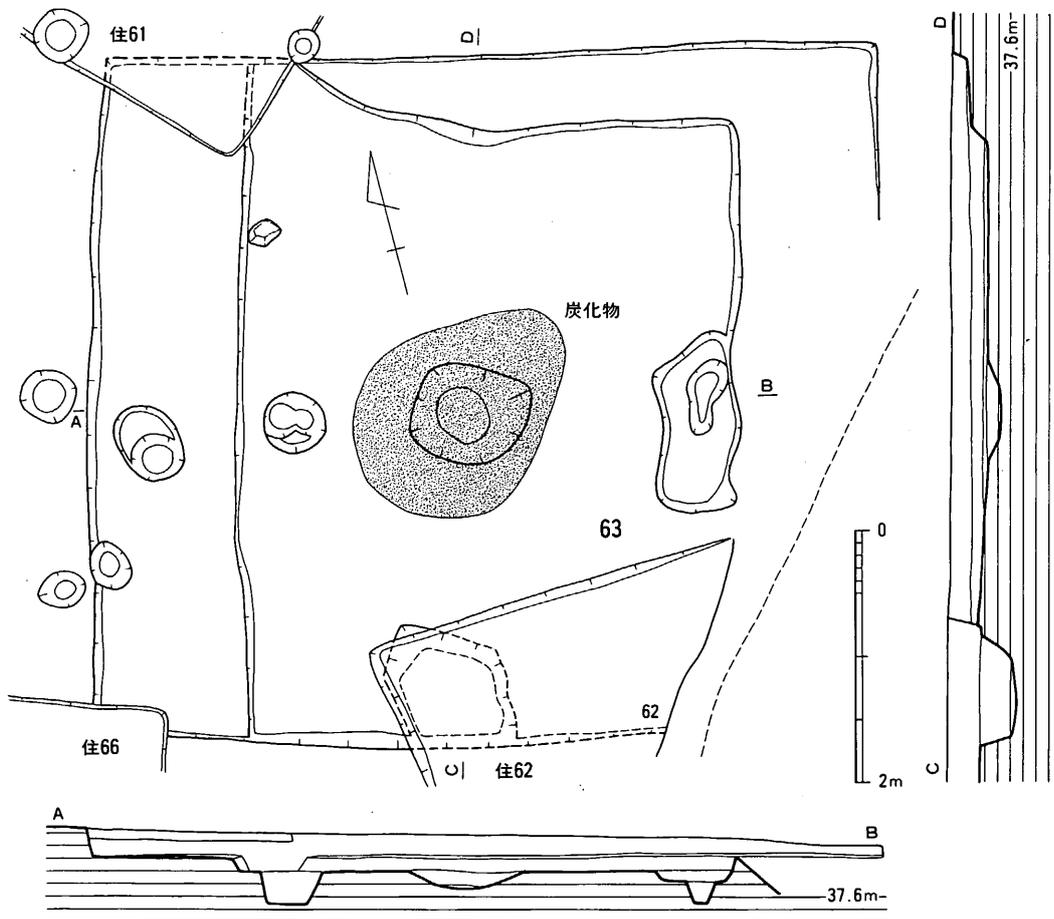
遺物（第30図13~18 第70図4）第30図13は壺の口縁部で摩滅が著しい。14の高杯の脚部内面にはしぼり痕がわずかに残る。15は器台の裾部。16はボウル状小形鉢の口縁部で内面にわずかにハケ目が残る。17は完形の小型鉢で、口径8.7cm、器高3.8cm。18は復原口径約7cm、器高4.5cmのミニチュアで、内面にはハケ目が明瞭に残る。第70図4は粘板岩製の砥石で、両端部が欠損する現存長は9.1cm。おそらく断面が方形で、その4面とも砥石として使用されていたも

のであろう。

64号竪穴住居跡（図版19 第34図）

64号竪穴住居跡は南地区東端に位置し、63号竪穴住居跡には切られるが、65号竪穴住居跡を切る。東側のおよそ半分ほどは調査区外へ伸びており、また南側については開墾による削平のため全体的な規模を窺い知ることができない。現存する規模は4.3×3.7mで、南西壁には地山削り出しによる幅1.1mのベッドが付く。主柱穴は径40cm、深さ35cmのものが1本だけ検出されたが、その肩口には第35図1の完形になる甕が出土した。調査区ぎりぎりのところで炉跡がわずかに顔を覗かせるが、その周囲1mの範囲で炭化物が薄く広がる。遺物は床面やベッド上から比較的纏まって出土した。

遺物（第35図 第72図3 第73図12）第35図1は口径22.3cm、器高27.2cmの甕で、口縁部は強く外反するが胴部はほとんど張らない。摩滅により器面調整不明。2は口径16.2cm、器高17.9cmの甕で、摩滅により器面調整は不明。3は復原口径約18cm、4は復原口径約17cmの甕で、



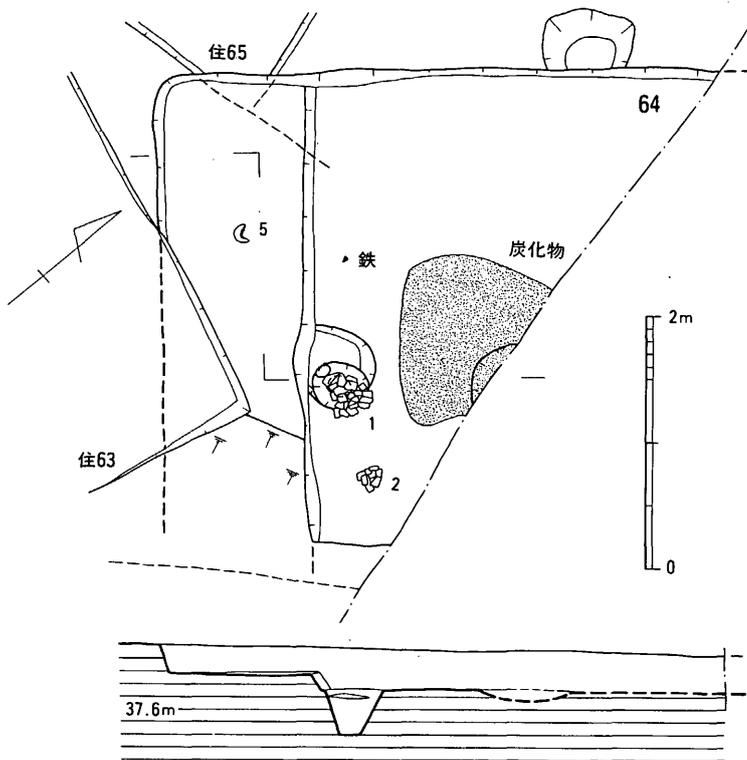
第 33 図 63号竪穴住居跡実測図 (1/60)

いずれも摩滅により器面調整は窺えない。5は復原口径約14cmの小形の鉢で、摩滅により器面調整はほとんど窺えないが、口縁部内面にのみ指頭圧痕が残る。6は焼成後に穿孔された底径5.8cmの底部。第72図3は長さ3.3cm、幅1.3cm、厚さ2mmの関係の鉄鏃で、幅6mmの木質の矢柄が残る。第73図12は5×4mmの青色のガラス玉。

65号竪穴住居跡（図版20 第36図）

65号竪穴住居跡は南地区東端部に位置し、61・64号竪穴住居跡に切られる。この住居跡も調査区外に東側の半分ほどが伸びるため、長軸方向には4.2m分しか検出できなかった。短軸の長さは4.6m。北西隅と南西隅には地山を削り出した1.9×1.4mの長方形のベッドがそれぞれ1つつ付くが、この2つのベッドの真ん中、すなわち西壁中央部にはベッドより15cmほど高い地山削り出しの高まりが作られる。これはおそらく入口として設置された階段であろう。支柱穴は深さ50cmのものが炉跡からかなり近接して1本だけ検出されたが、これは入口からの出入りに支障をきたさないために位置をずらされたものであろう。75×70×15cmの炉跡の周囲には炭化物が薄く広がる。屋内土壌は南壁に接して作られ、1.1×1.0×40cmと比較的深い。遺物は多いがその大部分は埋土中に包含されたもので、床面からの出土は少ない。

遺物（第37図） 第37図1は復原口径約23cm、2は復原口径約24cm、3は復原口径約25cm、4は復

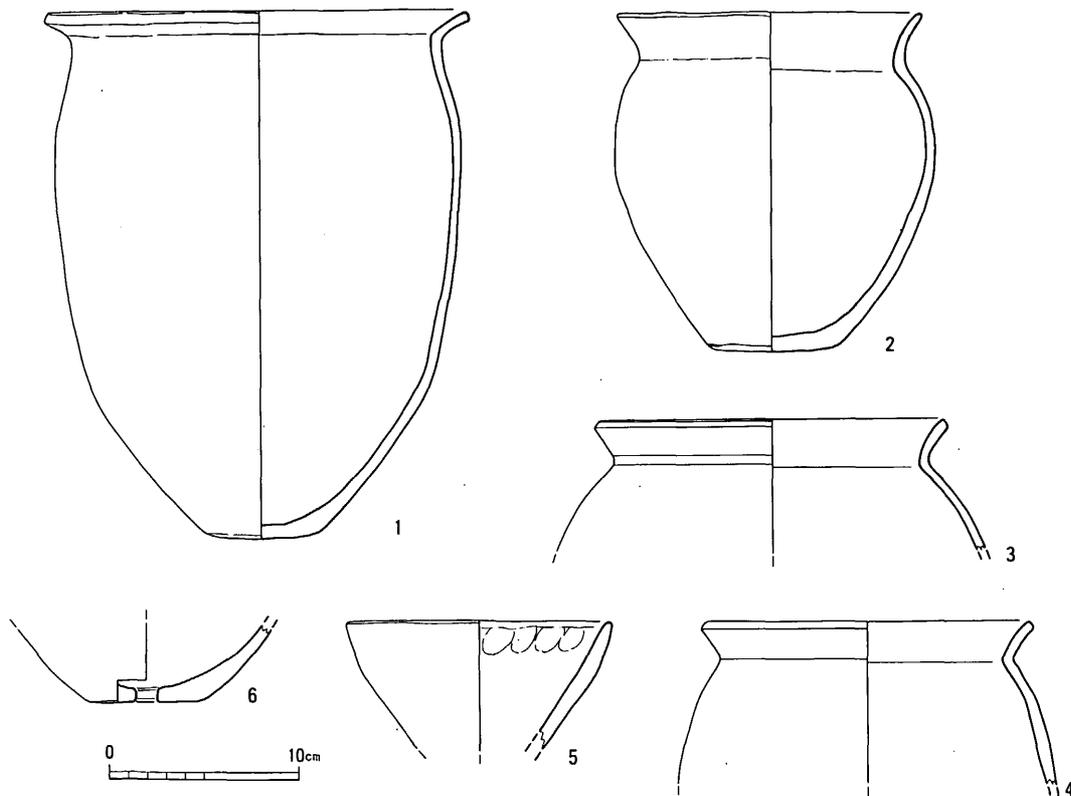


第 34 図 64号竪穴住居跡実測図 (1/60)

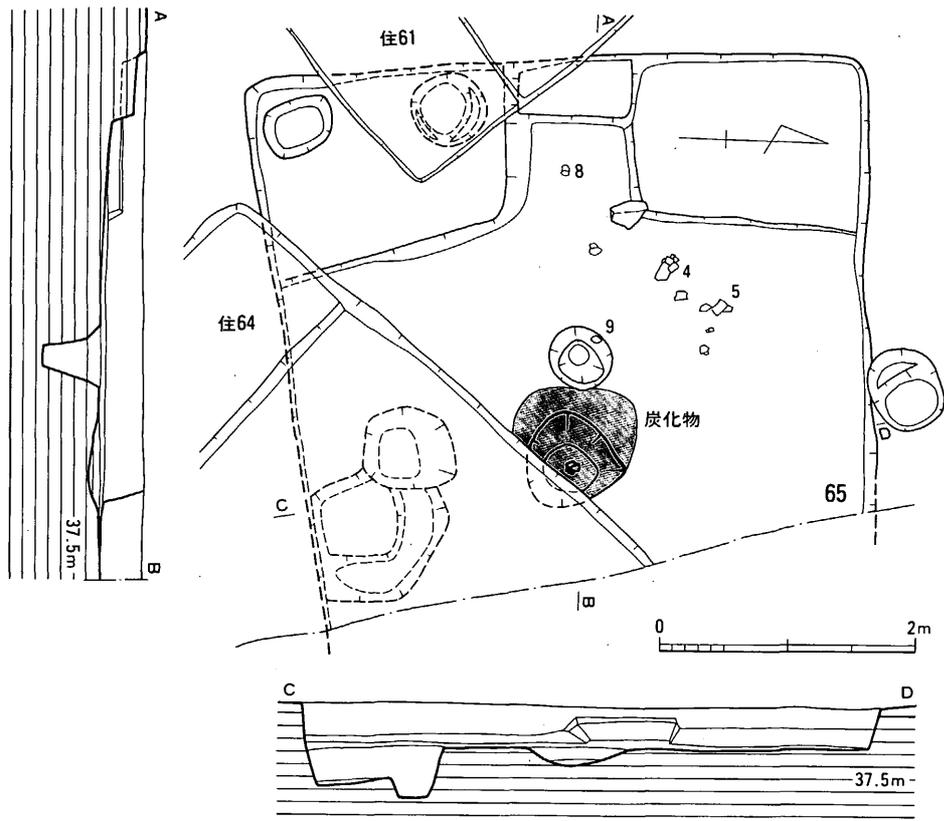
原口径約28cmの甕で、いずれも摩滅が著しく器面調整が窺えるのは内外面にハケが施される4だけである。1～3は胴部が比較的張るが、4は直線的な器形になる。5は復原径約24cmの壺胴部で、3条の突帯文が貼り付けられる。6は器台の裾部で復原径約11cm。内面にわずかにしぼり痕が窺え、全体的に加熱によって赤褐色に変色する。7はボウル状の小形鉢で、復原口径約18cm、器高7.3cmで、丸底には擦れた摩滅が観察される。8は完形のミニチュアで口径6.2cm、器高4.3cm。9は台付きの手捏ね土器で、内外面ともに指頭圧痕が残り器面の凹凸が著しい。口径7.3cm、器高6.7cm。

66号竪穴住居跡（図版21～23 第38図）

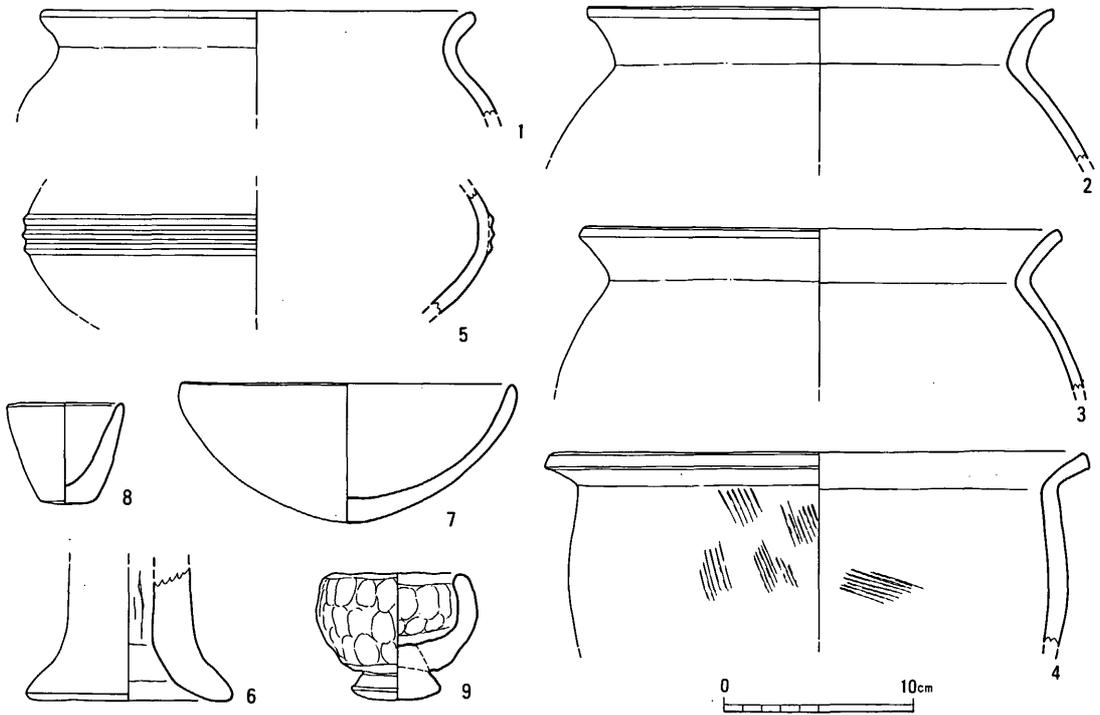
66号竪穴住居跡は南地区のほぼ中央部に位置し、古墳時代の60号竪穴住居跡や11号土壌には切られるが、弥生時代の63・67・68号竪穴住居跡は切る。平面プランは6.3×5.4mの規模を有する長方形で、北壁・西壁・南壁の3方向には幅1.2mのベッドが「コ」の字状に巡るが、このベッドは地山の削り出しによるものではなく、暗黄褐色粘土によって付設されたものである。本住居跡の埋土は炭化物を多量に含んだ暗褐色土で、床面に近づくほど炭化物の量が多くなり焼土も含まれるようになる。遺物は確実に床面に張り付いた状態で出土するものはごくわずか



第 35 図 64号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）



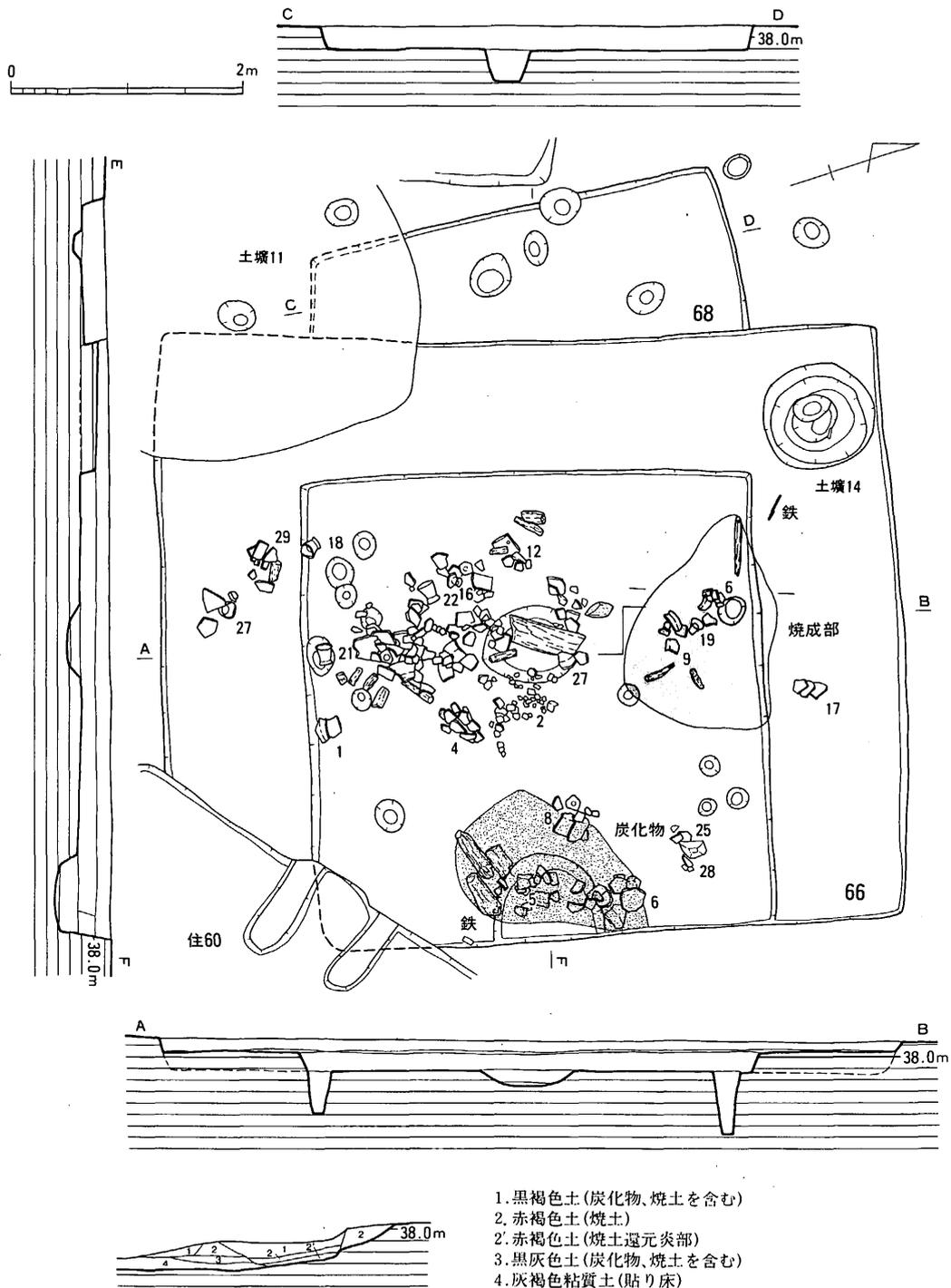
第 36 图 65号竖穴住居跡实测图 (1/60)



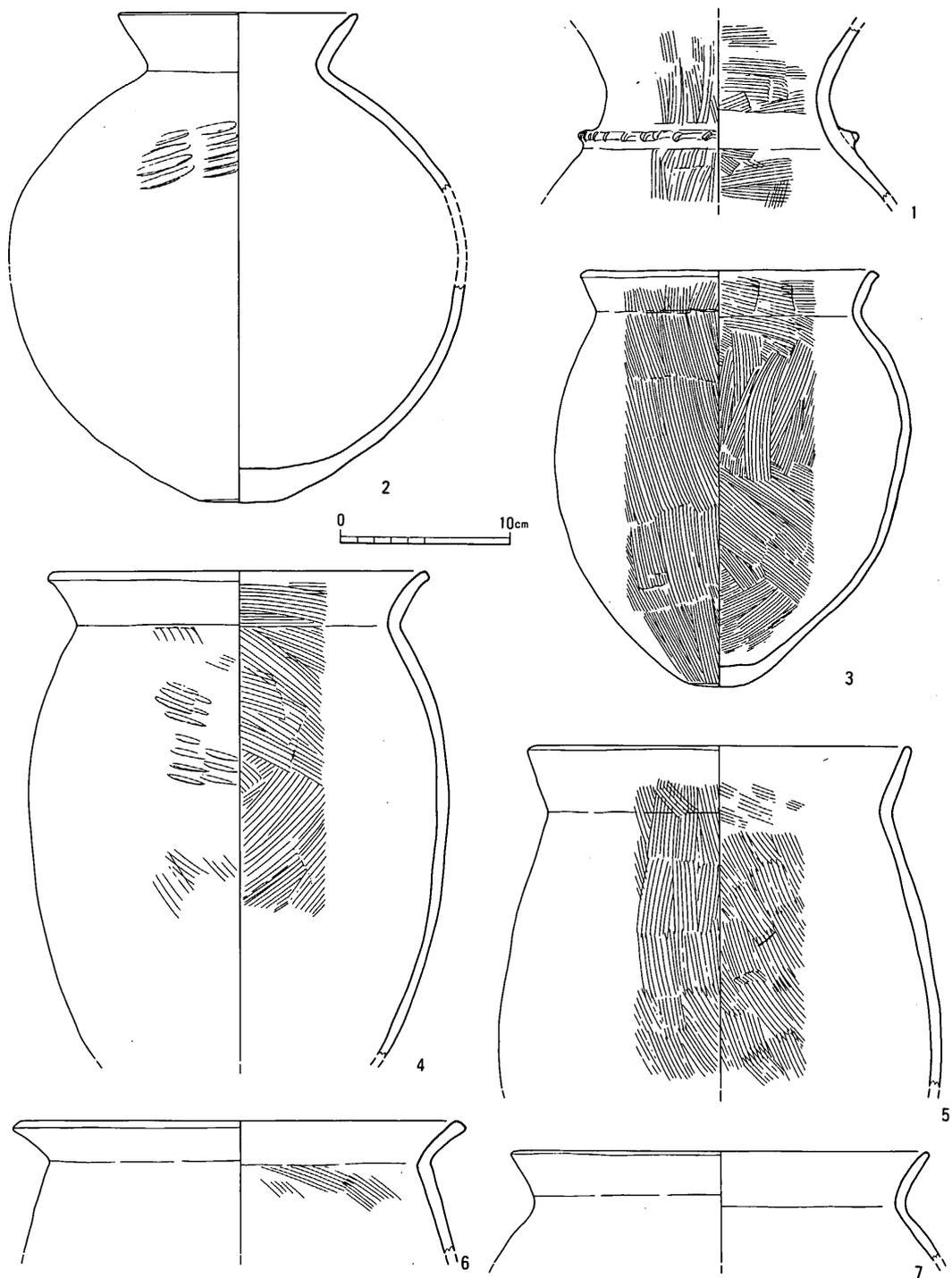
第 37 图 65号竖穴住居跡出土土器实测图 (1/4)

で、大部分は床面から若干浮いた状態にある。土器は多量でパンケース8箱分にも及ぶが、完形になるものはほとんどなく、これに混ざって炭化材も多く含まれていた。炉跡や支柱穴や屋内土壌はこれら多量の土器を除去した時点ではじめて検出できることから、多量の土器は本住居跡の埋没過程において遺棄されたものと考えられる。すなわち、床面からの遺物の出土が少ないことと炭化材の出土状況等を考慮に入れば、住居廃絶後に意図的な焼却が行なわれ、その過程もしくはその後において土器が遺棄（投棄）されたと推定される。2本の支柱穴は径20～25cmと小さい割には40cmと60cmでかなり深く、これらの中央部には85×65×20cmの炉跡が掘り込まれる。北側の支柱穴の周囲にはこの支柱穴やベッドをも含めた1.9×1.3mの範囲で、厚さ10cm程度の焼土が分厚く広がり、また床面やベッドもかなり焼けて赤褐色に変色している。この焼けかたは炉跡に比べても相当なものなので、当初生産もしくは工房的性格を有しているのではないかと考え、土を篩いにかけるなどして慎重に調査を進めた。しかし、焼土と炭化物以外に何も遺物を採集することができず、結局この部分の性格究明は不発に終わった。ベッドの存在しない東壁の中央部には、85×70×20cmの半円形の屋内土壌が作られる。この上面にも炭化物が1.7×1.2mの範囲で薄く炭化物が広がるが、これについては焼土等は含まれず、他の場所からもたらされたものと考えられる。北西隅のベッド上には95×91×73cmの土壌が存在する。この土壌に気付いたのはベッドを検出した時点ではあるが、検出が遅れてしまっていた可能性や、このような場所に屋内土壌を作ることの不自然さから、便宜的に14号土壌として別に説明を加えている。出土遺物は多く、土器の他に素環頭太刀や鉄製の鋤先も出土した。

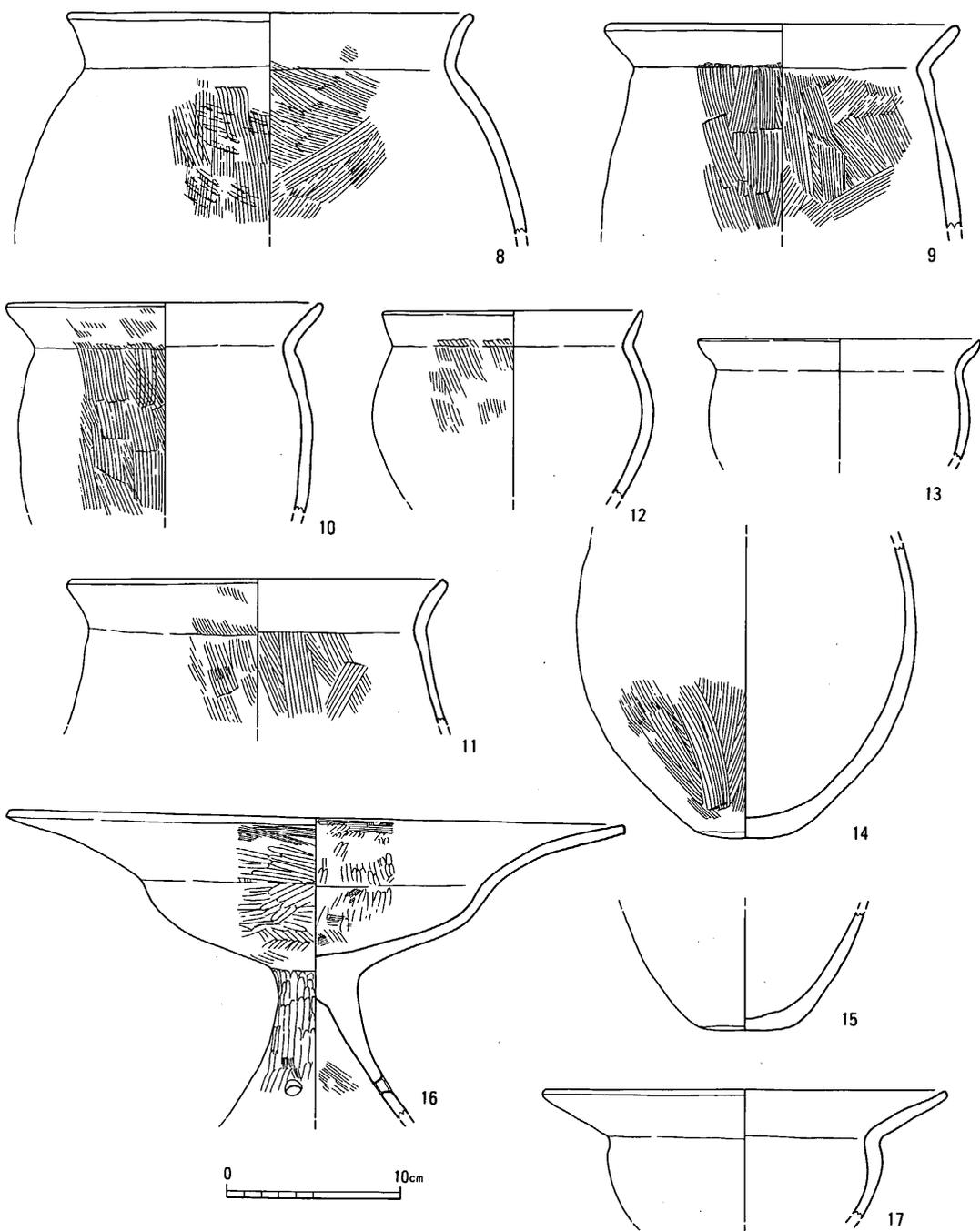
遺物（第39～42図 第72図1・9）第39～42図1は頸部に刻み目突帯文を有する壺で、内外面ともにハケ目が明瞭に残る。ただし、突帯文の部分については、その貼り付けに際してナデ消されている。2は復原口径約14cm、復原器高約29cmの甕。摩滅が著しいが、外面胴部上半部にタタキがわずかに残る。3はほぼ完形近くまで復原できる甕で、口径17.2cm、器高24.8cmを測る。内外面ともにハケ目が全面を覆い尽くす。底部は小さくて丸く、これだけでは立たない。4～13まではいずれも反転実測したもので、復原口径は4が22cm、5が23cm、6が26cm、7が24cm、8が23cm、9が20cm、10が18cm、11が22cm、12が15cm、13が16cmをそれぞれ測る。器面調整はいずれも内外面ともにハケが施される。8については幾分胴部が張るが、その他については口径と最大腹径にそれほど差がない。14・15は甕の底部であろうが、いずれも底部が小さくて丸く、完形の場合は何らかの支えなしに立つことは難しいと考えられる。16の高坏の復原口径は約40cmで、内外面ともにハケの後に丁寧な研磨が施される。脚部には3方向の円形透孔が穿たれ、内面の調整はハケだけである。17は口径23.2cmで、果たして脚が付いて高坏になるのか、それともこのまま丸い底部になるのか判然としない。18・19は突起の付く支脚で、18の底径は11.0cm、器高10.2cm。19の底径は10.0cm、器高9.3cm。いずれも摩滅により器面調整は窺えないが、下部は加熱により赤褐色に変色している。20～23の器台の器面調整はいずれも基本的に



第 38 図 66・68号竪穴住居跡 (1/60) および66号焼成部土層断面実測図 (1/30)



第 39 图 66号竖穴住居跡出土土器実測図.1 (1/4)



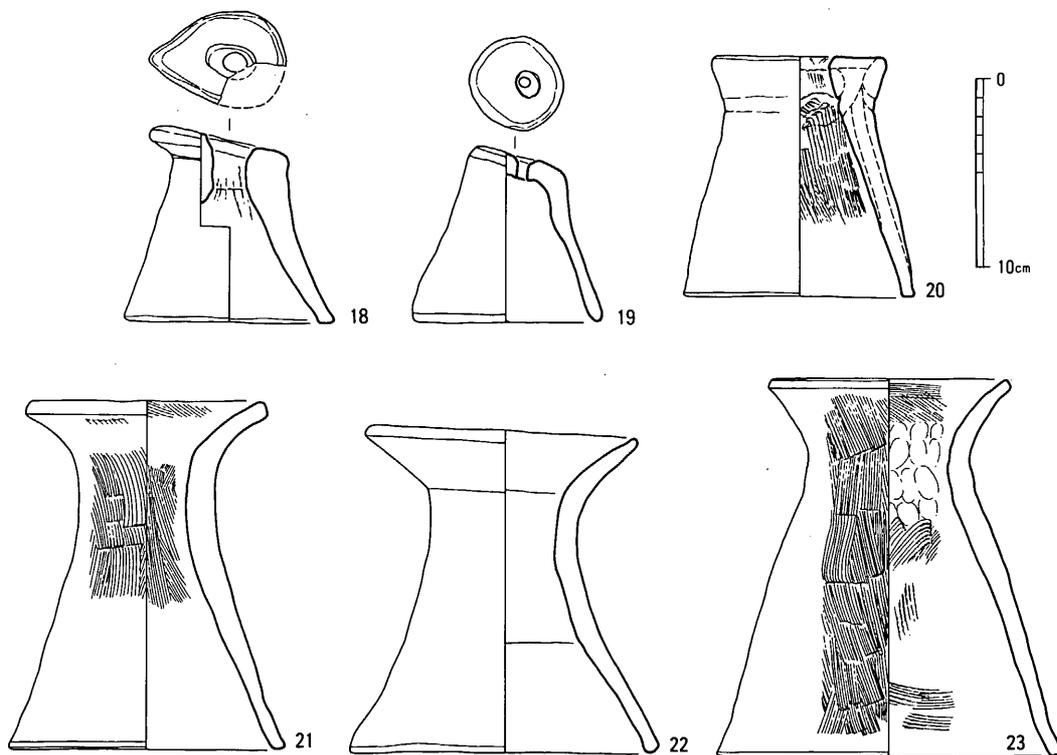
第 40 图 66号竖穴住居跡出土土器実測図.2 (1/4)

はハケで、底部付近は加熱により赤褐色に変色している。20の復原口径は約9cm、復原底径は約12cm、器高12.6cm。21の復原口径は約13cm、底径は14.5cm、器高18.3cm。22はほぼ完形近くまで残り、口径14.2cm、底径16.2cm、器高17.2cm。23の復原口径は約13cm、復原底径は約18cm、器高20.2cm。24～30はボウル状の小形鉢で、器面調整は基本的には内外面ともハケ。底部は丸く不安定なため、擦れた摩滅の痕跡が多くの場合観察される。24は復原口径約18cm、器高7.1cm。25は口径17.7cm、器高8.9cm。26は復原口径約18cm。27は口径22.2cm、復原器高約14cm。28は復原口径約18cm、器高11.0cm。29は復原口径約20cm、器高10.3cm。30は復原口径約24cm。第72図1は素環頭太刀の身の部分である。現存長25.1cmで、刃部は幅2.8cm、厚さ3mm。9は鉄製の鋤先で、縦3.0cm、横9.6cm、厚さ3mm。

67号竪穴住居跡 (図版25 第44図)

67号竪穴住居跡は南地区東部に位置し、62・63・66号竪穴住居跡に切られる。その上開壘によってさらに大きく削平されているため、その全容はほとんどわからない。南西隅のみわずかに残るが、現存する規模は4.3×3.5mの三角形になる部分だけである。深さ70cmの2本の支柱穴と55×50×10cmの炉跡がかろうじて検出できたが、これらの位置関係からは判断すれば、この住居跡にはベッドがついていたものと考えられる。

遺物 (第43図) 第43図1は突帯文のつく頸部破片であるが調整は不明。2・3は甕の口縁部で

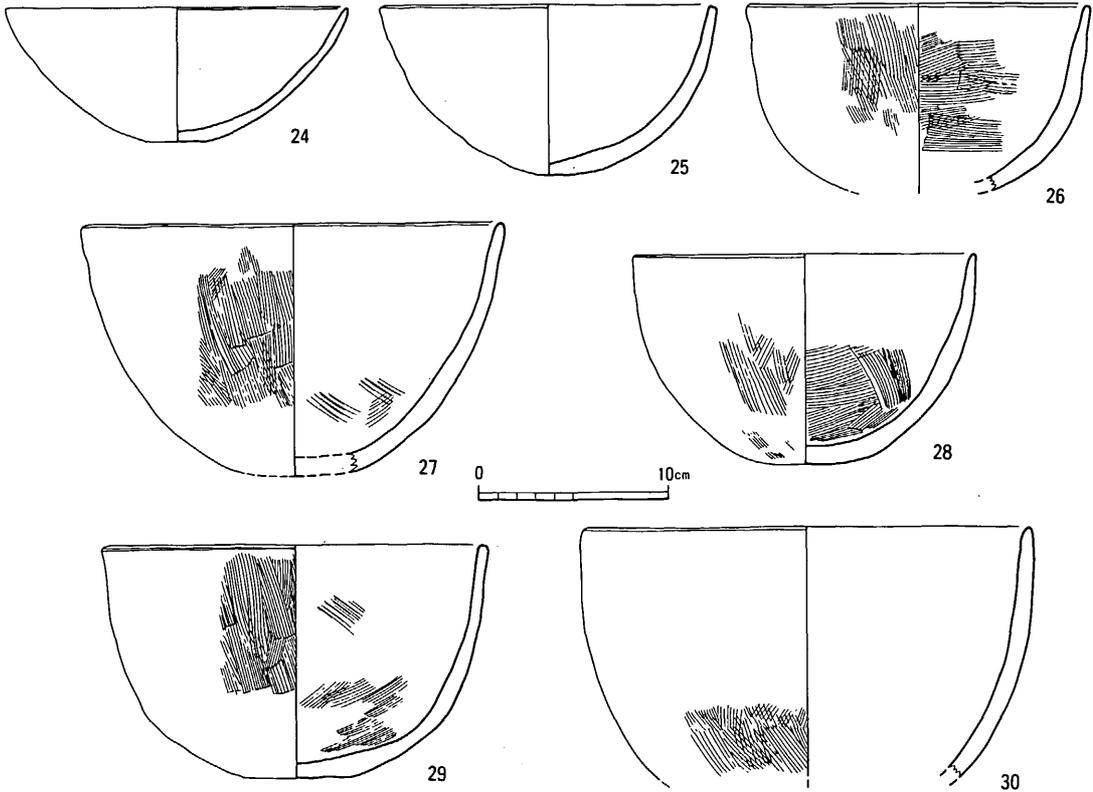


第 41 図 66号竪穴住居跡出土土器実測図.3 (1/4)

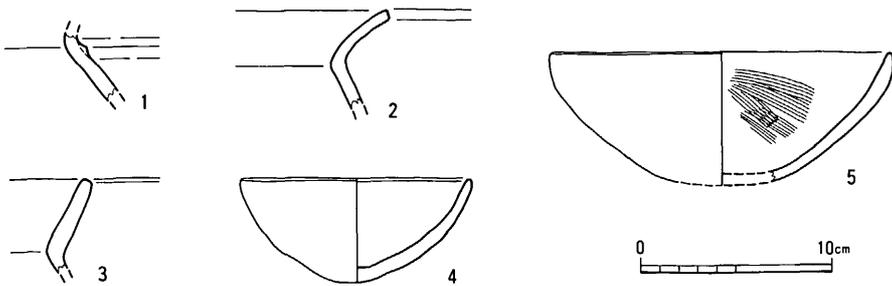
調整はやはり不明。4・5はボウル状の小形鉢で、4は完形で口径12.3cm、器高3.5。5は復原口径約18cm。

68号竖穴住居跡（図版24 第38図）

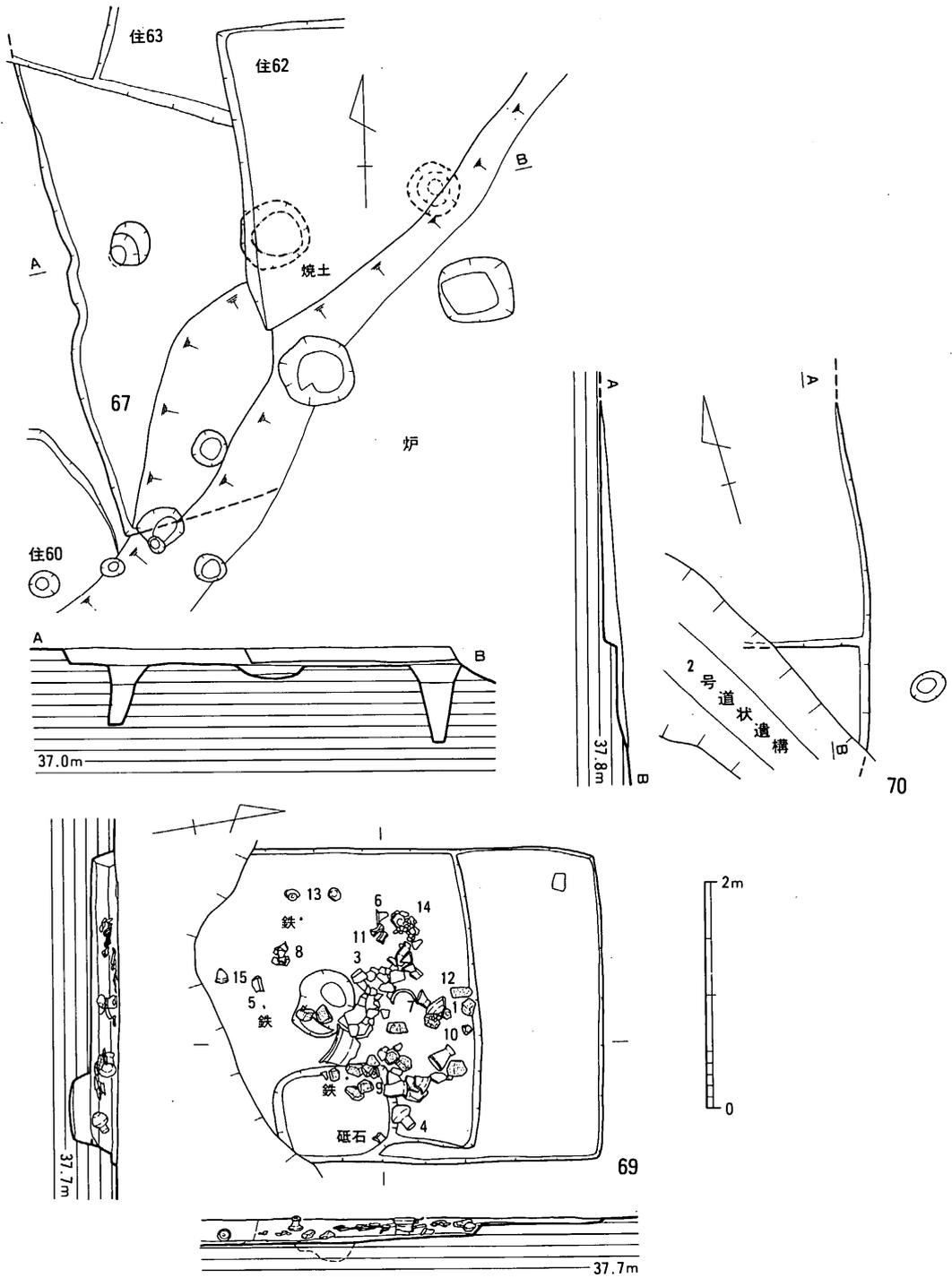
68号竖穴住居跡は南地区のほぼ中央部で、66号竖穴住居跡や古墳時代の11号土壇に大きく切られる。短軸方向は3.6mが測れるが、長軸方向になるであろう部分は1.5mしか現存しない。



第 42 図 66号竖穴住居跡出土土器実測図.4 (1/4)



第 43 図 67号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/4)



第 44 图 67·69·70号竖穴住居跡实测图 (1/60)

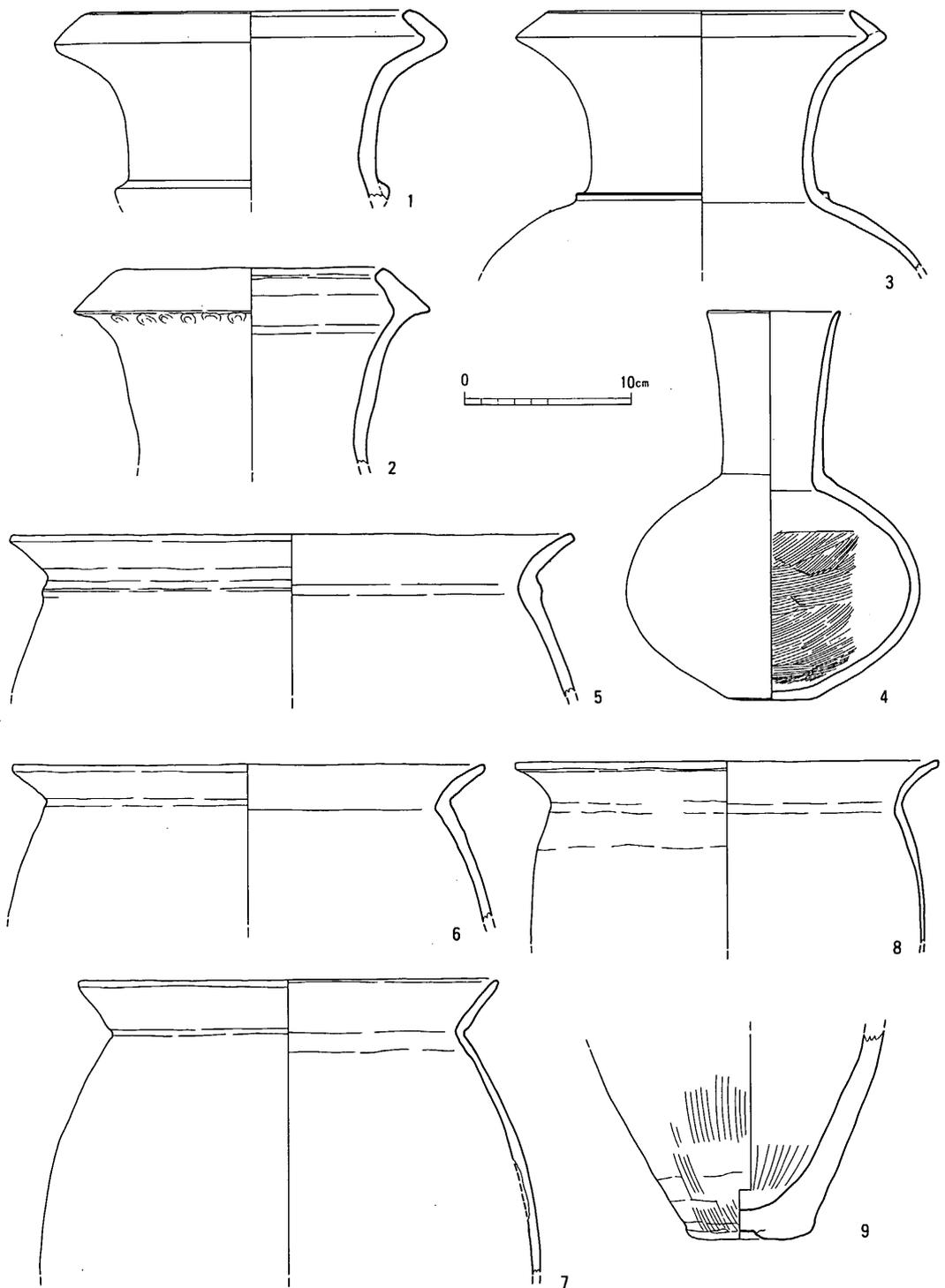
主柱穴・炉跡・屋内土壌・ベッド等は全く確認できていない。遺物も少なく小破片の弥生土器ばかりであったが、翡翠の玉(?)を1点だけ図示した。

遺物(第73図13)不純物が多く白色の筋が走る粗悪な翡翠。明確な加工痕は観察されないが、表面はある程度丸く仕上げられている。大きさは16×15×9mmの楕円形。

69号竪穴住居跡(図版26 第44図)

69号竪穴住居跡は南地区の西部に位置し、古墳時代の11号土壌に全体の1/3ほどが切られて残らない。短軸方向の長さは2.8m、長軸方向については現存するだけで3.6mを測る長方形のプランで、本遺跡においては最も小規模の住居跡である。11号土壌に切られていることもあって、当初は正確なプランを把握することができず、12号土壌として遺物の取り上げを行っていた。しかし、北壁に幅1.1mのベッドを確認して初めて竪穴住居跡としての認識に至り、69号竪穴住居跡として遺物の取り上げを変更した。遺物は完形になるものも含めてかなり量的に纏まって出土したが、これらのほとんどは床面に貼りついた状態ではなく、10cmほど浮いた状態で埋土中より出土した。したがって、これらは生活に伴うものではなく、住居廃絶後に遺棄(投棄)されたものと考えられる。住居跡中央部からは60×50×20cmの炉跡が検出されたが、かなりの精査にもかかわらず主柱穴は1つも検出できなかった。東壁には100×85×20cmで隅丸方形の屋内土壌が付設され、第70図6の砥石や第72図4の鉄鏝が出土した。ベッドは地山の削り出しによるが、東壁に沿ってL字状に幅20cmの細さで屋内土壌まで伸びる。

遺物(第45・46図 第70図6 第72図4 第73図8)第45図1~3は壺の口縁部から胴部上半部にかけての破片で、復原口径は順に19cm、16cm、18cm。摩滅により器面調整はいずれも不明。1と3の頸部と胴部の境には突帯文が貼り付けられるが、胴部まで残っていれば2にもおそらく突帯文が付いているであろう。4はほぼ完形になる長頸壺で、胴部は比較的強く張り、頸部は直線的に立ち上がって口縁部はわずかに開く。口径7.8cm、最大腹径17.2cm、器高23.4cm、底径5.3cmをそれぞれ測る。外面全部および内面の頸部については、摩滅により調整不明。胴部の内面についてはハケ目が観察されるが、頸部近くにある接合痕で突然切れる。おそらく成形時において胴部全体が完成してからハケを施したのではなく、粘土紐を積み上げていく過程で何度かに分けてハケを施した痕跡と考えられる。5~8は甕の胴部上半部で、復原口径は順に33cm、28cm、25cm、25cmである。摩滅により器面調整が窺えるものはない。5の頸部の盛り上がりは突帯文等の粘土紐の貼り付けによるものではなく、ハケ目工具痕や粗いナデによって生じたものである。9は甕の胴下半部で器面調整として内外面にハケが施され、外面には煤の付着が観察される。10~12は器台で、10・12の裾部には加熱によって赤褐色に変色する。10はほぼ完形で、口径12.7cm、裾径16.8cm、器高20.4cmを測る。摩滅により器面調整は窺えないが、内面の最も窄まった部分には大きな接合痕としぼり痕が観察される。11は復原口径約12cm。12の復原裾径は15cmで、外面にはハケ目が残る。13はほぼ完形に残る小形の器台で、口径9.3cm、

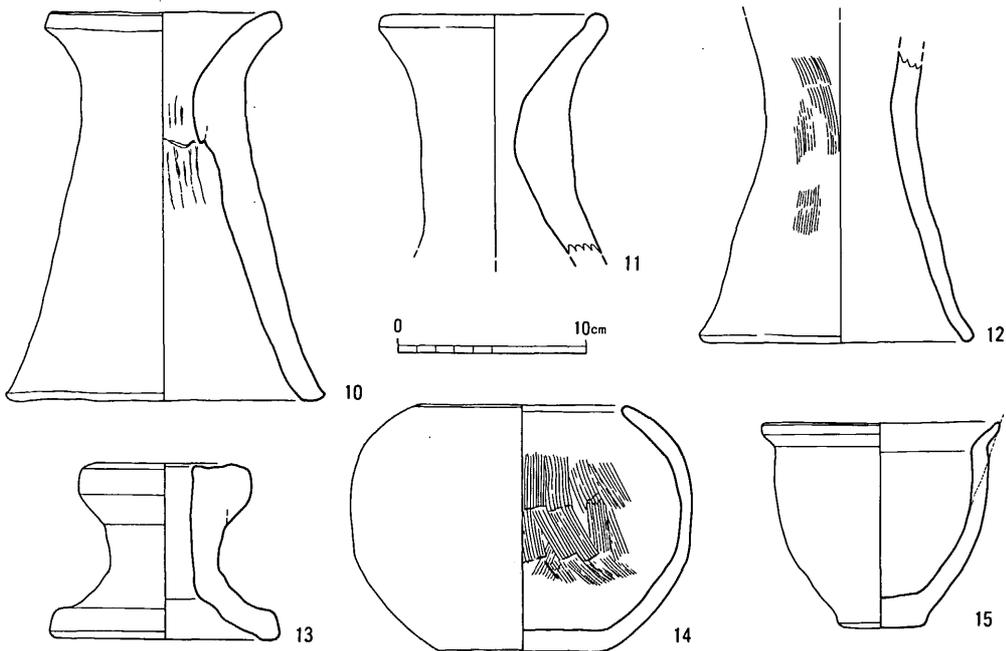


第 45 图 69号竖穴住居跡出土土器実測図.1 (1/4)

裾径12.2cm、器高9.3cmを測り、加熱を受けた痕跡はない。14はほぼ完形の鉢で、口径11.2cm、器高12.9cm。外面は丁寧なナデ、内面の胴部にはハケが施される。15はミニチュアの甕で、口径12.3cm、器高10.9cm。摩滅により器面調整は不明。第70図6は砂岩製の砥石で、幅7.8cm、現存長9.3cm。表面と裏面と右側面の3面が砥石として使用されている。第72図4は先端と基部が欠損する鉄鏃で、現存長3.6cm、幅9mm、厚さ2mm。第73図8は3×2mmの紫色のガラス玉。

70号竪穴住居跡（図版25 第44図）

70号竪穴住居跡は南地区でもその北端に位置し、古墳時代の2号道状遺構と市道（林田城山線）の傾斜に切られて、その全容はほとんどわからない。現存する形態は3.2×1.5mの三角形で、南側にわずかに地山削り出しのベッドが検出された。遺物は弥生土器片がわずかに出土しただけで、炉跡や支柱穴は確認できなかった。この住居跡は一見、市道（林田城山線）の建設に伴う斜面の掘削により削平されているように見えるが、古墳時代の2号道状遺構の傾斜具合等を観察する限りにおいては、この斜面が最近の掘削によるものではないことがわかる。すなわち、この住居跡の掘削は古墳時代以前に行なわれたことを物語っていると考えられるのである。



第 46 図 69号竪穴住居跡出土土器実測図.2 (1/4)

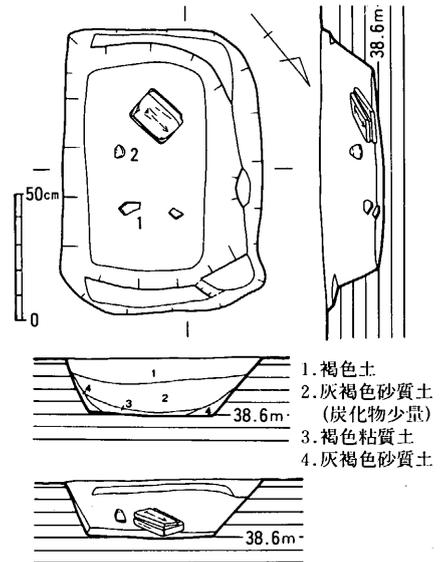
(2)土壌

弥生時代に属する土壌は10・13・14・15号の4基である。いずれも形態が異なり、性格が判

然としない。12号土壙は調査の過程で竪穴住居跡と判明したので、69号竪穴住居跡として改変し欠番とした。

10号土壙 (図版27・28 第47図)

10号土壙は北地区中央部の西端に位置し、南東4mには弥生時代の50号竪穴住居跡がある。この土壙は古墳時代の土壙を掘りあげた時点ではじめてその存在が確認されたもので、広形銅戈の連結式鋳型が出土した。112×78×22cmの長方形の土壙で、北東壁と南西壁には幅10cm弱の狭いテラスがつく。鋳型をはじめ他の遺物は土層断面図第2層の炭化物を少量含む灰褐色砂質土から出土したが、本土壙の埋土は人為的に埋められたものではなく、自然堆積によることが土層断面の検討から推測される。鋳型は背面を上、鋳型面を下に、北側にわずかに傾くようにして出土した。出土状況から判断する限りでは、特に祭祀的な様相を呈しているわけではないし、また遺棄(投棄)したとする積極的な根拠にも乏しい。出土した弥生土器は小破片の甕や手捏ね土器等で年代の決め手に欠けるが、本遺跡からは弥生時代後期後半代の遺物しか出土しておらず、したがって本土壙もその時期に比定される可能性が高い。



第47図 10号土壙実測図 (1/30)

遺物(第49図1・2 第48図) 出土遺物は少なく土器は2点だけ図示できた。第49図1は甕の口縁部で、内外面とも器面調整としてナデが施される。2は復原口径約7cm、器高4.1cmの手捏ね土器で、指頭圧痕が明瞭に残る。第48図は広形銅戈の連結式鋳型である。縦17.6cm、横15.4cm、厚さは下側面で6.7cm、上側面で4.9cmを測る。上側面右端(右側面上端)と下側面右端(右側面下端)、および鋳型面の内がわずかに欠損するだけで、ほぼ本来の形状を保っている。新欠は裏面にある2つのキズだけである。重量は2.6kg。

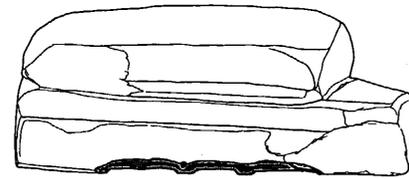
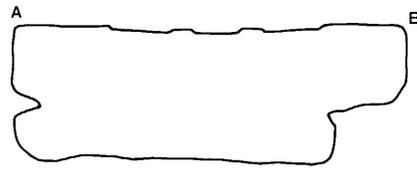
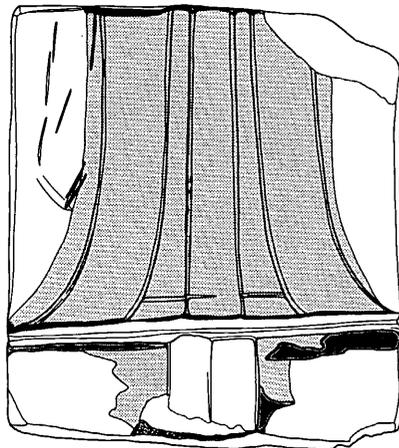
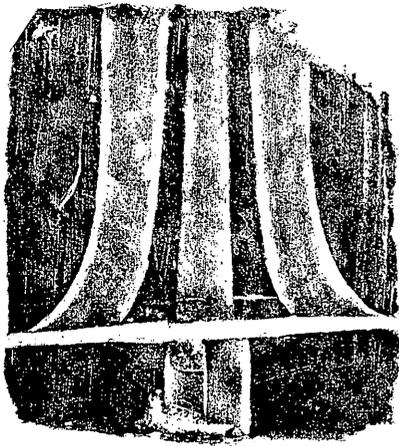
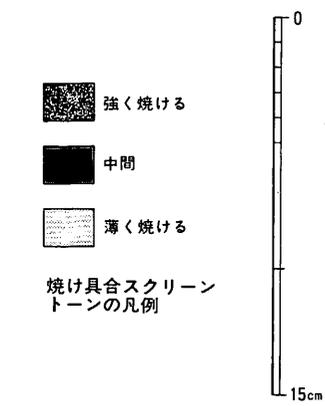
鋳型面には縦方向の線条痕が無数に走る。その1本1本の溝(線条痕)を詳細に観察すれば、いずれも溝の幅が一定しておらず、また底の部分も凹凸が著しい。細かい研磨を施した痕跡とは考え難く、あるいはこの鋳型面を平らにする際に最初に行なった粗い調整の痕跡かもしれない。胡は両側面に貫通しており、また左側面の弧が貫通する部分については相当に黒く焼けており、従来言われているように胡がガス抜きになったと考えられる。しかし、何故か断面V字状で深さ11mmの胡についてはその上端部だけしか焼けておらず、胡の中に湯が流れ込んだ痕跡はない。孔に相当する部分については、割り付け線と考えられる沈線文が2つの孔にわたって引かれる。孔自体は鋳型面の平坦面と同じ高さに盛り上がっており、鋳出された銅戈の現物には十分に孔ができるものと考えられる。樋には綾杉文等の線刻はなく、内の中央部には沈線文

が1本だけ引かれるが、これは胡とは貫通しているが下側面までは通じていない。内の文様はこの沈線文だけで、斜位の細かい研磨痕は窺えるものの綾杉文等はない。内もほとんど焼けていない。湯は鑄型面の平坦部にも流れた出たことが黒く焼けた痕跡からわかるが、胡の右下部では他に比べて焼け具合が強い。鑄型面の左上部にはわずかに線刻の痕跡が窺えるが、先端を下に向けた銅戈の身の部分のように見える。

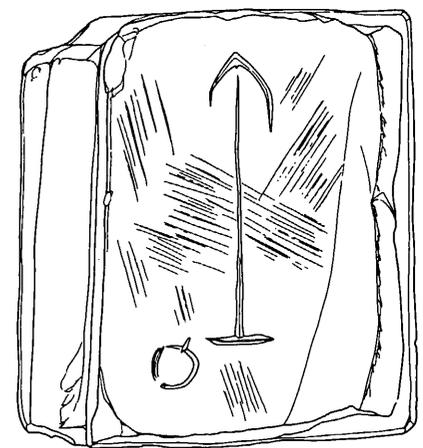
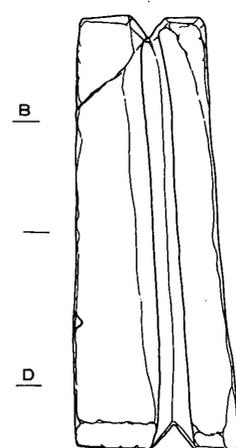
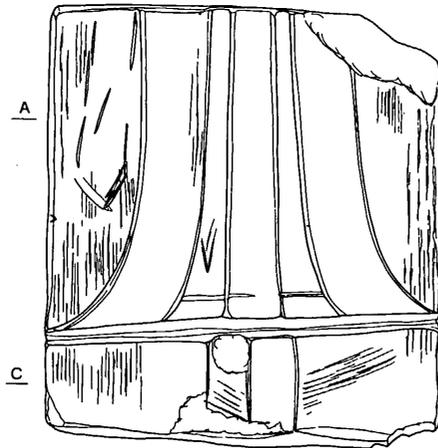
4つの側面にはすべて深さ10mm、幅15mmのほぼ同じ断面V字状の溝が巡る。一般的にこれらの側面の溝は、右側面と左側面と下側面の3本については連結式の場合に木杵等で鑄型を固定するため、上側面の溝については連結すべきもう1つの鑄型との間に楔（木の棒）を据えるため、とそれぞれに言われている。確かに、これら4面の溝は1枚の水平面を作るように同じレベルで彫られており、木杵や楔等と組み合わさるとしても不都合ではなさそうである。上側面には湯がこぼれてかなり黒く焼けた部分がある。下側面の焼け具合も内に接した弧状になる幅3mmほどの部分は特に著しい。この強く焼けた部分に沿うように幅7mmの弧状になる部分は全く焼けておらず、その周辺については薄くではあるが不定形に焼けた痕跡が窺える。これらの状況から、湯口はこの下側面で、漏斗の設置された部分だけが弧状に焼けない状態になっていると推定される。単体の広形銅戈の鑄型の湯口はすべて上側面にあり、下側面にそれを有する本例は特異な感じもする。しかし、すべて連結式である広形銅矛の鑄型は中子との関係から湯口はすべて下側面にあり、広形銅戈には中子はないものの、連結式の場合下側面を湯口にするという点を考慮するなら、本例の存在に違和感はないであろう。

裏面は砥石として使用されたのか、様々な方向の削痕や研磨痕が残る。中央部には中軸線に沿って矢印状の長さ11.6cmの線刻が施される。中央付近は砥石としての使用が最も著しく窪んでおり、線刻もここで途切れてしまうが、本来この線刻は銅戈をモチーフとして描かれていたものと考えられる。つまり、縦方向の長い1本の線は樋になり、その他に先端部と関の部分は残るが、援に相当する部分は消失してしまった図柄としてこれを理解することができる。この線刻の左下には、径1.6cm程度の円に長さ6mmの短い線が付けられた図柄の線刻が存在する。想像を逞しくすれば、有鉤銅釧をモチーフにしたものであろうか。裏面の左側、すなわち鑄型面から見た場合の右側面には段がつく。この側面の溝はこの段の根本に彫られているが、裏面の左端部にも溝を彫った痕跡の面が残っている。また、この根本の溝は上側面の溝を切って彫られており、これらの状況を考慮すれば、右側面の溝が欠損した後も鑄型として使用するために溝を彫り直したものと考えられる。ただし、彫り直した後も実際に鑄型として使用されたかどうかは、これらの状況から判断することはできない。

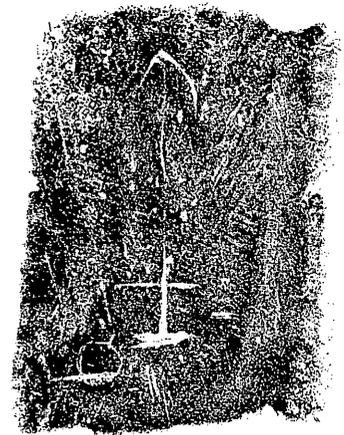
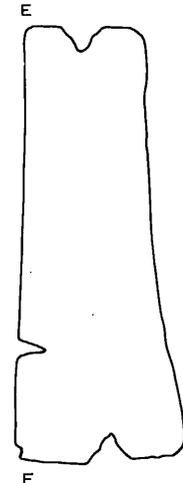
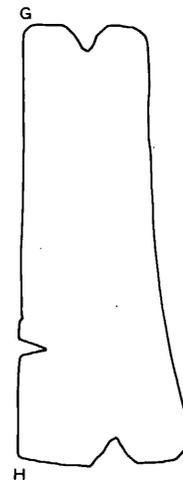
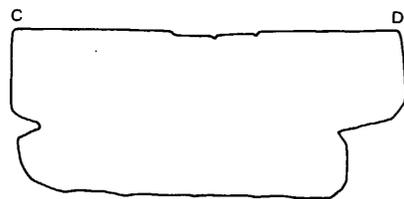
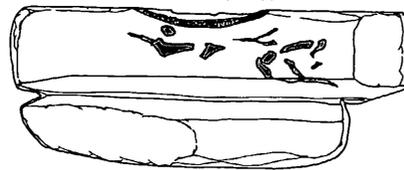
鑄型の断面形態は、横断面はかなり角張った蒲鉾形、縦断面は先端方向へ向けて細くなる台形を呈する。合印は存在しないが、従来より言われているように、両側面の胡の貫通部分や樋や内がそのまま合印と同じ機能を十分に果たしたと考えられる。石材はいわゆる長石石英斑岩である。



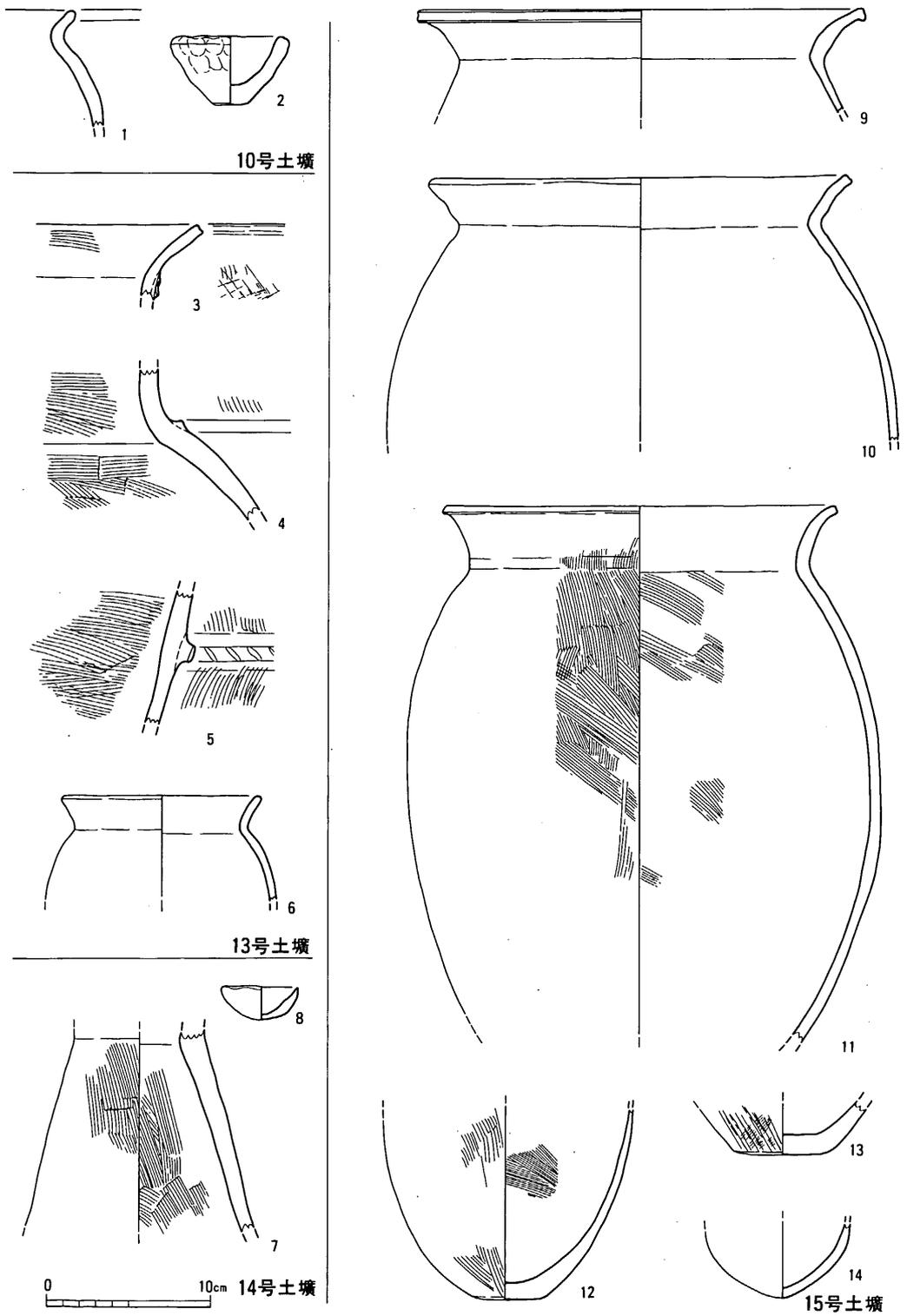
E G



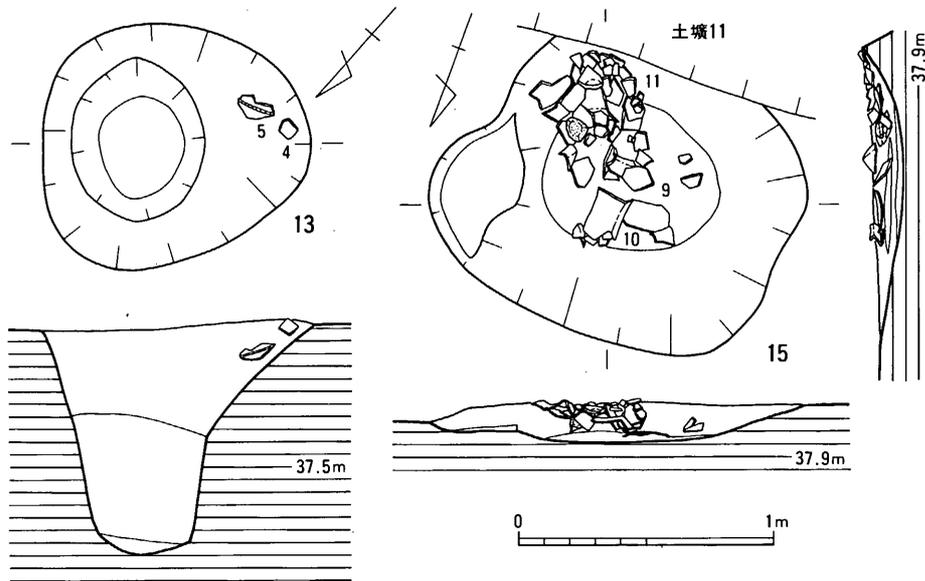
F H



第 48 図 10号土壌出土鋳型実測図 (1/3)



第 49 图 10·13~15号土城出土土器实测图 (1/4)



第 50 図 13・15号土壌実測図 (1/30)

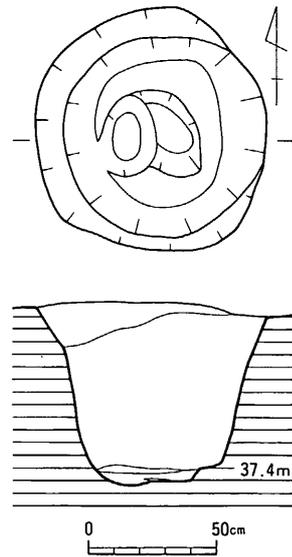
13号土壌 (図版28 第50図)

13号土壌は南地区東端に位置し、南5mに65号竪穴住居跡、南西6mに61号竪穴住居跡がある。規模は105×95×90cmで、緩やかに広がりながら立ち上がる壁は検出面より35cmほど下位のところで稜を作り、南西側に大きく開いていく。埋土は主に暗褐色土で、遺物のほとんどは大きく広がったところでも特に上部から出土した。

遺物 (第49図3~6) 第49図3は突帯文上に格子目状に刻みを入れた甕の口縁部で、内面にはハケ目が残る。4は頸部と胴部の境に突帯文を有した壺で、内外面ともにハケが施される。5には刻み目を付けた突帯文が貼り付き、内外面にハケが施される。6は復原口径約12cmの甕で、摩滅により器面調整は不明。

14号土壌 (図版29 第51図)

14号土壌は南地区中央部の66号竪穴住居跡の北西隅のベッドの上で検出された。66号竪穴住居跡の項目でも説明したが、本土壌はこの住居跡のベッドを検出した時点でその存在が確認された。したがって、66号住居跡に伴う可能性が高いが、住居跡のベッド上にこのような土壌が伴う類例は見受けられず、また切り合い関係にあったものを調査時点では見落としていること



第 51 図 14号土壌実測図 (1/30)

も比定できないので、取りあえず14号土壌として66号住居跡とは別個に扱うことにした。規模は95×90×70cmで、所々に小さなテラスを作る。遺物は少なく、第72図10の鉄器は埋土中位より出土した。

遺物（第49図7・8 第72図10）第49図7は器台で内外面にハケ目が施される。8は完形の手捏ね土器で口径5.2cm、器高2.3cm。第72図10は鎌であろうか。残存長6.3cm、幅2.4cm、厚さ2mm。

15号土壌（図版29 第50図）

15号土壌は南地区中央部で、弥生時代の68号竪穴住居跡の北西30cmに位置し、古墳時代の11号土壌に切られる。145×115×15cmと浅く、その中央部に南方向から投棄されたような状態で、完形にはならないが比較的纏まって土器が出土した。

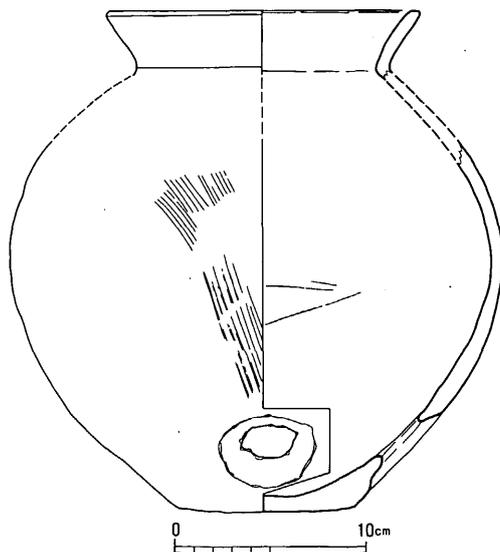
遺物（第49図9～14）9～11は甕で、復原口径は順に27cm、26cm、24cm。全体的に摩滅が著しいが、11については内外面ともにハケ目が観察される。12・13は甕の底部で、内外面ともにハケが施される。14はボウル状の小形の鉢になろうか。摩滅により器面調整は不明。

(3)溝（付図 第52図）

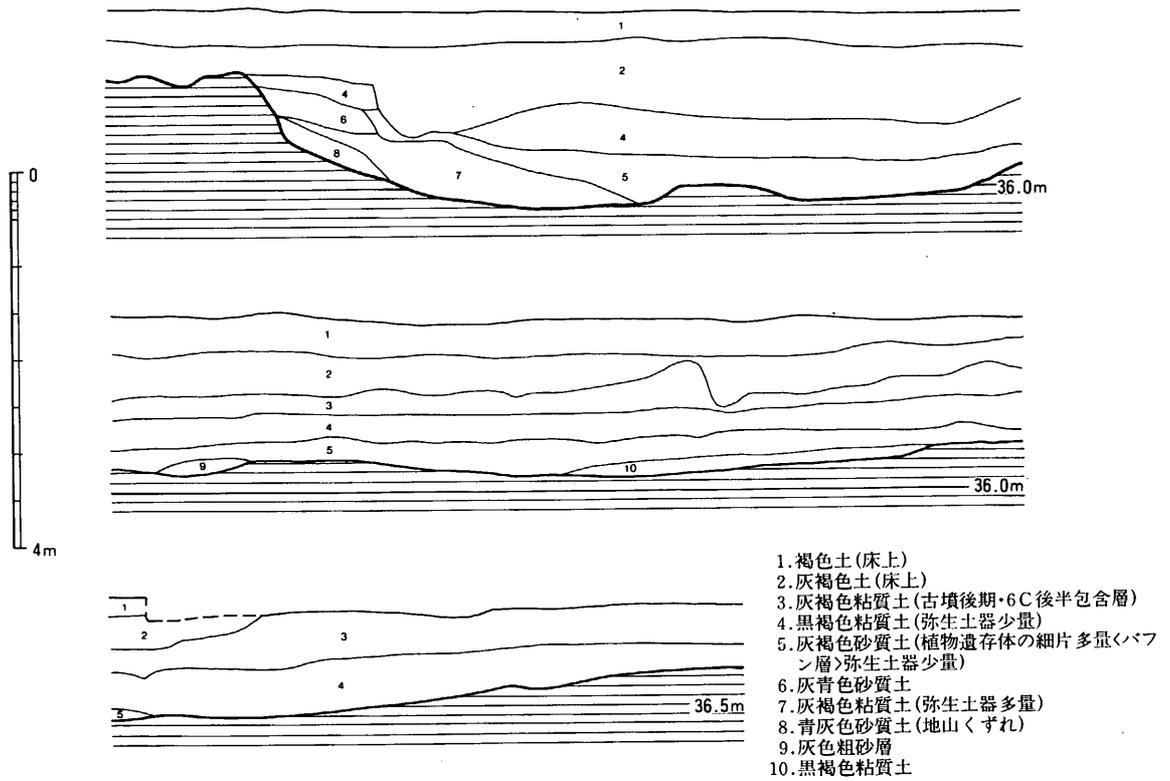
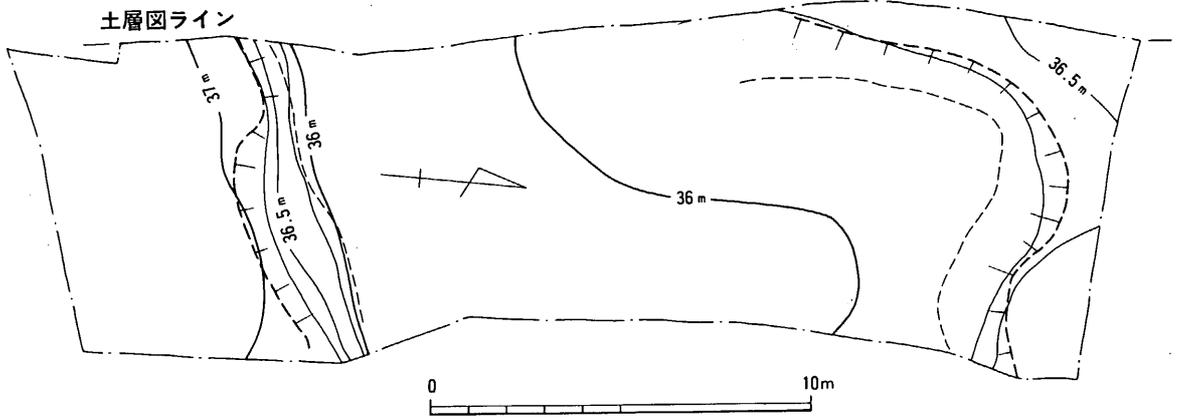
弥生時代に属する溝は北地区の北端部で検出された3号溝だけである。幅30cm、深さ25cmの断面逆台形を呈し、一方は古墳時代の4号竪穴住居跡に切られ、もう一方はそれから2.5mほどで終息する。遺物は少量の弥生土器小片と第52図に図示した甕がある。この甕は復原口径約12cm、復原器高約26cmを測り、胴部が大きく膨らむ。外面にはハケが施され、内面にはやはりハケを施したと考えられる工具痕が残る。底部近くには焼成後による穿孔らしきものがあるが、果たして人為的な孔なのか偶然の孔なのか確定しきれない。

(4)谷地区（図版30・31 第53図）

谷地区は北地区と諸田池の中間に位置し、北地区での遺構検出面から谷地区の底まで約2mの比高差がある。調査に先立って試掘トレンチを入れたところ、全体的に遺物は散在するもの



第52図 3号溝出土土器実測図（1/4）



第 53 図 谷地区平面図 (1/200) および土層断面実測図(1/80)

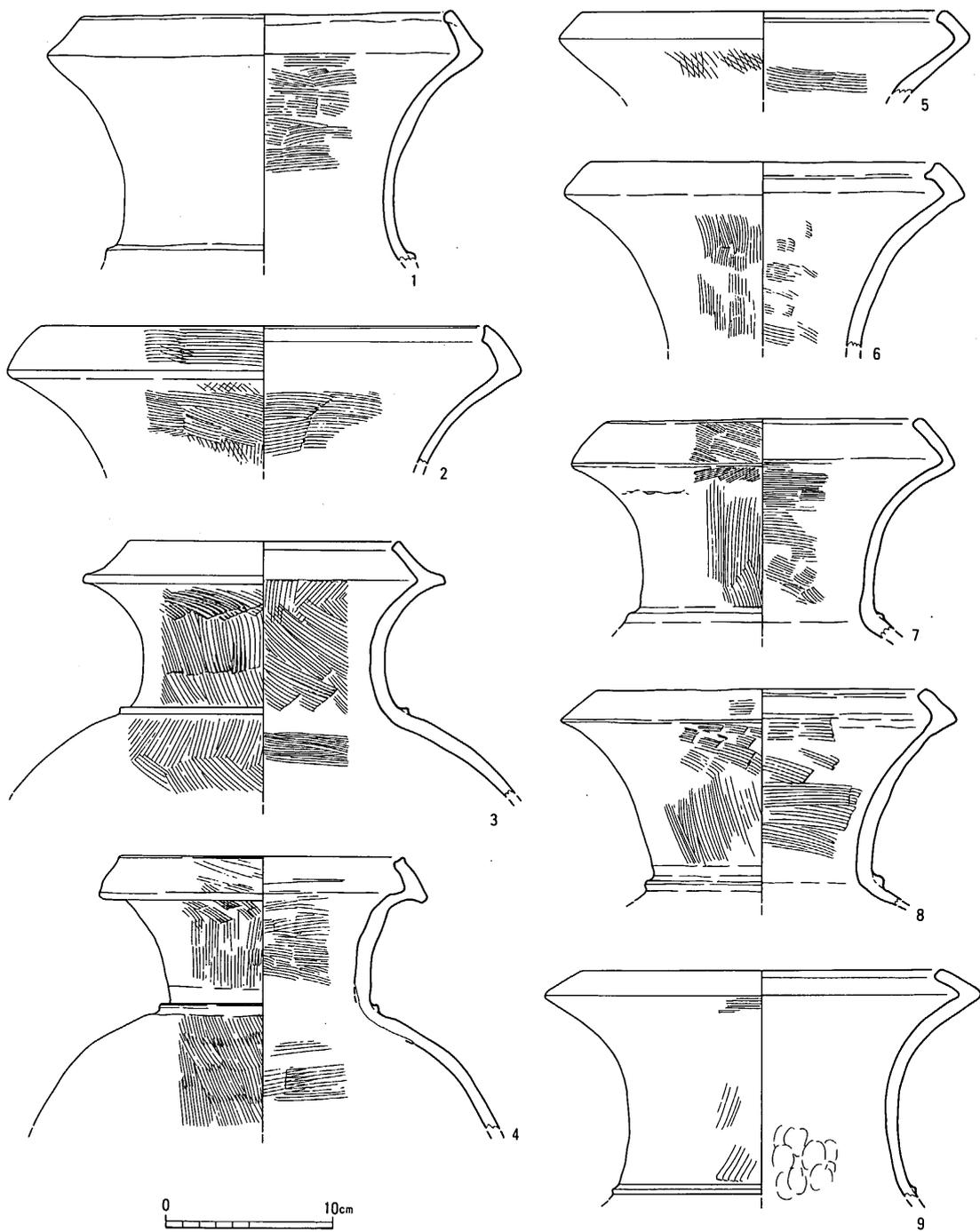
のごく少量で、遺物の集中は谷地区の南西部にのみ見られた。北側に近接する諸田池の水面レベルより低くなったこともあって湧水は著しく作業は困難を極め、また砂質土中心の壁も崩落が相次いだため危険であった。そこで、調査は遺物の集中する南西部を中心に、南北27m、東西10mの範囲に限って行ない、この部分の調査終了後ただちに重機によって谷地区全体を埋めた。

調査以前においてこの地区は水田であったが、もともと谷であったため土地が安定していなかったのか、1.2mの厚さで床土が分厚く入れられている（第53図第1・2層）。その下には、古墳時代後期（6世紀後半）の遺物が少量含まれる第3層灰褐色粘質土が薄く広がる。さらにその下が弥生土器の包含層であるが、遺物の出土は谷地区の肩口にあたる集落に近い部分、それも植物遺存体の細片を多量に含む第5層灰褐色砂質土とその下位にある第7層灰褐色粘質土で、しかも南北2m、東西4mの楕円形の範囲にその大部分が包含されていた。これらには完形品も多く含まれており、集落に近接することや流れ込んだ形跡がないことから、集落側すなわち南側から投棄されたものと考えられる。谷という性格上、木製品の出土も当然予想されたが、第5層に植物遺存体の細片が多く含まれているだけで、木製品はもちろん流木の出土もなかった。遺物は多量でパンケース40箱分が出土したが、土器は完形品も多く108点を図示した。

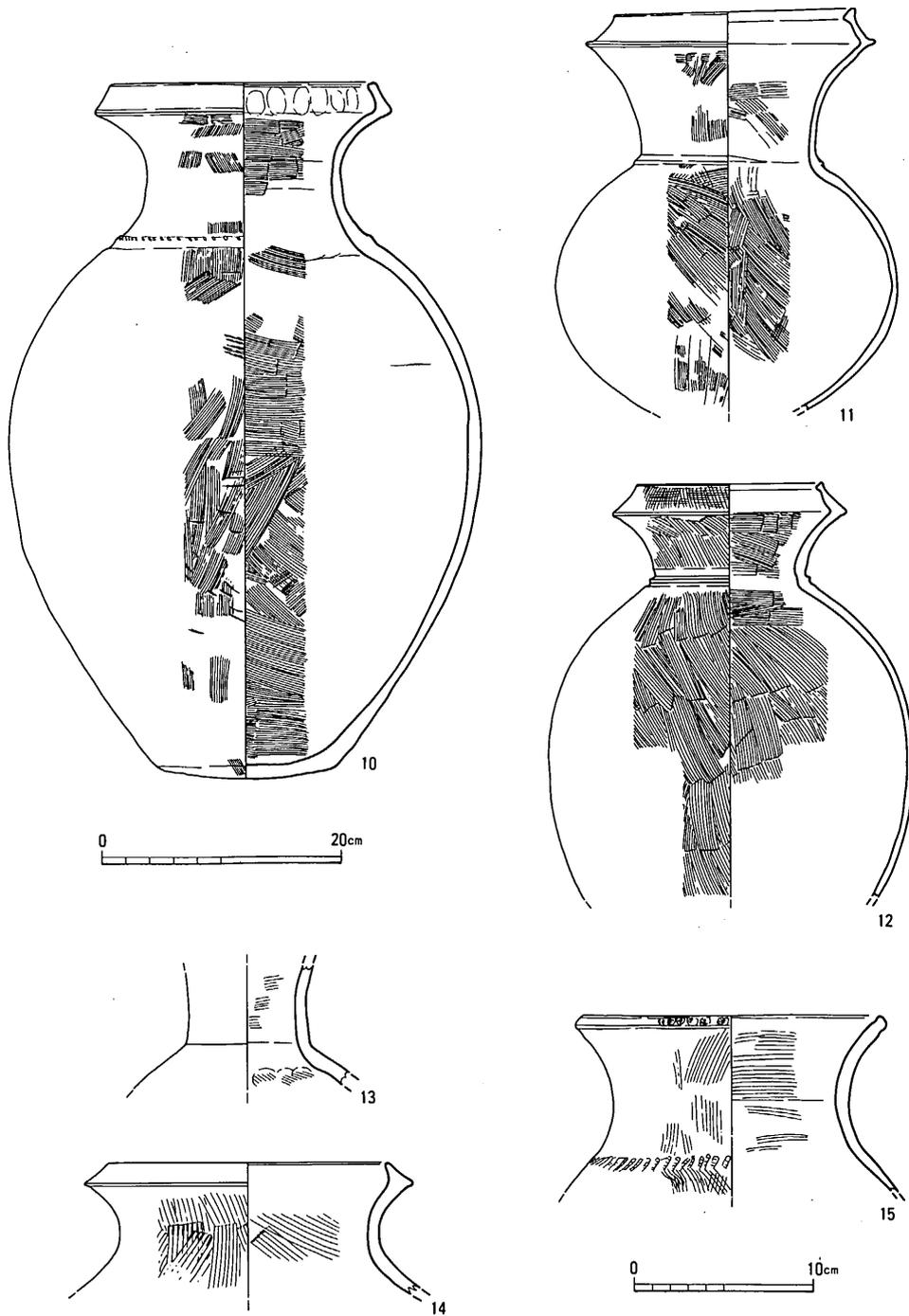
遺物（第54～66図 第70図7・8）弥生土器は108点を図示したが、出土層位は第5層灰褐色砂質土と第7層灰褐色粘質土との2層に分かれる。第5層から出土した土器は6・9・21・30・34・45・66・67・71・74・80・83・90・99・103の15点で、他はすべて第7層からの出土である。

1～13は口縁部が内側に屈折する壺。口縁部形態で分類するなら、屈折部が丸く仕上がる5、屈折部に明瞭な稜のできる1・2・6～10、屈折部が外側へ突出する3・4・11・12の3タイプに分かれる。頸部と胴部の境には突帯文が貼り付けられるが、この境の屈曲が明瞭なものほど大きくてははっきりとした突帯文が付き、屈曲が緩やかなほど突帯文が小さく低くなる。10の突帯文は最も低く刻み目が施されるが、頸部と胴部の境に屈曲はほとんど見られない。口径は20±4cmの範囲におよそ収まり、器面調整は基本的には内外面ともハケで、口縁部と突帯文部分以外にナデが施されることは稀である。10は口径22.4cm、器高58.9cmで、底径は14.3cmと比較的大きいが、丸くて安定は良くない。11の胴部は丸く膨らみ、卵形になるこのタイプの壺にあっては特異な器形である。13は復原頸部径約7cmの長頸壺で、内面にはハケ目が窺える。14は口縁端部を断面三角形状に作る壺で、口径18.2cm。口縁部周辺は丁寧にナデられる。15は口縁部が屈折しない壺。口縁端部と頸部にはハケ工具によって刻みが施されるが、頸部と胴部の境には突帯文は存在しない。

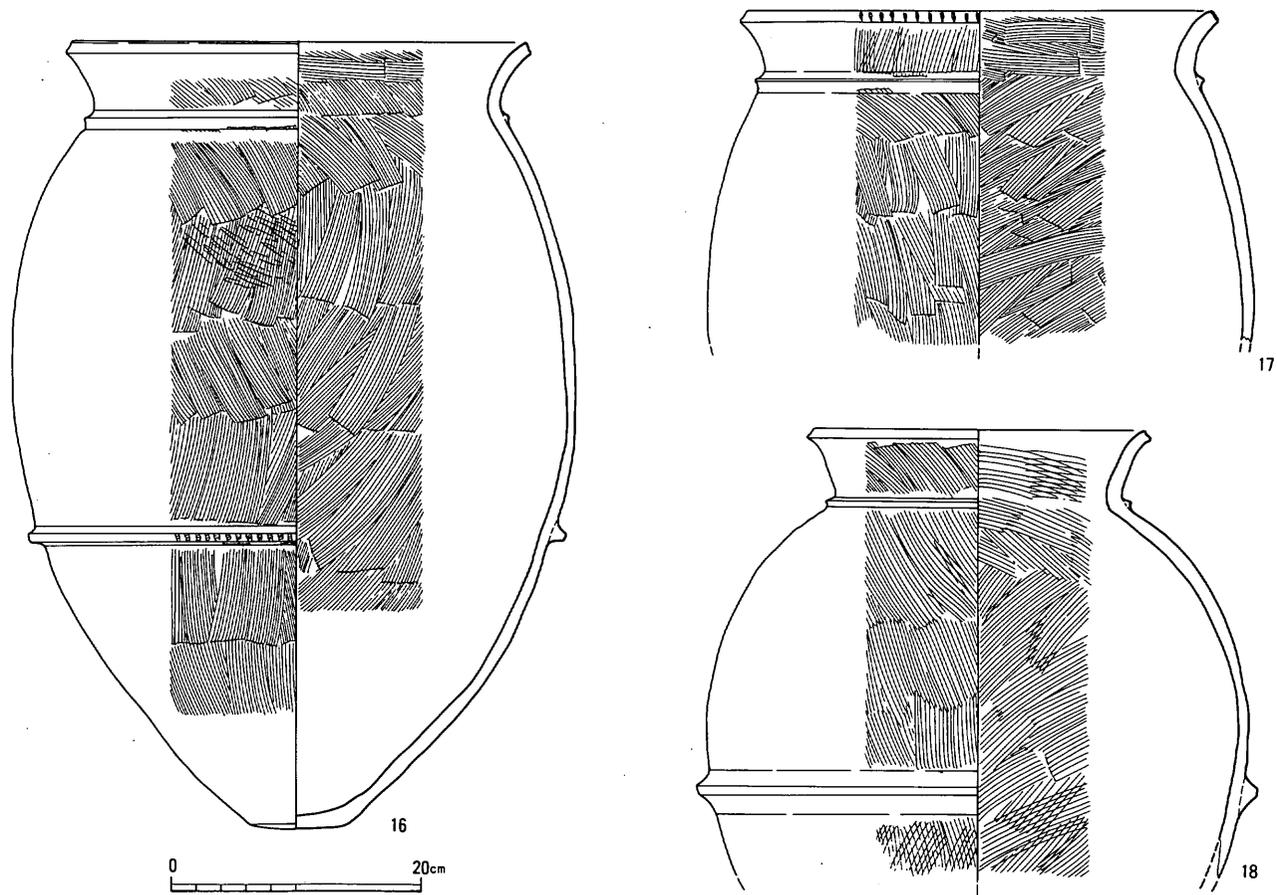
16～25は頸部に突帯文を有する甕であるが、16や18のように胴下半部まで残っている資料については胴部にも突帯文が付けられており、他の胴上半部だけしか遺存しないものも多くの場合、胴部に突帯文が付いていたと考えられる。16～20までのように口径が34～42cmの大きな一群と、21～25までの25cm前後の一群とに分かれるが、その中間に相当する口径30cm程度の甕は



第 54 图 谷地区出土土器实测图.1 (1/4)

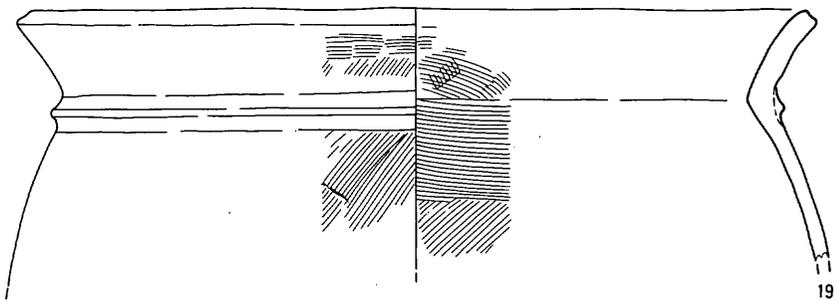


第 55 図 谷地区出土土器実測図.2 (10~12は1/6 13~15は1/4)

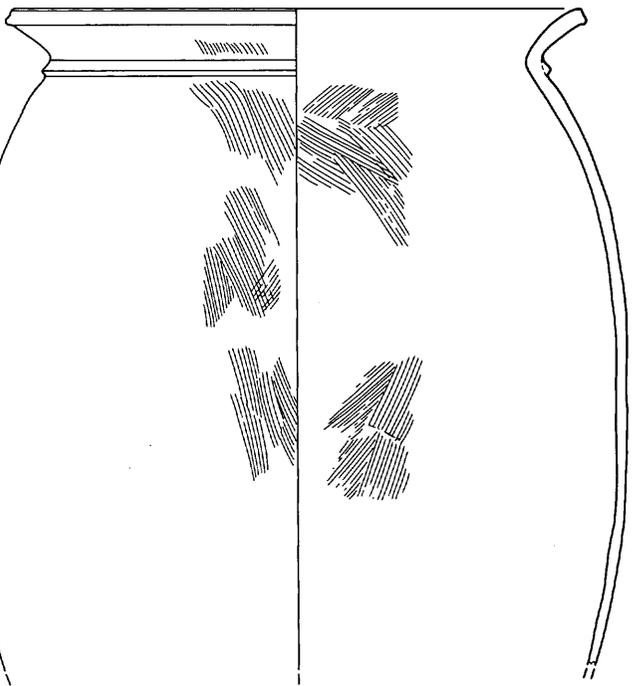


第 56 图 谷地区出土土器实测图.3 (1/6)

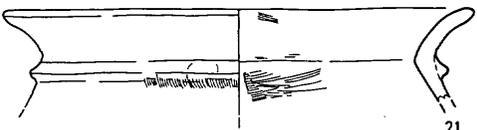
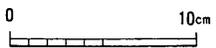
第 57 图 谷地区出土土器实测图. 4 (1/4)



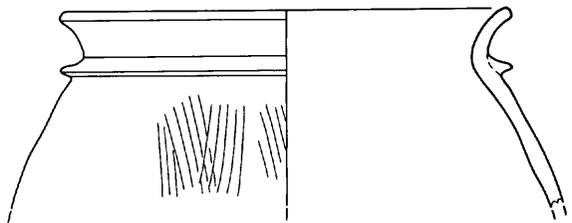
19



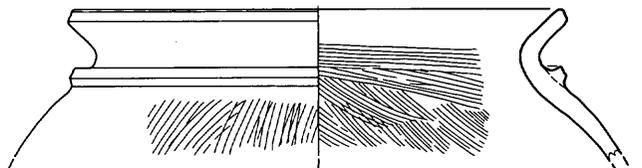
20



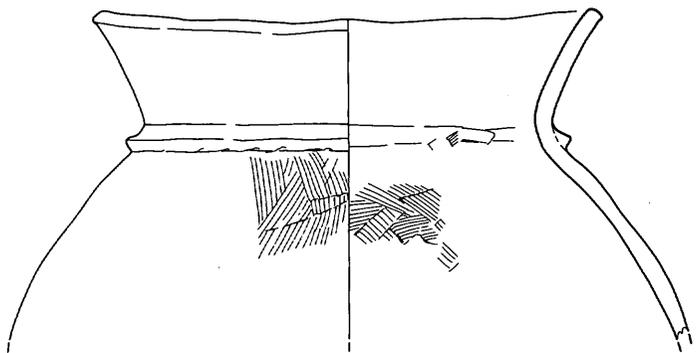
21



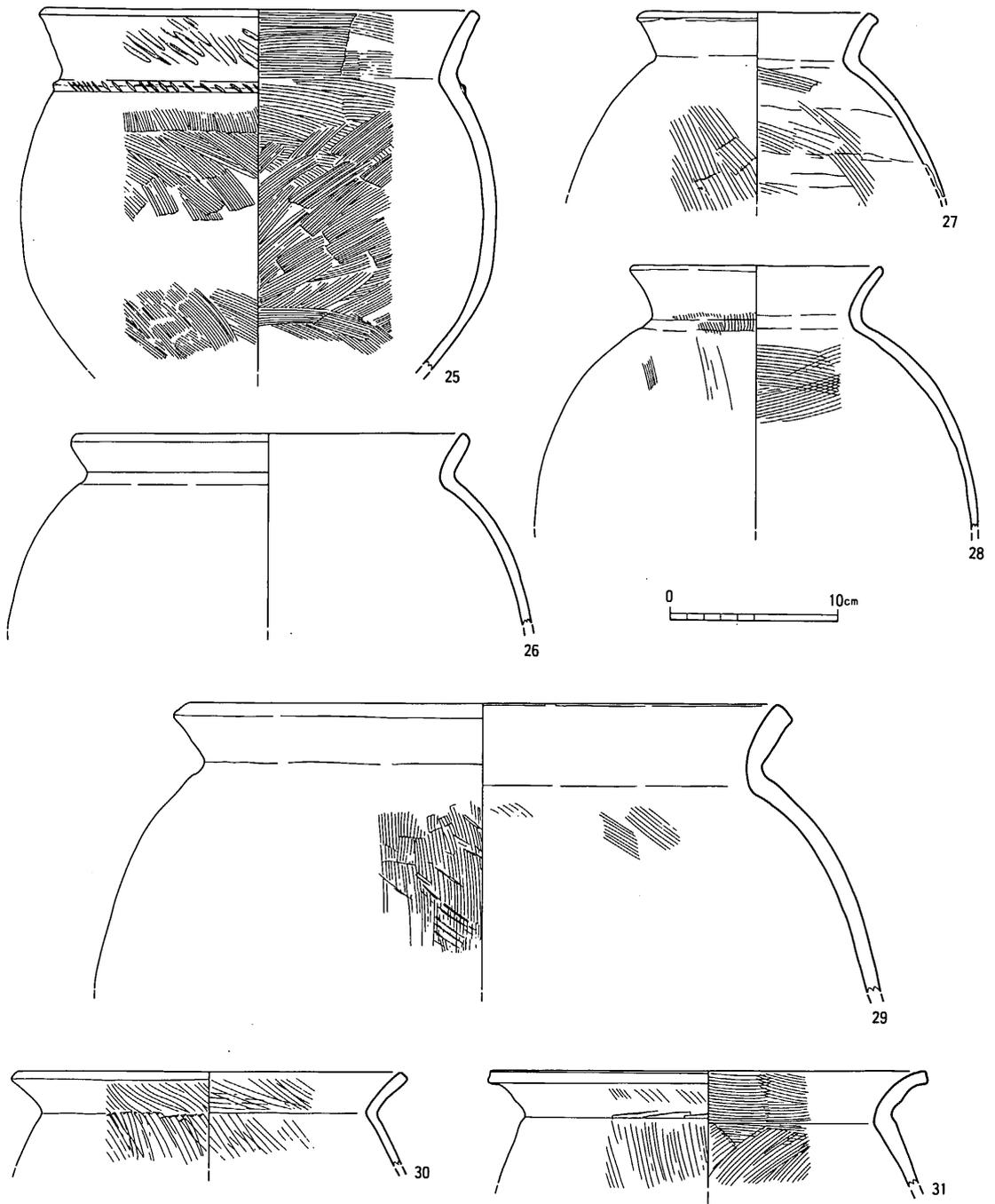
22



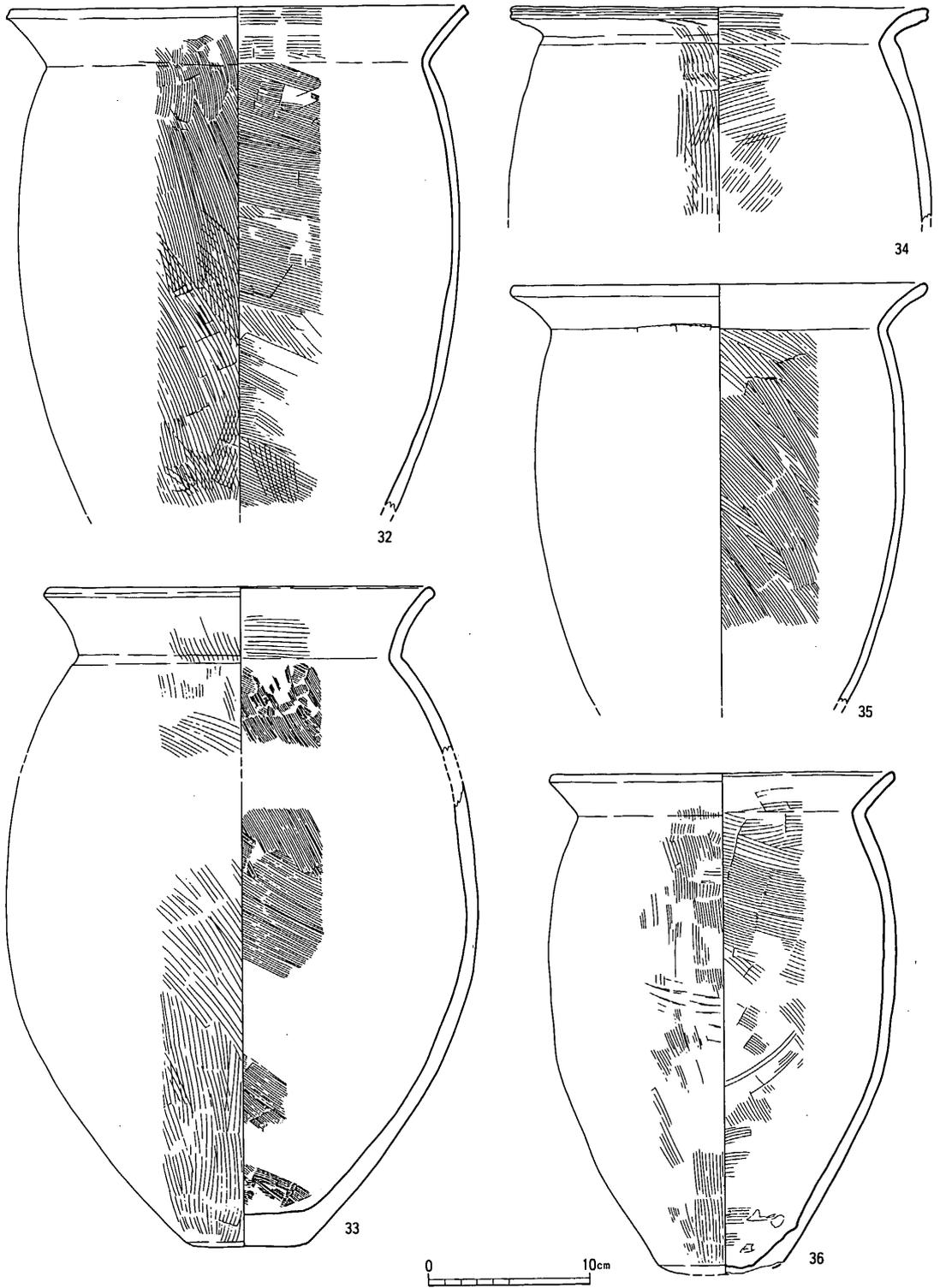
23



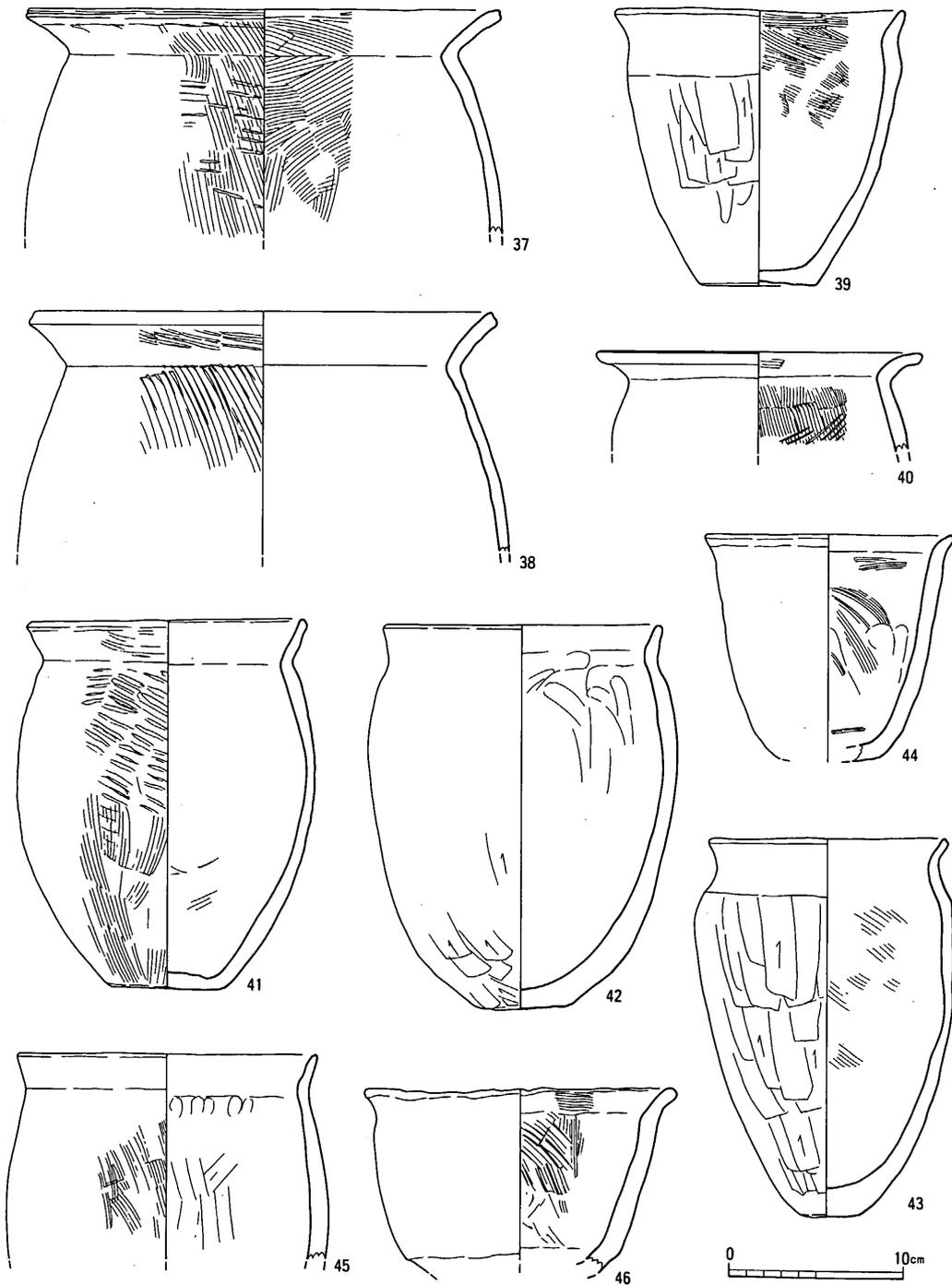
24



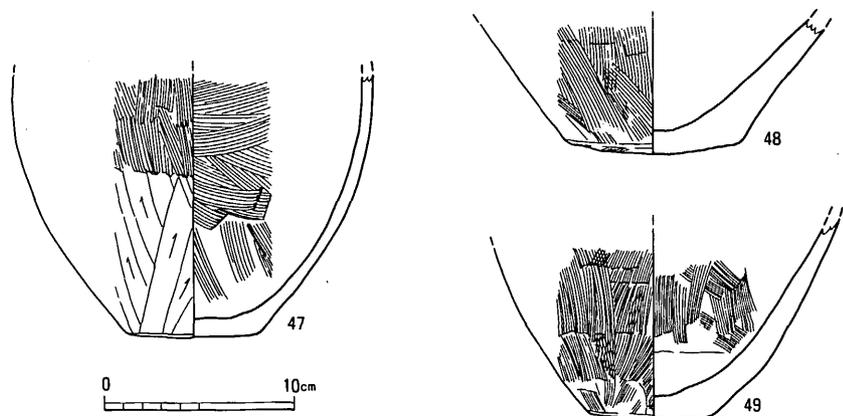
第 58 图 谷地区出土土器实测图.5 (1/4)



第 59 图 谷地区出土土器实测图.6 (1/4)



第 60 图 谷地区出土土器实测图.7 (1/4)



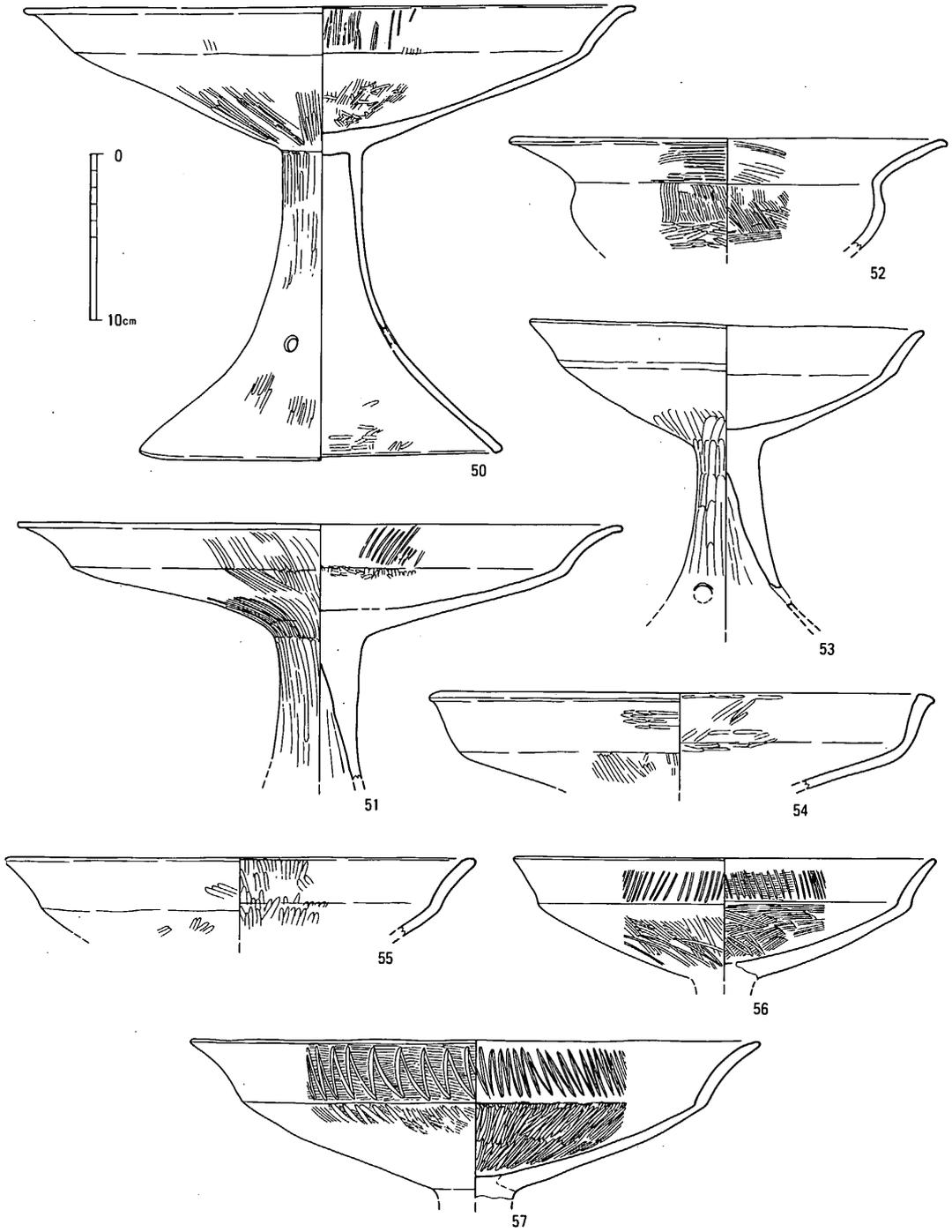
第 61 図 谷地区出土土器実測図.8 (1/4)

見当たらない。器面調整は基本的に内外面ともにハケであるが、16の外表面胴部上半部にはその下のタタキがかすかに残る。18のハケ工具は外面と内面とでは明らかに異なる。16の胴部突帯文上や17の口縁端部には、ハケ工具による刻みが施される。25の口縁部外面にはタタキが残り、突帯文上の刻み目はハケ工具以外の工具によって施される。この一群は外面に煤の付着することが多く、煮炊きに使用された痕跡と考えられる。

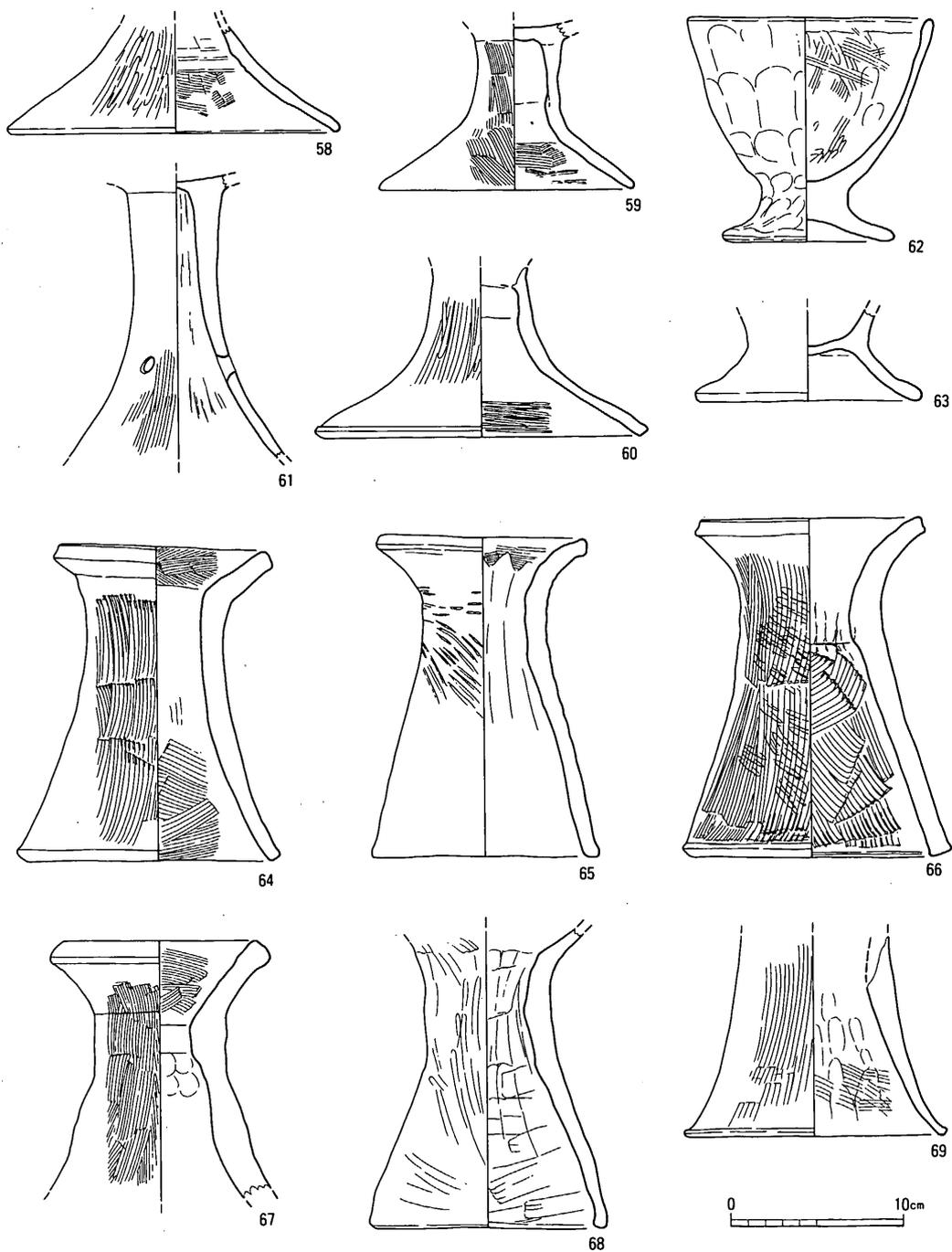
26～29は突帯文をもたない甕であるが、胴部は卵形ではなく丸く膨らむ。25も器形的にはこの一群に近い。口径は14～34cmと幅広い。

30～46は胴部が卵形になる甕で、突帯文をもたない一群。30～38までは口径が 25 ± 2 cmの範囲に、39～46までは口径が 15 ± 2 cmの範囲に収まり、口径20cm程度の甕は見当たらず、かなりの企画性をもってこれらの甕が製作されたと考えられる。器面調整は基本的に内外面ともにハケであるが、37や41の資料からそれ以前にタタキが施されていたことがわかる。41については、胴上半部のタタキがそのまま残りハケが施されていない。ハケ目についても、32・33のように内外面でハケ工具の種類が明らかに異なるものもある。39・42・43の外表面には、一見ケズリのような板状工具による削痕が窺える。42・43の底部は丸くて小さく、完形の場合は支えなしに立つことはできない。この一群の甕にはほとんど煤が付着している。47～49は煤の付着する胴下半部で、内外面ともにハケが施されるが、47の外表面下部には板状工具による削痕である。

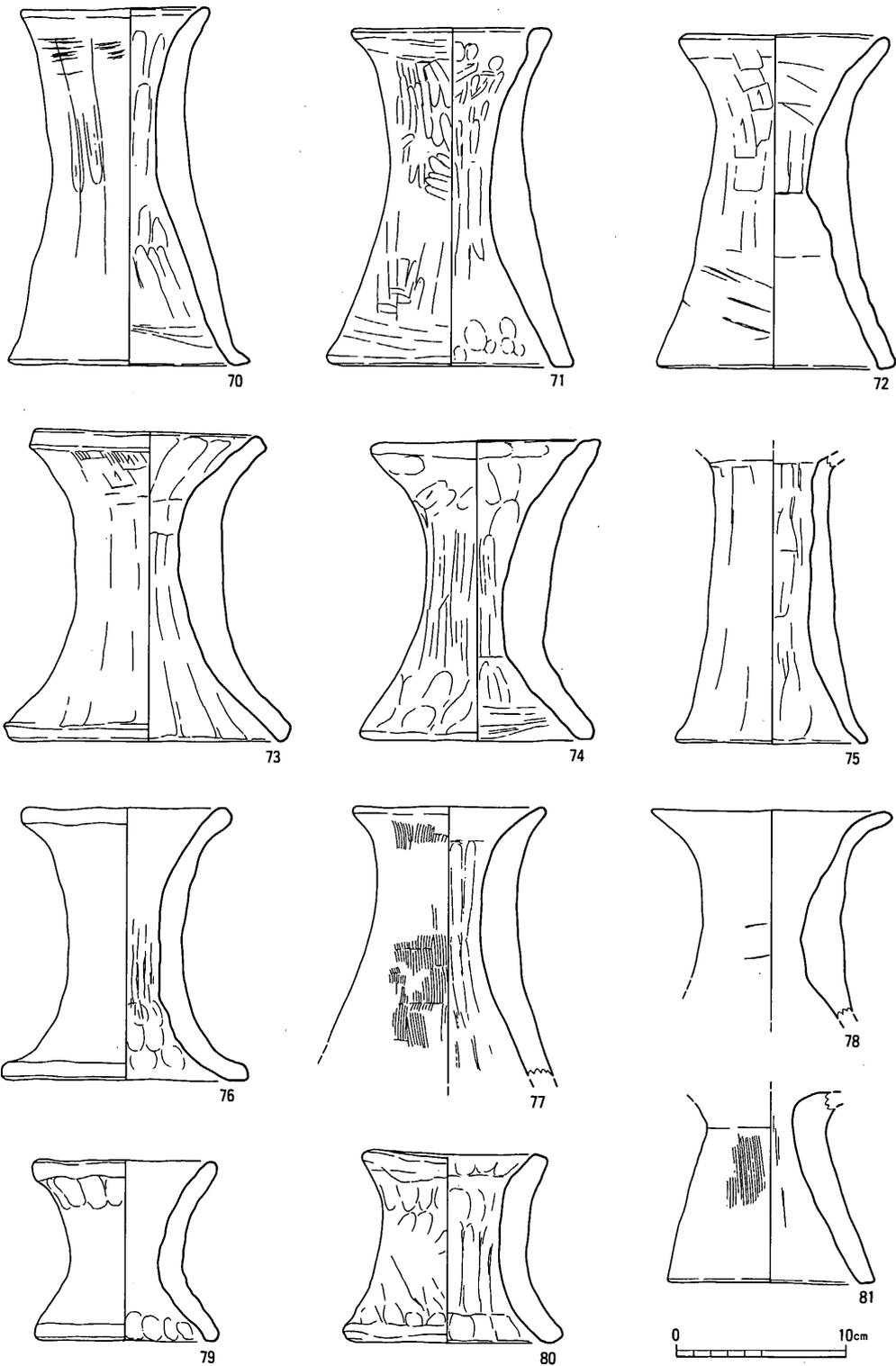
50～61は高坏で、口径は24～36cmと幅がある。坏部の口縁部は明瞭な稜を作って外反し端部は丸く仕上げられるのが一般的であるが、54は緩やかに屈曲して直線的に立ち上がり、端部は面を作るように厚く仕上げられる。器面調整としては丁寧な研磨がほぼ脚部内面を除いてほぼ全面に施されるが、屈曲部等にハケ目が顔を覗かせることもある。56・57の口縁部のように、研磨によって暗文的な効果を表出しているものもある。52についてはハケ目がそのまま残り、器形的にも屈曲部以下が若干張っており、あるいは鉢になるかもしれないが、取りあえず高坏



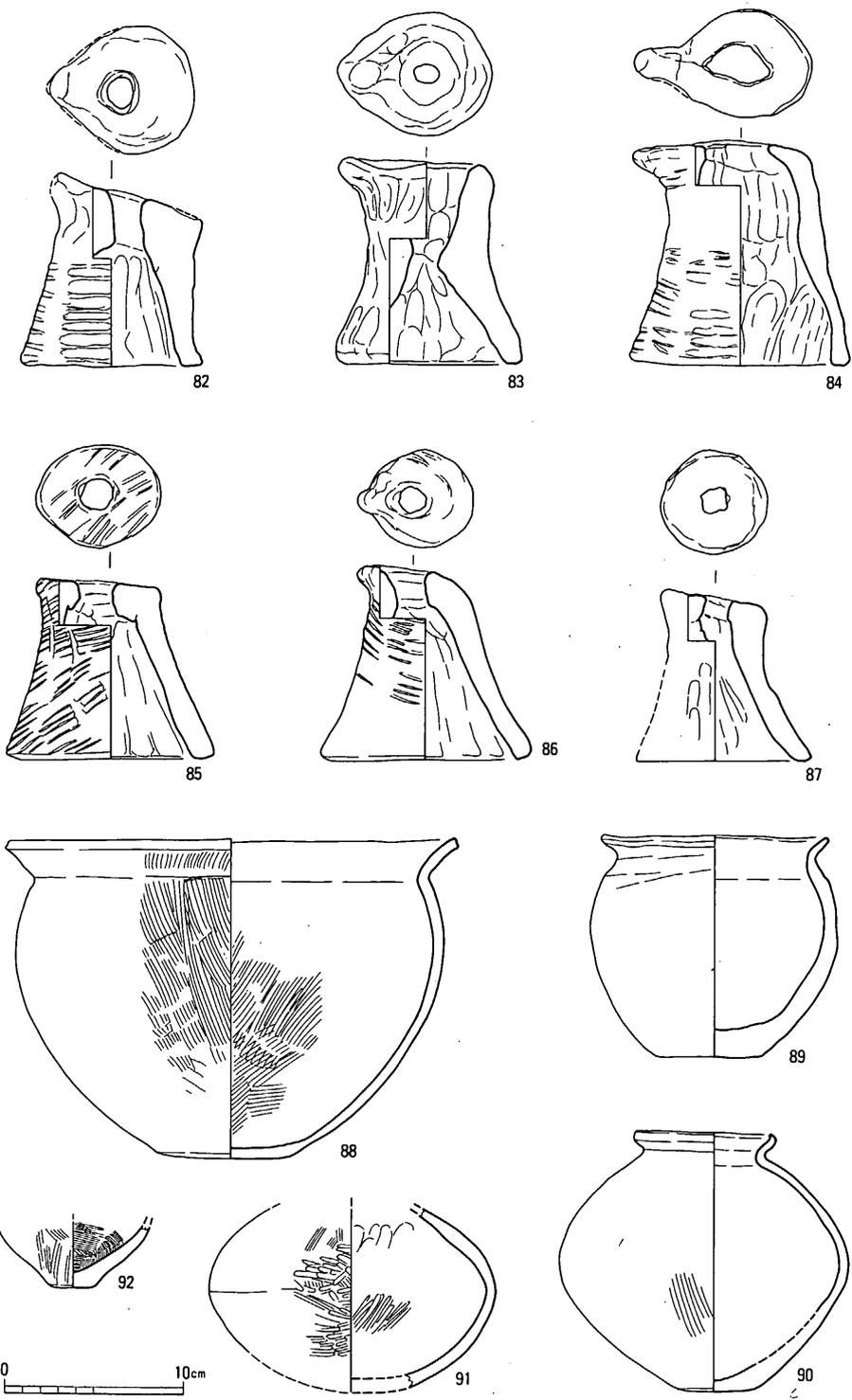
第 62 图 谷地区出土土器实测图.9 (1/4)



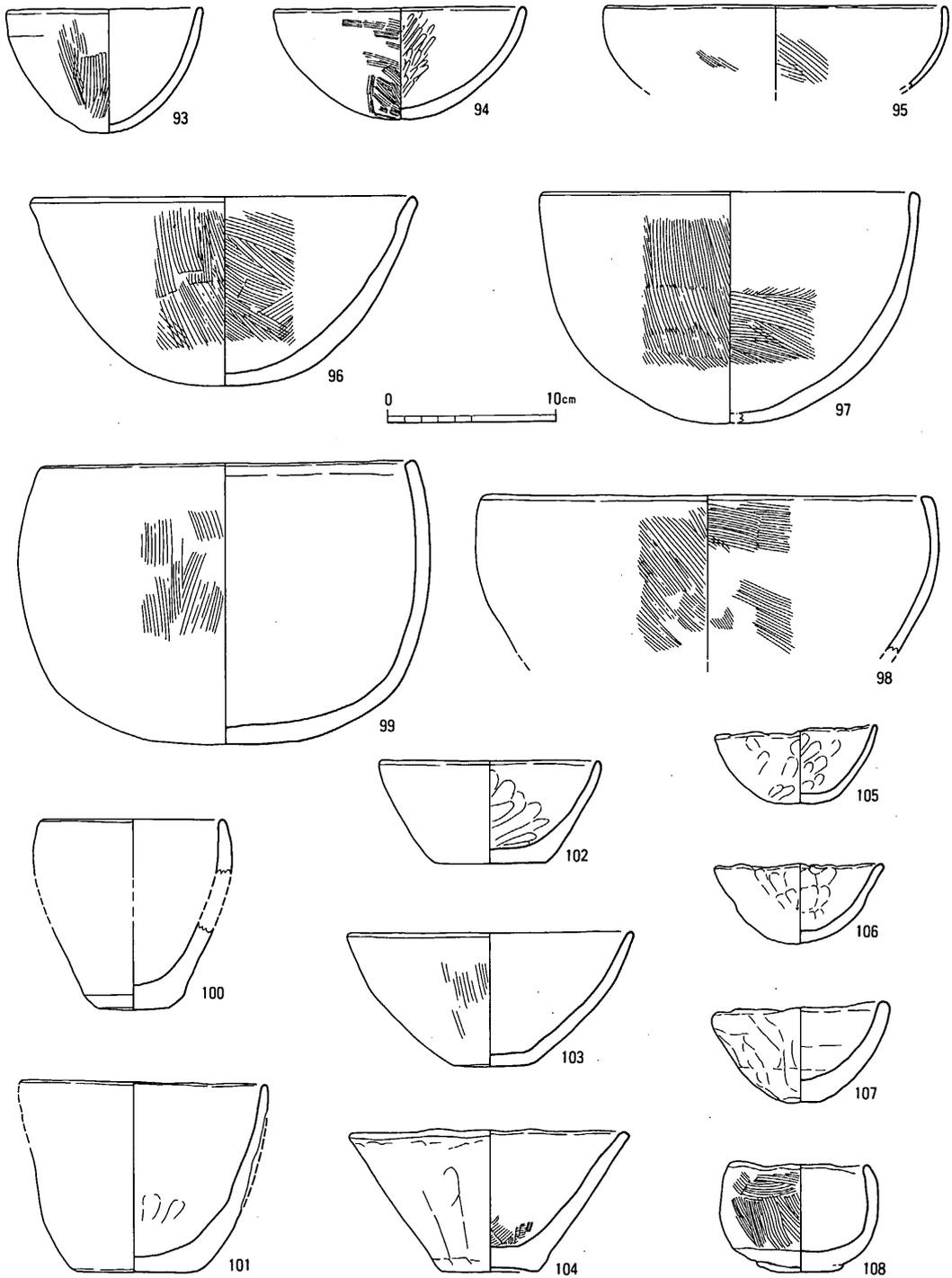
第 63 图 谷地区出土土器实测图.10 (1/4)



第 64 图 谷地区出土土器实测图.11 (1/4)



第 65 图 谷地区出土土器实测图.12 (1/4)



第 66 图 谷地区出土土器实测图.13 (1/4)

として位置づけた。58～61は脚部である。外面については研磨が施されずハケ目がそのまま残るものもあるが、内面についてはすべてハケが施される。50・53・61の脚部には円形の透孔が穿たれるが、いずれも3方向である。

62・63は台付きの鉢。62は口径13.6cm、器高12.9cmで、内外面ともに指頭圧痕が明瞭に残るが、内面についてはハケ目がわずかに窺える。63の復原径は13cmで、加熱により変色していることから、あるいは支脚のように使用されたのかもしれない。

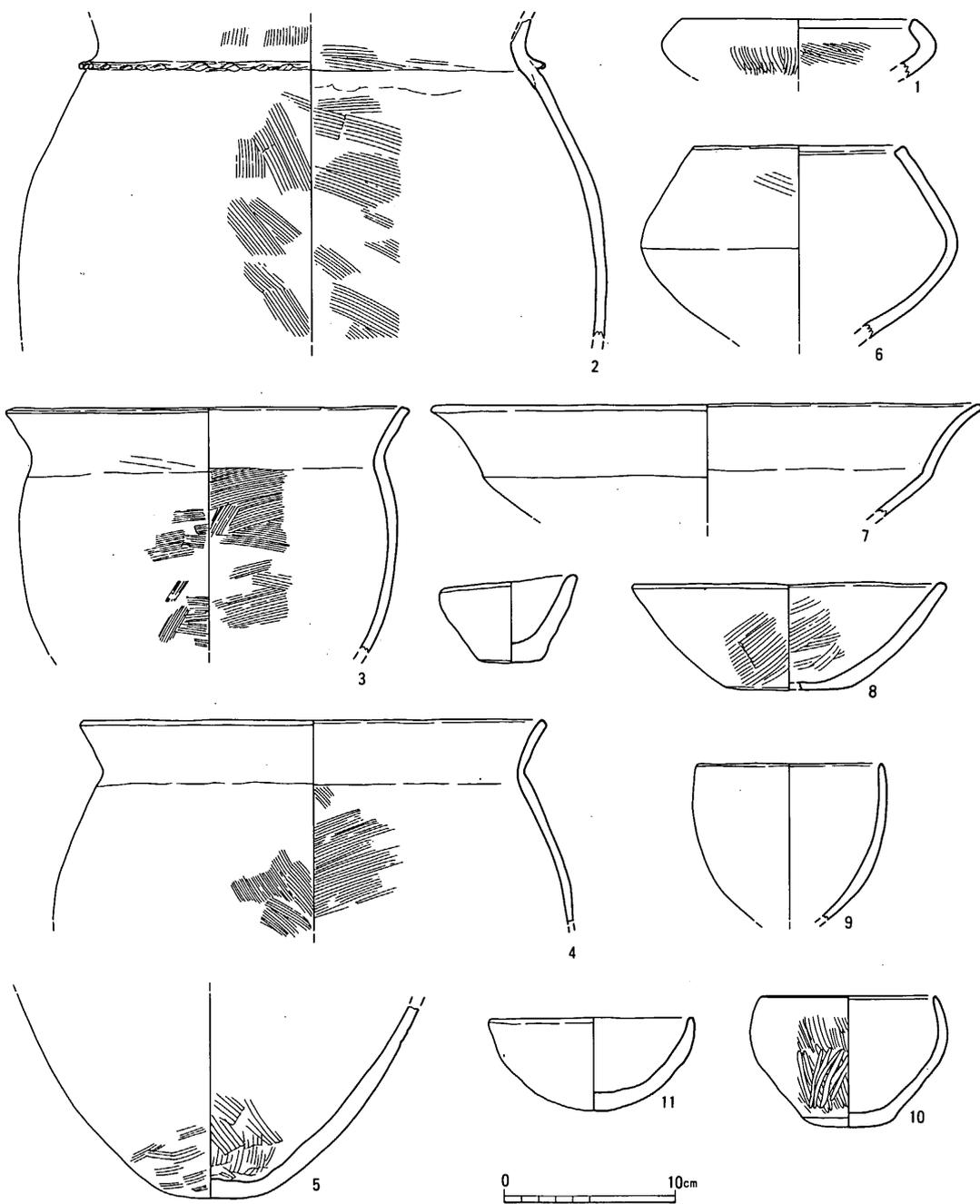
64～78は器台であるが、64～69までの一群（A類）と70～78（B類）までの一群とは性格が異なる。A類は口径が裾径より小さく、口縁部は口縁端部から3cmほどのところで強く外反し、裾の器厚は比較的薄くてスマートに開き、器面調整としてはタタキの後に丁寧なハケが施される。また、加熱による赤褐色の変色なども見られない。これに対してB類は、口径と裾径の差が小さく、中には裾径のほうが小さくて、また口縁部の外反もはっきりしたのではなく、一見したところではどちらが口縁部になるのか判断に躊躇するものもある。器面調整はナデが主流で、内面にはしぼり痕が残り、器厚は2～3cmと分厚く器面に凹凸が目立つ。そして多くの場合、裾付近が加熱により赤褐色に変色するという点においてA類とは全く異なる特徴を見せる。以上のような特徴の相違から、A類はまさに土器を乗せるための器台であり、B類は支脚的機能を有した器台であると考えられよう。ちなみに、A類の口径は12～13cmで、裾径は15～16cm。B類の口径は13～15cm、裾径は15～17cm。79～81は小形の器台であるが、器面調整や形態等から79・80はB類に、81はA類に属するものである。

82～87は突起を有する支脚で、頭部径は6～8cm、裾径は10～12cm、器高は10～12cmの範囲に収まる。頭部中央には径1.5cm程度の孔があり、外面にはタタキがそのまま残り内面はナデ。83は内外面ともナデで、器形も器台B類に類似していることから、器台B類の系譜の元で作られた支脚である。85や87のように明瞭な突起がない場合、頭部の傾斜によってその機能を果たすものもある。

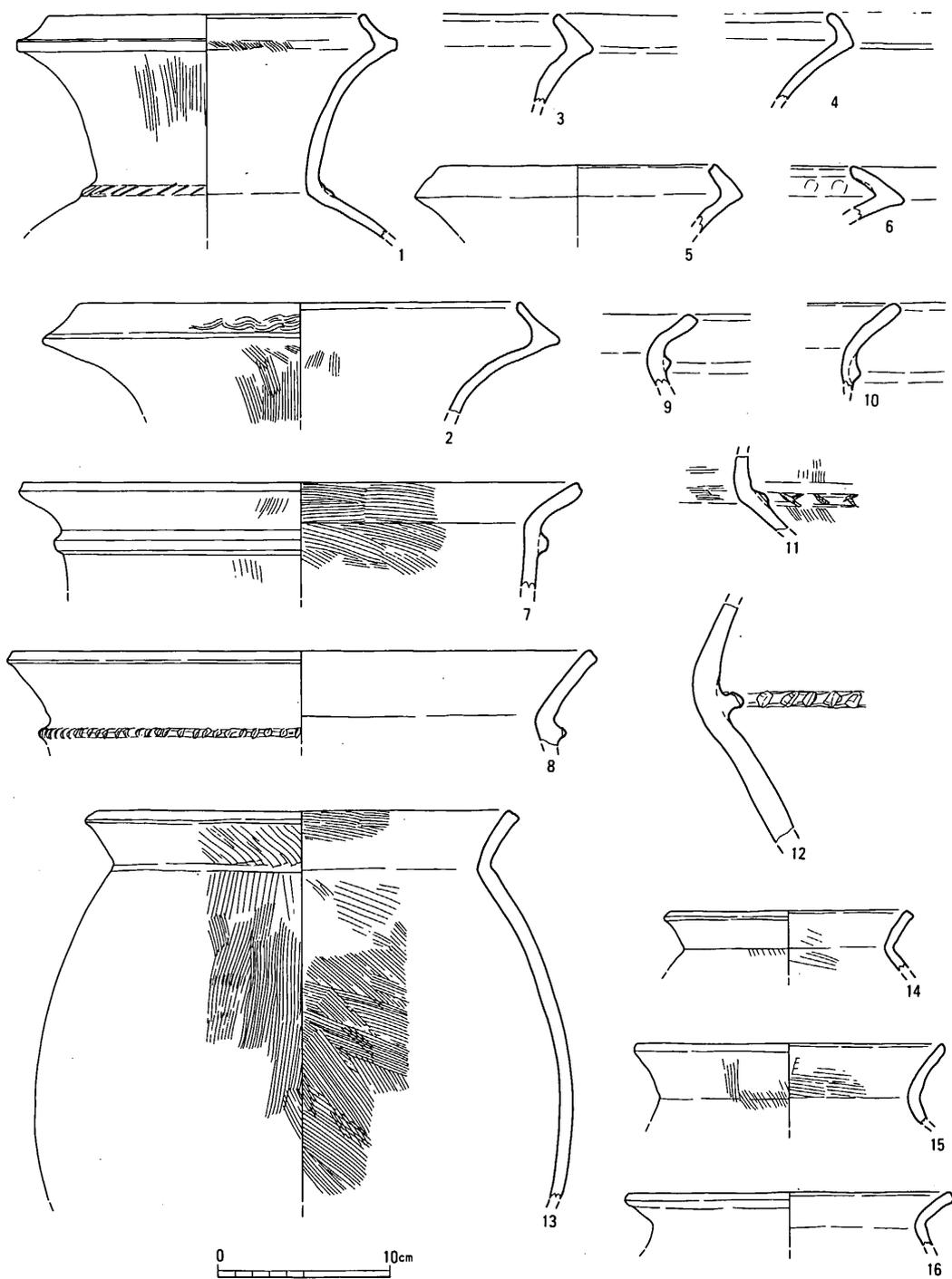
88～92は口縁部を外反させる鉢の一群である。88や89は口径の割に器高の低い襲といったほうが適当なのかもしれない。88は復原口径約25cm、器高17.8cm。89は口径12.6cm、器高12.2cm、底部の厚さは1.5cmもある。90は完形で口径7.9cm、器高14.7cmで外面にわずかにハケ目が窺える。91は内外面ともに研磨が施される。92については取りあえずこの一群に含めたが、小形の襲としても問題はない。

93～98はボウル状の小形鉢。サイズにはヴァリエーションが多く、同じ大ききで纏まることはない。器面調整は内外面ともにハケを基本とするが、94のように稀に研磨を施すものもある。この一群の特徴は不安定な丸底にあり、この部分は器面が擦れている。

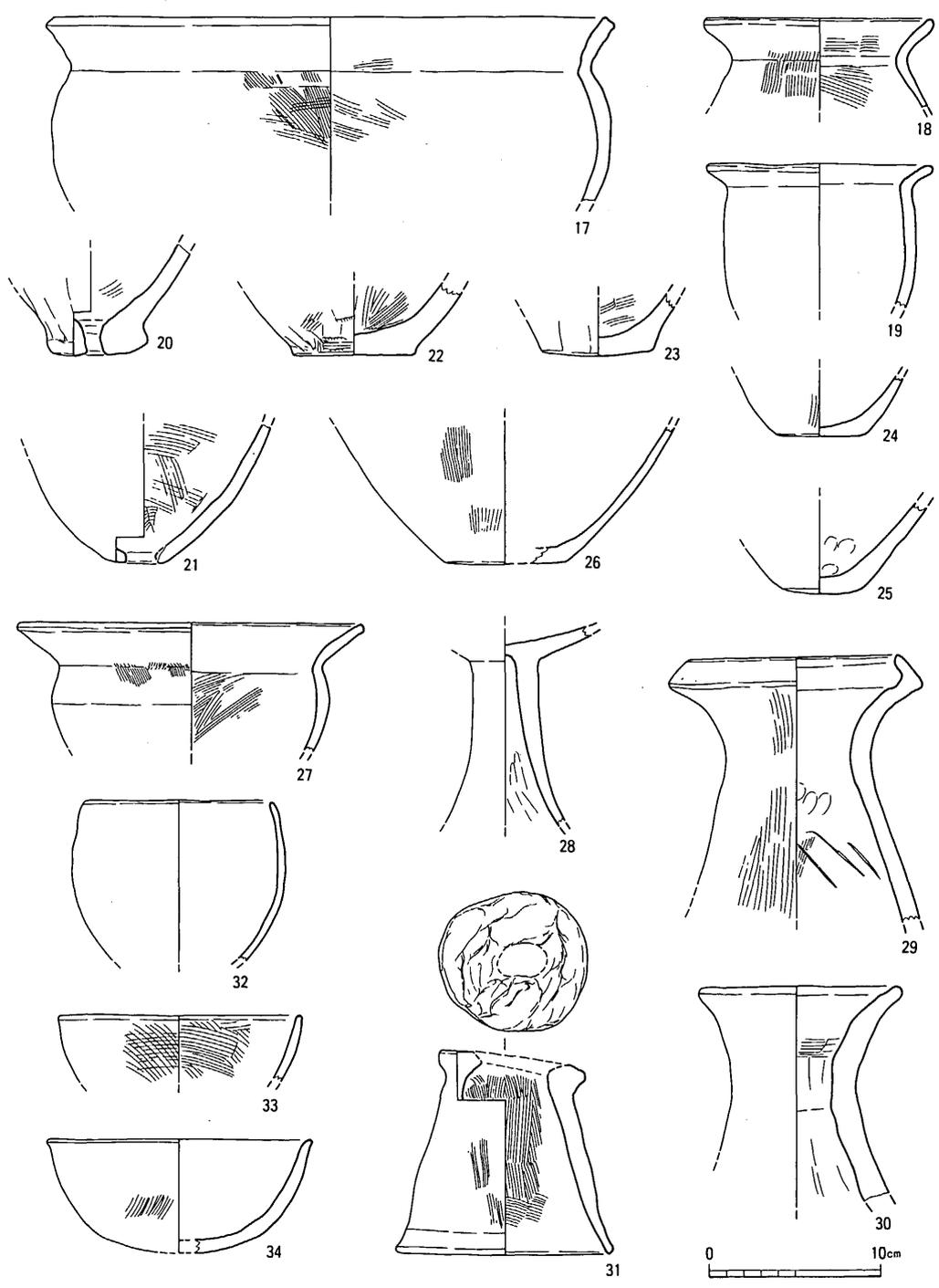
100～104は平底の小形鉢。103や104のようにハケが施されるものもあるが、多くの場合はナデが器面調整の主流となる。105～107は手捏ね土器で、口径は10cm、器高は4～5cm。108のミニ



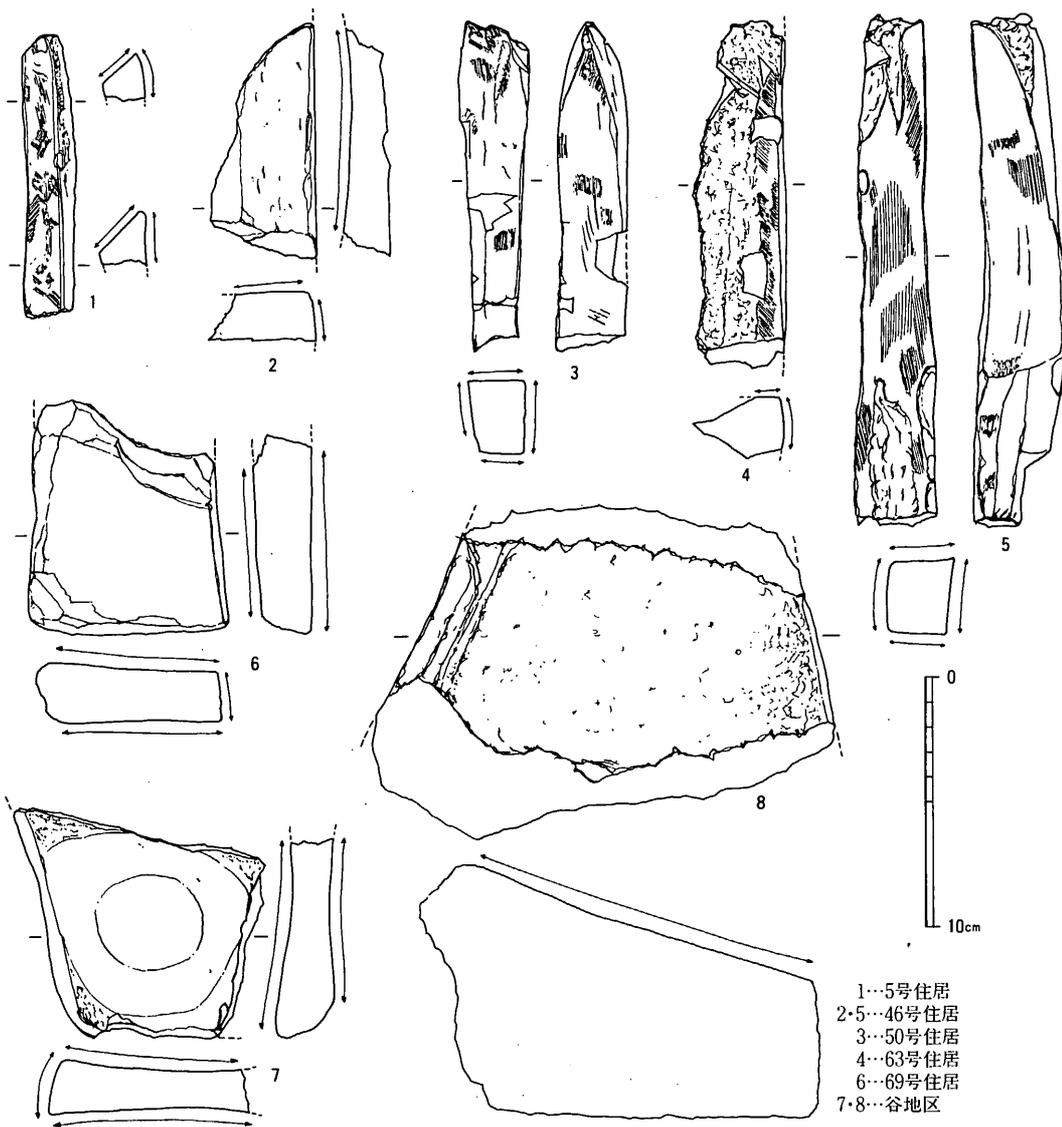
第 67 図 ピット出土土器実測図 (1/4)



第 68 图 包含層出土土器実測図.1 (1/4)



第 69 图 包含層出土土器実測図.2 (1/4)



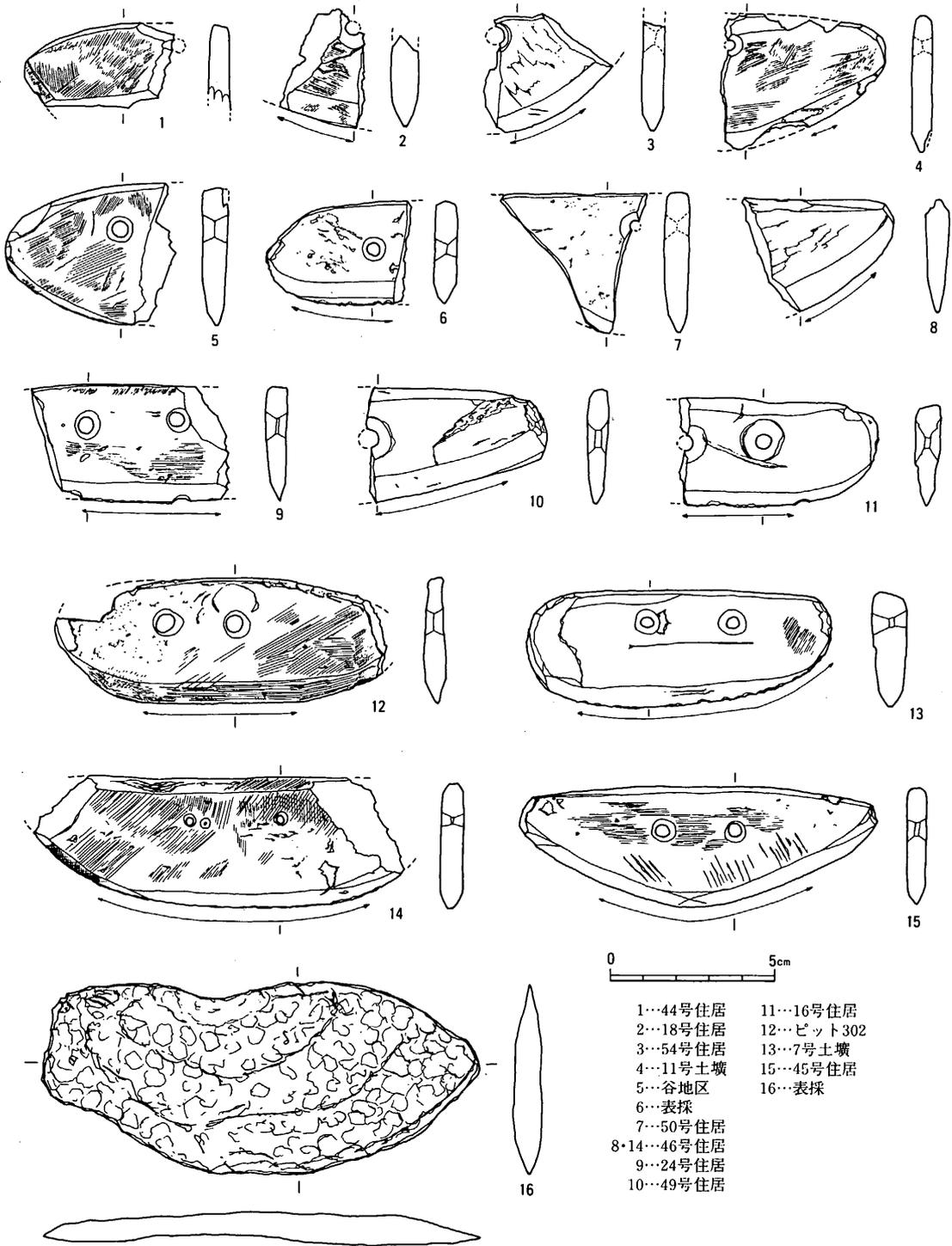
第70図 弥生時代遺構出土砥石・台石実測図(1/3)

チュアにはハケが施され、円盤状の粘土を貼り付けて底部とする。

第70図7は砂岩質の砥石で、表面・裏面・左側面の3面を使用している。8は玄武岩質の台石で、折れ面以外は加熱により赤く変色している。

(5)ピット出土の遺物(第67図 第70図12 第72図6)

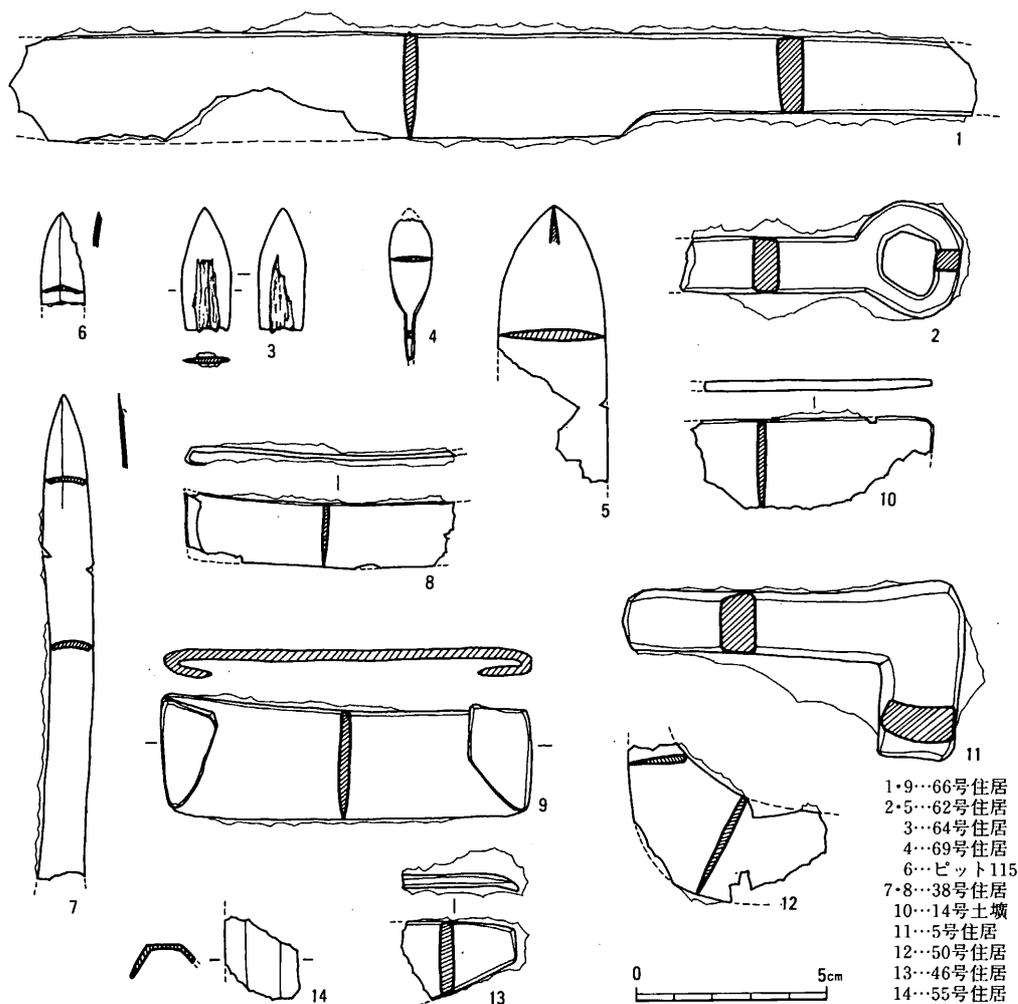
ピットからも多くの遺物が出土したが、ここでは弥生土器と弥生時代の石器について説明を



第 71 図 石庖丁実測図 (1/2)

行なう。

第67図1は復原口径約4cmの壺の口縁部。2は刻み目突帯文を有する甕で、内外面にハケ目が窺える。3は復原口径約23cm、4は復原口径約27cmの甕で、器面調整は内外面ともにハケ。5は内外面ともハケを器面調整とする胴下半部であるが、この底部は丸底に近くおそらく支えなしに立つことはできないであろう。6の鉢は復原口径約12cmで、口縁端部には面を作る。7は復原口径約30cmの高坏坏部で、摩滅により器面調整不明。8~10は平底になる小形の鉢。8は復原口径約18cm、器高6.2cmで器面調整はハケ。9は復原口径約11cmで調整不明。10は復原口径約10cm、器高7.5cmで、外面にはハケの後に研磨が施される。11はボウル状の小形の鉢。口径11.8cm、器高5.4cm。12は完形のミニチュアで、口径8.1cm、器高5.1cm。第71図12は粘板岩



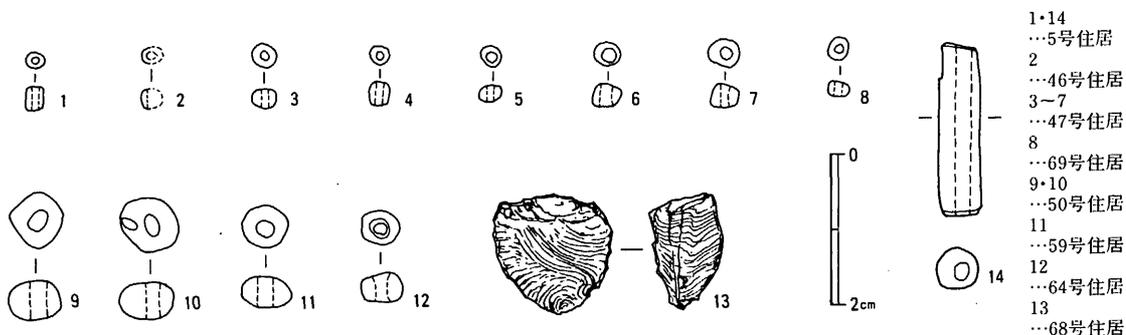
第 72 図 弥生時代遺構出土鉄器実測図 (1/2)

製の石庖丁で、刃部に見られる使用痕は範囲が狭く、またそれほど摩滅していない。第72図6は鉞で、現存長さ2.4cm、幅10mm、厚さ1.5mm。

(6) その他の遺物 (第67・68図 第70図6・16)

ここでは古墳時代以降に属する遺構から出土したり表面採集によって得られた弥生時代の遺物について説明を加えたい。

第67・68図1～6は壺の主に口縁部である。1の頸部と胴部の境には、ハケ工具とは異なる工具によって刻みの施された低い突帯文が貼り付く。2の屈折した口縁部の外面には、扇状文を連続させて波状文的な文様が施されている。7～12は突帯文を有する甕の一群。7・9・10は突帯文を貼り付けるだけであるが、8・11・12のように刻みを施すものもある。器面調整が窺えるものについては、内外面ともにハケが施される。13～19は突帯文を有さない甕。基本的に器面調整はハケ。20～26の底部のうち、20・21については焼成以前に穿孔されたものである。27は復原口径約20cmの鉢。28は高坏で、内面にはナデが窺える。29は壺的な口縁形態をした器台で、口径や器面調整から判断して、本遺跡の器台A類に属しよう。30も器台だが、口縁部の緩やかな外反やナデ主体の粗い器面調整から、本遺跡の器台B類に属しよう。31の支脚には内外面ともハケが施される。32は復原口径約11cmで、小さな平底になるであろう。33・34はボウル状の小形鉢で、器面調整にはハケが施される。第71図6は片岩系の石庖丁で、端部付近までかなり使い込まれている。16は片岩のような石材で、一応刃部が作り出されているようなので打製石庖丁とした。



第73図 弥生時代遺構出土玉類実測図 (1/1)

5 古墳時代以降の遺構と遺物

仮塚南遺跡において検出された古墳時代以降の遺構としては、竪穴住居跡36軒、掘立柱建物跡3棟、土壇10基、道状遺構2本、溝2本、炭焼窯4基のほかに多数のピットが上げられる。このうち大半は古墳時代後期（6世紀後半）に比定される遺構であるが、9号土壇は中世（11世紀）に属し、また7号土壇の最上部からも中世（11世紀）の遺物が出土している。炭焼窯については遺物の出土が全くないため所属時期が決められない。

古墳時代の遺構で特に注目されるのが、現在の市道（林田城山線）から北地区と南地区の丘陵上に上がるための道状遺構の存在である。仮塚南遺跡の立地する丘陵は西から東へ細長く伸びているが、この市道の部分だけ不自然に分断される。川の痕跡もないので、当初は市道の建設に際して掘削されたものと考えていたが、道状遺構の検出によりこの掘削が少なくとも古墳時代まで遡るものと考えられるようになった。以下、遺構の説明を順に行ないたい。

(1) 竪穴住居跡

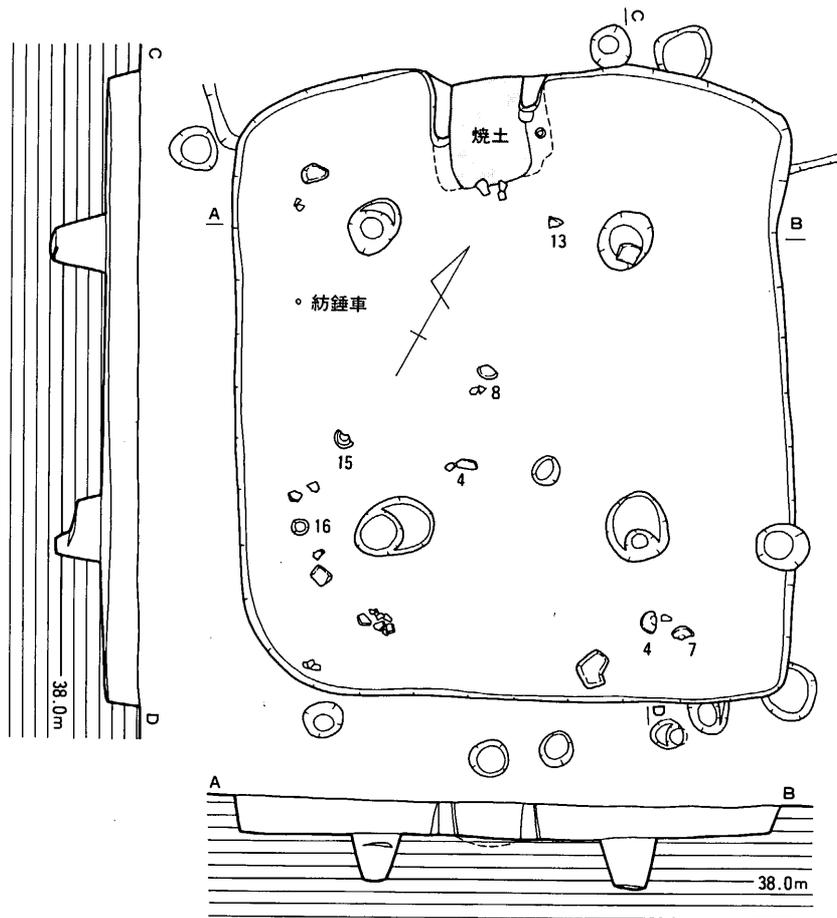
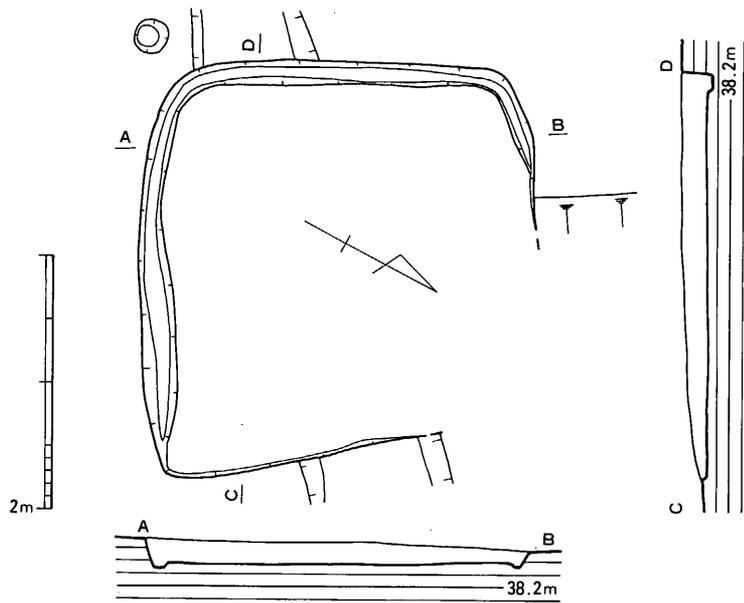
仮塚南遺跡では36軒の竪穴住居跡を検出した。これらは主に北側の壁の中央部にカマドを付設して、4本の支柱穴からなる。所属年代は古墳時代後期の6世紀後半代で、年代の決め手になる遺物が出土していない住居跡についても、他の遺構等から6世紀後半代の遺物以外はほとんど出土していないことを考慮すれば、いずれも同じ6世紀後半代に属するものと考えられる。確実に見られる切り合い関係は、9号→8号→7号、14・15・17号→13号→12号→21号→22号、17号→11号→10号、24号→23号、30号→20・29号、4号土壇→6・18号、53・54号→1号道状遺構である。

1号竪穴住居跡（図版55 第74図）

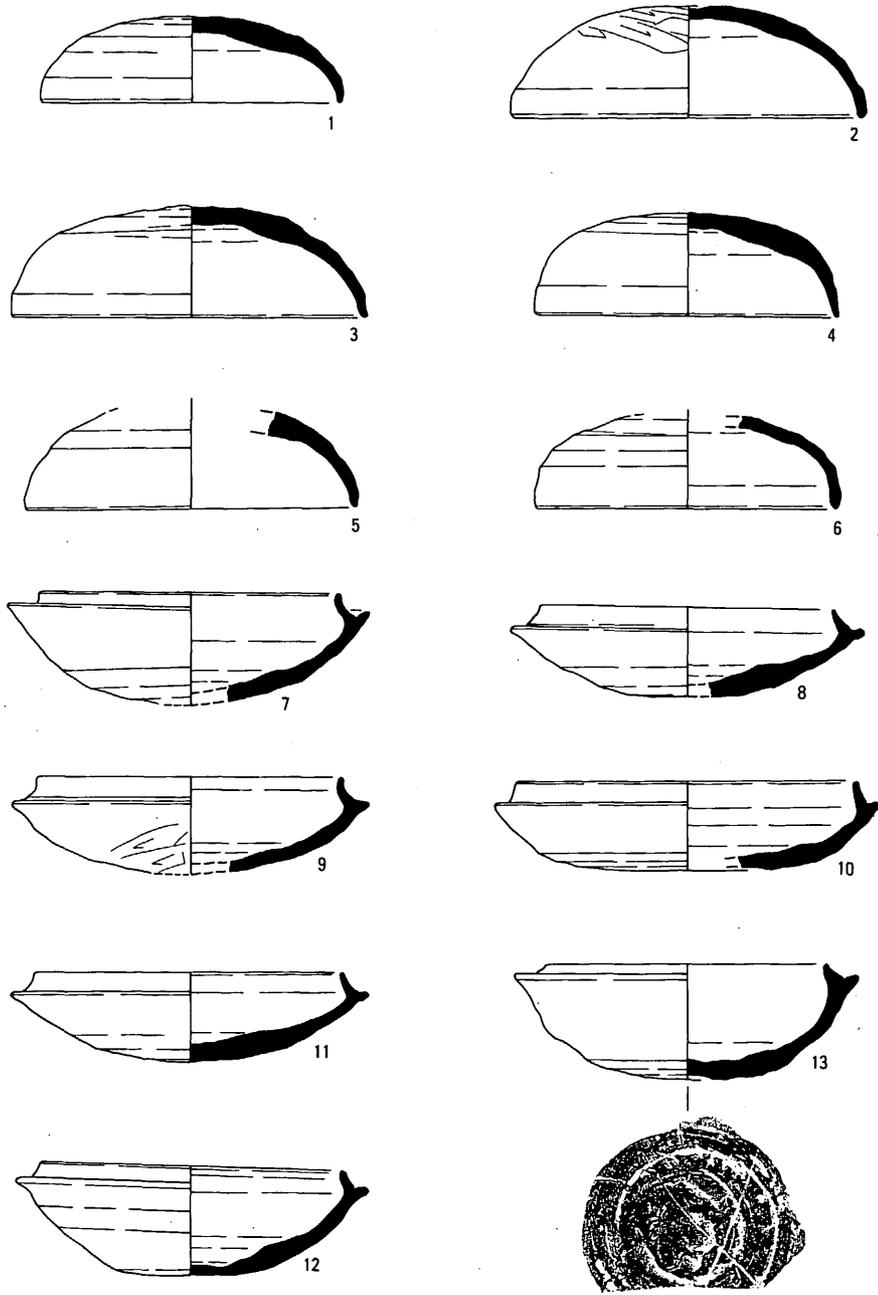
1号竪穴住居跡は北地区の北端部に位置し、同じ古墳時代の1号溝を切る。この周辺には南7mに古墳時代の4号竪穴住居跡があるだけで、古墳時代の遺構が稀薄な部分でもある。平面プランは3.1×3.0mの正方形を呈するが、北隅1/4は削平により残っていない。北東壁を除いて幅20cm、深さ5cmの周溝が巡る。カマドや支柱穴は未確認であるが、土師器や須恵器などの小破片が数点出土しており、1号溝との切り合い関係からも古墳時代に属するものと考えられる。

4号竪穴住居跡（図版54・55 第74・77図）

4号竪穴住居跡は北地区の北端部に位置し、弥生時代の5号竪穴住居跡や3号溝を切る。北7mには古墳時代の1号竪穴住居跡が、南5～6mには7～9号竪穴住居跡がある。5.0×4.3mの長方形プランで、壁高は25cmを測る。支柱穴は4本で、いずれも径40cm、深さ40cmとほぼ統一され

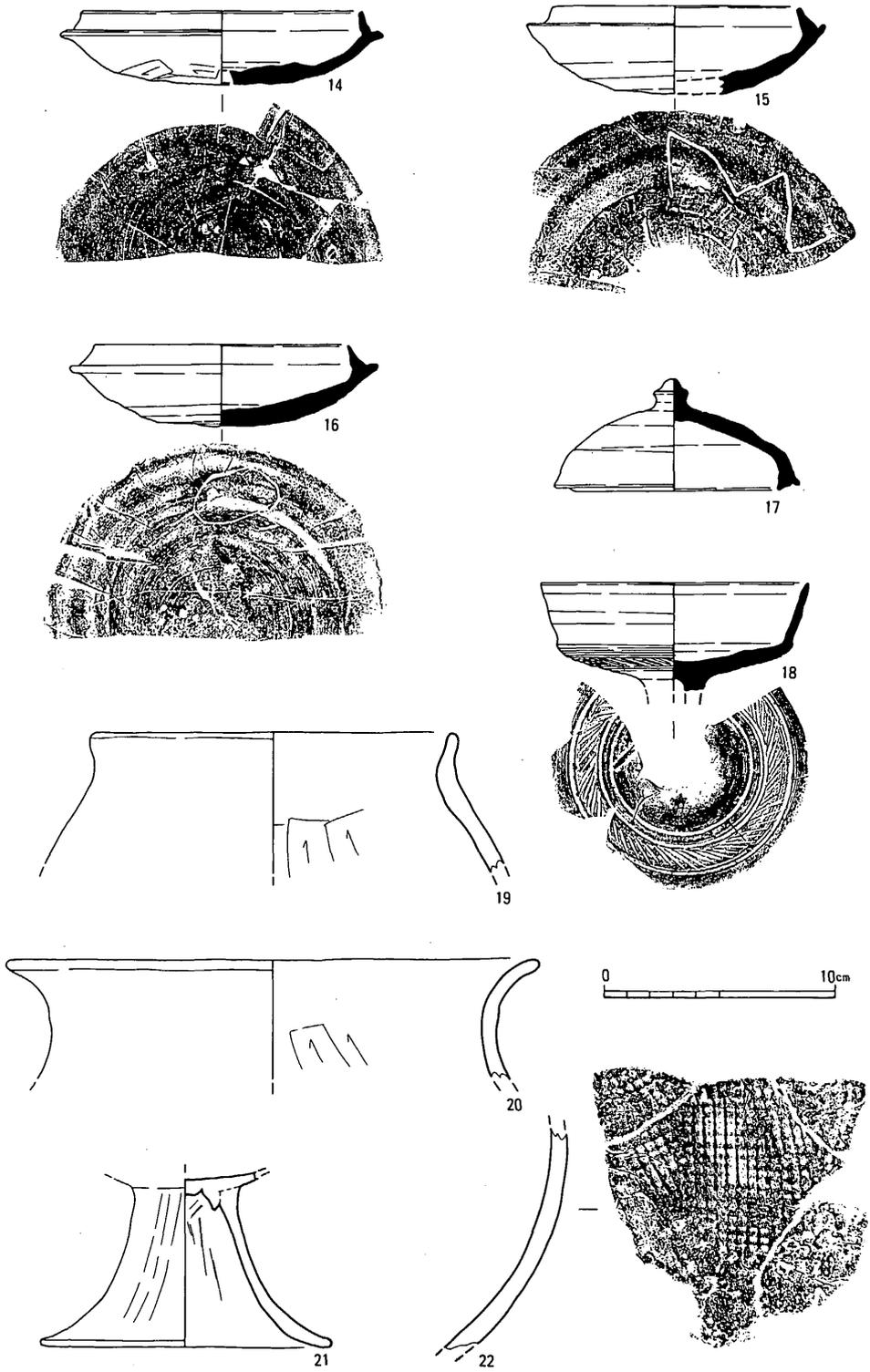


第 74 图 1·4号竖穴住居跡实测图 (1/60)

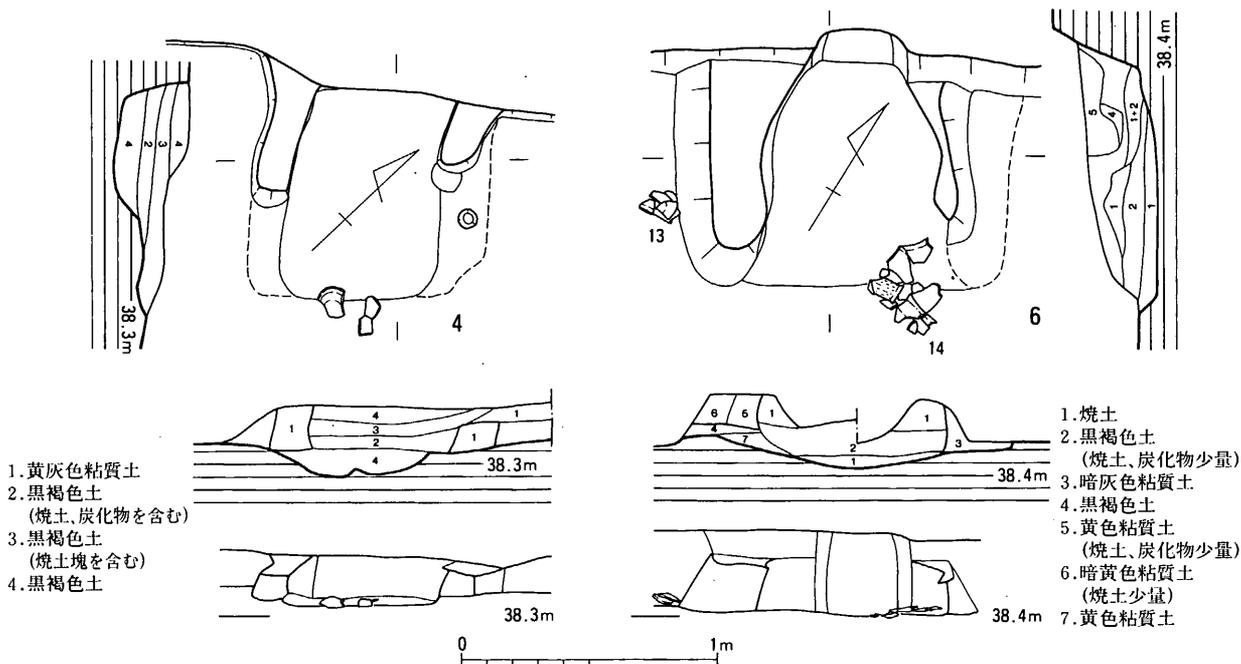


0 10cm

第 75 图 4号竖穴住居跡出土土器実測図.1 (1/3)



第 76 图 4号竖穴住居跡出土土器実測図.2 (1/3)



第 17 図 4・6号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)

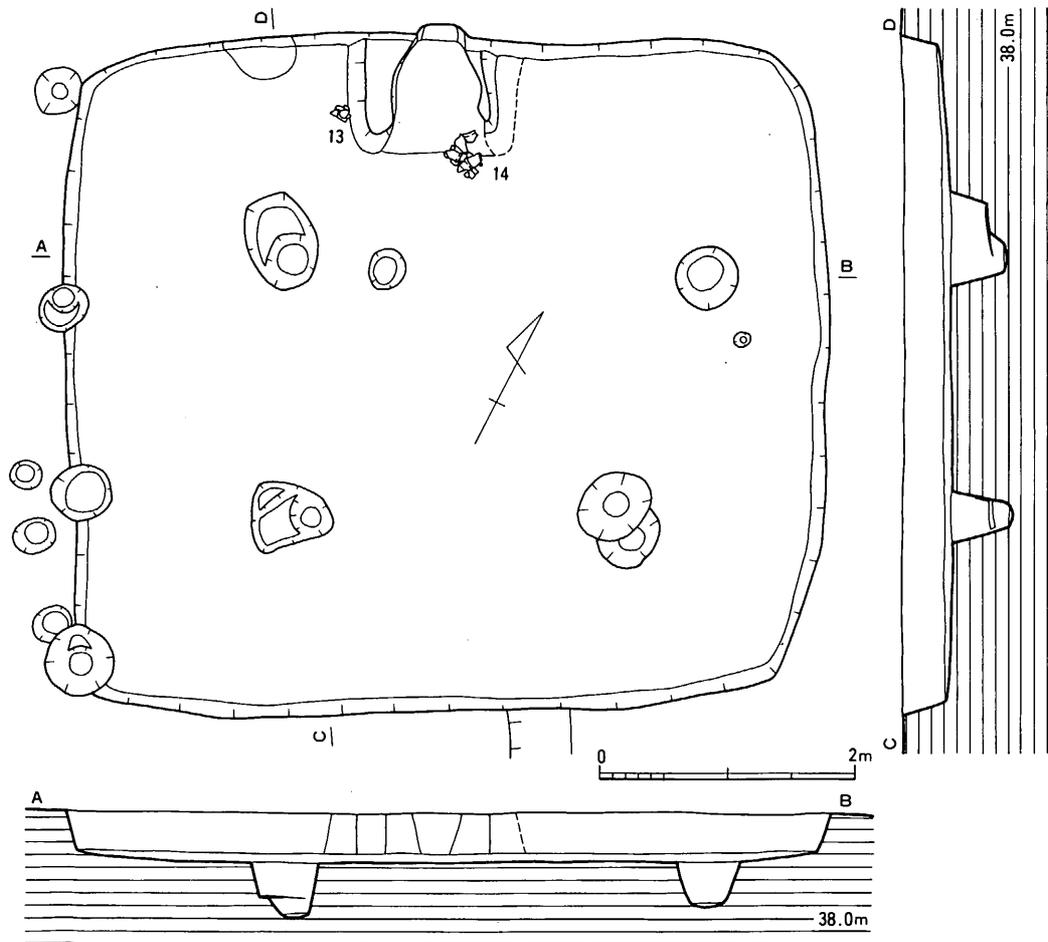
ている。カマドは北西壁の中央部に付設され、袖については東側30cm分、西側50cm分を検出したが、袖の痕跡と考えられる黄灰色粘質土のわずかな細長い伸びと焼土の広がりから、本来の袖の長さは80cmほどであったと考えられる。カマドの内部からは支脚をはじめ遺物はほとんど出土しておらず、また焼土と炭化物とが混ざって広がってはいるものの、明確な火床も遺存していない。したがって、住居廃絶時においてこのカマドを意図的に取り壊したものと考えられる。遺物はかなり纏まって出土したが、床面上から出土したものは第75・76図2～5・7・8・10～16・22で、その他は主に埋土の下部より出土した。また、第156図1の土玉、第157図1・13の砥石、第159図1の紡錘車は床面から、第158図1の鉄鏝は北隅の支柱穴の底からそれぞれ出土した。

遺物 (第75・76図 第156図1 第157図1・13 第159図1 第158図1) 第75・76図1～6は須恵器の坏蓋で、口径12～14cm、器高3.5～4.5cmの範囲に収まる。天井部外面には回転ヘラケズリが施されるが、2については静止ヘラケズリである。7～16は須恵器の坏身で、口径13～15cm、器高3.5～5cmの範囲に収まる。13・14には「×」、15には「w」、16には「○」のヘラ記号が底部外面に施されている。17は須恵器の高坏の蓋で宝珠摘みが付き、18は同じく高坏の坏部で底部外面にはカキ目と連続刺突文が施される。19・20は甕の口縁部で摩滅が著しいが、内面胴部にはケズリが痕跡的に窺える。19の復原口径は約16cm。20の復原口径は約23cm。21は土師器の高坏脚部で、外面には縦方向のケズリ、内面にはナデが施される。22の外面には格子目のタタキが、内面にはナデが施される似非須恵土師器である。加熱により全体的に赤褐色に変色し

ている。第156図1は22×21mmの土玉で、径2mmの孔が貫通する。第157図1は頁岩製の砥石で大部分が欠損。13は表面だけ使用された砂岩質の砥石で、先の尖ったものを回転させることで生じたと考えられる深さ4mmの孔が2カ所ある。第159図1は1/3ほど欠損するが、側面には使用による不定方向の線条痕が残る滑石製の紡錘車である。第158図1は長さ11.7cm、幅2.7cm、厚さ3mmの鉄鍬。

6号竪穴住居跡（図版56・57 第77・78図）

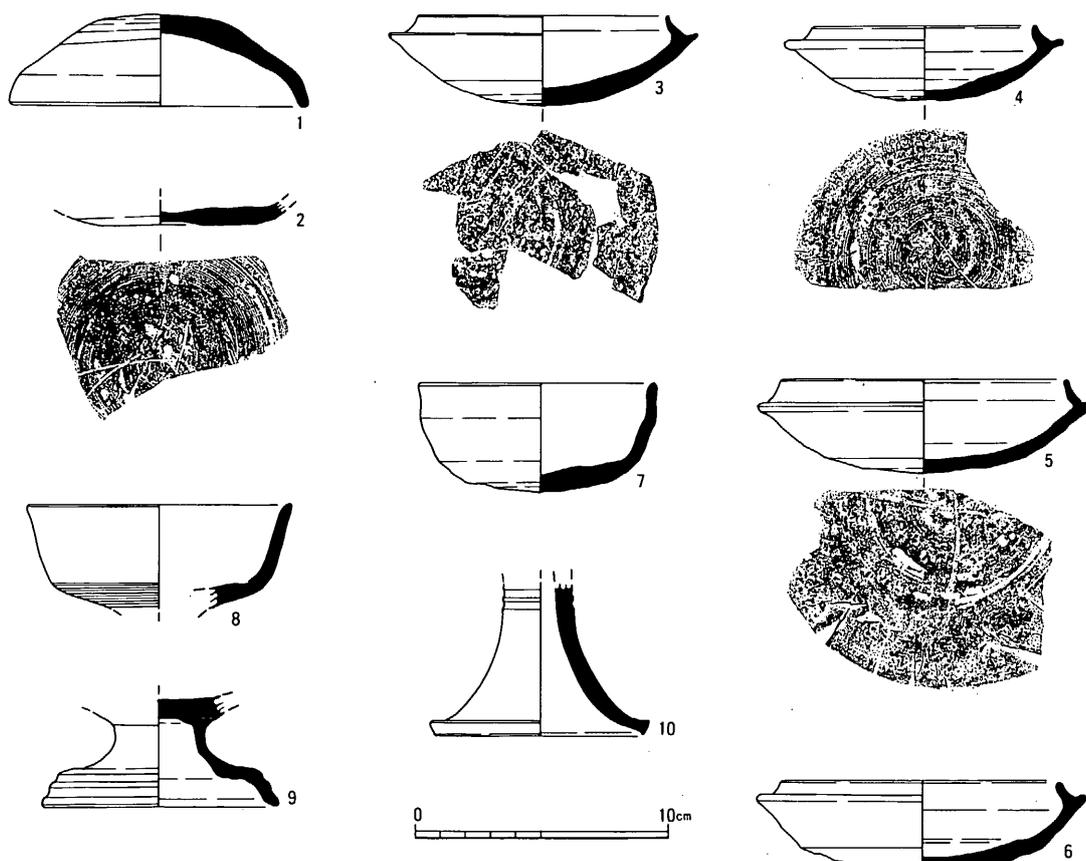
6号竪穴住居跡は北地区中央部の西端に位置し、古墳時代の4号土壌を切る。南4mには18号竪穴住居跡が、東4mには9号竪穴住居跡がある。5.9×5.4mのほぼ正方形に近い平面プランで、壁高は40cmと比較的残りは良い。4本の支柱穴は径40cm、深さ40cmとほぼ統一されるが、北隅の支柱穴だけは北東側にずれてアンバランスな配置になる。北西壁中央部には130×95cmの範囲内にカマドが付設される。実際の調査では、この北壁中央部において黄褐色の粘土や焼土が



第 78 図 6号竪穴住居跡実測図 (1/60)

見えていたので、かなり早い段階からその存在には気付いていた。しかし、袖の形態は十分に認識できず、また焼土は随所に見られるものの確実な火床も未確認で、このカマドについては調査時点においてもその構造の把握に苦しんだ。第77図のカマドの実測図は、焼土の範囲や土器の出土状況から袖の形態を想定したものであるが、土層断面図に示したように明確な袖は検出できていない。おそらくこのカマドは自然崩落もしくは人為的に壊されたものであろう。遺物はカマド周辺において土師器が纏まって出土したが、図示した須恵器や鉄器はすべて埋土中からの出土で、床面上のものはない。

遺物（第79・80図 第158図10）第79・80図1～10は須恵器、11～16は土師器である。1は口径11.7cm、器高3.6cmの坏蓋。2～6の坏身は口径12～14cm、器高3.5～4cmの範囲に収まる。2・4・5の底部外面には「×」が、3の底部外面には4本の平行沈線文がヘラ記号として施される。7は口径9.6cm、器高4.4cmのかえりのない坏身。8は口径10.4cmの高坏坏部で、底部にはカキ目が施される。9・10は高坏脚部で、9の裾部や10の脚中央部には沈線文が入る。11は復原口径約10cmの坏身で、底部外面には静止ヘラケズリが窺える。12はカマド内より出土した復原口径約

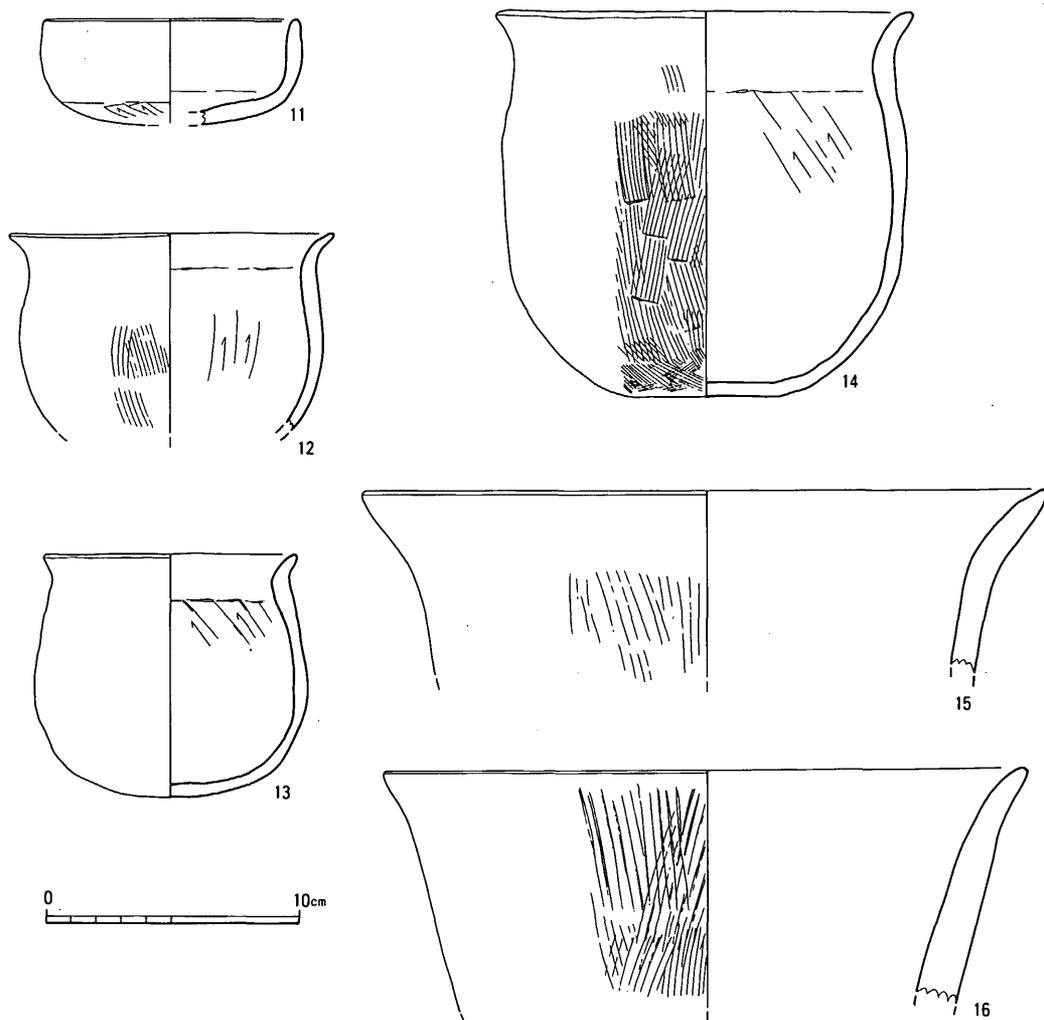


第 79 図 6号竖穴住居跡出土土器実測図.1 (1/3)

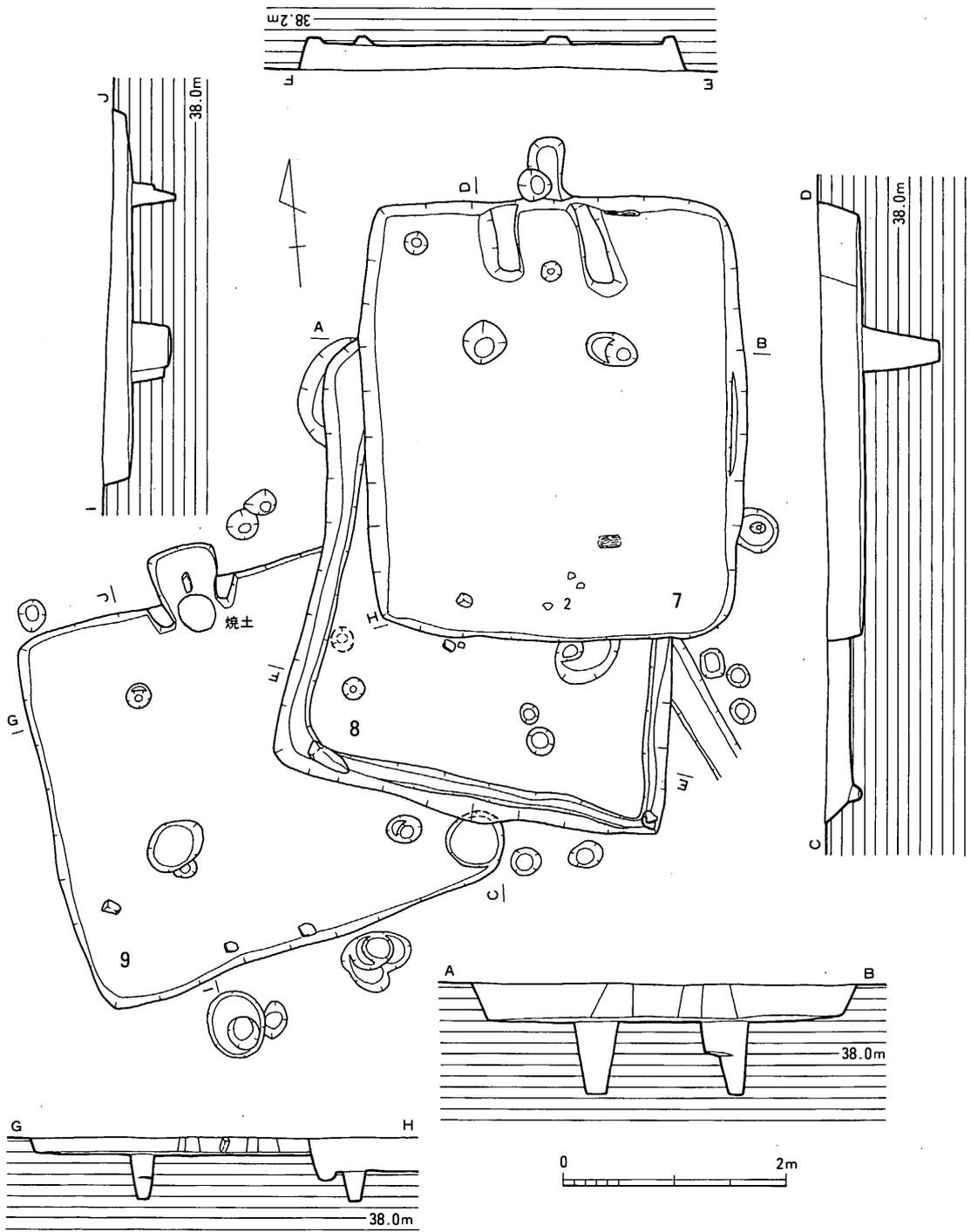
12cmの小形甕で、外面にはハケ目が内面にはケズリが窺える。加熱により赤褐色に変色。13はカマドに向かってその左側から出土した復原口径約10cm、器高9.5cmの小形甕で、内面にはケズリが窺える。加熱により胴下半部が赤褐色に変色。14はカマドの手前で出土した口径16.6cm、器高15.2cmの甕で、外面の胴部にはハケが密に、内面にはケズリが施される。15は復原口径約24cm、16は復原口径約22cmの外面にハケ目が窺える甕で、加熱により赤褐色に変色する。第158図10は一方が欠損する。残存長8.4cm、断面形態は6×5mmの隅丸方形で用途不明。

7号竪穴住居跡 (図版57・58 第81・83図)

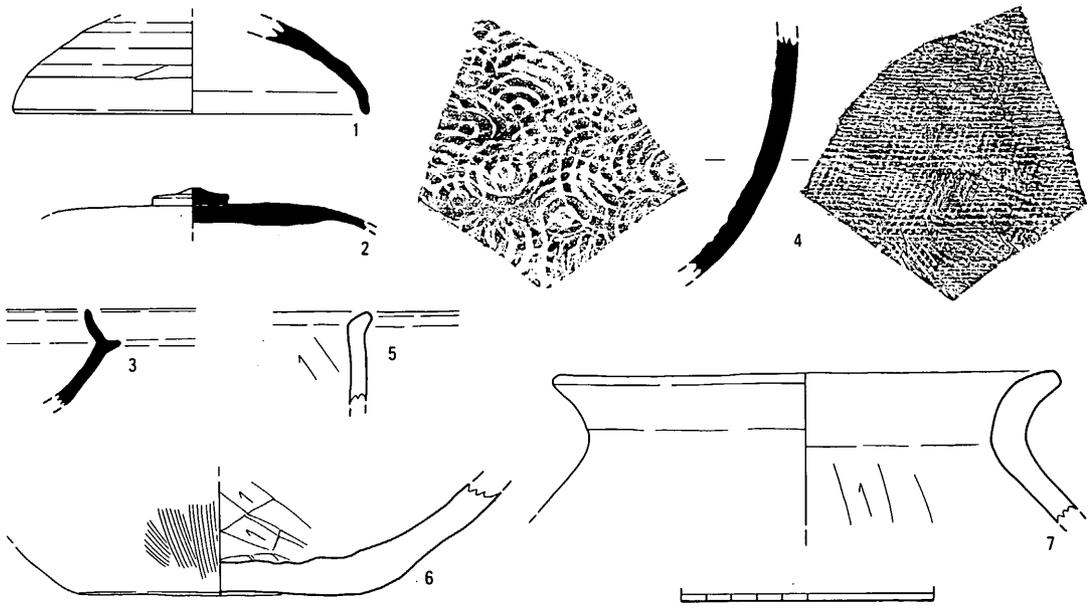
7号竪穴住居跡は北地区の北端中央部に位置し、古墳時代の8・9号竪穴住居跡を切る。東1.5mには14号竪穴住居跡が、北東2.5mには13号竪穴住居跡がある。4.1×3.4mの南北に長い長方形プランで、壁高は35cmを測る。この時期の支柱穴は本来4本であるが、この住居跡に関



第 80 図 6号竪穴住居跡出土土器実測図.2 (1/3).



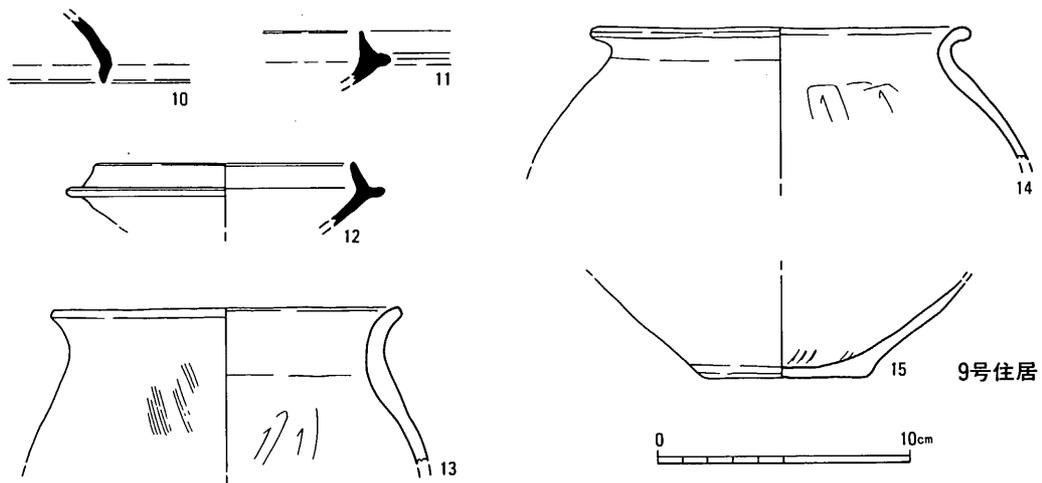
第 81 図 7~9号竖穴住居跡実測図 (1/60)



7号住居



8号住居



9号住居

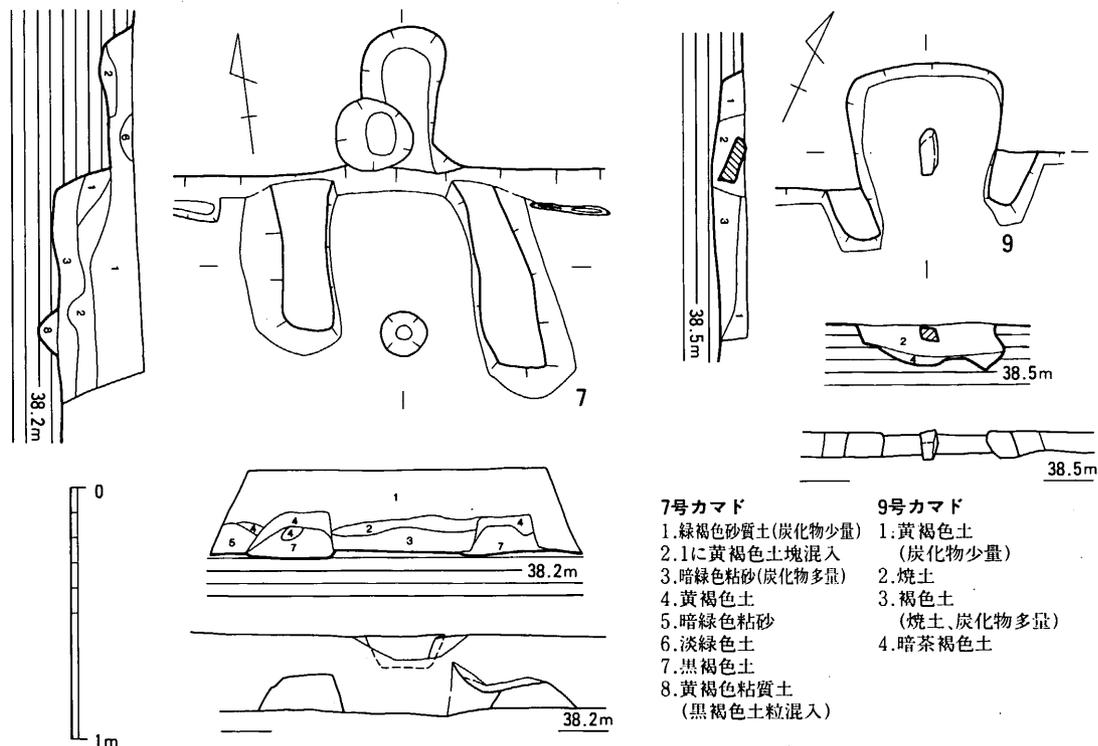
第 82 图 7~9号竖穴住居迹出土土器实测图 (1/3)

してはカマド側の2本しか検出できなかった。径40cm、深さ70cmとかなりしっかりとした支柱穴であるだけに、南側の2本を見落とすとは考え難く、かといって元々なかったとするのも考え難い。カマドは北壁中央部に付設され、幅29cm、長さ56cmの煙道が住居跡の外側へ突出する。黄褐色土によって作られた幅25cmほどの袖は確実に検出できたが、カマド内部には炭化物が少量含まれているだけで、あたかも掻き出したかのように焼土は全くなく、どの部分が火床になるのか確認できなかった。なお、支脚を据えたと考えられる径20cm、深さ10cmほどの小ピットがカマド内中央部で検出されたが、位置的にはもう少し奥にあっても良いような印象を得た。遺物はカマドと対向する南壁の中央付近で若干出土したが、量的には少なく、またカマド内部からは全く出土していない。

遺物（第82図1～7）1～4は須恵器、5～7は土師器。1は復原口径約14cmの坏蓋。2は摘みの付く坏蓋。3は坏身の口縁部。4は甕の胴部破片で、外面にはカキ目の後に格子目のタタキが施され、内面には青海波の当て具圧痕が残る。5は甕の口縁部。6は甕の底部で、内面は粗く削られる。7は復原口径約20cmの甕で、内面は削られる。

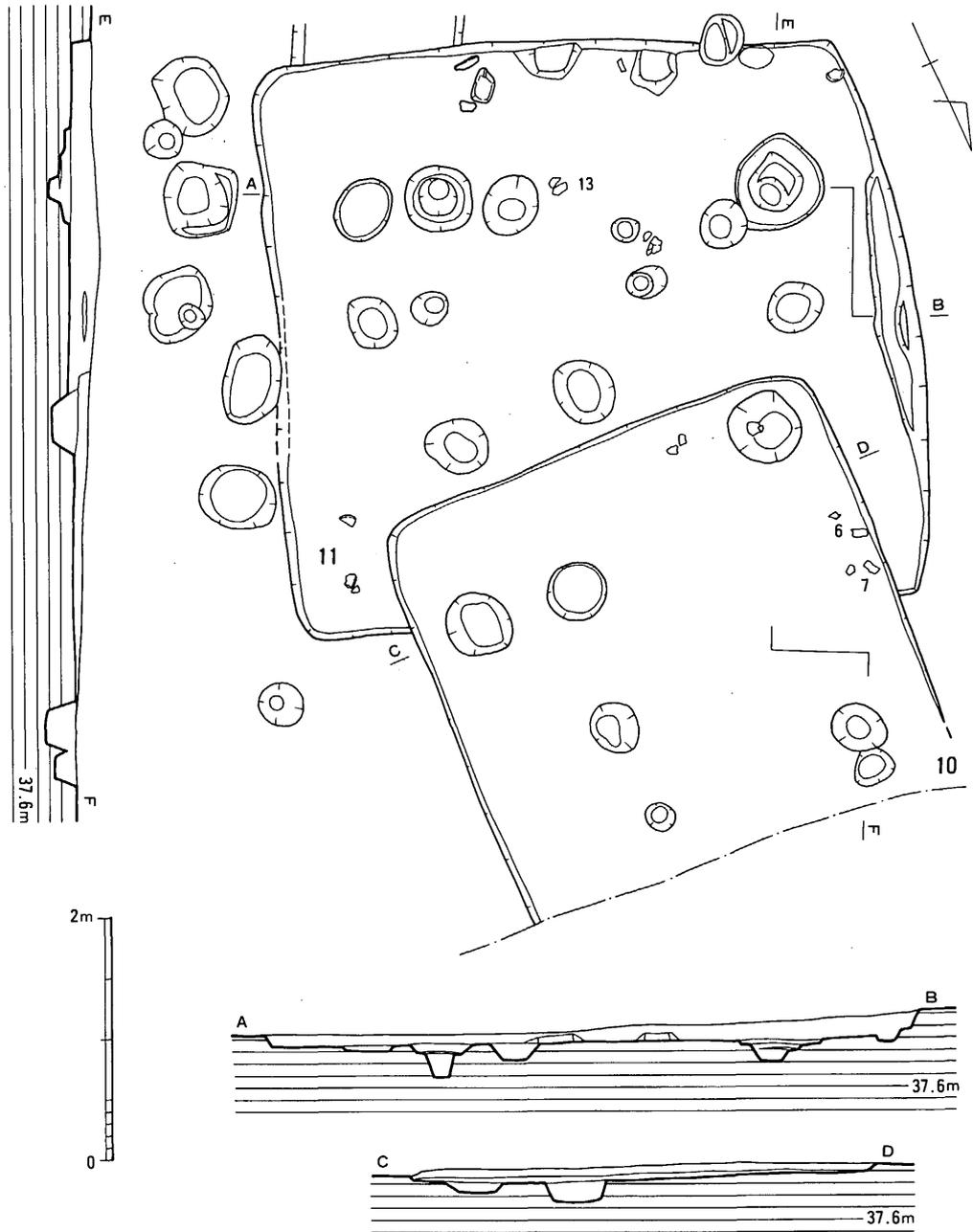
8号竪穴住居跡（図版58 第81図）

8号竪穴住居跡は北地区の北端中央部に位置し、7号竪穴住居跡には切られるが、9号竪穴住居跡は切る。南西1mには1号土壌があり、14号竪穴住居跡は北西2mにある。7号竪穴住居跡に



第 83 図 7・9号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)

半分以上切られているが、4.0×3.2m程度の南北に長い長方形プランを呈していたようである。北壁に付設されていたであろうカマドは全く残らず、主柱穴らしきピットも全く検出されていない。壁際には幅20cm、深さ5cmの周溝が巡る。遺物は少なく、図示できたのは埋土中より出土した2点の須恵器と、1点の鉄器だけである。

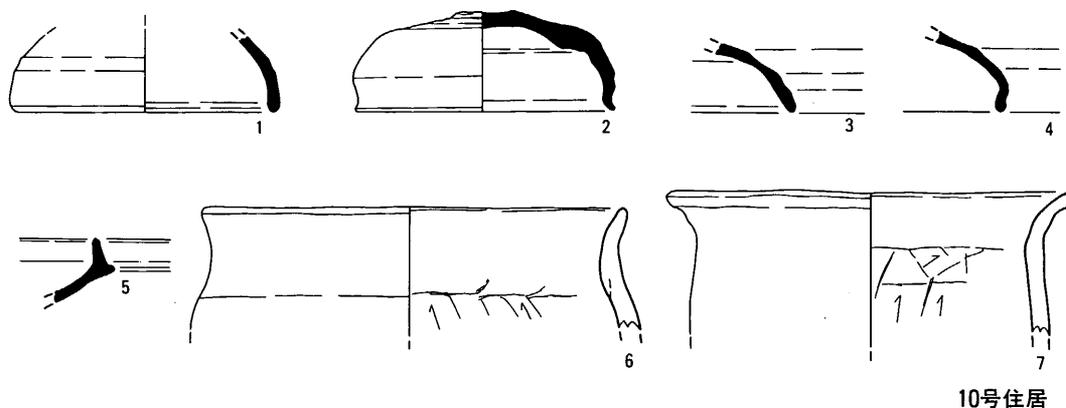


第 84 図 10・11号竪穴住居跡実測図 (1/60)

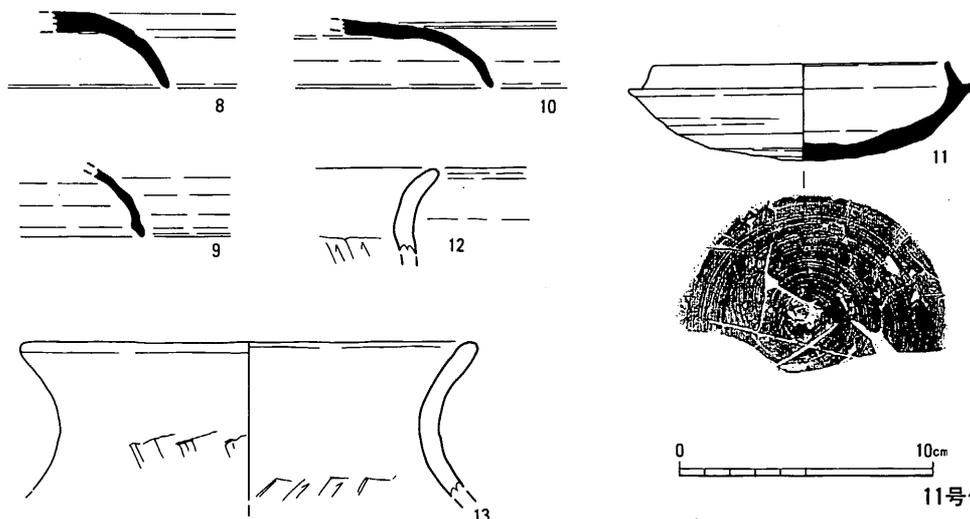
遺物（第82図8・9 第158図16）第82図8は坏身の口縁部、9は復原口径約14cmの坏身。第158図16は曲がってしまった鎌で、厚さは3mm。

9号竖穴住居跡（図版59 第81・83図）

9号竖穴住居跡は北地区の北端中央部に位置し、7・8号竖穴住居跡に切られる。西4mには古墳時代の6号竖穴住居跡が、南西2.5mには4号土壇が、南東3mには20号竖穴住居跡がある。北壁にカマドが付設されるが、住居跡はカマドに対して横長の長方形プランとなる。短軸方向つまり南北方向については3.5mという数値が得られるが、長軸方向つまり東西方向については支柱穴やカマドの位置関係から、およそ4m程度であったと考えられる。4本の支柱穴は径が20cmと小さい割に、深さ45cmと意外に深い。カマドの袖は幅15cm、長さ25cmとかなり短いものが検出されたが、奥行き50cm、幅60cmの突出部が住居跡の外にあるため、この程度の袖でもカマドとしての機能を十分に果たしたものと考えられる。カマド中央部には長さ20cmの石による



10号住居



11号住居

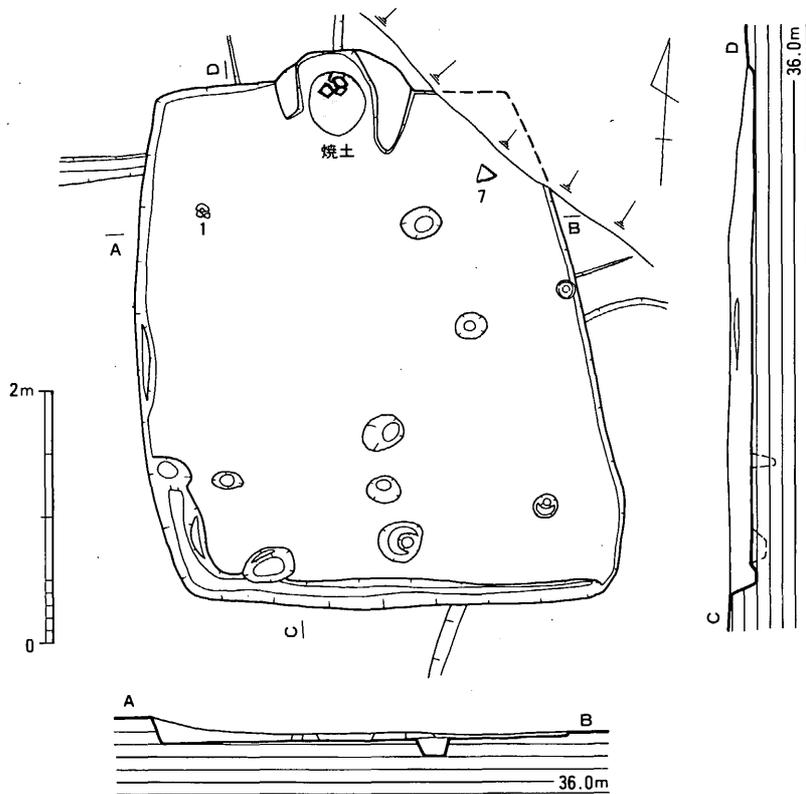
第 85 図 10・11号竖穴住居跡出土土器実測図（1/3）

支脚が北方向に倒れた状態で出土した。この支脚の手前側には焼土と炭化物とが混ざった褐色土が広く厚く広がっているが、明確に火床といえるところはなかった。壁高は10cm程度しか残っておらず、図示した遺物のうち北西の主柱穴より出土した第82図13以外は、すべて床面からの出土である。

遺物（第82図10～15 第157図2）第82図10は須恵器の坏蓋の口縁部。11は須恵器坏身の口縁部。12は復原口径約10cmの須恵器坏身。13は復原口径約14cmの土師器甕で、外面にはハケ目が、内面にはケズリが窺える。14と15はおそらく同一個体になる胴部の大きく膨らんだ甕で、復原口径は約15cm、内面にはケズリが痕跡的に窺える。第157図6は粘板岩製の砥石で、欠損部と一方の端部を除いた4面はかなり使い込まれている。

10号竪穴住居跡（図版60 第84図）

10号竪穴住居跡は北地区の北端部東側に位置し、古墳時代の11号竪穴住居跡を切る。北壁は調査区外に伸びているためその全容は知り得ないが、平面プランは方形を呈していたものと考えられる。東西方向には3.8mという数値が得られているが、現存する南北長は3.5mである。カマドは北壁に付設されていたであろうが、仮にこの住居跡の全体を検出したとしても現存する壁高は最高で7cmしかなく、果たしてどれだけ遺存しているか疑わしい。床面において幾つ



第 86 図 12号竪穴住居跡実測図 (1/60)

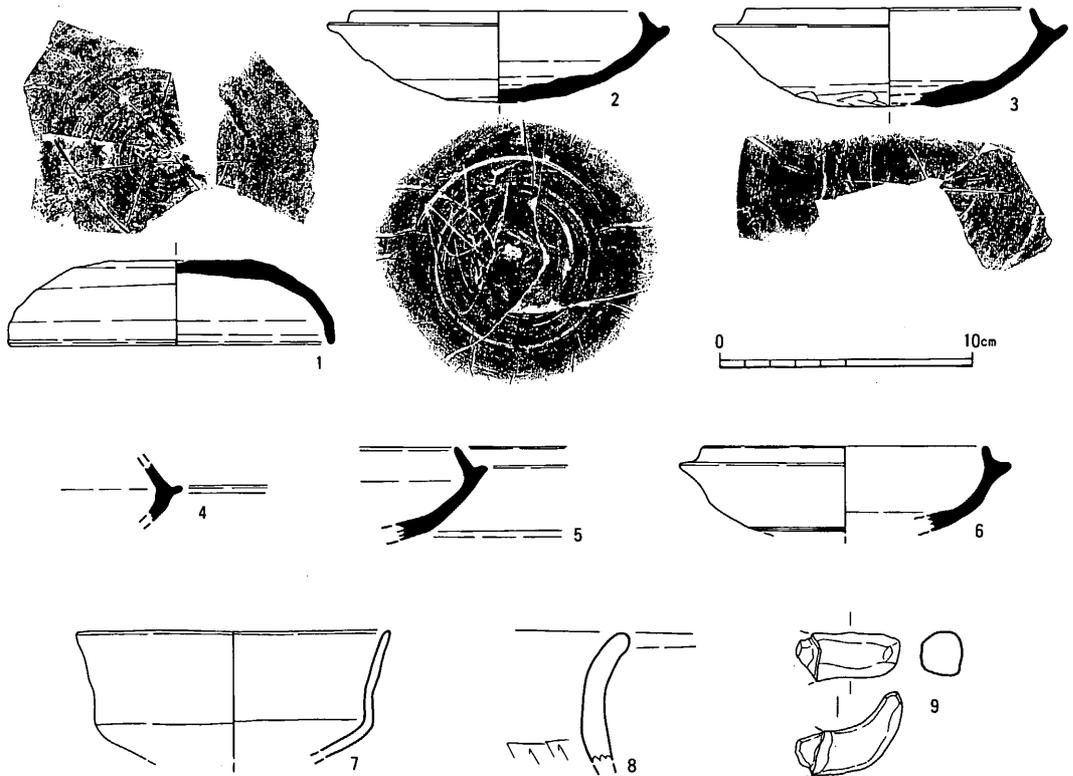
かのピットを検出したが、位置関係や深さから考えてどれが支柱穴になるのか確定できなかった。遺物は量的に少なかったが8点を図示した。

遺物（第85図1～7 第160図13）1・2はともに復原口径約10cmの須恵器坏蓋。3・4は須恵器坏蓋の口縁部。5は須恵器坏身の口縁部。6は復原口径約16cmの甕、7は復原口径約17cmの甕で、いずれも摩滅が著しいものの胴部内面にはケズリが明瞭に観察される。7については加熱により赤褐色に変色している。第160図13は5×5mmの青色のガラス小玉で孔は径2mm。

11号竪穴住居跡（図版60 第84図）

11号竪穴住居跡は北地区の北端東側に位置し、古墳時代の10号竪穴住居跡には切られるが17号竪穴住居跡は切る。南2mには12・21号竪穴住居跡が、南西2mには13号竪穴住居跡がある。10号住居跡に北側1/4ほどを切られているが、5.1×4.8mの正方形に近い平面プランを呈していることがわかる。カマドは北壁に付設されていたと考えられるが、10号住居跡のため遺存していない。支柱穴は位置的に妥当と考えられるものが4本分検出されているが、深さは20～30cmといずれも浅い。遺物は量的に少ないが7点を図示した。

遺物（第85図8～13 第160図12）第85図8～10は須恵器坏蓋の口縁部。11は口径11.6cm、器高3.9cmの須恵器坏身で、底部外面には「×」のヘラ記号が施される。12は土師器甕の口縁部、

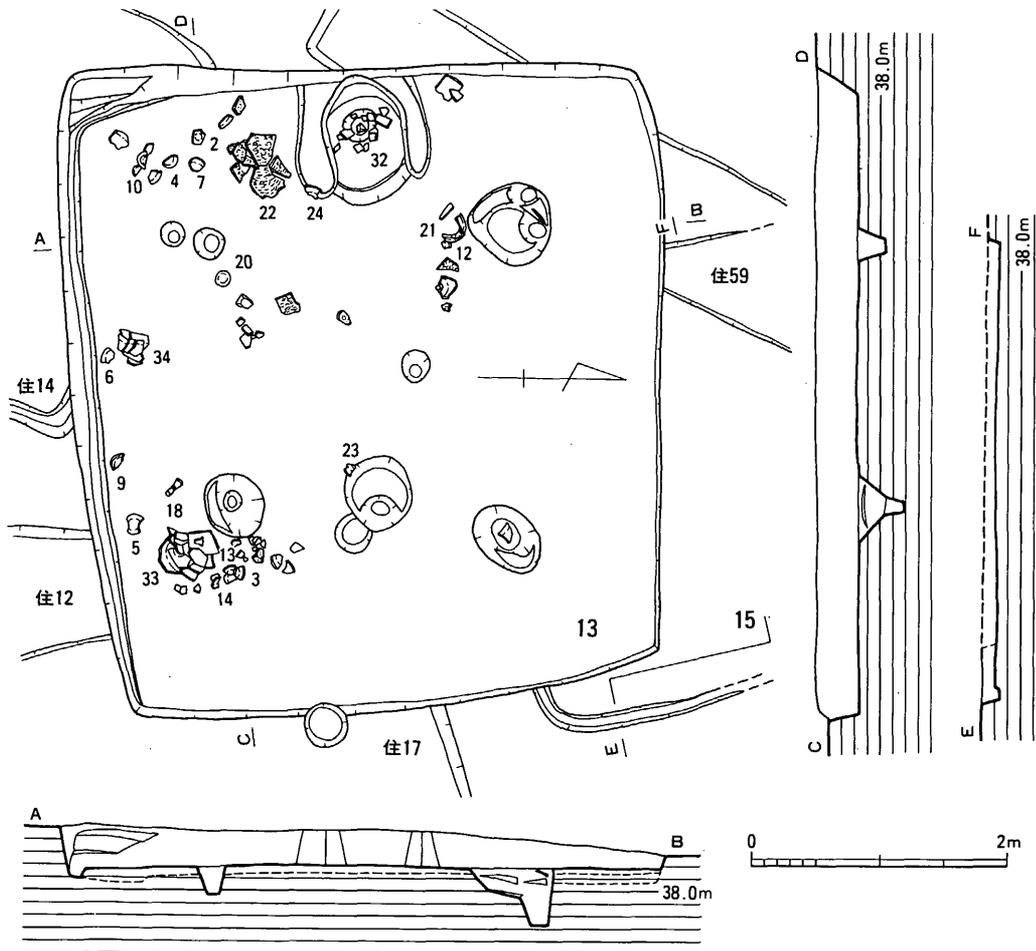


第 87 図 12号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

13は復原口径約18cmの土師器甕で、いずれも内面にはケズリが窺える。第160図12は5.5×5mmの比較的大きな青色のガラス玉。

12号竪穴住居跡（図版60 第86図）

12号竪穴住居跡は北地区の北端やや東側に位置し、古墳時代の13・17・21号竪穴住居跡を切る。北2mには11号竪穴住居跡と、西1mには13号竪穴住居跡とも近接する。住居跡の北東隅は開墾時の削平により残らないが、南北長については4.0mという数値が得られている。東西長については北壁付近で3.2m、南壁では3.6mを測り、南側に開く台形を平面プランとする。カマドは北壁中央部に付設されるが、この付近は開墾による削平が及んでいるところで、検出したカマドも袖が厚さ5cmほどしか残っていなかった。袖は黄褐色の粘土で作られ、中央部手前には火床としての焼土の広がり確認できた。この焼土上からは加熱により赤褐色に変色した甕の胴部破片が出土したが図示できるものではなかった。床面において幾つかの柱穴を検出したが、位置的にも深さにおいても支柱穴と認定できるものではなかった。南壁と西壁の南側



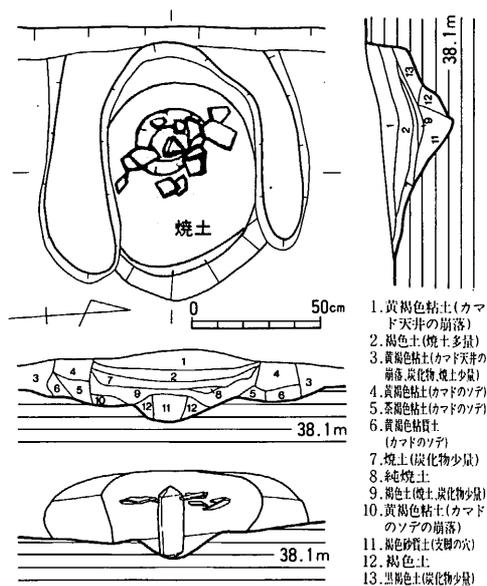
第 88 図 13・15号竪穴住居跡実測図 (1/60)

には、幅20cm、深さ5cmの周溝がL字状に巡る。図示した遺物のうち第87図1~3・7と第156図8・9と第160図15は床面からの出土。このうち第156図8・9の土製人形と第160図15の水晶製の切小玉は住居跡の北東部（カマドの東側）から纏まって出土した。遺物自体といい出土状況といい、祭祀性の強いものである。

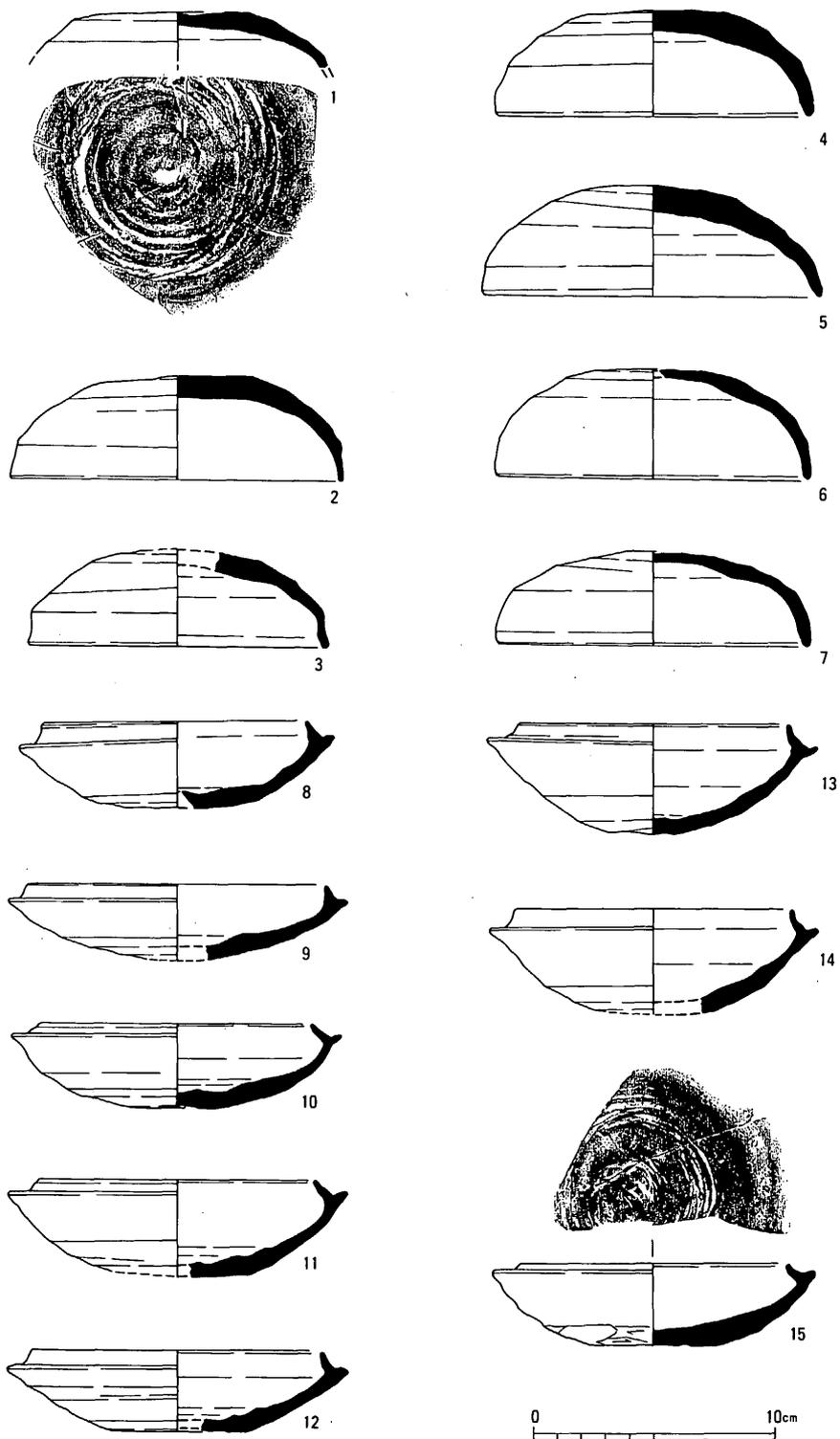
遺物（第87図 第156図8・9 第160図15）第87図1は復原口径約12cmの須恵器坏蓋、2・3はともに復原口径約12cmの須恵器坏身で、1の天井部および3の底部には「×」のヘラ記号が、2の底部には螺旋状のヘラ記号がそれぞれ施されている。4・5は須恵器坏身の口縁部。6は復原口径約11cmの須恵器坏身。7は復原口径約13cmの土師器の高坏であろうか。8は土師器甕の口縁部で、内面にはケズリが窺える。9は甕の把手であるが、この大きさから判断して小形の甕であろう。第156図8・9は土製の人形で、いずれも高さ4.5cm、最大横幅2.6cmを測る。手足や頭部は5つの小さな突起として表現されるが、すべて微妙に前後させることによって、立体的かつ動的な雰囲気を出している。この2点は接して出土したが、これに伴って同じ場所から第160図15の水晶製切小玉が出土している。サイズは11×9mmで径2mmの孔が中央部を貫通するが、この孔の一端には平坦面が作出される。

13号竪穴住居跡（図版61~63 第88・89図）

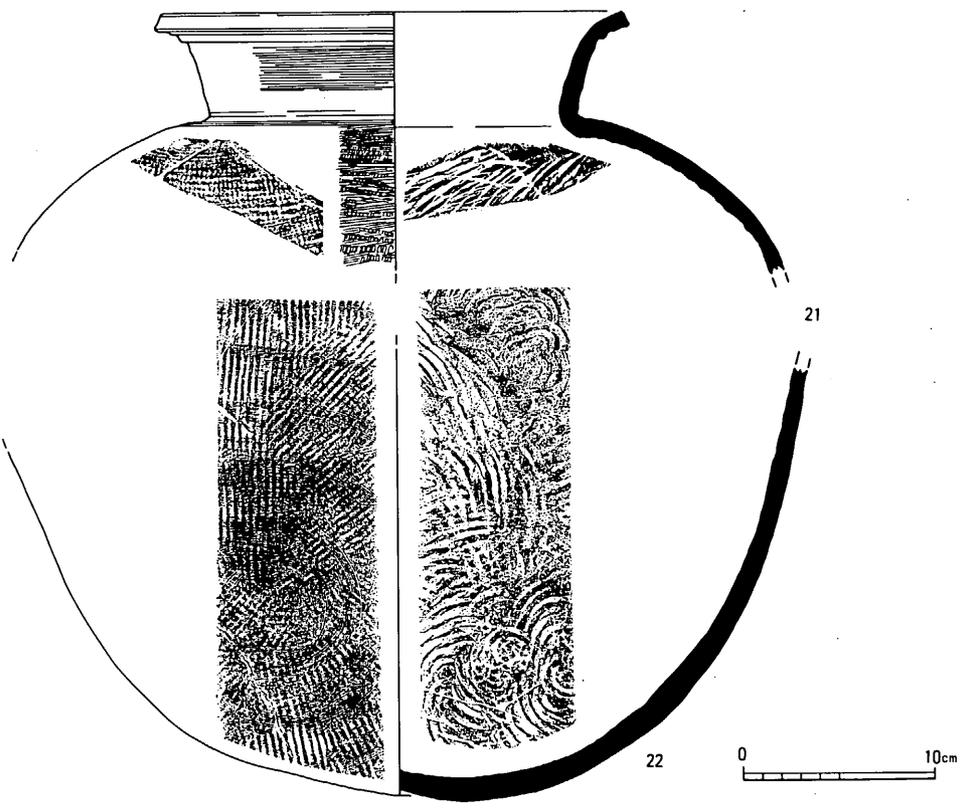
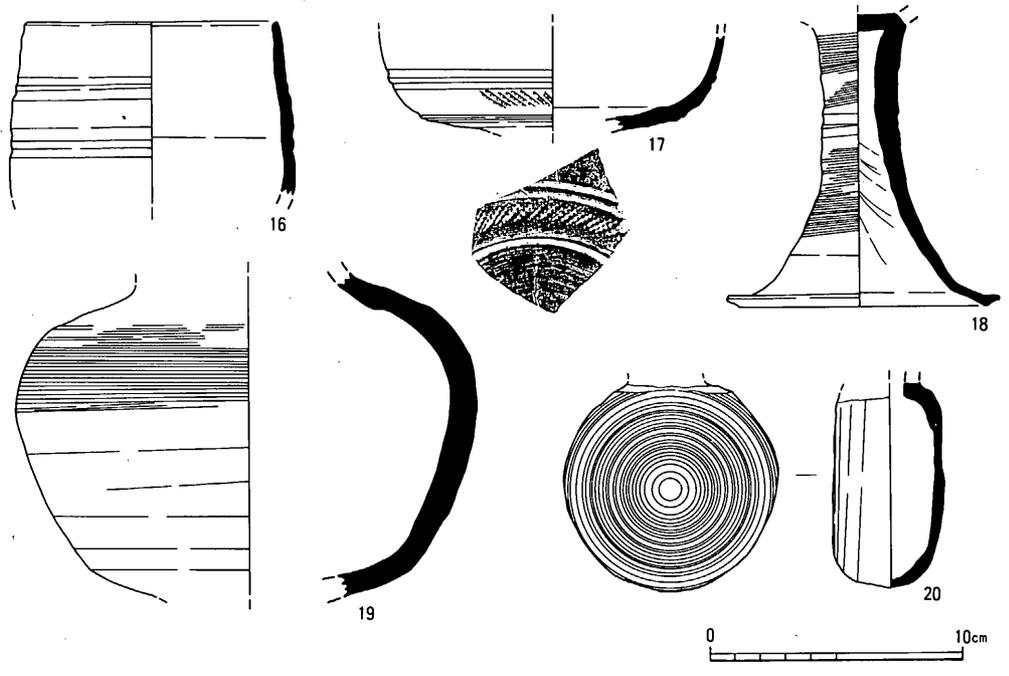
13号竪穴住居跡は北地区の北端中央部に位置し、弥生時代の15・59号竪穴住居跡や古墳時代の14・17号竪穴住居跡は切るが、古墳時代の12号竪穴住居跡には切られるという先後関係を有する。平面プランは5.1×4.6mの東西方向に長い長方形を呈する。南壁と西壁の一部には幅15cm、深さ5cmの溝がL字状に巡り、南西隅には2段のテラスができる。4本の主柱穴のうち南西のものは径20cm、深さ25cmと小さく浅いが、他の3本については径50cm、深さ45cmとそれなりに大きく深い。西壁中央部には105×95cmのサイズのカマドが付設される。茶褐色粘土の上に黄褐色粘土を積み上げて作った幅20cmほどの袖は明確に検出され、カマド中央部には長さ28cmの支脚が径25cm、深さ8cmの小さな穴の中に立てられていた。この支脚の中位付近のレベルで焼土がカマドの中に広がるが、これがカマド使用時における火床面に相当する。支脚の先端周辺には第93図32に図示された加熱によって赤褐色に変色した甕が幾つかの破片の状態で出土したが、これは支脚に直接支えられていた甕であろう。厚さ7cmほどの貼り床を除去すると、



第 89 図 13号竪穴住居跡
カマド実測図（1/30）



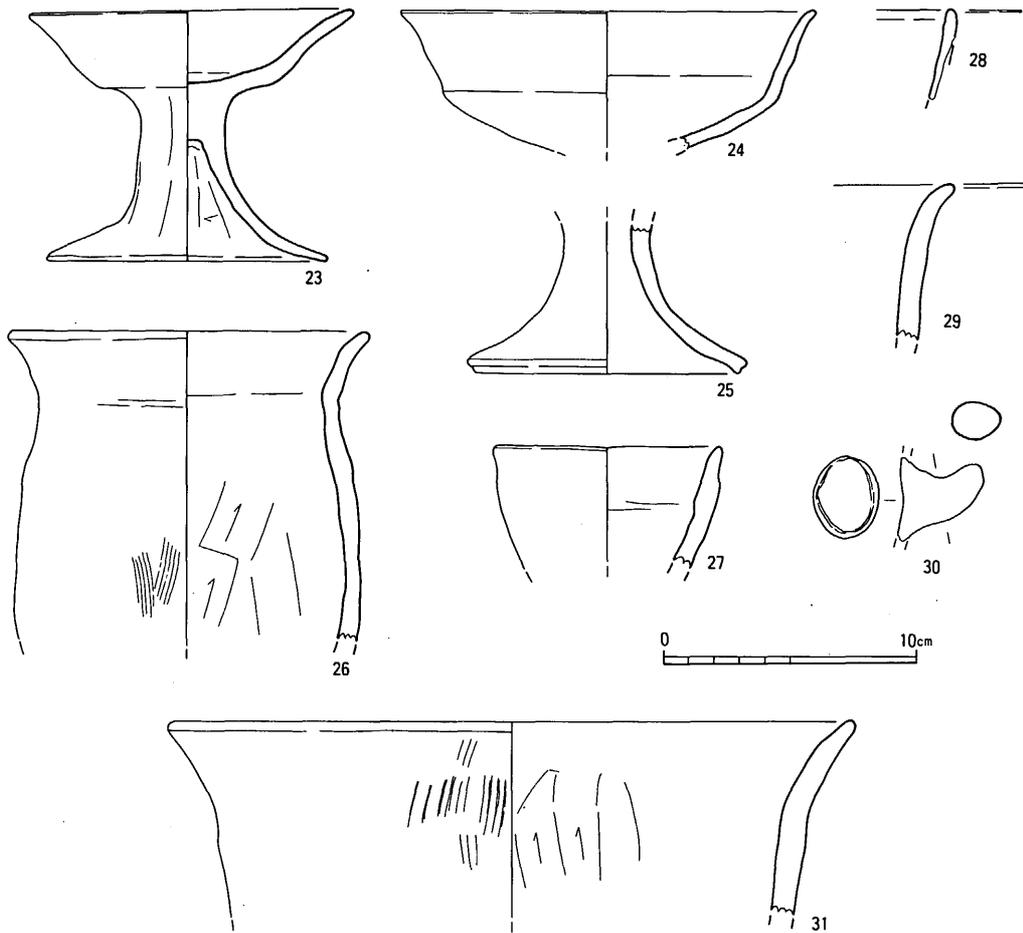
第 90 图 13号竖穴住居跡出土土器実測図.1 (1/3)



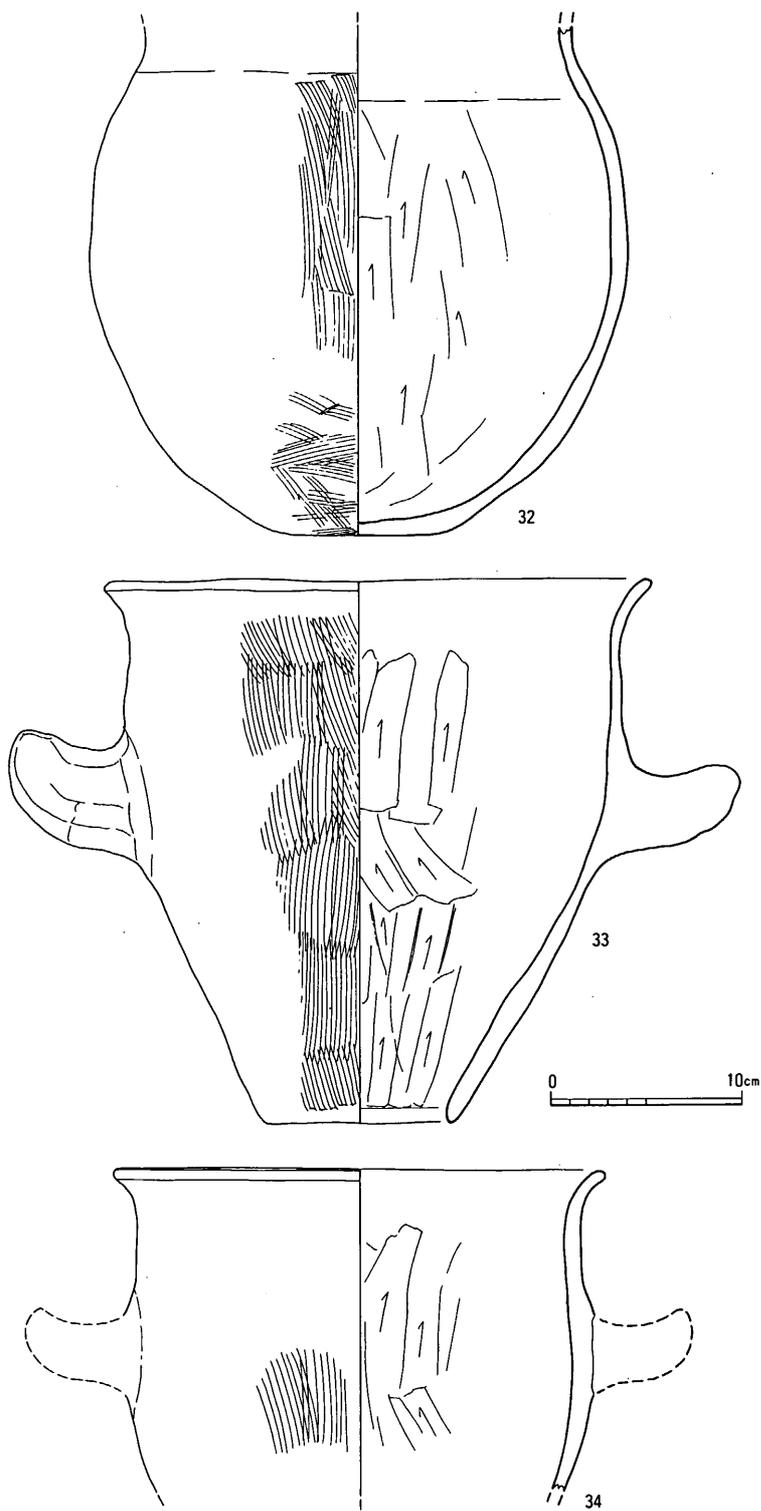
第 91 图 13号竖穴住居跡出土土器実測図.2 (1/3 21・22は1/4)

南壁に沿って幅50cm、深さ10cmの細長い掘り込みが検出されたが、その性格については判然としない。北西隅においても同様の掘り込みを貼り床の下から検出した。壁高は30cmと本遺跡においては比較的残りが良かったこともあって、多くの遺物が出土した。図示したものの多くは床面上から出土したものであるが、完形に復原できるものは意外に少なく、あたかも破損品だけを残しているような印象を受けた。第156図2の土玉は北東側の支柱穴からの出土。第158図20の鉄斧は北西側の支柱穴からの出土。

遺物（第90～93図 第156図2 第157図9・11 第159図15・20 第160図3）第90・91図はすべて須恵器。第92・93図はすべて土師器。1～7は坏蓋で口径は12～14cm、器高は4～4.5cmの範囲に収まる。1の天井部内面には青海波の当て具圧痕がある。8～15は坏身で、口径は12～13cm、器高は3～4cmの範囲に収まる。15の底部内面には青海波の当て具圧痕が残る。16は復原口径約10cmの椀で、2条の沈線文が2段に亘って施される。17は高坏の坏部で、カキ目と沈線文と連続刺突文とが施される。18は復原裾径約11cmの高坏の脚部で、カキ目と沈線文とが施される。19



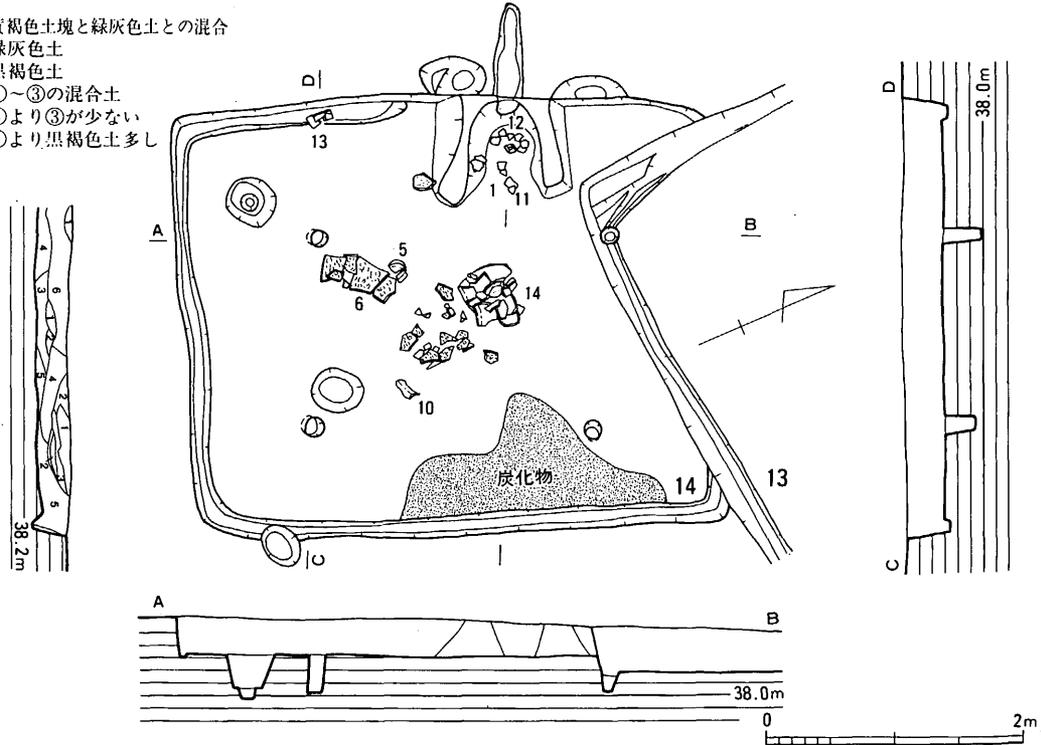
第 92 図 13号竖穴住居跡出土土器実測図.3 (1/3)



第 93 图 13号竖穴住居跡出土土器实测图.4 (1/4)

は壺の胴部で、外面上半にはカキ目が施される。20は径8.5cmの小形の提瓶でカキ目が施される。21・22はおそらく同一個体の甕で、復原口径約25cmを測る。外面にはカキ目の後に格子目のタタキが施されるが、上部にはカキ目は密に施されるのに対して、下部のカキ目は間隔を開けて螺旋状に上がっていく。内面には青海波の当て具圧痕が明瞭に残る。23は口径12.7cm、裾径11.1cm、器高10.0cmの高坏で、摩滅はしているものの脚部内外面のケズリはわずかに観察される。脚部は加熱により赤褐色に変色している。24は復原口径約16cmの高坏坏部、25は裾径10.9cmの高坏脚部。26は復原口径約14cmの甕で、外面にはハケ、内面にはケズリが施され、加熱により赤く変色。27～31はいずれも加熱により赤く変色した甕であろうか。31は復原口径約27cmで、外面にハケ、内面にケズリが施される。30の把手の内面中央部には刺突による小さな穴があいている。32はカマドの中から出土した甕の胴部で、外面にはハケ、内面にはケズリが施される。外面は加熱によりかなり赤く変色している。33は復原口径約29cm、裾径9.8cm、器高29.0cmの甕で、外面にはハケ目が内面にはケズリが明瞭に残る。34は把手が接合面で剥がれ落ちた甕。復原口径は約26cmで、外面にはハケ目が、内面にはケズリがわずかに窺える。第156図2は20×19mmの土玉で中心部に径2mmの孔が貫通する。第157図9・11はともに砂岩の砥石である。9は欠損している両端部を除いてすべて砥石として使用しているが、研磨→線状痕→敲打痕の順で異なった使用が行なわれている。11は敲石としても使用している。第158図15は

1. 黄褐色土塊と緑灰色土との混合
2. 緑灰色土
3. 黒褐色土
4. ①～③の混合土
5. ④より③が少ない
6. ④より黒褐色土多し

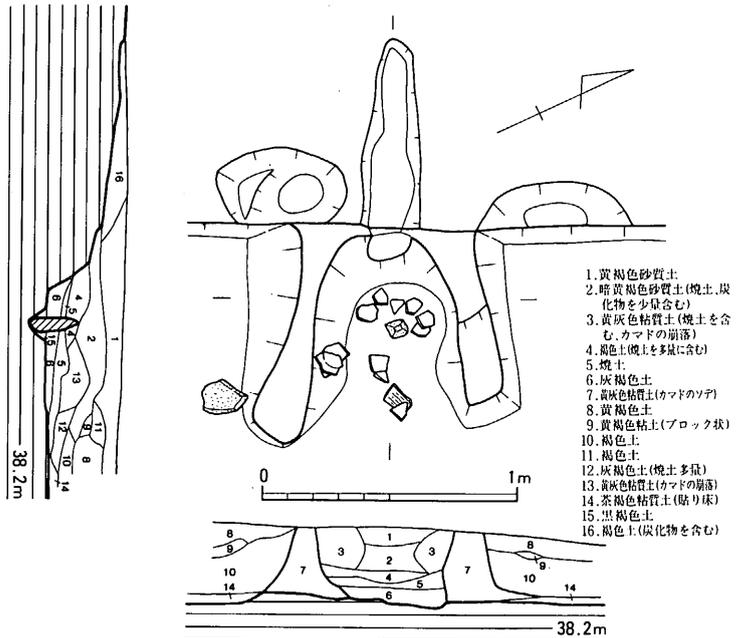


第 94 図 14号竖穴住居跡実測図 (1/60)

折れてしまった刀子で厚さ2mm。20の鉄斧は縦1.8cm、横10.2cm、厚さ3mmを測る。第160図3は紫色のガラス玉で2.5×3.5mm。

14号竪穴住居跡 (図版64~66 第94・95図)

14号竪穴住居跡は北地区の北端中央部に位置し、13号竪穴住居跡に切られる。西1.5mには古墳時代の7号竪穴住居跡が、南2mには1号掘立柱建物跡と近接する。13号竪穴住居跡に切られているのはこの住居跡の北側

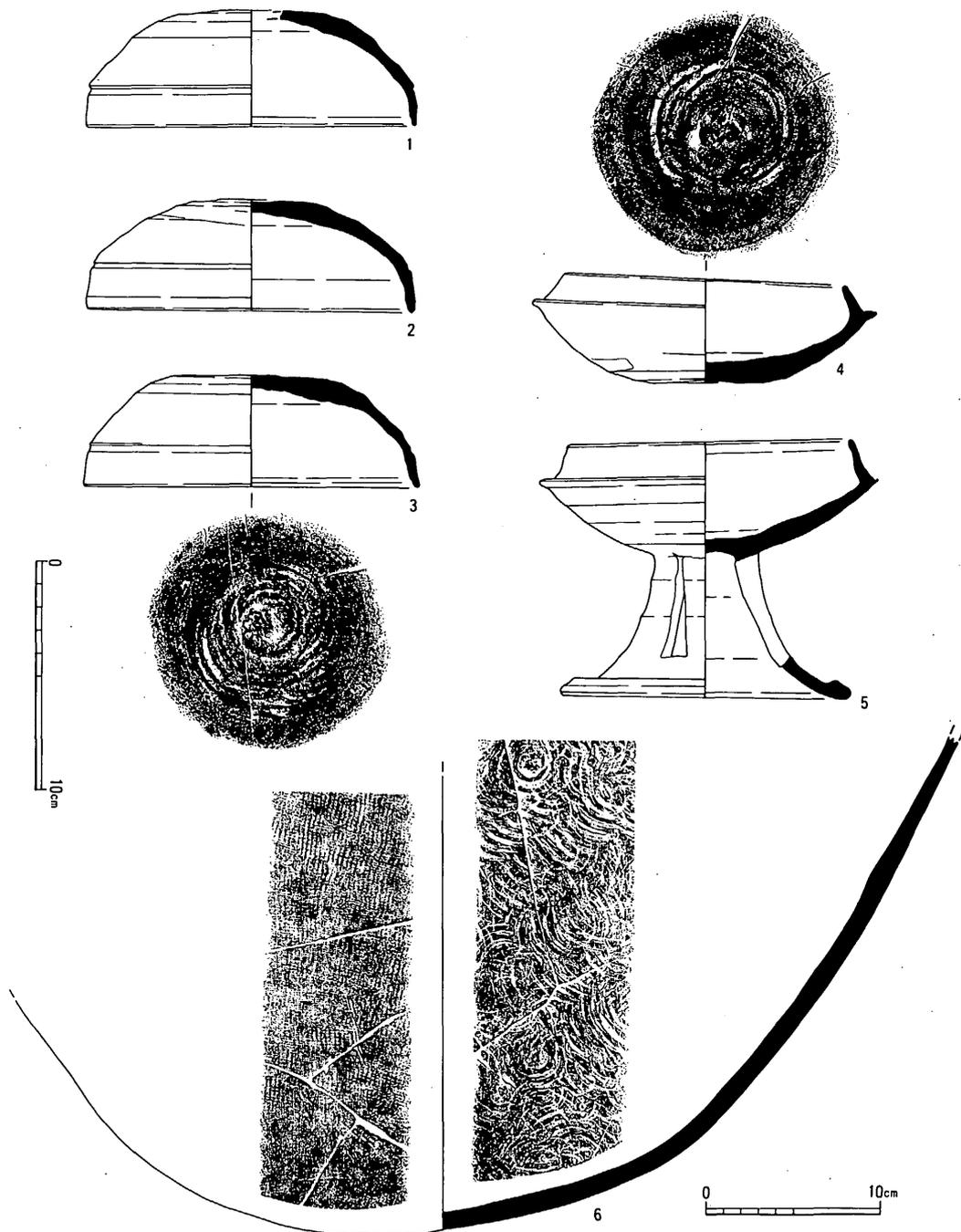


第 95 図 14号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)

1/4であるが、平面プランは4.2×3.5mの南北方向に長い長方形を呈することがわかる。壁に沿って幅15cm、深さ4cmの浅い溝が巡るが、おそらくカマド以外の壁に全周するものと考えられる。4本の支柱穴は径12cm、深さ40cmとかなり細い。カマドは東壁の中央部よりわずかに北側に付設され、幅20cm、長さ75cmの煙道が住居跡の外へ突出している。あたかも砂粒を混和剤として混入したような黄灰色粘質土によって作られた袖の残りは良好で、火に当たったその内面は相当に赤く焼けていた。カマドの内部には崩落した袖の黄灰色粘質土が上部に堆積していたが、これを除去すると支脚や焼けた土器片 (第97図12) が出土した。この土器片の下部にはほぼ全面に亘って焼土が広がるが、これが火床となる。支脚は長さ18cmで、これを据える小穴が地山に掘り込まれている。カマド天井部の崩落により内部の土器や支脚が密封されたような状態であったが、カマドで使用されたはずの甌や甕はカマドからではなく床面からほぼ完全な形で出土した。そもそも、この住居跡の床面にはほぼ全面に亘って炭化物が薄く広がっていたが、建築材のような形態をしたものはなく細片として出土しており、多くの遺物はこの炭化物に混ざるような状態で出土した。ただし、完形に復原できる土器はこの甕と甌の2点に限られ、他は破損品ばかりであり、砥石や鉄器は見当たらない。カマドに対向する東壁の中央部については厚さ3cmほどの炭化物が1.9×0.9mの範囲で不定形に広がっていたが、これには焼土は含まれておらず、他の場所からもたらされたものと考えられる。以上のような状況から、この住居跡は廃絶時点で必要なものは持ち出したが、カマドに関連する遺物についてはこの住居跡内に残して人為的に焼失させたものと考えられる。土層断面の観察では、その後は壁際から黒褐

色土が入り込み徐々に埋まっていったようである。図示した遺物の多くは床面からの出土であるが、第96・97図1・11・12はカマドからの出土である。

遺物（第96～98図）第96～98図1～6は須恵器、7～14は土師器である。1～3は坏蓋でいずれも

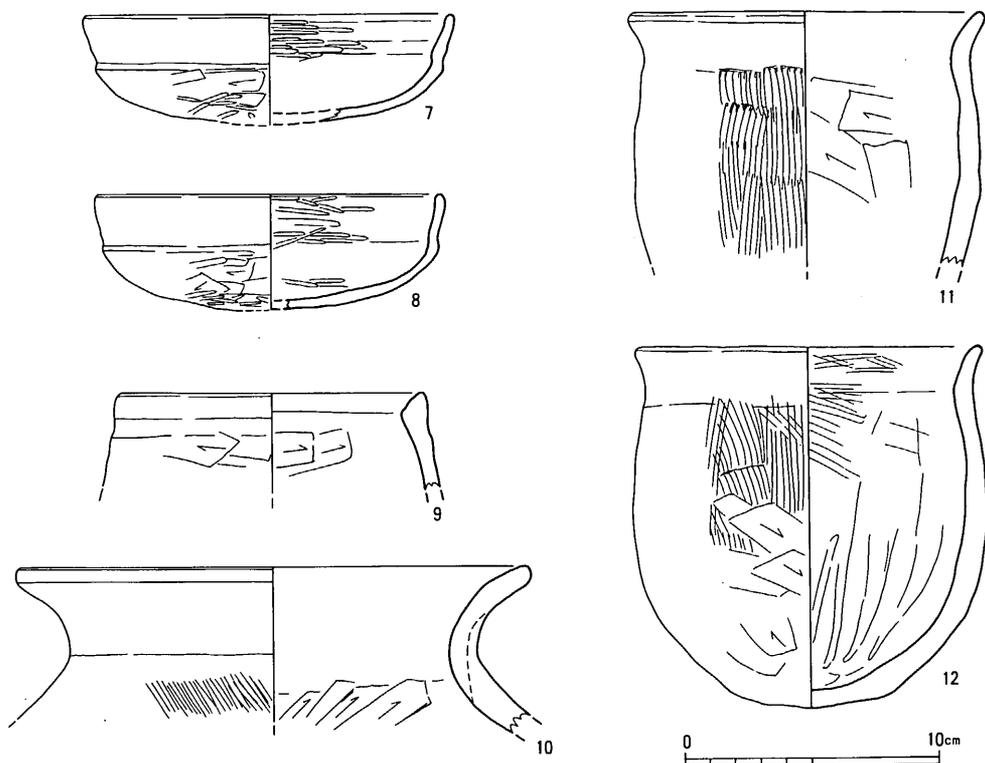


第 96 図 14号竖穴住居跡出土土器実測図.1 (1/3 6は1/4)

復原口径は約14cm、器高は5cmとやや大きい。3の天井部内面には、青海波の当て具圧痕が残る。4は口径12.5cm、器高4.5cmで、底部内面には青海波の当て具圧痕が窺える。5は口径12.4cm、復原裾径約12cm、器高11.0cmで脚部には縦長の透孔が3方向に入る。1~5は完形ではなく、どこかが欠損している。6は甕の胴下半部で、外面にはカキ目の後に格子目のタタキが、内面には青海波の当て具圧痕が残る。7・8は復原口径約14cmの坏身で、底部外面には静止ヘラケズリが、内面には研磨が施される。9は復原口径約12cmの甕で、内外面ともにケズリが窺える。10は復原口径約18cmの甕で、外面にはハケが、内面にはケズリが施される。11は復原口径約14cmの甕で、外面にはハケが、内面にはケズリが施される。12はほぼ完形になる甕で、口径は13.6cm、器高14.2cm。外面はハケを施した後に胴下半部が削られ、内面はハケの後にナデられる。13は口径19.8cm、器高27.8cmの甕で、外面にはハケを施した後に頸部に横方向のハケがさらに施され、内面は全面的に削られる。底部は擦れて摩滅しており、胴下半部については加熱により赤褐色に変色するとともに煤が付着する。14は口径29.1cm、裾径9.7cm、器高33.8cmの甕で、外面にはハケ目が、内面にはハケ後のケズリが観察される。裾部一帯は加熱により変色し、口縁部付近には接合痕が残る。

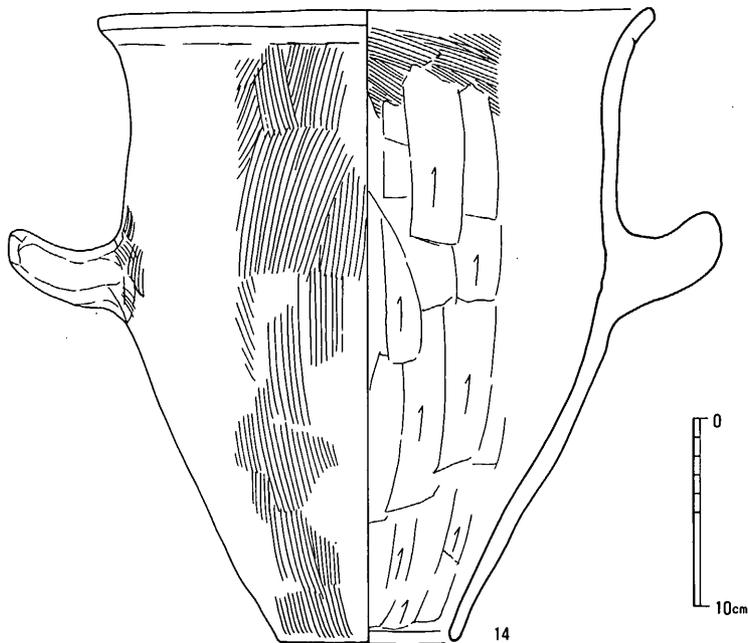
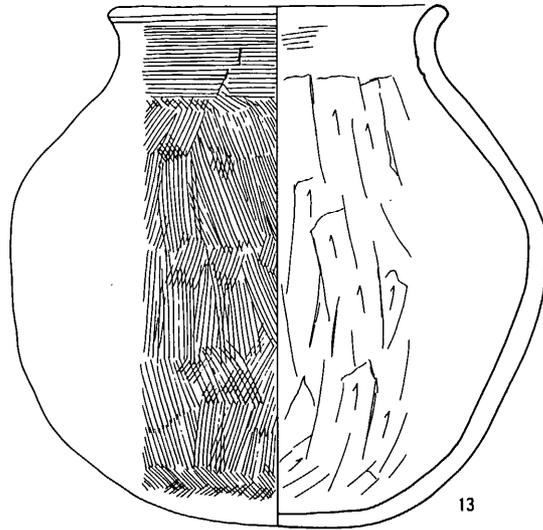
15号竪穴住居跡（第88図）

15号竪穴住居跡は北地区の北端中央部に位置し、古墳時代の13号竪穴住居跡には切られるが、

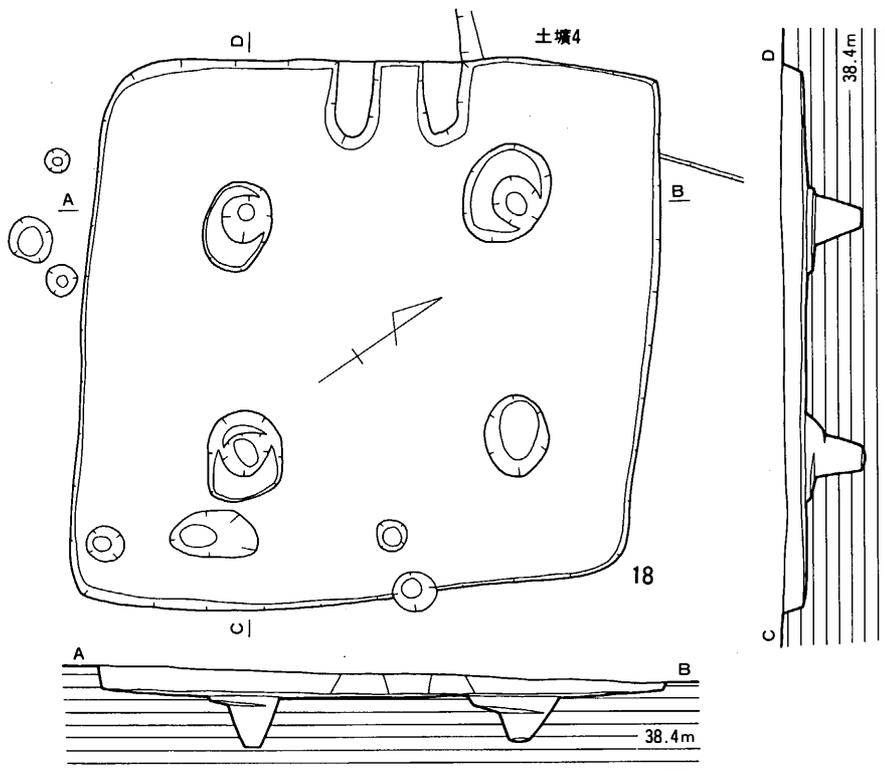
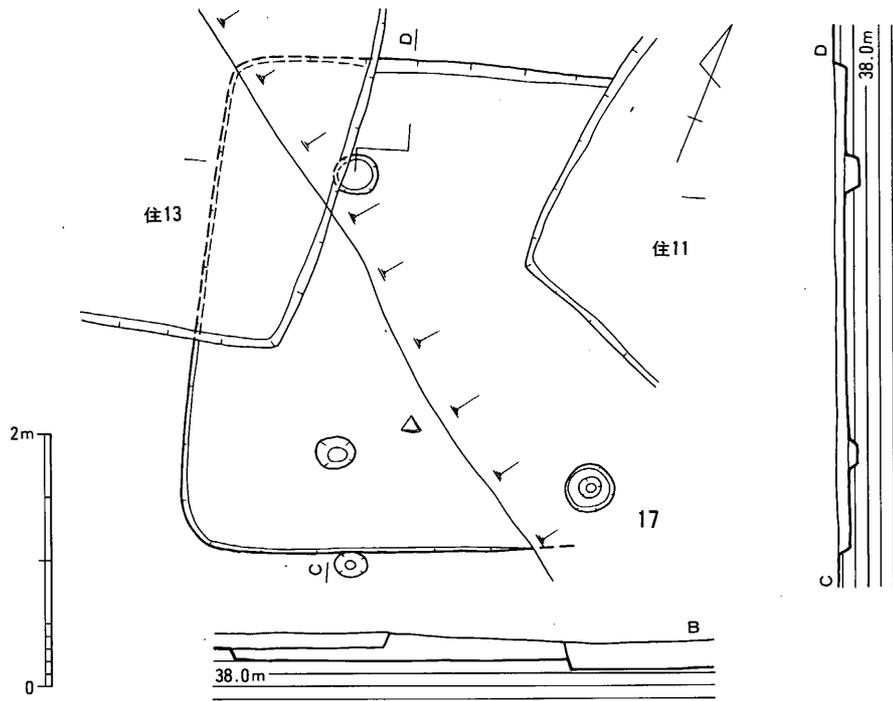


第 97 図 14号竪穴住居跡出土土器実測図.2 (1/3)

弥生時代の59号竪穴住居跡は切る。この住居跡は開墾時の削平により大部分が消失しており、東西方向については3.5mという数値が得られるものの、南北方向については2.5mまでしか測れない。南壁と東壁に沿って幅10cm、深さ4cmの溝が巡る。遺物は数点の弥生土器片が出土するのみであるが、南壁を中心に小溝が巡ること、弥生時代住居跡の埋土とは異なって黒褐色土



第 98 図 14号竪穴住居跡出土土器実測図.3 (1/4)



第 99 图 17・18号竖穴住居跡実測图 (1/60)

が埋土となること、弥生時代の住居跡を切るといった諸特徴より、本住居跡は古墳時代に属するものと考えられる。

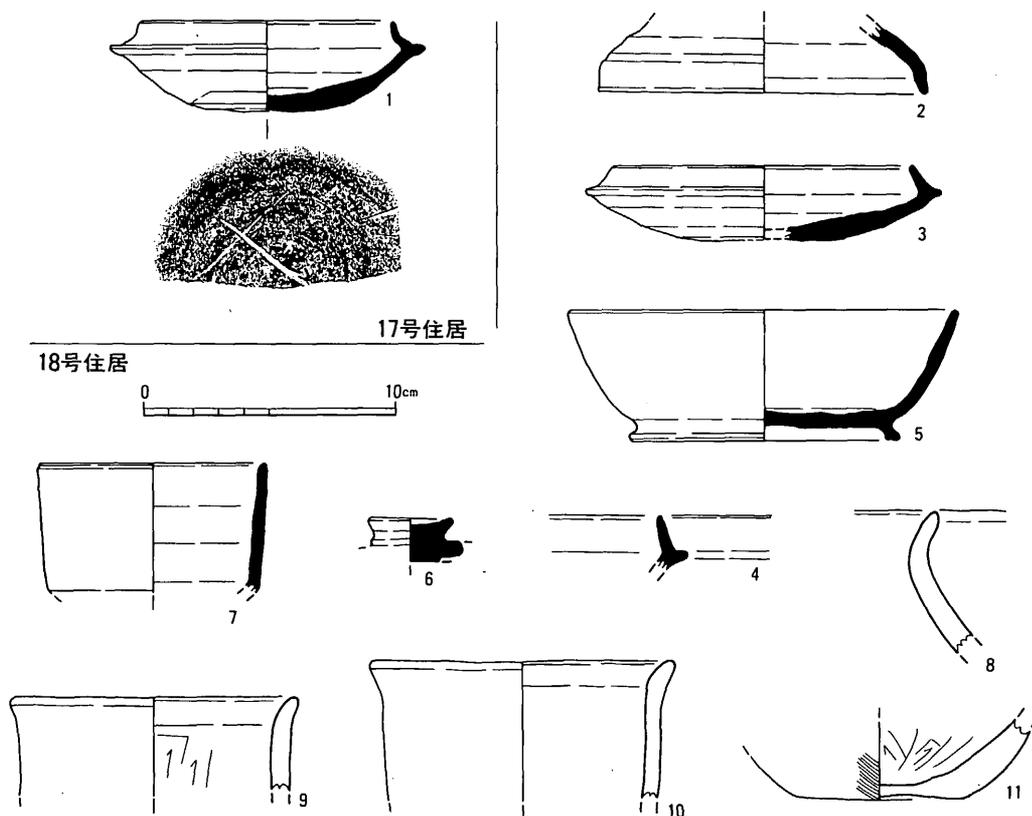
17号竪穴住居跡 (図版60 第99図)

17号竪穴住居跡は北地区の北端中央部に位置し、古墳時代の11・12・13号竪穴住居跡に切られる。南西50cmには21号竪穴住居跡と近接する。多くの住居跡に切られ、また開墾時の削平が大がかりに行なわれていることから、この住居跡の調査にはかなりの時間を費やした。平面プランについては平行四辺形のように若干歪んだ方形を呈するようで、南北方向については3.9mを測ることができるが、東西方向については東壁が全く残っていないことから現存長の3.0mしかわからない。カマドは検出されず、支柱穴も位置的には問題ないものの深さ10cmほどで浅すぎる。遺物は極めて少なく、図示できたのは須恵器1点だけである。

遺物 (第100図1) 第100図1は復原口径約10cmの須恵器坏身で、底部外面には「X」のヘラ記号が施される。

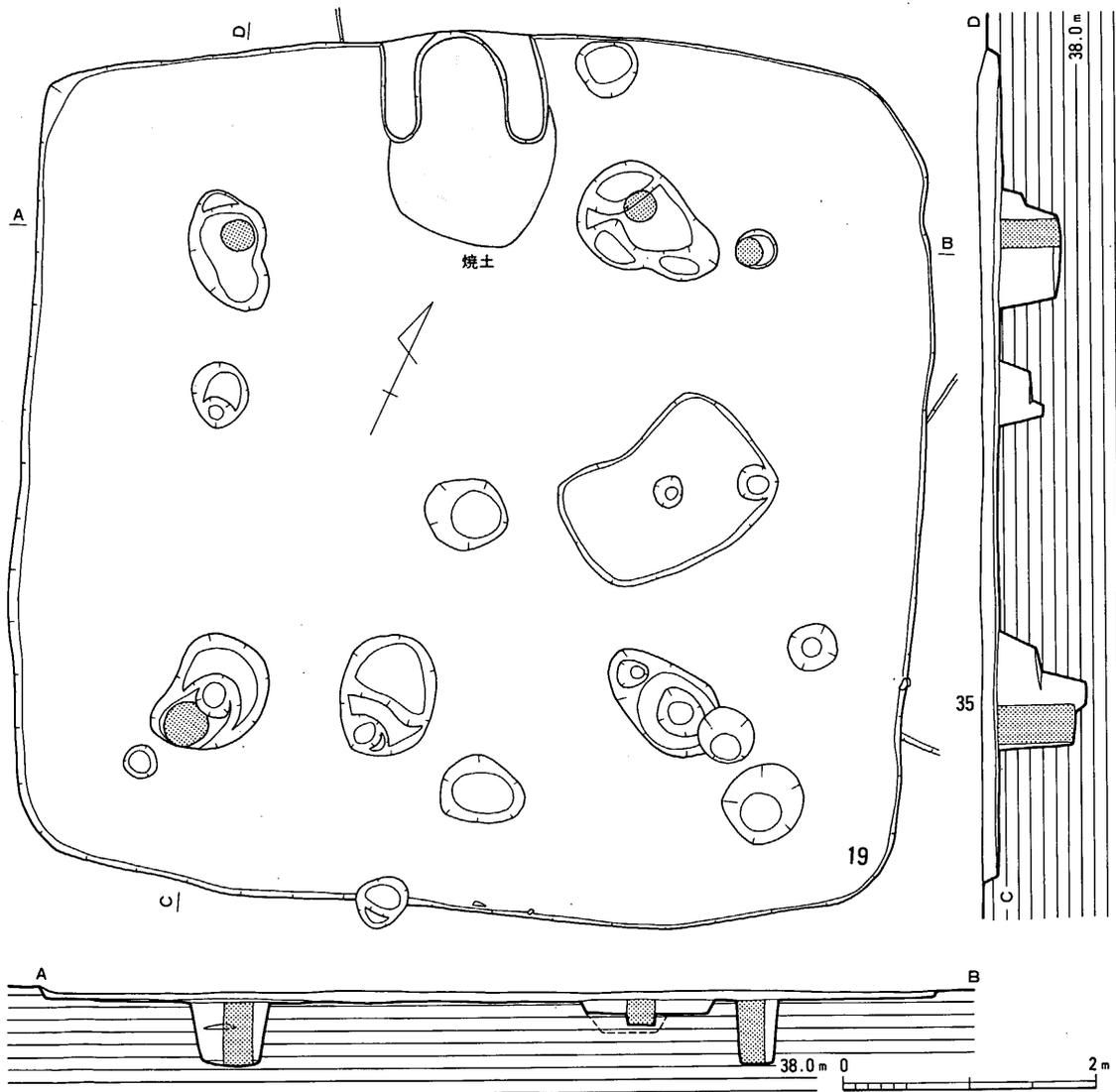
18号竪穴住居跡 (図版67 第99図)

18号竪穴住居跡は北地区中央部の西端に位置し、古墳時代の4号土壇を切る。南1mには古墳



第 100 図 17・18号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

時代の8号土壌が、東2mには30号竖穴住居跡がある。平面プランについては4.5×4.3mのほぼ正方形に近い形態を呈する。ただし、東隅については若干住居跡の内側へ入り込むようになるが、4本の主柱穴のうち東隅に近接するものはこの住居跡のプランに応じて若干内側へ入り込む。主柱穴は深さ40cmほどに揃っており、最初に径60cmほどの浅い掘り込みを行なってから径30cmほどを深く掘る。カマドは黄褐色の粘土によって作られた幅25cm程度の袖が検出され、その中央部に支脚が立っていた。しかし、カマド内部から遺物の出土はなく、またこの住居跡の床面からも遺物の出土はなく、住居廃絶時に遺物のほとんどは持ち出されたものと考えられる。したがって、図示した遺物はすべて埋土中から出土したものである。

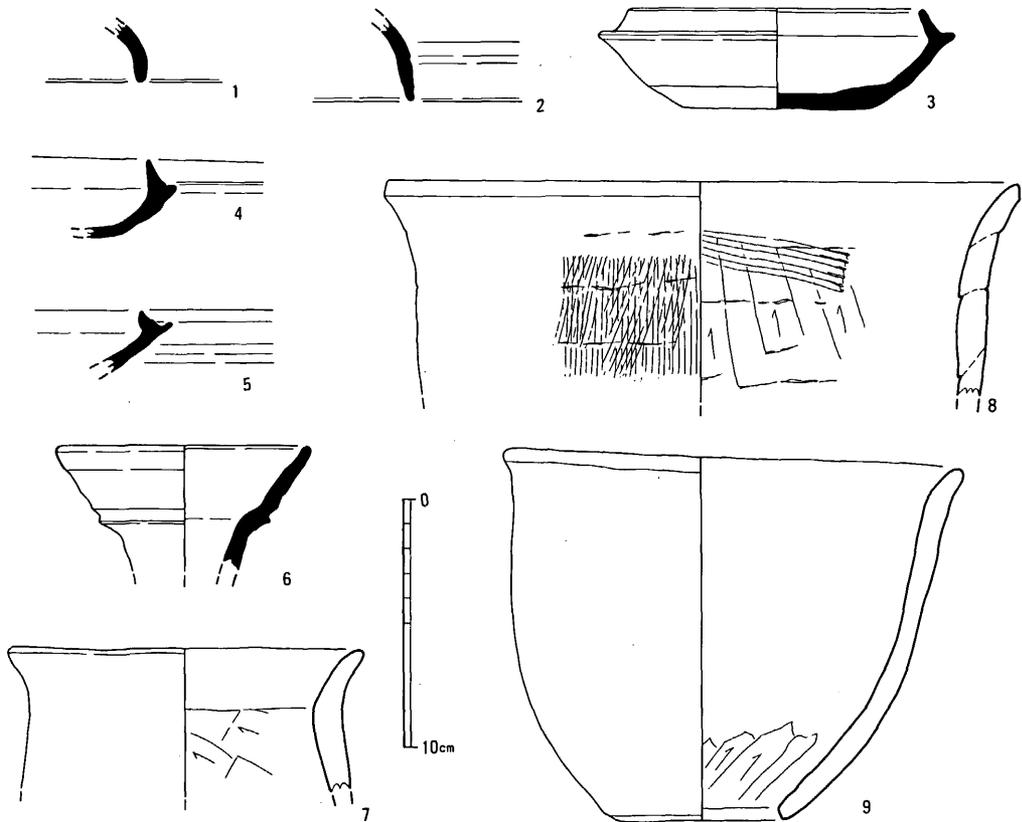


第 101 図 19号竖穴住居跡実測図 (1/60)

遺物（第100図2～11 第156図15）第100図2～7は須恵器、8～11は土師器である。2は復原口径約13cmの坏蓋。3は復原口径約14cmの坏身。4は坏身の口縁部。5は復原口径約15cm、器高5.2cmの坏身であるが、本遺跡では数少ない7世紀後半代に属するものである。6は坏蓋の摘み。7は復原口径約9cmの椀である。8は甕の口縁部。9は復原口径約11cm、12は復原口径約12cmの甕で、いずれも摩滅が著しいが9については内面にケズリが窺える。11も甕の底部で、外面にはハケが、内面にはケズリが施され、外面には炭化物が付着する。第156図15は口径4.6cm、器高2.8cmの手捏ね土器である。

19号竪穴住居跡（図版68 第101図）

19号竪穴住居跡は北地区中央部の東端に位置し、弥生時代の41号竪穴住居跡や古墳時代の27・35・36号竪穴住居跡を切る。南には37号竪穴住居跡と50cmの距離をおいて近接する。平面プランは6.2×6.0mのほぼ正方形に近く、本遺跡の古墳時代の竪穴住居跡としては最大級のものである。4本の支柱穴は径60～80cmで深さ50cmを測るが、これら各々の支柱穴に切られてほぼ同じ場所もしくは近接して存在する別の4本の支柱穴を検出した。これらはこの住居跡を最低1回は建て直した痕跡と考えられる。なお、最初に検出した支柱穴、すなわち建て替えられた住



第102図 19号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

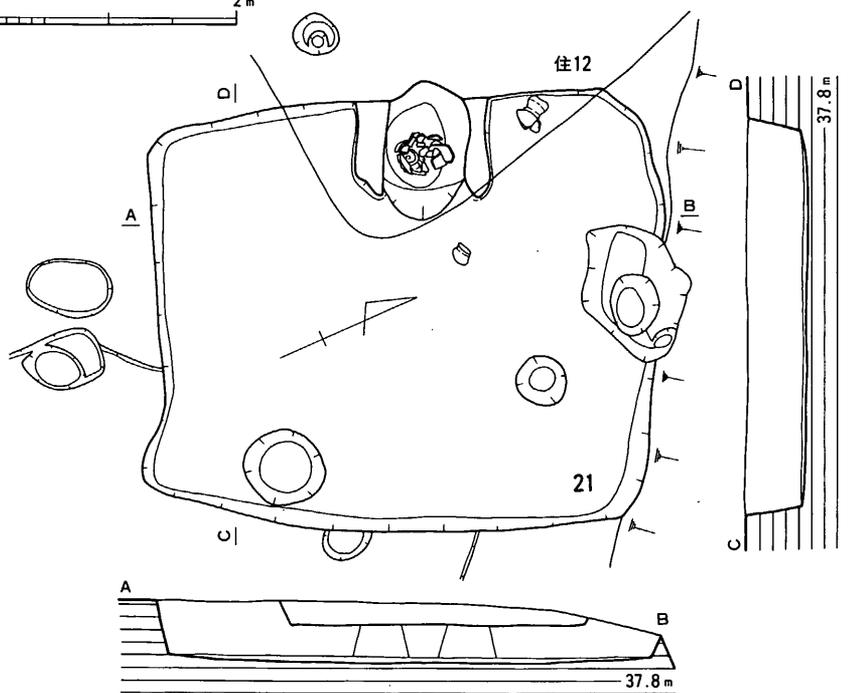
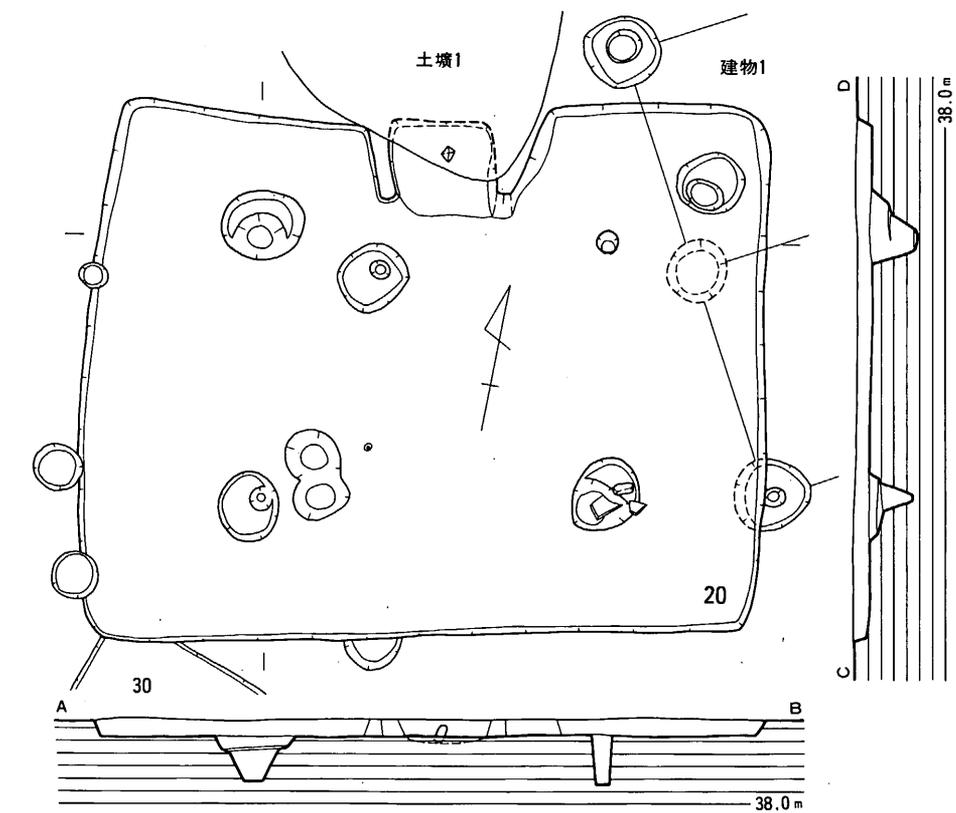
居跡の主柱穴では、径25cm程度の柱痕を確認できた。北壁中央部に付設されたカマドはわずかにしか残らないが、カマドの内部およびその前面において焼土や炭化物の混ざった広がりが見られた。もっとも、これらは火床のように焼土だけが纏まったものではなく、いかなる要因でこのような焼土と炭化物との混じりが広がったのか検証することはできなかった。壁高は8cmほどしかなく、本住居跡の検出時点ですでに床面が部分的に確認できた。したがって、図示した遺物はほぼ床面上出土と認識して良いだろう。

遺物（第102図 第156図10・11 第157図14 第158図3・13）第102図1～6は須恵器、7～9は土師器。1・2は坏蓋の口縁部。3は復原口径約12cmの坏身。4・5は坏身の口縁部。6は復原口径約10cmの甕の口縁部である。7は復原口径約14cmの甕で、摩滅しているが内面にはケズリが施される。8は復原口径約23cmの甕で、外面にはハケが、内面にはケズリの後に口縁部付近のみハケが施される。なお、外面の口縁部には接合痕が残る。9は口径17.7cm、裾径6.7cm、器高15.0cmのほぼ完形に復原できる甕で、把手は付いていない。胎土はかなり粗く、器面調整は全面ほぼナデだが、裾部内面だけわずかにケズリが施される。加熱を受けた痕跡はなく、実際に甕として使用されたかどうかは疑わしい。第156図10は長さ3.1cm、幅1.2cmの土製勾玉で径1mmの孔が頭部を貫通する。11は1/2ほど欠損する土製模造鏡で、幅は2.5cm。第157図14は頁岩製の砥石で、表面と右側面を使用する。表面の平坦な部分については不定方向の線条痕が走る。第158図3は残存長7.4cmの鉄鏃で、最大幅2.3cm、厚さ2mm。13はおそらく先端が尖る鉄器で、幅9mm、厚さ3mm。

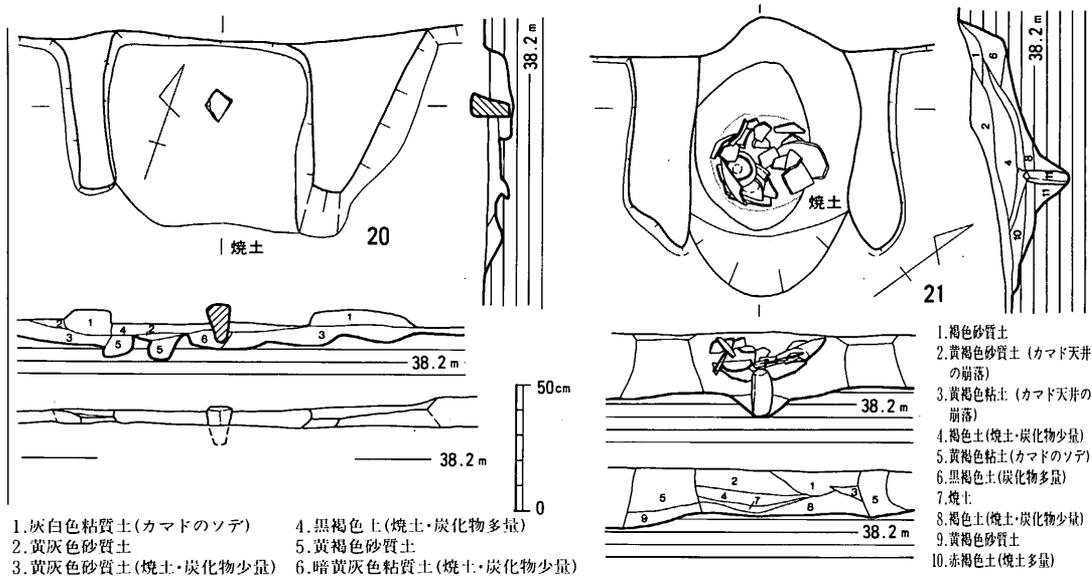
20号竪穴住居跡（図版69・70 第103・104図）

20号竪穴住居跡は北地区やや北寄りの中央部に位置し、古墳時代の1号土壌には切られるが、同じ古墳時代の30号竪穴住居跡や1号掘立柱建物跡を切る。南東2mには3号土壌、南1.5mには29号竪穴住居跡、西3.5mには4号土壌がある。平面プランは5.2×4.2mの長方形を呈し、壁高は15cmを測る。4本の主柱穴のうち北西の1本は径15cm、深さ40cmと細いが、他の3本は径60cm、深さ40cmのサイズで纏まっている。カマドは北壁中央部に付設され、内部からは長さ16cmの自然石を利用した支脚が立ったままの状態で検出された。カマドの袖は灰白色の粘質土で作られ容易に検出できたが、内部には焼土と炭化物とが混じり合った砂質土が均等に広がっており、また遺物の出土がほとんど見られなかったことから、カマドは廃絶時において掃除されたものと考えられる。遺物はそれほど多くはないが、土器以外に土玉や砥石や紡錘車が出土した。

遺物（第105図 第156図3 第157図2 第159図2）第105図のうち土師器は7だけで、他はすべて須恵器。1～3は坏蓋で、復原口径は順に約12cm、12cm、13cmである。1の天井部外面には「#」のヘラ記号が施される。4は復原口径約12cmの坏身。5は復原裾径約9cmの高坏裾部。6は甕の胴上半部で外面にはカキ目の後の格子目のタタキが、内面には青海波の当て具圧痕が窺える。第156図3は2.1×1.0cmの扁平な土玉で、中央部に径1.5mmの孔が貫通する。第157図



第 103 图 20·21号竖穴住居跡实测图 (1/60)



第104図 20・21号竪穴住居跡カマド実測図(1/30)

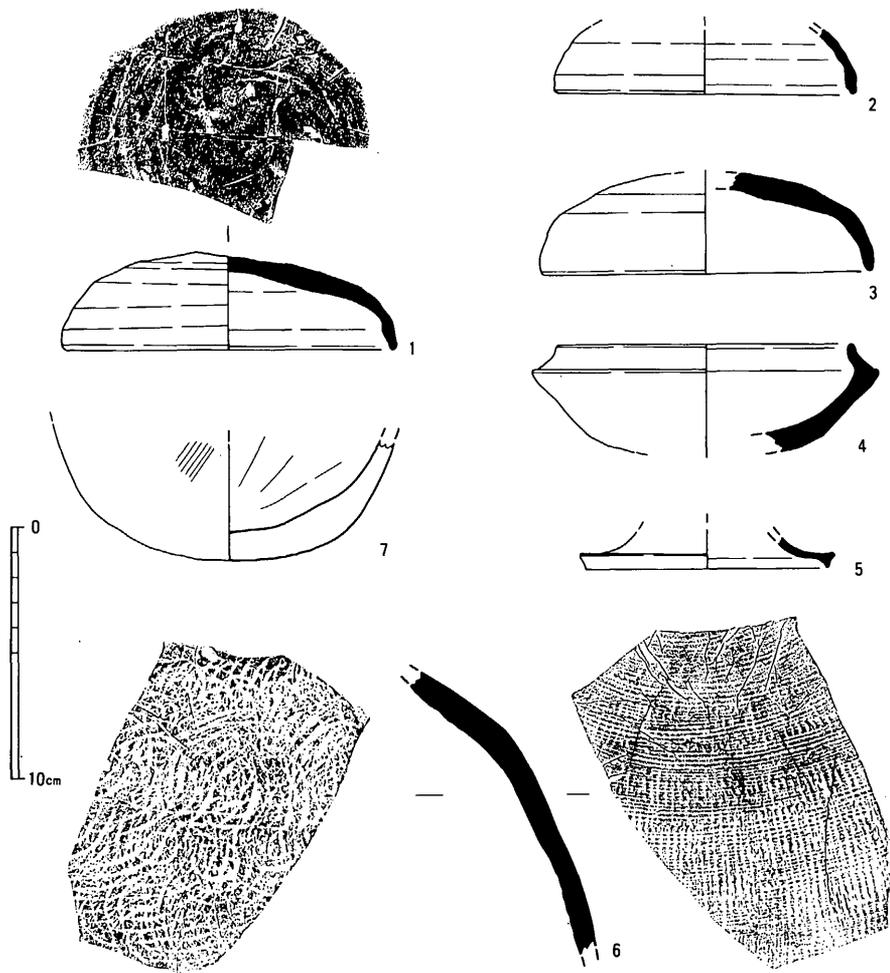
2は頁岩製の砥石で、欠損していない4面は入念に使い込まれる。第159図2は滑石製の紡錘車である。側面に見られる縦方向の稜は製作時の研磨によるもので、使用による横方向の擦れたような削痕もしくは摩滅痕は観察されない。また、貫通する径7mmの孔の淵もほとんど擦れておらず、この紡錘車はほとんど使用されていないものと考えられる。

21号竪穴住居跡(図版71・72 第103・104図)

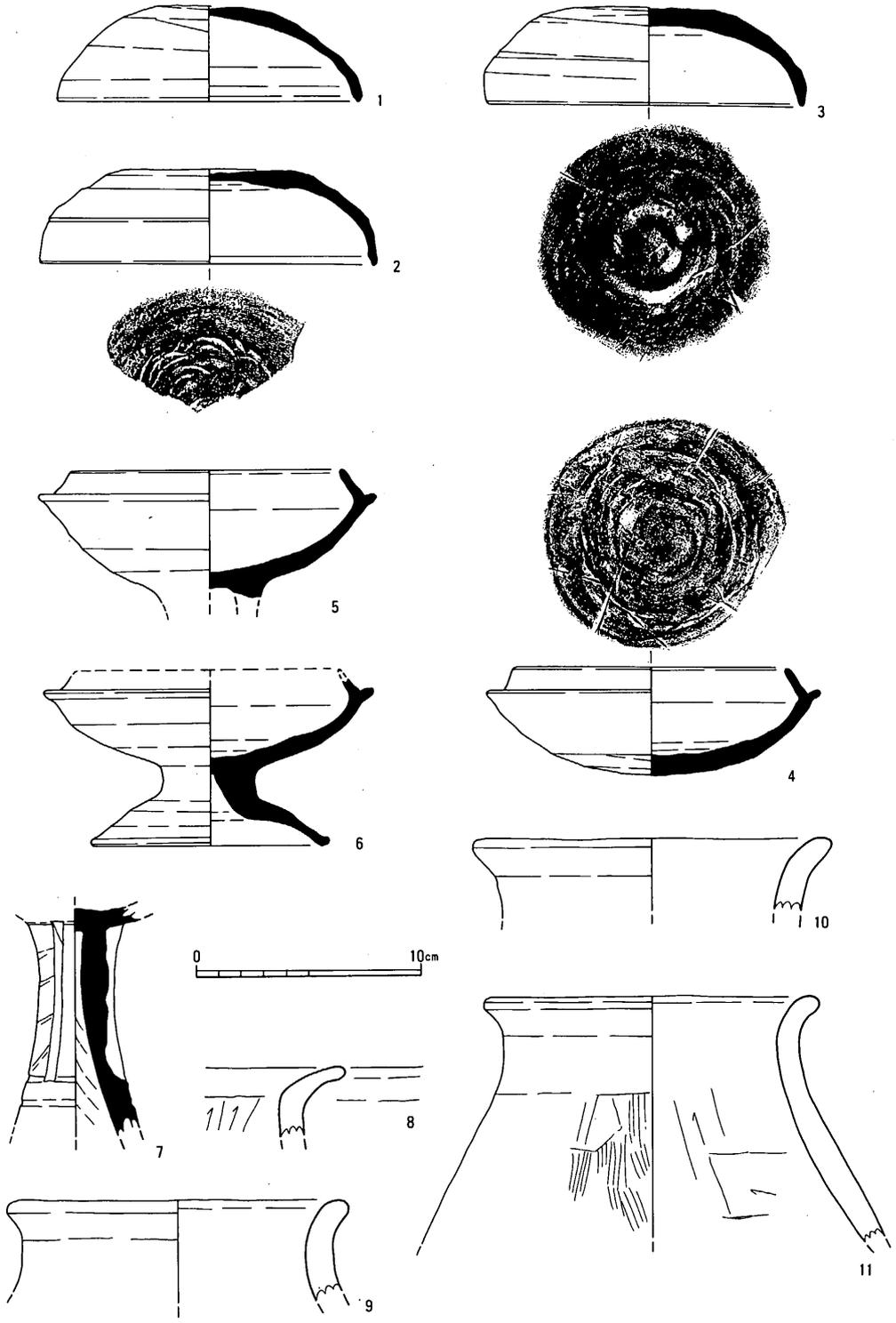
21号竪穴住居跡は北地区の北端中央部やや東寄りに位置し、古墳時代の12号竪穴住居跡には切られるが、同じ古墳時代の22号竪穴住居跡は切る。北西50cmは17号竪穴住居跡と北1.5mには11号竪穴住居跡と近接する。開墾時の削平により北東壁は一部削られるが、平面プランは3.9×3.4mの長方形を呈し、壁高は40cmと残りが良い。規模的には本遺跡の中でも小さいほうである。主柱穴はかなり賢明に探したが、位置的にもサイズのにもそれに該当しそうなものは確認できなかった。北西壁中央部に付設されたカマドは12号竪穴住居跡にその上部を切られていたが、遺存状況は極めて良く黄褐色粘土で作られた袖が明瞭に検出できた。カマドの内部には天井部の崩落と考えられる黄褐色の粘土と焼土が混じるように堆積しており、その下からはほぼ完形に復原できる甕(第107図15)と完形の須恵器坏身(第106図4)とが出土した。長さ20cmの自然石を利用した支脚は、地山に掘り込まれた径24cm、深さ8cmの穴の中に立てられていた。この支脚を中心に65×45cmの楕円形の範囲で厚さ4cmの焼土が広がるが、これが火床に相当する。住居跡の残りが良かったこともあって遺物の出土は多く、このうちカマドからは第106・107図4・11・15が、床面からは3・5・13・14・16・18が出土し、その他は埋土からの出土である。また、土製模造鏡や鉄器は床面からの出土である。

遺物(第106・107図 第156図12 第158図7・9) 第106・107図のうち須恵器は1~7、土師器

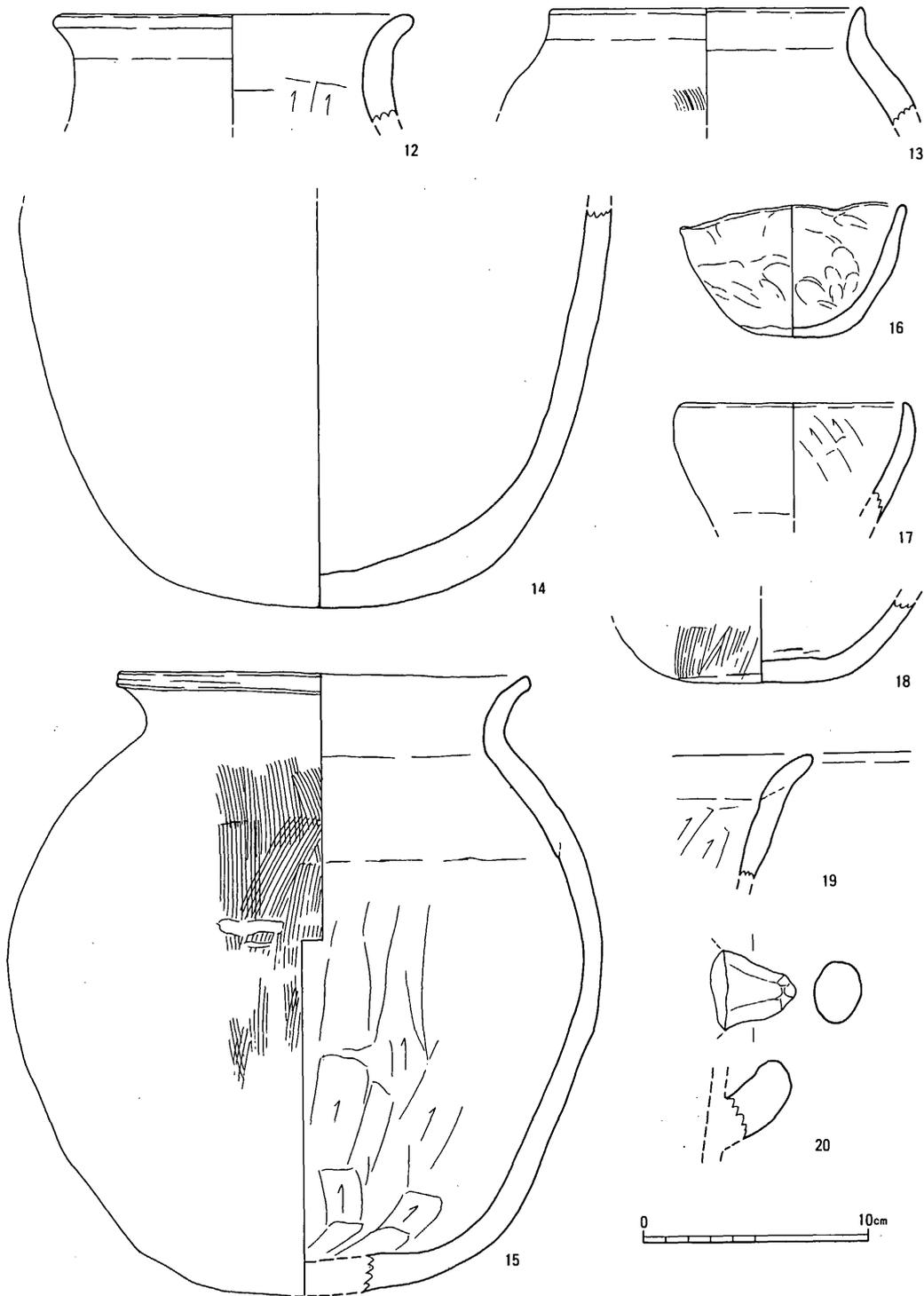
は8~20。1は復原口径約13cm、器高4.5cm、2は復原口径約15cm、器高4.3cm、3は口径14.4cm、器高4.3cmの坏蓋で、2・3の天井部内面には青海波の当て具圧痕が残る。4は口径12.4cm、器高4.8cmの坏身で、底部内面には青海波の当て具圧痕が残る。5は復原口径約12cmの高坏坏部。6は復原口径約12cm、裾径10.3cm、復原器高約8cmの高坏である。7は高坏脚部で、幅0.6cm、長さ7cmの細長い透孔が3方向に入り、その下端には沈線文が2本施される。8は甕の口縁部で内面にケズリが窺える。9は復原口径約15cm、10は復原口径約14cmの甕で、摩滅により調整不明。11は復原口径約15cmの甕で、外面にはハケが、内面にはケズリが施される。12は復原口径約16cm、13は復原口径約15cmの甕で、12は内面にケズリが、13は外面にハケが施される。14は甕の胴下半部で内面にわずかにケズリの痕跡が窺える。土器の厚さは場所によってかなり異なる。15はほぼ完形に復原できる口径18.4cm、器高27.8cmの甕で、外面にはハケが施され、内面のケ



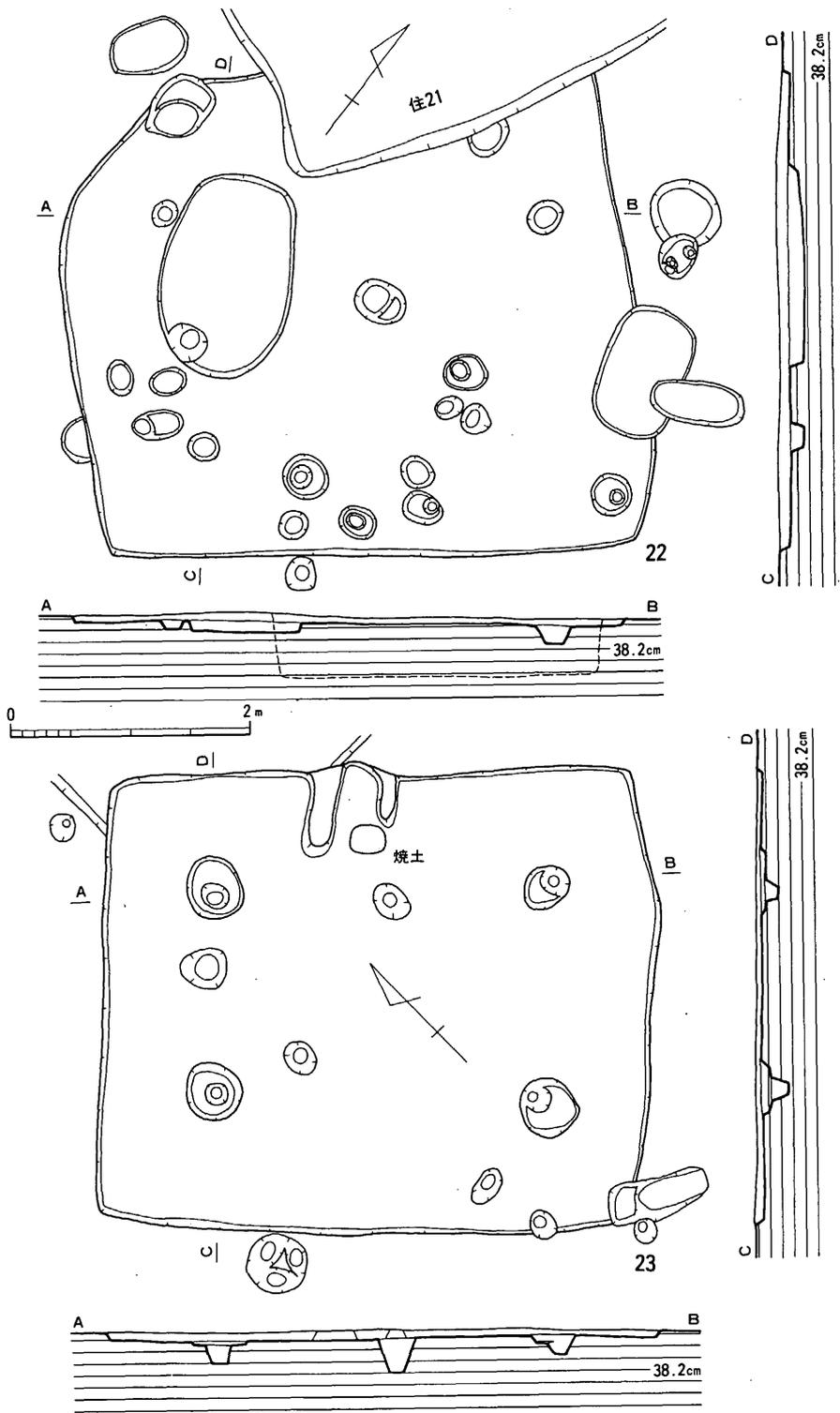
第105図 20号竖穴住居跡出土土器実測図(1/3)



第 106 图 21号竖穴住居迹出土土器实测图.1 (1/3)



第 107 图 21号竖穴住居跡出土土器実測図.2 (1/3)

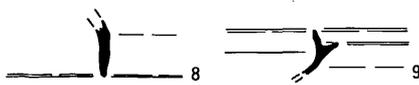
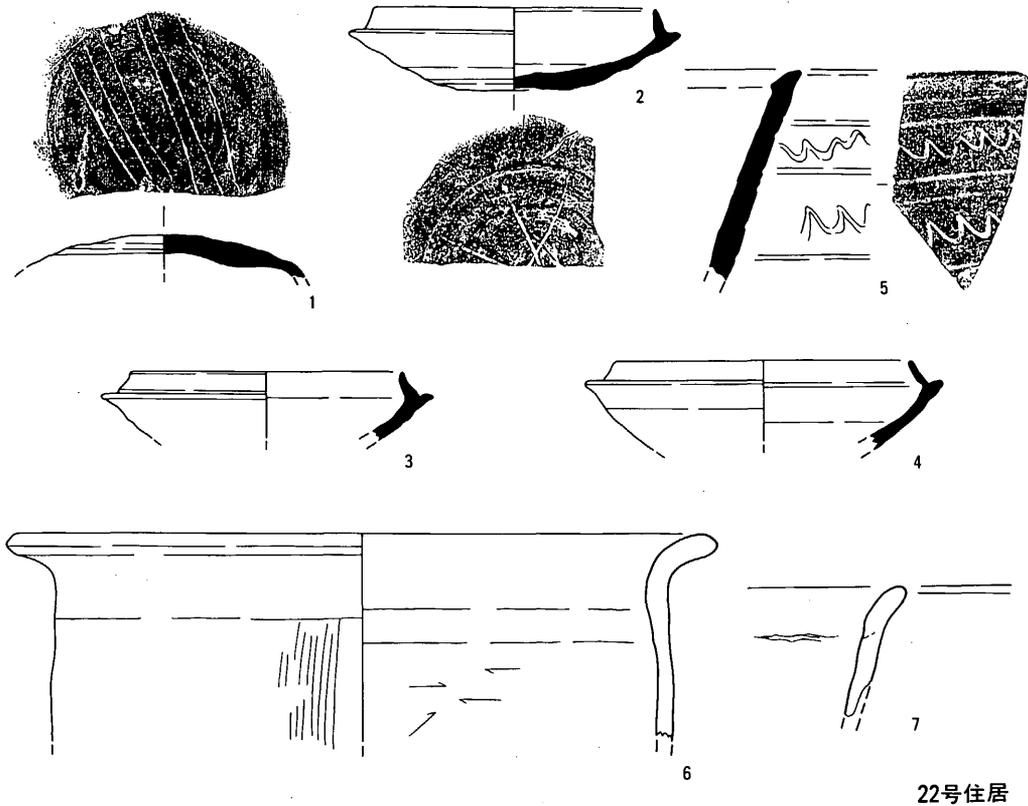


第108图 22・23号竖穴住居迹实测图 (1/60)

ズリは粗く所々に接合痕が残る。口縁部は内外面ともにナデられる。外面胴下半部は加熱により赤褐色に変色する。16は完形の手捏ね土器で、口径10.0cm、器高5.8cm。17は復原口径約10cmの小形の鉢になろうか。内面は削られる。18は外面にハケが施される底部で、13と同一個体である可能性が高い。19は甌の口縁部で、内面は削られる。20は甌の把手。第156図12は土製の模造鏡で、3.0×2.2×2.3cmと分厚く径4mmの孔が貫通する。第158図7は長さ7.8cmで、断面形態は6×4mmの長方形を呈する刺突具。9は鉄鏃の基部で残存長約8cm、断面形態は6×4mmの楕円形。

22号竖穴住居跡 (図版73 第108図)

22号竖穴住居跡は北地区の北端中央部やや東寄りに位置し、古墳時代の21号竖穴住居跡や2号掘立柱建物跡に切られ、南東50cmには24号竖穴住居跡に接する。平面プランは4.7×4.1mの長方形を呈し、壁高は最高で7cmほどしか残らない。検出時点においてプランはある程度確認



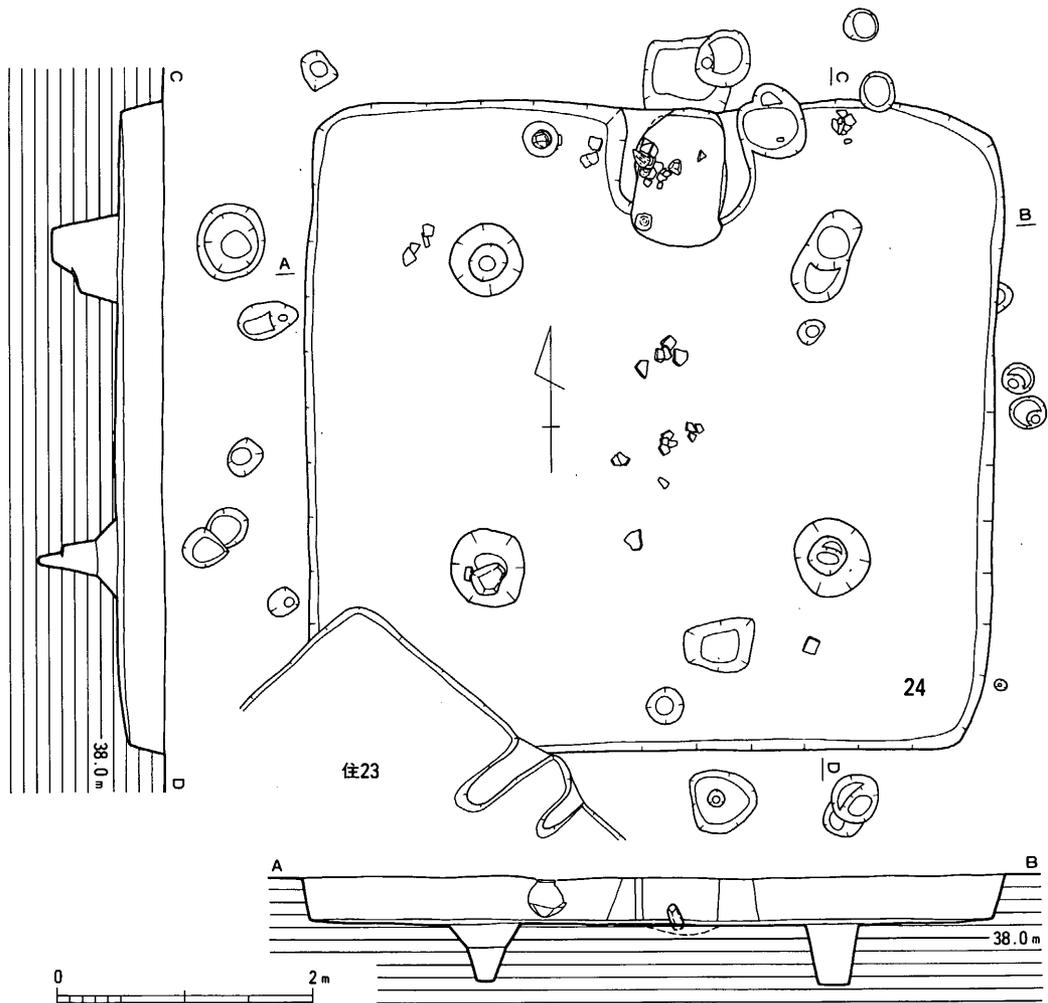
23号住居

第109図

22・23号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

できたが、支柱穴やカマドや貼り床は検出できず、どのような構造の住居なのか認識できなかった。遺物は少ないものの、土器7点のほかに土製模造鏡1点が図示できた。

遺物（第109図1～7 第156図13）第109図1～7のうち須恵器は1～5でその他は土師器。1の坏蓋天井部外面には、6本の平行な沈線文がへら記号として描かれている。2は復原口径約11cmの坏身で、底部外面には「×」のへら記号が施される。3は復原口径約11cm、4は復原口径約12cmの坏身。5は甕の口縁部であろうか。沈線による直線文と波状文とは同じ工具によって施される。6は復原口径約30cmの大きな甕で、外面にはハケが、内面にはケズリが施され、その後に口縁部の内外面はナデられる。7は甕の口縁部で、内面に接合痕が残る。第156図13は1/2が欠損した土製の模造鏡で、縦3.4cm、厚さ1.1cmを測る。



第110図 24号竖穴住居跡実測図 (1/60)

23号竖穴住居跡

(図版73 第108図)

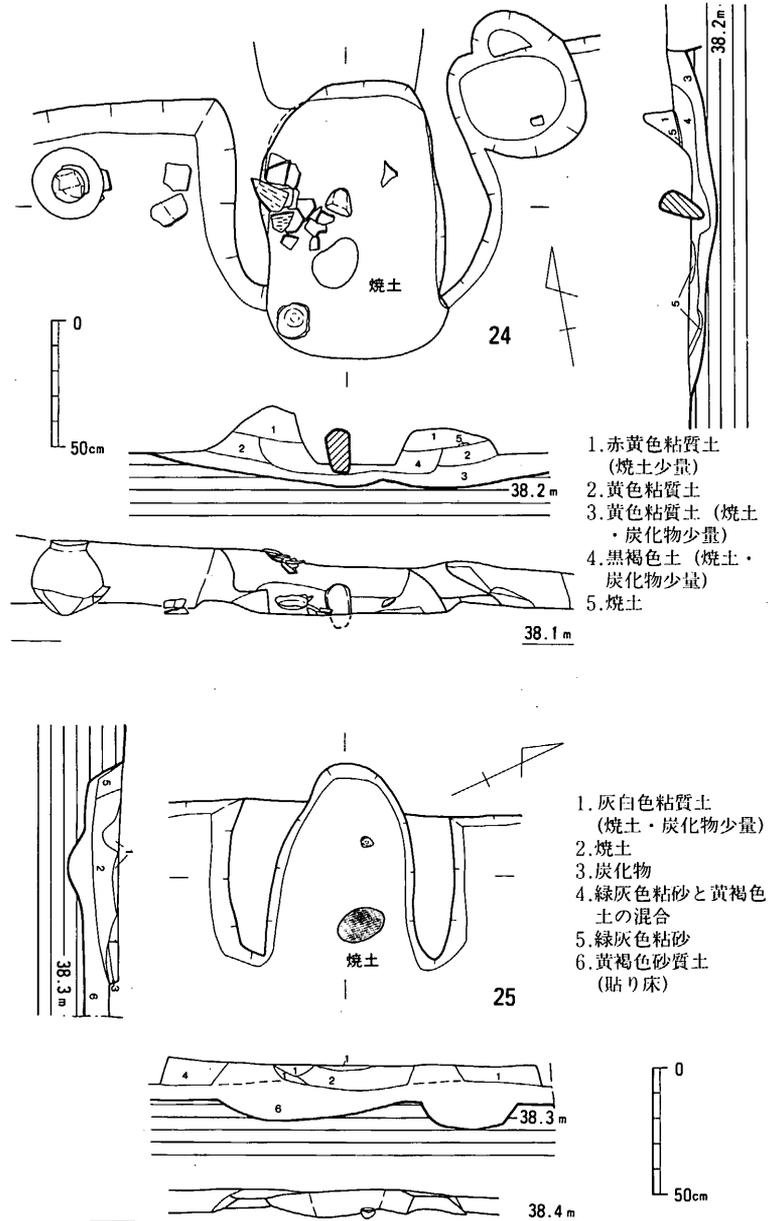
23号竖穴住居跡は北地区の中央部やや東側に位置し、西2mには古墳時代の3号土壌が、北西2.5mのは2号掘立柱建物跡が、南東1.5mには弥生時代の31号竖穴住居跡がある。平面プランは4.6×3.9mの整った長方形で、径40cm、深さ20cmの浅い支柱穴を4本検出した。壁高は5cmほどしか残らず、北東壁の中央部に付設されたカマドも袖の痕跡と火床となる焼土がわずかに検出されただけで、遺物の出土は全くなかった。住居跡全体においても遺物の出土は極めて少なく、図示できたのは2点の須恵器のみである。

遺物 (第109図8・9)

第109図8は須恵器坏蓋の口縁部、9は須恵器坏身の口縁部である。

24号竖穴住居跡 (図版74・75 第110・111図)

24号竖穴住居跡は北地区の中央部やや東寄りに位置し、古墳時代の23号竖穴住居跡に切られ、北西50cmには古墳時代の22号竖穴住居跡に、西50cmには2号掘立柱建物跡に、南東1.5mには



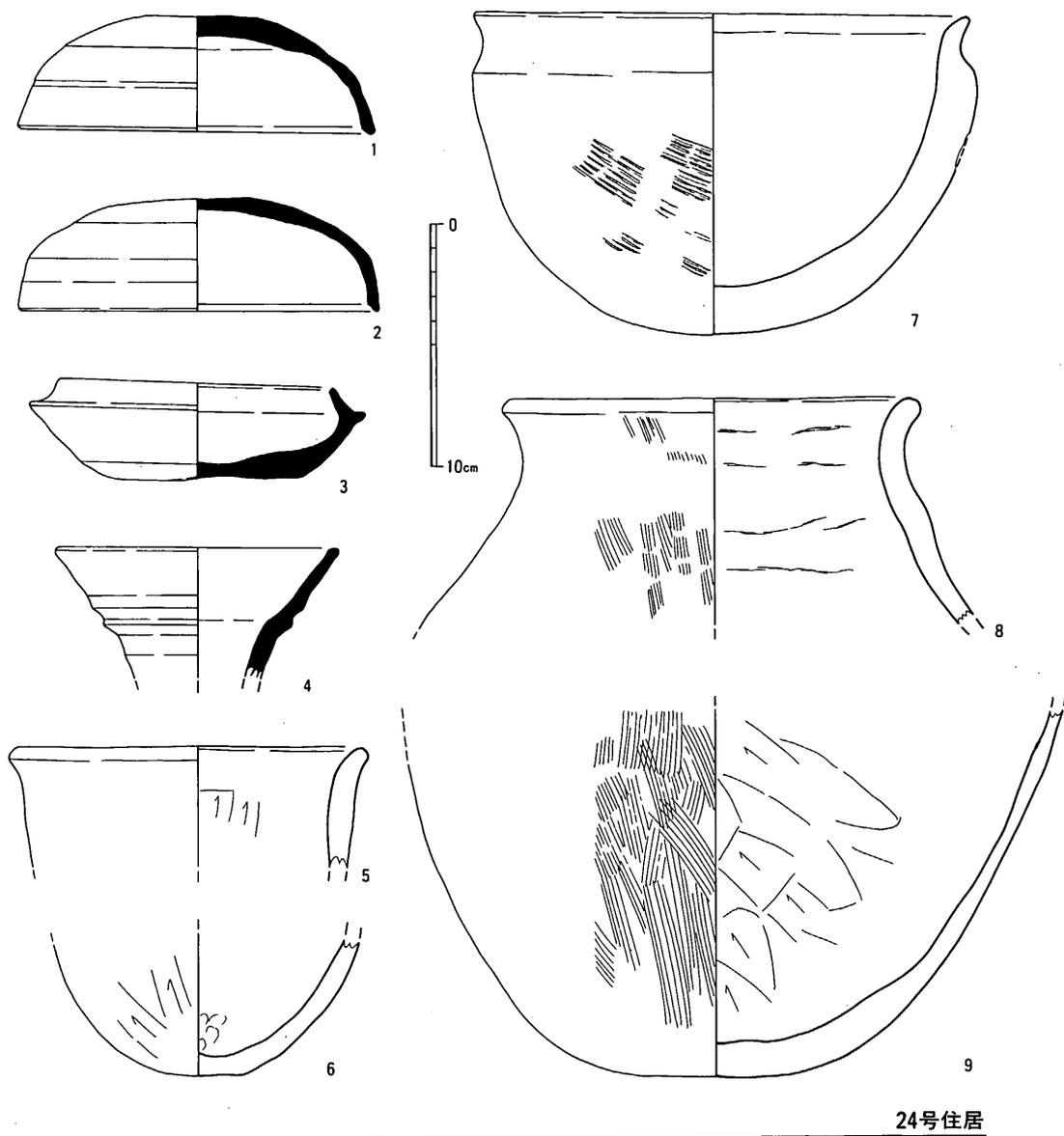
第111図 24・25号竖穴住居跡カマド実測図 (1/30)

25号竪穴住居跡に近接する。平面プランは5.4×5.1mのほぼ正方形に近く、径50～60cm、深さ50～70cmの主柱穴を4本検出した。カマドの遺存状態は良く内面が赤く焼けた袖を検出できた。内部には天井部の崩落による黄褐色粘質土が詰まっていたが、多くの土器はその上から出土した。したがって、これらの土器と黄褐色粘質土を除去してはじめて支脚が現われるが、この長さ19cmの自然石を利用した支脚は地山ではなく、カマドの下に敷かれた黄色粘質土を掘り込んで立てられていた。カマドの東横50cmには甕が立ったままの状態出土した。当初、この甕は完形品でわずかに潰れたものと考えていたが、第112図8・9に図示したように完形に復原することができなかった。遺物は比較的多く床面からも纏まって出土したが、土師器の胴部破片が多く、図示できるものは意外に少なかった。第112図1～9のうちカマドから出土したものは1・5だけで、他は床面出土。2点の砥石も床面出土である。

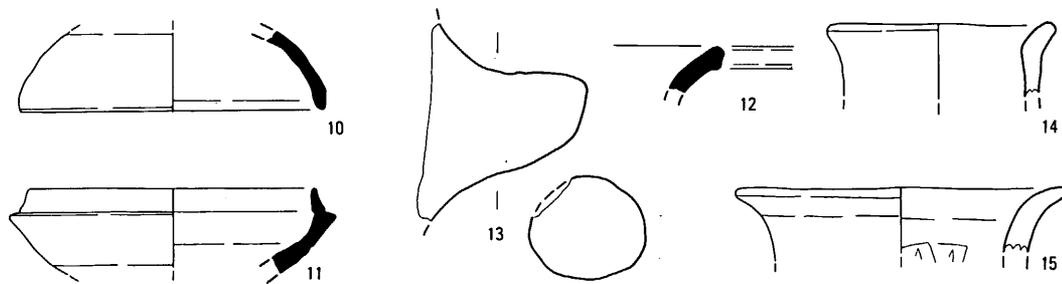
遺物（第112図1～9 第157図3・4）第112図1～9のうち須恵器は1～4でその他は土師器。1・2はともに復原口径約14cmの坏蓋。3は復原口径約12cmの坏身。4は復原口径約12cmの甕。5は復原口径約15cmの甕の口縁部で、外面は摩滅、内面はケズリ。6は甕の底部だが、外面は削られ、内面はナデられる。7復原口径約20cm、器高13.5cmの鉢で厚さ2cmと分厚い。内外面ともにナデが施されるが、外面については平行のタタキが痕跡的に窺える。8・9は同一個体の甕で口径は17.2cm。外面にはハケが施され、内面下半部にはケズリが、上半部にはナデが施されるが、内面のナデの部分については接合痕が明瞭に残る。第157図3・4はともに粘板岩製の砥石であるが、別個体である。

25号竪穴住居跡（図版76 第111・113図）

25号竪穴住居跡は北地区中央部の東端に位置し、弥生時代の31号竪穴住居跡を切る。北西2mには古墳時代の24号竪穴住居跡が、西2.5mには23号竪穴住居跡が、北5mには26号竪穴住居跡が近接する。平面プランは3.9×3.6mでほぼ正方形に近く、本遺跡においては小さい部類の竪穴住居跡である。径30cm、深さ30cmの主柱穴が4本検出されたが、これらはいずれも住居跡の隅にかなり寄っており、住居跡の規模の小ささが影響しているものと考えられる。カマドは北西壁の中央部に付設されるが、この部分は15cmほど地山が掘り込まれそこに黄褐色の砂質土が入れられ、基礎を作ったようになっている。袖は黄褐色の砂質土で作られ、その内部には焼土と炭化物が薄く広がるが、遺物は手捏ね土器が2点あるだけで他には何も無い。内部の手前にある焼土の塊が火床の痕跡であろう。住居跡の外側へ30cmほど突出するが、ここには焼土や炭化物は含まれない。この住居跡の貼り床を除去すると、中央部に2.3×2.3mの地山の高まりが現われた。すなわち、壁に沿って60～90cmの幅で深さ6cmほどがドーナツ状に掘り込まれそこに貼り床と同じ黄褐色の砂質土が意図的に入れ込まれるわけであるが、これは湿気取りのための施設であろうか。遺物の出土は少なく、カマドの手捏ね土器以外はすべて床面からの出土である。

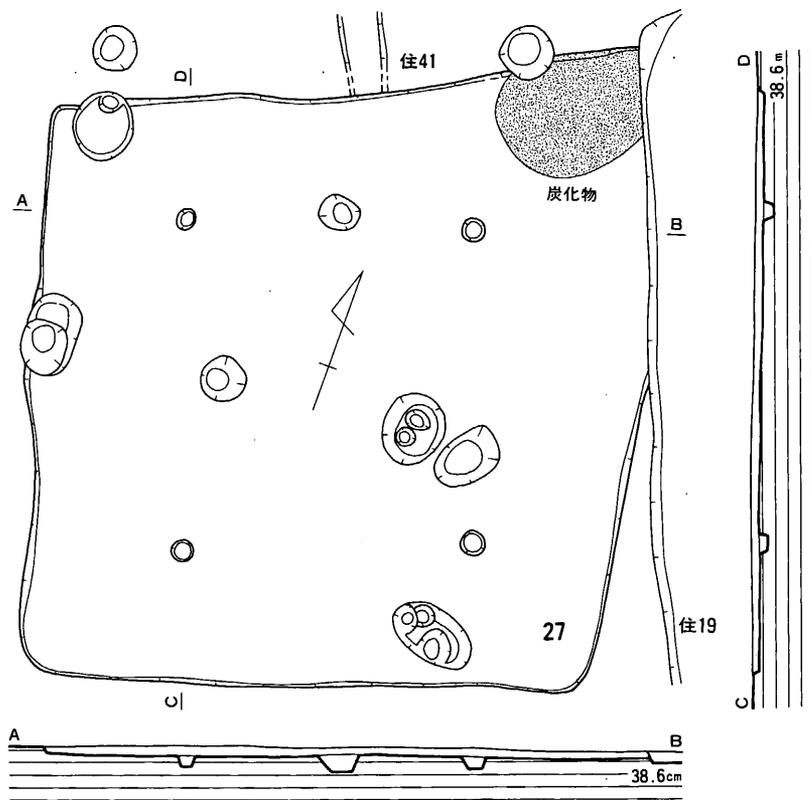
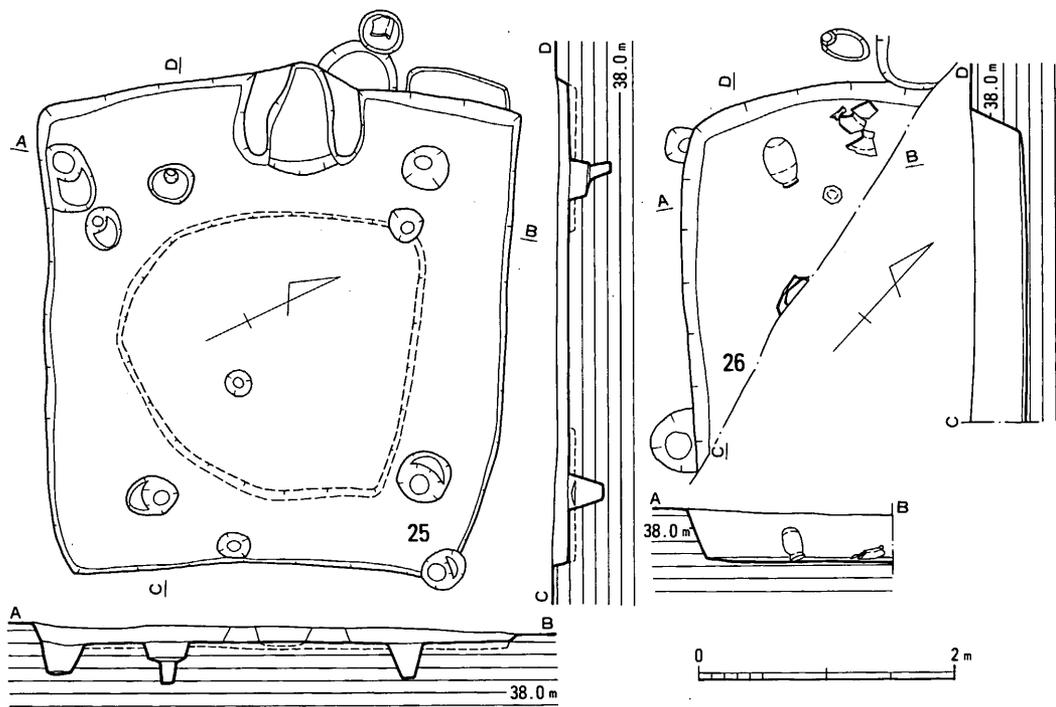


25号住居

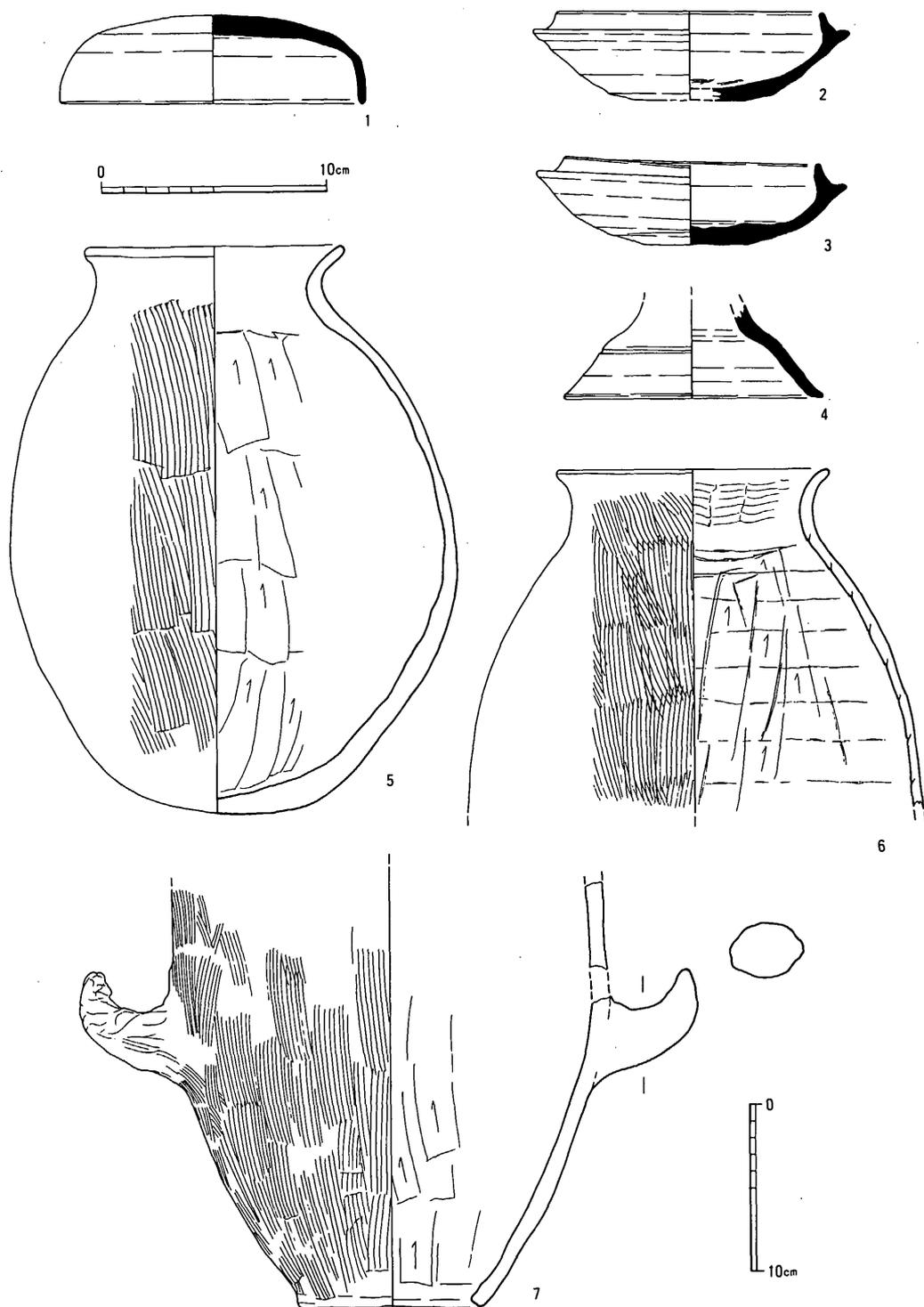


第 112 图

24・25号竖穴住居跡出土土器実測图 (1/3)



第113图 25~27号竖穴住居跡実測图 (1/60)



第 114 图 26号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/3 5~7は1/4)

遺物（第112図10～15 第156図7・16・17）第112図10は復原口径約12cmの須恵器坏蓋。11は復原口径約11cmの須恵器坏身。12は甕の口縁部。13は甕の把手。14は復原口径約9cmの小形甕で調整不明。15は復原口径約13cmの甕で、外面の調整は不明。内面はケズリ。第156図7の土錘は長さ2.7cm、太さ0.9cmで孔は径1mm。16の手捏ね土器は口径4.8cm、高さ2.7cm。17は復原口径約4cm、復原器高約3.5cm。

26号竪穴住居跡（図版77 第113図）

26号竪穴住居跡は北地区中央部の東端に位置し、西4mに古墳時代の24号竪穴住居跡、北4mに2号土壇、南5mに25号竪穴住居跡がある。この住居跡の大半は調査区外にあり、検出できたのは西隅にあたる2.7×1.3mとわずかではあるが、壁高は35cmと残りが良く、面積の割には多くの遺物が出土した。支柱穴やカマドは調査区外にあると考えられる。図示した遺物はすべて床面出土である。

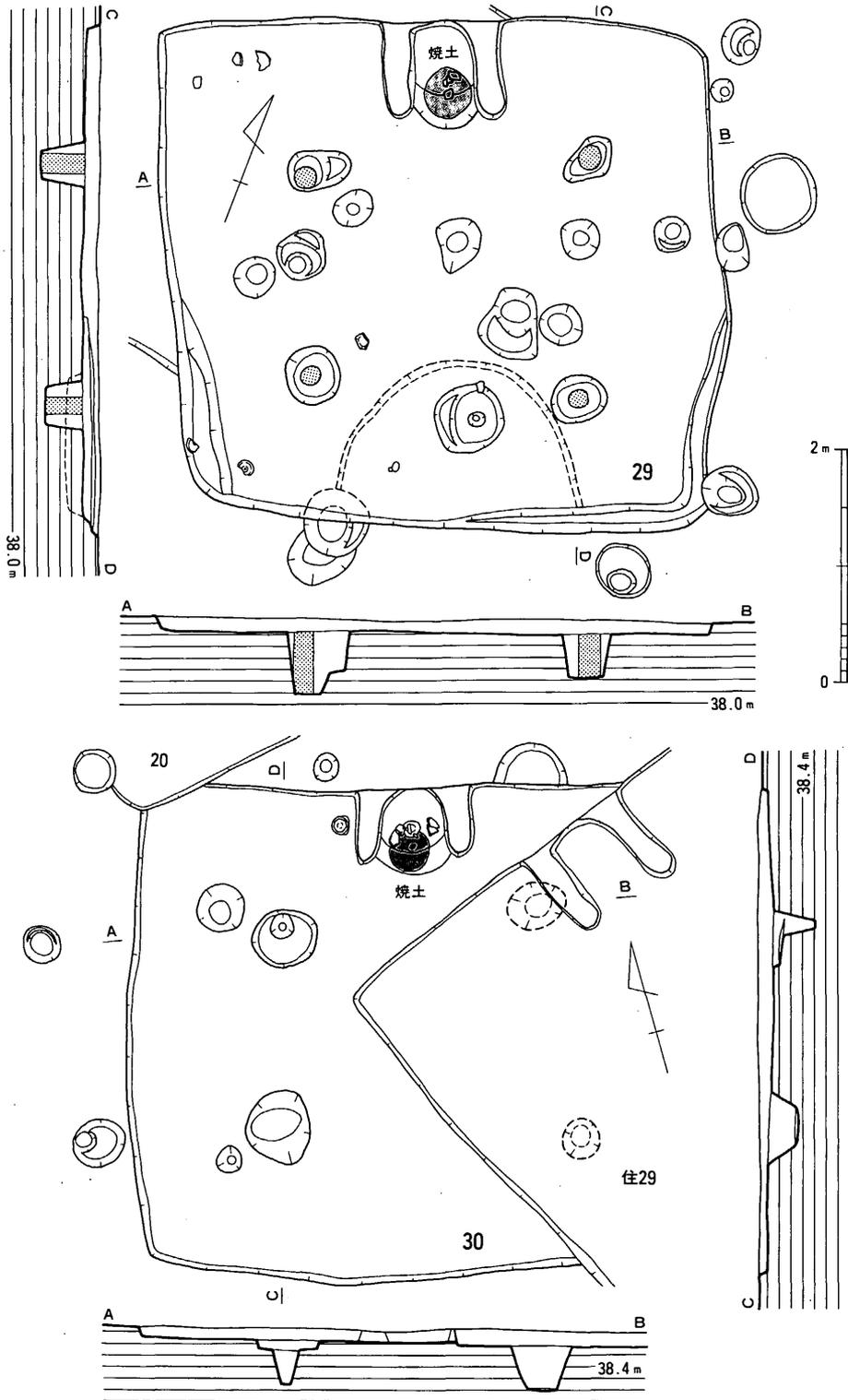
遺物（第114図）第114図1～4は須恵器、5～7は土師器。1は復原口径約14cmの坏蓋。2は復原口径約12cmの坏身。3は完形品で口径11.1cm、器高4.0cm。4は復原裾径約11cmの高坏裾部としたが、あるいは甕の口縁部かもしれない。5は破損部分のない完形品で、口径15.2cm、最大腹径33.9cm、器高26.1cmを測る。外面には器面調整としてのハケが、内面にはケズリが施されるが、口縁部については内外面とも強く横方向にナデられている。底部外面は床との設置面になるためか、表面が擦れている。加熱の痕跡はない。6は復原口径約16cmの甕で、外面には器面調整としてのハケが、内面にはケズリが施される。ただし、内面の口縁部にはハケが施され、頸部と胴部の境から下には4cm程度の間隔をおいて接合痕が明瞭に残る。口縁端部のみ指で摘むようにナデられている。7は復原裾径約10cm、残存器高25cmの甕で、裾付近は加熱により変色する。外面には器面調整としてのハケが、内面にはケズリが施される。

27号竪穴住居跡（図版78 第113図）

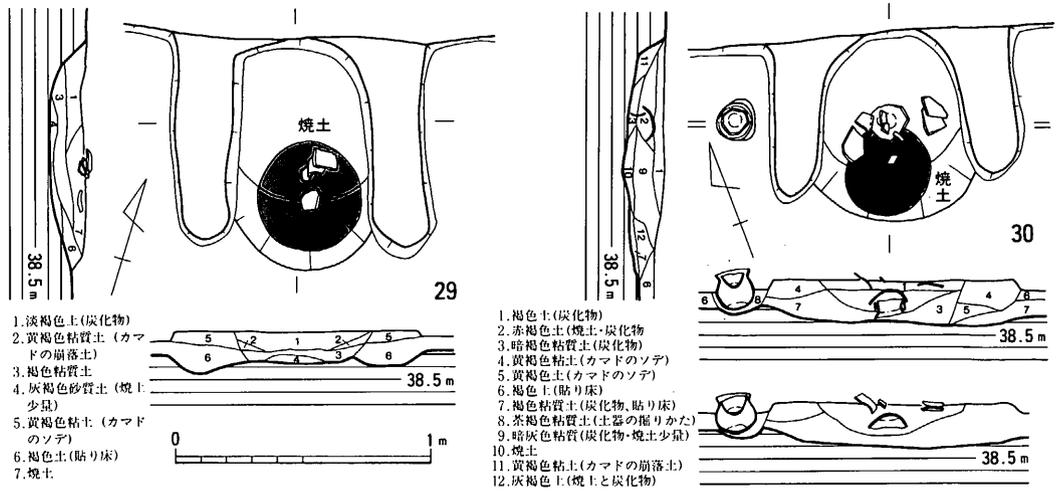
27号竪穴住居跡は北地区中央部のやや南東寄りに位置し、古墳時代の19号竪穴住居跡には切られるが、弥生時代の41号竪穴住居跡は切る。南1mには古墳時代の37号竪穴住居跡に近接する。平面プランは5.0×4.6mで、北壁がやや開く台形状になる。支柱穴については径20cm、深さ10cmのものが4本検出された。支柱穴とするにはあまりに細く浅かったが、他に支柱穴に該当するような柱穴が検出できなかったことと、この4本については台形状の平面プランに対応した位置関係にあることから支柱穴と考えるに至った。カマドの痕跡は全くないが、北東隅において1.0×0.8mの範囲で炭化物の集中を確認した。土器はごく少量で小破片の土師器と須恵器で、図示できるものはなかった。

29号竪穴住居跡（図版79 第115・116図）

29号竪穴住居跡は北地区のほぼ中央部に位置し、古墳時代の30号竪穴住居跡を切る。北2mには古墳時代の20号竪穴住居跡、東2mには3号土壇に近接する。規模4.7×4.3mの正方形に近



第 115 图 29・30号竖穴住居跡実測図 (1/60)



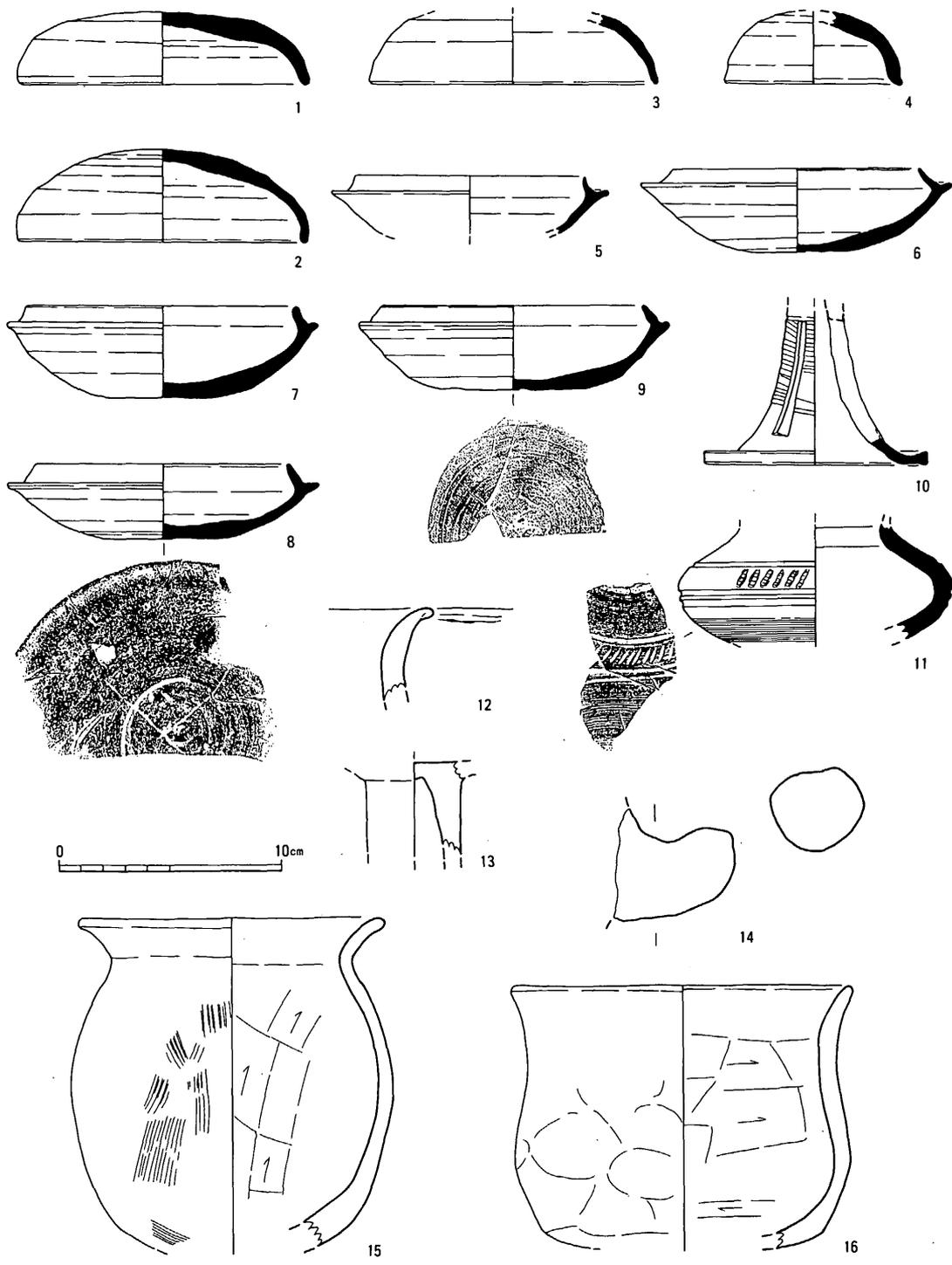
1. 淡褐色土(炭化物)
2. 黄褐色粘質土(カマドの崩落土)
3. 褐色粘質土
4. 灰褐色砂質土(焼土少量)
5. 黄褐色粘土(カマドのソデ)
6. 褐色土(貼り床)
7. 土

1. 褐色土(炭化物)
2. 赤褐色土(焼土・炭化物)
3. 暗褐色粘質土(炭化物)
4. 黄褐色粘土(カマドのソデ)
5. 黄褐色土(カマドのソデ)
6. 褐色土(貼り床)
7. 褐色粘質土(炭化物・貼り床)
8. 茶褐色粘質土(土器の隅りかた)
9. 暗灰色粘質土(炭化物・焼土少量)
10. 焼土
11. 黄褐色粘土(カマドの崩落土)
12. 灰褐色土(焼土と炭化物)

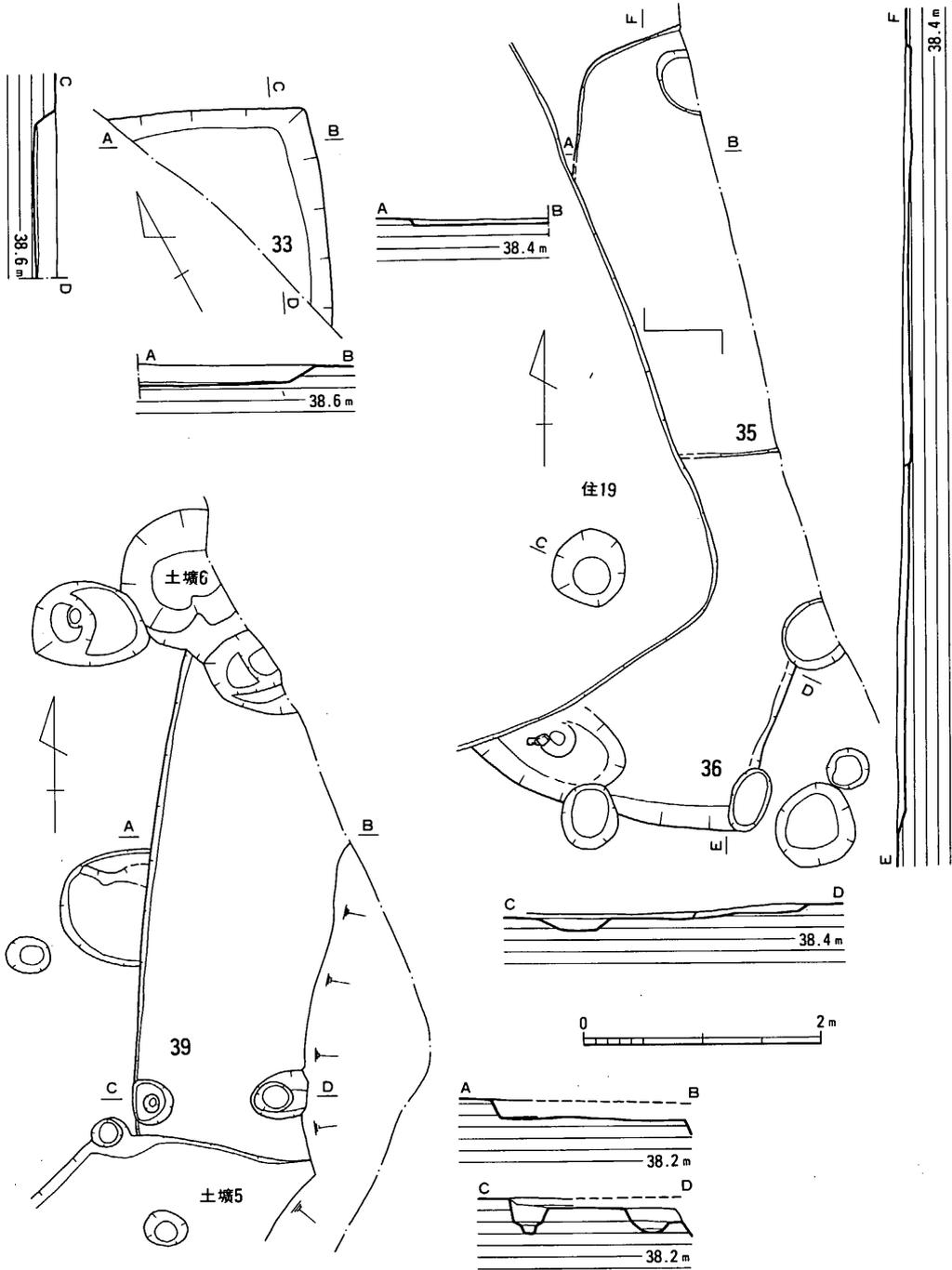
第116図 29・30号竪穴住居跡カマド実測図(1/30)

い長方形を呈する平面プランで、南東隅や南西隅には幅10～15cm程度の細長いテラスが付く。主柱穴は径30～40cm、深さ40～50cmのものを4本検出しており、いずれにおいても径15cmの柱痕を確認した。カマドは北壁中央部に付設され、黄褐色粘土で作られた袖が明確に検出できた。この袖の下部は約5cmほど掘り下げられ、貼り床に使われている褐色土が入れられていた。内部には90×70×10cmの範囲で火床としての焼土の広がりがあり、その上面において第117図15の小形の甕が出土した。この焼土の奥では土玉2点とともに、焼けて小さく破碎した骨片とが出土した。貼り床を除去した時点で、南壁中央部に2.0×1.4mの半月形で深さ15cmほどの掘り込みが確認されたが、カマドに対向する位置にあるため入口に関連した施設であろうか。遺物は床面から比較的纏まって出土したが、完形になるものはない。第117図15はカマドからの出土。図示したものについてはほぼ床面からの出土である。

遺物(第117図 第156図4・5 第158図24) 第117図1～11は須恵器、12～16土師器。1～4は坏蓋で、復原口径は順に13cm、13cm、13cm、8cm。5～9は坏身で、復原口径は順に10cm、11cm、12cm、12cm、12cm。8・9の底部外面には「×」のへら記号が施される。10は復原裾径約10cmの高坏脚部でカキ目が施される。長さ5.2cmの細長い透孔が3方向に入り、その上端部には1本の沈線文が巡る。11は復原腹径約12cmの甕で、底部付近にはカキ目が施され、沈線文の間には連続刺突文が巡る。12は甕の口縁部で調整不明。13は高坏の脚部で調整は不明。14は甕の把手。15は復原口径約14cmの甕で、外面にはハケ目が、内面にはケズリが施される。外面胴下半部は加熱により赤褐色に変色。16は復原口径約15cmの甕で、内外面ともにケズリが施され、外面は加熱により赤褐色に変色している。第156図4は1.8×2.0cmの土玉で、中心からわずかにずれた位置に径2mmの孔が貫通する。5は1.9×2.0cmの土玉で、径2mmの孔が貫通してその一端が窪む。第158図24の断面形態は2.1×0.8cmの隅丸長方形で、残存長は2.8cm。



第117图 29号竖穴住居迹出土土器实测图 (1/3)



第 118 图 33·35·36·39号竖穴住居迹实测图 (1/60)

30号竪穴住居跡（図版80 第115・116図）

30号竪穴住居跡は北地区のほぼ中央部に位置し、古墳時代の20・29号竪穴住居跡に切れ、西3mにはやはり古墳時代の18号竪穴住居跡や4号土壌に近接する。南北方向については4.1mという数値が得られ、東西方向については東側1/3を29号住居跡に切られてはいるが支柱穴やカマドとの位置関係からおよそ4.5mほどであったと考えられる。支柱穴については径40cm、深さ40cmのものを4本検出した。カマドは北壁中央部に付設され、黄褐色粘土で作られた袖は明確に検出できた。カマドの付設に際してはまず10cmほど地山を掘り下げ、そこに貼り床と同じ褐色の粘質土を敷いて基礎としている。内部の上面には炭化物の層が広がり、その下に焼土と炭化物とが混ざった層が広がるが、これらはカマド天井部の崩落ではなく火を使用した痕跡である。この中にはほぼ1個体分に復原できるであろう小形の甕が含まれていた。火床は70×60cmの範囲で厚さ5cmほどが確認されたが、支脚は存在しなかった。また、カマドの西側10cmのところには地山を掘り込んで完形の小形甕が据えられ、その上に小形の鉢が置かれていた。しかし残念なことに、カマドおよびその周辺で得られた遺物については、取り上げはしたもののその後盗難に遭い紛失してしまった。したがって、図示できた遺物は床面から出土した数点と、別に保管していた紡錘車だけである。

遺物（第119図1・2 第159図3）第119図1は甕の把手。2は須恵器坏身の口縁部である。第159図3は蛇紋岩製の紡錘車で、側面には横方向の細かい線条痕が無数につき、径7mmの軸部の淵はかなり擦れて摩滅しており、相当使用されたものと考えられる。

33号竪穴住居跡（図版81 第118図）

33号竪穴住居跡は北地区中央部の西端に位置し、北3mには古墳時代の6号竪穴住居跡、東4mには18号竪穴住居跡が、南5mには7号土壌がある。この住居跡はその大半が調査区外に伸びており、検出できたのは北東隅の1.8×1.6mだけである。したがって、カマドや支柱穴は確認できていない。調査面積が少ないだけに、遺物の出土量も少ない。

遺物（第119図3・4）第119図3は復原口径約12cmの須恵器の坏身。4は甕の把手である。

35号竪穴住居跡（図版81 第118図）

35号竪穴住居跡は北地区中央部の東端に位置し、古墳時代の19号竪穴住居跡には切られるが、同じ古墳時代の36号竪穴住居跡は切る。19号竪穴住居跡に切られることと調査区外にその大半が伸びることから、南北方向については2.7mという数値が得られているものの、東西方向については最大で1.2mしか確認できていない。壁高も5cm程度と浅く、遺物は極めて少ない。カマドや支柱穴も未確認。

遺物（第119図5 第160図6）第119図5は復原口径約9cmの須恵器の坏蓋。第160図6は3×2.5mmの紫色のガラス玉で、孔の径は1mm。

36号竪穴住居跡（図版81 第118図）

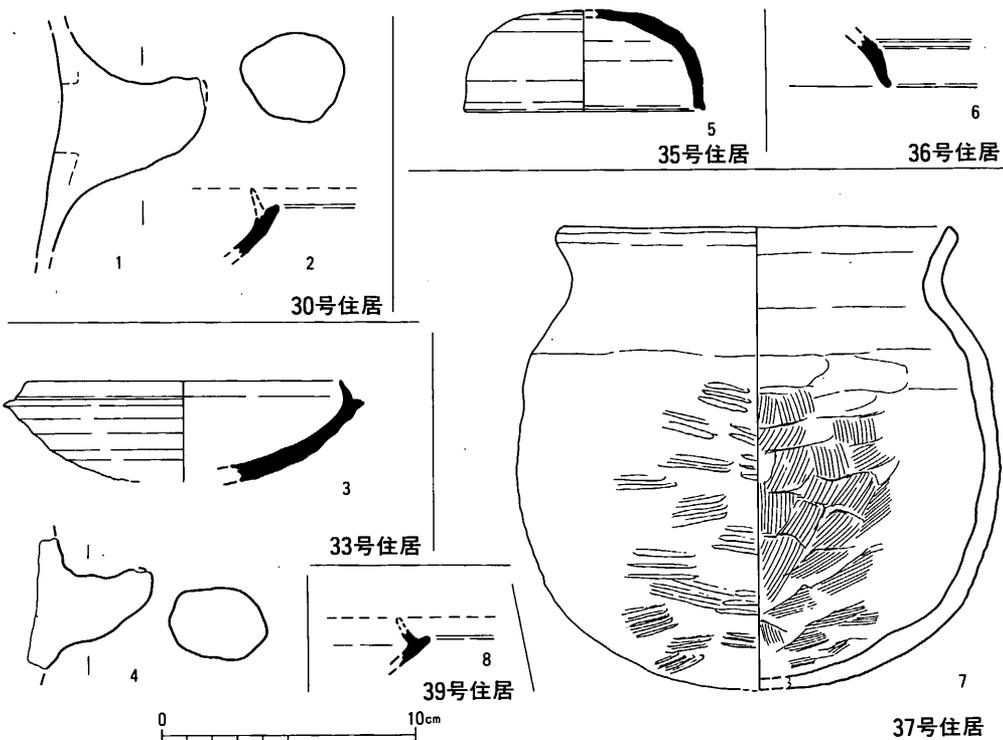
36号竪穴住居跡は北地区中央部の東端に位置し、古墳時代の19・35号竪穴住居跡に切られる。この住居跡は2軒の住居跡に切れ、またその大半が調査区外に伸びることから、検出できたのは南隅の3.3×2.1mだけである。主柱穴やカマドは確認できてなく、壁高も5cmと浅くて、遺物の出土量は極めて少ない。

遺物（第119図6 第160図1）第119図6は須恵器の坏蓋の口縁部。第160図1は2×2mmの緑色のガラス玉で、孔の径は1mm。

37号竪穴住居跡（図版82 第120図）

37号竪穴住居跡は北地区の南東部に位置し、弥生時代の38・40号竪穴住居跡を切る。北1mには19・27号竪穴住居跡と近接する。規模5.9×5.2mの正方形に近い平面プランで、壁高は最高で6cmしか残らない。主柱穴は径40～60cm、深さ40cmのものが4本検出されたが、カマドは痕跡すら確認できなかった。遺物は南壁付近で紡錘車とほぼ完形に復原できる甕が出土しただけで、遺物量は少ない。

遺物（第119図7 第159図6）第119図7は口径15.8cm、器高18.4cmの土師器甕で、外面にはタキガ、内面にはハケが施される。口縁部から頸部にかけてはナデが施される。加熱の痕跡はない。第159図6は陶製の紡錘車で、下部が欠損する。最大径3.3cmで、軸径は5mm。上面端部（角）には擦れた平坦面が巡るが、その微細な削痕は不定方向であり、使用によってではなく、角を滑らかにするように意図的に作られたものと考えられる。側面の削痕や軸部の摩擦はわず



第119図 30・33・35～37・39号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

かにしか窺えず、あまり使用されたようではない。

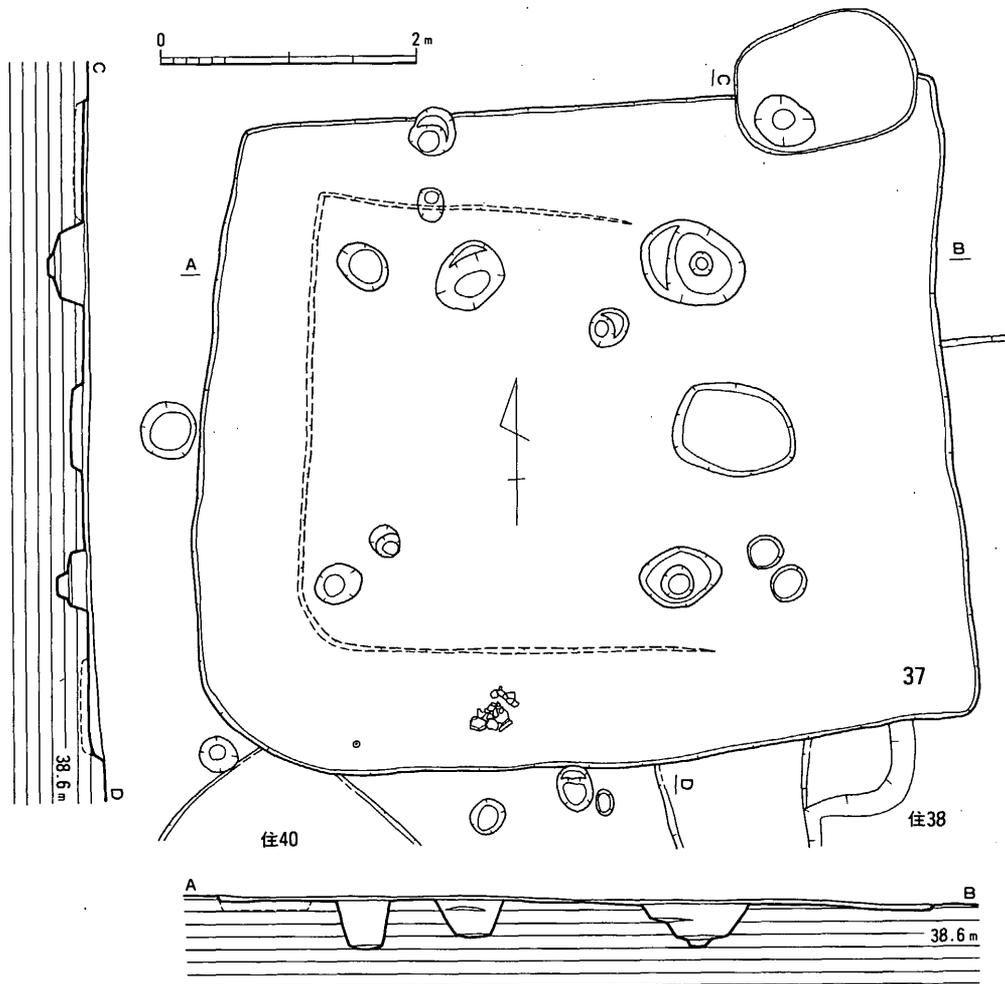
39号竪穴住居跡 (図版82 第118図)

39号竪穴住居跡は北地区の南東端部にあり、古墳時代の5・6号土壙に切られ、北1.5mには弥生時代の38号竪穴住居跡がある。この住居跡の一部は調査区外へ伸び、また大部分は市道(林田城山線)に削平され残らない。現存するのは4.3×1.5mで、西壁の一部だけが残る。遺物は極めて少なく、支柱穴やカマドも確認できていない。

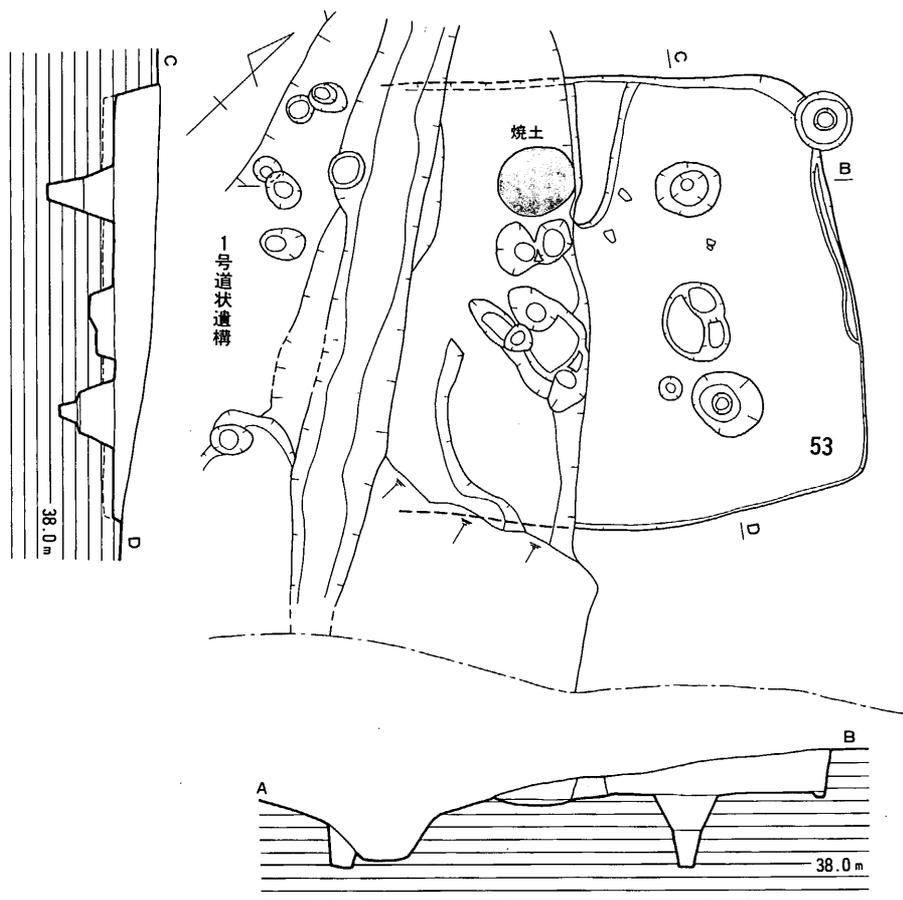
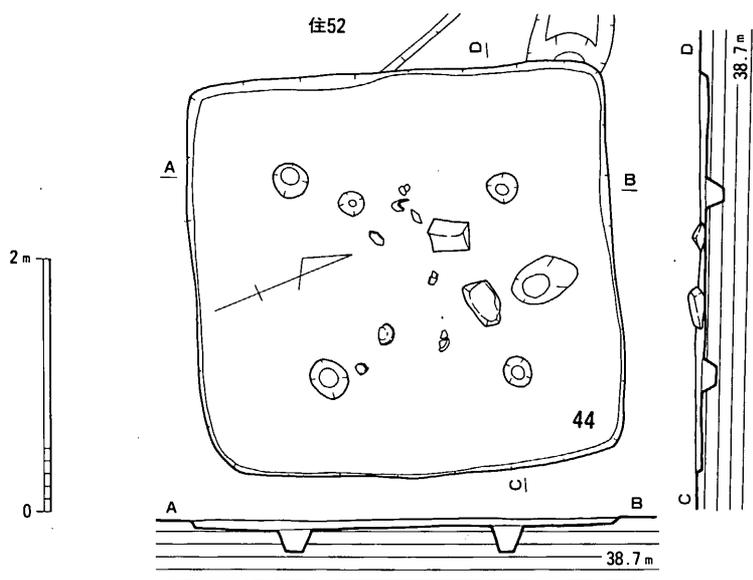
遺物 (第119図8) 第119図8は須恵器坏身の口縁部である。

44号竪穴住居跡 (図版83 第121図)

44号竪穴住居跡は北地区の南端中央部に位置し、弥生時代の43・47・52号竪穴住居跡を切る。近接する古墳時代の竪穴住居跡には、北東7mには37号竪穴住居跡、北5mには48号竪穴住居跡、南西5mには53号竪穴住居跡がある。平面プランは3.2×3.2mの正方形で、壁高は最高で8cmほどしか残らない。支柱穴については径25cm、深さ20cm程度のを4本検出できたが、カマド



第120図 37号竪穴住居跡実測図 (1/60)

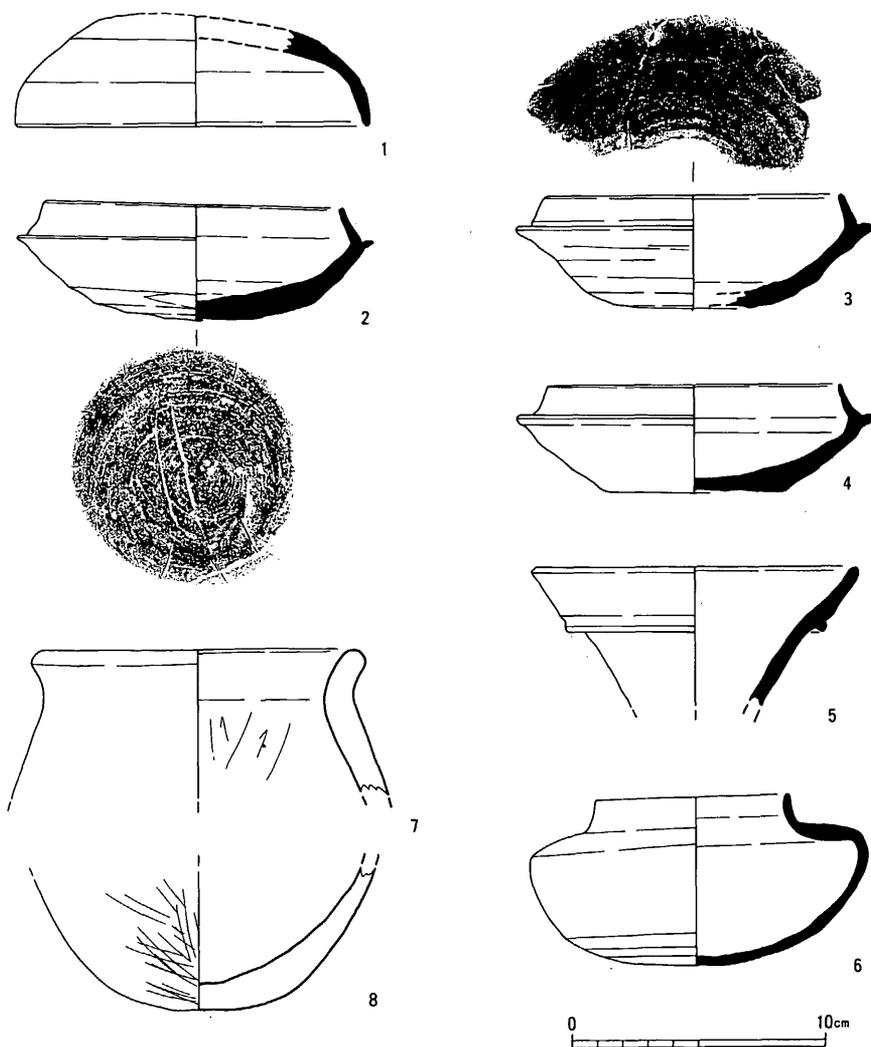


第 121 图 44・53号竖穴住居跡実測图 (1/60)

については痕跡すら確認できなかった。遺物は人頭大の角礫とともに住居跡の中央部から比較的纏まって出土したが、完形になるものはない。

遺物（第122図）第122図1～6は須恵器、7・8は土師器である。1は復原口径約14cmの坏蓋。2は復原口径約12cmの坏身で、底部外面には2本の平行沈線文がへラ記号として施される。3は復原口径約12cmの坏身で、底部内面には青海波の当て具圧痕がわずかに残る。4は復原口径約12cmの坏身で、口縁部付近は灰を被る。5は復原口径約12cmの甕（すゐ）の口縁部である。6は復原口径約8cm、器高5.7cmの短頸壺で、底部にのみへラケズリが施される。7は復原口径約13cmの甕で、外面は摩滅して調整不明だが、内面の胴部にはケズリが施される。8は加熱により赤褐色に変色した甕の底部で、外面にはハケが、内面にはナデが施される。

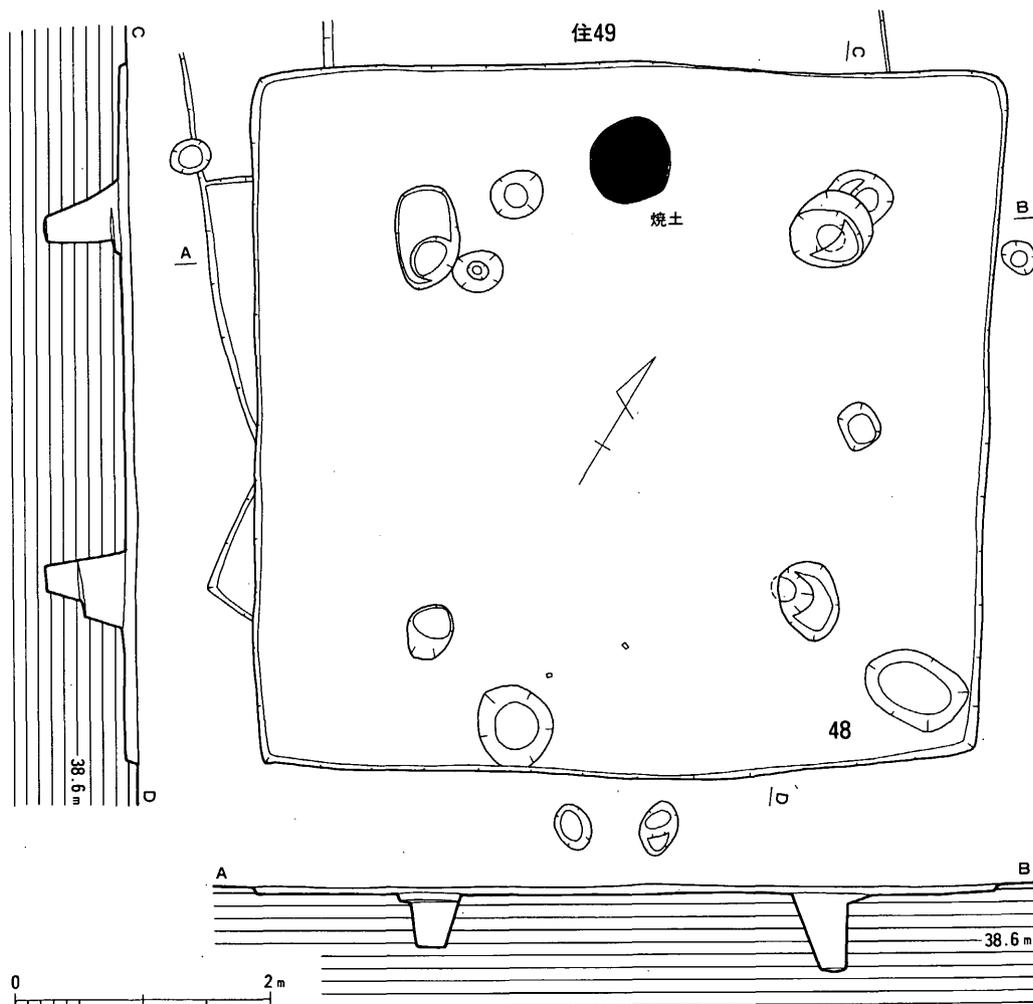
48号竪穴住居跡（図版83 第123図）



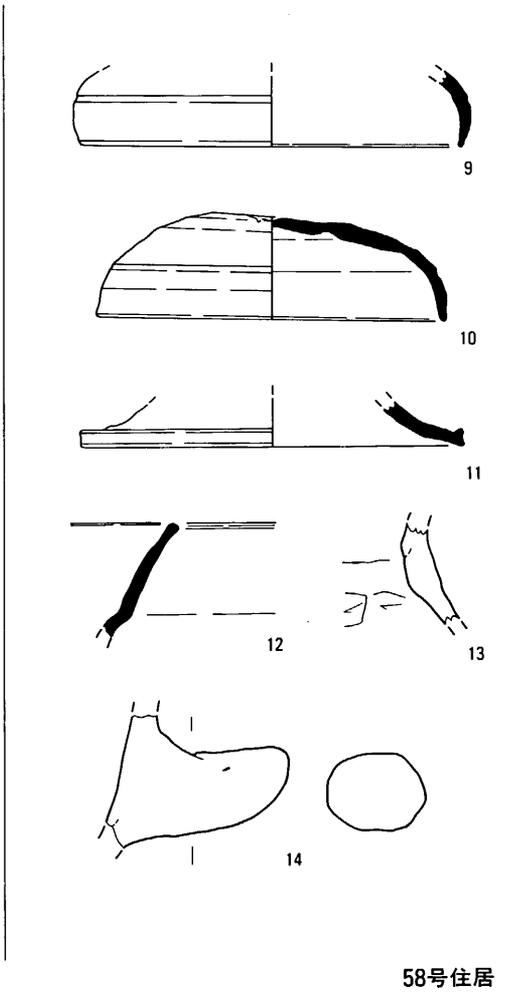
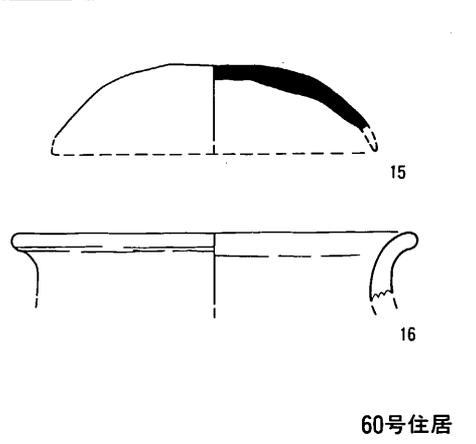
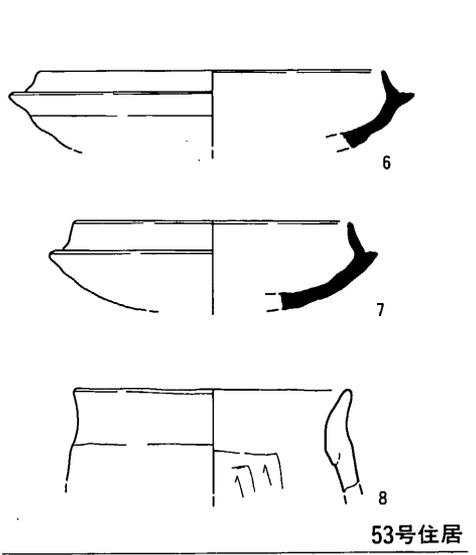
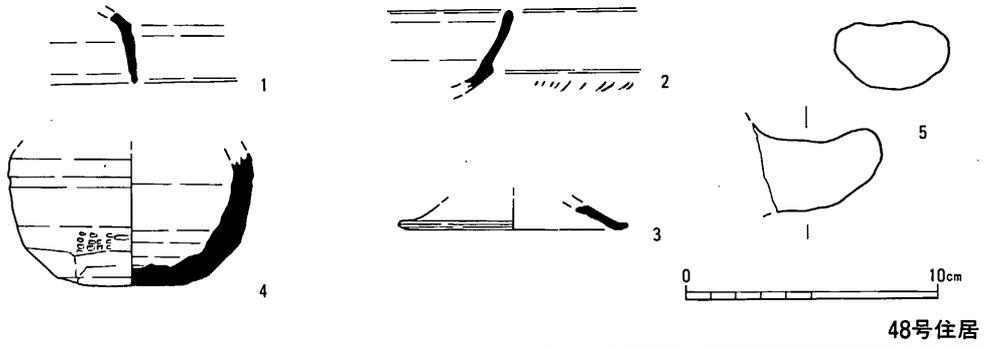
第122図 44号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

48号竪穴住居跡は北地区南側のほぼ中央部に位置し、弥生時代の49号竪穴住居跡を切り、同じく弥生時代の57号竪穴住居跡とは西50cmに近接する。近接する古墳時代の遺構は少なく、南西5mに44号竪穴住居跡があるくらいである。平面プランは5.7×5.7mの整った正方形を呈し、径50～60cm、深さ50～60cmの主柱穴を4本検出した。壁高は最高で8cmと、この住居跡を検出した時点ですでに貼り床が剥き出しになっていた。したがって、カマドも北壁中央部に0.7×0.6mの範囲で火床となる焼土がわずかに確認されただけで、袖や支脚は検出されなかった。

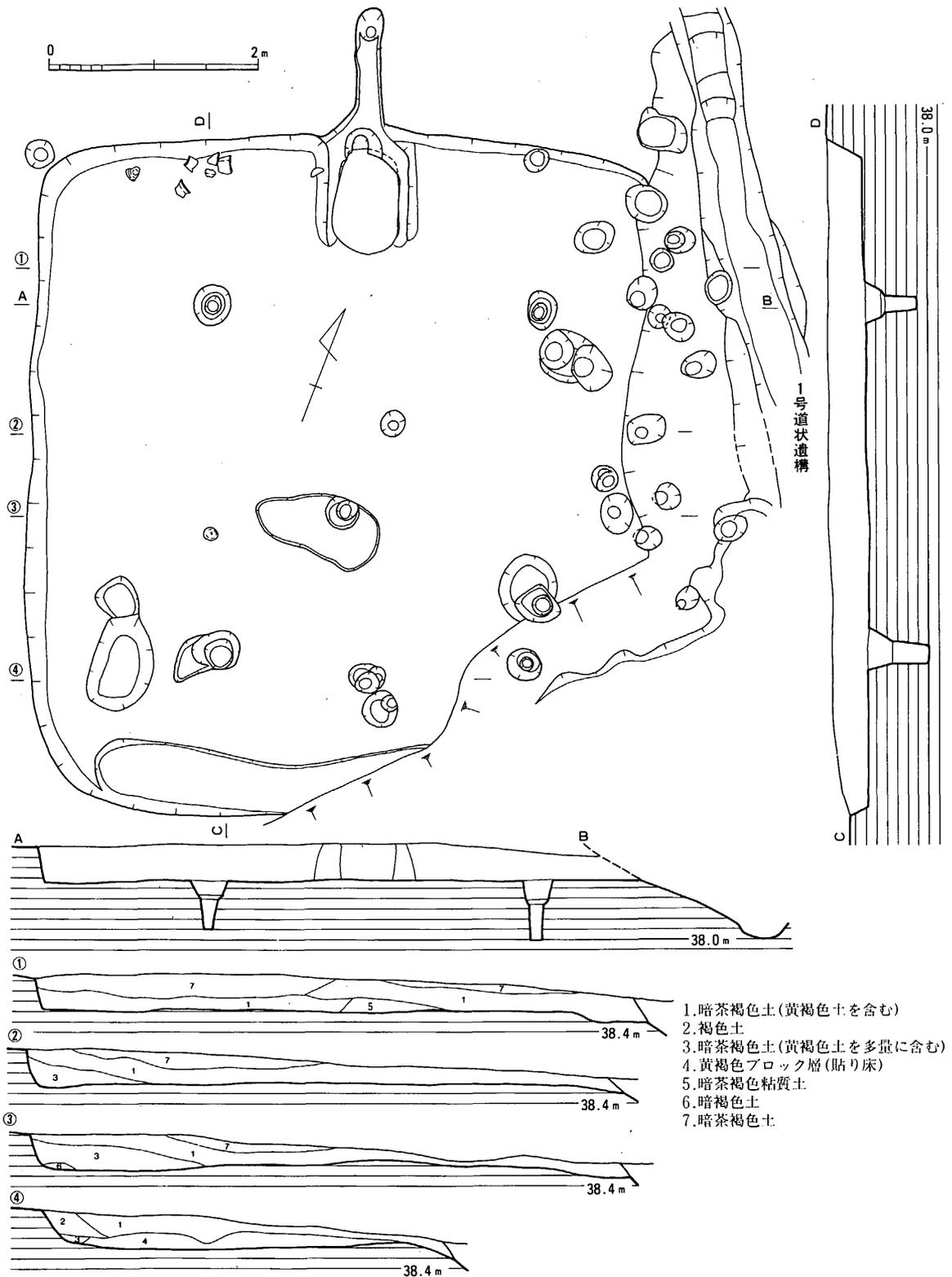
遺物 (第124図1～5 第158図2・14 第160図2・8) 第124図1は須恵器の坏蓋の口縁部。2は須恵器の高坏坏部で、連続刺突文がわずかに窺える、3は復原裾径約9cmの須恵器高坏の脚部。4は復原腹径10cmの須恵器の甗で、底部には回転ヘラケズリが施される。5は甑の把手。第158図2は現存長9.1cm、幅2.8cm、厚さ2mmの鉄鏃であるが、形態的には弥生時代のものなので、あるいは本住居跡の下部で検出された49号竪穴住居跡に属するものかもしれない。14は残存長



第123図 48号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第 124 图 48·53·58·60号竖穴住居迹出土土器实测图 (1/3)



第 125 図 54号竖穴住居跡実測図 (1/60)

4.2cmの刀子で、厚さは2mm。第160図2は2×2mmの緑色のガラス玉。8は3×3mmの青色のガラス玉。

53号竪穴住居跡（第121図）

53号竪穴住居跡は北地区南端中央部に位置し、古墳時代の1号道状遺構や弥生時代の16号竪穴住居跡に切られる。近接する古墳時代の竪穴住居跡は、南西2mに54号竪穴住居跡、北5mに44号竪穴住居跡がある。1号道状遺構に住居跡の1/2近くを切られているため、南北方向については2.6mという数値が得られるものの、東西方向については支柱穴やカマドとの位置関係から、およそ5mほどであったと考えられる。平面プランは長方形であろう。南隅にあるはずの支柱穴は1号道状遺構によって完全に削られており遺存しないが、他の3本については径40cm、深さ60cmのものを検出した。カマドも西側の袖は1号溝状遺構によって削られ全く残らないが、東側の袖と火床については辛うじて検出できた。黄褐色の粘土で作られたこの袖も一部削られているが、サイズとしては幅30cm、長さ60cmを測る。遺物は少ないが、図示したものについては、すべて床面からの出土である。

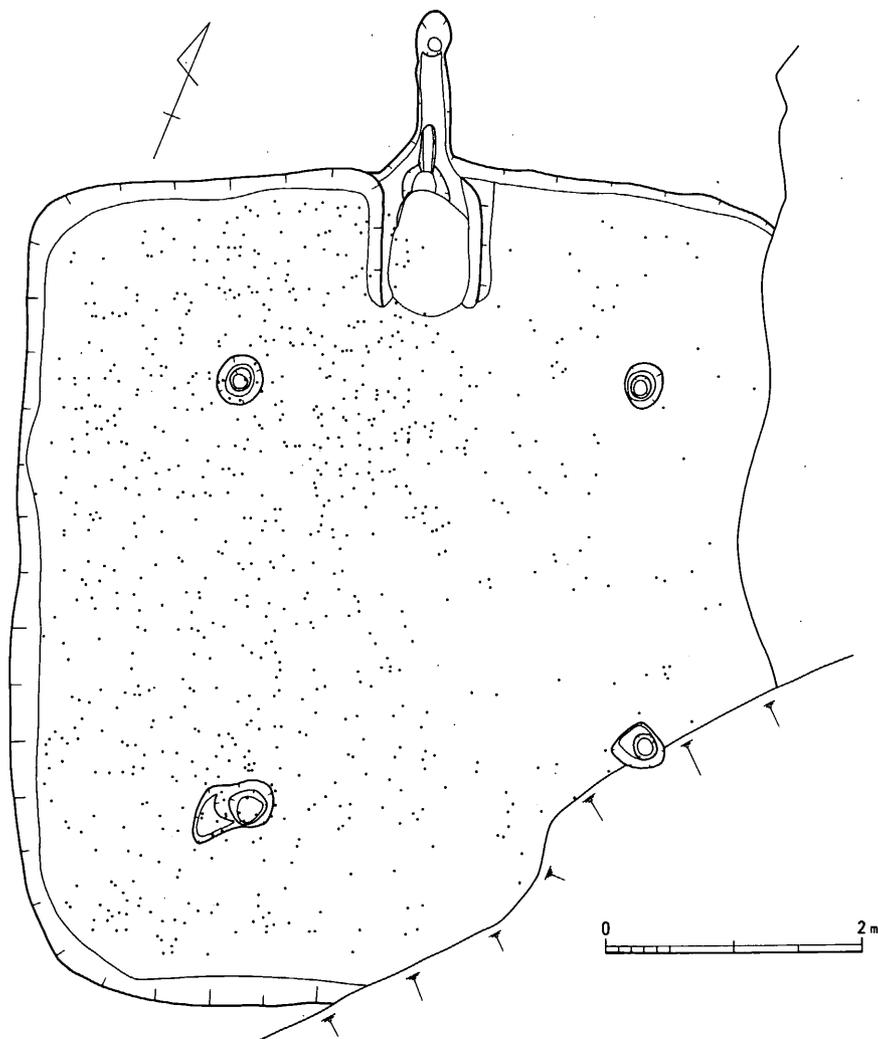
遺物（第124図6～8）第124図6は復原口径約14cmの須恵器の坏身。7も復原口径約11cmの須恵器の坏身。8は復原口径約11cmの土師器の甕で、摩滅が著しいが内面胴部にはケズリが窺える。

54号竪穴住居跡（図版84 第125～127図）

54号竪穴住居跡は北地区の南西端に位置し、古墳時代の1号道状遺構に切られる。近接する古墳時代の遺構としては、東2mの53号竪穴住居跡くらいで、この周辺は弥生時代の竪穴住居跡の密集する地区である。1号道状遺構に切られるのは東側1/3ほどであるが、6.7×5.8mの正方形に近い平面プランを呈することがわかる。4本の支柱穴は径30cm、深さ50～60cmを測る。北壁の中央部に付設されたカマドからは、幅25cm、長さ125cmの煙道が住居跡の外へ細長く突出する。この煙道の先端では20cmほど落ち込むが、ここから上方向へ煙突状のものが伸びていったと考えられる。カマドの上部20cmほどは焼土を少量含んだ黒褐色砂質土や灰褐色粘質土が堆積するが、これはカマド天井部の崩落したものであろう。これを除去してはじめて黄灰色粘土で作られた袖が現われ、その内側は赤く焼ける。袖内部の焼土と炭化物とが混ざる黒褐色土を除去すると全面に焼土層が広がるが、これが火床になる。支脚をはじめ遺物の出土はなく、カマド廃絶時において内部は掃除されたものと考えられる。カマドの下部は5cmほど掘り下げられ底に焼土や炭化物の混ざる黄灰色粘質土を敷いて基礎としているが、この粘質土は貼り床のそれとは明らかに異なる。この住居跡の調査に際しては、東西方向に50cmの間隔で6本（図示したのは代表的な4本）の土層断面観察畦を設定して住居跡の埋没状況を検討した。その結果、地山の黄褐色土を含む褐色系の土が主に西壁際から中央部へ向けて徐々に堆積していくばかりで、異質の土がブロック状に混入するような人為的な埋没行為を確認することはできなかった。また、出土した遺物866点のすべてについてその出土場所を記録したが（第126図）、そ

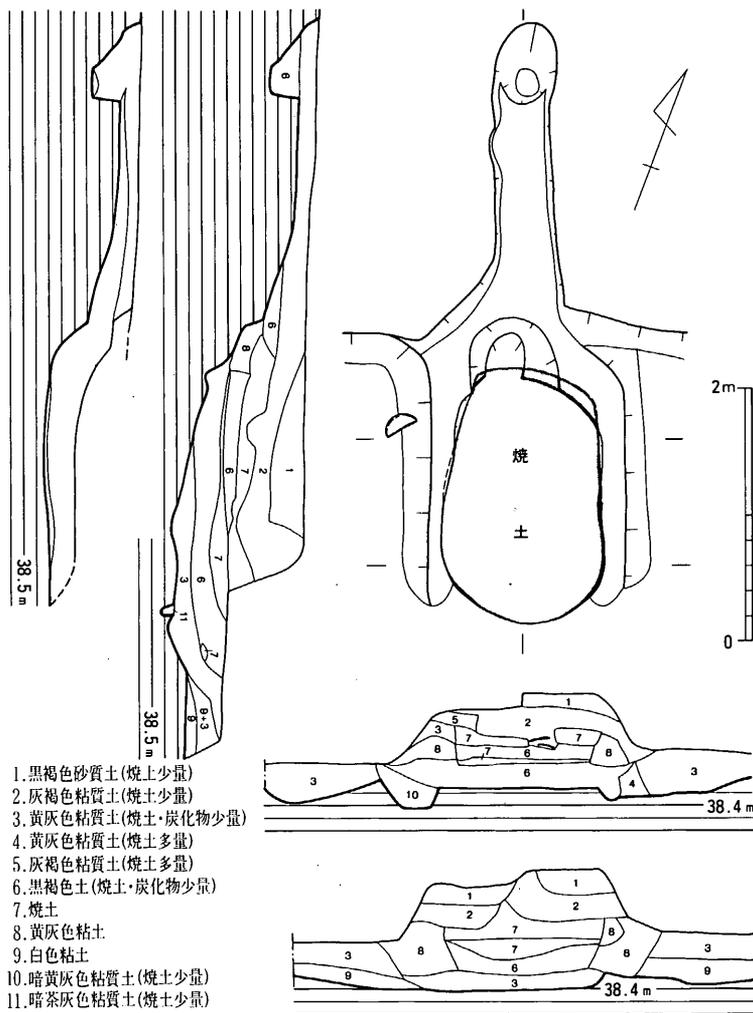
の約9割は住居跡の埋土である土層断面図第1・7層に包含され、住居跡の西側に集中はするものの特に部分的に密集する様子は観察されなかった。このことは西壁際から中央部へ向けて流れ込むように堆積したとする、土層断面図からの所見に対応するものである。なお、総出土点数866点の内訳は、須恵器136点（15.71%）、土師器721点（83.25%）、石器4点（0.46%）、鉄器3点（0.35%）、玉2点（0.23%）である。一見土師器がかなり多いように感じるが、この場合は土師器と須恵器の破損の度合（程度）の違いも考慮する必要があるだろう。図示した遺物のうち確実に床面から出土したには第128図6・9・10・12・14の5点の土器と第158図22の鉄器1点だけで、他は埋土からの出土である。

遺物（第128図 第158図11・12・22 第160図13・14）第128図1～8は須恵器、9～14は土師器である。1は復原口径約14cmの坏蓋。2～5は坏身で、復原口径は順に13cm、12cm、12cm、2cmで



第126図 54号竖穴住居跡遺物出土分布図（1/60）

ある。6は完形の坏身で口径11.7cm、器高4.3cmを測り、底部内面には青海波の当て具圧痕が残る。7は坏身の口縁部。8は復原裾径約13cmの高坏脚部で、櫛描きの波状文と3方向の透孔が施される。9は復原口径約13cmの甕で、外面にはハケが、内面にはケズリが施される。10は復原口径約16cm、11は復原腹径約15cm、12は復原口径約18cmの甕で、いずれも摩滅が著しく器面調整が観察しにくい。内面にはケズリが施される。13は甕の把手で、接合面にはへらによって幾つかのキズが入れている。14は高坏



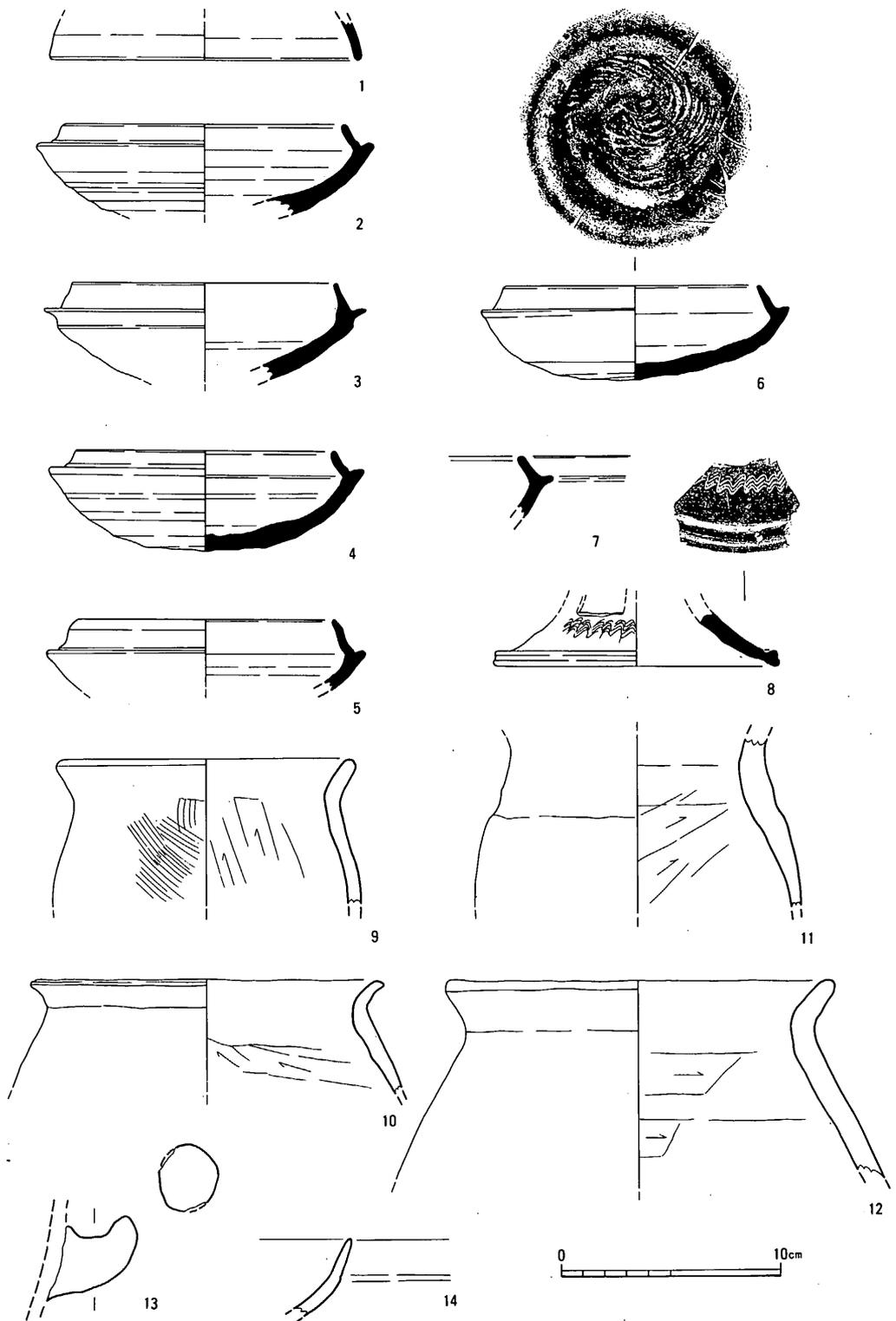
1. 黒褐色砂質土(焼土少量)
2. 灰褐色粘質土(焼土少量)
3. 黄灰色粘質土(焼土・炭化物少量)
4. 黄灰色粘質土(焼土多量)
5. 灰褐色粘質土(焼土多量)
6. 黒褐色土(焼土・炭化物少量)
7. 焼土
8. 黄灰色粘土
9. 白色粘土
10. 暗黄灰色粘質土(焼土少量)
11. 暗茶灰色粘質土(焼土少量)

第 127 図 54号竖穴住居跡カマド実測図 (1/30)

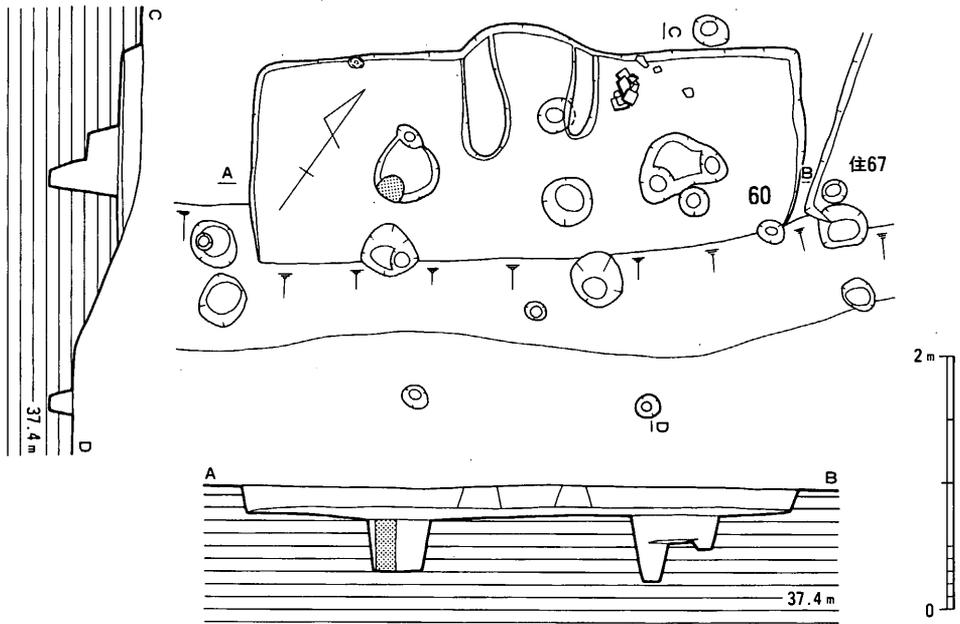
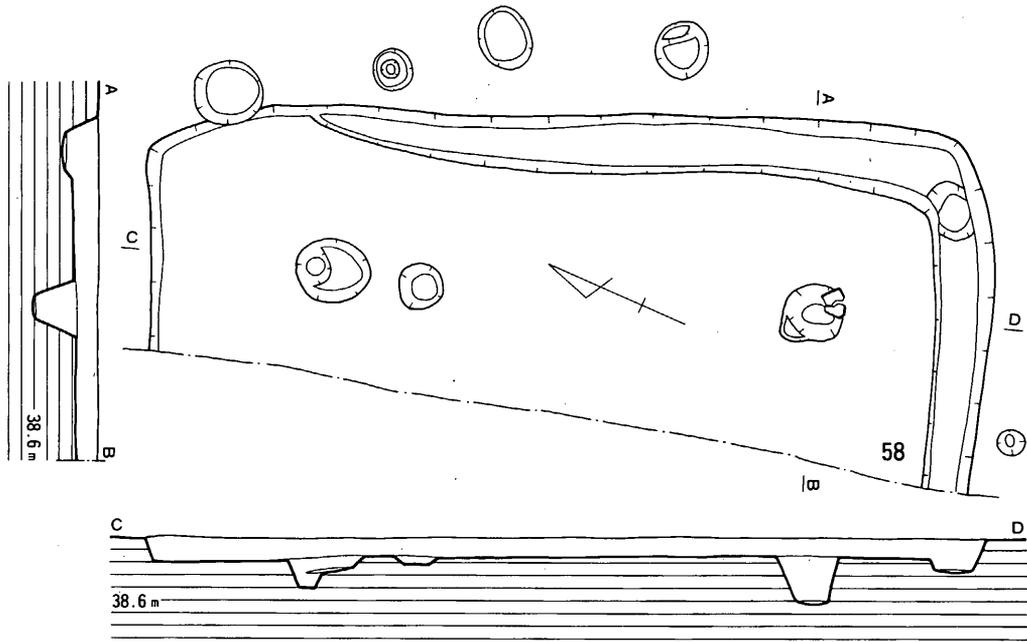
の口縁部であろうか。第158図11は残存長8.4cmの細長い鉄器で、断面形態は2×2mmもしくは3×3mmの方形である。12は残存長7cmの刺突具で、幅4mm、厚さ2mmで断面形態は湾曲する。22は断面U字状の鉄器で、先端部が細くなる。残存長3.6cmで、縦1.6cm、横1.4cm。第160図13・14は一端が3~4mmしか残らない碧玉製の管玉で、13の径が4.5mm、14の径が7mmで別個体である。

58号竖穴住居跡 (図版85 第129図)

58号竖穴住居跡は北地区の中央部西端に位置し、古墳時代の遺構としては南西7mに48号竖穴住居跡が、北5mには7号土壌がある。この住居跡の2/3は調査区外に伸びており、したがって南北方向については6.5mという数値が得られているが、東西方向で確認できるのは2.9m分だけである。支柱穴は東側の2本が検出されたが、1つは径50cm深さ25cm、もう1つは径40cm、深さ40cmである。南壁と東壁に沿って幅25cm、深さ10cmの溝が巡るが、他の竖穴住居跡の例か



第 128 图 54号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/3)



第 129 图 58·60号竖穴住居跡実测图 (1/60)

ら考えて、溝の巡らない北壁にカマドが付設されているであろう。遺物の出土は少なく、図示できたものは埋土からの出土である。

遺物（第124図9～14）第124図9～12は須恵器、13・14は土師器である。9は復原口径約15cmの坏蓋。10はほぼ完形に近い坏蓋で、口径13.7cm、器高4.3cm。11は復原裾径約15cmの高坏脚部。12は甗の口縁部であろうか。13は甗の頸部付近で、内面にはケズリがわずかに窺える。14は甗の把手で内面にはケズリがわずかに残る。

60号竪穴住居跡（図版85・86 第129図）

60号竪穴住居跡は南地区の中央部に位置し、弥生時代の66号竪穴住居跡を切る。南地区の古墳時代の竪穴住居跡は60号だけである。この住居跡は開墾時の削平により、南側2/3は支柱穴が15cmほど残るだけである。東西方向については4.4mを測るが、南北方向については支柱穴の位置関係からおよそ4mほどであったと考えられる。北側2つの支柱穴は径50cm、深さ50cmを測り、北西側のものについては径16cmの柱痕を確認した。カマドは北壁中央部に付設され、幅70cm、奥行き20cmほどが緩やかに突出する。黄褐色の粘土で作られた袖は明確に検出できたが、西側の基部や東側の先端部は削平されている。内部には自然石を利用した長さ22cmの支脚が、地山まで掘り込まれて立てられていた。この支脚の手前には40×35cmの範囲で焼土が広がるが、これは火床に相当するものである。カマドの下部は105×75cm、深さ15cmの範囲で掘り下げられているが、ここには褐色粘質土が入れられカマドの基礎としている。遺物は少なくわずかにカマド周辺から出土したが、カマド東側の土器片の集中は甗の胴部破片でありあまり接合しなかったので図示してはいない。図示した2点は床面出土である。

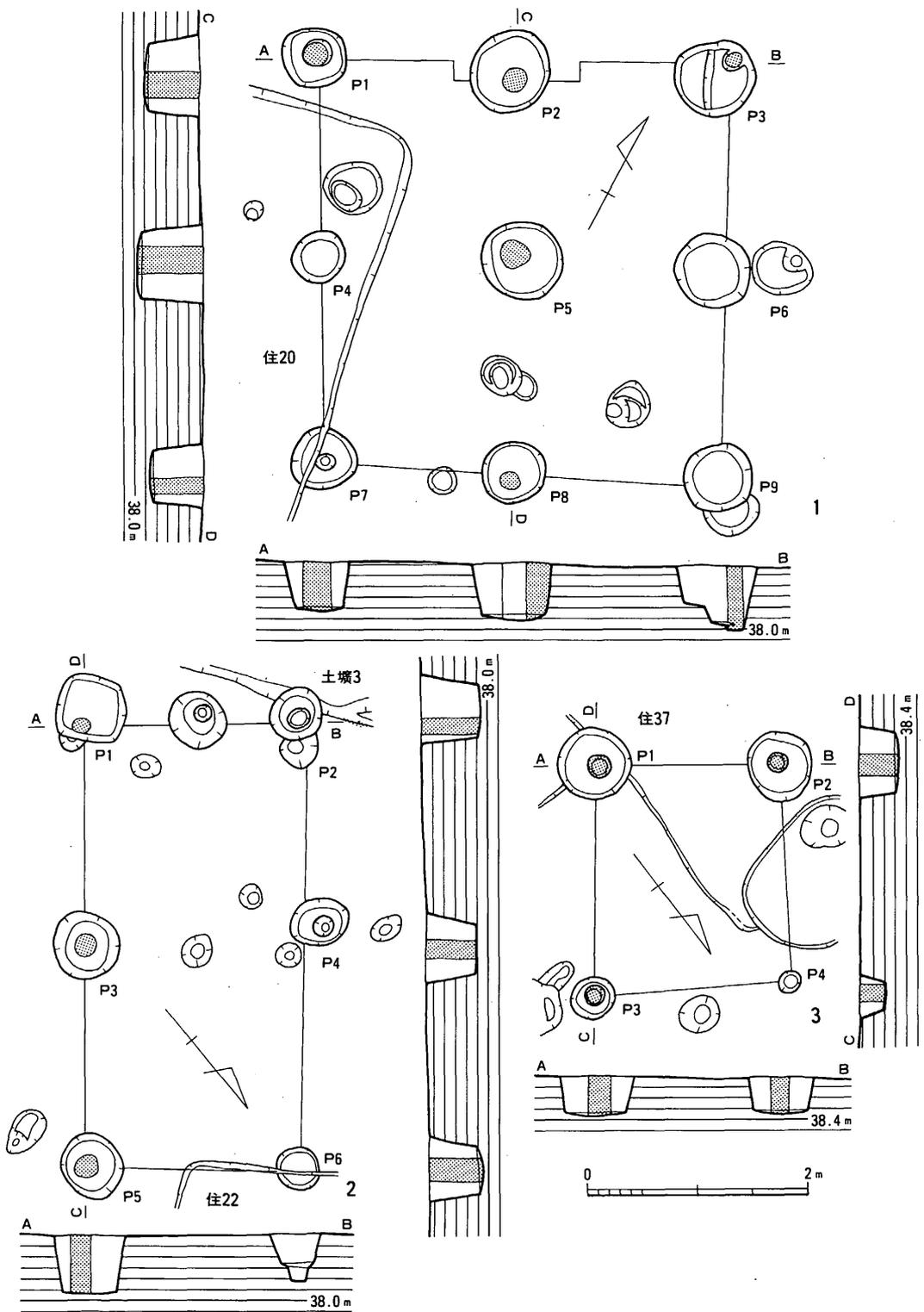
遺物（第124図15・16）第124図15は赤焼きの須恵器坏蓋で、復原口径は約13cm。16は復原口径約16cmの甗で、摩滅により調整不明。

(2)掘立柱建物跡

仮塚南遺跡では3棟の掘立柱建物跡を確認した。竪穴住居跡との切り合い関係や出土遺物の検討から、これらはいずれも古墳時代に属するものと考えられる。

1号掘立柱建物跡（図版87 第130図）

1号掘立柱建物跡は北地区中央部の北寄りに位置し、古墳時代の20号竪穴住居跡に切られる。この一帯は古墳時代の竪穴住居跡が最も密集する地区で、2号掘立柱建物跡も南東3mにある。梁行2.6m、桁行2.7mの2×2間の建物跡で、柱穴は径60～70cm、深さ40～50cmにほぼ纏まっている。柱痕の確認できたものについては、径15～25cmとやや幅があった。P-4・7については20号竪穴住居跡の床面において検出された。遺物の出土は少ないが、P-1から出土した甗1点と土玉が図示できた。



第 130 图 1~3号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

遺物（第131図1 第156図6）第131図1は復原口径約14cmの甕で、全体的に摩滅が著しいが内面においてケズリの痕跡が観察された。第156図6は1.9×1.9cmの土玉で、径2mmの孔が貫通する。

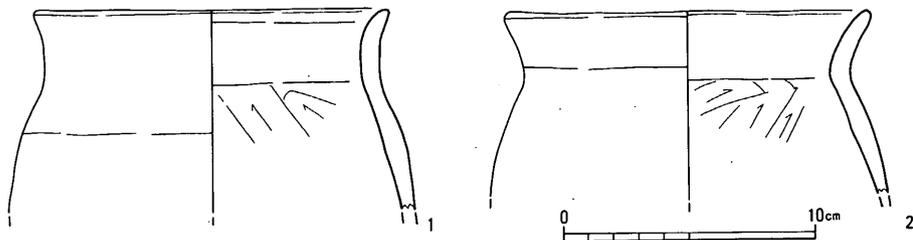
2号掘立柱建物跡（図版87 第130図）

2号掘立柱建物跡は北地区中央部の北寄りに位置し、古墳時代の3号土壇は切るが、同じ古墳時代の22号竪穴住居跡に切られる。この一帯は古墳時代の竪穴住居跡が特に密集する地区で、建物跡の東側には古墳時代の23・24号竪穴住居跡と近接し、北西3mには1号掘立柱建物跡がある。梁行2.0m、桁行4.1mの細長い1×2間の建物跡で、柱穴は径60cm、深さ50cmでほぼ纏まっている。柱痕の確認できたものについては、径15～20cmに収まる。P-6については、22号竪穴住居跡の床面において検出された。遺物は少ないが、P-1から出土した甕1点だけが図示できた。

遺物（第131図2）第131図2は復原口径約14cmの甕で、全体的に摩滅が著しいが内面においてケズリの痕跡が観察された。

3号掘立柱建物跡（第130図）

3号掘立柱建物跡は北地区の南東端に位置し、古墳時代の37号竪穴住居跡や弥生時代の38号竪穴住居跡を切る。北50cmには古墳時代の19号竪穴住居跡と近接する。梁行1.8m、桁行2.1mの1×1間の建物跡である。柱間の間隔、1×1間という構成、このあたりの削平は著しく竪穴住居跡の遺存状態は特に悪い、という諸要素を考慮すれば、古墳時代の竪穴住居跡の支柱穴だけが残ったものとも考えることも可能である。検出できた柱痕の径は20cm程度である。遺物の出土はほとんどなかった。



第131図 1・2号掘立柱建物跡出土土器実測図（1/3）

(3)土壇

仮塚南遺跡において古墳時代以降に属すると考えられる土壇は10基が確認された。これらは、中世（11世紀）に属する9号土壇を除いて、すべて竪穴住居跡と同じ古墳時代後期（6世紀後半）

に比定される。この中にあって、7号土壙や11号土壙は土壙というよりもむしろ落ち込み状の遺構に近いが、取りあえず土壙として扱った。

1号土壙（図版88 第132図）

1号土壙は北地区中央部の北寄りに位置し、古墳時代の20号竪穴住居跡のカマドを切る。北1.5mには14号竪穴住居跡、西50cmには8号竪穴住居跡、東50cmには1号掘立柱建物跡といった具合に、古墳時代の遺構に囲まれる。3.5×2.5mの楕円形を呈し、深さは7cm程度と浅い。床面において幾つかのピットを検出したが、これらを含めて遺構の性格は判然としない。出土遺物は少なく、図示できたのは1点だけである。

遺物（第133図1～3）第133図1は復原口径約16cmの土師器の甕で、全体的に摩滅が著しいが、内面胴部にはケズリが窺える。

2号土壙（図版88 第132図）

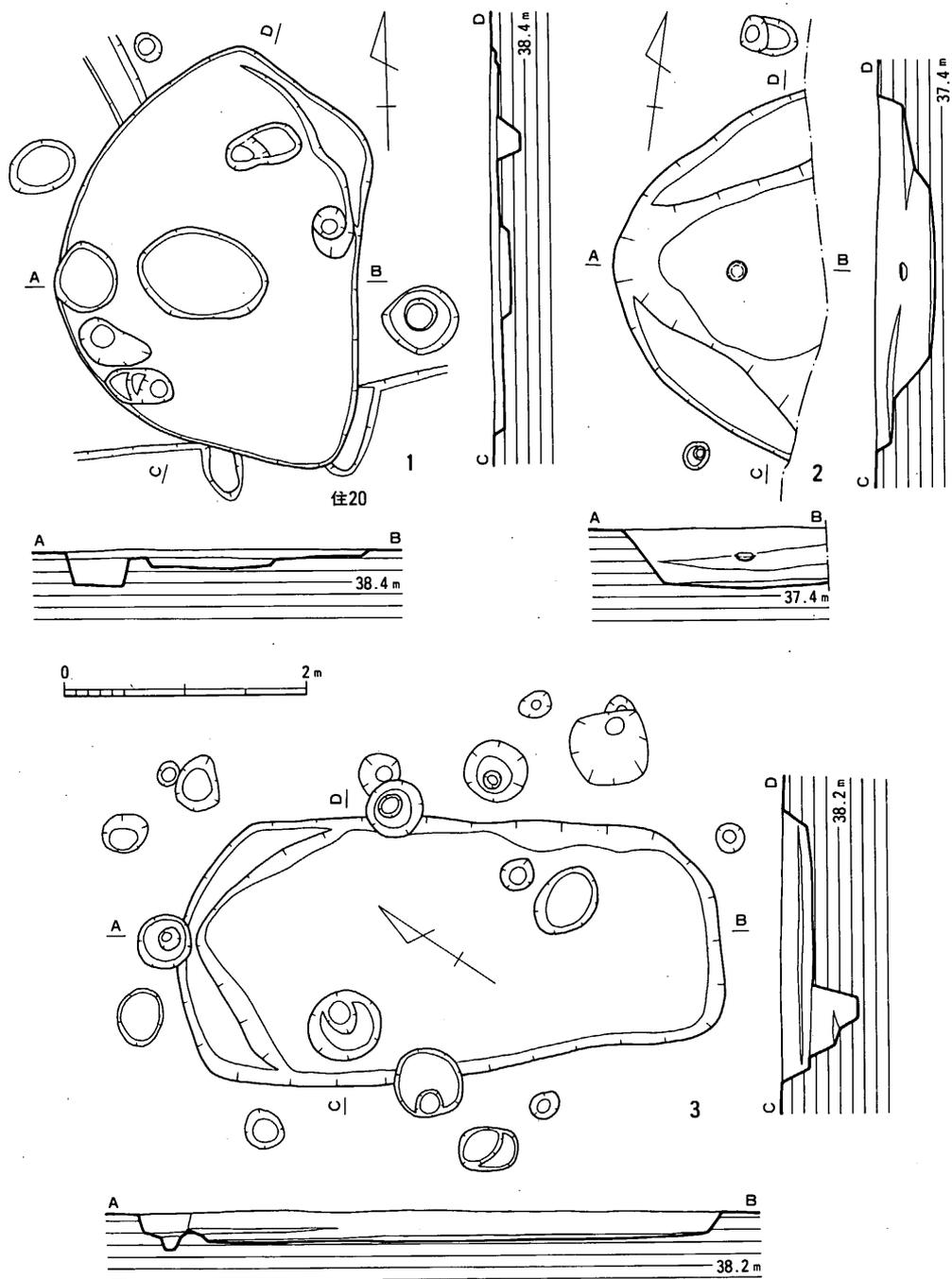
2号土壙は北地区の北東部に位置する。北3mには弥生時代の28号竪穴住居跡が、南4mには古墳時代の26号竪穴住居跡がある。この土壙の大部分は調査区外に伸びているようでその全体像は知り得ないが、検出できたのは3.1×1.7mの三角形に近い半円形である。深さは50cmで、検出面から20cmほど下がったところに幅40cmほどのテラスが付く。平面プランやテラスの特徴から、4号土壙に似た印象を受ける。遺物は比較的多いが、いずれも埋土中からの出土で、底面付近からはわずかにしか出土していない。

遺物（第133図2～7）2～6は須恵器、7は土師器である。2は完形の坏蓋で、口径13.4cm、器高4.0cm。3も完形で口径11.4cm、器高3.8cmの坏身。4は復原裾径約11cmの高坏脚部。5は甕の口縁部。6は復原口径約13cmの高坏坏部で、櫛状工具による連続刺突文が施される。7は復原口径約19cmの甕で、外面にはハケが、内面にはケズリが施され、口縁部の内外面は強く横方向にナデられる。

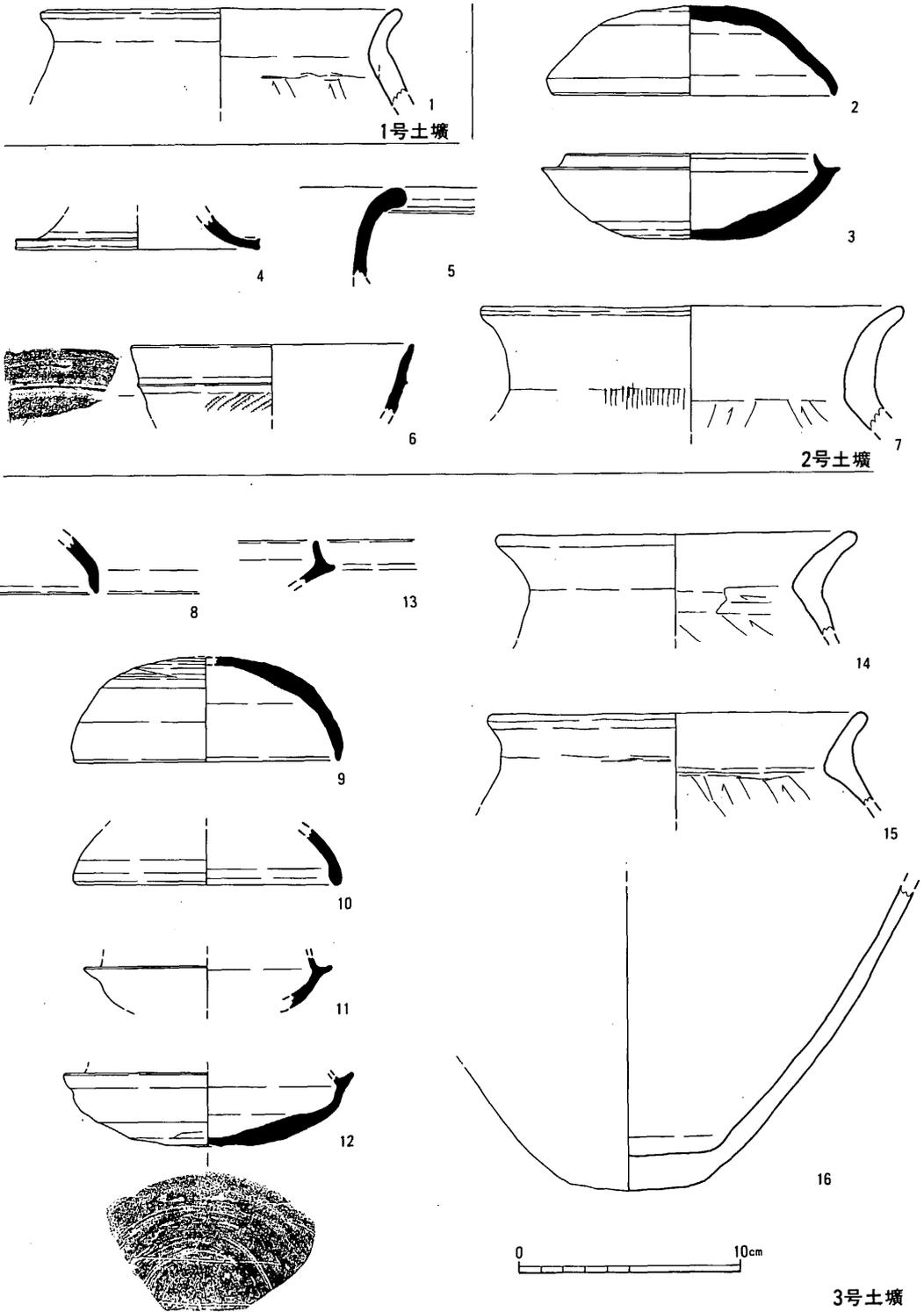
3号土壙（図版89 第132図）

3号土壙は北地区中央部のやや北寄りに位置し、2号掘立柱建物跡に切られる。北1.5mには1号掘立柱建物跡、北西2mには20号竪穴住居跡、西1mには29号竪穴住居跡、南東2mには23号竪穴住居跡、北東3mには22号竪穴住居跡といった具合に、古墳時代の遺構に取り囲まれる。平面プランは4.5×2.3mの隅丸長方形を呈し、検出面から15cmほど下がったところで幅10～20cmのテラスが北端に作られる。深さは25cm程度で、底面には小ピットもあるが、遺構の性格については判然としない。遺物は比較的多く出土したが、大半は埋土からの出土である。

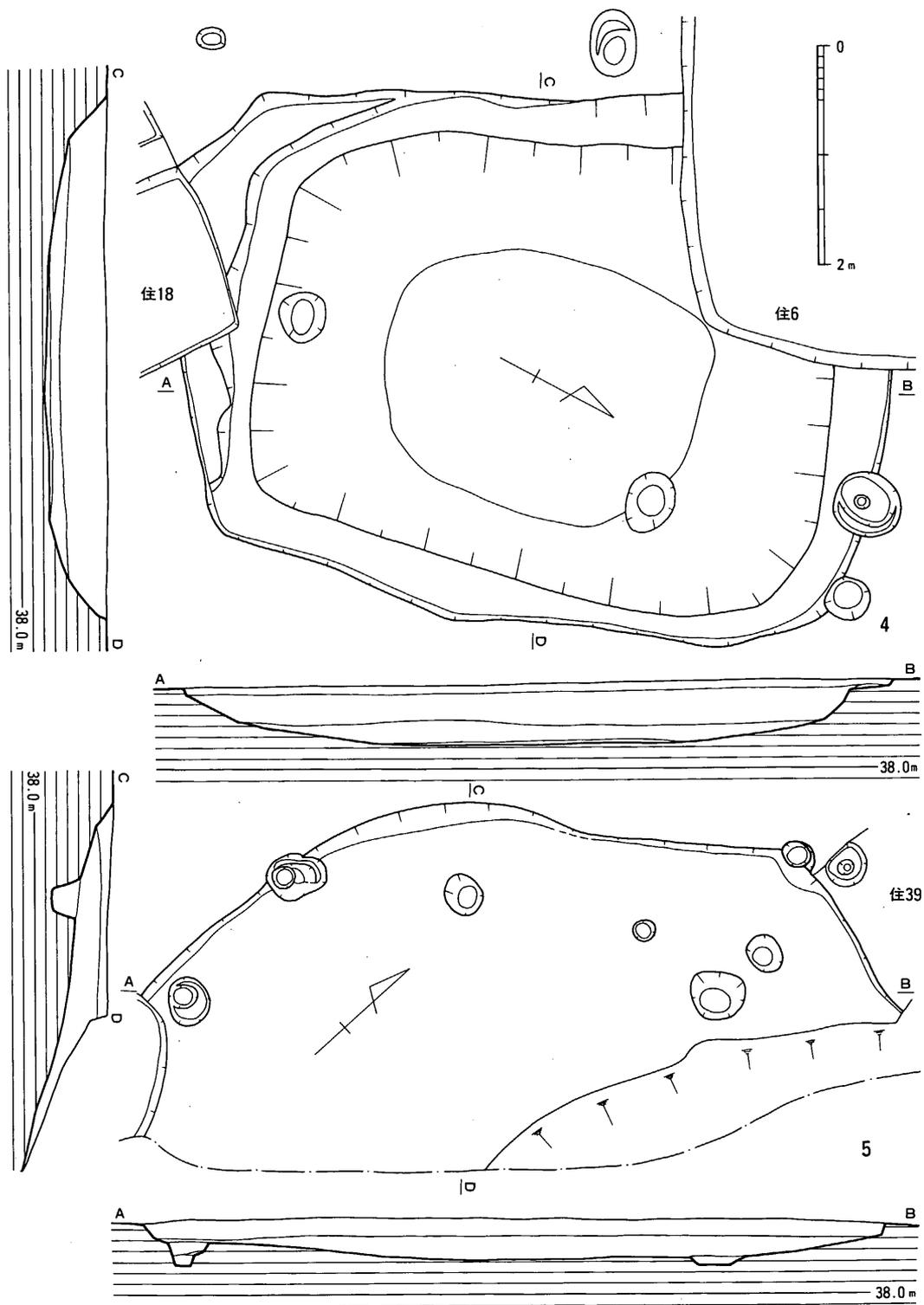
遺物（第133図8～16）第133図8～13は須恵器、14～16は土師器。8は坏蓋の口縁部。9・10は坏蓋で、9の復原口径は約12cm、10も12cm。11～13は坏身で、11の復原口径は約10cm。12の復原口径は約11cmで、底部外面には2本の平行沈線文によるへら記号が施される。14は復原口径約16cm、15は15cmの甕で、全体的に摩滅が著しいものの、胴部内面にはケズリが観察される。



第 132 图 1~3号土坑实测图 (1/60)



第 133 图 1~3号土壙出土土器实测图 (1/3)



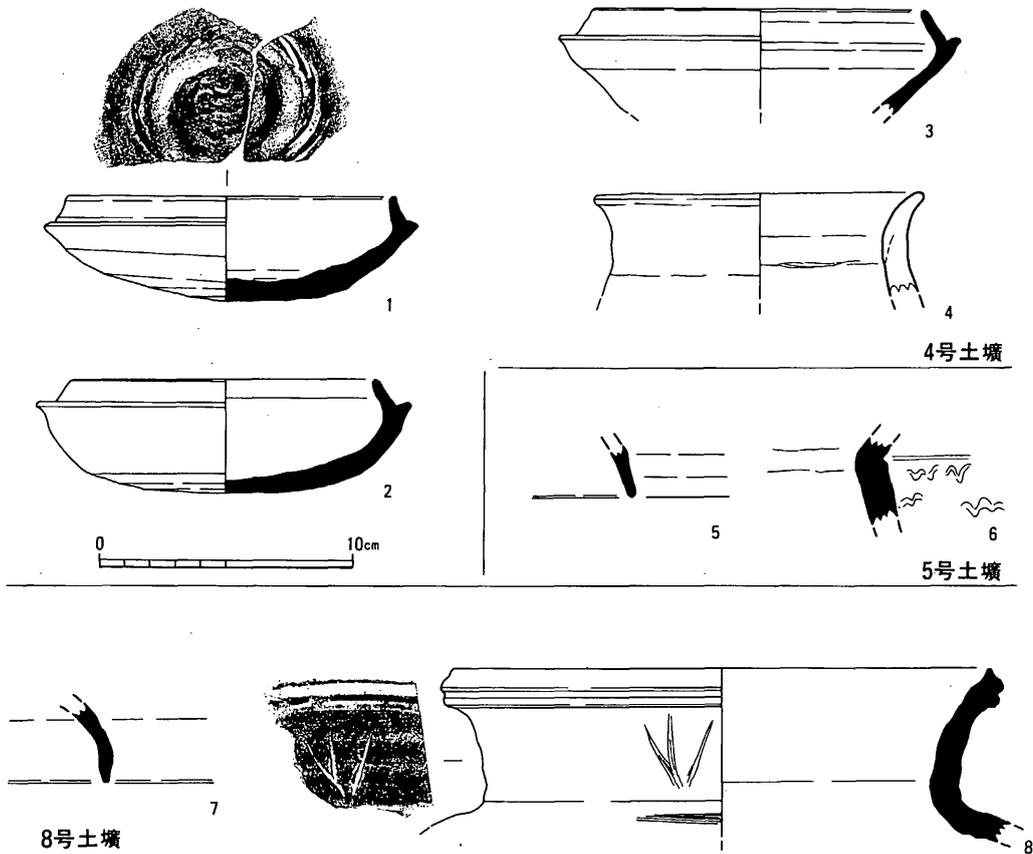
第 134 图 4·5号土壤实测图 (1/60)

16は加熱により赤褐色に変色した甕の胴下半部で、内面にはケズリがわずかに窺える。

4号土壙 (図版89 第134図)

4号土壙は北地区中央部の北西寄りに位置し、古墳時代の6・18号竪穴住居跡に切られる。東3.5mには20・30号竪穴住居跡、北東3mには9号竪穴住居跡があり、古墳時代の住居跡が密集する地区である。平面プランは6.4×4.8mの隅丸長方形で、壁は竪穴住居のように直線のかつ垂直に立ち上がるのではなく、幅の狭いテラス等を作りながら緩やかに傾斜していき、断面形態としては浅い椀状になる。規模的には古墳時代の竪穴住居に近いが、平面形態や断面形態は独特で、少なくとも竪穴住居の造築を途中で中止したような性格のものではない。遺物は少なく、主に埋土からの出土である。

遺物 (第135図1~4 第160図5) 第135図1~3は須恵器の坏身で、復原口径は順に13cm、12cm、13cmで、1の底部内面には青海波の当て具圧痕が残る。4は復原口径約13cmの土師器の甕で、全体的に摩滅が著しく調整は不明だが、内面に接合痕が残る。第160図5は3×4mmの青色のガラス玉。



第135図 4・5・8号土壙出土土器実測図 (1/3)

5号土壙 (図版90 第134図)

5号土壙は北地区南東端部に位置し、古墳時代の39号竪穴住居跡を切るが、遺構の大半は市道(林田城山線)によって削平されている。残存するのは6.6×3.4mの半円形で、掘り鉢状に中央部へ向けて緩やかに傾斜していく。土壙というよりも傾斜部分に土が流れてたまったもの、もしくは落ち込みとしたほうが適当かもしれないが、取りあえず土壙として扱った。遺物は摩滅した小破片が少量出土しただけである。

遺物(第135図5・6) 第135図5は須恵器坏蓋の口縁部。6は須恵器の甕もしくは壺の頸部であろうか。波状文が外面に痕跡的に観察される。

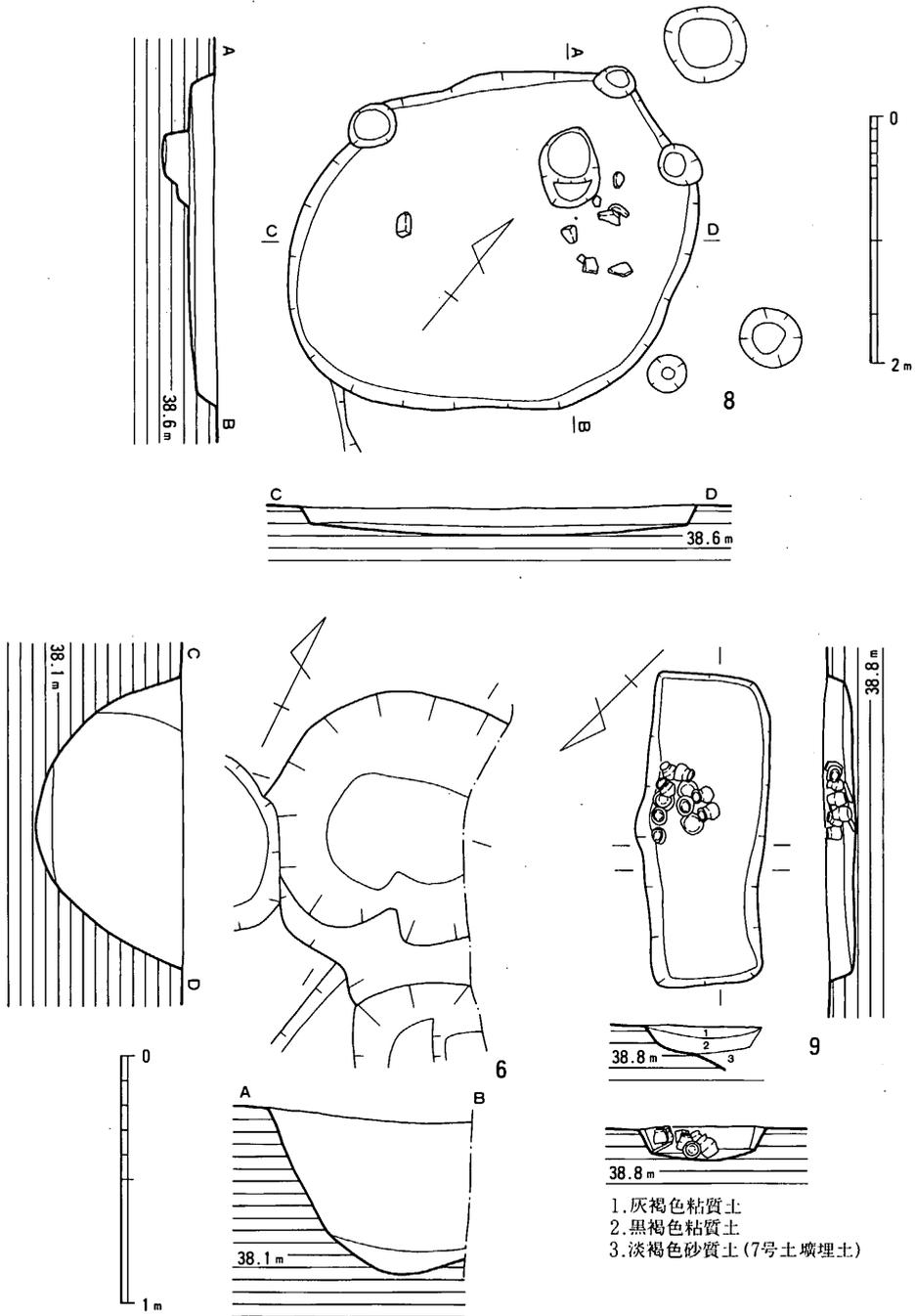
6号土壙 (図版90 第136図)

6号土壙は北地区の南東端部に位置し、古墳時代の39号竪穴住居跡を切る。この土壙自体調査区外に伸びているのでその全体像を知り得ないが、平面プランは1.1×0.9mの楕円形を呈していたと考えられる。深さは63cmで、壁は直線的ではなく緩やかに開きながら立ち上がる。遺物は摩滅した土師器の小破片が数点出土しただけで、図示できるものはなかった。

7号土壙 (図版91 第138図)

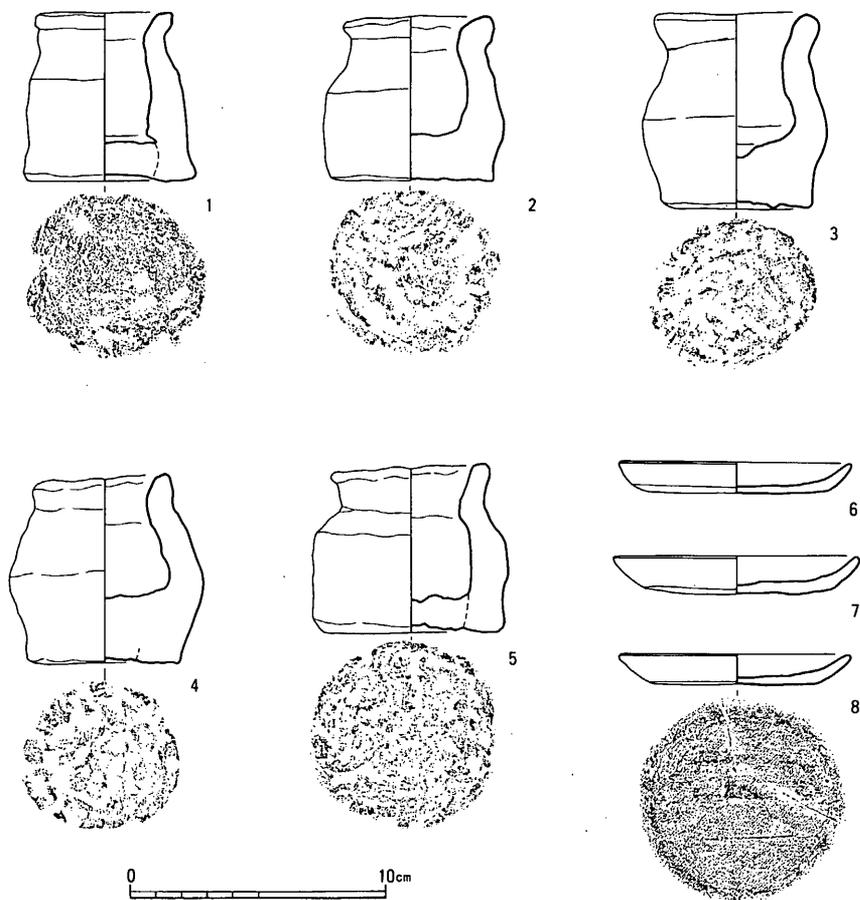
7号土壙は北地区中央部の西端に位置し、古墳時代の8号土壙や中世の9号土壙には切られるが、広形銅戈の鋳型が出土した10号土壙はこの7号土壙の底面において検出された。この土壙自体は調査区外に伸びているためその全体像を知ることはできないが、南北方向については3.7~5.5mという数値が得られるものの、東西方向については13.2mまでしか確認できていない。平面プランは東西方向に長い不整楕円形で、東から西の方向へ4段の幅の広いテラスを階段状に作りながら下がっていき、最も深い80cmの底面に至る。遺物は満遍なく包含され、3段目のテラスには人頭大の角礫が密集する。埋土は上部では褐色の砂質土であるが、下部に至るにつれて粘質性が増していき、ある程度水が貯まっていた状況が想定されるが、湧水層と考えられる砂層までは掘り込まれておらず、実際の調査においても湧水はなかった。調査区外へ伸びる部分の状況が不明なため遺構の性格を推定することには限界があるが、階段状のテラスを利用した取水遺構の機能が想定されつつも、それを積極的に肯定する根拠は乏しいと言わざるをえない。遺物量は多くパンケース5箱分に及ぶが、完形になるものはごくわずかであった。なお、本土壙の最上面においてのみ11世紀代の土師皿(第140図22~24)が出土したが、これらはこの土壙に伴うものではなく、この土壙を切る同じ11世紀代の9号土壙に関連した遺物と考えるのが妥当であろう。

遺物(第139・140図 第157図8・10 第159図4 第158図17) 第139・140図1~16は須恵器、17~24は土師器である。1~5は坏蓋で復原口径は順に13cm、14cm、14cm、13cm、10cmである。1の天井部外面には「×」のへう記号が施され、2の天井部内面には青海波の当て具圧痕が残る。6は高坏の蓋で口径13.4cm、器高5cm。7~10は坏身で、完形の8は口径13.2cm、

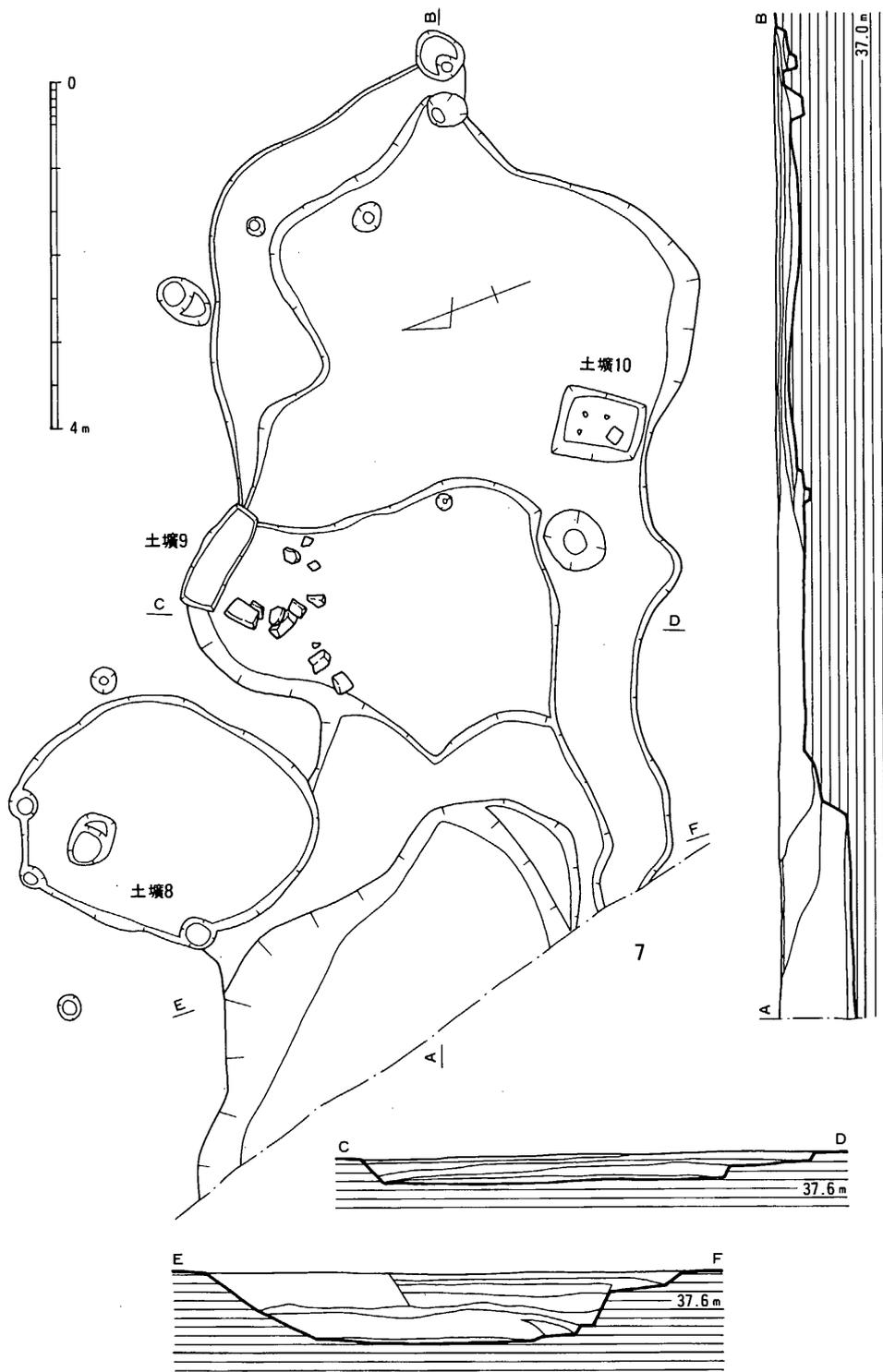


第136図 6・8・9号土坑実測図 (8号は1/60 6・9号は1/30)

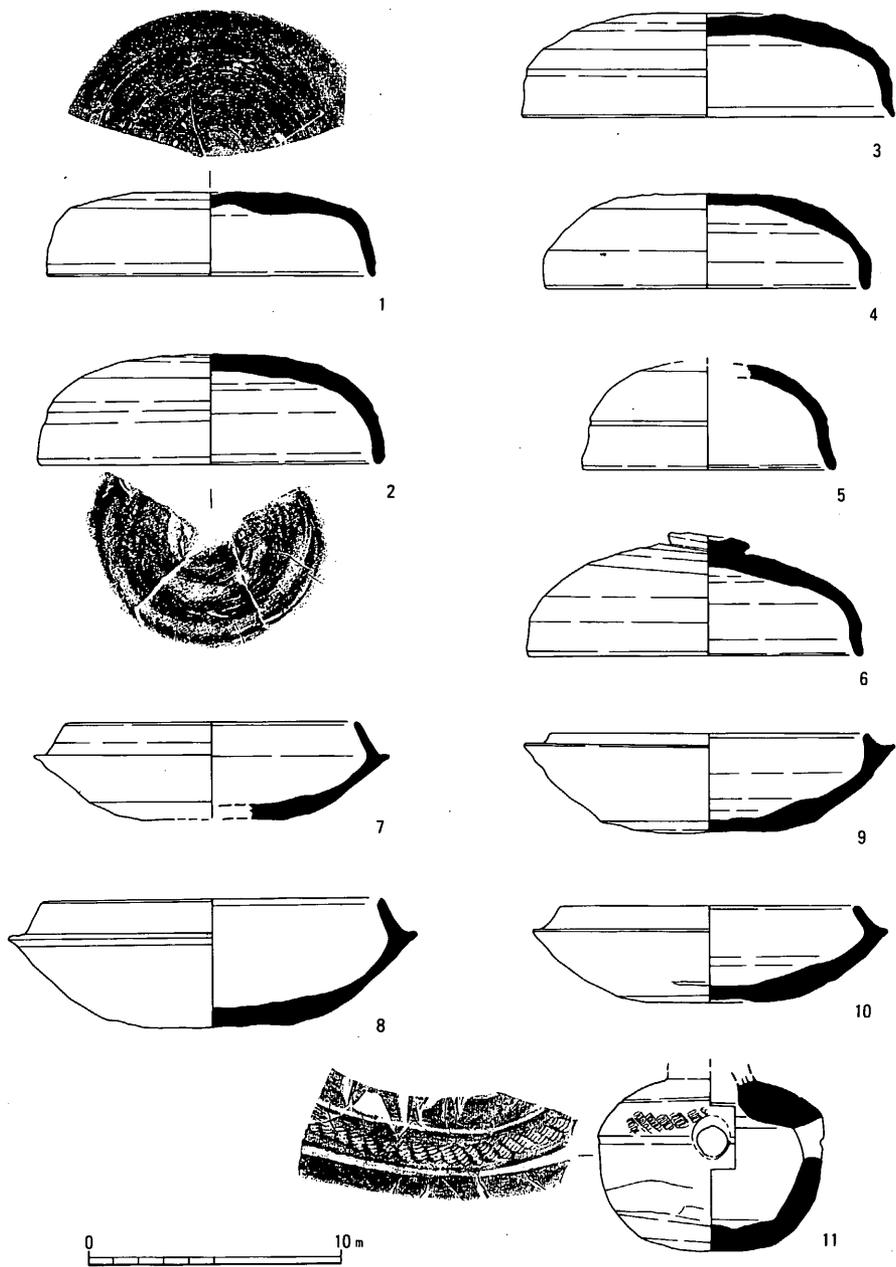
器高5.0cm。7・9・10の復原口径は順に12cm、13cm、12cm。11は復原腹径約9cmの甕の胴部で、2本の沈線文の間には櫛描きの連続刺突文が施される。12の復原口径約19cmの甕で全体的に摩滅が著しいが、外面には格子目のタタキ、内面には青海波の当て具圧痕がわずかに窺える。13・14は甕もしくは壺の口縁部で、13の復原口径は約11cm、14の復原口径は約12cmである。15は復原裾径約9cmの、16は約11cmの高杯の脚部で、15には3方向の円形の透孔が入る。17は復原口径約18cmの甕で、外面にはハケが、内面にはケズリが施される。18は復原口径約13cmの甕で、摩滅により器面調整は不明。19は復原口径約16cmの甕で、外面にはハケが、内面にはケズリが施される。22～24はへら切り後の板状圧痕が残る土師皿で、いずれも復原口径約11cm、器高1cm。第157図8は片岩系の砥石で、使用されているのは1面だけ。10は粘板岩製の砥石で、断面形態は六角形になる。その中でも最も面積の広い面は不定方向の線条痕や小さな溝が作られ、他の面と異なった使用が行なわれたと考えられる。第159図4は砂岩製の紡錘車で、径5.2cm、厚



第 137 図 9号土壌出土土器実測図 (1/3)



第 138 图 7号土壙实测图 (1/80)

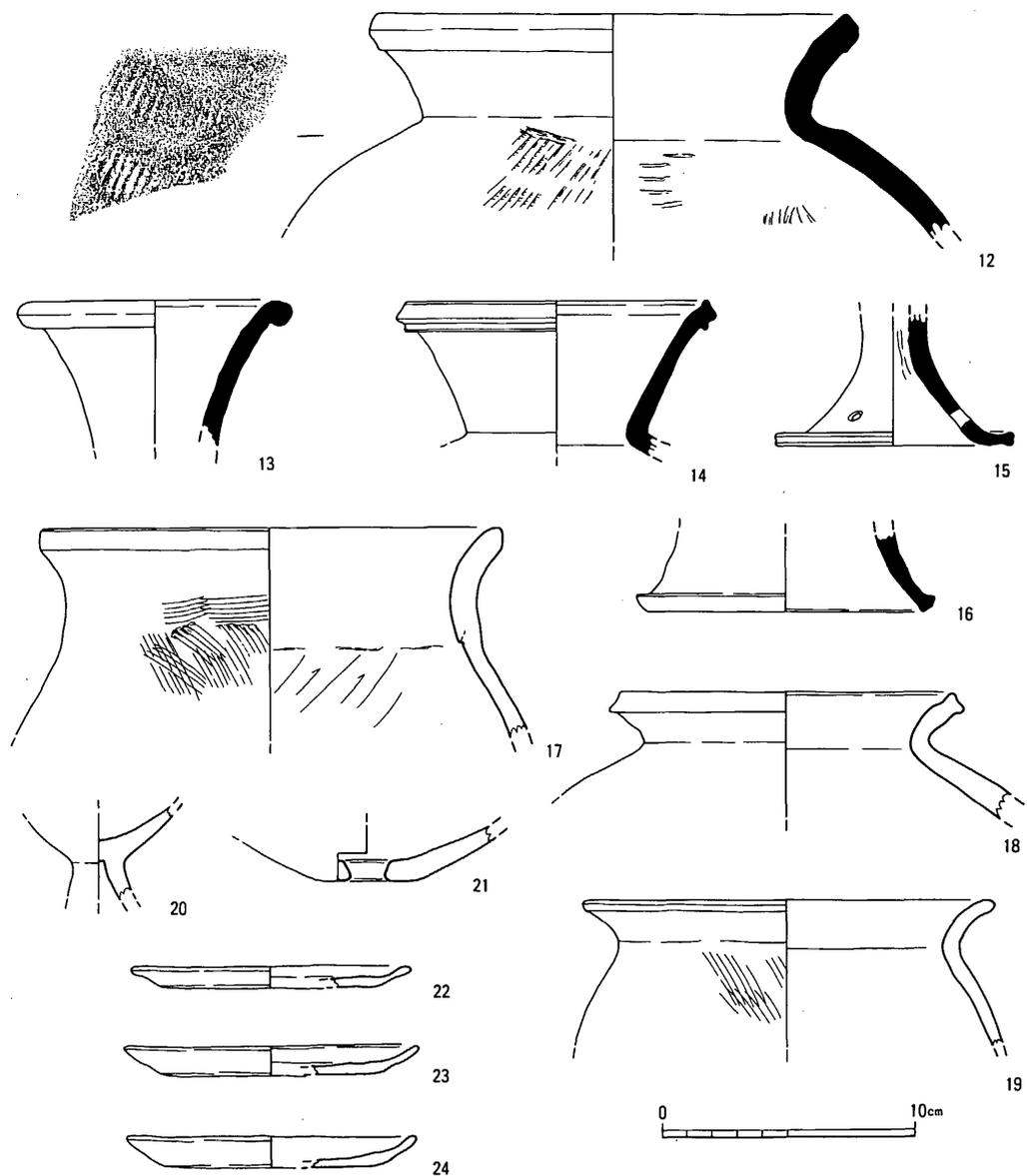


第 139 图 7号土坑出土土器实测图.1 (1/3)

さ4mmで、側面にも軸部にも使用による摩滅は認められない。第158図17は鉄鎌で残存長6.2cm、厚さ3mm。

8号土壌 (図版91 第136図)

8号土壌は北地区中央部の西端に位置し、古墳時代の7号土壌を切る。また、同じく古墳時代の18号竪穴住居跡は北1.5mの距離をおいて近接する。平面プランは3.3×1.7mの楕円形を呈



第140図 7号土壌出土土器実測図.2 (1/3)

し、深さは25cm。壁の立ち上がりはわずかに開く程度で、ほぼ真っ直ぐに立ち上がる。遺物は少なく遺存状態も悪い。

遺物 (第135図7・8) 第135図7は須恵器の坏蓋の口縁部。8は復原口径約22cmの須恵器の甕で、胴部上端部にはカキ目がわずかに窺え、頸部にはへら記号「∨」が施される。

9号土壌 (図版92 第136図)

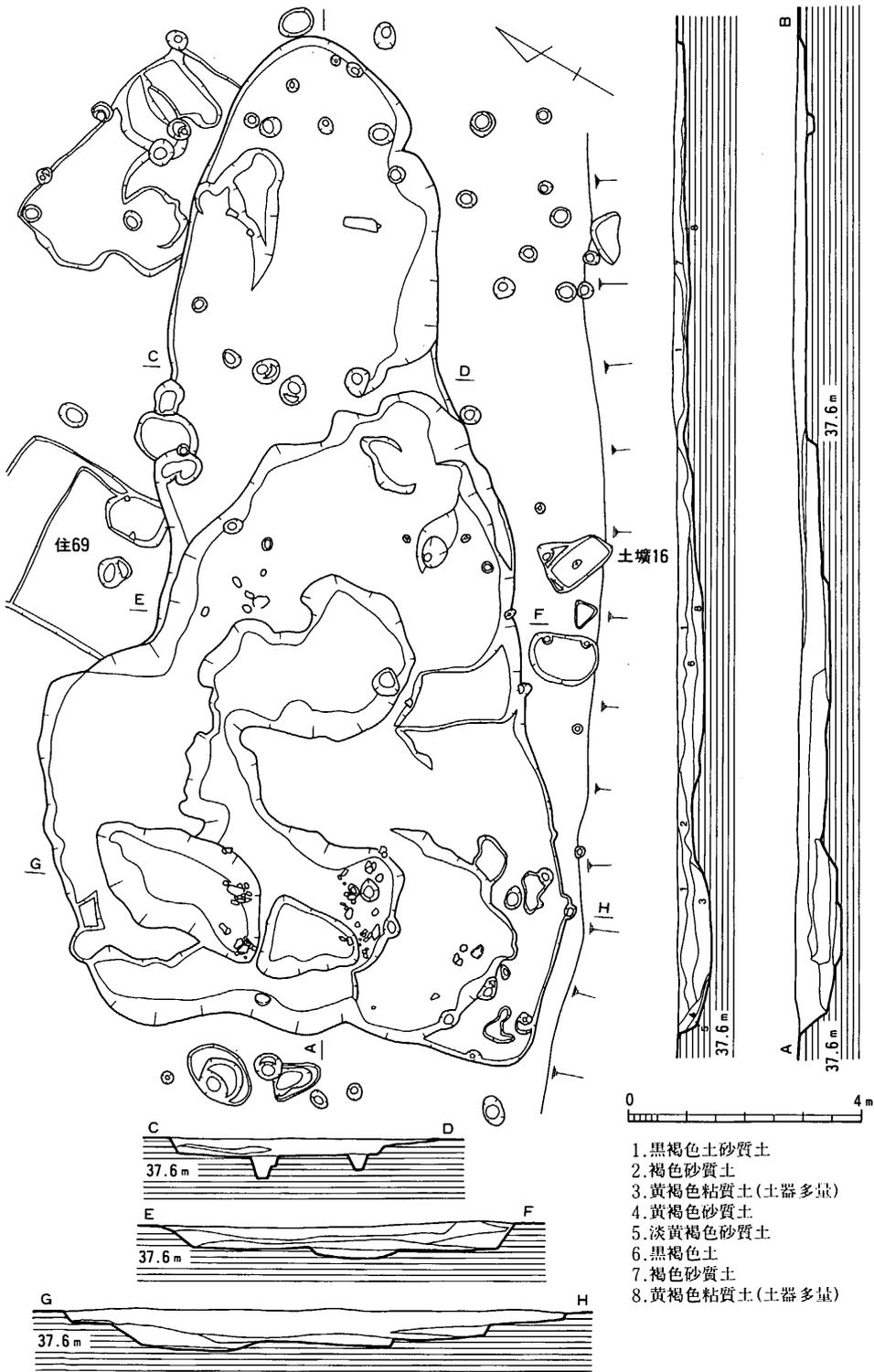
9号土壌は北地区中央部の西端に位置し、古墳時代の7号土壌を切る。平面プランは3.5×1.0mの長方形を呈し、深さは15cm。中央部北側には、11世紀代に属する完形の手捏ね的な小壺が8点、土師皿が3点纏まって出土した。土壌の形態から土壌墓と考えられるが、これらの遺物は供献用として意図的に置かれたものであろう。なお、調査の途中において、8点の小壺のうち3点だけが盗難に遭い紛失した。

遺物 (第137図) 1~5の小壺はいずれも黒褐色を呈し、焼きが甘い。口径は5~6cm、底径は6~7cm、器高は6.5~7.5cmで、口縁部は強く外反し、頸部と胴部の境や胴部の上半部には明瞭な稜ができるほどに屈曲する。底部は編み物状の繊維圧痕がついた厚さ1.5~2.5cmの円盤で、それに粘土紐を積み上げて成形していく。調整は比較的粗いナデで、器面には凹凸が目立つ。6~8は径9.1~9.3cm、器高1.2~1.4cmの土師皿で、へら切りによる底部には板状圧痕が残る。

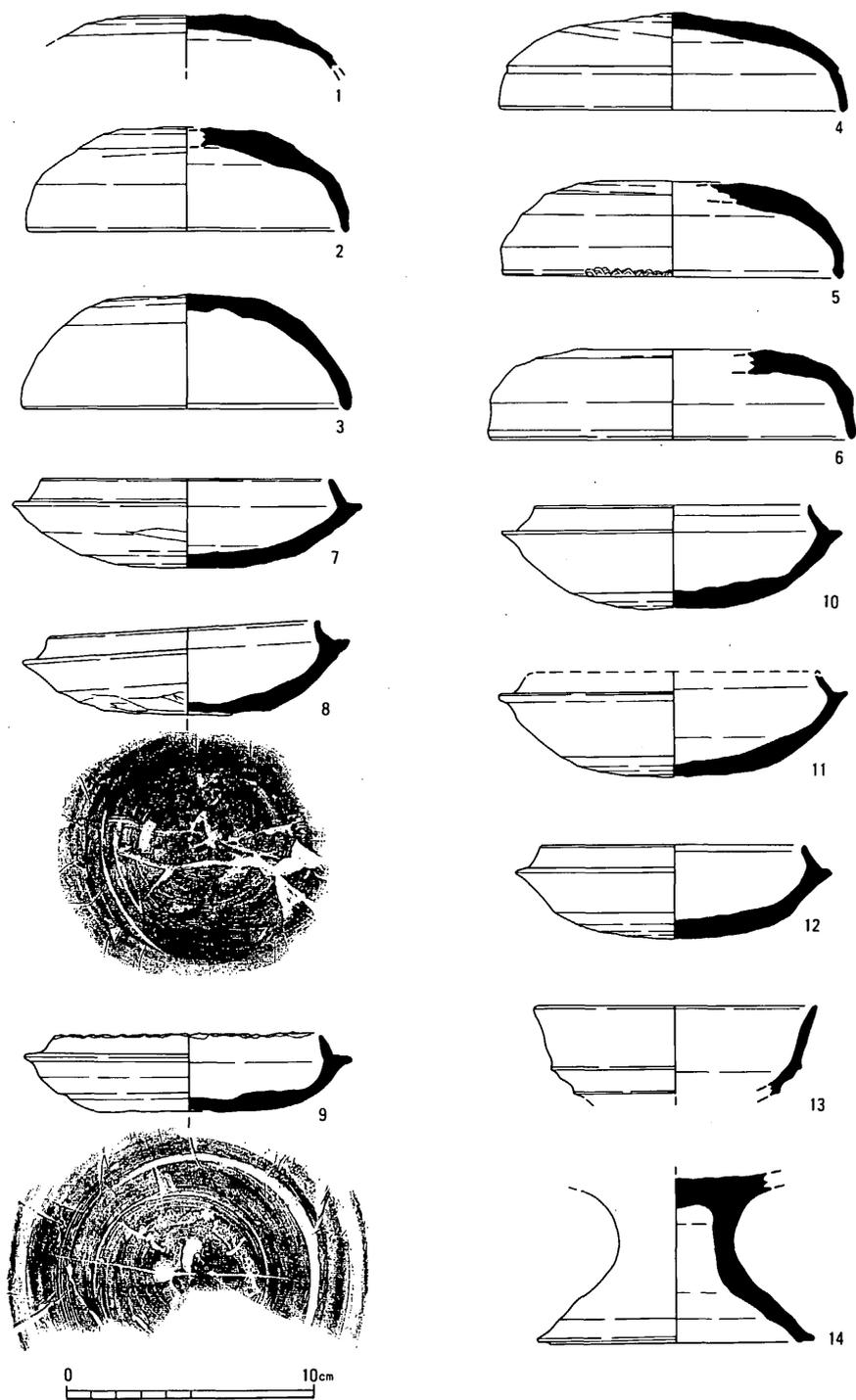
11号土壌 (図版93 第141図)

11号土壌は南地区の西側に位置し、弥生時代の66・68・69号竪穴住居跡を切る。東西方向に17.5m、南北方向に東側4.1m、西側8.5mの細長い瓢箪形を呈する。深さは東から西へ幾つかのテラスを作りながら次第に深くなっていき、最も深い部分で85cmを測る。ピットや窪みが随所があり、底面には凹凸がかなり目立つ。埋土はほとんど砂質土であるが、中央部の深い所のみ粘質土が入る。遺物は全体的に満遍なく広がるが、土層断面図の第3・8層、すなわち最下部に多くの遺物が包含されていた。丘陵上にこのような落ち込みが自然にできるとは考え難く、人為的に掘った土壌と考えるべきであろうが、平面プランや底面の不整形な状態にはその見解に躊躇を迫るものでもある。湧水するわけでもなく、実際に水の貯まった痕跡も窺えない。性格付けにも苦慮するが、少なくとも古墳時代に集落が営まれていた時に、この土壌も存在していたことだけは間違いない。

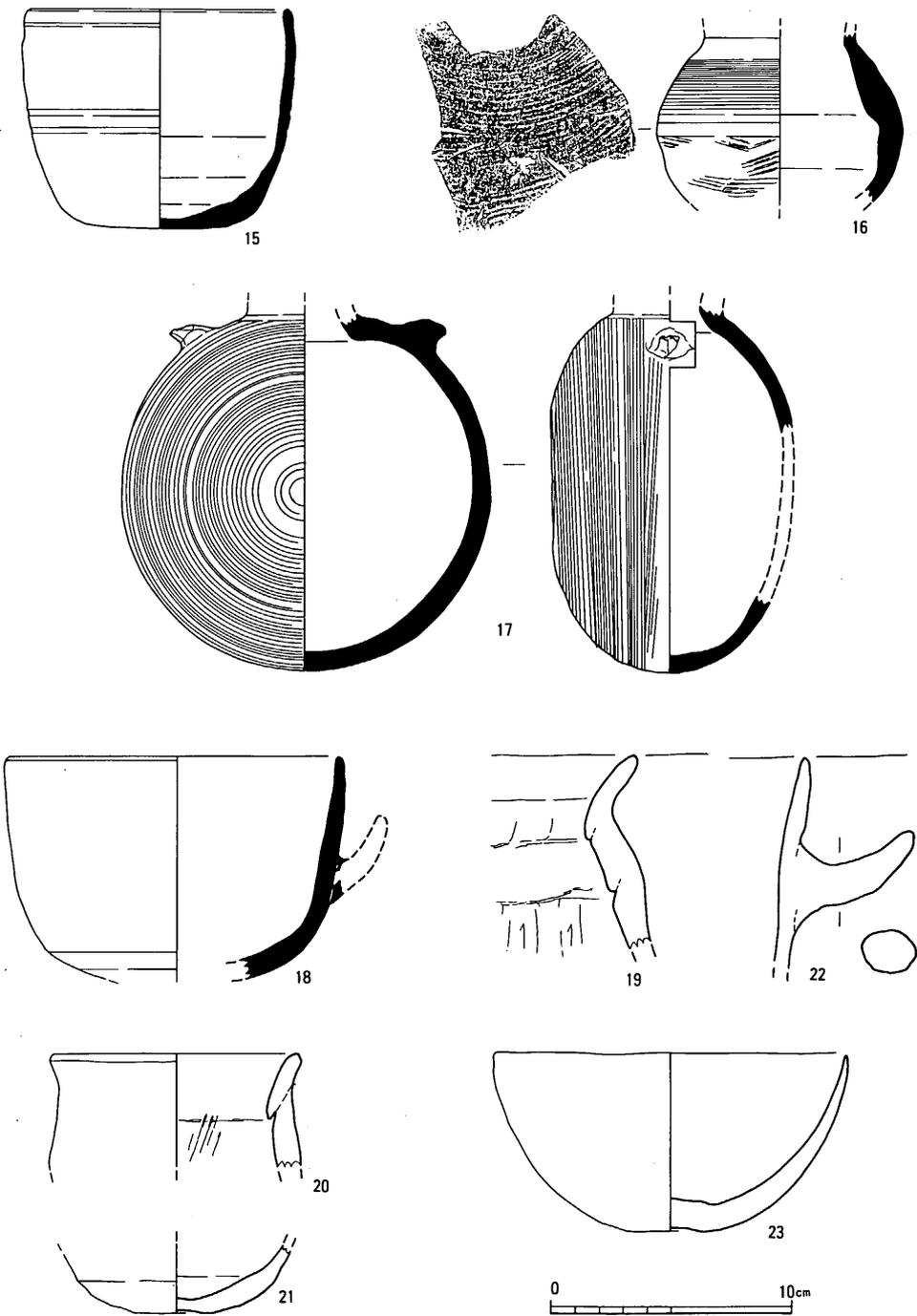
遺物 (第142~144図 第157図7 第159図5 第158図18) 第142~144図のうち1~18・24~28は須恵器、19~23は土師器である。1~6は坏蓋で、完形の3は口径13.3cm、器高4.6cm、4は口径13.9cm、器高3.9cm。2・5・6の復原口径は順に13cm、14cm、15cmで、5の口縁端部には波状文が施される。7~12は坏身で、完形の12は口径10.5cm、器高3.8cm。7~11の復原口径は順に12cm、11cm、12cm、11cm、11cmにそれぞれなる。8・9の底部外面にはそれぞれ「一」と「×」のへら記号が施され、9の口縁端部は意図的に打ち欠かれる。13は高坏の坏部で復原口径は約11cm。14は復原裾径約11cmの高坏脚部。15は復原口径約11cm、器高9cmの椀で、胴部に2本の沈



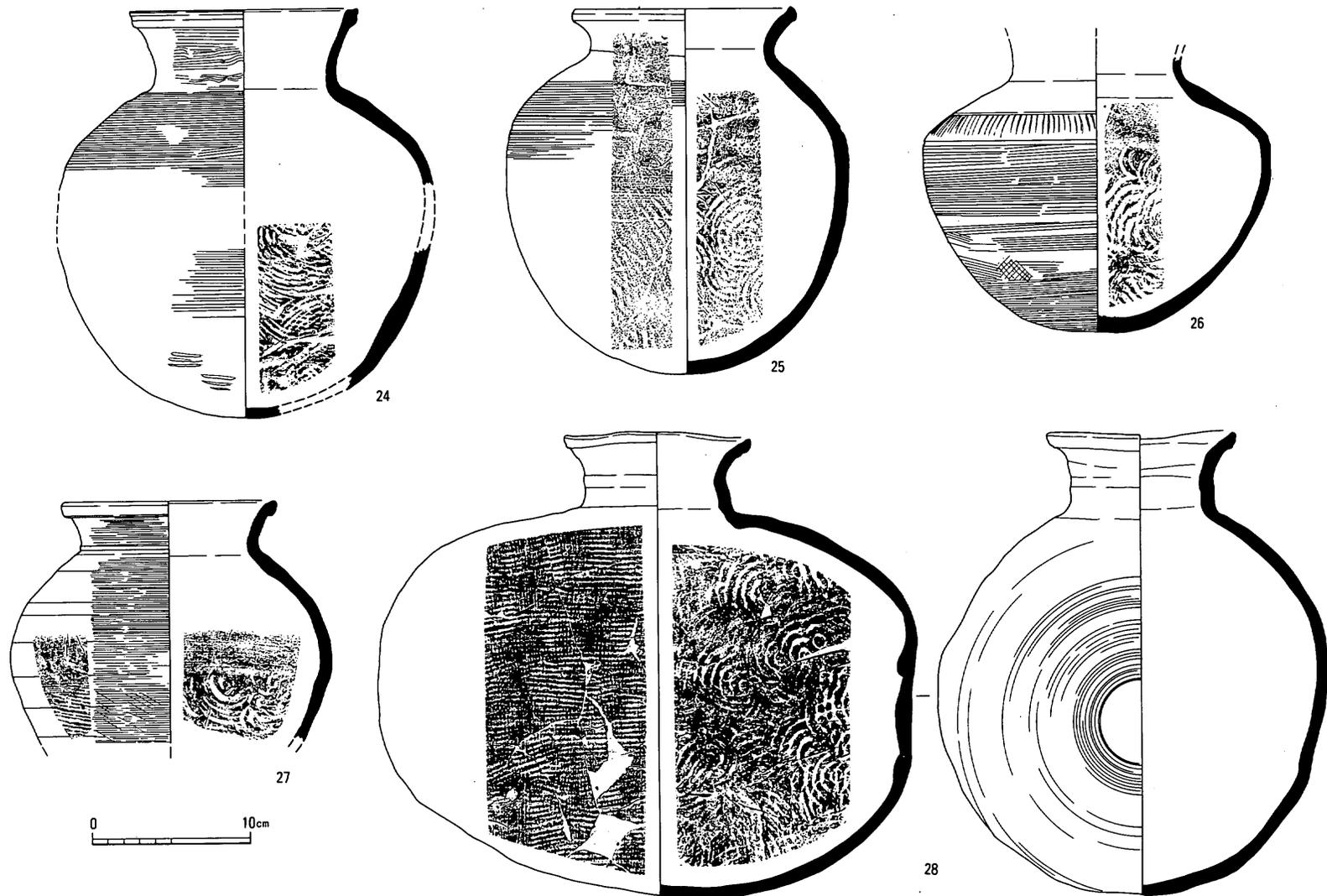
第141图 11号土壤实测图 (1/120)



第 142 图 11号土城出土土器实测图.1 (1/3)



第 143 图 11号土坡出土土器实测图.2 (1/3)



第 144 图 11号土坑出土土器实测图.3 (1/4)

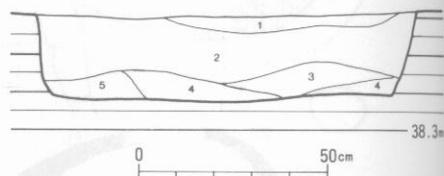
線文が施される。16は復原腹径約10cmの甕の胴部であろうか。下半部にはタタキが、上半部にはカキ目が施される。17は提瓶の胴部で径15.2cmで、全面にカキ目が施される。小さな突起が把手の形骸化したものとして肩に貼りつけられる。18は復原口径約13cmの把手付き椀で、底部には回転ヘラケズリが施される。把手は欠落しており、生焼け状態で白黄色を呈する。24は復原口径約15cm、復原器高約25cmの甕で、外面には底部付近にわずかに平行タタキが残るがその他にはカキ目が施され、内面には青海波の当て具圧痕が施される。25は完形の甕で口径14.4cm、最大腹径22.0cm、器高22.7cmを測る。外面胴下半部には格子目タタキで上半部にはカキ目が施され、内面胴下半部には青海波の当て具圧痕が残る。26は復原腹径約22cmの肩が張る甕で、外面にはカキ目が施され、肩には連続刺突文が巡る。内面には青海波の当て具圧痕が残る。27は復原口径約14cmの甕で、外面のカキ目の下には平行タタキがわずかに窺える。ナデの及ばない内面の胴下半部には青海波の当て具圧痕が残る。28は口径11.9cm、器高29.2cm、胴部径33.8×24.9cmの横瓶で、外面には格子目タタキの後にカキ目が施され、内面には青海波の当て具圧痕が残る。19は甕の口縁部で、外面は摩滅により調整不明。内面には接合痕とケズリが窺える。20は復原口径約10cmの甕で、内面胴部には粗いハケ、その他にはナデが施される。21は甕の底部。22は甕の把手。23は復原口径約13cmの鉢で、摩滅により調整不明。第157図7は粘板岩製の砥石で、断面長方形の4面ともかなり使い込まれる。第159図5は滑石製の紡錘車で、径4.2cm、厚さ1.4cm、軸径0.8cmを測る。側面には使用による削痕が走り、軸部の淵は擦れて摩滅する。第158図18は鉄鎌で、残存長7.1cm、厚さ3mm。

(4)溝

1号溝 (第145・146図 付図)

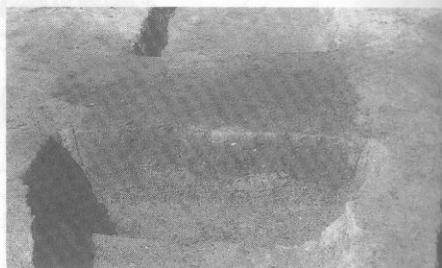
1号溝は北地区北端部において南西から北東へ流れる溝で、古墳時代の1号竪穴住居跡には切られるが、同じ古墳時代の2号溝は切る。確認した長さは15m、深さは25cm。上面の幅105cm、下面の幅90cmで、断面形態は逆台形を呈する。出土遺物は少なく、図示できたのは3点だけである。

遺物 (第147図1~3) 第147図1は復原口径約13cmの須恵器の坏身。2は復原口径約15cmの土師器の甕で、摩滅が著しく器面調整がわかるのは内面のケズリだけである。3は復原口径約15cm



- 1. 褐色土
- 2. 黒褐色土
- 3. 黄褐色砂質土
- 4. 灰褐色砂質土(地山の崩落)
- 5. 灰色砂質土(地山の崩落)

第145図 1号溝土層断面実測図 (1/20)



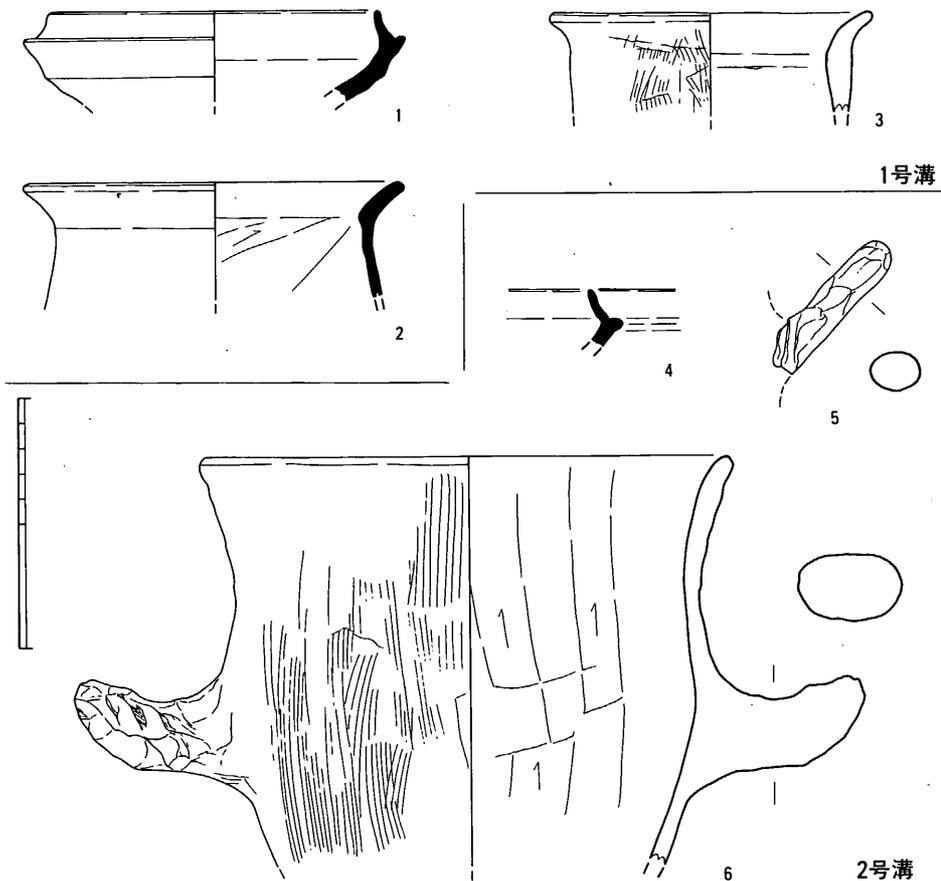
第146図 1号溝土層断面 (西から)

の土師器の甕で、外面にはハケが、内面にはケズリが施される。頸部の内外面には接合痕が残る。

2号溝（付図）

2号溝は北地区の北端部において南西から北東へ流れる溝で、弥生時代の5号竪穴住居跡は切れるが、古墳時代の1号溝には切られる。幅30cm、深さ25cmで断面形態は緩やかに開く逆台形になる。遺物は少ないが、比較的大きな甕の破片が出土した。

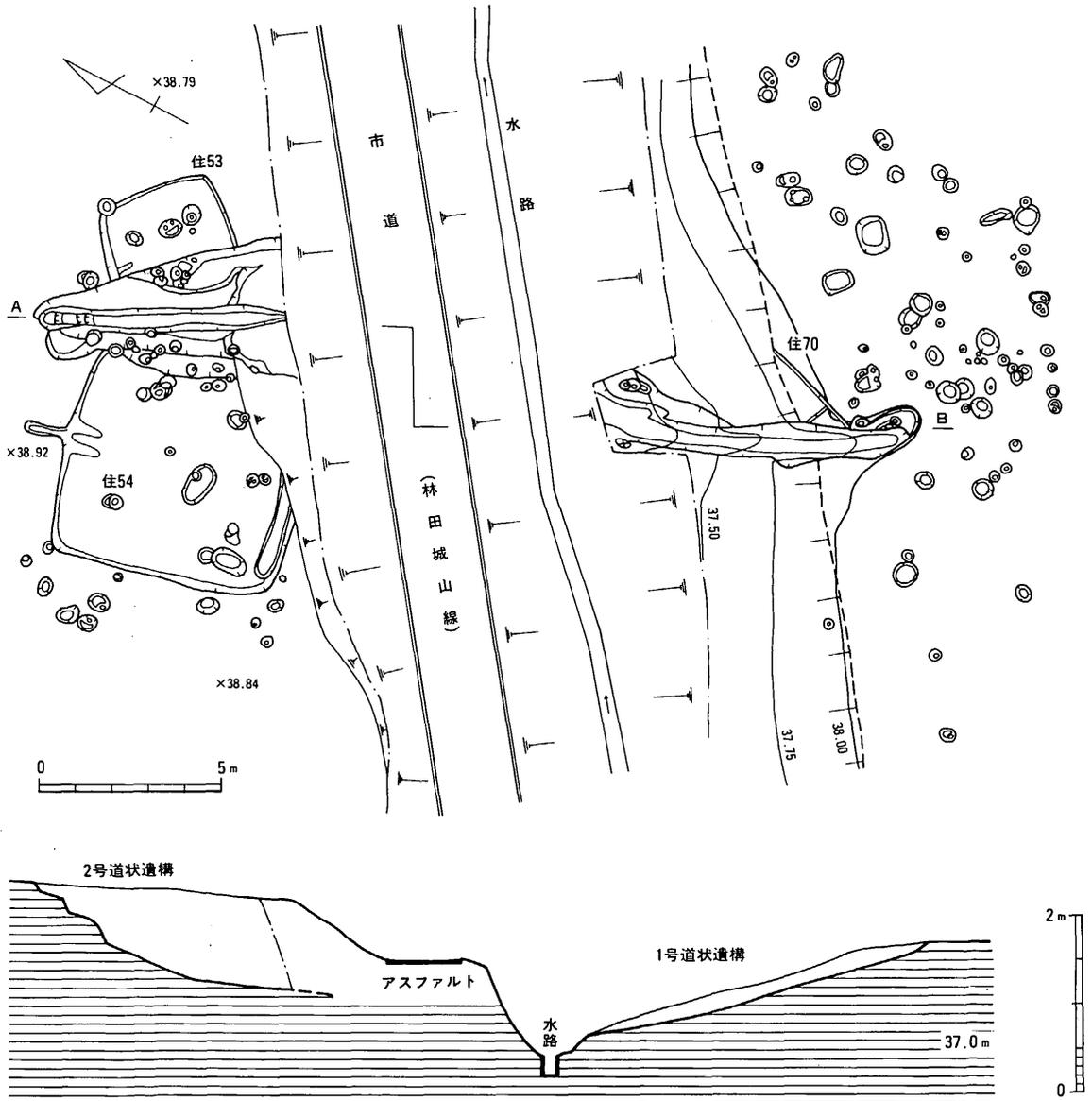
遺物（第147図4～6 第160図8）第147図4は須恵器の坏身の口縁部。5は甕の把手である。6は復原口径約21cmの甕で、外面にはハケ、内面にはケズリが口縁端部まで施される。第160図8は2.5×3mmの青色のガラス玉。



第 147 図 1・2号溝出土土器実測図 (1/3)

(5)道状遺構

飯塚南遺跡は、市道（林田城山線）を境に北地区と南地区の2つの丘陵に分かれる。この2つの丘陵は本来は1つの西から東へ伸びる細長い丘陵であったと考えられるが、何らかの理由により現在では分断されている。周囲の地形からみても、川の浸食とは考え難い。さて、今回の発掘ではこの分断された市道部分から、2つのそれぞれの丘陵に上がる（入る）2本の道状遺構を検出した。その結果、市道部分の幅、すなわち北地区と南地区の幅は古墳時代においてはもっ



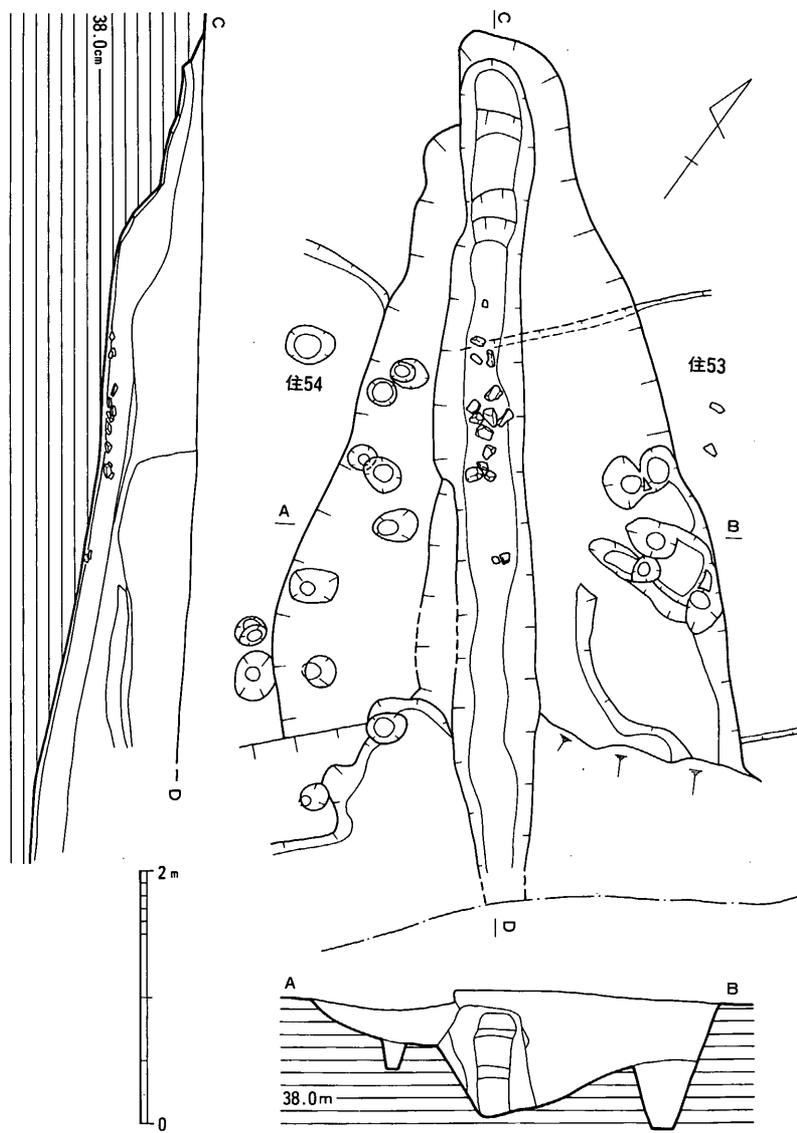
第 148 図 1・2号道状遺構配置図 (1/200 断面図は縦方向に1/80)

と狭く、また2号道状遺構に切られてわずかにし残らない弥生時代の70号竪穴住居跡の存在を合わせて考えるなら、あるいはこの分断された部分は古墳時代にはすでにある程度掘削した可能性も想定された。

1号溝状遺構

(図版94・95 第148・149図)

1号道状遺構は北地区の南端中央部に位置し、古墳時代の53・54号竪穴住居跡を切る。平面プランは長さ6.6m、最大幅3.5mの二等辺三角形になる。断面形態は緩やかに開くV字形で、底の部分は幅40cmでさら



第149図 1号道状遺構実測図 (1/60)

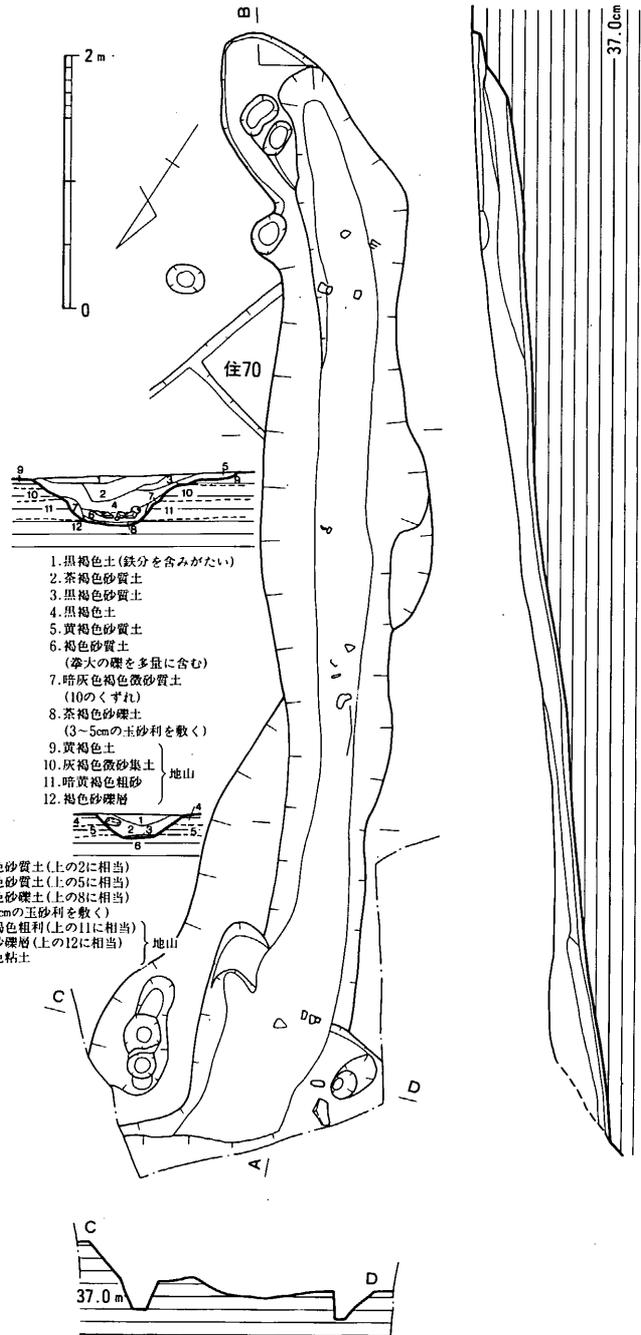
に1段深くなり、底面は平坦になる。市道側から見た場合、1号道状遺構は切り通し状に見える。底の平坦な部分は緩やかに上がっていき、5mほどいったところから階段状のテラスが3段あって、北地区に上がる(入る)ことになる。この道の深さ、すなわち住居跡等の遺構検出面と通路となる底との比高差は最高で1mになる。市道に削平されている弥生時代の16号竪穴住居跡や古墳時代の54号竪穴住居跡の本来の規模を考慮するなら、少なくともまだあと4~5mは南側に住居跡等の遺構検出面が同じ高さで伸びていたと考えられよう。南端から3.5mほどのとこ

ろには礫が底付近に密集するが、通路として使用されている時は邪魔になるので、廃絶後に投棄されたものであろう。出土遺物の多くは埋土からの出土である。

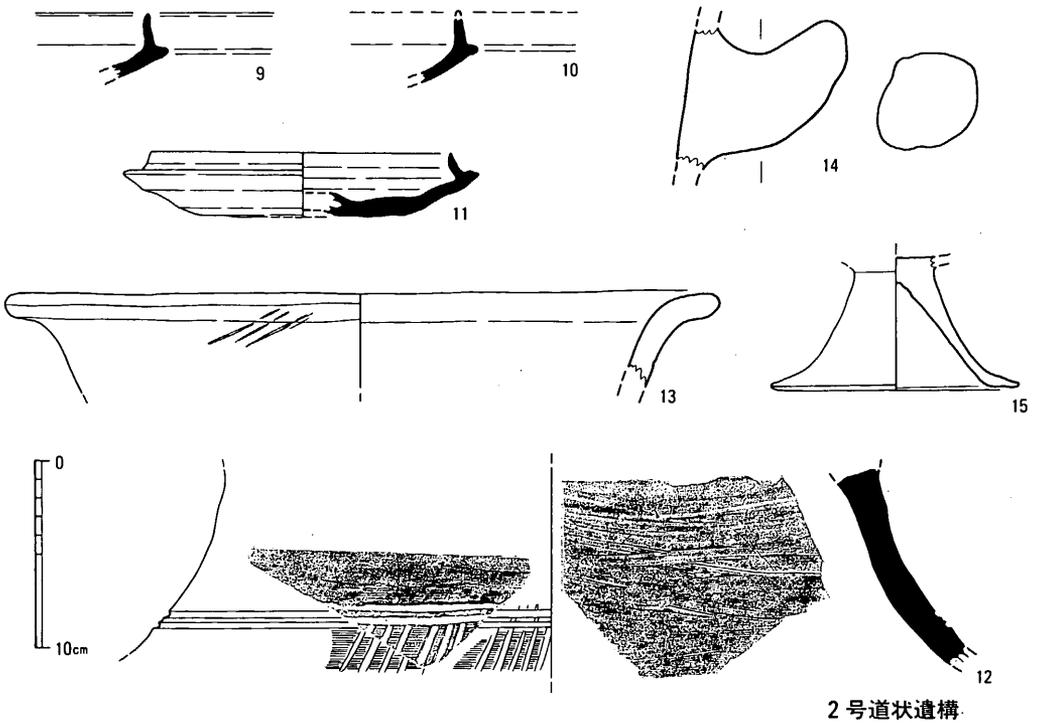
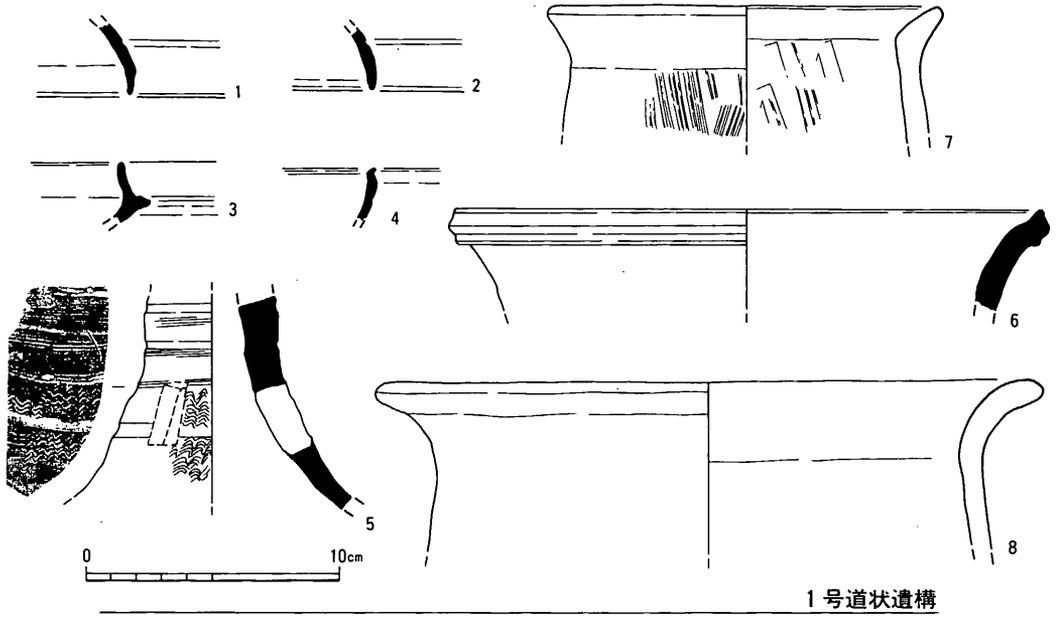
遺物 (第151図1~8 第157図5 第159図21 第160図10) 第151図1~6は須恵器、7・8は土師器である。1・2は坏蓋の口縁部。3・4は坏身の口縁部。5は高坏の脚部で、浅い沈線文の間には波状文が施される。6は復原口径約23cmの甕の口縁部。7は復原口径約15cmの甕で、外面にはハケ、内面にはケズリが施される。8は復原口径約26cmの甕で、摩滅により器面調整は不明。第157図5は粘板岩製の砥石の破片。第159図21は長さ7.8cm、1.0×1.0cmの断面隅丸方形で、たがね状の鉄器か。第160図10は5×5mmの青いガラス玉。

2号道状遺構 (図版96・97 第148・150図)

2号道状遺構は南地区の北端中央部に位置し、弥生時代の70号竪穴住居跡を切る。長さ7.7mで、幅については広がったり狭まったりするがほぼ1mほどになる。底面の幅は約40cmで、1号道状遺構のように階段等を作ることなく、周辺の地形の傾斜に合わせて緩やかに上っていく。したがって、深さも最高で40cm程度で、切り通しといった感じではない。2号道状遺構で特徴的なのは径3~5



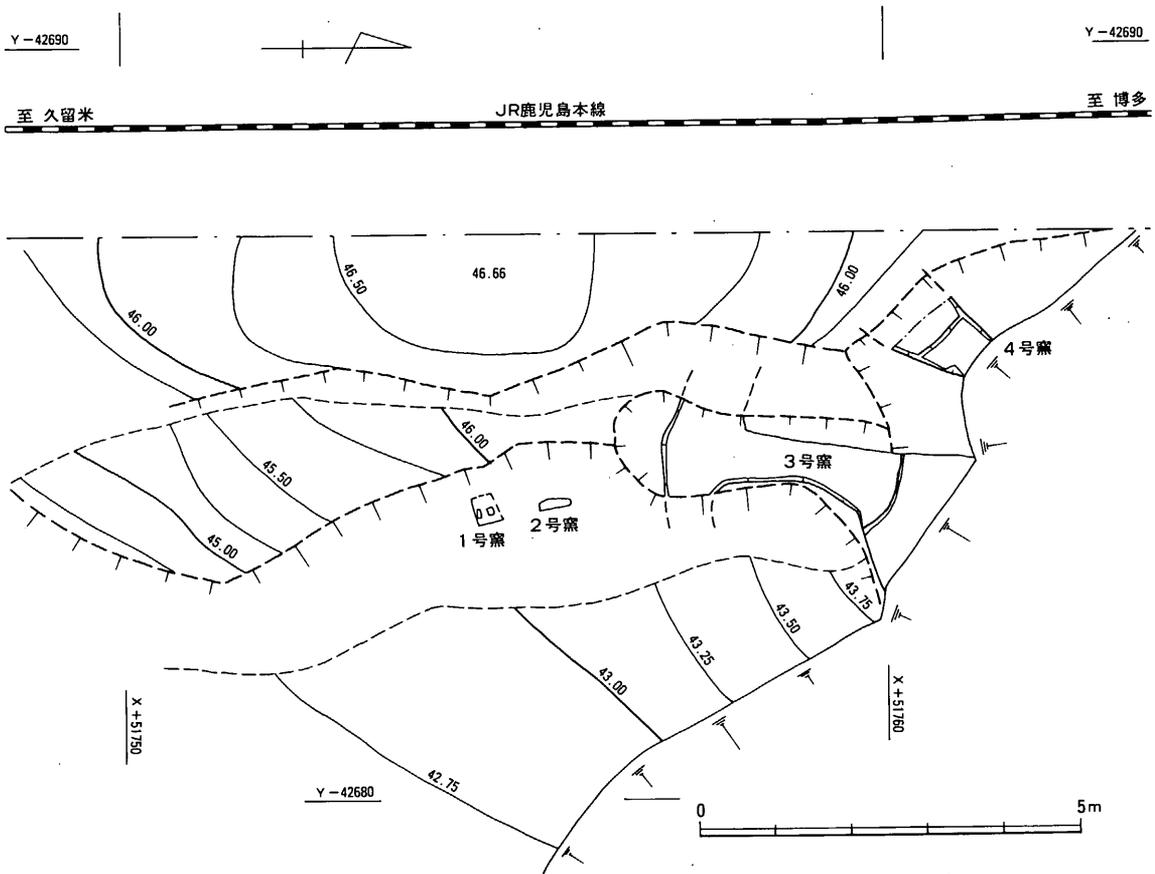
第150図 2号道状遺構実測図 (1/60)



第151図 1・2号道状遺構出土土器実測図 (1/3 12は1/4)

cmの小石が敷かれた底（通路面）と、門の存在である。北端部は幅2.3mほどに大きく広がるが、ここの部分では幅70cmと若干広がった通路面（底面）の両側に、径25cm、深さ25cmの柱穴が通路と直交するような位置関係でそれぞれ1つずつ検出された。これについては門的な施設の存在が想定され、2号道状遺構についてはほとんど削平されることなく、この門のところがかまきに北の端であったと考えられる。遺物は1号道状遺構に比べて少ないが、7点を図示した。

遺物（第151図9～15）第151図9～12は須恵器、13～15は土師器である。9・10は坏身の口縁部。11は復原口径約12cmの坏身。12は復原径約44cmの大甕の胴部破片で、外面にはカキ目の後に縦方向の短い沈線文を施して、それから横方向に2本の沈線文を引く。内面はナデ。13は復原口径約28cmの甕で、摩滅により調整不明。14は甑の把手。15は復原裾径約10cmの高坏脚部で、摩滅により調整は不明。



第152図 1～4号炭焼窯跡配置図 (1/100)

(6)炭焼窯跡

炭焼窯跡は諸田池の北50mに位置する。この部分は調査以前において地権者が土取りを行っていたところで、その壁面に焼けた壁体が剥き出しになり、4基の窯跡状遺構の存在が確認されていた。したがって、仮塚南遺跡の発掘調査においてこの窯跡状遺構の調査も併せて行なうことになったが、国道3号線筑紫野バイパス用地内ぎりぎりの所であることと、ほぼ垂直に切り立った崖面でかなり危険であったことから、この遺構の性格を究明するほどまでに十分な調査は行なえなかった。

4基の窯跡状遺構（第152図）は土取りによってできた高さ3mほどに切り立った崖面の上部付近、標高45～46mの範囲で並んで検出された。断面U字状に焼けた壁体が剥き出しになっており窯跡の存在は当初から認識できていたが、その内部をはじめ周辺からも遺物の出土は全くなく、窯跡の性格や年代については判然としなかった。しかし調査の結果、地形的な制約を受けて若干変則的な構造になっているものの、1号窯跡と2号窯跡とで1基、3号窯跡と4号窯跡とでまた1基の、合計で2基の炭焼窯跡であることが推定されるようになった。以下、1号窯跡から順に説明を行ないたい。

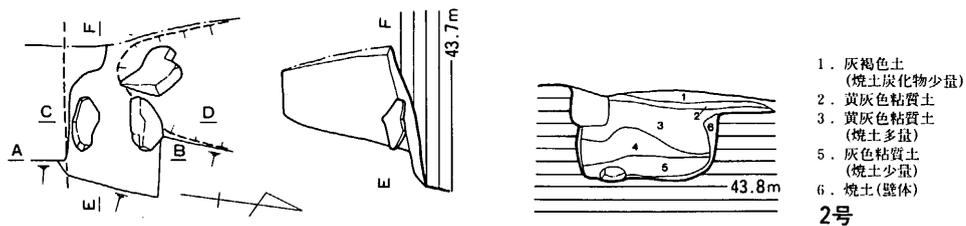
1号窯跡（図版99・100 第153図）

1号窯跡は4基ある窯跡の中でも最も南に位置する。土取りによる削平と芋穴によりその実態はよくわからない。向かって左側（南側）の壁は高さ55cm、奥行き40cm、厚さ4cmに亘ってしっかりと焼けているが、右側（北側）の壁は削平により残らない。底面には1cmの炭化物の層が広がるが、焼けた痕跡は特に見当たらない。奥行きへは40cmしか掘れなかったが、土層は同じ状態が続く。埋土の大半はしまりのないパサパサした褐色土であるが、底面付近の厚さ15cmほどには焼土と炭化物とが混ざる黄灰色の粘質土が堆積する。拳大から人頭大までの礫が全体に多く含まれるが、これらについては焼けた痕跡は窺えない。以上が1号窯跡の概要であるが、これだけではどのような構造でどのように使われたかほとんどわからない。ただし、60cmの距離において近接する2号窯跡と関連付けるなら、炭焼窯の横口部であったと推定される。

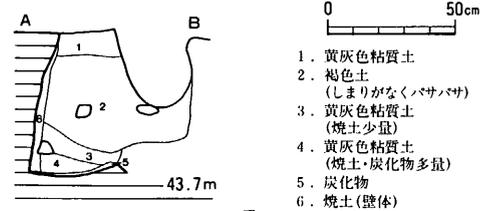
2号窯跡（図版99 第153図）

2号窯跡は1号窯跡の北60cmに位置する。断面形態は高さ35cm、幅55cmの角張ったU字形で、両側面および底面は2～8cmの厚さで赤く焼ける。埋土は焼土を含んだ黄灰色や灰色の粘質土で、天井部の崩落したものであろう。この窯跡の部分に限って、その上面には焼土や炭化物がわずかに含まれる灰褐色土が被るように薄く広がる。一部芋穴に壊され、また奥にはわずか20cmしか掘れなかったが、少なくとも断面に現われた状態でこの窯跡は伸びていくと考えられる。遺物の出土はやはりなかったが、規模や構造から炭焼窯の横口部に当たると考えられる。

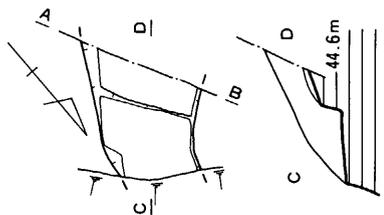
3号窯跡（図版101・102 第153図）



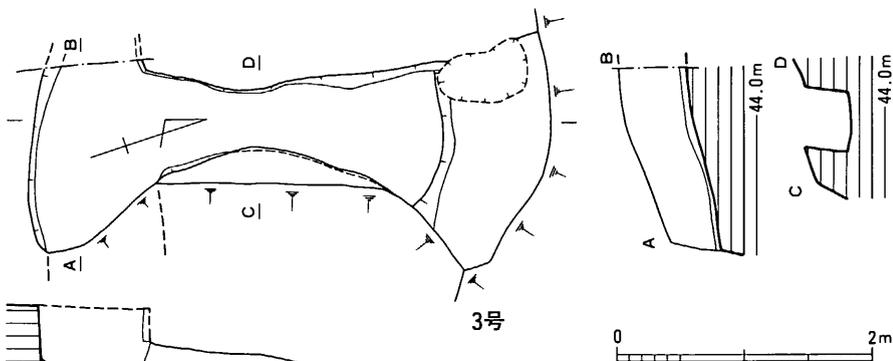
2号



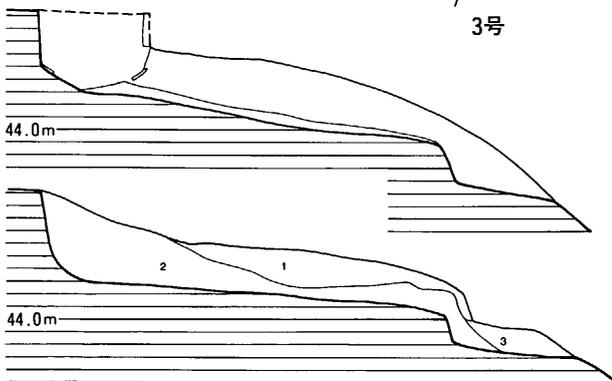
1号



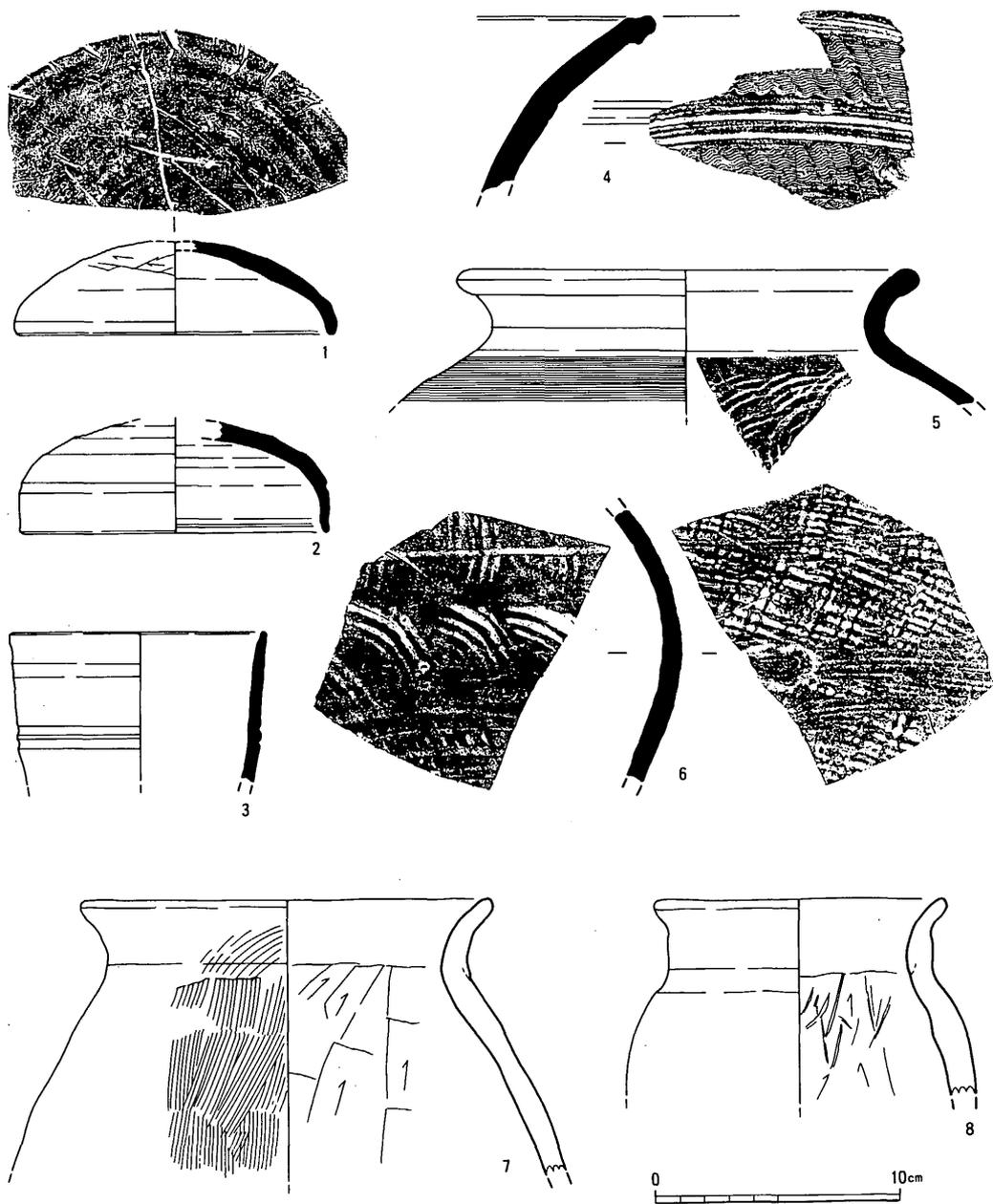
4号



3号



第153図 1~4号炭焼窯跡実測図 (1・2・4号は1/30 3号は1/60)

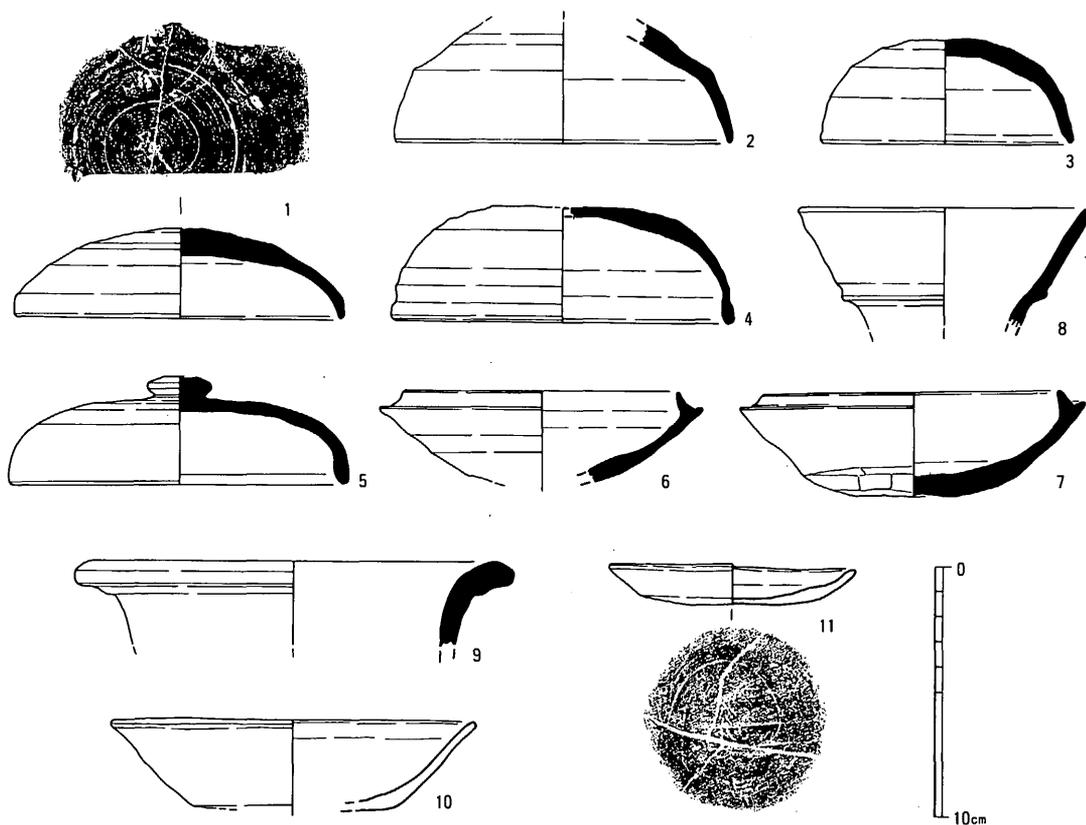


第 154 図 ピット出土土器実測図 (1/3)

3号窯跡は4基の窯跡の中でも、検出できた規模が最も大きい。平面プランは、東西方向に伸びる長さ1.5mの細長い焼成部と、その中央部から北側に3.2m伸びる横口部とからなるT字形を呈する。焼成部とした部分の断面形態は幅90cm、高さ60cmのU字形で、その壁は場所によっては厚さ2cm程度に焼ける。埋土は焼土や炭化物を多量に含む赤褐色土で、この埋土は横口部にも広がる。横口部の幅は中央付近では40cmと狭くなるが、焼成部との連結部分や1段下がった北端部（横口部先端部）では1mほどに広がる。北側へ向けて緩やかに傾斜し、北端部では30cmほどの段が付く。埋土の上半部には天井部の崩落と考えられる焼土を含んだ黄灰色の粘質土が広がる。3号窯跡だけを見た場合その性格は判然としないが、4号窯跡との位置関係や、4号窯跡の横口部の形態や段の存在を考慮するなら、3・4号窯跡は本来同一の炭焼窯であったと推察されよう。そして、横口部が異常に長い形態になると考えられるのである。

4号窯跡（図版102 第153図）

4号窯跡は4基の窯跡の中でも最も北側に位置する。検出できたのは長さ1.1mの横口部で、北側には高さ20cmほどの段が付く。断面形態は幅105cm、高さ50cmの少し歪んだU字形で、壁



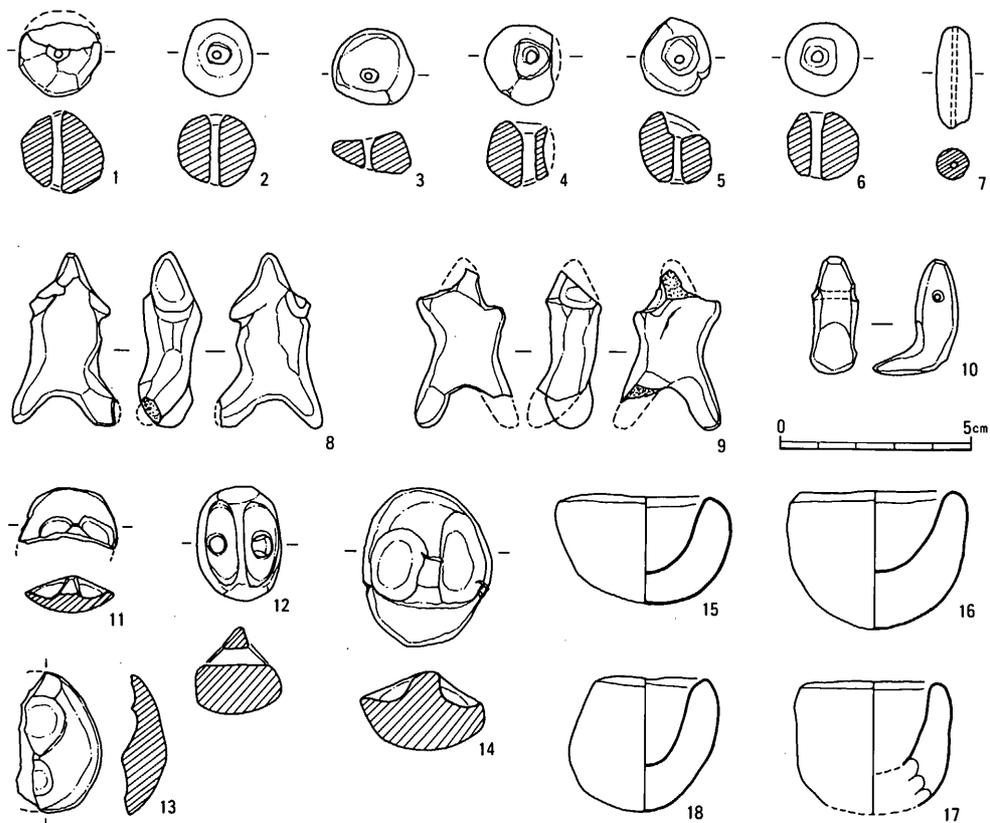
第155図 包含層出土土器実測図（1/3）

は厚さ3cmほど焼ける。底面には厚さ1cmほどの炭化物が広がり、その上には天井部の崩落と考えられる焼土を多量に含んだ赤褐色土が厚く堆積する。この4号窯跡を見ただけではその性格付けが難しいが、先述したように3号窯跡との位置関係や構造の比較から、4号窯跡は炭焼窯の横口部であったと考えられる。

(7)ピット出土の遺物 (第154図 第157図12 第158図4~6 第160図9・11)

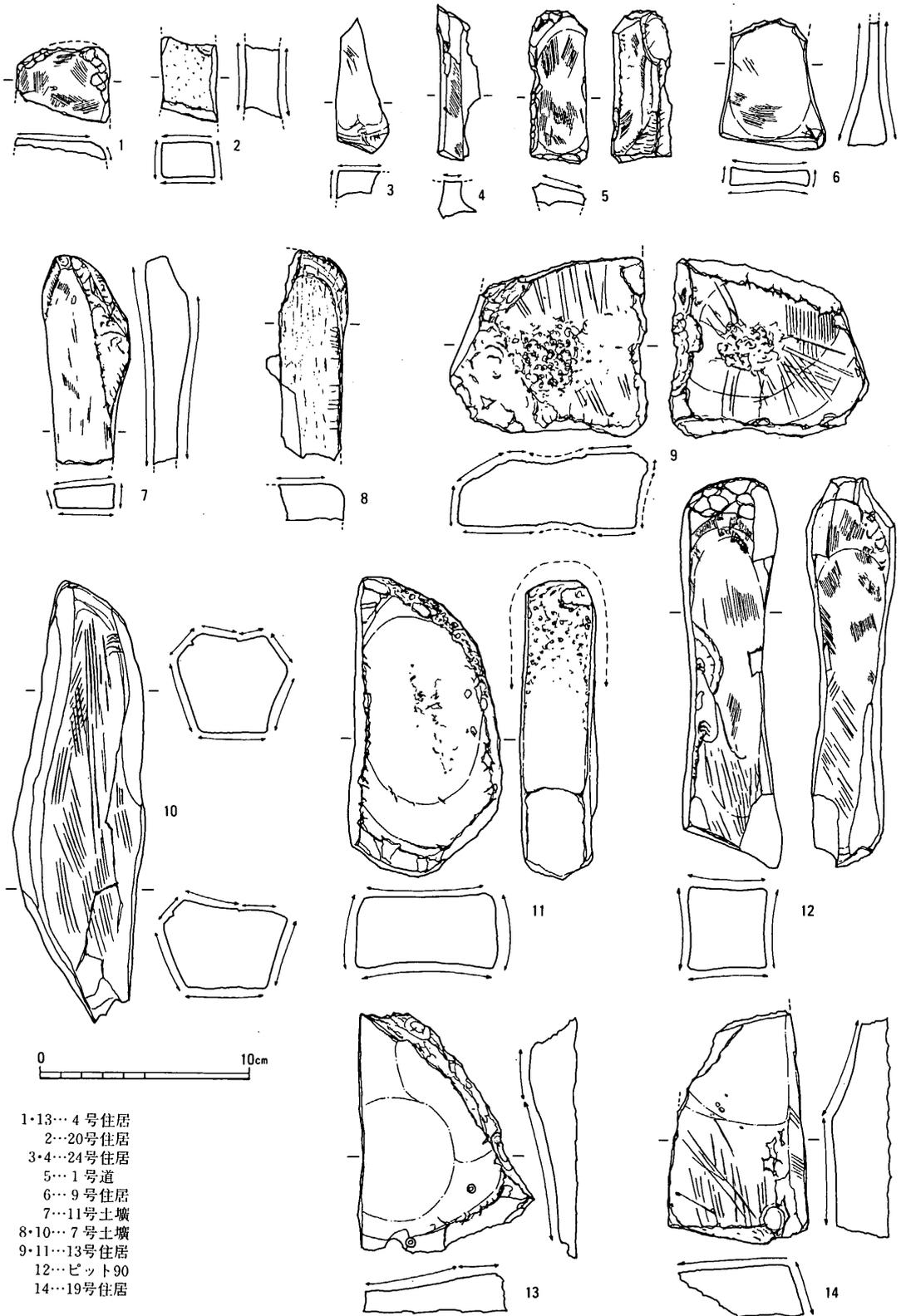
ここではピットから出土した古墳時代の遺物について説明したい。

第154図の土器のうち1~6は須恵器、7・8は土師器である。1は復原口径約13cmの坏蓋で、天井部外面には「X」のへら記号が施される。2は復原口径約13cmの坏蓋。3は復原口径約11cmの椀で、胴部には2本の沈線文が施される。4は甕の口縁部で、直線文と波状文が施される。5は復原口径約19cmの甕で、胴部の外面にはカキ目が施され、内面には青海波の当て具圧痕が残る。6は甕の胴部破片で、外面にはカキ目の後に格子目のタタキが施され、内面には青海波の当て具圧痕が残る。7は復原口径約17cmの甕で、外面にはハケ、内面にはケズリが施される。8は復



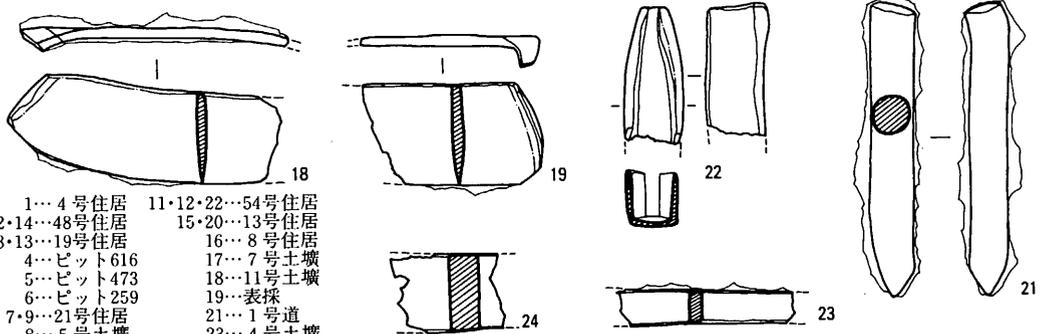
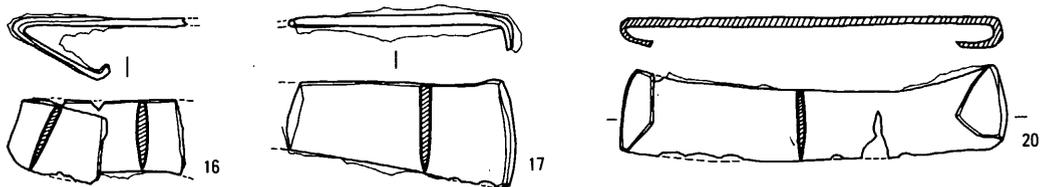
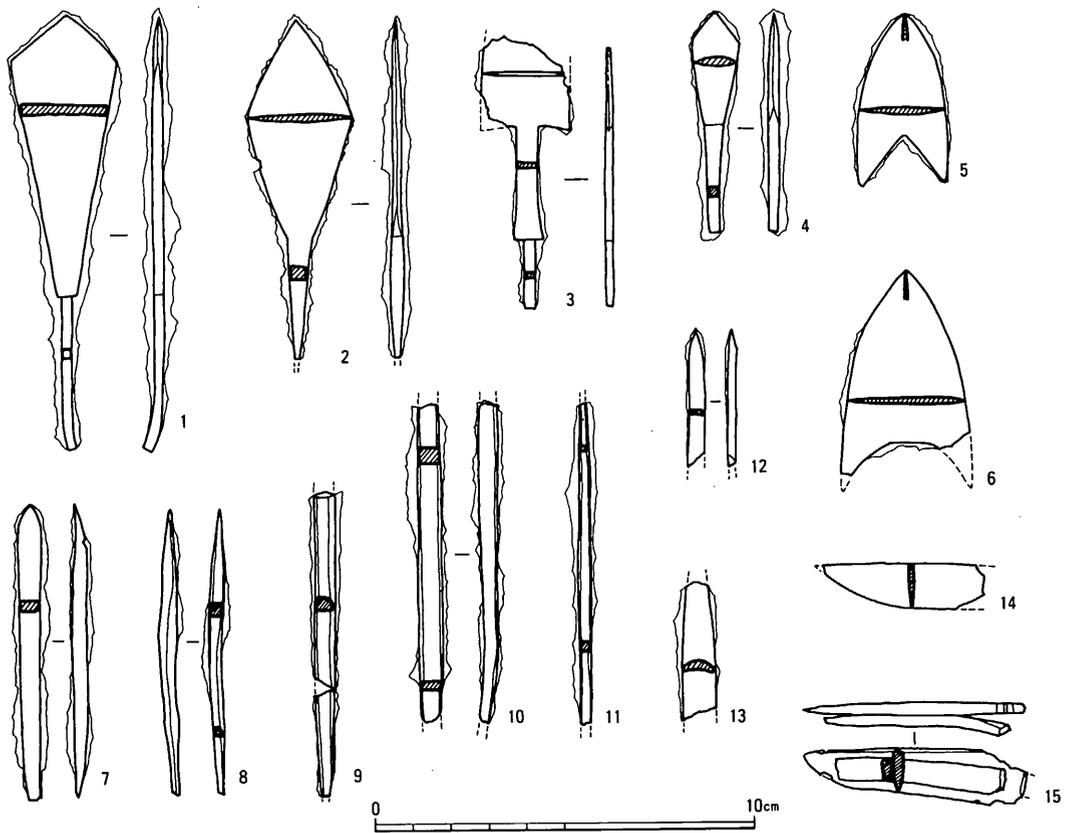
- 1... 4号住居
- 2... 13号住居
- 3... 20号住居
- 4・5... 29号住居
- 6... 1号建物
- 7・16・17... 25号住居
- 8・9... 12号住居
- 10・11... 19号住居
- 12... 21号住居
- 13... 22号住居
- 14... 表採
- 15... 18号住居
- 18... 表採

第156図 土製品実測図(1/2)



- 1・13… 4号住居
- 2…20号住居
- 3・4…24号住居
- 5… 1号道
- 6… 9号住居
- 7…11号土壇
- 8・10… 7号土壇
- 9・11…13号住居
- 12…ピット90
- 14…19号住居

第157図 古墳時代以降の遺構出土砥石実測図(1/3)



- | | |
|------------|----------------|
| 1…4号住居 | 11・12・22…54号住居 |
| 2・14…48号住居 | 15・20…13号住居 |
| 3・13…19号住居 | 16…8号住居 |
| 4…ピット616 | 17…7号土塚 |
| 5…ピット473 | 18…11号土塚 |
| 6…ピット259 | 19…表採 |
| 7・9…21号住居 | 21…1号道 |
| 8…5号土塚 | 23…4号土塚 |
| 10…6号住居 | 24…29号住居 |

第158図

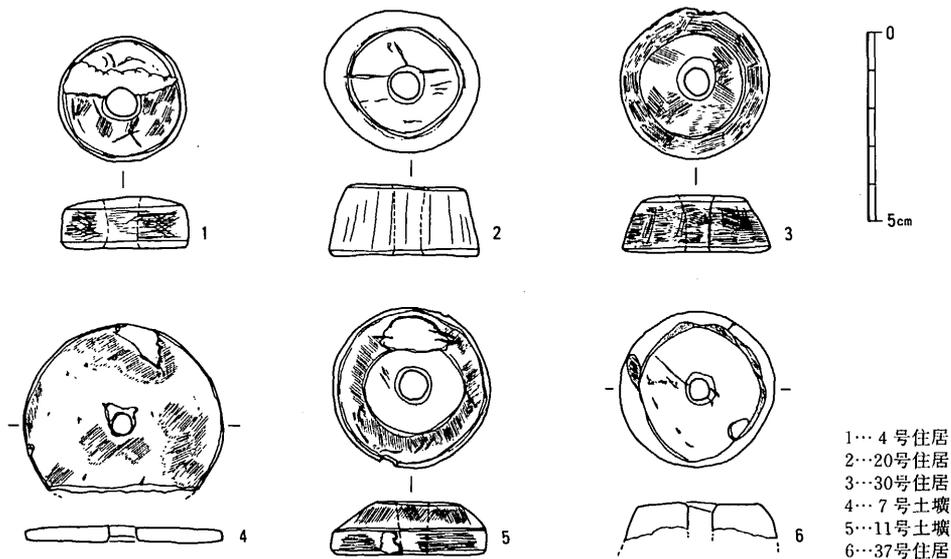
古墳時代以降の遺構出土鉄器実測図(1/2)

原口径約12cmの甕で、全体的に摩滅が著しいが、内面にはタタキが施される。第157図12は粘板岩製の砥石で、正方形を形成する4面はいずれもかなり使用される。第158図4は残存長6.0cmの鉄鏃で、最大幅1.1cm、厚さ3mmを測る。5は長さ4.6cm、幅2.5cm、厚さ2mmの鉄鏃。形態的には弥生時代に属するものであるが、須恵器や土師器の小破片とともに比較的大きなピットから出土した。6は長さ5.5cm、幅3.2cm、厚さ2mmの鉄鏃で、やはり弥生時代に属するものと考えられるが、須恵器を含むピットから出土したので便宜的に古墳時代以降の遺構出土鉄器として取り扱った。第160図9は4×3mmの青色のガラス玉。11は4×4mmの青色のガラス玉。

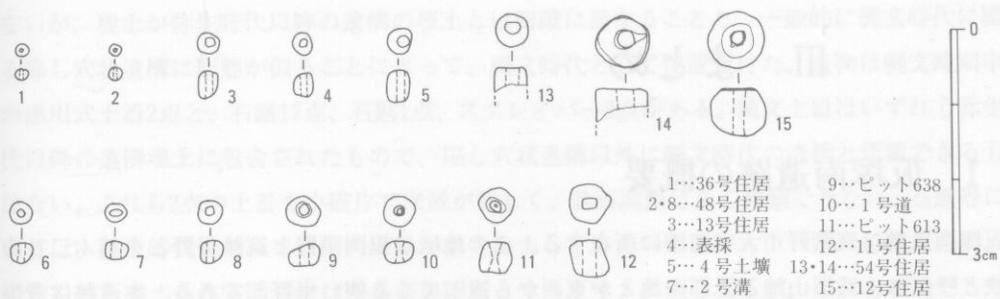
(8)その他の遺物 (第155図 第156図14・18 第158図19 第160図4)

ここで取り上げるその他の遺物とは、所属遺構不明なものや表面採集によって得られた古墳時代以降の遺物である。

第155図のうち須恵器は1～9である。1～4は坏蓋で、復原口径は順に13cm、13cm、13cm、10cmである。1の天井部外面には「×」のへら記号が施される。5は摘みの付く高坏の蓋で、復原口径約13cm。6・7は坏身で、復原口径は約11cmと12cm。8は復原口径約12cmの甕。9は復原口径約17cmの甕。10は復原口径約14cmで、外面は黒く燻されている。11は板状圧痕が残るへら切り底の土師皿で、口径9.6cm、器高1.6cm。第156図14は縦4.2cm、横3.3cm、厚さ2.0cmの土製模造鏡。18は口径2.9cm、器高3.6cmの手捏ね土器。第158図19は残存長4.8cm、縦2.8cm、厚さ3mmの鉄鏃。第160図4は2.5×3mmの紫色のガラス玉。



第159図 紡錘車実測図 (1/2)



第 160 図 古墳時代以降の遺構出土玉類実測図 (1/1)



第 161 図 発掘調査風景 (南から)

III まとめ

1 仮塚南遺跡の概要

仮塚南遺跡は筑紫野市大字諸田に所在する。この地域は福岡平野と筑後平野とを結ぶ二日市地峡と呼ばれ、背振山地と三郡山地とが東西から迫ってくる狭い平野部である。本遺跡は背振山地から派生する丘陵の最西端部で、そこからさらに細長く伸びる舌状丘陵の標高38mに立地する。この丘陵の南側には平行して久良々川が流れ、それが形成する河岸段丘とも組み合わさって川とは10mほどの比高差が生じる。今回の調査は、この東西に伸びる細長い丘陵を南北に横断する、長さ150m、幅40mの範囲(約6,000㎡)のうちの約4,100㎡について実施した。したがって、南北方向における遺跡の広がりについては把握できたものの、東西方向についてはその性格を十分に確認することはできなかつた。しかし、調査区の周辺を踏査した限りでは、この丘陵上では広範囲に亘って弥生土器や須恵器や土師器が採集され、仮塚南遺跡自体もこの細長い丘陵上に東西方向に広がっていることが推察された。

調査区内の細長い丘陵は市道(林田城山線)によって東西に分断されており、その北側を「北地区」、南側を「南地区」と便宜的に分け、さらに北地区の北側に近接する谷部についても「谷地区」として分けて調査を実施した。

本遺跡は旧石器・縄文・弥生・古墳・中世の大きくは5期に亘る複合遺跡で、竪穴住居跡70軒、掘立柱建物跡3棟、土壇16基、溝3本、道状遺構2本の他に多数のピットから構成される。遺物はパンケース約150箱に及び、鉄器や石器も多く、特に広形銅戈の連結式鋳型の出土は注目される。以下、時代順に遺跡の概要について纏めてみたい。

2 旧石器・縄文時代について

旧石器時代の遺物としては、腰岳産黒曜石製の二側縁加工の小型のナイフ形石器とサヌカイト製の石核とが、谷地区やピットから弥生土器と共に1点ずつ出土しただけである。点数こそは少ないが、旧石器の存在を重視して数カ所にグリッドを設定して深く掘り下げた。しかし、この2点以外に旧石器時代の遺物は発見できなかった。仮塚南遺跡の北約1kmには野黒坂遺跡や峠山遺跡といった旧石器時代の遺跡があり、また筑紫野バイパス用地内においても旧石器が数点採集されていることから、今後確実にこの地区で纏まった旧石器を出土する遺跡が確認されるであろう。

縄文時代の遺構としては、2基の陥し穴状遺構がその可能性として上げられる。遺物の出土は

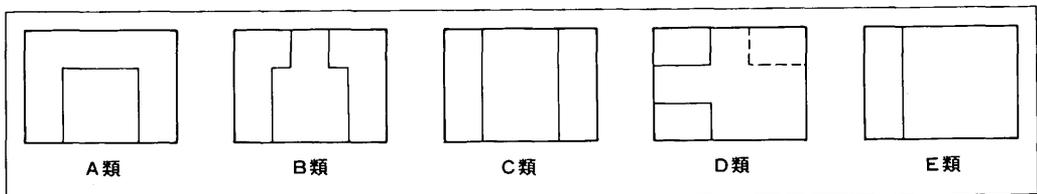
ないが、埋土が弥生時代以降の遺構の埋土とは明確に異なることと、一般的に縄文時代に属する陥し穴状遺構に形態が似ることによって、縄文時代として位置づけた。遺物は縄文晩期中葉の黒川式土器2点と、石鏃17点、石匙1点、スクレイパー2点がある。縄文土器はいずれも弥生時代以降の遺構埋土に包含されたもので、陥し穴状遺構以外に縄文時代の遺構と認識できるものはない。これら2点の土器も小破片で摩滅が著しく、器面調整は全く観察できない。石鏃等については、弥生時代後期後半以前の土器が全く出土していないことから、いずれも縄文時代に属するものと考えられる。石材は腰岳産黒曜石とサヌカイトに限られるが、これらが果たして晩期中葉の黒川式に伴うかどうかは不明である。

3 弥生時代について

(1)遺構

仮塚南遺跡において弥生時代に属する遺構には、竪穴住居跡34軒、土壙4基、溝1本と多数のピット、そして谷地区がある。これらから出土する弥生土器はすべて後期後半に属するもので、その他の時期に位置づけられそうな土器は全く出土していない。したがって、構造的に明らかに弥生時代に属する遺構ではあるが、出土する弥生土器が量的に少なく小破片ばかりで年代の決定が困難な場合、遺構どうしの切り合い関係や後期後半以外の弥生土器が存在しないという事実から、基本的にはすべて弥生時代後期後半に属するものと考えられよう。

竪穴住居跡については34軒が検出されたが、このうち大部分が調査区外に伸びていく2・3・56号住居跡、炉跡や主柱穴等が明確に検出できず竪穴住居としては構造的に問題のある28・32・34・47号住居跡、開墾による削平や弥生時代や古墳時代の遺構に切られてわずかにしか残存しない41・51・62・67・68・70号住居跡を除くと、竪穴住居跡としてその構造が確実に把握できるのは21軒である。このうち北地区南部や南地区では多くの弥生時代の竪穴住居跡がかなり複雑に切り合うが、後述するように出土する弥生土器にはほとんど年代差を見い出すことができず、本遺跡における弥生時代後期後半の集落としての存続期間は極く短いものであったと推察される。この中にあって、63～65・67・68号といった多くの竪穴住居跡を切る66号住居跡からは、底部の丸底化が進んだ甕や坏部に長い外反部を持つ高坏といった新しい要素の土器が主



第 162 図 弥生時代竪穴住居跡形態分類模式図

に埋土から出土しているが、住居の構造自体にはそれに先行するであろうものとほとんど差はない。

竪穴住居跡の平面プランはいずれも長方形で、規模は長軸5.3~7.4m、短軸4.7~5.8mの範囲に収まる。方位については必ずしも厳密に纏まっているわけではないが、およそ長軸が東西方向、短軸が南北方向に纏まる傾向がかなり強い。61号(4.9×3.5m)や69号(約4×2.8m)は多くの住居跡に比べて規模が明らかに小さく、長軸端の一方にしかベッドがない。ベッドはいずれの住居跡にも設置されており、第162図に模式化したように幾つかのタイプに分かれる。すなわち、長軸両端壁とその間の一方の壁を「コ」字状に巡るA類、長軸両端壁に「L」字状のベッドが向かい合うように設置されるB類、長軸両端壁にやはり向かい合うように直線的なベッドが設置されるC類、住居の隅に小さな長方形のベッドが2~3つ設置されるD類、長軸の一端にのみ直線的なベッドが設置されるE類に大きく分かれる。住居跡どうしの切り合い関係や出土土器の検討から、ベッドの類型差に年代差は認められず、いくつかの類型が時間的に同時共存していたと考えられる。ベッドは多くの場合地山を削り出して作られており、竪穴住居を構築する時点ですでにどのタイプのベッドを作るのかが決まっていたはずである。ただし、49・50号のように炉跡を中心にベッドの形態が左右対称にならない場合については、削り出しのベッドに粘土が継ぎ足された結果によって生じたものと考えられる。ベッドの幅については住居跡の形態や規模に関係なく、いずれも1.1~1.2mにほぼ統一されており、かなりの企画性が窺えるとともに、その使用目的にも大差がなかったと推察される。主柱穴は2本で、長軸の中心線上に並ぶが、49号住居跡のように短軸線上に並ぶ例外的なものも1例だけある。屋内土壌は住居跡の長軸に平行する壁の中央部に付設されるが、多くの場合その南側の壁に付設されるのが一般的である。ただし、やはり49号住居跡では屋内土壌がベッド際に付設されており、例外的な存在である。49号住居跡については、長軸が南北方向にあること、短軸線上に主柱穴が並ぶこと、ベッドが左右対称にならないだけでなくバチ状(台形状)に開くこと、屋内土壌がベッド際に付設されること等、多くの点で特異な様相を呈している。このような特異性が生じた要因はおそらく、住居の構築に際して、住居の掘り込みを始めて削り出しのベッドを設置した段階で、南北方向にあった住居の基本プランを東西方向に変更したことによると考えられる。つまり、住居の平面プランとベッドの位置関係自体は本遺跡の中にあつて最も普遍的なパターンではあるが、その軸の方位については東西方向ではなく南北方向に設定されており、このことが主柱穴との軸方向の違いを生んだのであろう。この他に特異な構造を示すものとして、65号住居跡が上げられる。この住居跡には一方の長軸端の中央部、すなわち辺の短い壁の両端に設置された2つの長方形のベッドの間に、削り出しによる階段が作られている。おそらく入口として作られたものであろうが、ここを入口としたために、出入りに邪魔になる主柱穴はかなり炉跡近くに掘り込まれて、住居の平面プランと主柱穴との位置関係にアンバランスな印象を受け

る。屋内土壌とは別に、住居跡の隅でさらにベッド上に掘り込まれた径70cm、深さ80cm程度の円形に近い土壌が65・66号住居跡で検出されている。いずれの場合もベッドを検出した時点でその存在を確認したが、本来切り合い関係が存在していたにも拘わらずベッドに至るまで認識できなかった可能性も否定できず、確実に住居跡に伴うものとは断定しかねる。しかし、住居跡のちょうど隅（角）に位置しており、偶然とも考え難く、今後の類例の増加に期待したい。

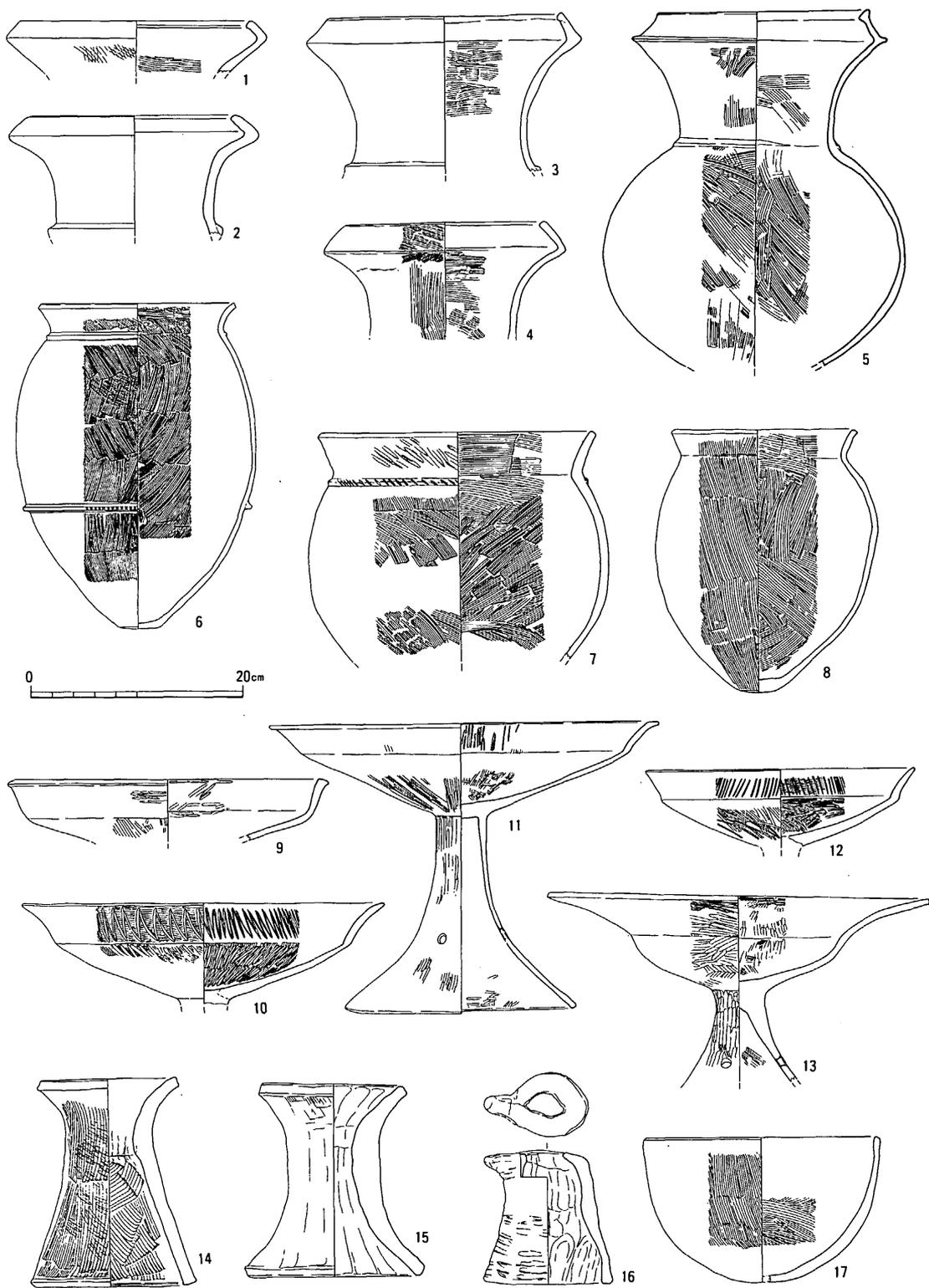
以上、竪穴住居跡の特徴について纏めてみたが、ほぼ同時期の住居跡が本遺跡の南1kmの筑紫野バイパス用地内の以来尺遺跡でも相当数確認されており、報告書の刊行後に両者の比較を行なうことで、この地域での当該期の集落の構造がより明確になるであろう。

(2)遺物

仮塚南遺跡から出土した弥生土器は、すべて後期後半に位置づけられるものである。その多くは谷地区からの出土であるが、66・69号竪穴住居跡からも量的に纏まった出土をみた。この他にも55・57・59・64号住居跡でも検討に値する比較的纏まった資料が得られた。確実に切り合い関係が見られる住居跡の場合、切られるがために量的に纏まった資料が得られないことが多く残念である。以下では、谷地区と66・69号住居跡との資料を中心に、本遺跡の弥生土器の器種構成と型式幅について考えてみたい（第163図）。

壺（第163図1～5） 胴部との境に突帯文を有する頸部は緩やかに開いて口縁部に向かい、口縁部は最も広がったところで内側に屈折する。胴部は卵形に膨らむ。底部は丸底化が進んで角に丸みを帯び、その全面が接地面になることはない。ここで型式変遷を追えるのは、口縁部と突帯文と底部の形態からである。口縁部を見た場合、古いタイプでは内側へ屈曲というよりも強い内湾とでも言うべきもので、明瞭な稜が窺えない（1段階 第163図1・2）。次の段階では、この強い内湾を粘土紐の接合方向を変えることで表現するもので明瞭な稜を作り、まさに屈曲という言葉が当てはまる形態である（2段階 第163図3・4）。この段階では屈曲部から先はまだ直線的で厚いが、やがて薄く反るようになって端部が幅広くなる。頸部と胴部の境の突帯文については、断面三角形でシャープに尖ったものが次第に低く丸くなる傾向にある。底部は当初はほぼ全面が設置面であったのに、次第に端（角）が丸くなり、接地面が中央付近に限定されていき、いわゆる丸底化が進んでいくが、完全な丸底は存在しない（3段階 第163図5）。口縁部については大きく3段階の変遷が辿れるが、突帯文と底部の変遷については漸次的な傾向である。本遺跡の壺についてはその大部分が2段階のものに属し、1段階や3段階のものは極くわずかである。

甕（第163図6～8） 甕の範疇に入るヴァリエーションは多い。すなわち、頸部と胴部に突帯文を有するA類（第163図6）、胴部が卵形ではなく球形に膨らむB類（第163図7）、胴部は



第 163 図

仮塚南遺跡出土弥生土器の器種構成と型式分類 (1/6、6は1/12)

あまり膨らまずに突帯文もないC類(第163図8)の3種である。いずれの類型においても、タタキの後のハケ調整が行なわれ、成形方法や器面調整においてはこれらに差はない。サイズについてはA類の口径が25~38cmで、器高も45~60cmとかなり大形になるのに対して、B類やC類は口径が16~28cmで、器高が24~45cmと、両者には明瞭な違いが見られる。この違いは突帯文の有無によって生まれる土器の強度・耐久率の違いであろうが、使用目的も当然異なっていたものと考えられる。ただし、かなり高い比率でいずれの類型の甕にも煤の付着が窺え、使用痕においては明瞭な差は見い出せない。甕については底部の丸底化以外に明瞭な型式変遷の状況を見い出すことはできないが、この様相も壺の底部とほぼ同じである。

高坏(第163図9~13) 高坏については器高まで測れる資料が少なく、口径でその大きさを比較するしかない。口径は24~35cmとやや幅があるが、形態的には大差ない。器面調整はいずれもミガキで、このミガキが施されない部分ではその下のハケ目が観察される。坏部の底から直線的に下がっていく脚部は、真ん中付近で急に大きく裾広がりになり、端部では極くわずかに内湾ぎみになる。透孔が穿たれるものについてはいずれも3方向で、円形に限定される。坏部は口縁部付近で稜を作るように屈曲しつつ外反して端部は丸く舌状に仕上げられるが、この部分には内外面ともに暗文状にミガキが施され、装飾的効果を表出する。屈曲が緩やかというよりは内湾に近い形態で稜を作らず、端部も平坦に仕上げられるタイプが一般的には古く(1段階第163図9)、屈曲して稜のできる位置が坏部の中央部に近づくタイプのもほど新しいタイプとされている(3段階 第163図13)。本遺跡では、口縁部付近で屈曲する2段階のものが圧倒的に多く(第163図10~12)、1段階や3段階のものは極く少量で、形態的な変化や量的な問題においても、この3段階の変遷は壺と同様の変遷にあると考えられる。

器台(第163図14・15) 器台はまさに土器を乗せる台であるが、谷地区で出土した多くの資料を説明する際に大きく2類型に分類した。A類(第163図14)は口径が裾径よりも明らかに小さく、口縁部は口縁端部から3cmほどのところで強く屈曲するように外反し、裾の器厚は比較的薄くてスマートに開き、器面調整としてはタタキの後に丁寧なハケが施される。また、加熱による器面の変色なども窺えない。B類(第163図15)は口径と裾径に大きな差はなく、また口縁部の外反も明瞭なものがなくて、一見ただけではどちらが口縁部になるのか判断に躊躇するものもある。器面調整は粗いナデが主流で、内面にはしほり痕が残り、器厚は2~3cmと分厚く器面に凹凸が目立つ。そして多くの場合、裾付近が加熱により赤褐色に変色するという点においてA類とは全く異なる様相を見せる。以上の特徴の相違から、A類はまさに土器を乗せるための装飾的要素を兼ね備えた器台であり、B類は支脚的機能を有した器台であると考えられる。弥生時代後期後半においては、突起を有する支脚がすでに器種として存在しており、B類はA類と支脚の中間的な位置にある。しかし、器高が20cm前後あるB類の本質的な存在意義は、器高9~12cmの支脚との使用目的の違いにあると考えられ、この点を重視するならば、器台B類は支

脚の中に位置づけるべきなのであろう。

支脚 (第163図16) 支脚は頭部径7~9cm、裾径10~12cm、器高9~12cm、頭部にある孔径は1.5~2cmと、全体的に小さな器形である。頭部の一端に突起を作り、ここで土器を支えるわけであるが、突起のないものについては頭部を傾斜させて突起的機能を出している。

鉢 ここでいう鉢とは器高の低い甕といったほうが、器形を表現するだけにおいてはより適当なのかもしれない。つまり、口縁部形態は甕とほぼ同様に屈曲・外反する。

ボウル状小形鉢 (第163図17) ボウル状の小形鉢の口縁部は多くの場合直線的に立ち上がるが、わずかに内傾したり外傾したりするものもある。底部は丸底で安定が悪いため、器面が擦れて摩滅していることが多い。器面調整はハケが主流で、これがナデ消されることも少なくはない。谷地区からはそれほど多くの出土を見なかったが、57・66号竪穴住居跡では纏まった点数が出土した。

以上、仮塚南遺跡出土の弥生土器を見てきたが、型式変遷の辿れる器種は壺と高杯に限られる。いずれも2段階としたタイプが本遺跡では大部分を占め、1段階と3段階は量的に極くわずかである。1段階に属する遺構としては、唯一69号竪穴住居跡が上げられる。第45図1の壺は口縁部が強く内湾するものであるが、2・3のように屈曲するものも含まれる。ただし、4のように胴部が丸くなる長頸壺は本遺跡にあって比較的古い要素であり注意しておきたい。3段階の遺構としては66号竪穴住居跡が上げられる。様相のわかる壺は残念ながら出土していないが、第40図16の屈曲部が坏部の中央にある高杯は新しい様相で3段階に位置づけられ、また甕の底部に見られる著しい丸底化は、この住居跡の資料が本遺跡の中でも比較的新しい段階に位置することを物語っている。ここで取り上げた66・69号竪穴住居跡以外の遺構から出土した土器については、1・3段階に属するものも断片的には存在するものの、ほとんどは谷地区においても量的に最も多い2段階のものであり、したがって仮塚南遺跡の弥生時代後期後半は2段階において最も反映していたと考えられるのである。先述したように、本遺跡南1kmにある以来尺遺跡はほぼ同時期の集落遺跡であり、本遺跡との盛衰の比較により、二日市地峡における弥生時代後期後半の社会的状況が次第に明らかになっていくものと考えられる。

4 古墳時代について

(1) 遺構

仮塚南遺跡において古墳時代以降に属する遺構には、竪穴住居跡36軒、掘立柱建物跡3棟、土壙10基、道状遺構2本、溝2本、炭焼窯跡4基と多数のピットがある。9号土壙および炭焼窯跡を除いたすべての遺構から出土する土器はほとんど古墳時代後期(6世紀後半)に属するもので、

その他の時期に位置づけられそうな土器は数点しか出土していない。したがって、構造的に明らかに古墳時代に属する遺構ではあるが、出土する土器が量的に少なく小破片ばかりで年代の決定が困難な場合、遺構どうしの切り合い関係や古墳時代後期以外の土師器や須恵器が存在しないという事実から、基本的にはすべて古墳時代後期(6世紀後半)に属するものと考えられよう。

竪穴住居跡については36軒が検出されたが、このうち大部分が調査区外に伸びていく26・33・58号住居跡、カマドや支柱穴等が明確に検出できず竪穴住居としては構造的に問題のある10・35・36・39号住居跡、開墾による削平や古墳時代の遺構に切られてわずかにしか残存しない15・17号住居跡を除くと、竪穴住居跡としてその構造が確実に把握できるのは27軒である。古墳時代の竪穴住居跡が集中するのは北地区の北部で、ここでは多くの住居跡がかなり複雑に切り合うが、後述するように出土する須恵器にはほとんど年代差を見出すことができず、本遺跡における古墳時代後期(6世紀後半)の集落としての存続期間は極く短いものであったと推察される。平面プランは方形で、規模的には長辺5~6m、短辺4.5~5.5mの正方形に近い長方形のA類、長辺4~5m、短辺3~4mの長方形のB類、3×3mの小さな正方形のC類の3つの類型に分類できる。C類についてはカマドや明確な支柱穴が検出できなく構造的に他の類型とは異なるが、A類とB類については平面形態と規模において違いはあるものの、カマドや支柱穴といった基本的な構造についてはほとんど差がない。後述するように、これら類型の異なる住居跡から出土する遺物をみても年代的な差はほとんど見出せない。したがって、類型の違いは年代差によるものではなく、住居跡の切り合い関係を考慮しても、幾つかの類型が時間的に同時共存していたものと考えられよう。

カマドは北西から北東といった主に北側にある壁の中央部に付設されるが、13・14号竪穴住居跡については西壁に付設される。B類のように長方形の住居プランの場合、カマドは長辺の中央部に付けるようで、結果として西壁に付くようである。カマド内部の状況については、13・14・21・24・30号住居跡等で使用当時の状況を比較的良好に残しているが、それ以外のカマドについては内部に何も残さない場合が多い。この何も残さないカマドについては、住居跡自体からもほとんど纏まった遺物の出土は見られず、つまり住居廃絶時において住居内およびカマド内の遺物を持ち出したものと考えられる。支脚には細長い自然石が用いられ、この周辺から赤く焼けた甕が多くの場合出土するが、完形に復原できることは稀で、不足分の破片は住居の床面においても見当たらない。7・14・54号住居跡では細長く住居跡の外へ突出する煙道がカマドに付くが、この3軒についてはいずれも壁高が30~40cmほどと比較的良好な遺存状態にあり、基本的にはカマドには煙道が付くが削平により残っていないと考えるべきであろう。25号住居跡では火床上面より2点の手握ね土器が出土したが、カマド祭祀が確認できたのはこの1軒だけである。12号住居跡ではカマドの東側から、土製人形2点と水晶製の切小玉1点が出土した。必

ずしもカマドに関連するものとは限らないが、祭祀性の強い性格が窺える。竪穴住居跡自体は4本柱で、支柱穴の配置は住居跡の平面プランに対応する。25・37号住居跡では貼り床の下で、中央部を高く残し壁際を環状に掘り下げるものが見られるが、散発的にしか存在しないだけにその構造的な機能については判然としない。

土壙については性格不明のものが多い。その中であって、7・11号土壙はいずれも集落のほぼ中央部で大きく落ち込む遺構である。平面形態・断面形態を見る限りにおいては、定型的な企画によって掘られたものとは到底考えられないが、集落の中央部にこのような落ち込みが自然にできるわけではなく、また古墳時代の竪穴住居跡と切り合うことがないことから、やはり人為的に掘られたものと考えざるを得ない。当初溜め池的な機能をこの落ち込みに想定したが、排水施設は確認できなかった。埋土は砂質土中心で、粘質土は底付近に薄く堆積する程度である。木製品をはじめ植物遺存体も全く見られず、水が貯まっていた形跡は窺えない。また、深く掘られた部分においても湧水層に相当する粗砂層までは届いてなく、実際の調査においても水が湧き出ることにはなかった。したがって、7・11号土壙の機能を積極的に推定させる痕跡は何も得られなかったことになる。ただし遺物の出土は豊富で、特に11号土壙からは完形近くまでに復原できる須恵器の甕・横瓶・提瓶等が出土した。

仮塚南遺跡で最も注目されるのが2本の道状遺構である。この遺構は現在の市道(林田城山線)から北地区と南地区に上がって入り込むような位置において、それぞれ1本ずつ検出された。そもそも本遺跡が立地するこの細長い舌状の丘陵は、市道部分において不自然に分断されており、それは市道建設の結果と考えられていた。ところが第148図に示したように、古墳時代後期(6世紀後半)の道状遺構は市道より低い位置から作られており、この不自然な丘陵の分断は少なくとも古墳時代後期には存在していたことが判明した。また、北地区の16・45・54号竪穴住居跡は市道によって大きく削平されているが、これらの本来の規模を考慮するなら、まだあと4~5mは南側に北地区と同じレベルの遺構面が伸びることになる。南地区においても、2号道状遺構によって切られるベッドを有する弥生時代後期後半の竪穴住居跡はその痕跡がわずかに窺えるほどしか遺存しておらず、南地区もまだあと5~6mは北側へ伸びていたと考えられる。するとこの分断部分は、古墳時代後期においてはかなり狭くて細い切通し状になっていた可能性が高くなり、2本の道状遺構はそこから枝分かれしたような状態であったと想定されよう。道の枝分かれといえば古墳へ通じる墓道を連想するが、集落へ入る道においてもほぼ同じような構造が作られていたことがこの遺跡からわかる。なお、この丘陵の分断時期については古墳時代後期としたが、弥生時代後期後半という可能性も全くないわけではなく、今後のために注意を払っておきたい。

炭焼窯跡は4基確認されたが、大きく削平されていることと、大部分が調査区外に伸びていつていることから、その実態については不明な部分が多い。遺物の出土は全くなく、所属時期に

についても不明。1号窯跡と2号窯跡とはその位置関係から、南北方向に軸を持つ本来1基の炭焼窯跡の横口部に相当すると考えられる。3号窯跡と4号窯跡もやはりその位置関係から、東西方向に軸を持つ1基の炭焼窯跡の本体と横口部に相当すると考えられるが、かなりの傾斜をもっており登り窯的な要素も窺える。このように4基とした窯跡も実際には大きな2基からなることが想定されるが、両者の軸の方向と位置関係からこの2基は切り合い関係にあって、時間的に共存した可能性は極めて低いと考えられよう。

(2)遺物

仮塚南遺跡から出土した古墳時代以降の遺物の大部分は、古墳時代後期の6世紀後半に属するものである。11世紀に比定される9号土壙を除いてはすべてこの年代に位置づけられ、古墳時代の仮塚南遺跡は6世紀後半の極く限られた時期にしか生活の痕跡が窺えない。出土する須恵器の中で6世紀後半以外に位置づけられるものは、8号竪穴住居跡から出土した坏蓋(第82図8)と18号竪穴住居跡から出土した高台付き坏身(第100図5)の2点だけで、いずれも7世紀に比定されるものであるが住居跡の埋土中からの出土である。6世紀後半の坏蓋天井部内面や坏身底部内面にはナデが施されるが、その下に青海波の当て具圧痕がわずかに顔を覗かす例が比較的多い。ヘラ記号については25点を確認したが、このうち坏身が18点、坏蓋が6点、甕が1点である。土師器の甕については、口径20~25cmで口縁部が比較的強く外反するタイプと、口径10~15cmで口縁部が緩やかにしか外反しないものとに分かれる。9号土壙から出土した手捏ね状の小壺については、大宰府においてもほぼ同種のものがやはり11世紀の遺物と共に出土している。しかし、焼成はもっとしっかりしており、また墓等から供献用として出土することもないようで注意が払われる。

5 仮塚南遺跡出土の広形銅戈の鑄型について

(1)鑄型の観察から

仮塚南遺跡の10号土壙からは、広形銅戈の連結式鑄型が出土した。この土壙は古墳時代後期(6世紀後半)の7号土壙を掘り上げた時点で、その底面において検出されたものである。共存遺物は少なく小破片の弥生土器ばかりで、図示できるのは手捏ね土器と甕の口縁部だけである。この2点の土器では年代の決定が困難であるが、本遺跡では弥生時代後期後半以外の弥生土器が出土していないだけに、10号土壙の弥生土器も後期後半に属する可能性が高い。鑄型は鑄型面を下にして、背面を上にして出土した。埋土は自然に堆積して埋まった状況が観察され、人為

的に一気に埋められた痕跡は特に認められない。また、祭祀的な要素も手捏ね土器の存在以外には何も窺えない。本鑄型の特徴については本文において詳述しているので、ここでは鑄型の観察から得られる所見について纏めてみたい。

現在まで確認されている広形銅戈の鑄型は下記の5例である（後藤編1990）。

高宮八幡宮第1号鑄型	破損品（福岡市南区高宮4丁目 高宮八幡宮蔵）
多田羅大牟田	完形品（福岡市東区大字多々良字大牟田 九州歴史資料館蔵）
三雲屋敷	完形品（前原市大字三雲字屋敷 九州大学蔵）
小倉大南	完形品（春日市大字小倉字大南 春日市教育委員会蔵）
江島	破損品（鳥栖市大字江島字江島 鳥栖市教育委員会蔵）

これらはいずれも単面鑄型であり、中広形銅戈鑄型までに見られた両面の銅戈鑄型ではない。また、鑄型面全体に広形銅戈の型が彫り込まれた単体鑄型で、連結式でもない。断面形態については、高宮例は比較的扁平な長方形であるのに対し、その他はかなり分厚い蒲鉾型になり、例えば多田羅大牟田例の場合は重量が19.9kgとかなりの重さになる。先端部が遺存するものについてはそれが湯口になっており、多田羅大牟田・高宮八幡宮・江島の3例については合印が刻まれる。戈型の最大幅は12cm前後で、高宮八幡宮・三雲屋敷の2例については内が鑄型外へ抜けない。中広形までの銅戈の鑄型には樋に綾杉文が彫られるが、これら広形には彫られていない。また、三雲屋敷（直線と鉤手文）・小倉大南（直線4本）・江島（重弧文）の3例の内については文様が施される。以上が現在まで知られている広形銅戈鑄型5例の概要であるが、これらと比較しながら仮塚南遺跡出土の鑄型を見ていきたい。

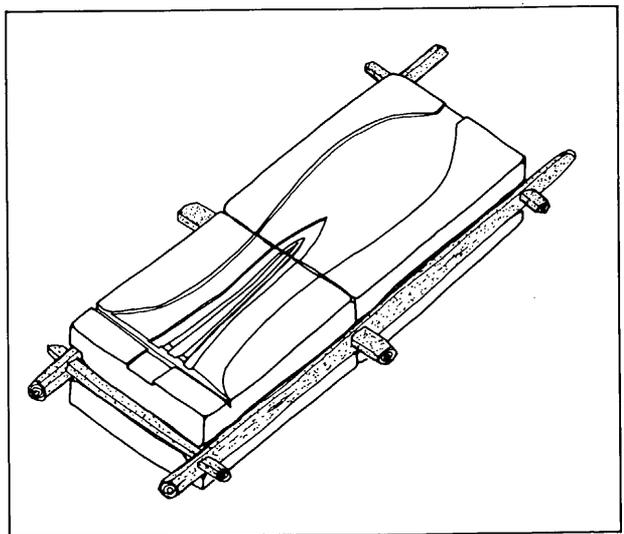
仮塚南遺跡出土の広形銅戈鑄型は既存の5例と異なり連結式の鑄型である。現在まで確認されている連結式鑄型は11例ほどあるが、それらはすべて広形銅矛の鑄型で占められる（片岡編1993）。そもそも連結式鑄型が出現した背景には、銅矛の大形化によって必要となる大きな石材の量的な供給に対応できなかったがために、それを解消する手段として生じた技術（技法）であったと理解できる。広形銅矛は大きいもので1mほどになり、仮に石製の単体鑄型で製作することはできたとしても、それ以前の問題としてその鑄型自体を1石で作ることも運搬することも非常に困難であったと考えられ、結果として連結式という手法が採られたのであろう。

今回、出土した仮塚南例は連結式であるが、湯口の場所にも注意しておきたい。仮塚南例は下半分だけで先端部の状況は不明だが、内が鑄型の外に通じる部分である下側面を見ると興味深い焼け方をしていることに気付く。すなわち、内に沿って弧状に幅3mmほどはかなり強く焼けているが、これに沿ってさらに外側に弧状に幅7mmほどは全く焼けてなく、そしてさらにその外側については薄くではあるが不定形に焼けた痕跡が観察される。この状況からは、湯口はこの下側面の内に接する部分にあって、漏斗の設置された部分だけが弧状に焼けずに残っていると推察される。単体の広形銅戈の鑄型では湯口は先端部（上側面）にあり、下側面にそれを有す

る本例には特異な印象も受ける。しかし、すべて連結式からなる広形銅矛の場合は中子との関係から湯口はすべて下側面にあり、広形銅戈には中子はないものの、連結式は下側面を湯口にするという定型的な技法が存在したとすれば、本例の存在も違和感のないものとなる。なお、鑄型面に残る縦方向の線条痕についてはガス抜き溝とする説（後藤1982）があるが、これがすべての鑄型に見られるわけではない。また、この線条痕が鑄型の外に突き抜けるものも少ない。したがって、鑄型面を平坦にする細かい研磨痕がこの粗くて底に凹凸が目立つ線条痕を切っている事実をも考慮すれば、鑄型面を平坦にする初期段階の作業の痕跡と考えられる。

背面は砥石として使用されているため、彫られている線刻も全体像がはっきりとしないが、先端部や基部の形状から銅戈を意匠していることはまず間違いない。背面には右側面に欠損部があるものの、その後も再加工が行なわれている。銅戈の線刻は欠損前の平面形態である長方形のほぼ中央部に彫られており、鑄型として使用されていた時点ですでにこの線刻が彫られていたと推察される。すなわち、仮に鑄型面が下を向いていたとしても、銅戈の線刻によってこの連結式の鑄型が銅戈のものであることが認識できるのである。

以上、仮塚南例の特徴である連結式・湯口の場所・背面の線刻について見てきたが、このことから仮塚南例の広形銅戈の鑄型は広形銅矛を製作するのと同じ工房や工人によって製作された可能性が指摘されよう。すなわち、連結式であることや湯口が下側面にあることは広形銅矛と同じ特徴であり、また背面の銅戈の線刻は広形銅矛の連結式鑄型との識別を意図したものと推察されるからである。単体の広形銅戈の鑄型については、中広形以来の技法が継承されると理解すべきで、同じ広形銅戈の鑄型であっても連結式である仮塚南例とは異なった状況や背景に基づくものと考えられる。従来、銅剣・銅矛・銅戈の一括埋納の場合はそれぞれが単独で構成されること、中広形以前の銅戈の鑄型については両面鑄型であっても銅剣や銅矛といった銅戈以外の鑄型と組み合わせる類例がないこと、広形銅戈の鑄型については連結式の類例がなかったこと等から、銅戈は銅剣や銅矛とは異なった観念（例えば使用目的の違い等）や技術に基づいて製作されたと考えられていたようである（森1960）。しかし、福岡県浮羽町日永遺跡（緒方編1994）における広形銅矛と広形銅戈の共伴一括埋納や仮塚南例の連結式広形銅戈の出土等により、少なくとも青銅製武器の生産が終焉に近づ

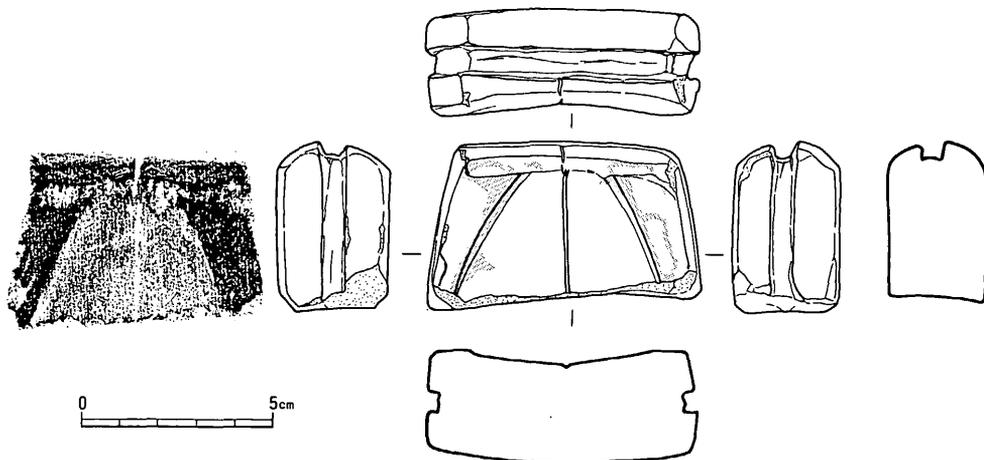


第 164 図 仮塚南遺跡出土広形銅戈連結式鑄型使用方法
推定模式図（中口裕1972『銅の考古学』を参考）

いた広形の段階（弥生後期後半～終末）においては銅矛と銅戈の間に異なった観念や製作技法はもはや存在せず、その形態だけが継承・形骸化していったものと考えられる。

ところで、仮塚南例の断面形態は、単体の広形銅戈の鑄型に比べてかなり扁平である。この要因としてまず石材の大きさや量的な制約が考えられるが、広形銅矛の場合がすべて扁平であることから、連結式という技法における技術的側面が関係していたとも考えられる。そしてもう一つ、転用品としての可能性も存在しよう。確かに、仮塚南例の背面には銅戈もしくは銅矛の先端部的な緩やかに裾広がりになる二等辺三角形の窪みが存在するが、上側面から下側面にかけて1cmほどの比高差が存在し、またこの窪みは砥石として最もよく使用されている部分でもある。したがって、背面に戈型もしくは矛型が存在していたとは考え難く、転用品としての可能性も低い。

もう一つ、仮塚南例で特徴的なのは、4側面に存在する断面V字状の溝である。側面の溝に関する解釈には幾つかあるが、下・右・左の3側面については木柁をはめ込んで対面に合わせるべき2面の鑄型を固定するため、上側面については連結すべきもう一つの鑄型との間に楔(木の棒)を据えるためと、一般的には言われている(中口1972 第164図)。確かに、連結する場合には木柁や楔をはめ込むことにより安定的な連結が可能になると考えられるし、実際にこの4面の溝は1枚の水平面を作るように同じレベルで彫られており、木柁説に対して説得的である。しかし、広形銅矛の場合は連結式であっても側面に溝の存在しない例が幾つかあり、必ずしも木柁をはめ込んだわけではないのか、あるいはそれ以外の用途が存在していた可能性も否定できない。唯一対をなす鑄型と言われている伝福岡市東区八田出土の中細形銅戈の鑄型(福岡市立博物館蔵 下條1977)と伝福岡県粕屋郡粕屋町出土の中細形銅戈の鑄型(明治大学考古学博物館蔵 熊野1989)においても、前者には側面に溝がないのに、後者には4面すべてに溝があり、木柁説にとっては適当な解釈が難しい。上側面の溝、すなわち連結部の溝については連結



第 165 図 京都大学所蔵須玖岡本遺跡出土鑄型実測図 (1/2)

式鑄型のすべてに彫り込まれているので、連結のための楔をはめ込んだ溝とする解釈が妥当であろう。連結部については三雲例のように段を付けて違い違いに噛み合わせる例もあるが、多くは平坦面に対になるように横方向に溝を彫り込む。このように、連結部の溝については適当な解釈が行なわれているが、両側面と下側面の溝については木杵説がより説得的ではあるものの、必ずしも普遍的・決定的な解釈とは言い難いであろう。

なお、側面に溝が巡る類例として京都大学が所蔵する春日市須玖岡本出土の銅矛もしくは銅戈の鑄型片があるが(下條1989)、ここで今一度取り上げてみたい(第165図)。この鑄型は1930年に久我辰美氏が京都大学に寄贈したもので、登録番号は「福岡県028a」(京都大学1960)である。縦4.5cm、横7.2cm、厚さ2.7cmの鑄型の先端部で、横幅から判断しておそらく中細形か中広形の鑄型と考えられる。上側面および左右の側面には幅5~6mm、深さ4mm、断面形態「ㄣ」の溝が巡るが、これらの溝は1枚の水平面を作るように同じレベルで彫られており、あたかも杵にはめ込むのを意識していたかのようである。背面には比較的粗い研磨が施されるが、それ以外の面は丁寧な研磨である。切断面も砥石として使用されていたのか、かなり研磨されている。先端部には合印が1本刻まれ、この周辺には焼けた痕跡がわずかに窺える。断面形態は緩やかに湾曲した長方形で、石材は長石石英斑岩であろう。報告されているもので全側面に溝の巡る例は、この京都大学例、先述した明治大学例、そして仮塚南例しか管見にない。

広形銅戈の製品については、現在下記の4例が知られている。

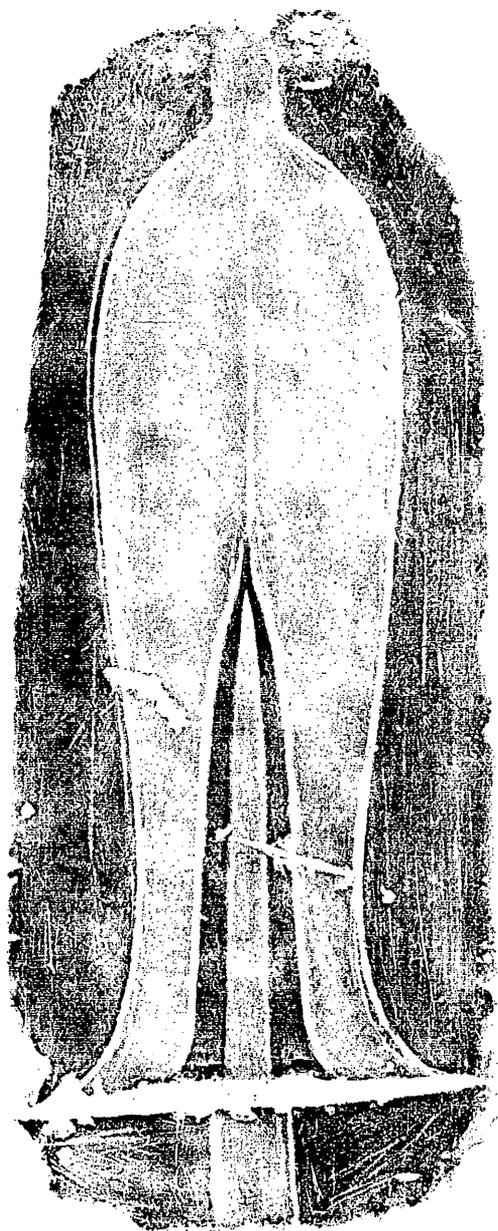
- | | |
|------------------|-------------|
| 大分県豊後高田市美和雷遺跡出土品 | (近藤俊馬氏蔵) |
| 福岡県大川市鐘ヶ江天満神社所蔵品 | |
| 神戸市立博物館所蔵伝福岡出土品 | |
| 福岡県浮羽郡浮羽町日永遺跡出土品 | (福岡県教育委員会蔵) |

これら広形銅戈4例と仮塚南例を含めた広形銅戈鑄型6例は、樋や内の文様や孔の形態がそれぞれに全く異なり、未だ鑄型と製品が対応するものはない。

広形の銅矛もしくは銅戈の鑄型については、最近までその出土地は福岡平野に集中していた。しかし近年、小郡市津古東台遺跡(片岡編1993)で出土した広形銅矛の連結式鑄型や今回の仮塚南例の出土により、その分布状況が筑後平野方面へ拡大していく傾向にある。これは弥生時代における青銅器生産の終焉や、弥生時代自体の終焉を考えるに当たって重要な問題となりうるものであり、今後の類例の増加に対しても敏感に注意を払わなければならないであろう。

(2)広形銅戈鑄型のその他の類例について

ここでは参考資料として、いずれも国の重要文化財である福岡市東区大字多々良字大牟田出土の広形銅戈鑄型(九州歴史資料館蔵)と前原市大字三雲字屋敷出土の広形銅戈鑄型(九州大

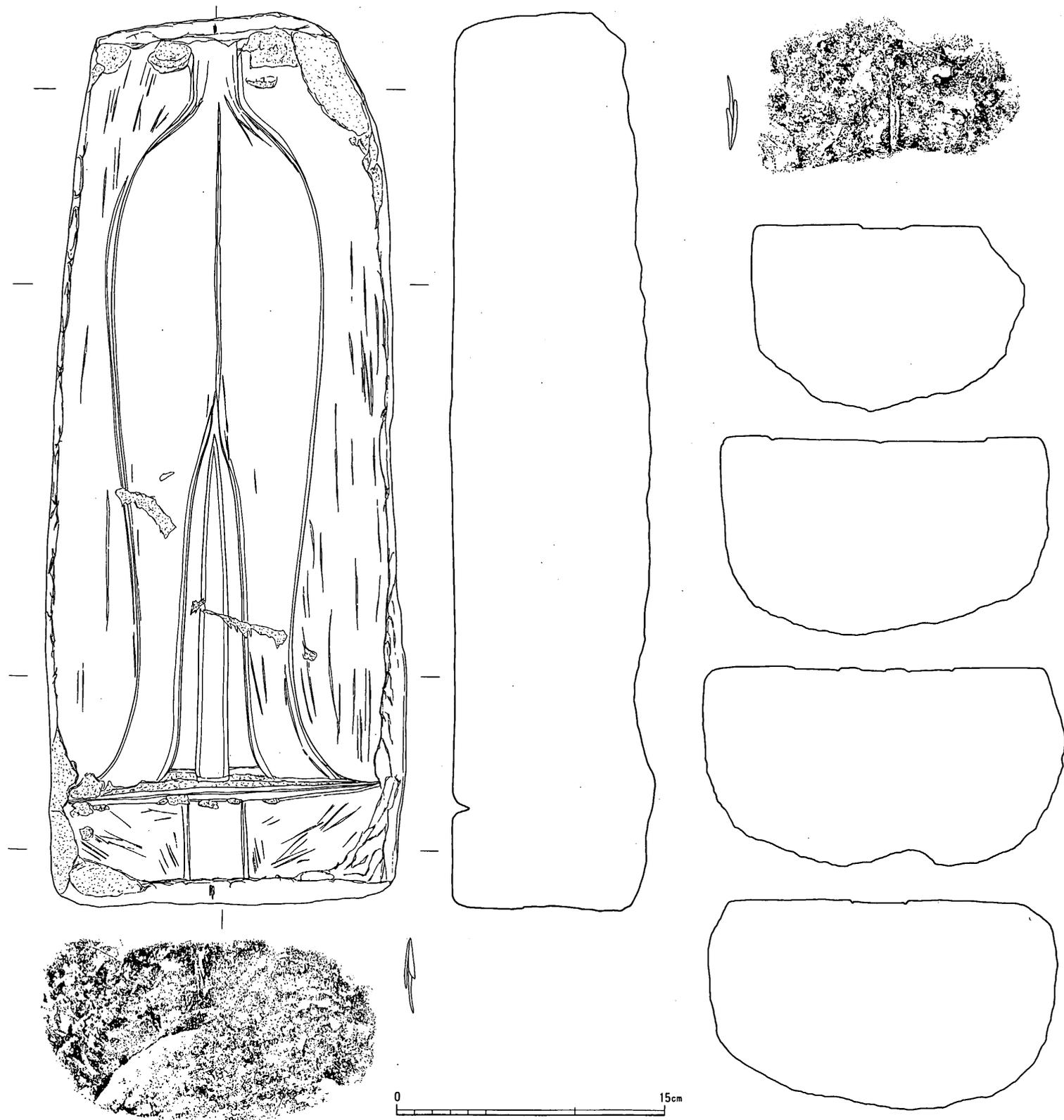


鑄型面



背面

第 166 図 多田羅大牟田出土広形銅戈鑄型拓影 (1/3)



第 167 図 多田羅大牟田出土広形銅戈鑄型実測図 (1/3)

学蔵)を紹介したい。なお、三雲屋敷例の実測図は伊崎俊秋氏(福岡県教育庁南筑後教育事務所)による。

多田羅大牟田出土鑄型(第166・167図)

この鑄型は戦後の開墾によって福岡市東区大字多々良字大牟田から出土したとされる。「多田羅」という地名も橋の名称等に残るが、現在の大字は「多々良」である。昭和39(1964)年5月26日に国の重要文化財に指定され、現在は九州歴史資料館に所蔵されている。石材については従来より砂岩と言われているが、近年新たに認識されだした長石石英斑岩に近いようである。長さ50.3cm、幅20.2cm、厚さ11.8cm、援の最大幅は12.1cm、最小幅は9.0cm。樋は22.1cm、脊は19.3cm、胡は17.6cm。内は縦4.5cm、横3.4cmで鑄型の外へ突き抜ける。重量は19.9kgとかなり重い。断面形態は蒲鉾形を呈する。鑄型面には縦方向の線条痕が目立つ。その1本1本の溝の幅は必ずしも一定しておらず、また底の部分も凹凸が著しい。このような先条痕は多くの鑄型面で観察されるが、鑄型面を平らにするための研磨にしてはかなり粗く、あるいは鑄型面を調整した初期段階の作業痕跡であろう。胡の一端は欠損しているが、おそらく両端とも鑄型の外に貫通していないであろう。全体的に薄く焼けているが決して明瞭ではなく、中央部付近がやや黒く見える。湯口は全く焼けていないが、この部分については表面がわずかに剝落(摩滅)しているようである。内は鑄型の外に抜けるが、焼けた痕跡はこの先端部が最も良く残る。合印は上側面と下側面にそれぞれ一カ所ずつ、鑄型面から背面方向へ裾広がりになるように3本の沈線文を刻んでいるが、戈型の中心軸からいずれもわずかに左側にズレている。樋の先端部や援の先端部では、沈線文の刻み込みが何度か繰り替えされ、しっかりとした1本の沈線文は見られない。4側面の調整は粗くノミ痕も観察されるが、左側面の上半部のみ比較的細かい研磨が施され平らにされている。背面については未調整で、拓影に示したようにノミ痕がそのまま残る。樋や内に文様は施されない。先述したように、重量は19.9kgとかなり重たい。実際の鑄造作業ではこれと同じ鑄型がもう一体あるわけで、合計で約40kgの鑄型を用いて銅戈を鑄造する作業の困難さとそれに伴う高度な技術の存在を、この鑄型の実測作業において強く感じられた。

三雲屋敷出土鑄型(第168図)

この広形銅戈の鑄型は、1899~1900年頃に福岡県前原市大字三雲字屋敷田から出土といわれている。しかし、大字三雲には「屋敷」という小字名しかなく、「屋敷田」は間違いと考えられる。そもそもこの鑄型の初出文献である1908年の八木奨三郎「両筑の古物遺蹟(三)」では、「イノカワ」から出土したと記されている。「イノカワ」とは現在の大字三雲字「井の川」に相当し、瑞梅寺川(通称「三雲川」)東岸の旧氾濫源の低地で、この東側の段丘上が「屋敷」である。つまり、「イノカワ」と「屋敷」とは旧氾濫源と段丘上という立地については異なるものの、基本的には大字三雲内における接した2つの小字なのである。では「屋敷田」という小字が出土地として使われ出したのはいつ頃からであろうか。1914年森弘の「福岡縣下に於ける銅鉞

銅劍及び其の鑄型に就て」では「糸島郡怡土村大字高祖、行藏院所蔵の鑄型石は、……………（中略）……………而して大字三雲、字屋敷の田地中より分出せりと云。」とあり、1915年の同じく森弘の「銅鉾銅劍同鑄型の槩」では「……………（中略）……………而して行藏院は旧修験の名にして小田部隆氏が三雲字上西の宅地脇より発掘し、同所地藏堂の傍にありしを、今より十七八年前に小田部方へ取寄せたるものなりと云。」とある。また、1925年の福岡県編『史蹟名勝天然記念物調査報告書第一輯』では「本器の出处は三雲字屋敷田より出土せしと云、或は三雲川の川底より発見せりとも云ふ。」と記されている。さらに、1925年の高橋健自『銅鉾銅劍の研究』では「筑前國糸島郡怡土村大字三雲字ヤリミゾ附近」としながらも「八木葵三郎氏『考古精説』には字イノカワと傳へ、筑紫史談所載故森弘氏『銅鉾銅劍の槩』には字屋敷の田とあるもの是れなり。」としている。このように「屋敷田」は、出土地である小字「屋敷」とその土地の地目である「田」が混乱したものと考えられる。ところで、実際の出土地については幾つかの説が出たこととなるが、いずれにせよ三雲遺跡群の一角であることには違いない。

さて、この三雲屋敷の広形銅戈の鑄型であるが、長さ52.6cm、幅18.4cm、厚さ9.2cmで、断面形態はまさに蒲鉾形を呈する。援の最大幅は11.8cm、最小幅は8.3cm、樋は21.2cm、脊は18.6cm。胡は15.7cm、深さ7mmで両端とも鑄型の外へ突き抜ける。内は縦3.7cm、横2.8cmで鑄型の外には突き抜けない。全体的に薄く焼けており、湯口となる先端部は特に良く焼ける。援の先端部付近の調整は比較的粗く、特にその縁辺部には凹凸が目立つ。内にはのみ、1本の沈線文とそれを中心に左右対称になる鉤手（蕨手）状の文様が施される。

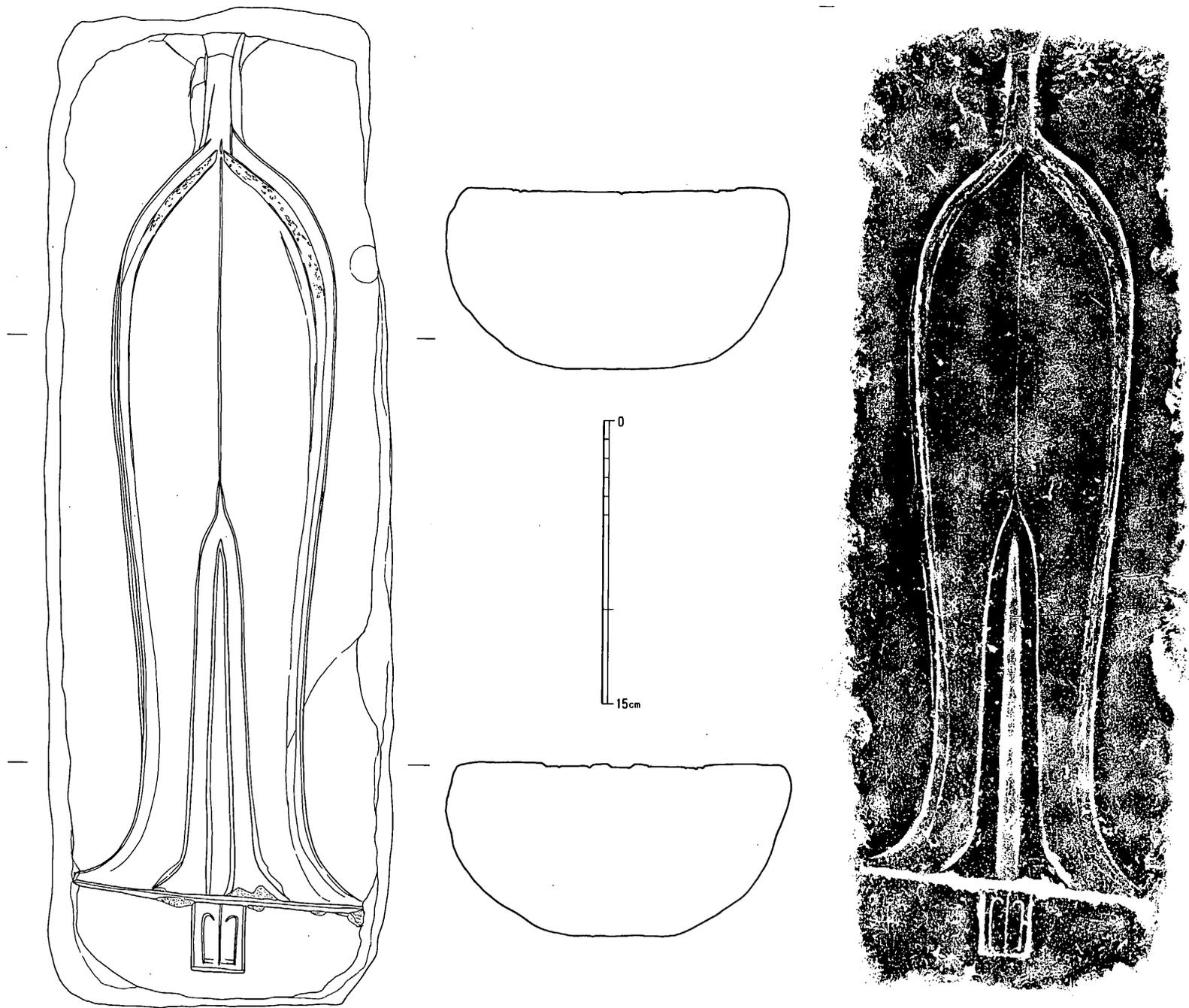
昭和30年2月2日に国の重要文化財に指定され、現在は九州大学に所蔵されている。

須玖岡本遺跡出土の鑄型および三雲屋敷出土の鑄型の実測と本報告への掲載については、それぞれ京都大学文学部附属博物館ならびに九州大学文学部考古学研究室より快諾を得ましたこと、心よりお礼申し上げます。また、仮塚南遺跡出土の広形銅戈の連結式鑄型を纏めるにあたって、後藤直・片岡宏二の両氏からは鑄型の観察方法や文献の紹介について、さらには下記の諸先生・諸氏からも多大なるご教示・ご配慮を賜りましたことを、記して感謝の意を申し上げます。（敬称略）

赤司善彦 伊崎俊秋 石丸 洋 小田富士雄 川述昭人 片岡宏二 小池史哲
後藤 直 佐々木隆彦 武末純一 西谷 正 橋口達也 森下章司 宮小路賀宏
宮本一夫 柳田康雄 山崎純男 横田義章 吉田 広

[参考・引用文献]

岩永省三 1980 「弥生時代青銅器型式分類編年再考一劍矛戈を中心として一」『九州考古学』
55 九州考古学会



第168図 三雲屋敷出土広形銅戈鑄型実測図(1/3)

岩永省三 1989「伝福岡県福岡市東区八田出土銅戈鑄型をめぐって」『明治大学考古学博物館館報』5 明治大学考古学博物館

熊野正也 1989「本館所蔵の銅戈鑄型について一鑄型の郷里を訪ねて」『明治大学考古学博物館館報』5 明治大学考古学博物館

緒方 泉編 1994『一般国道210号線浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告第7集 日永遺跡』福岡県教育委員会

片岡宏二 1993「筑紫平野における初期鑄型の諸問題」『考古学ジャーナル』359 ニューサイエンス社

片岡宏二 1993「広形銅矛に残る鑄型の継ぎ目痕跡に関する研究」『九州考古学』68 九州考古学会

片岡宏二編 1993『津古遺跡群。』小郡市教育委員会

京都大学文学部編 1960『京都大学文学部博物館考古学資料目録』1

黒沢 浩 1993「弥生時代の鑄型」『考古学ジャーナル』359 ニューサイエンス社

後藤 直 1982「福岡市八田出土の銅劍鑄型一資料の観察一」『福岡市立歴史資料館研究報告』6 福岡市立歴史資料館

後藤 直編 1990『席田遺跡群（VI）一高宮八幡宮所蔵鑄型の調査報告』福岡市教育委員会
近藤喬一「明治大学考古学博物館購入の銅戈鑄型」『明治大学考古学博物館館報』5 明治大学考古学博物館

下條信行 1977「考古学・粕屋平野一新発見の鑄型と鏡の紹介をかねて」『福岡市立歴史資料館研究報告』1 福岡市立歴史資料館

下條信行 1989「銅戈鑄型の変遷一伝福岡市八田出土明治大学蔵銅戈鑄型について」『明治大学考古学博物館館報』5 明治大学考古学博物館

高橋健自 1925『銅鉾銅劍の研究』

中口 裕 1972『改訂 銅の考古学』考古学選書4 雄山閣

中口 裕 1974「銅戈の鑄造技術による分類」『古文化談叢』2 九州古文化研究会

福岡県編 1925『史蹟名勝天然記念物調査報告書第一輯』

福岡県教育委員会編 1984『福岡県の考古資料』

森 貞次郎 1960「青銅器の渡来一銅鏡、細形の銅劍、銅矛、銅戈」『世界考古学大系』2 平凡社

森 貞次郎 1960「銅劍・銅矛・銅戈の鑄造」『世界考古学大系』2 平凡社

森 弘 1914「福岡縣下に於ける銅鉾銅劍及び其の鑄型に就て」『筑紫史談』2

森 弘 1915「銅鉾銅劍同鑄型の栞」『筑紫史談』4

八木獎三郎 1908「兩筑の古物遺蹟（三）」『國學院雜誌』14-7

圖 版



(1) 仮塚南遺跡北地区全景（南から）



(2) 仮塚南遺跡北地区全景（北東から）



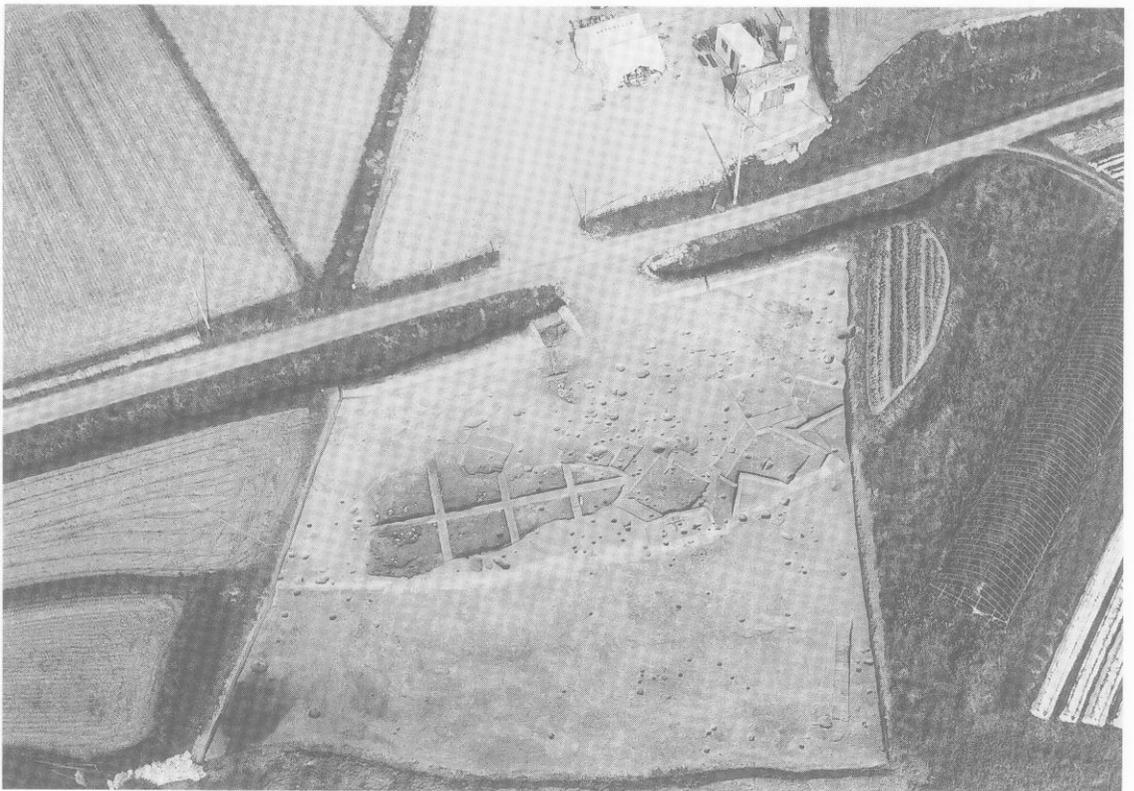
(1) 仮塚南遺跡北地区北側全景（南から）



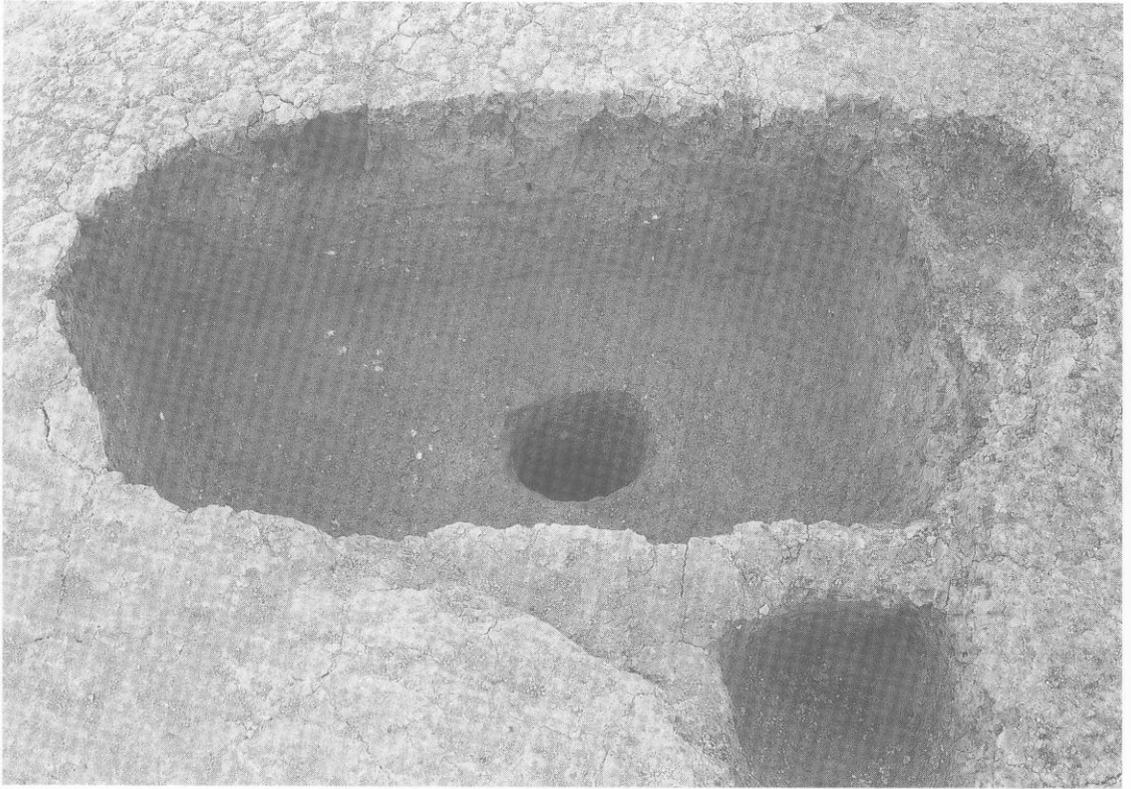
(2) 仮塚南遺跡北地区南側全景（北から）



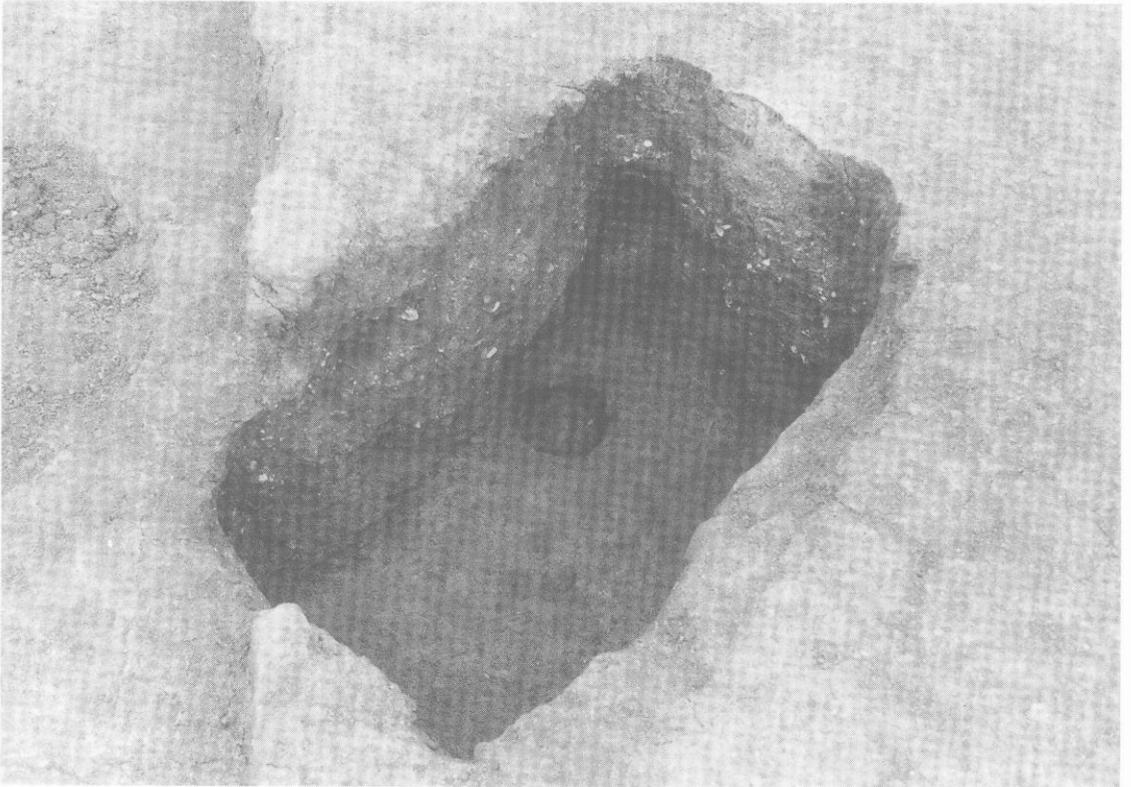
(1) 仮塚南遺跡南地区全景（北西から）



(2) 南北地区全景（南から）



(1) 16号土壙（北東から）



(2) 17号土壙（北西から）



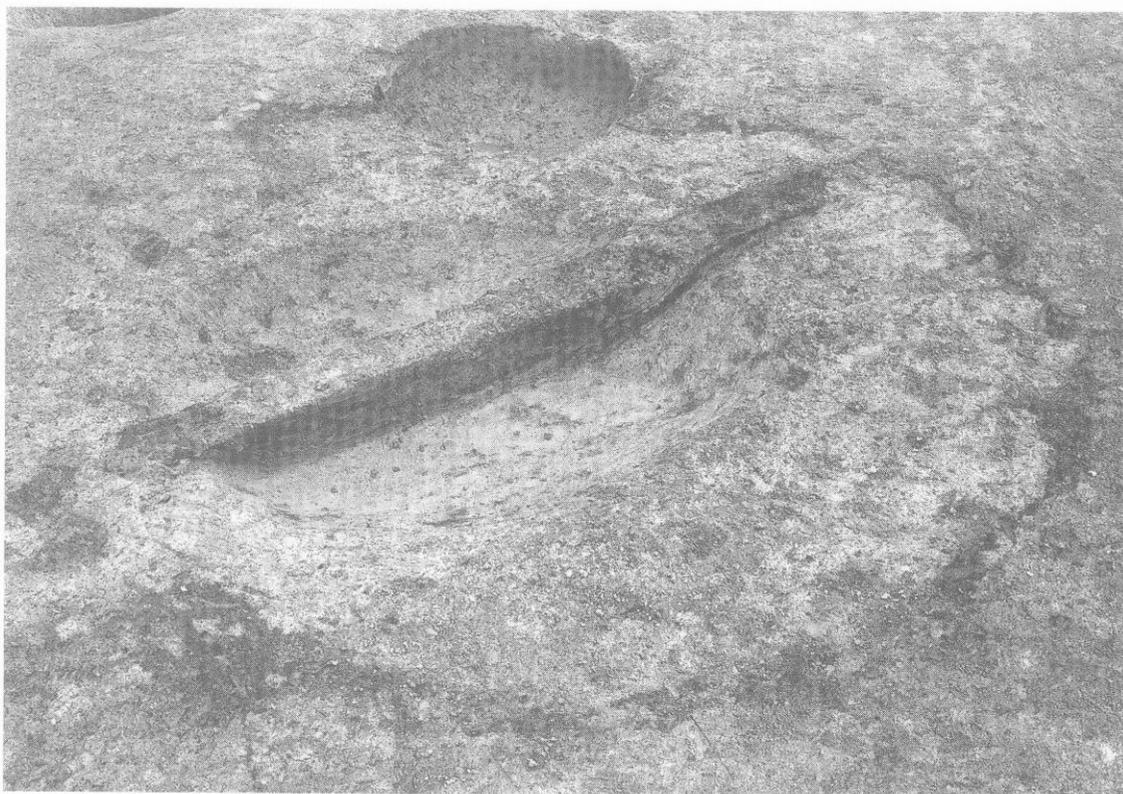
(1) 2号竖穴住居跡（北から）



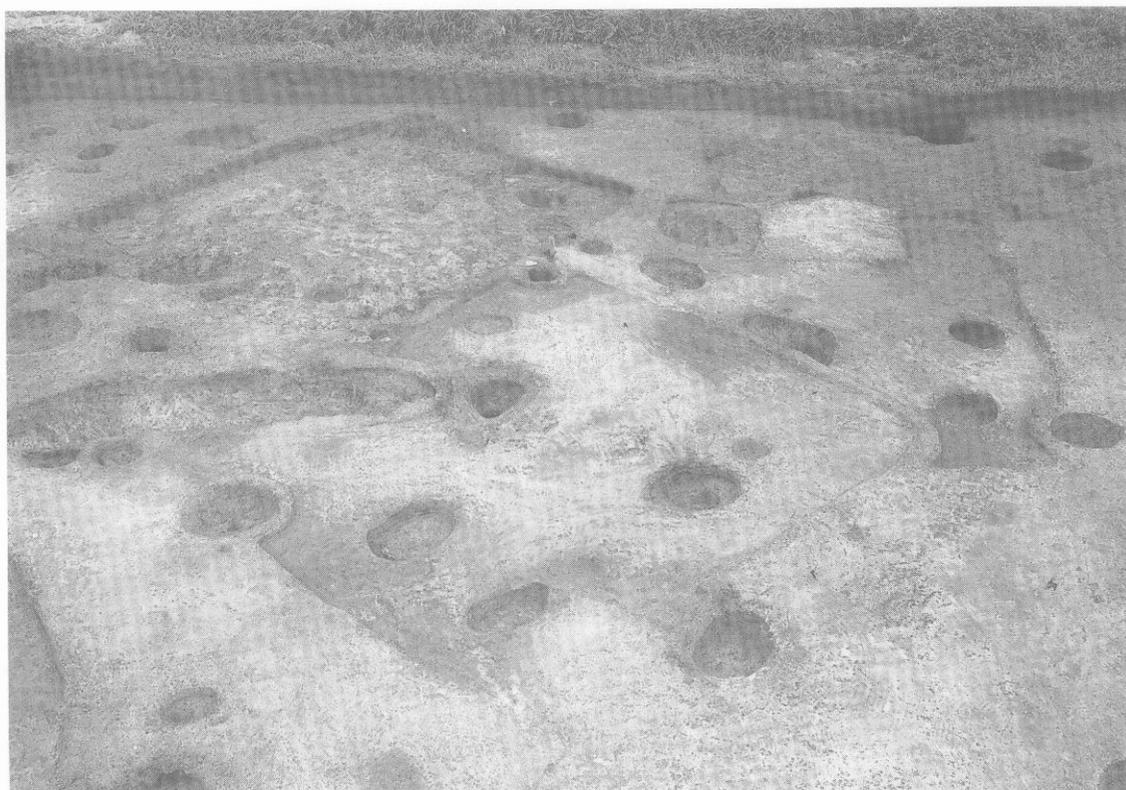
(2) 3号竖穴住居跡（南東から）



(1) 5号竪穴住居跡（北から）



(2) 5号竪穴住居跡炉跡（北西から）



(1) 25・31・32・34号竪穴住居跡（西から）



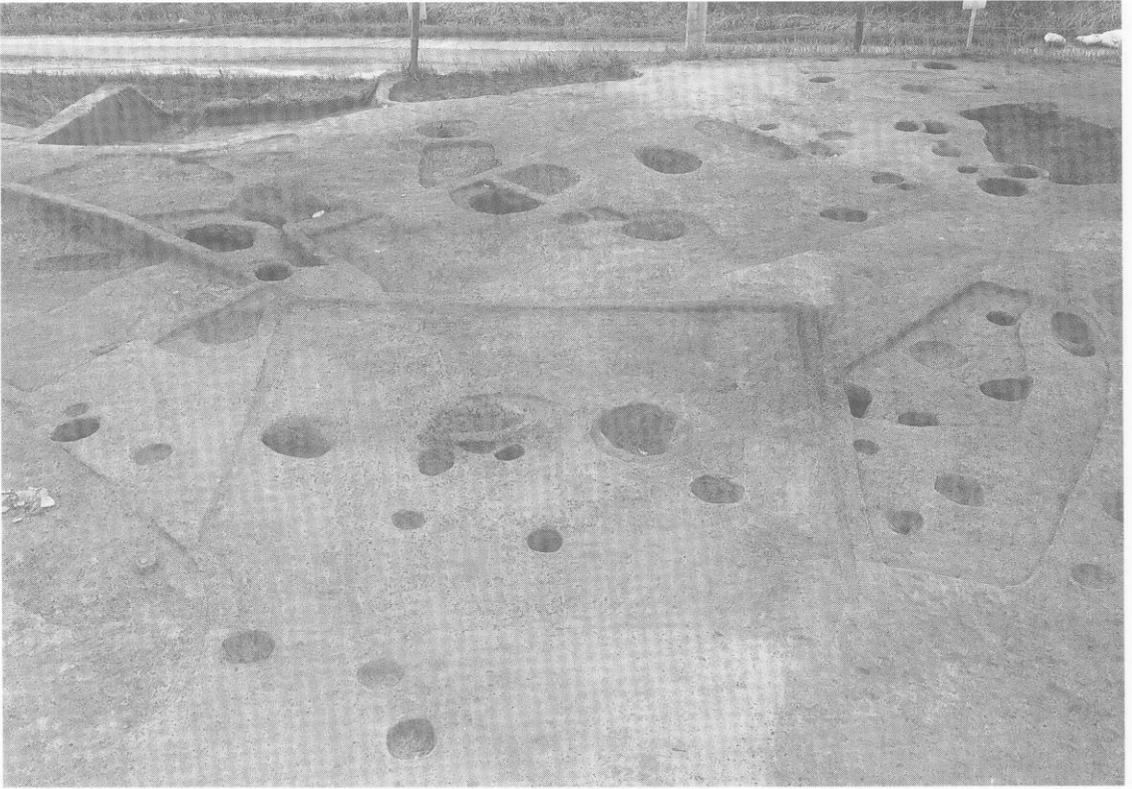
(2) 32・34号竪穴住居跡（北西から）



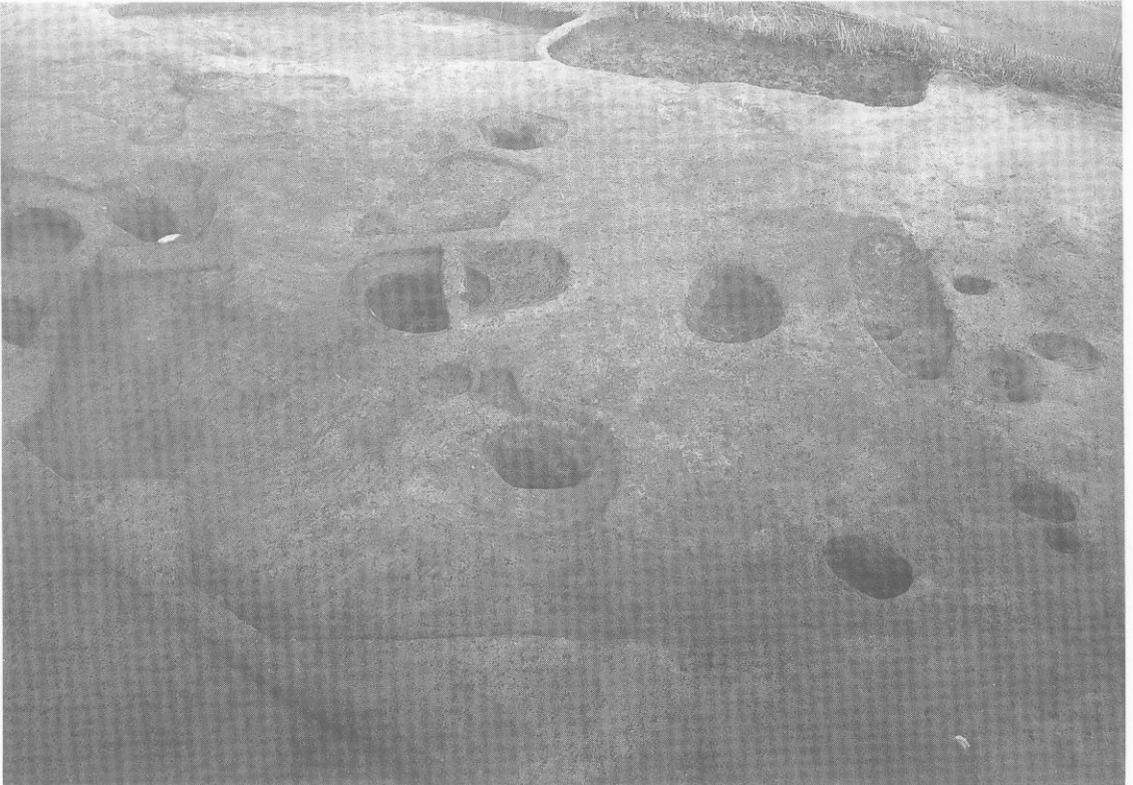
(1) 37~43号竖穴住居跡（北西から）



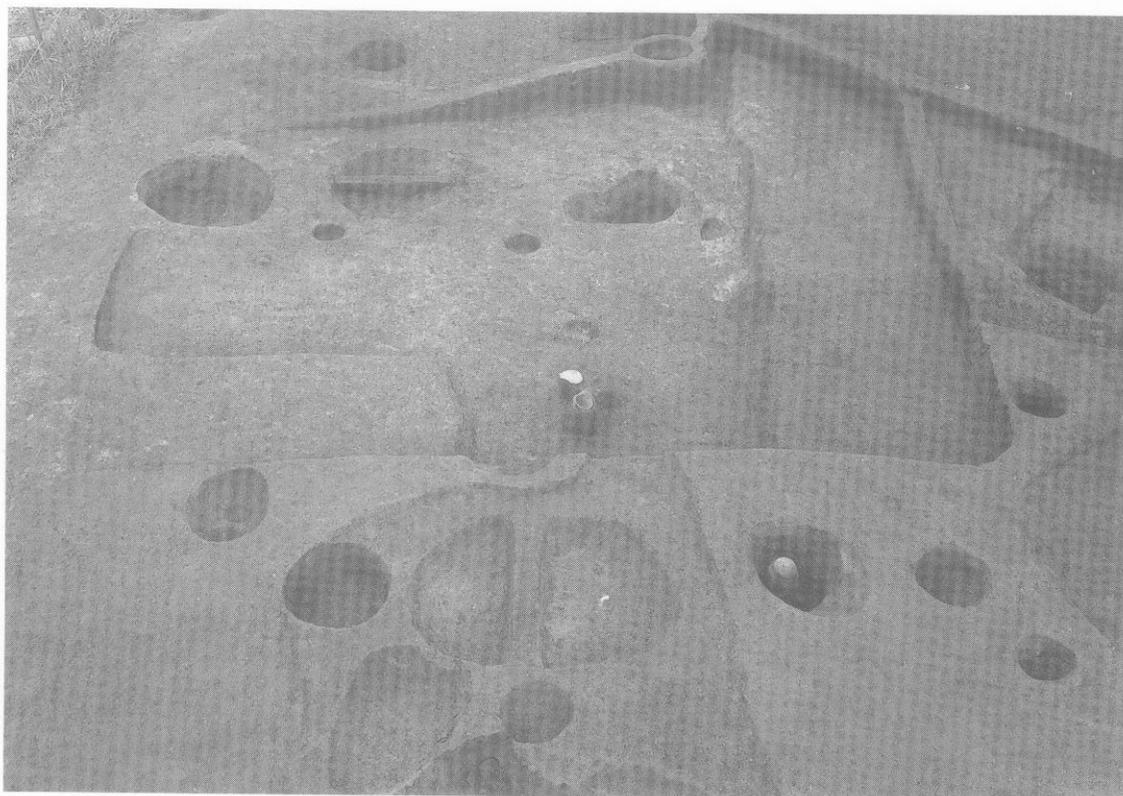
(2) 38号竖穴住居跡（北から）



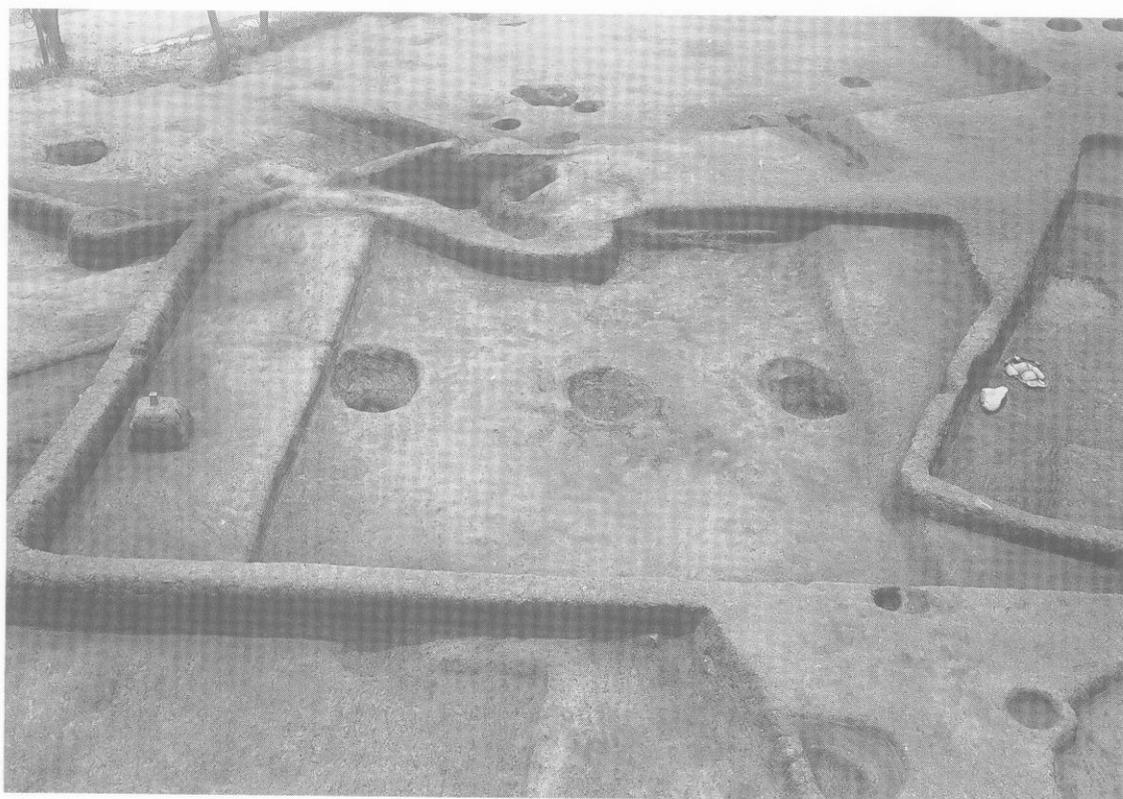
(1) 40号竪穴住居跡（北から）



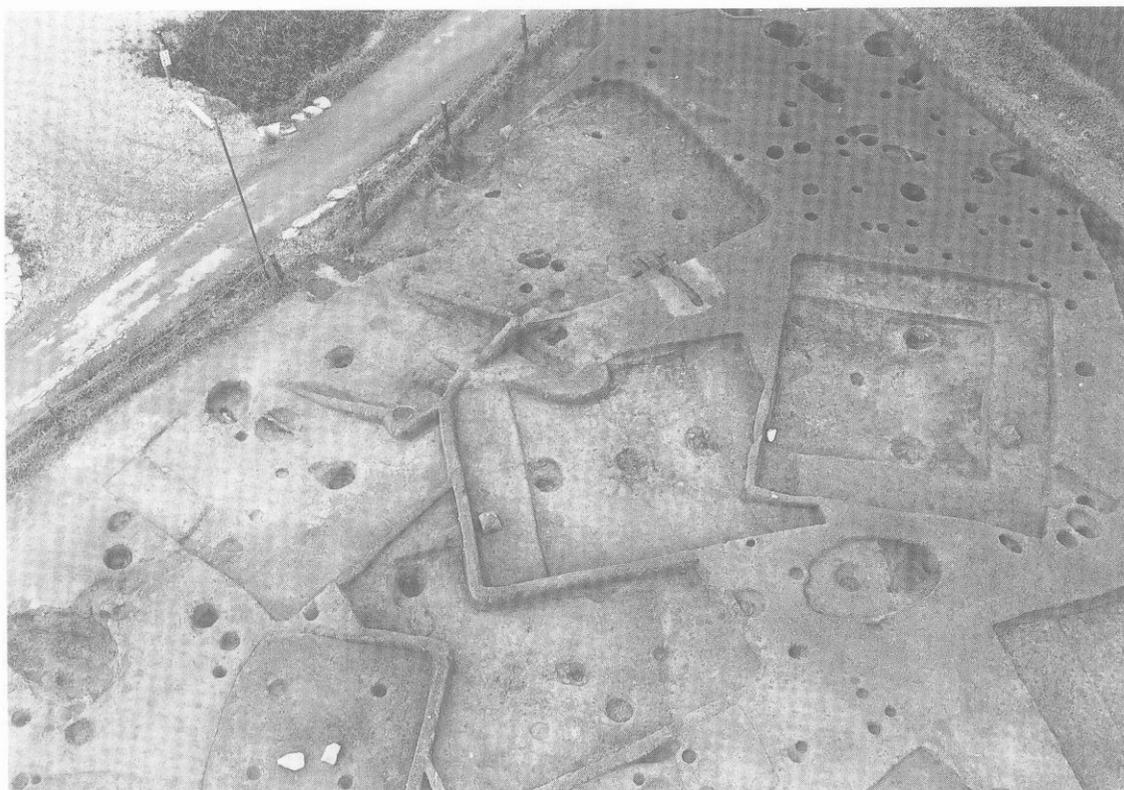
(2) 42号竪穴住居跡（北西から）



(1) 16・45号竪穴住居跡（東から）



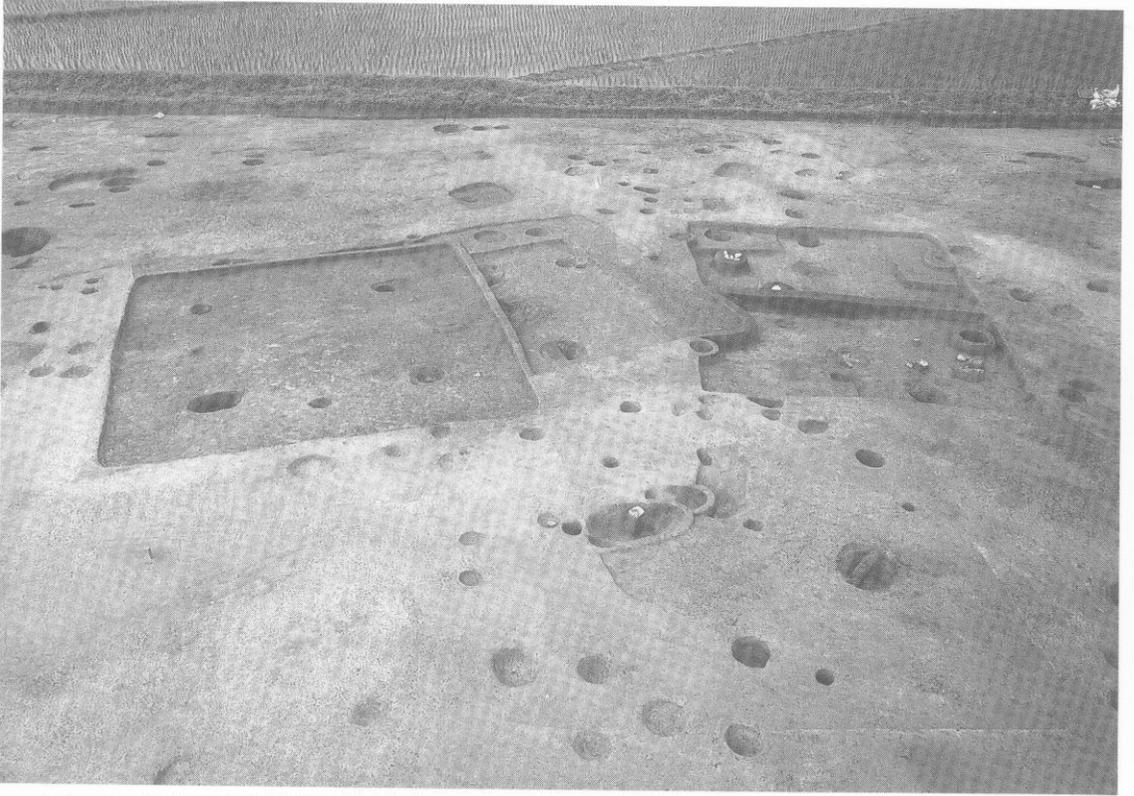
(2) 46号竪穴住居跡（北東から）



(1) 16・44～47・52～55号竖穴住居跡（北東から）



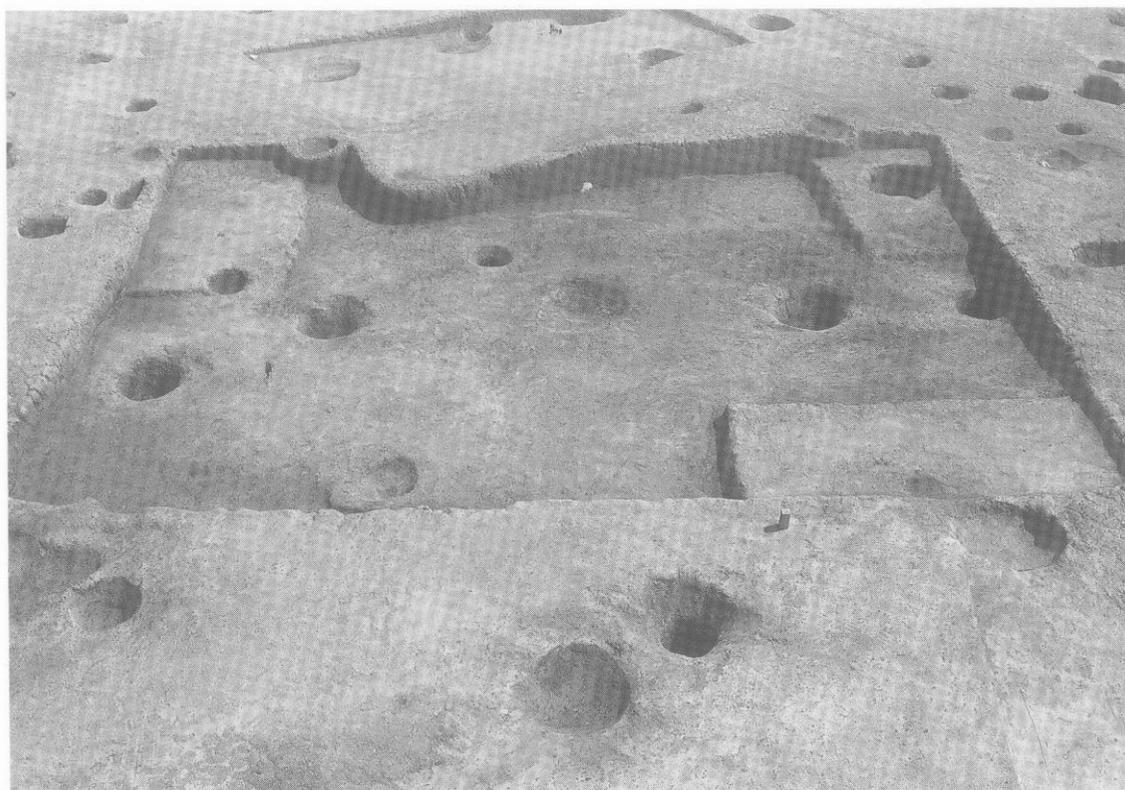
(2) 47・52号竖穴住居跡（北東から）



(1) 48～51号竪穴住居跡（東から）



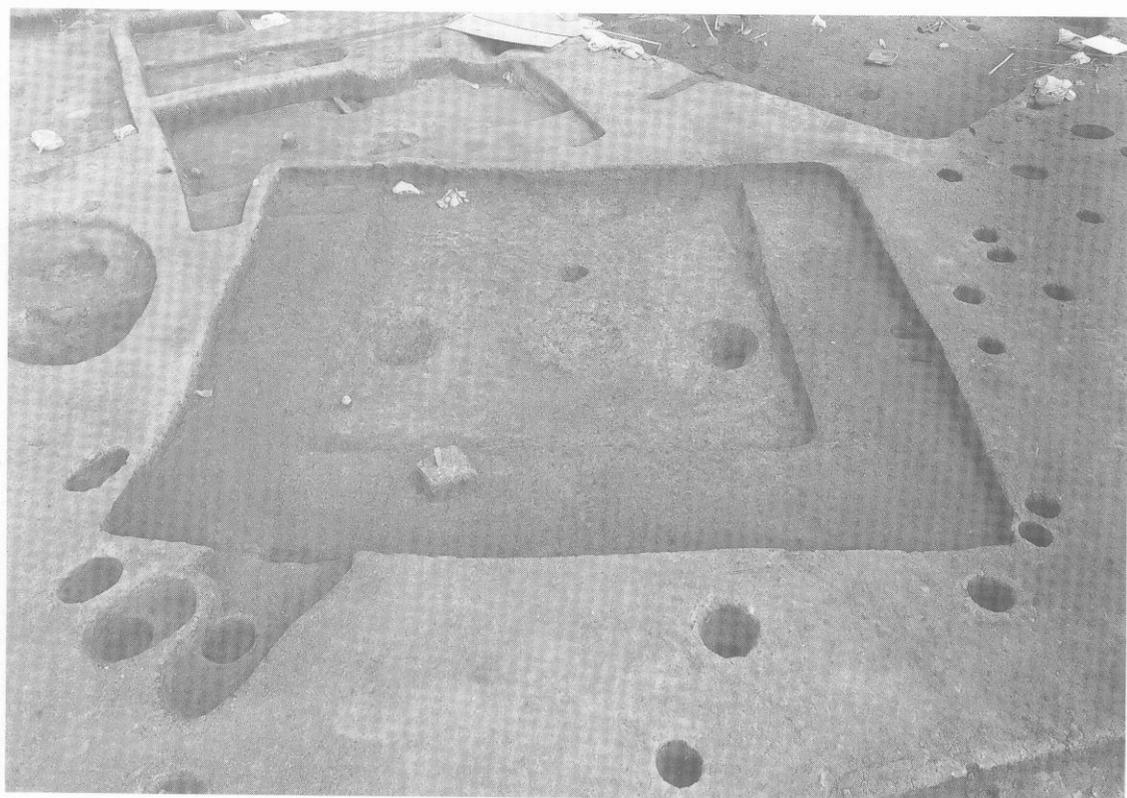
(2) 49号竪穴住居跡（北東から）



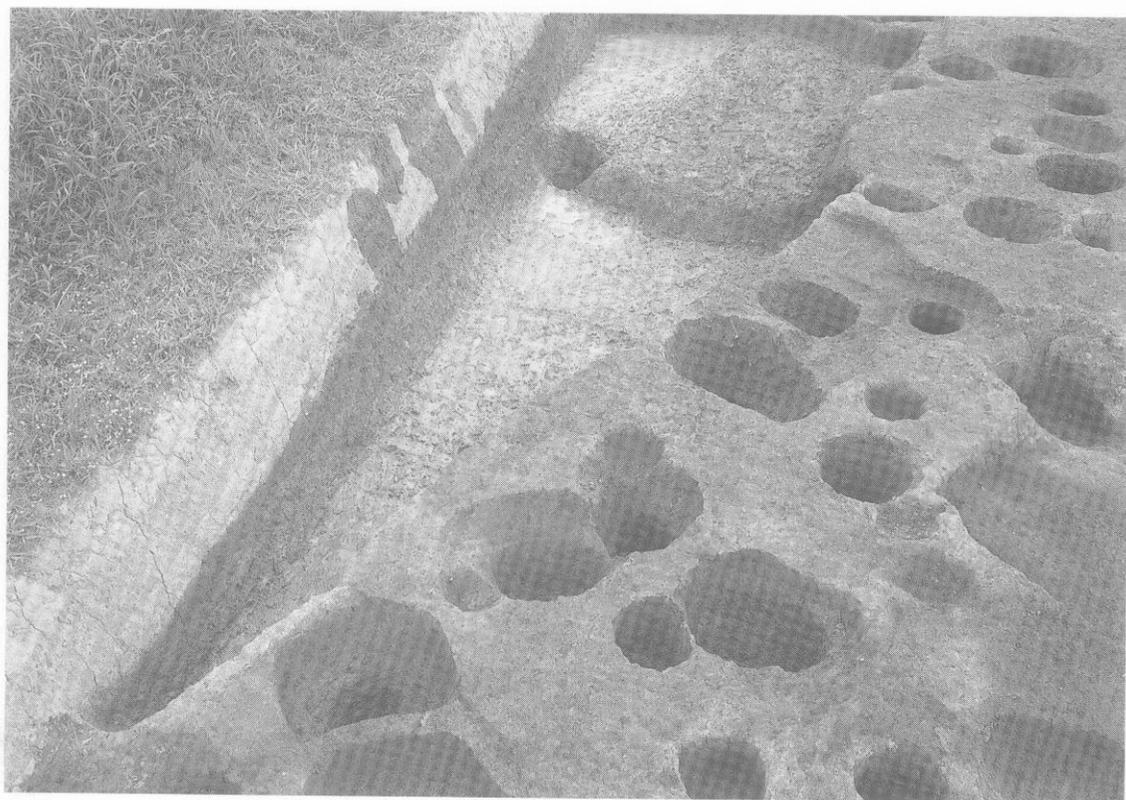
(1) 50号竪穴住居跡（北から）



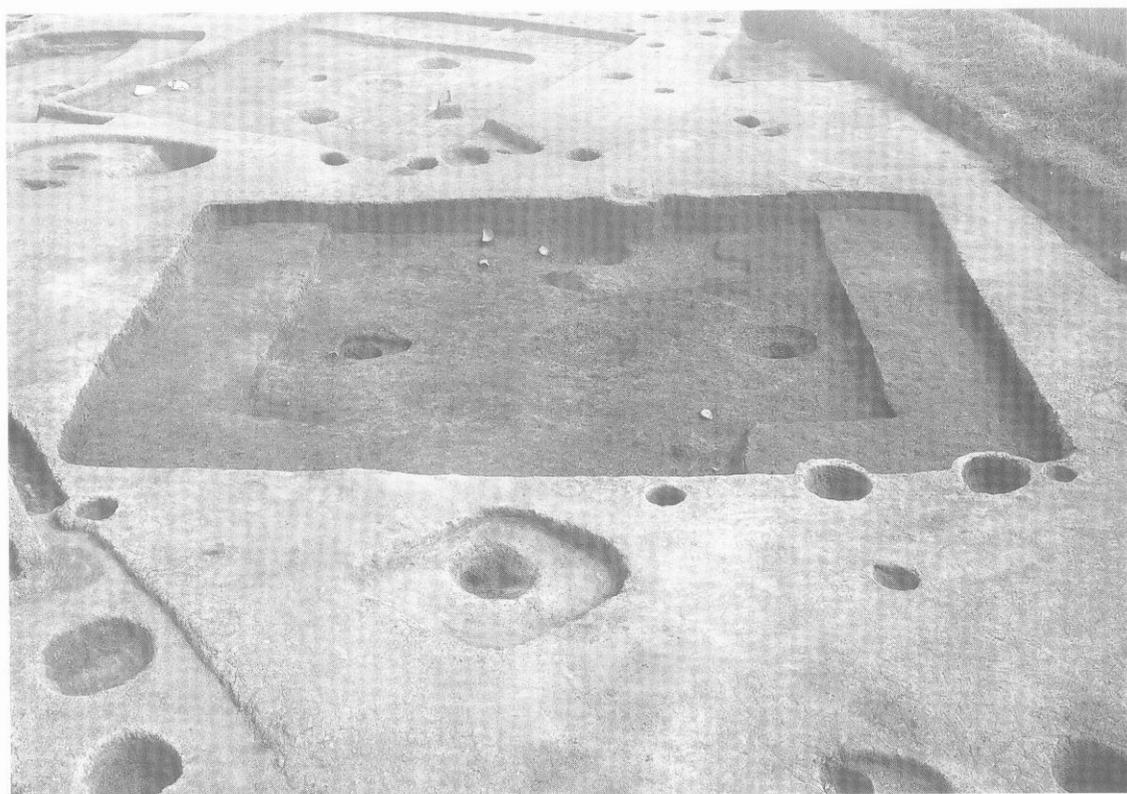
(2) 51号竪穴住居跡（北東から）



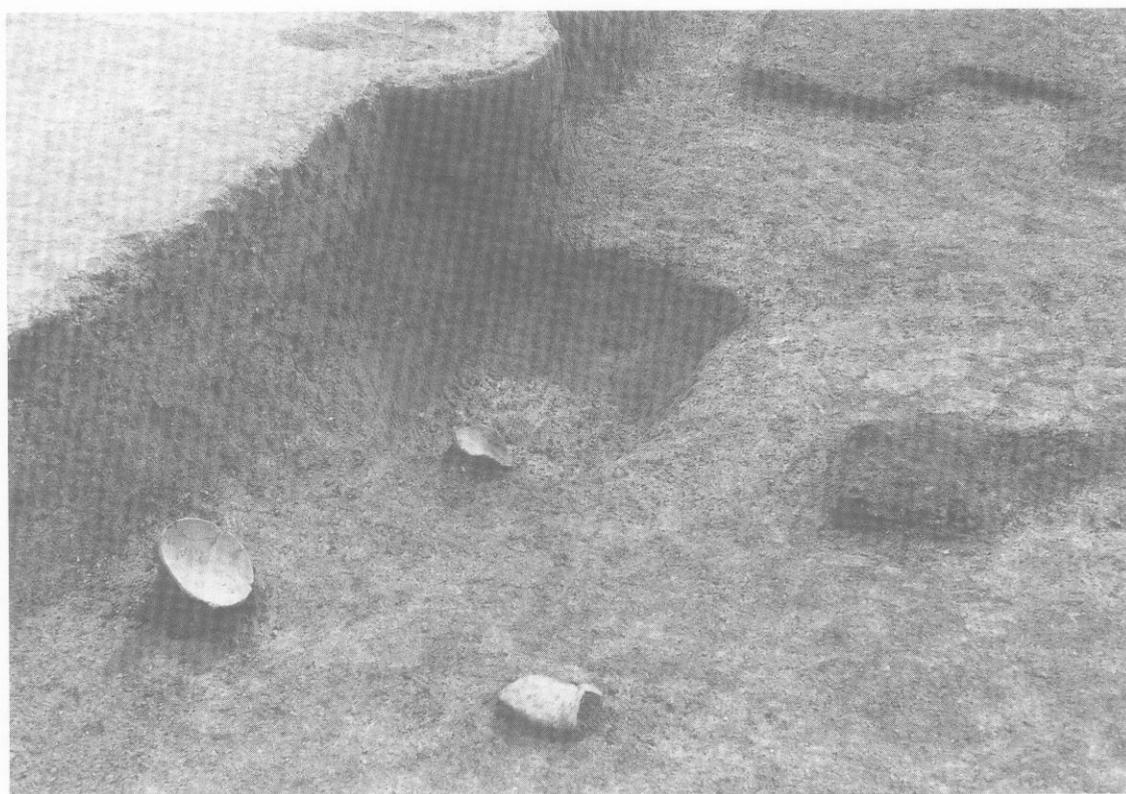
(1) 55号竪穴住居跡（北西から）



(2) 56号竪穴住居跡（南東から）



(1) 57号竪穴住居跡（北から）



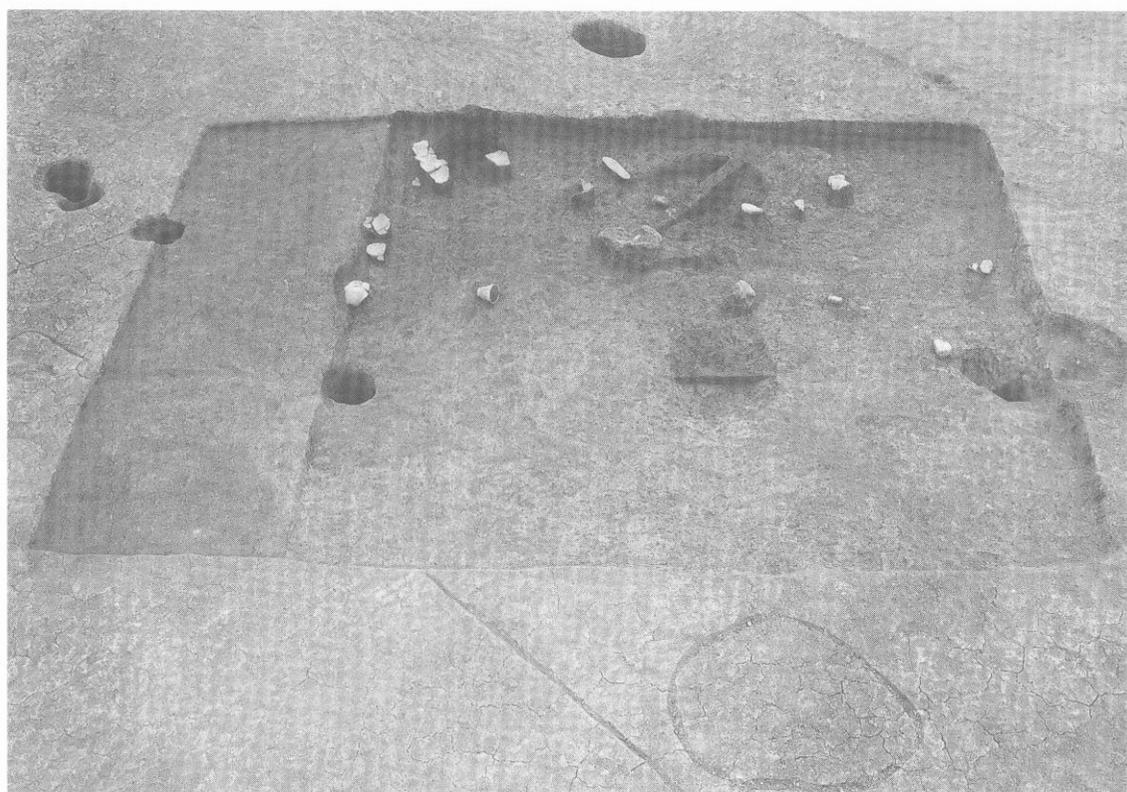
(2) 57号竪穴住居跡屋内土壌（北東から）



(1) 59号竪穴住居跡（北東から）



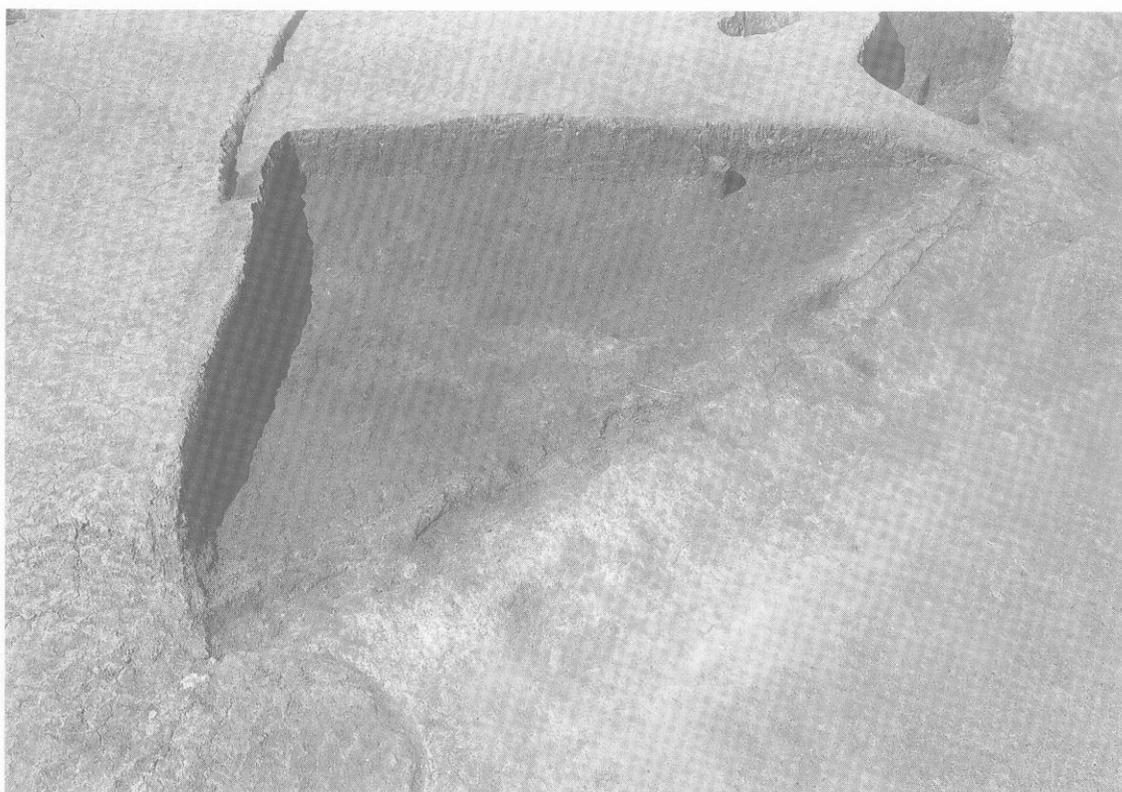
(2) 59号竪穴住居跡屋内土壙（東から）



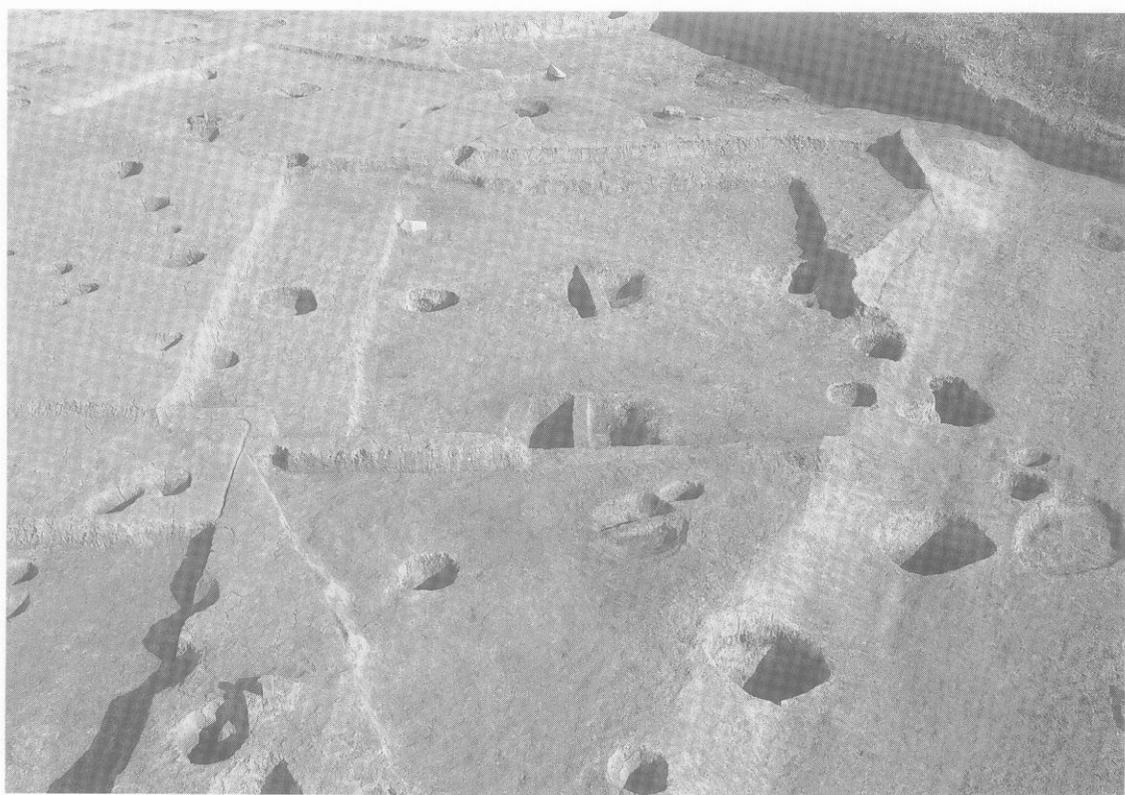
(1) 61号竖穴住居跡（北東から）



(2) 61号竖穴住居跡屋内土壌（北西から）



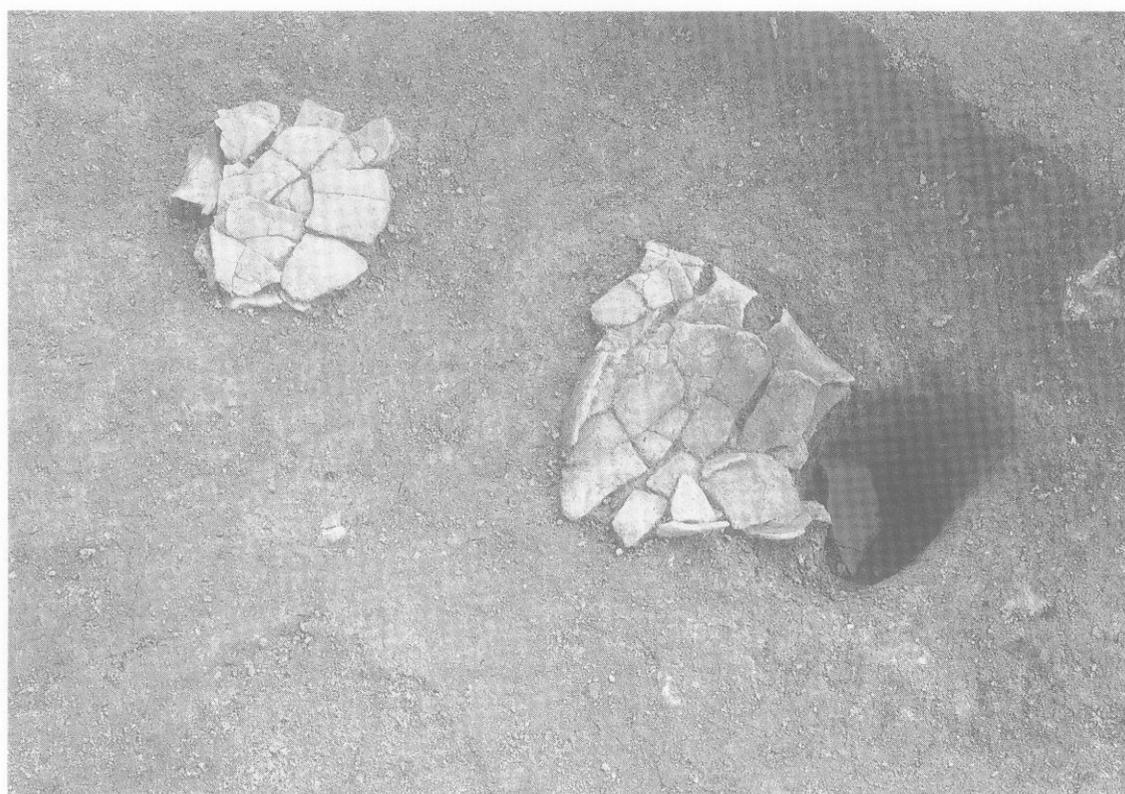
(1) 62号竖穴住居跡（南から）



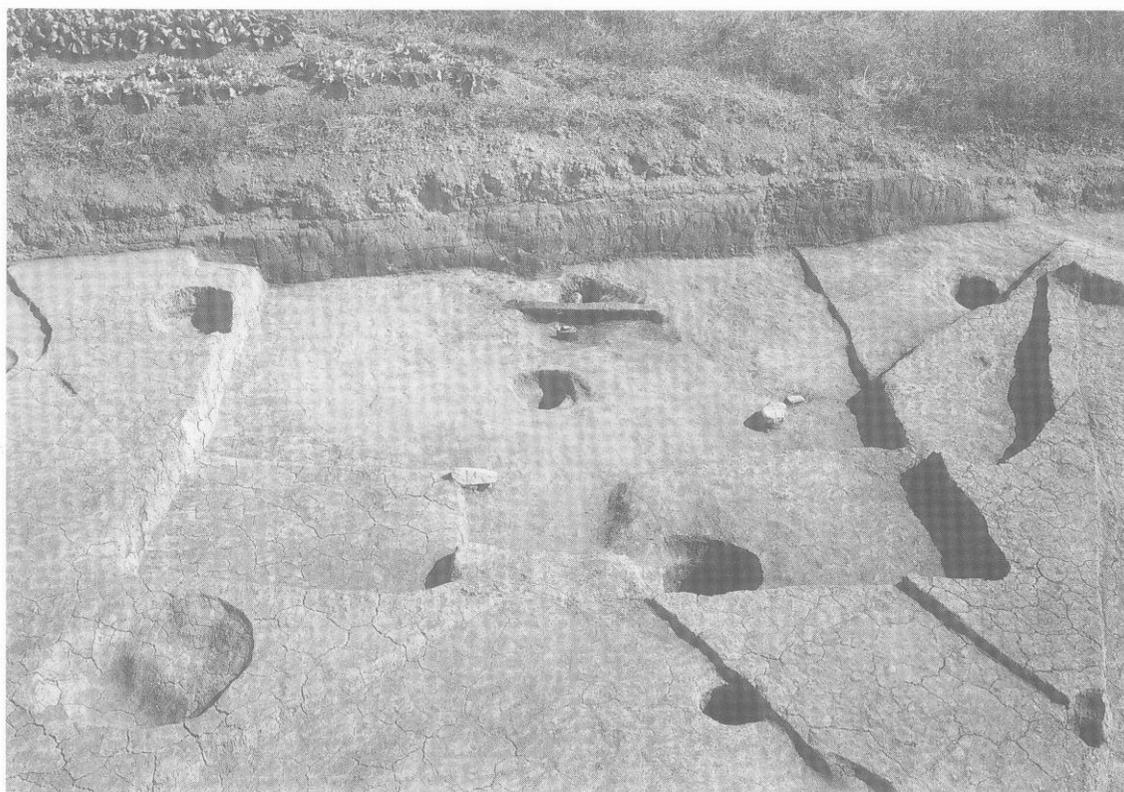
(2) 63号竖穴住居跡（南西から）



(1) 64号竪穴住居跡（北西から）



(2) 64号竪穴住居跡遺物出土状態（北東から）



(1) 65号竪穴住居跡（西から）



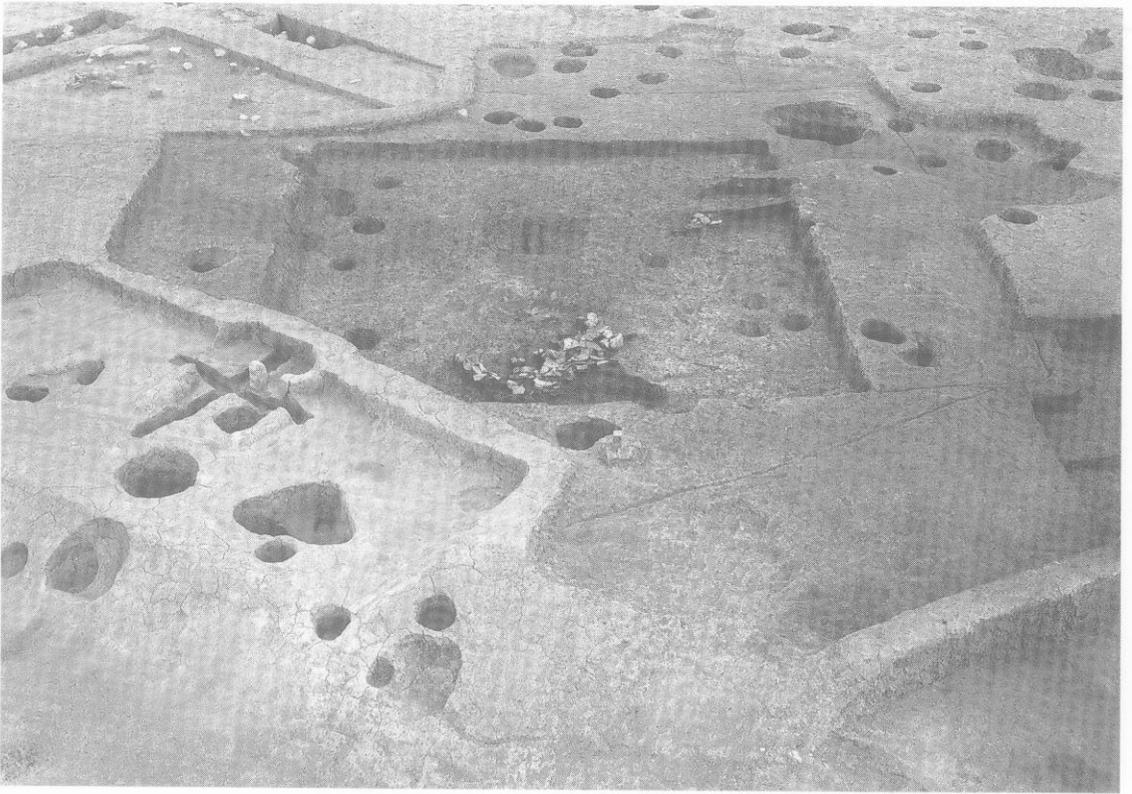
(2) 65号竪穴住居跡階段（南東から）



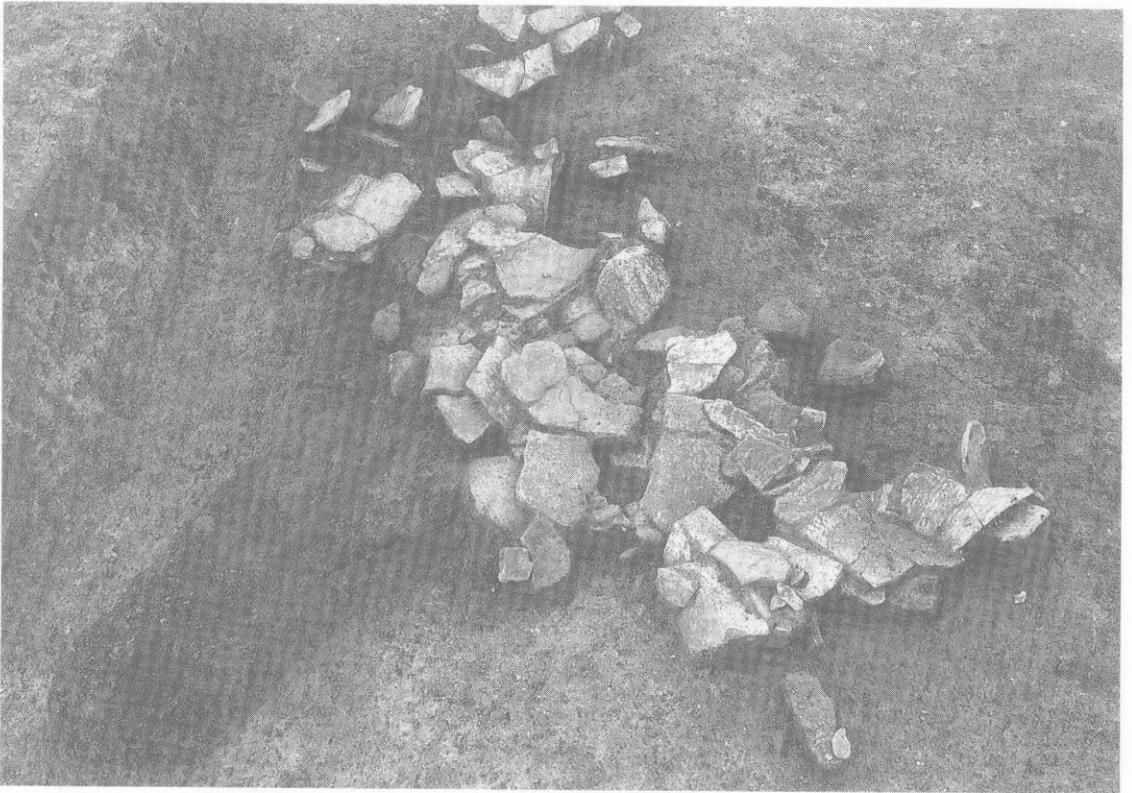
(1) 66号竖穴住居跡上層（東から）



(2) 66号竖穴住居跡上層遺物出土状態.1（南東から）



(1) 66号竪穴住居跡完掘状態（東から）



(2) 66号竪穴住居跡上層遺物出土状態.2（南から）



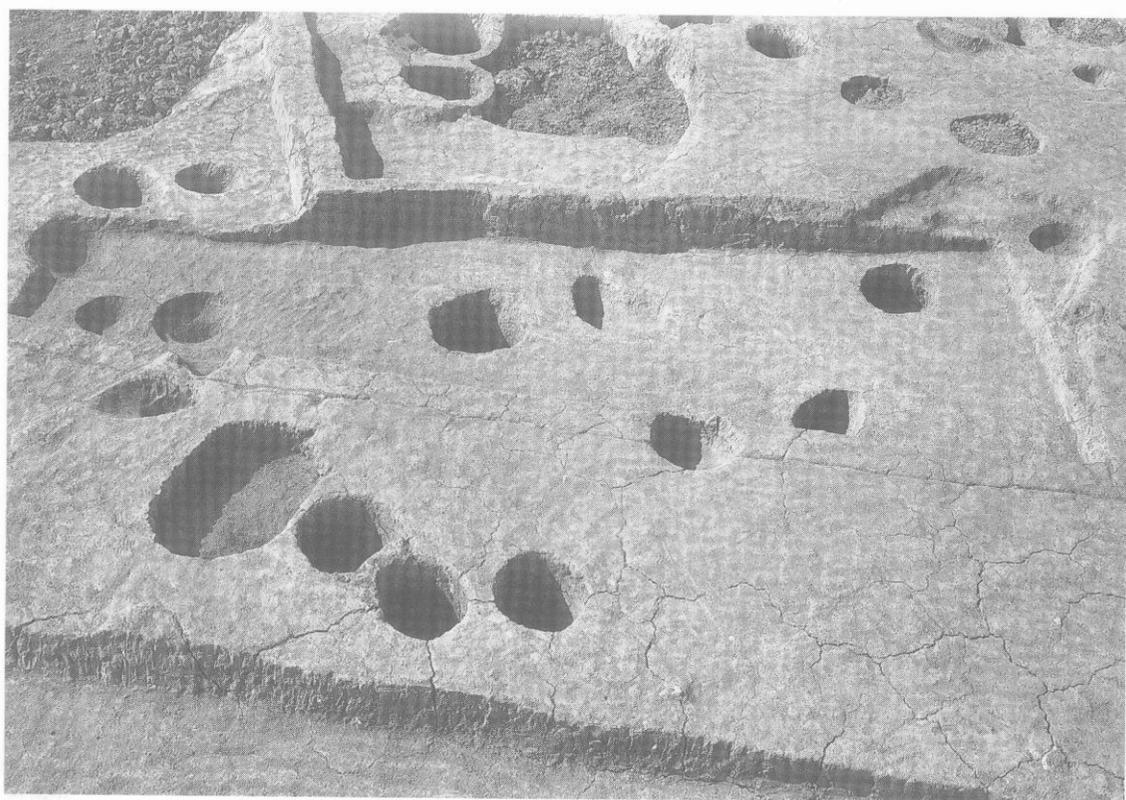
(1) 66号竪穴住居跡焼成部近景（南東から）



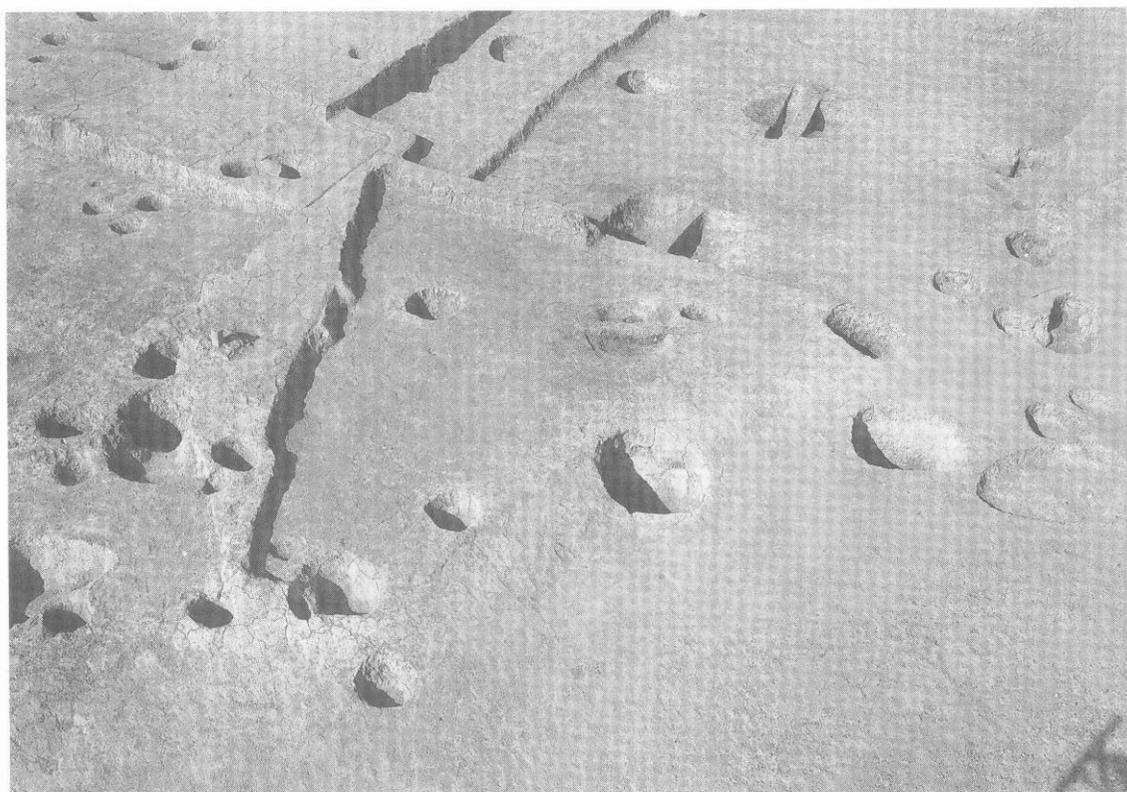
(2) 66号竪穴住居跡素頭環太刀出土状態（西から）



(1) 66・68号竪穴住居跡（西から）



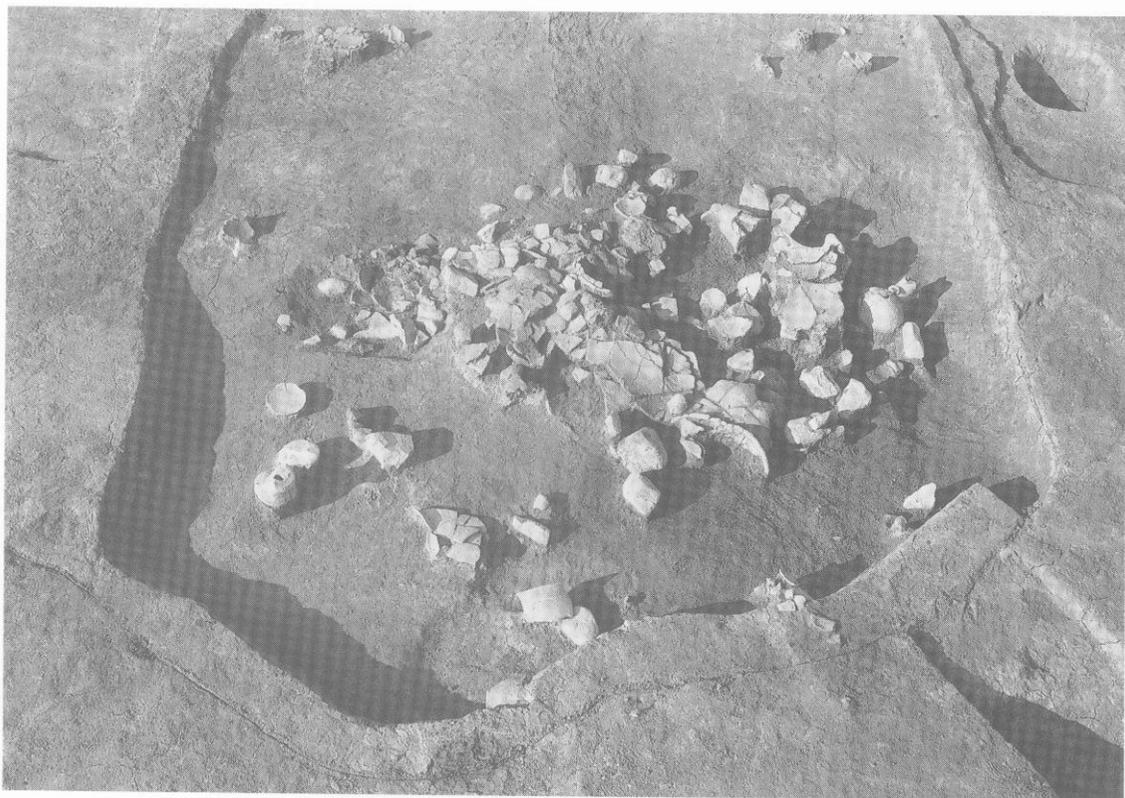
(2) 68号竪穴住居跡（東から）



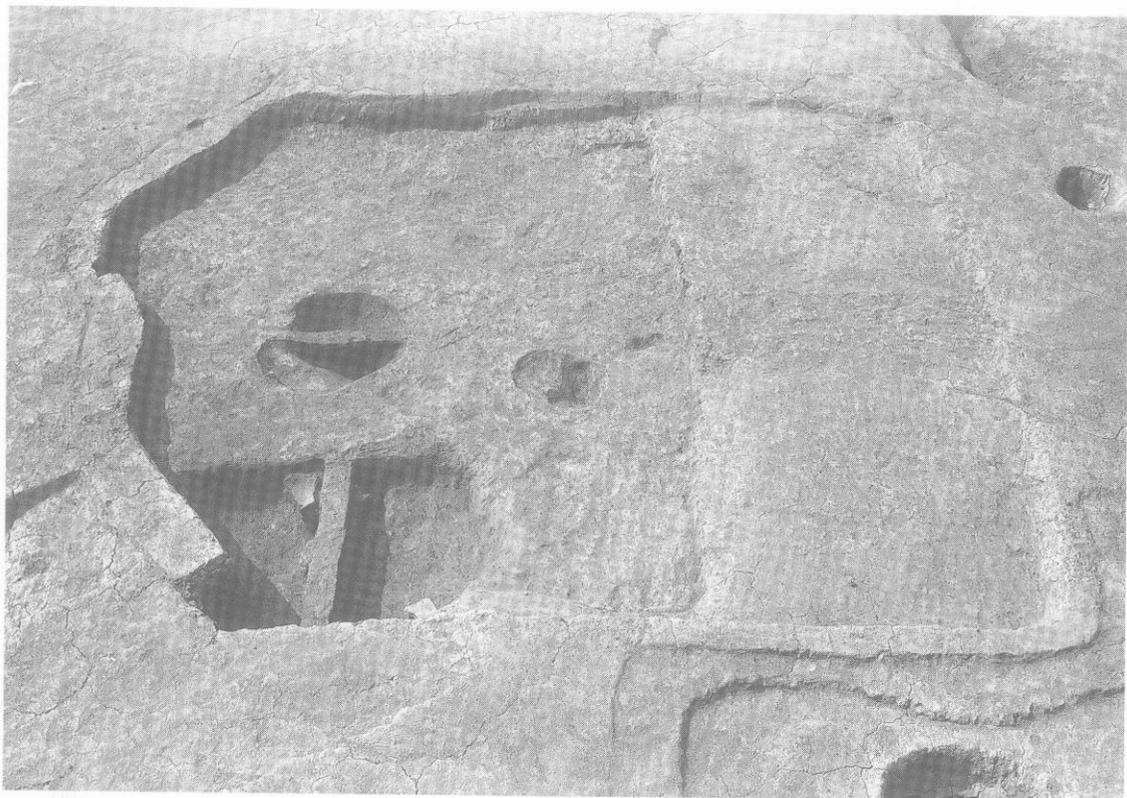
(1) 67号竖穴住居跡（南西から）



(2) 70号竖穴住居跡（北東から）



(1) 69号竖穴住居跡遺物出土状態（南から）



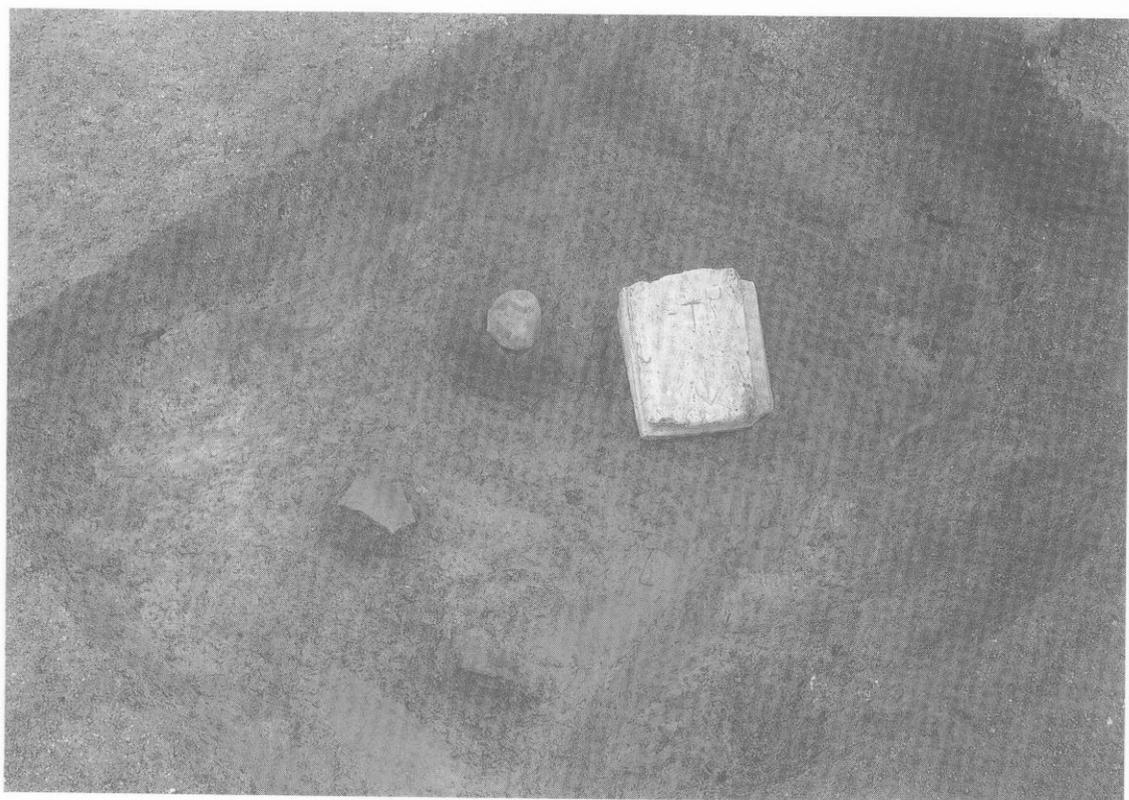
(2) 69号竖穴住居跡完掘状態（東から）



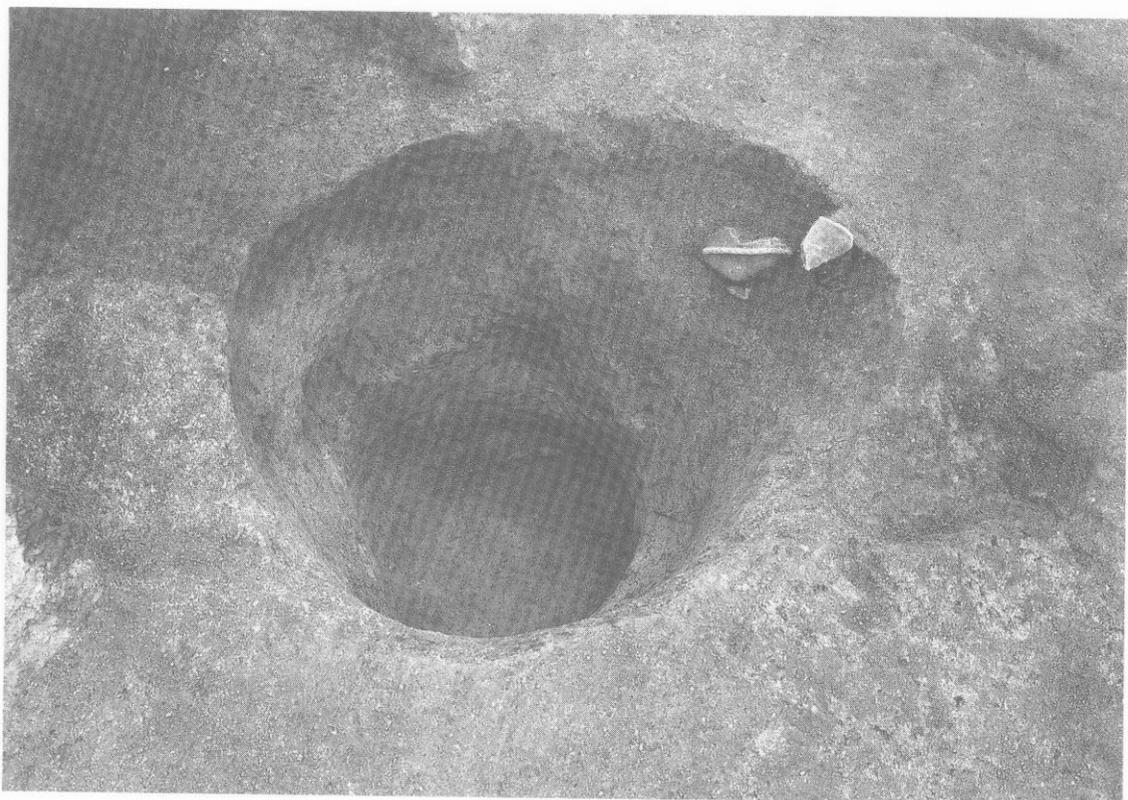
(1) 10号土壙.1 (北から)



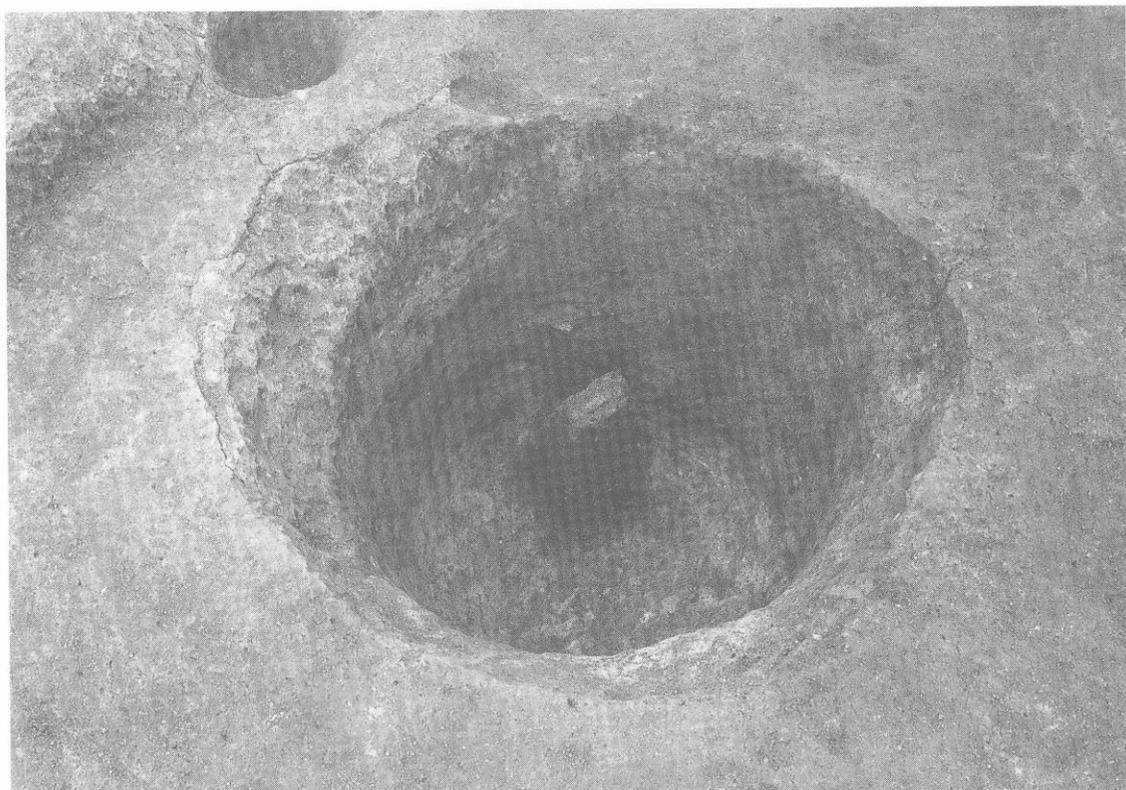
(2) 10号土壙.2 (南東から)



(1) 10号土壇.3 (北に西から)



(2) 13号土壇 (北西から)



(1) 14号土壇（西から）



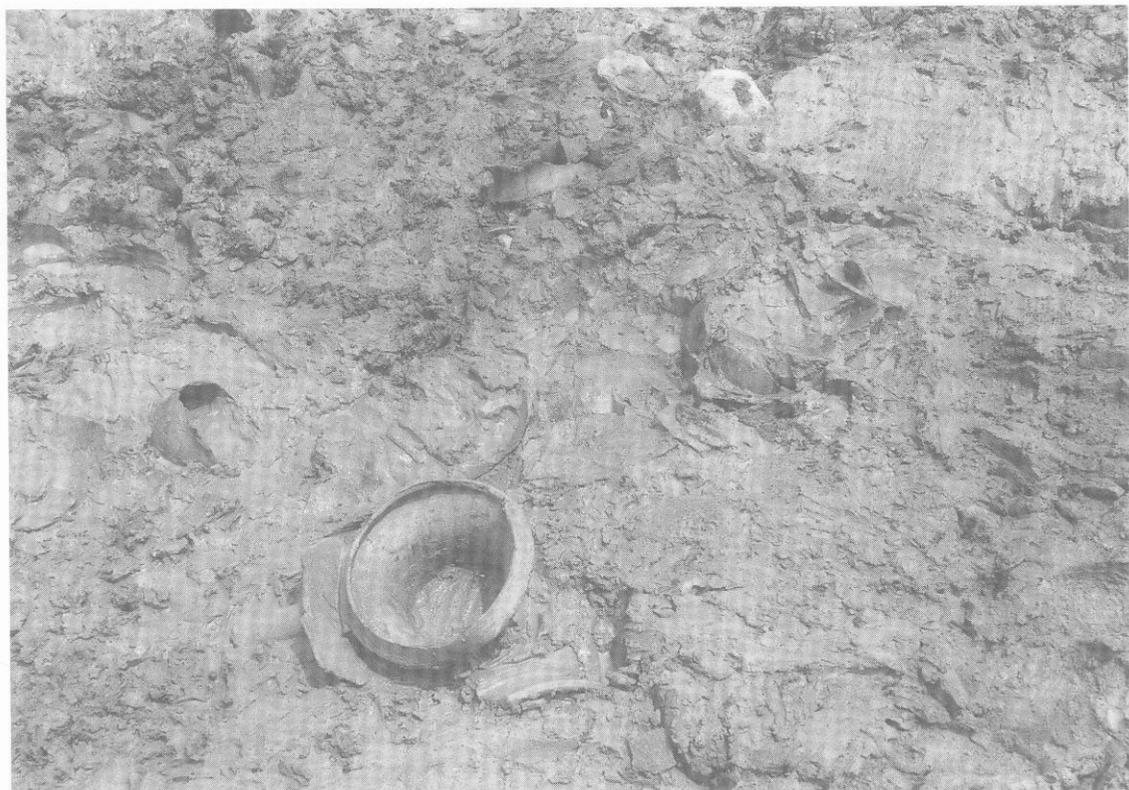
(2) 15号土壇（北西から）



(1) 谷地区 (北から)



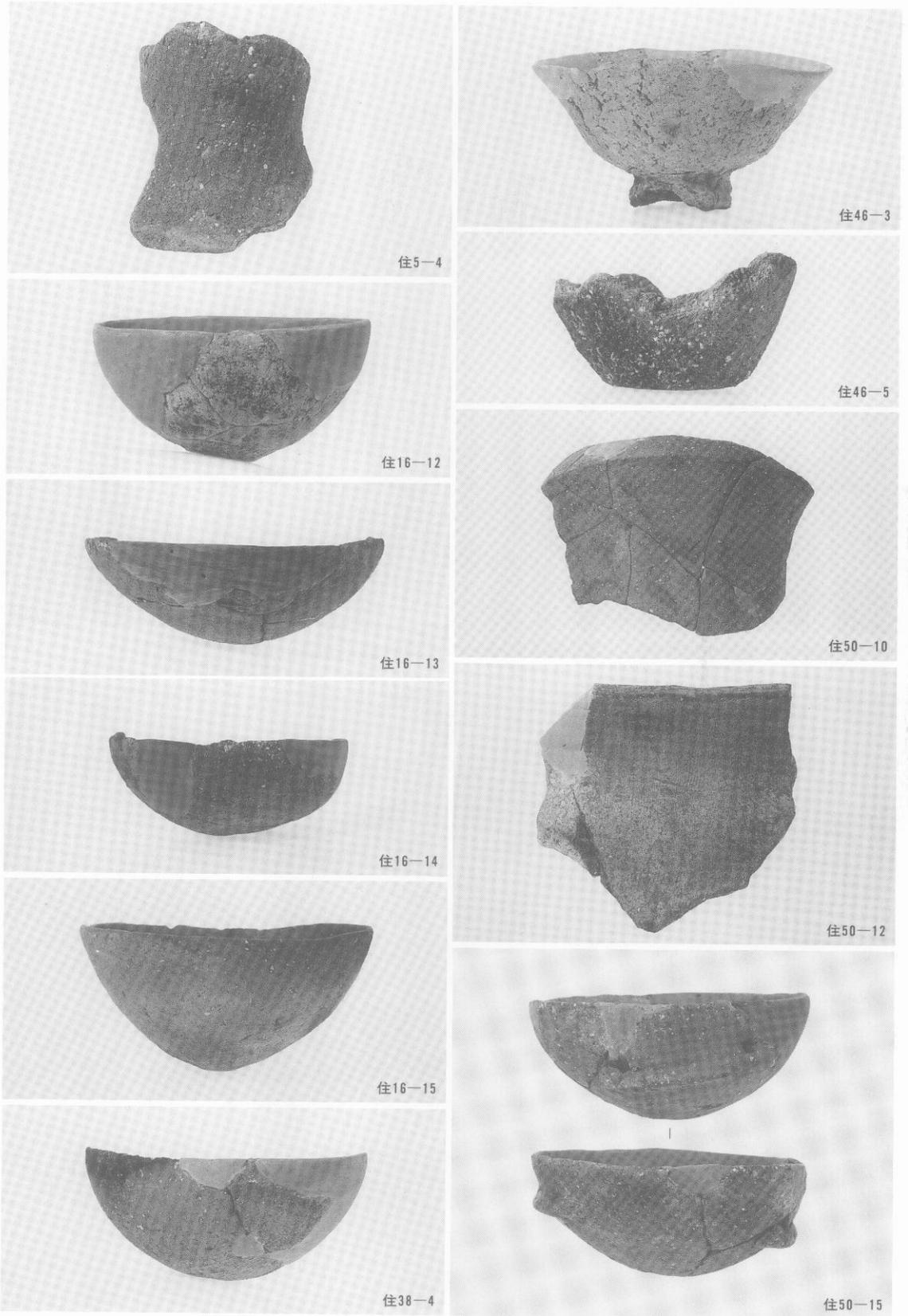
(2) 谷地区 (東から)



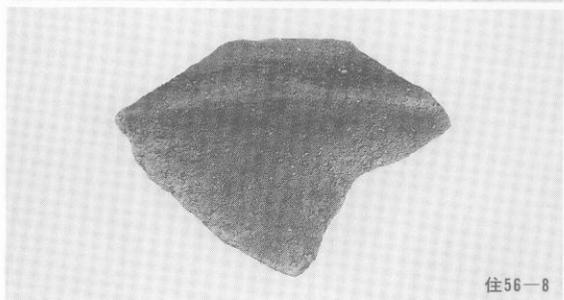
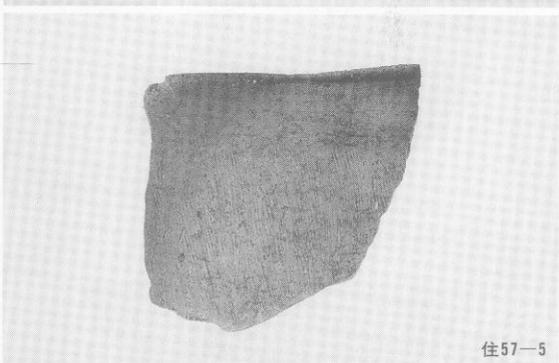
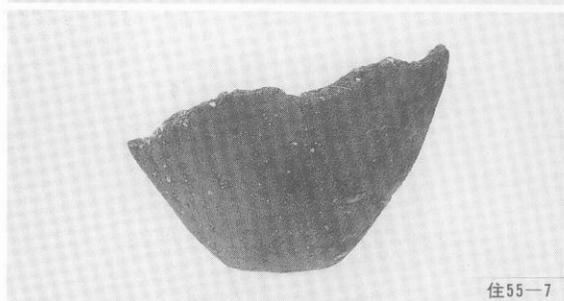
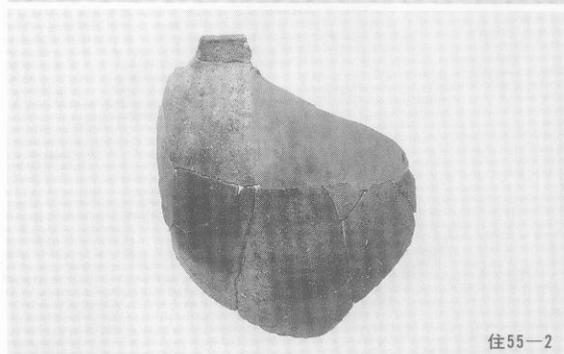
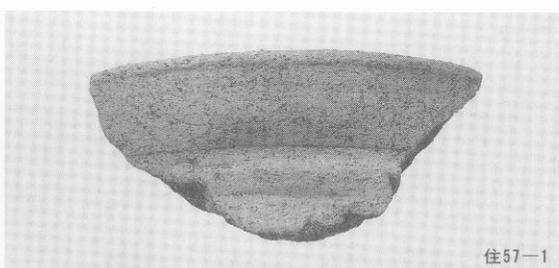
(1) 谷地区遺物出土状態.1 (北から)



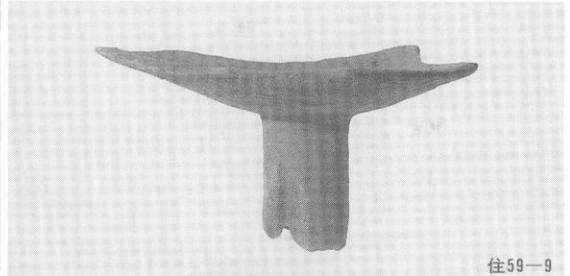
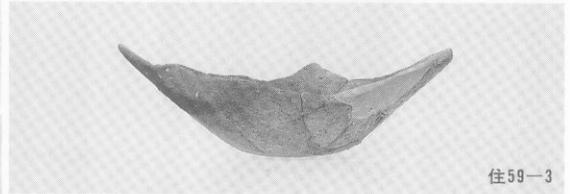
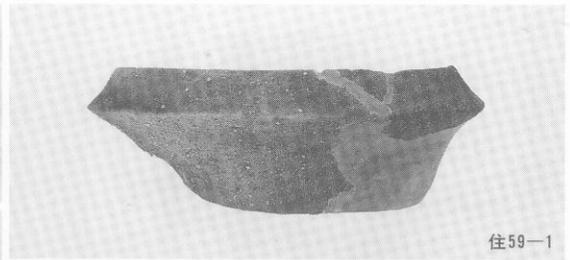
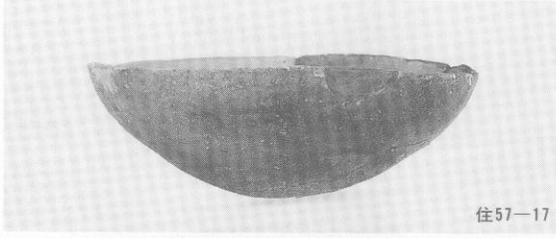
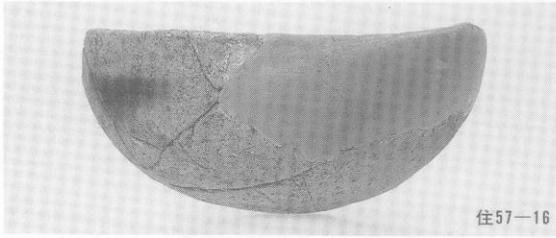
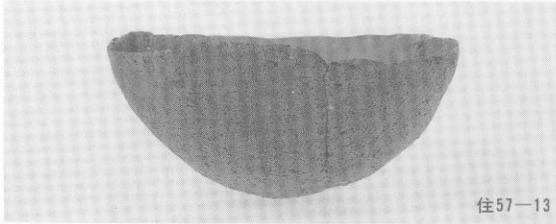
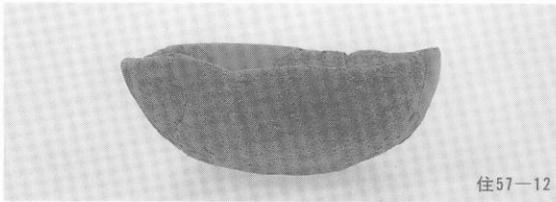
(2) 谷地区遺物出土状態.2 (東から)



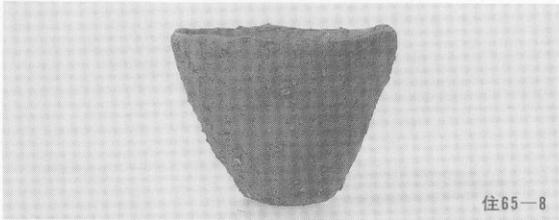
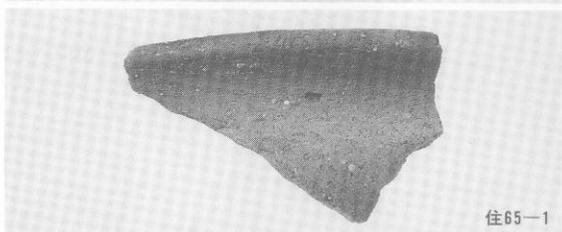
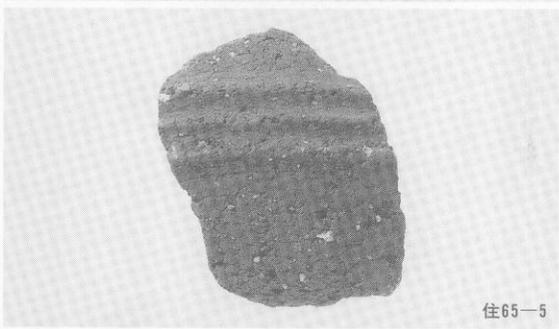
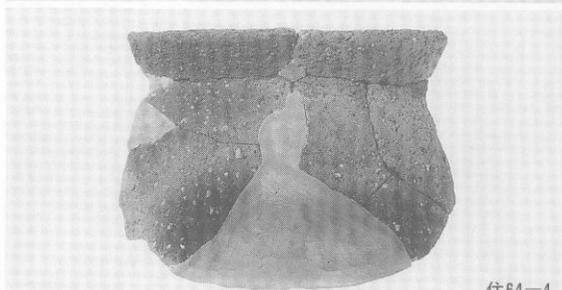
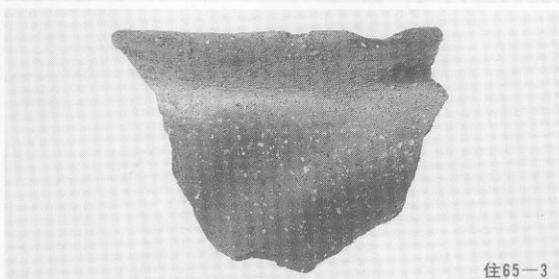
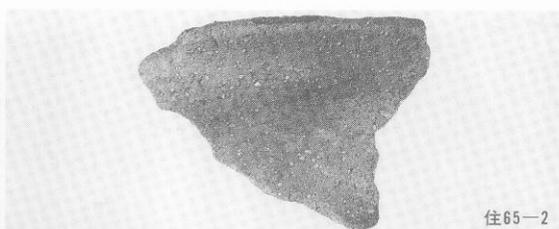
弥生时代竖穴住居跡出土土器.1



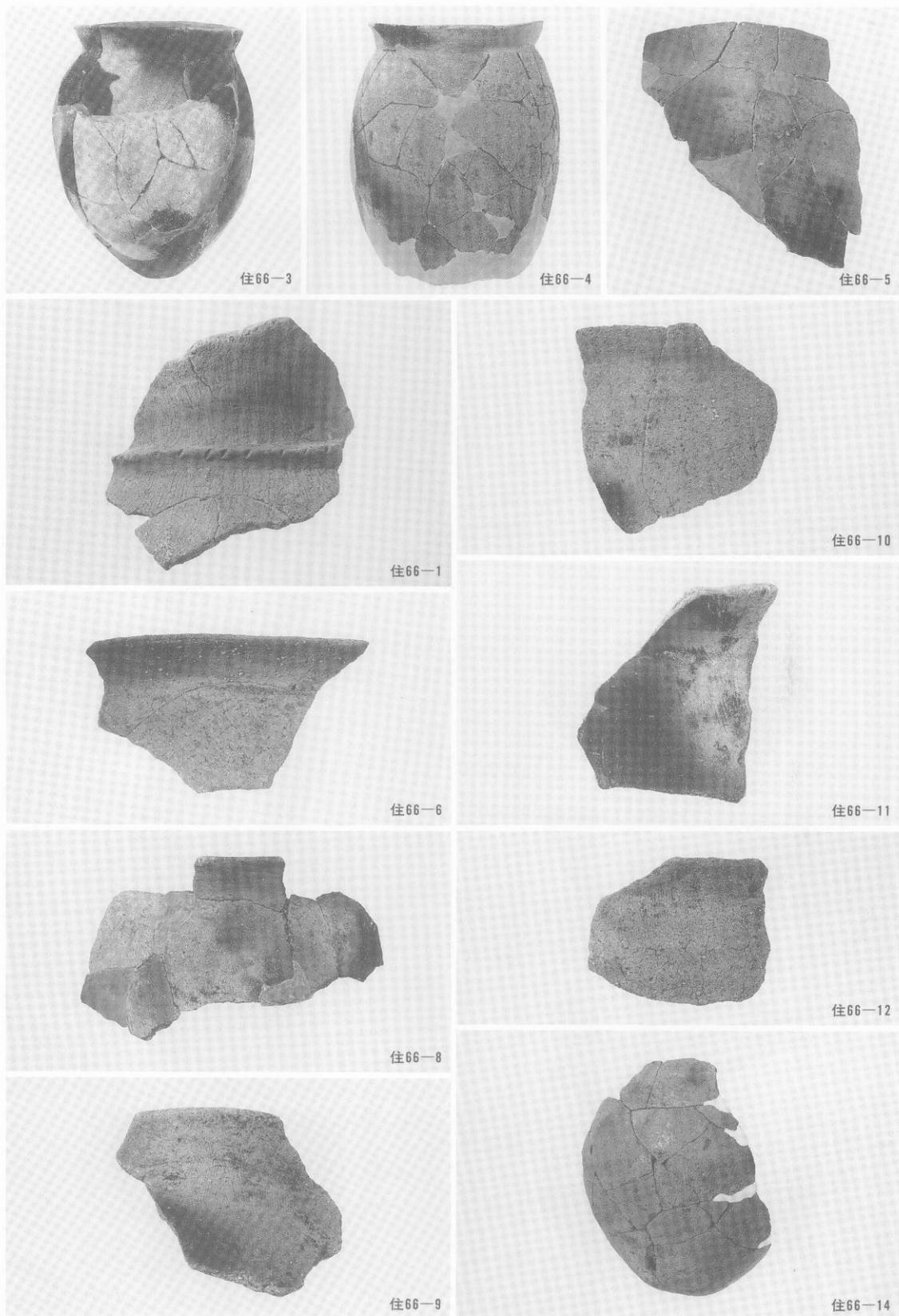
弥生時代竪穴住居跡出土土器. 2



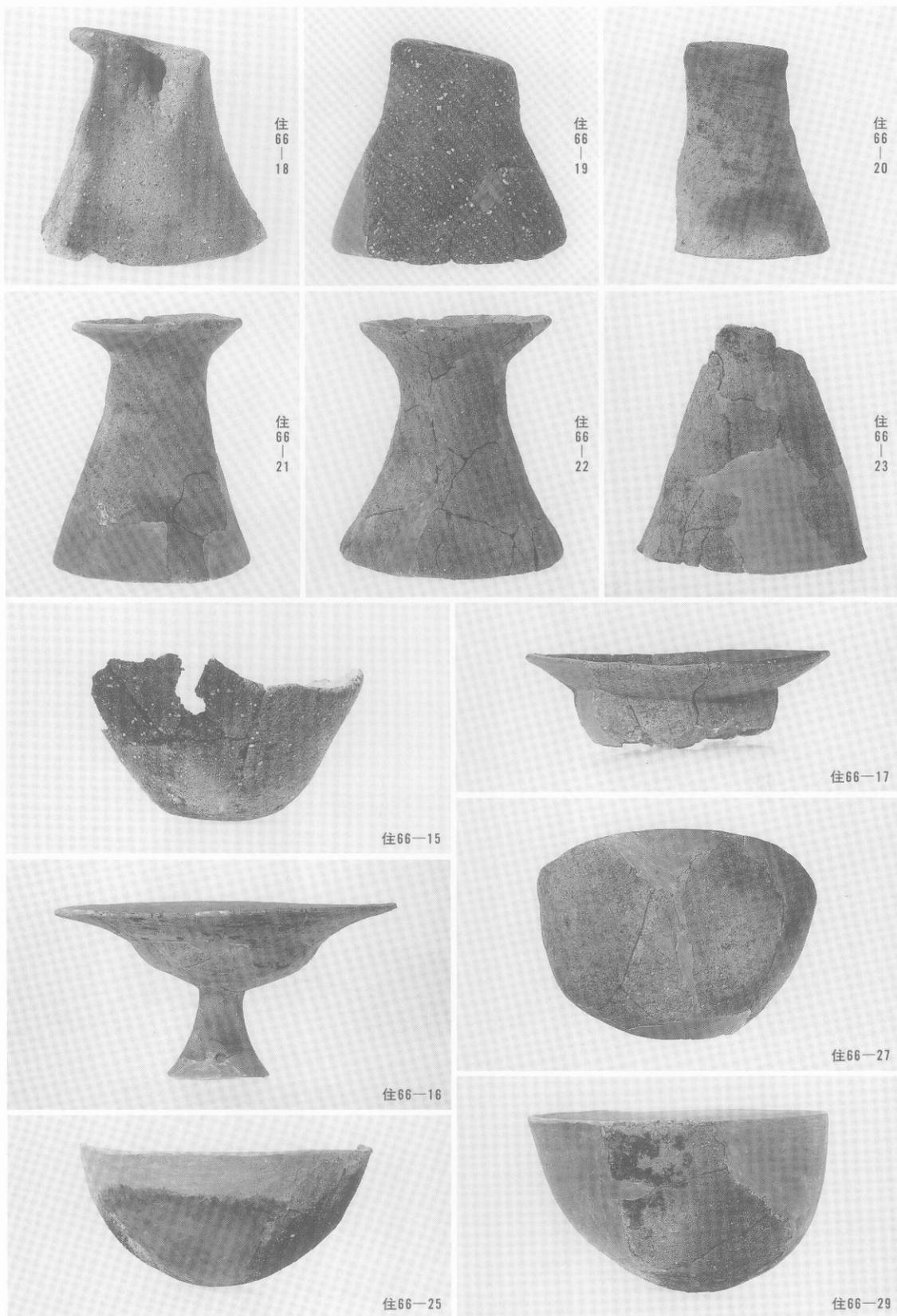
弥生时代竖穴住居跡出土土器. 3



弥生時代竪穴住居跡出土土器.4

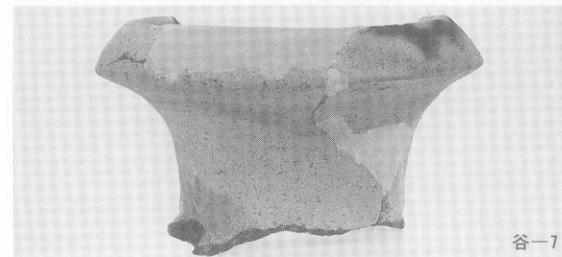
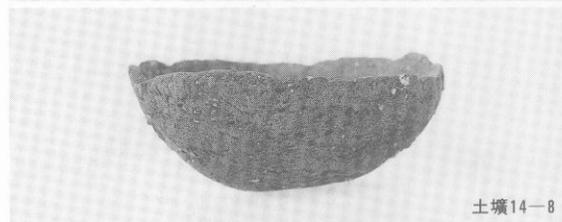
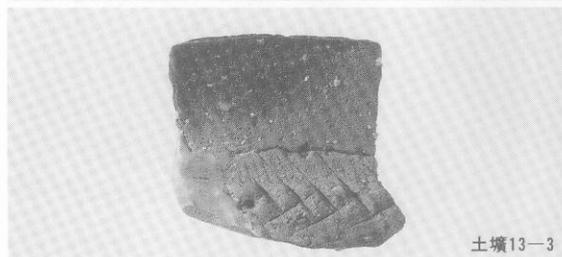


弥生時代竖穴住居跡出土土器.5

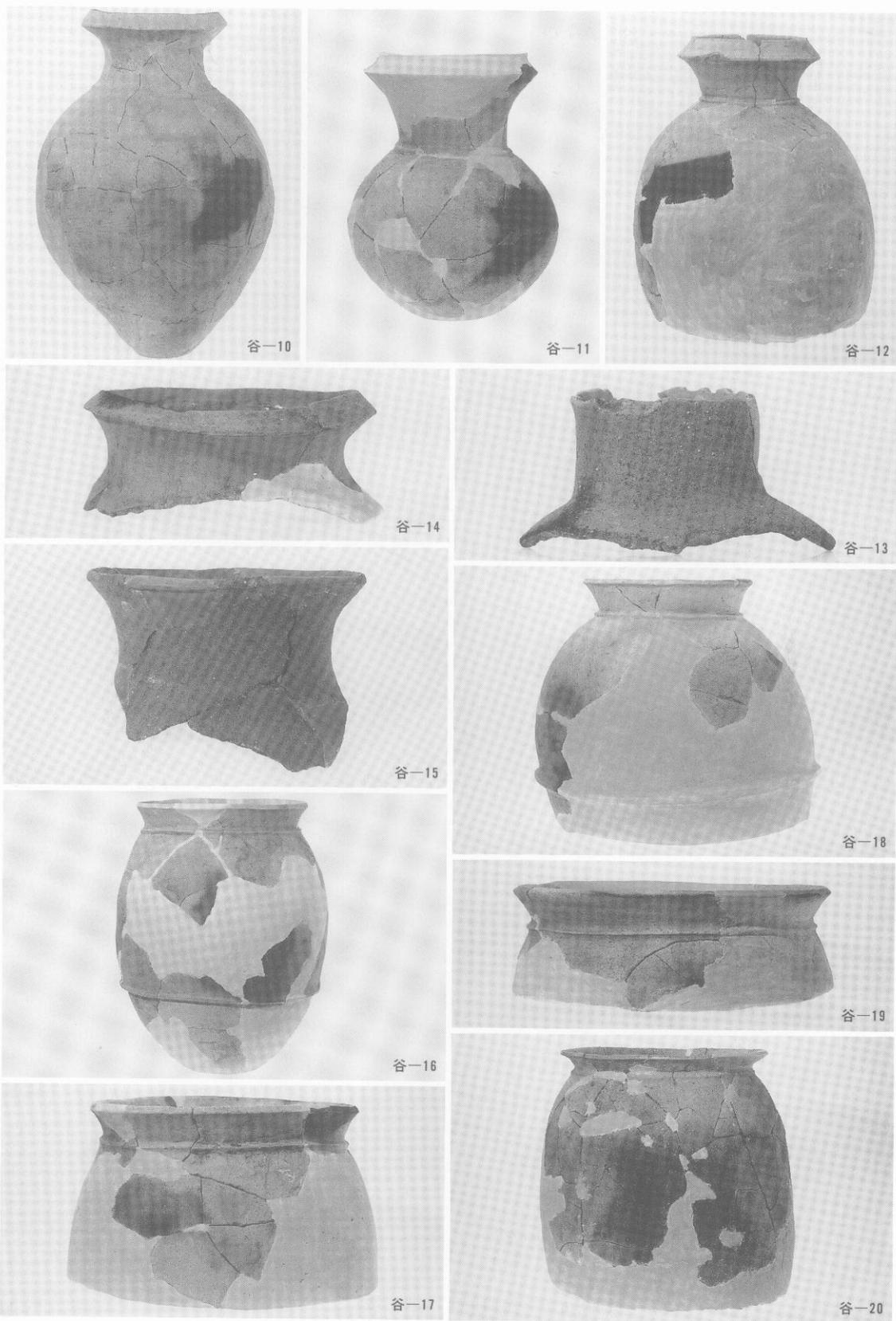


弥生時代竪穴住居跡出土土器.6

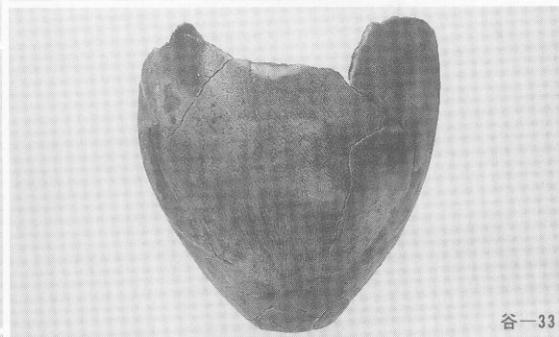
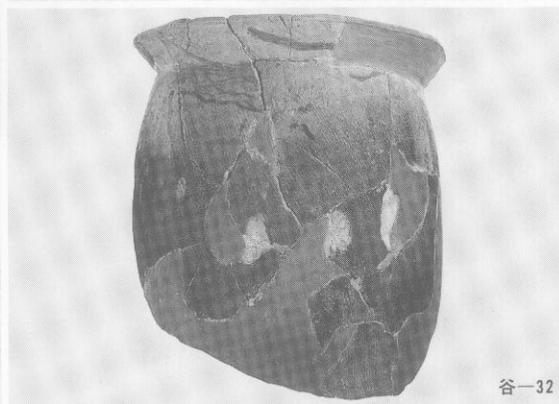
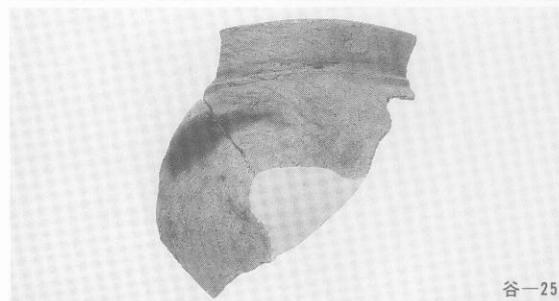
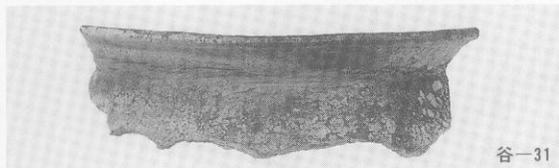
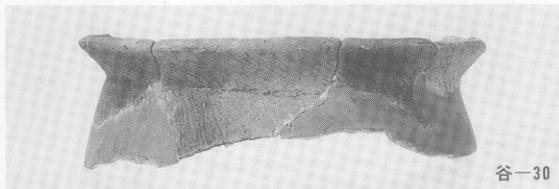
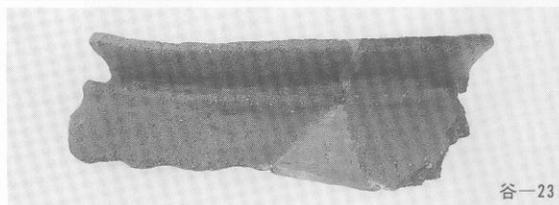
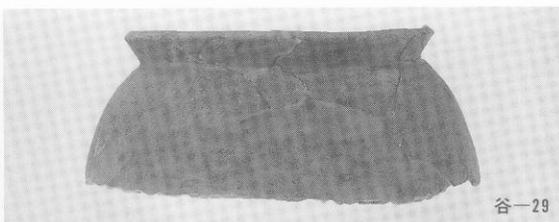




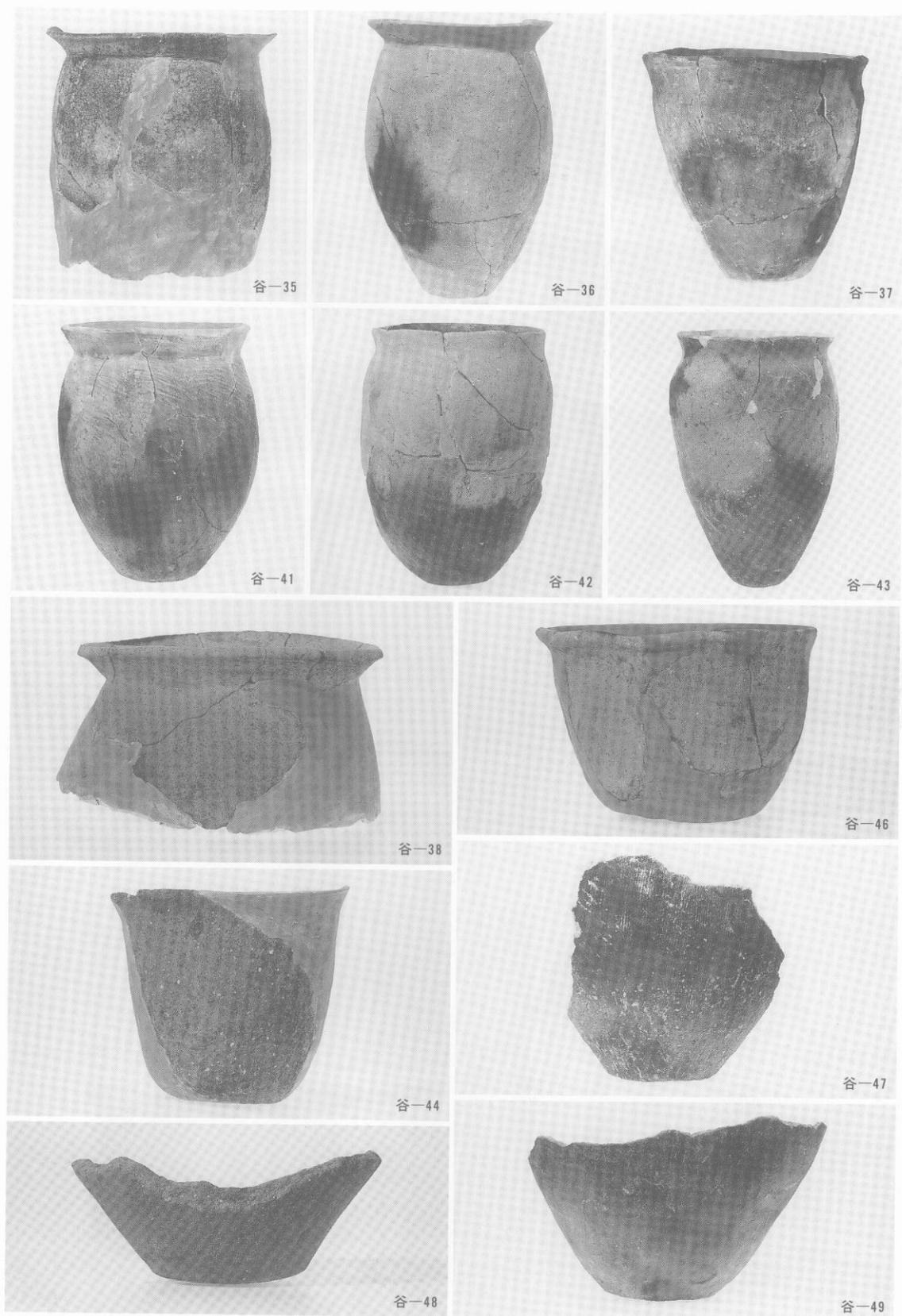
弥生時代土壙出土土器（上）および谷地区出土土器.1（下）



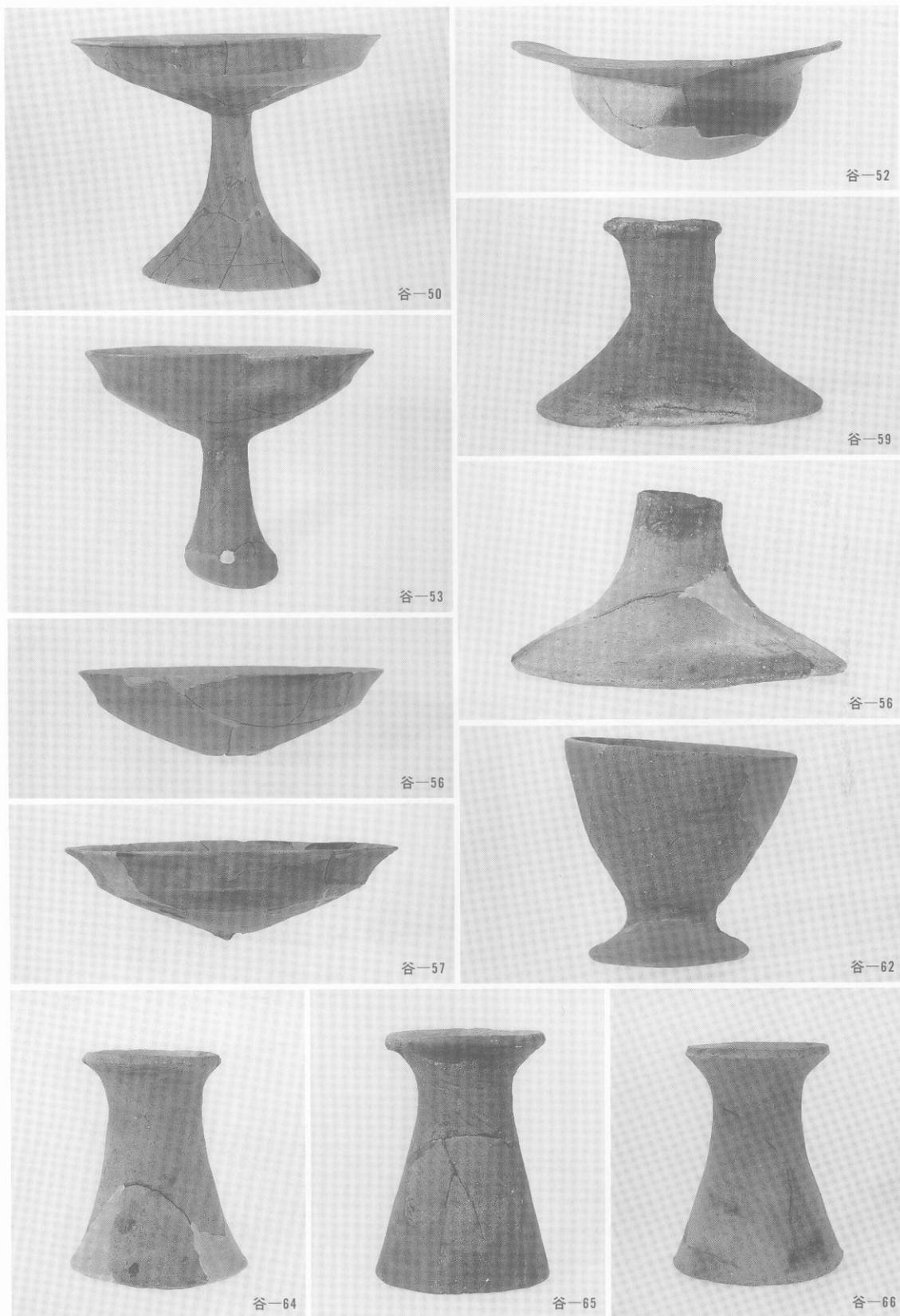
谷地区出土土器.2



谷地区出土土器.3



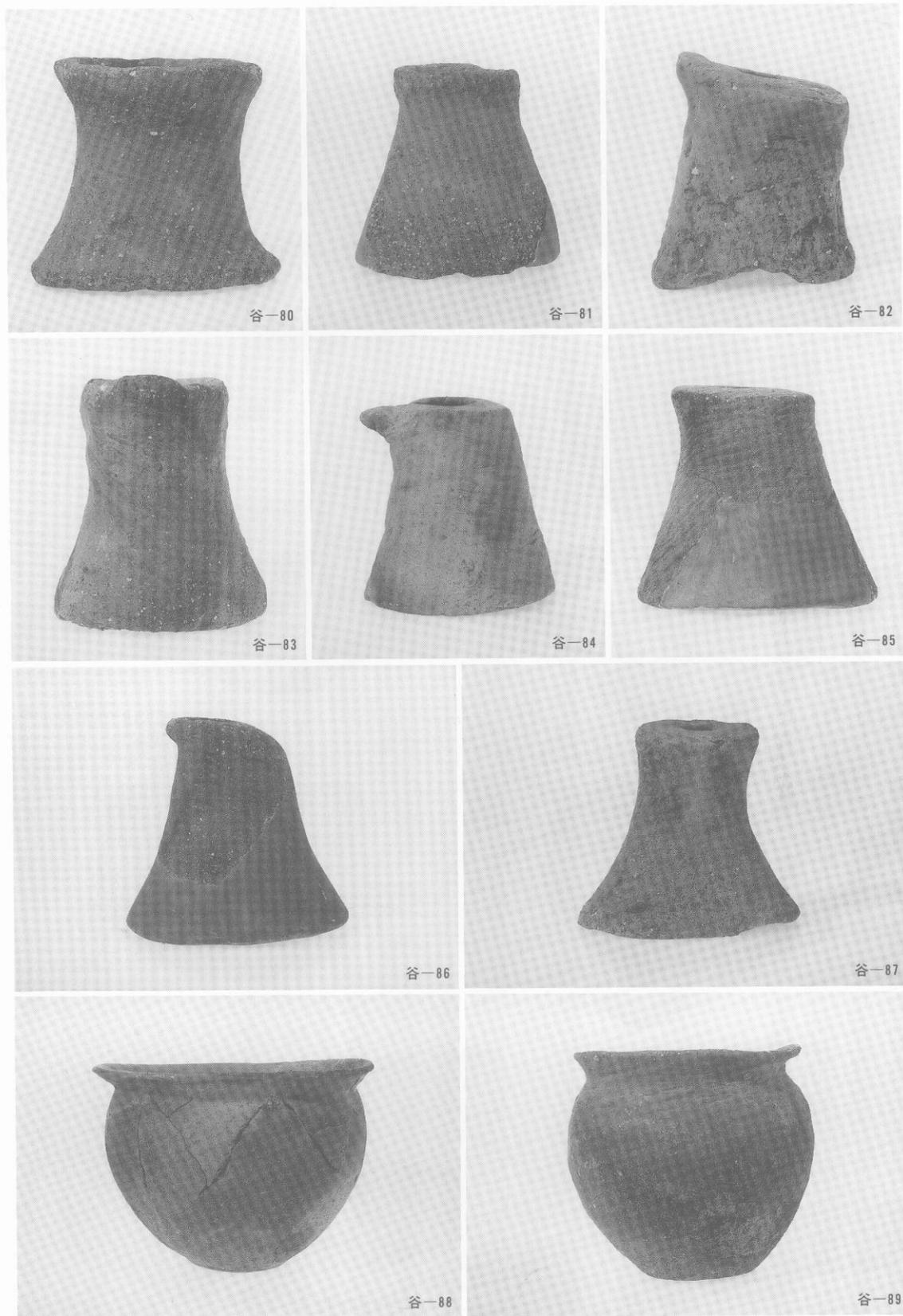
谷地区出土土器.4



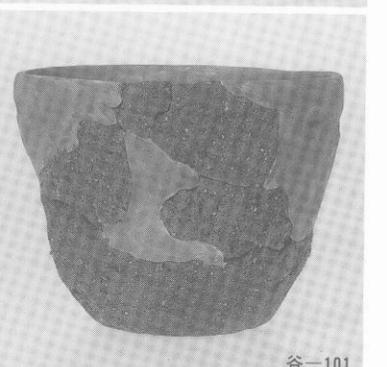
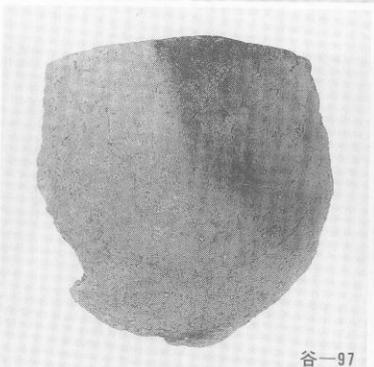
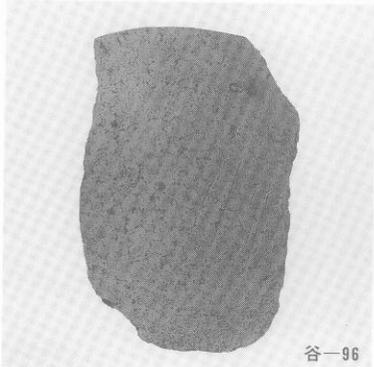
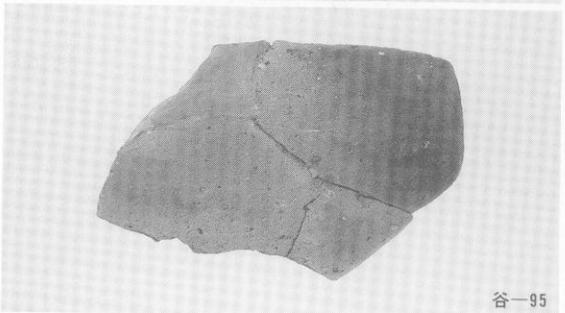
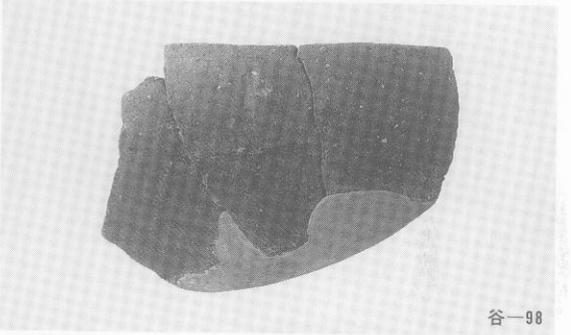
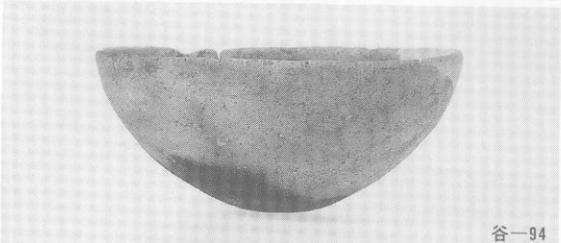
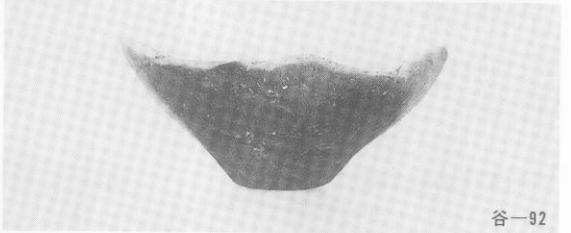
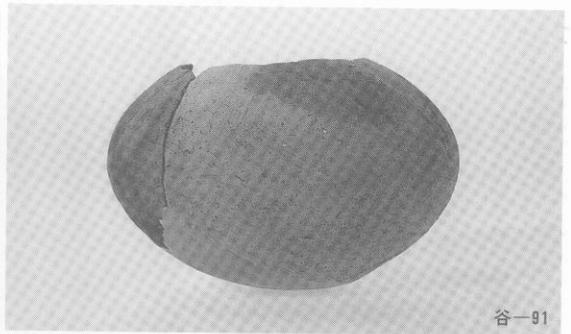
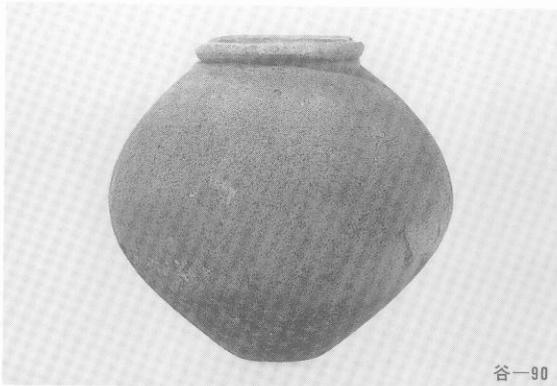
谷地区出土土器.5



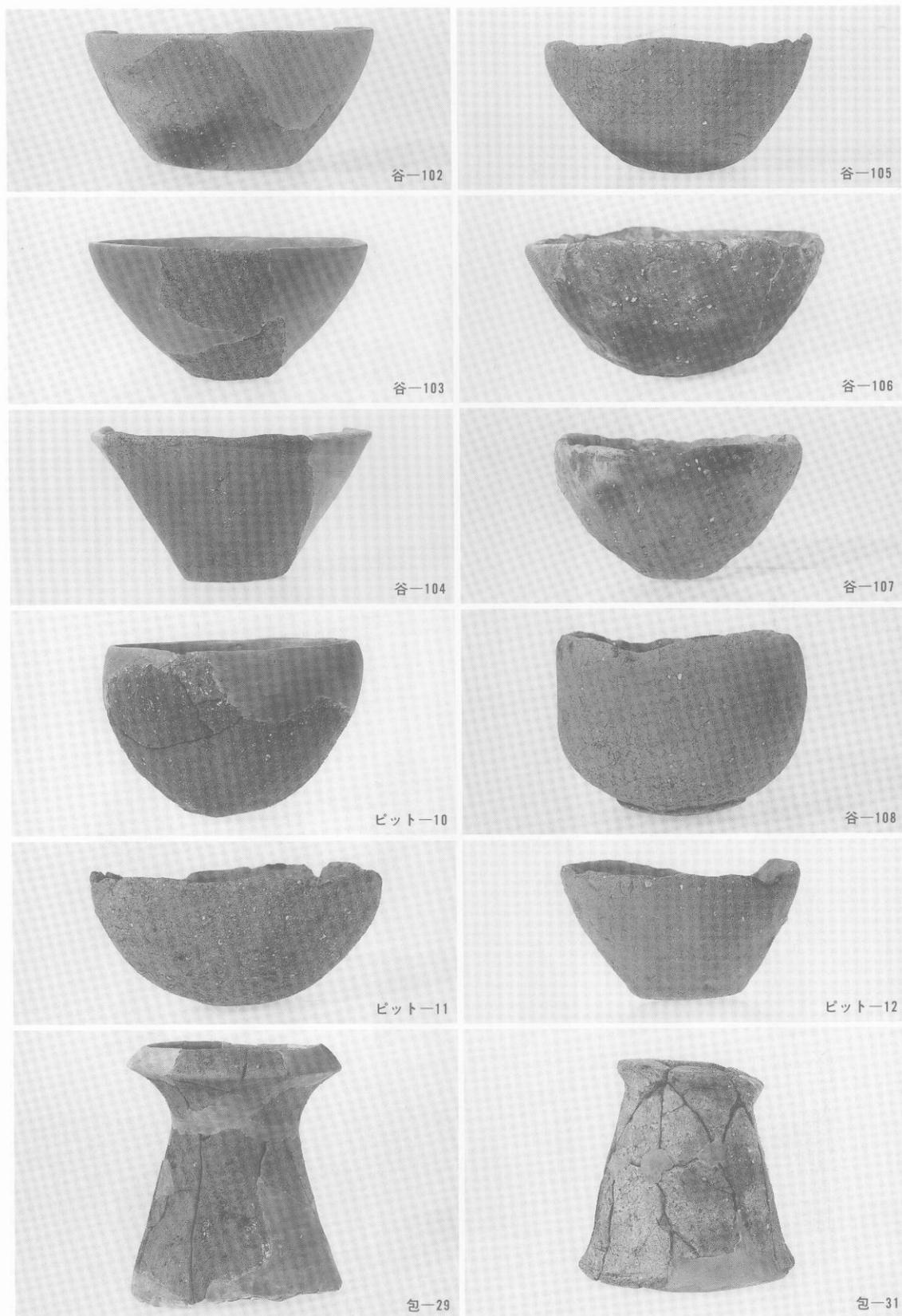
谷地区出土土器.6



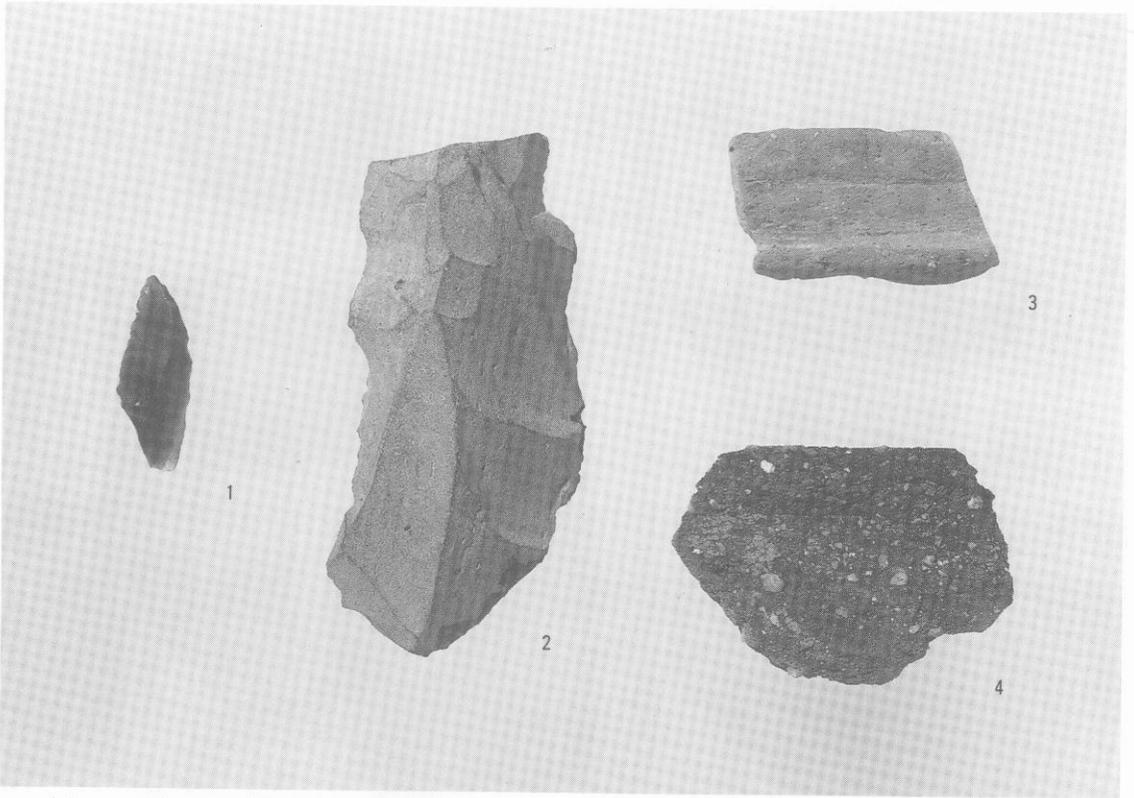
谷地区出土土器.7



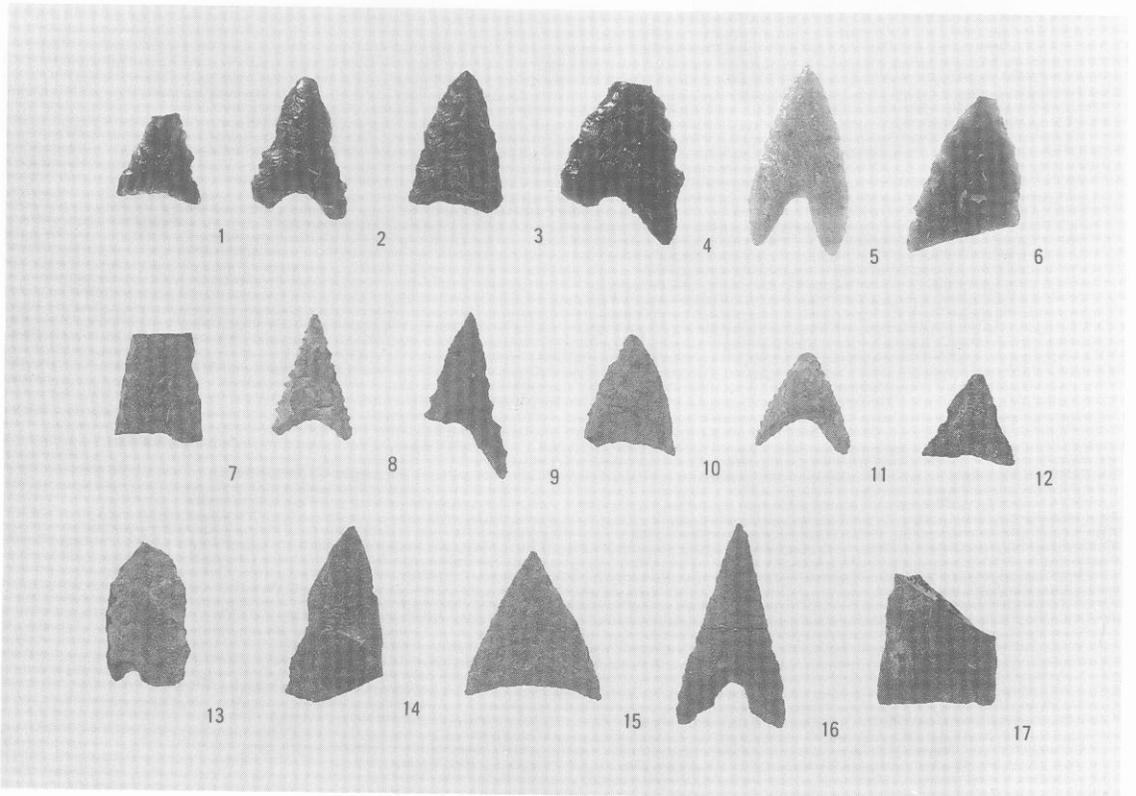
谷地区出土土器.8



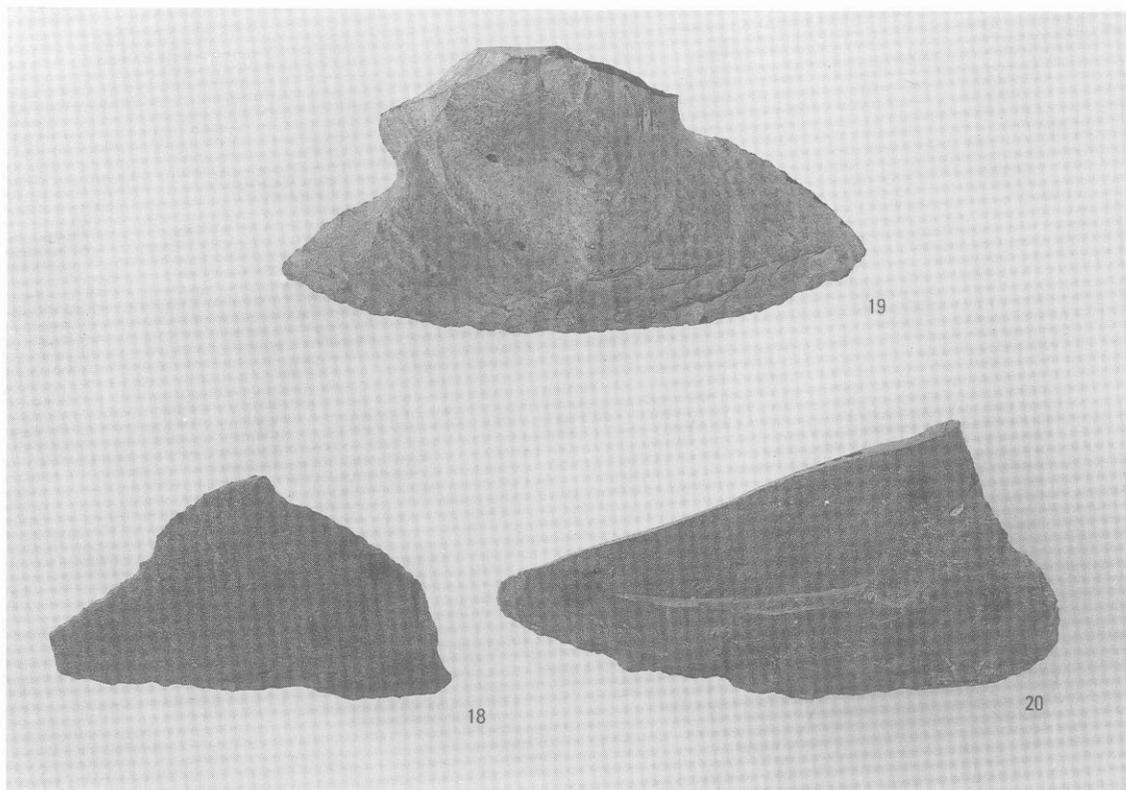
谷地区出土土器.9およびその他の弥生土器



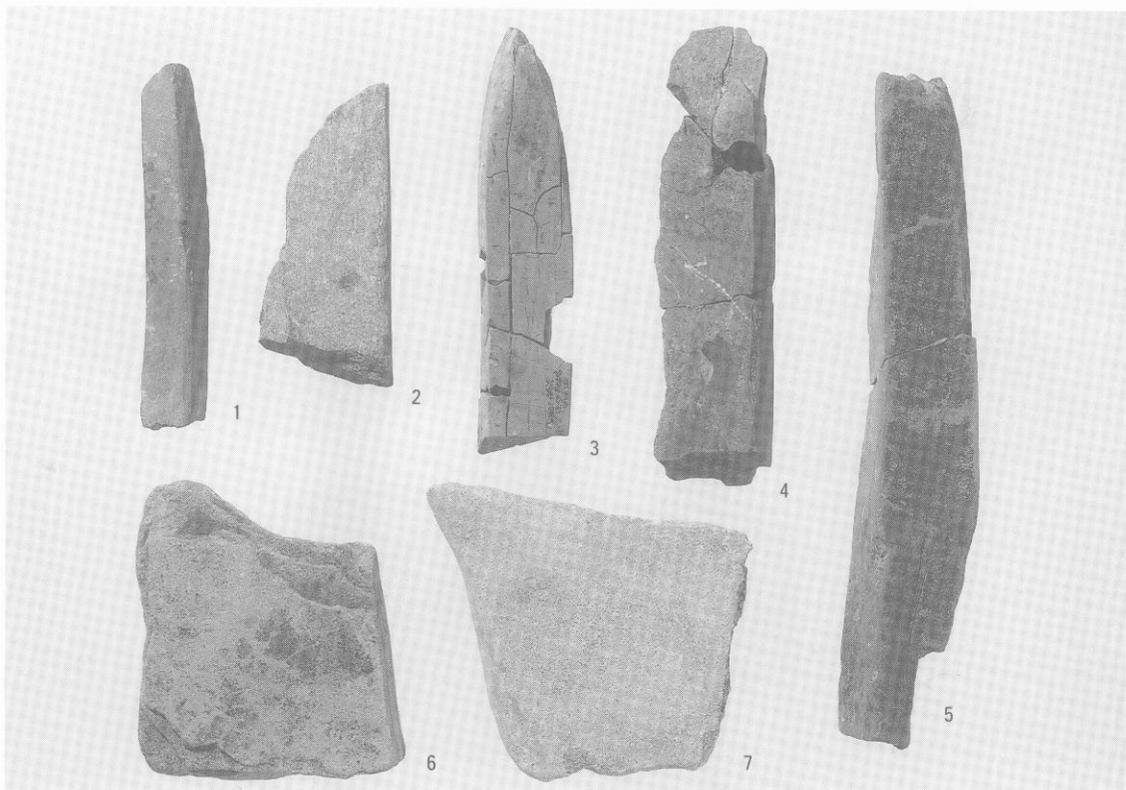
(1) 旧石器および縄文土器



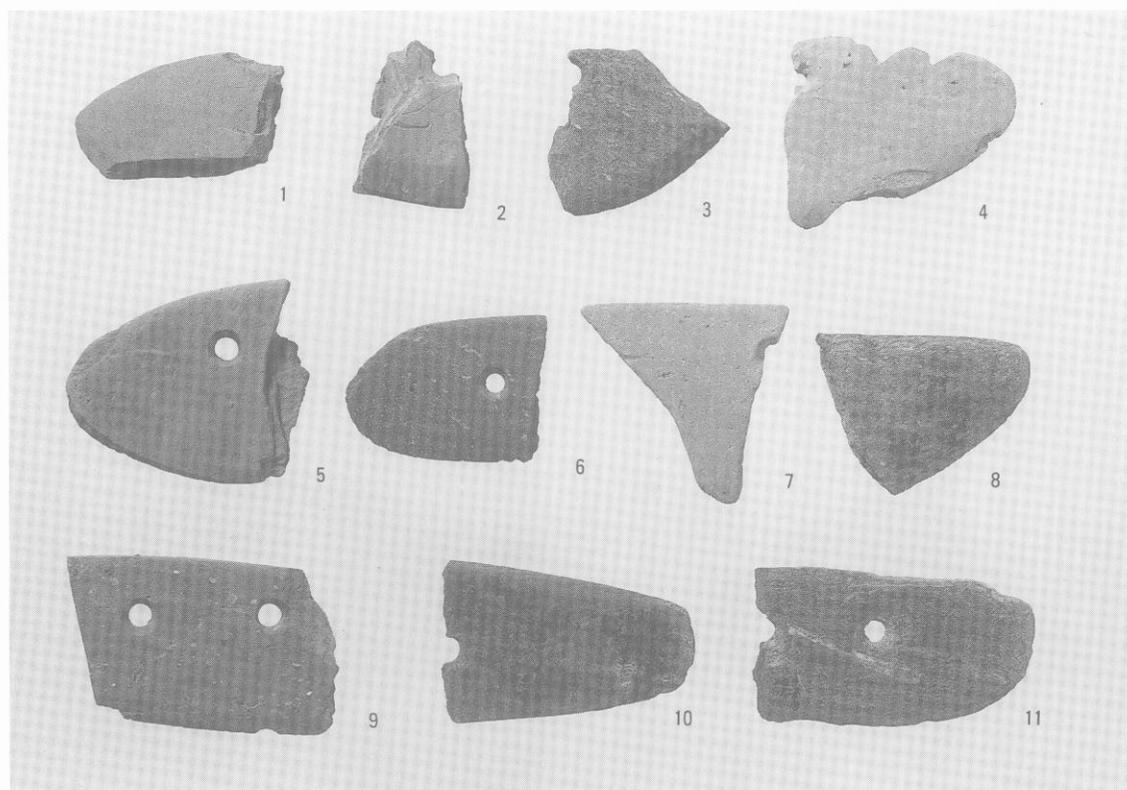
(2) 石鏃



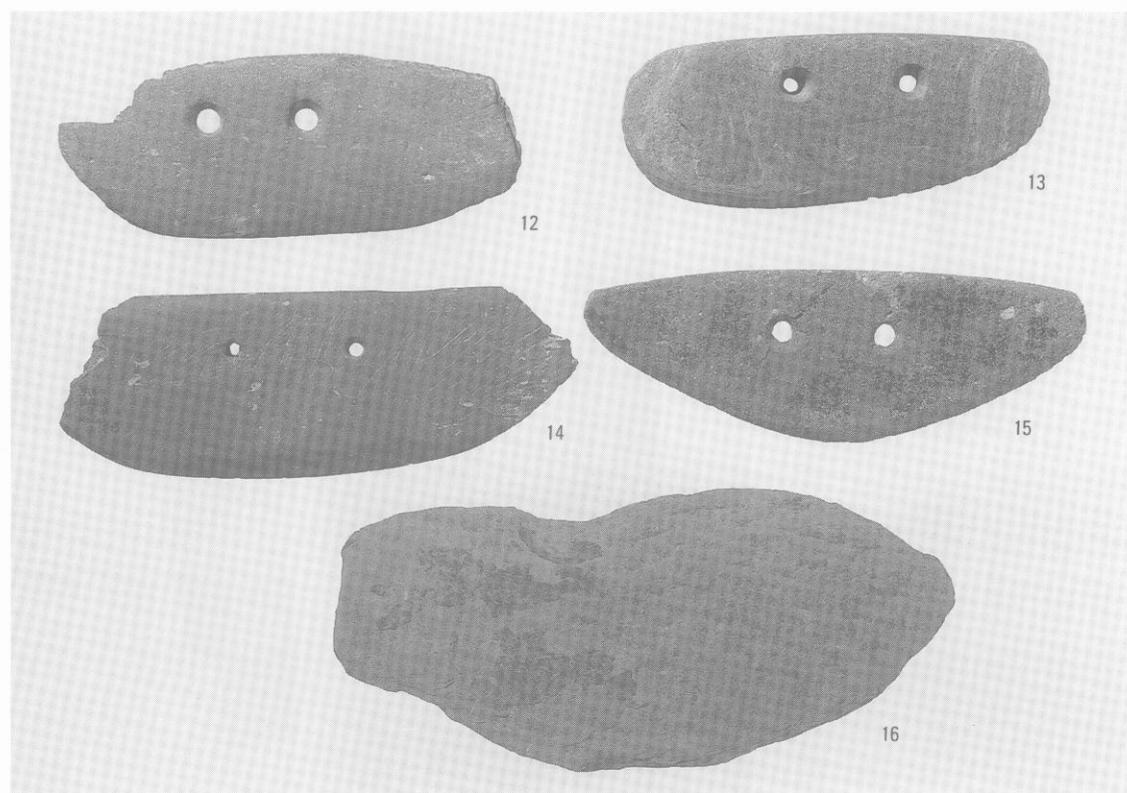
(1) 石匙・スクレイパー



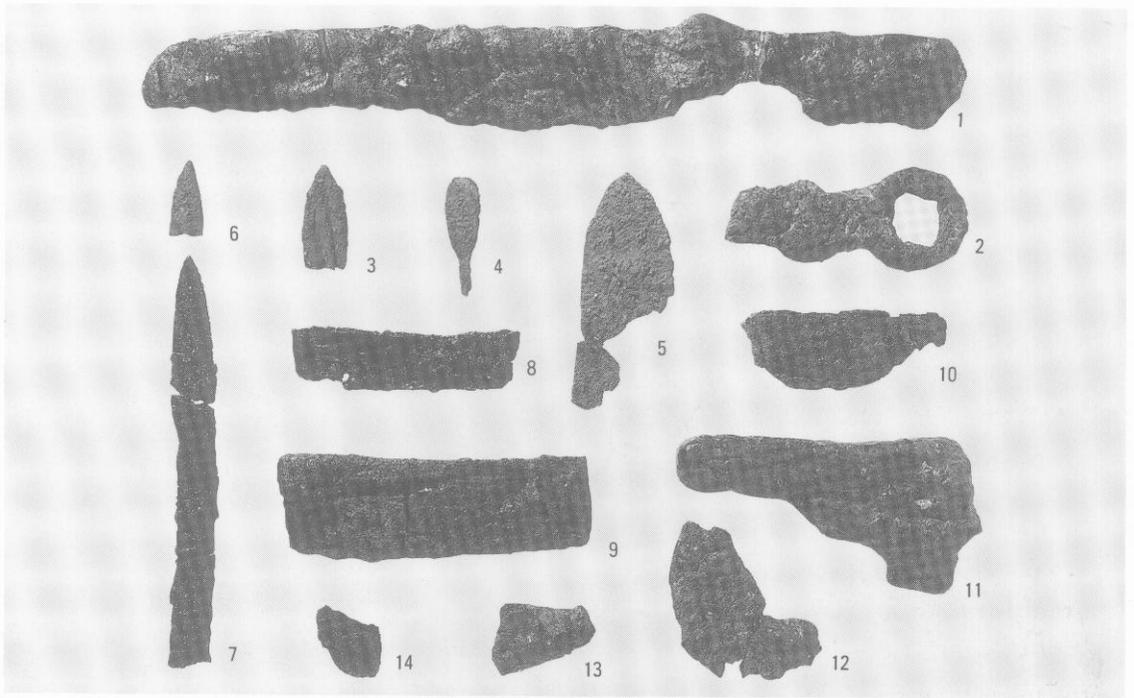
(2) 弥生時代遺構出土の砥石



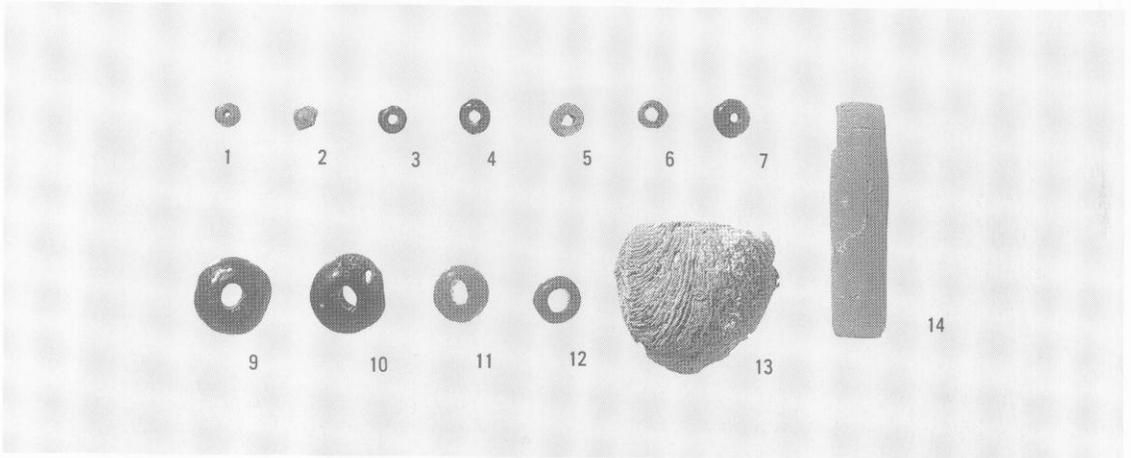
(1) 石庖丁.1



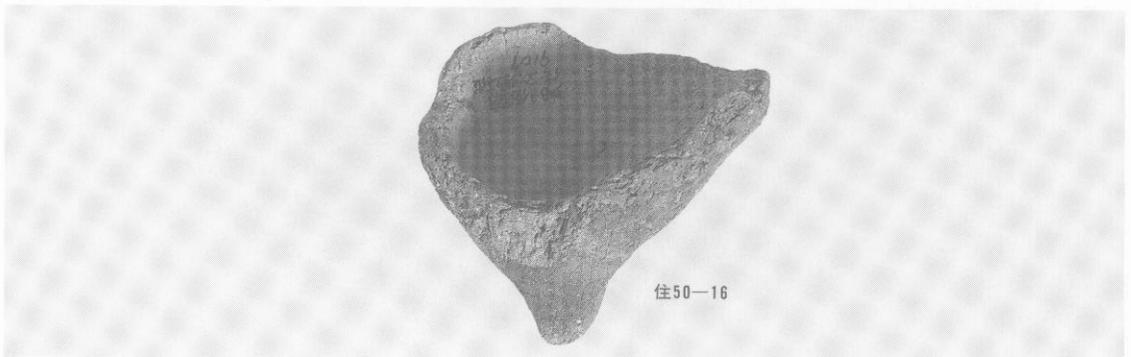
(2) 石庖丁.2



(1) 弥生時代遺構出土の鉄器



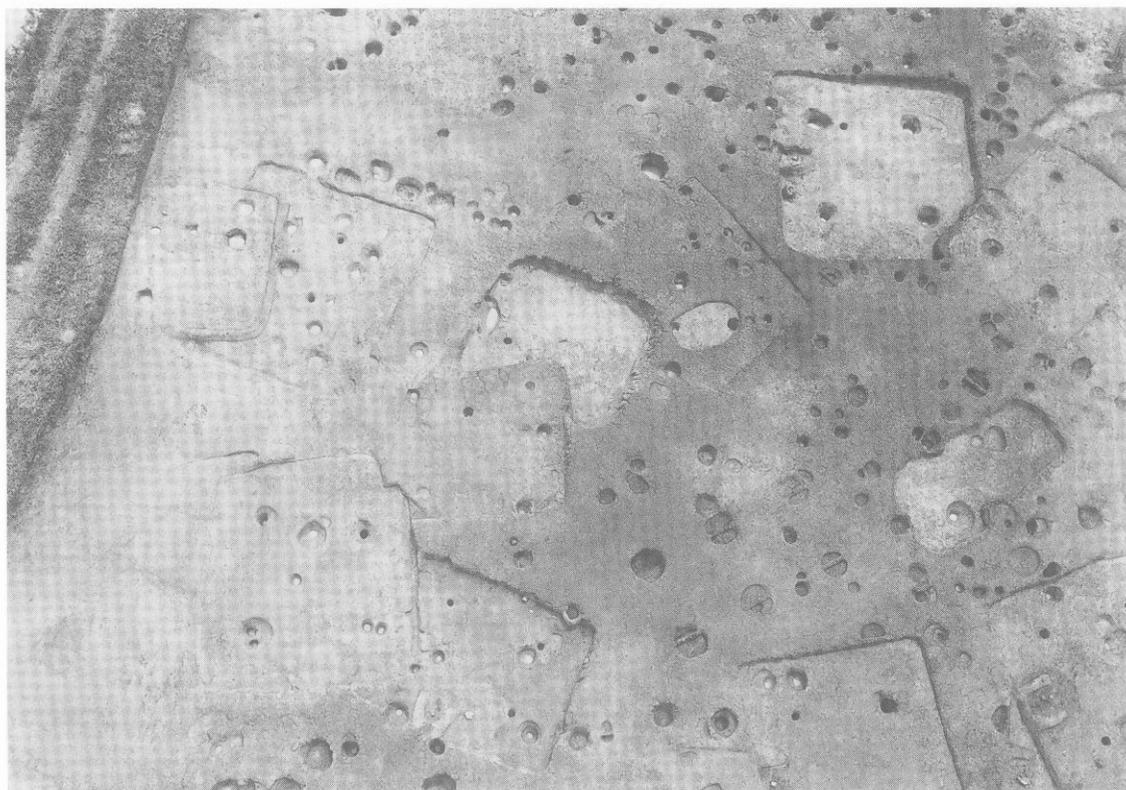
(2) 弥生時代遺構出土の玉類



(3) 50号竪穴住居跡出土土器



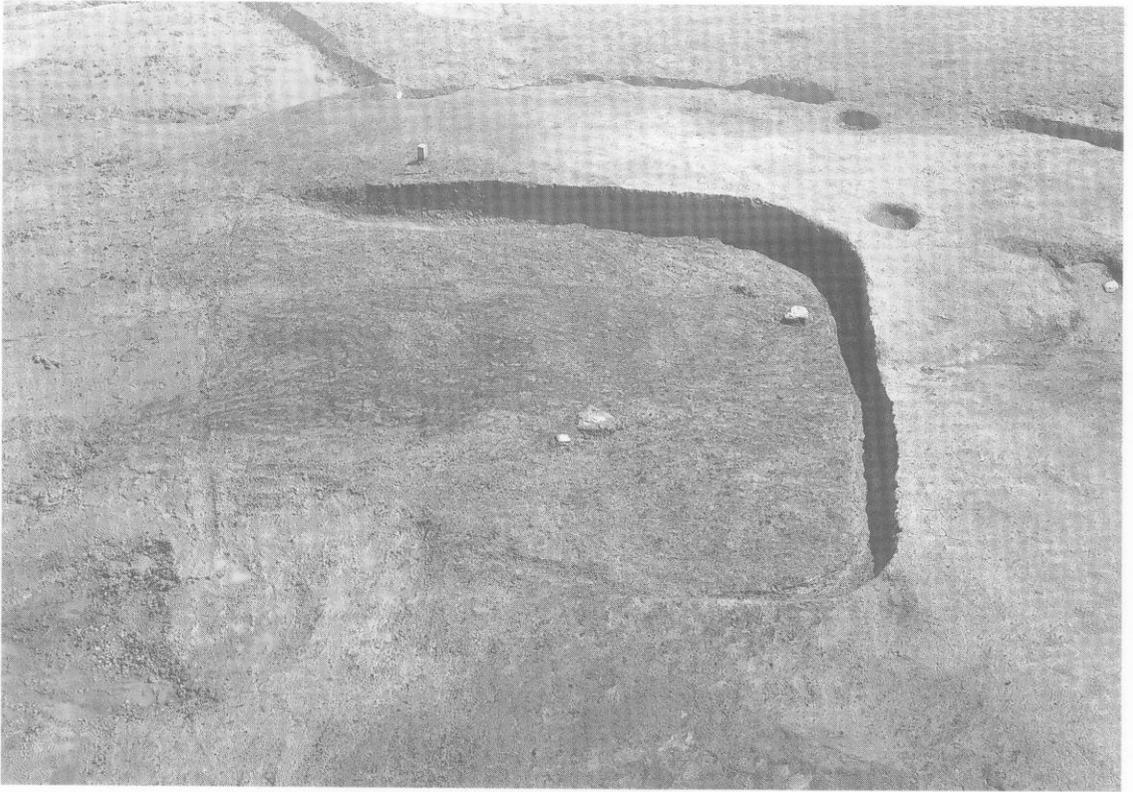
坂塚南遺跡出土広形銅戈連結式鑄型



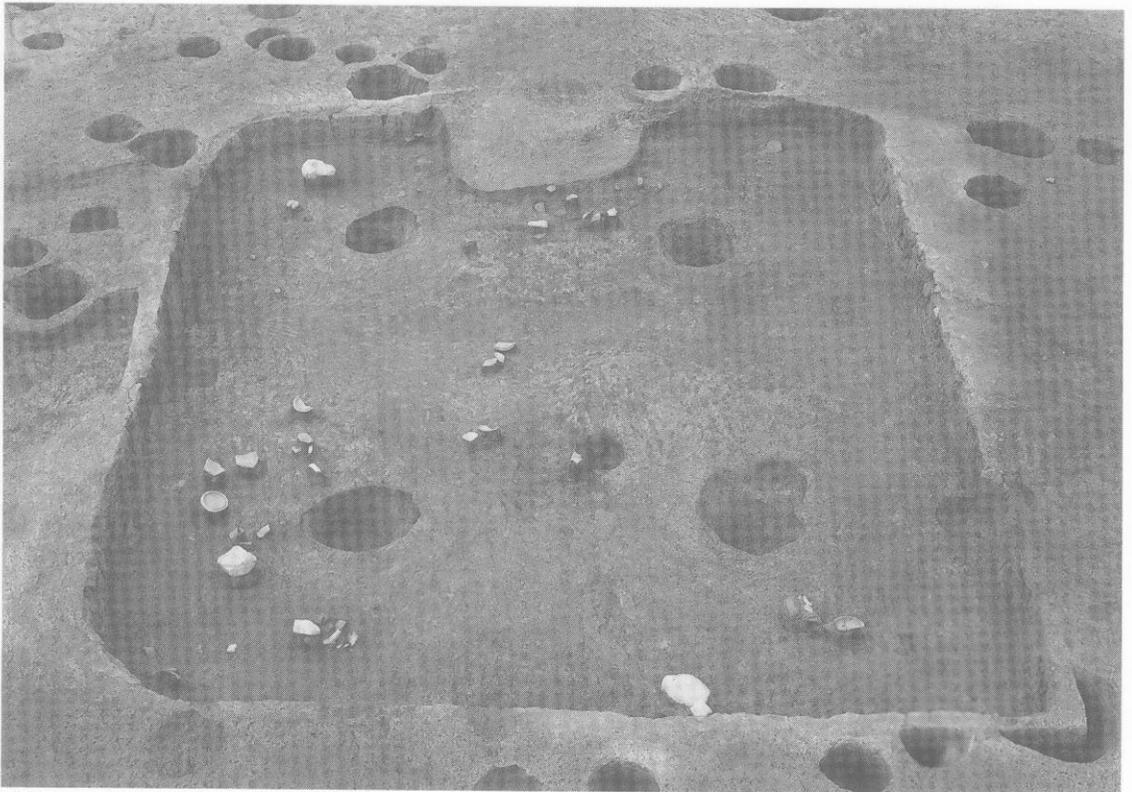
(1) 仮塚南遺跡北地区北東部竪穴住居跡群（西から）



(2) 仮塚南遺跡北地区南部竪穴住居跡群（北から）



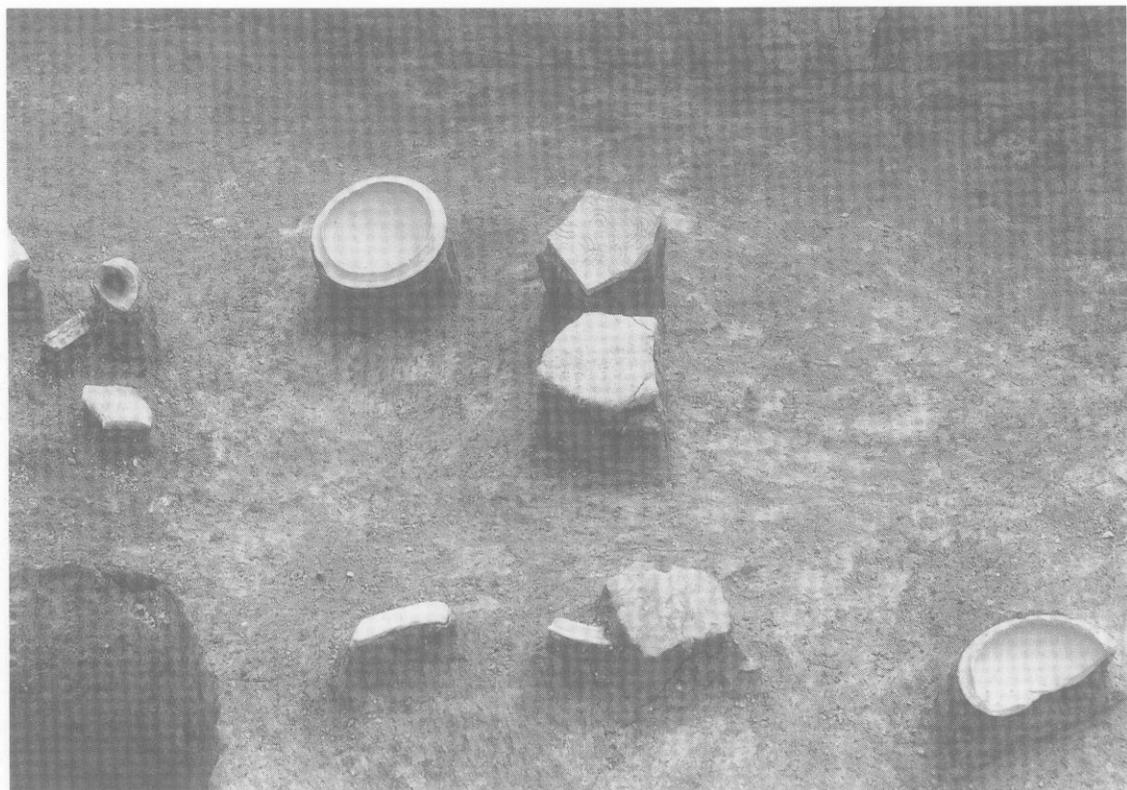
(1) 1号竪穴住居跡（北西から）



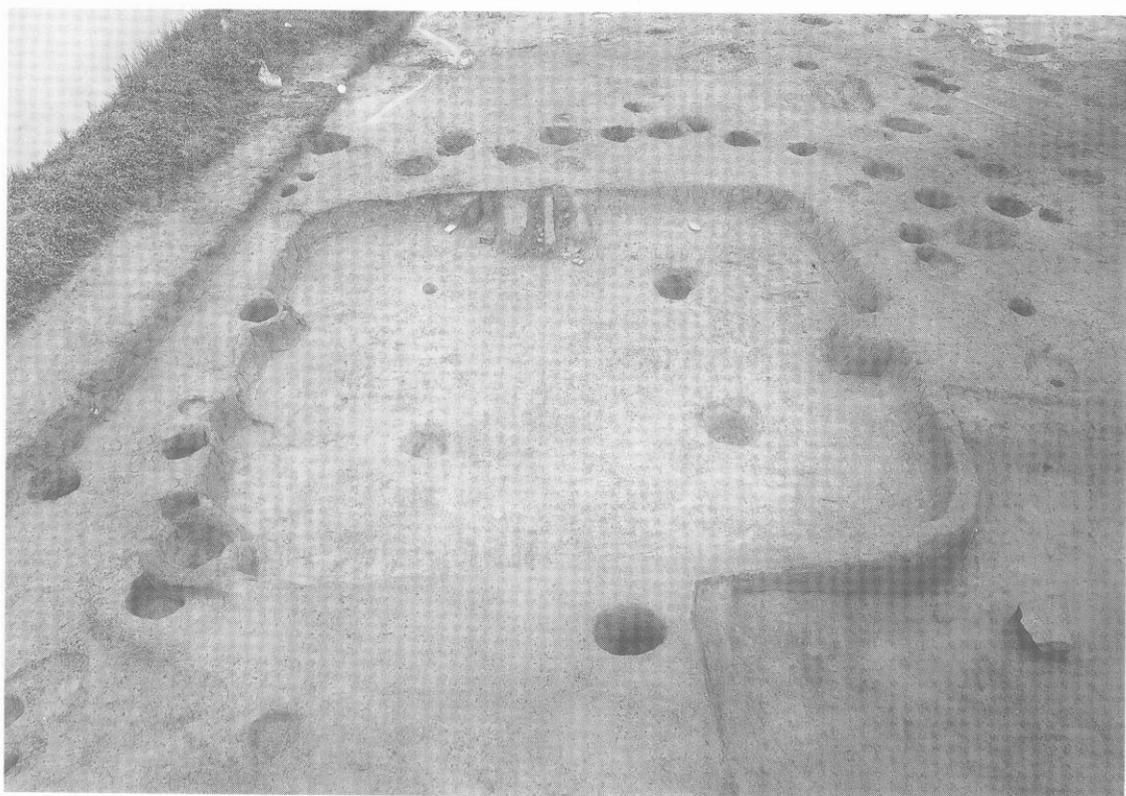
(2) 4号竪穴住居跡（南東から）



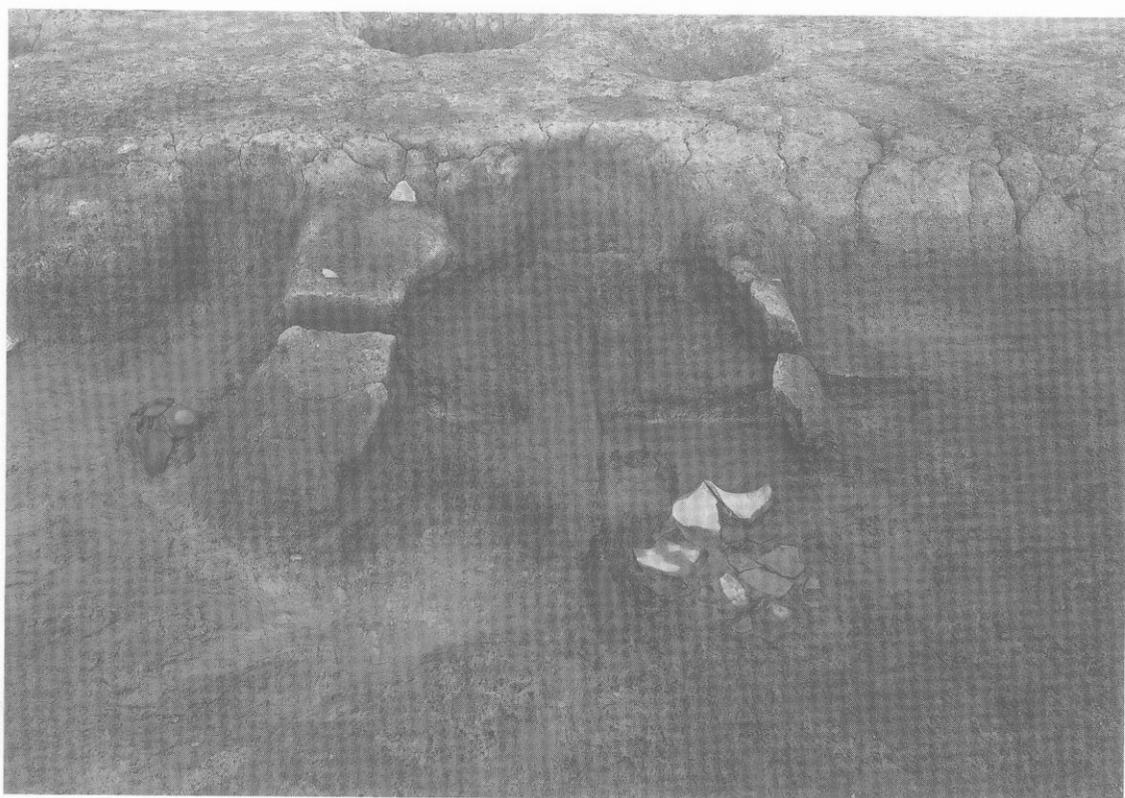
(1) 4号竪穴住居跡カマド（南東から）



(2) 4号竪穴住居跡遺物出土状態（北東から）



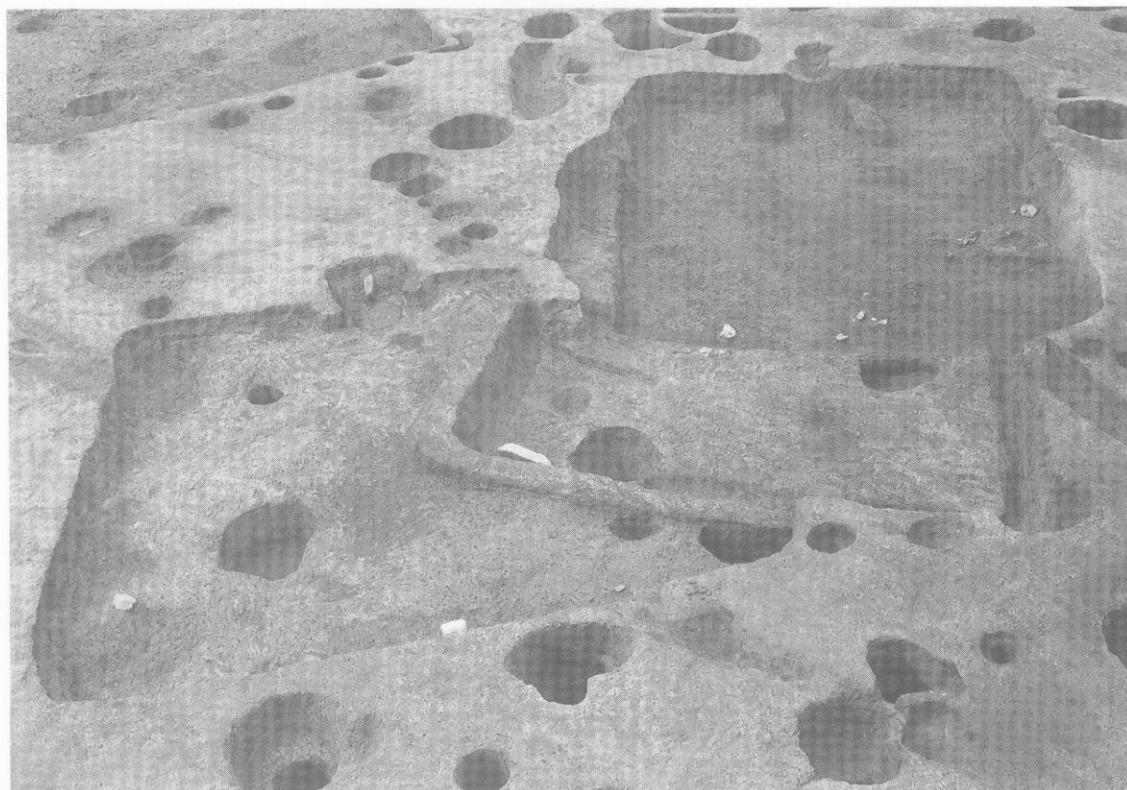
(1) 6号竖穴住居跡（南から）



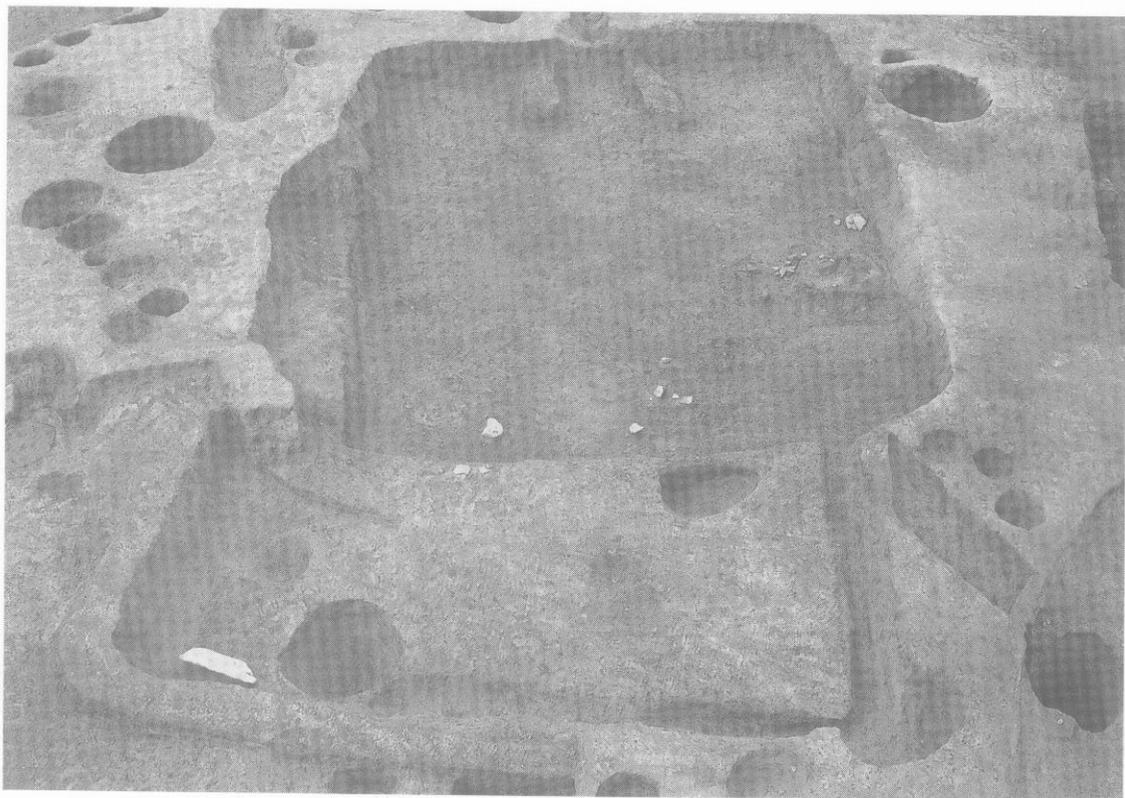
(2) 6号竖穴住居跡カマド（南から）



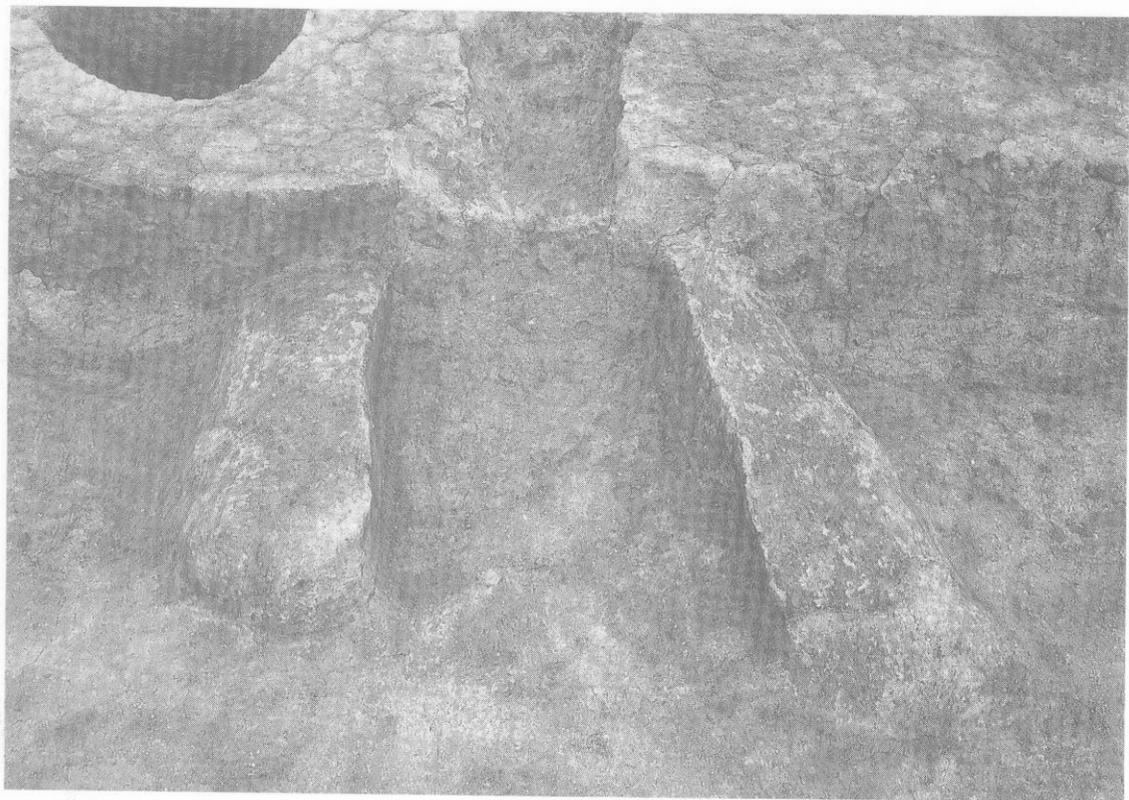
(1) 6号竖穴住居跡遺物出土状態（南から）



(2) 7~9号竖穴住居跡（南から）



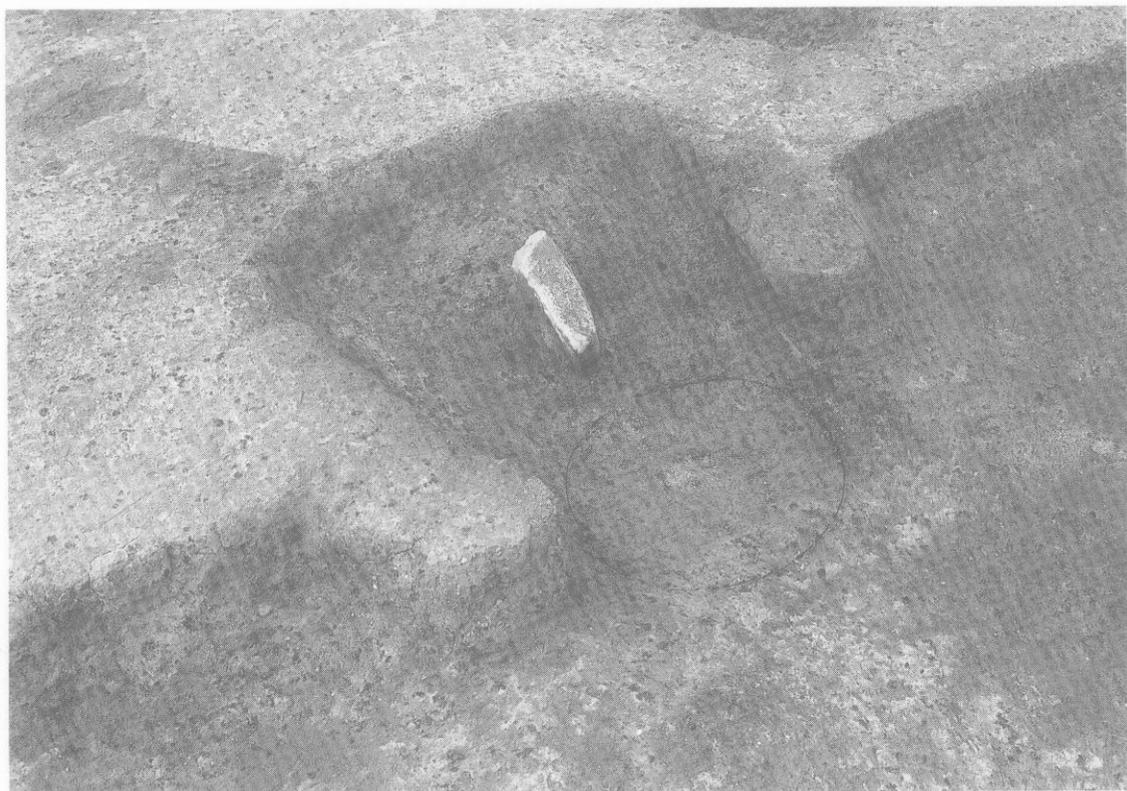
(1) 7・8号竪穴住居跡（南から）



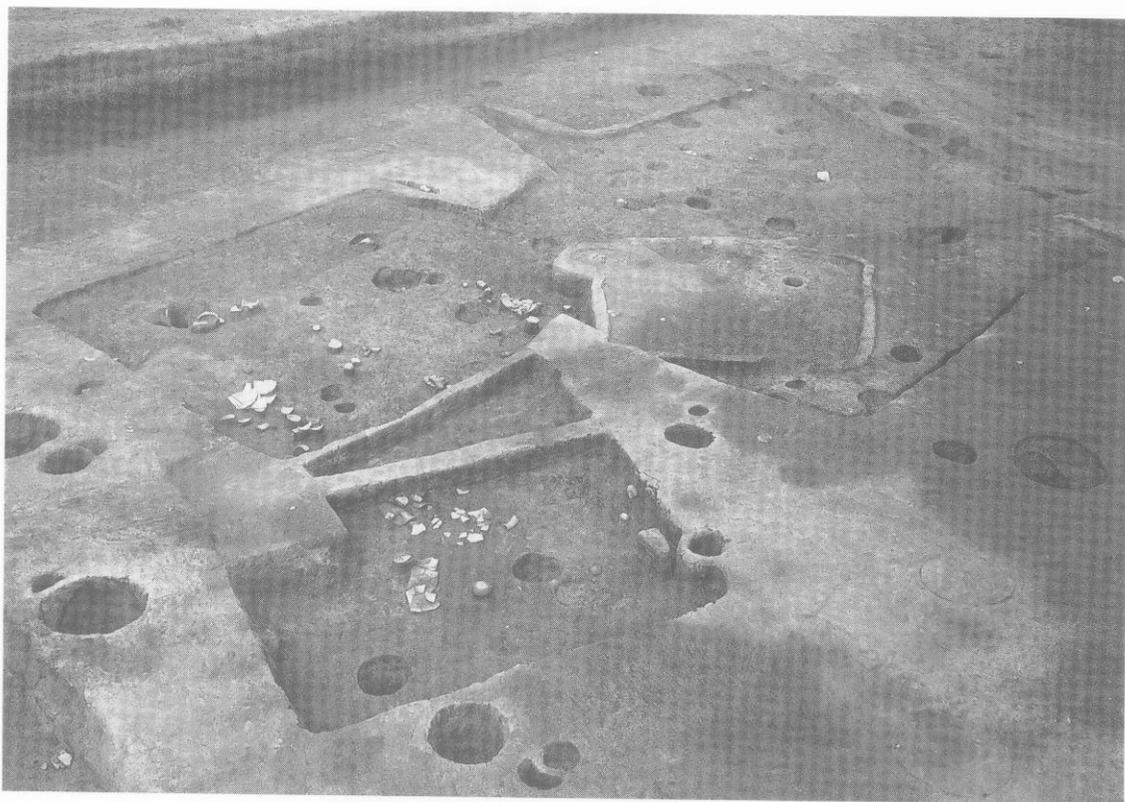
(2) 7号竪穴住居跡カマド（南から）



(1) 9号竪穴住居跡（南から）



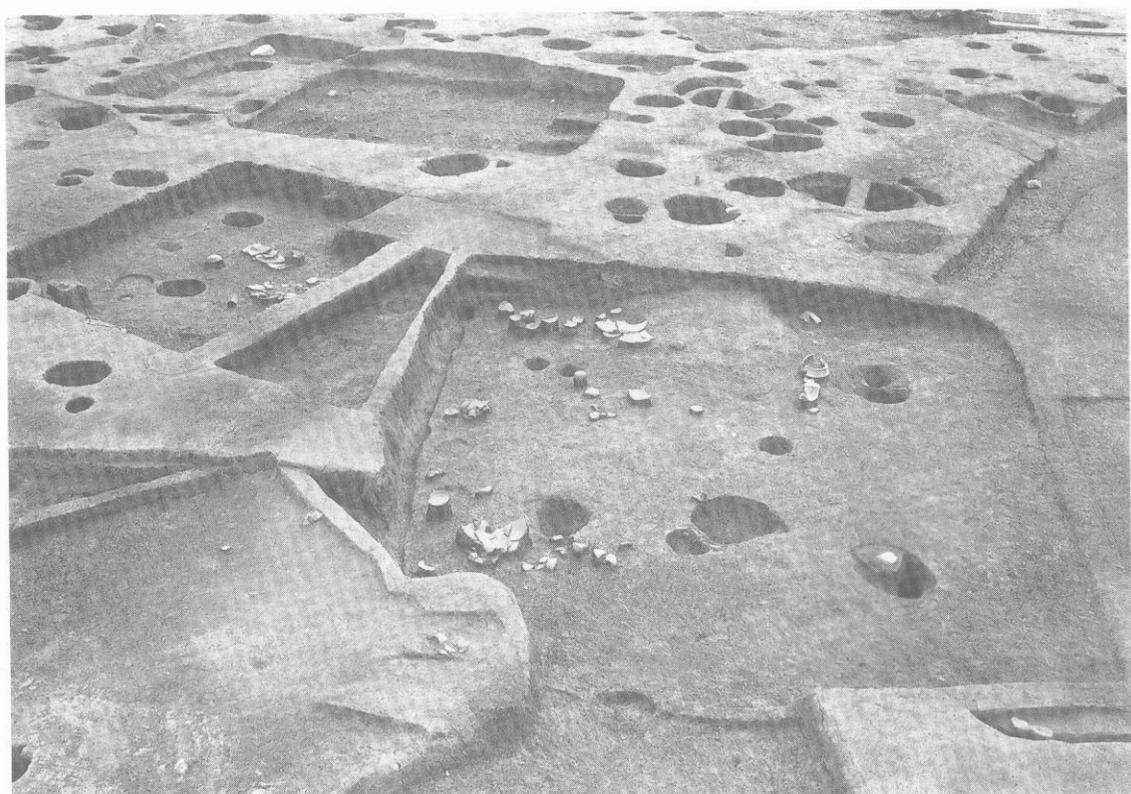
(2) 9号竪穴住居跡カマド（南西から）



(1) 10~17号竖穴住居跡（南西から）



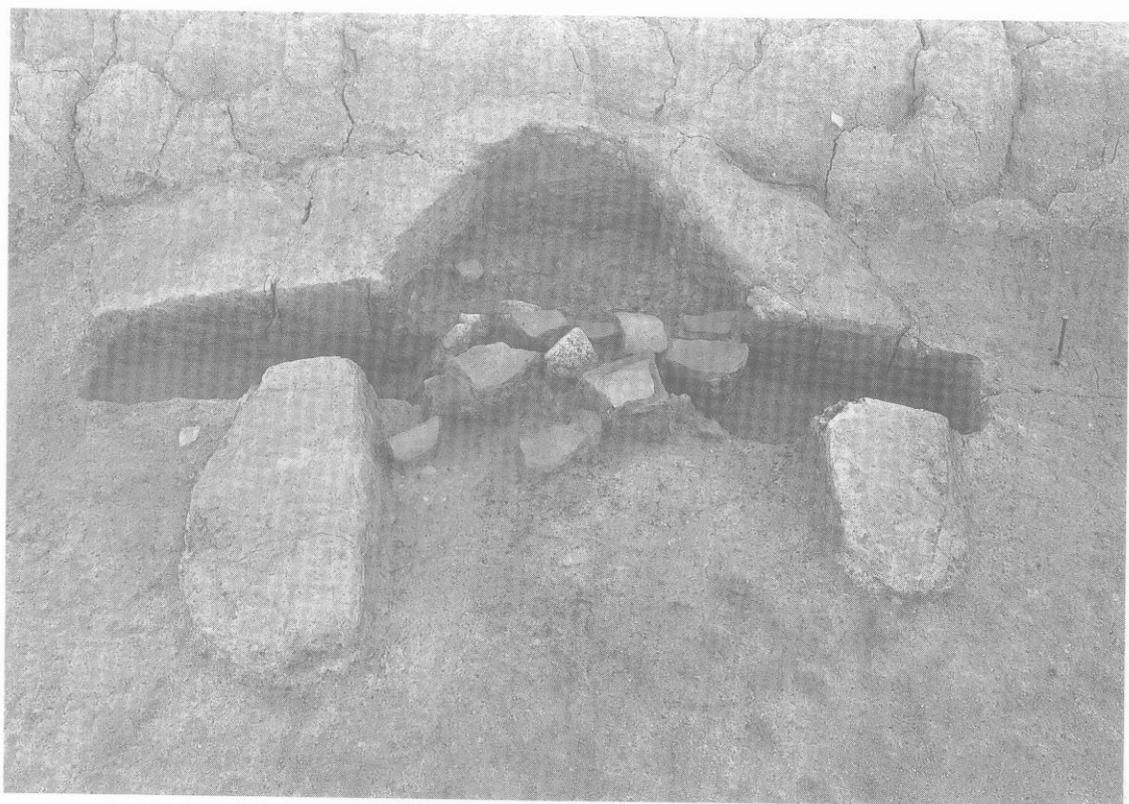
(2) 10・11号竖穴住居跡（東から）



(1) 13・14号竖穴住居跡（東から）



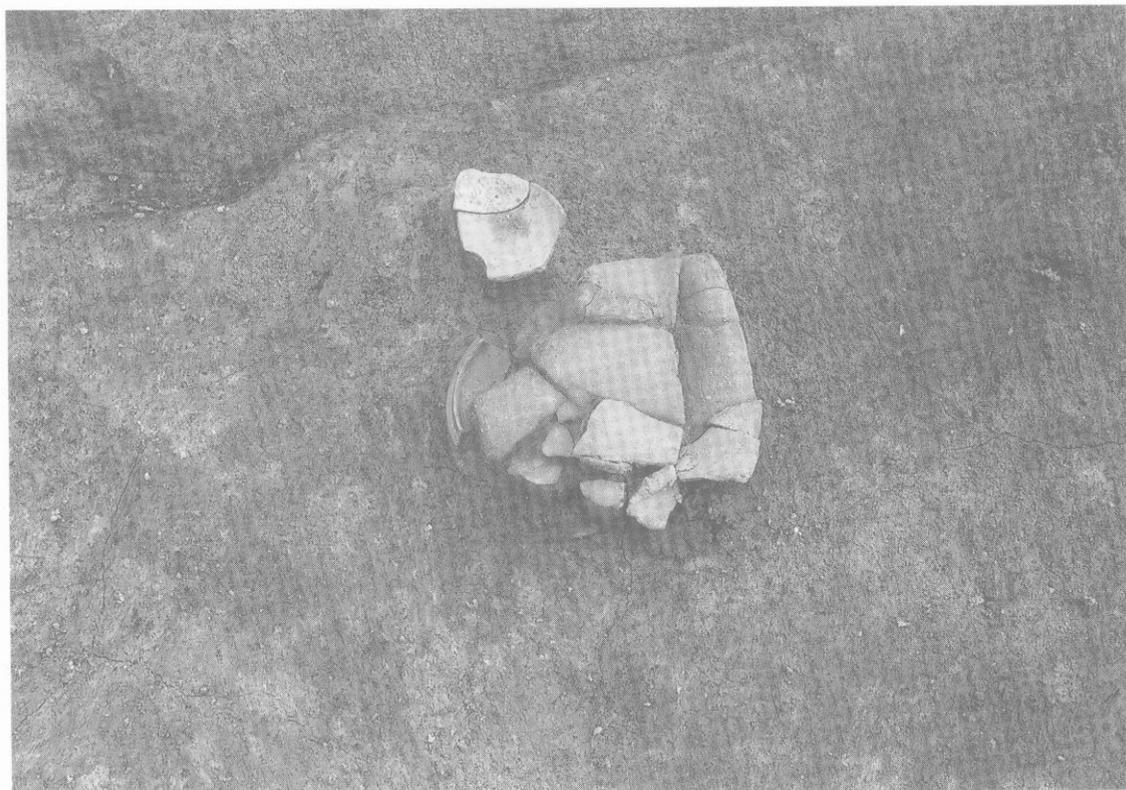
(2) 13号竖穴住居跡（南西から）



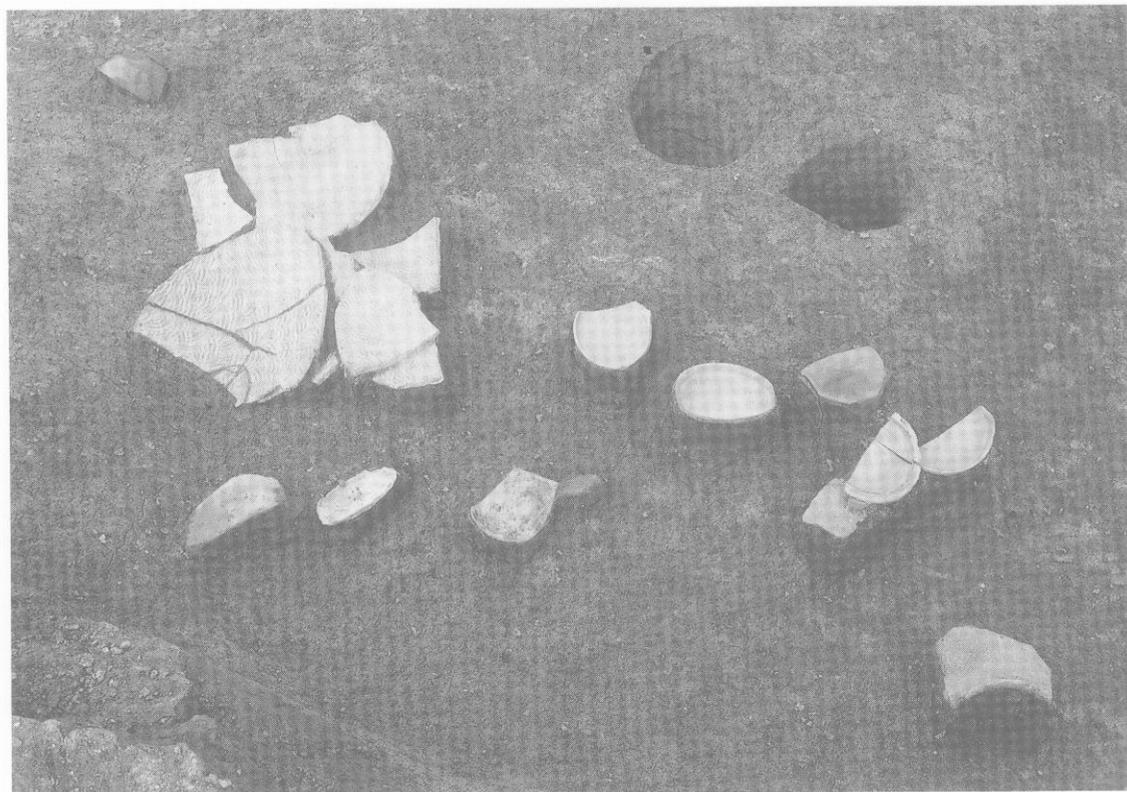
(1) 13号竪穴住居跡カマド（東から）



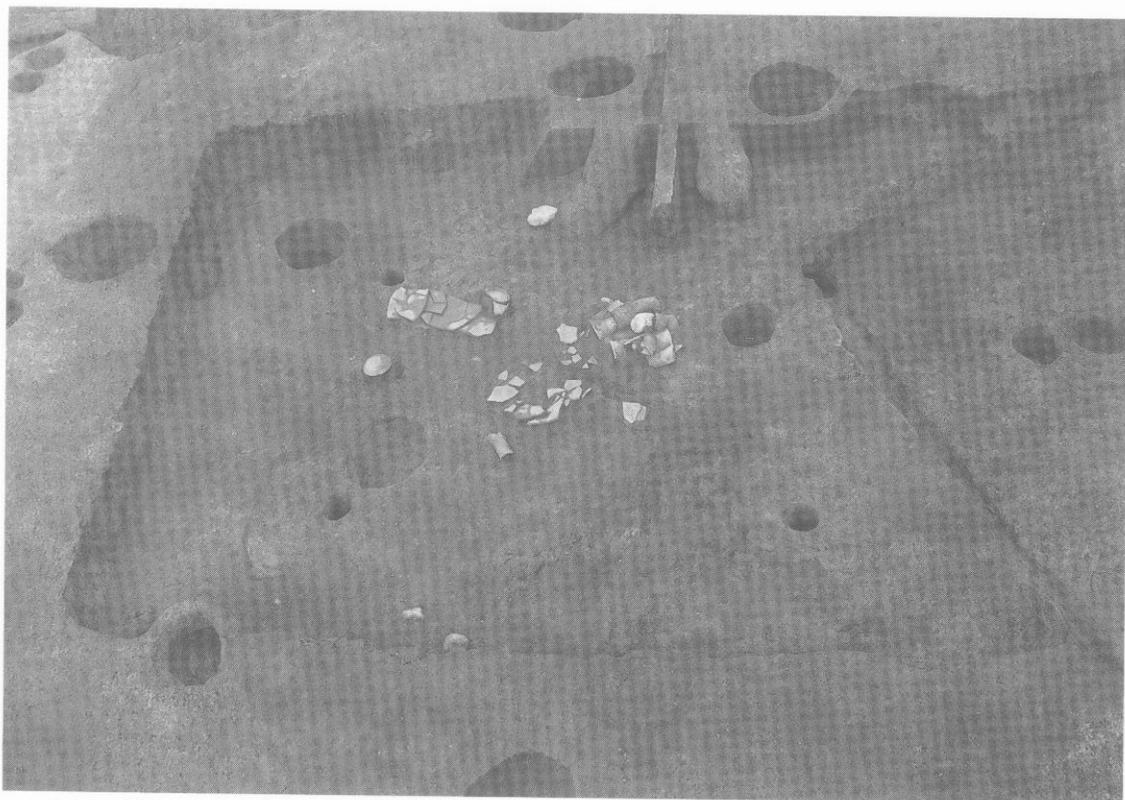
(2) 13号竪穴住居跡遺物出土状態.1（南東から）



(1) 13号竖穴住居跡遺物出土状態.2 (北から)



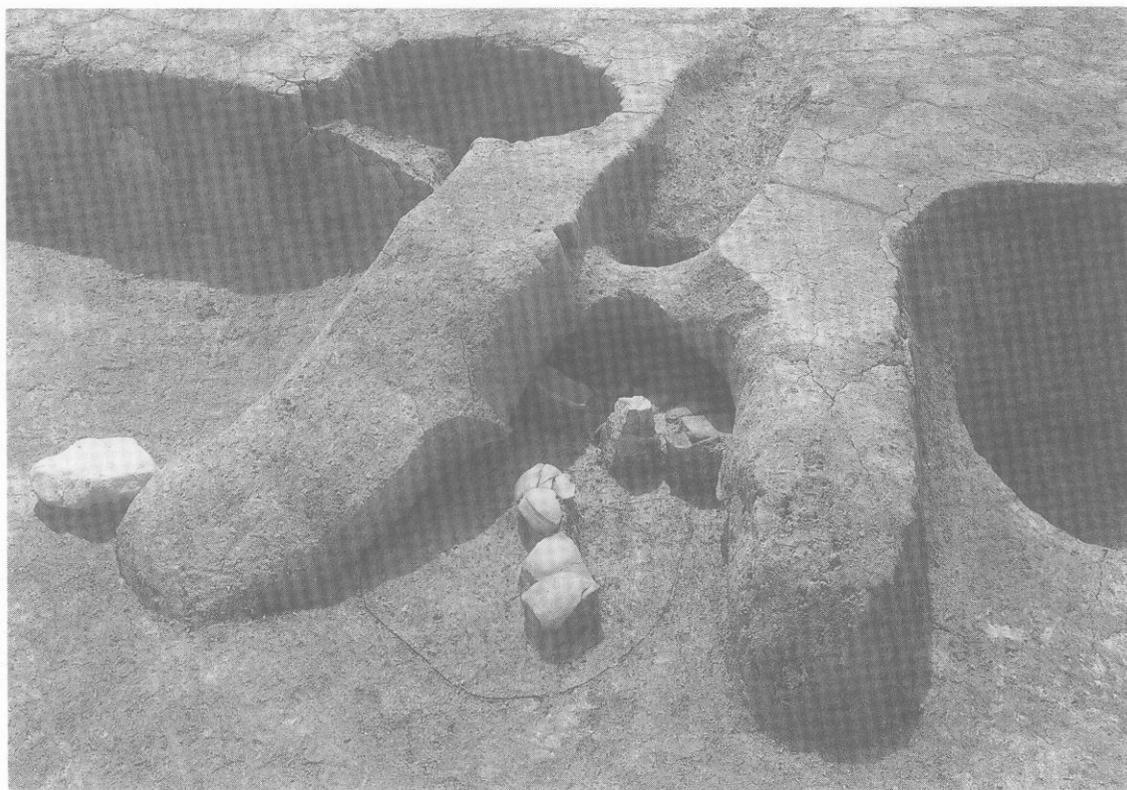
(2) 13号竖穴住居跡遺物出土状態.3 (西から)



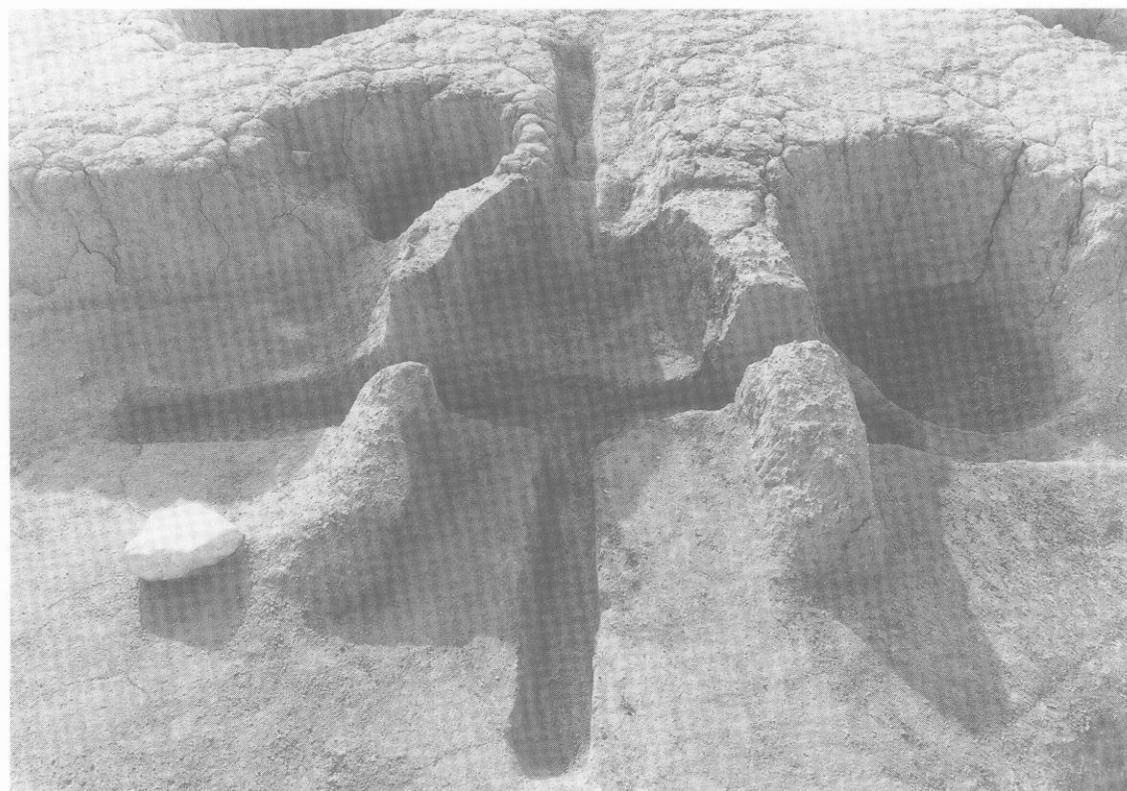
(1) 14号竪穴住居跡（南東から）



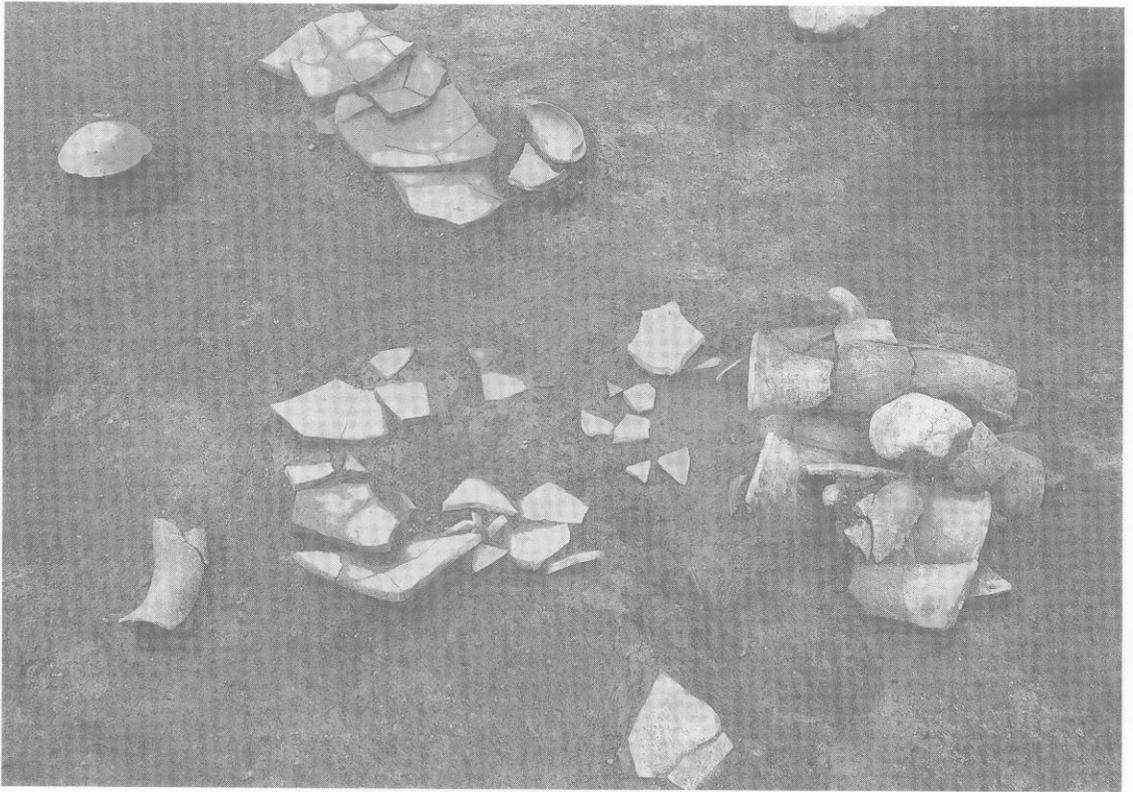
(2) 14号竪穴住居跡土層断面（南西から）



(1) 14号竖穴住居跡カマド検出状態（東から）



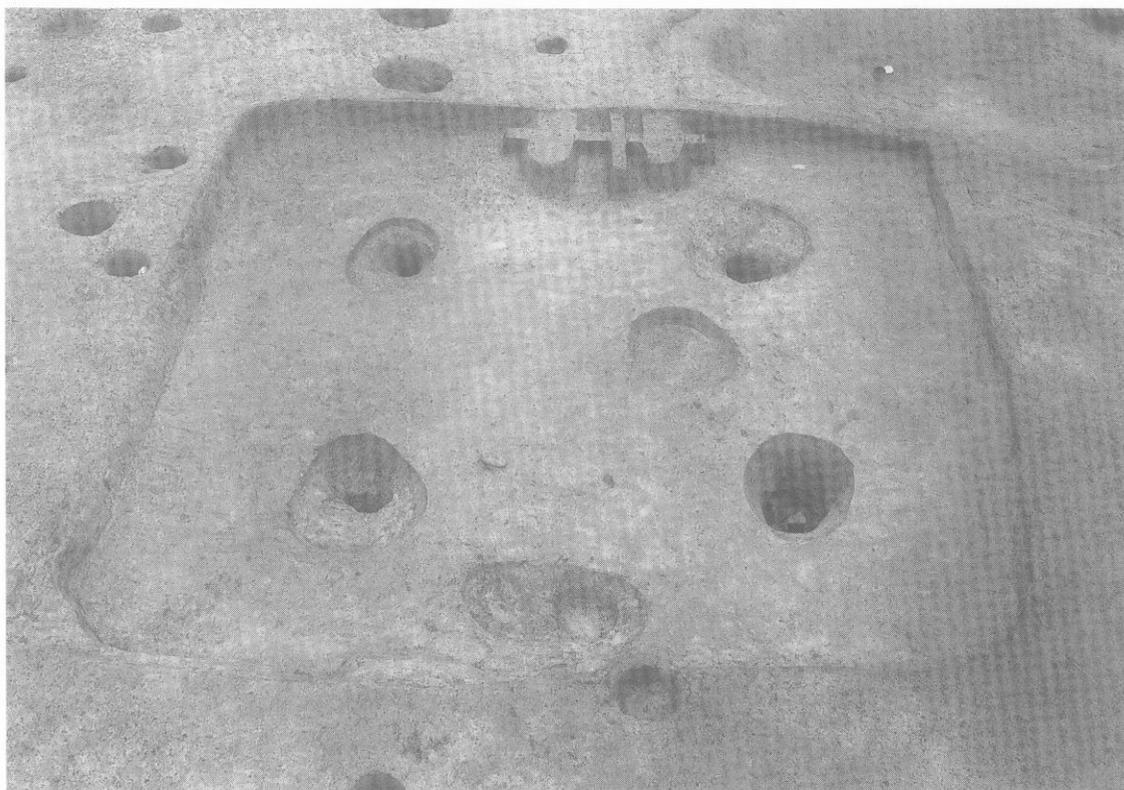
(2) 14号竖穴住居跡カマド完掘状態（南東から）



(1) 14号竖穴住居跡遺物出土状態.1 (東から)



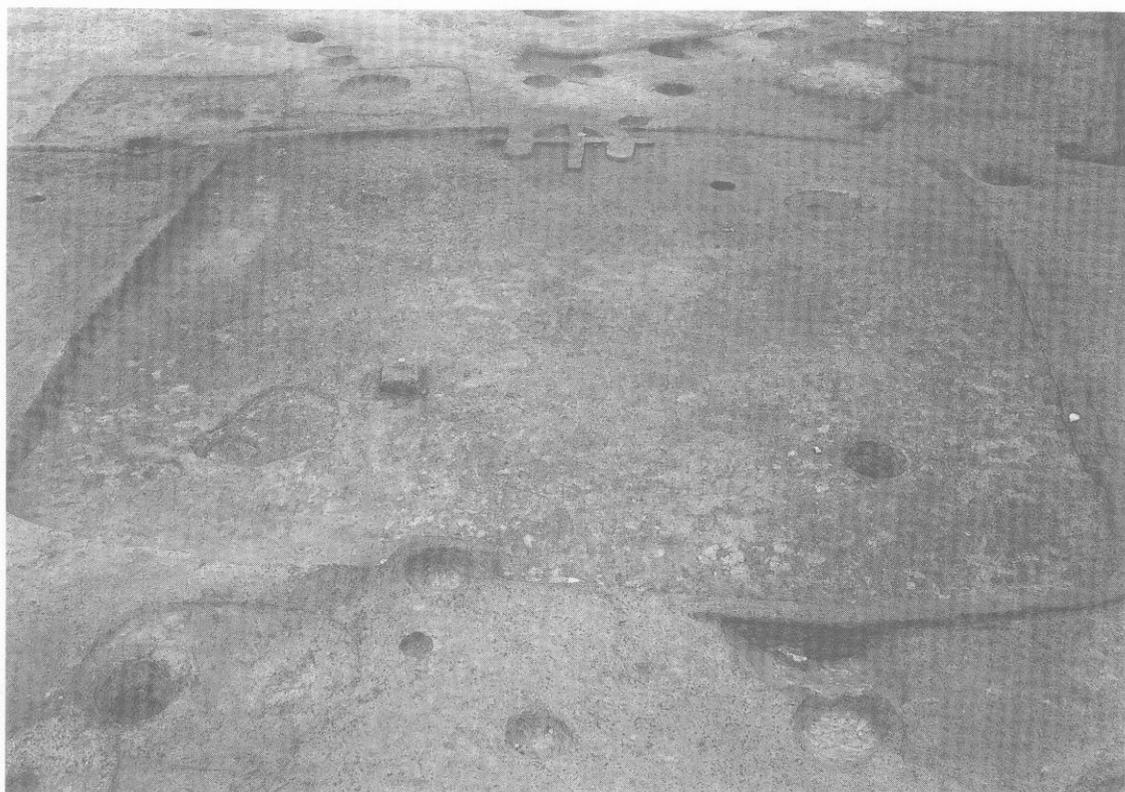
(2) 14号竖穴住居跡遺物出土状態.2 (南東から)



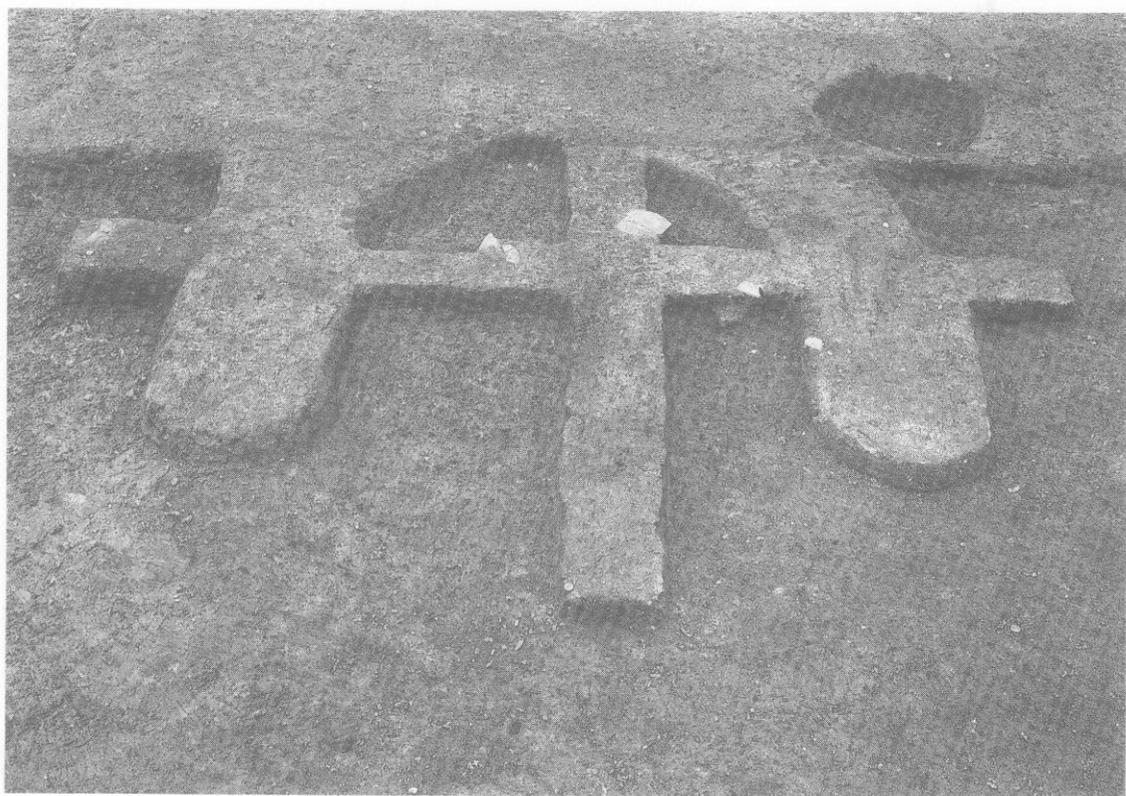
(1) 18号竖穴住居跡（南東から）



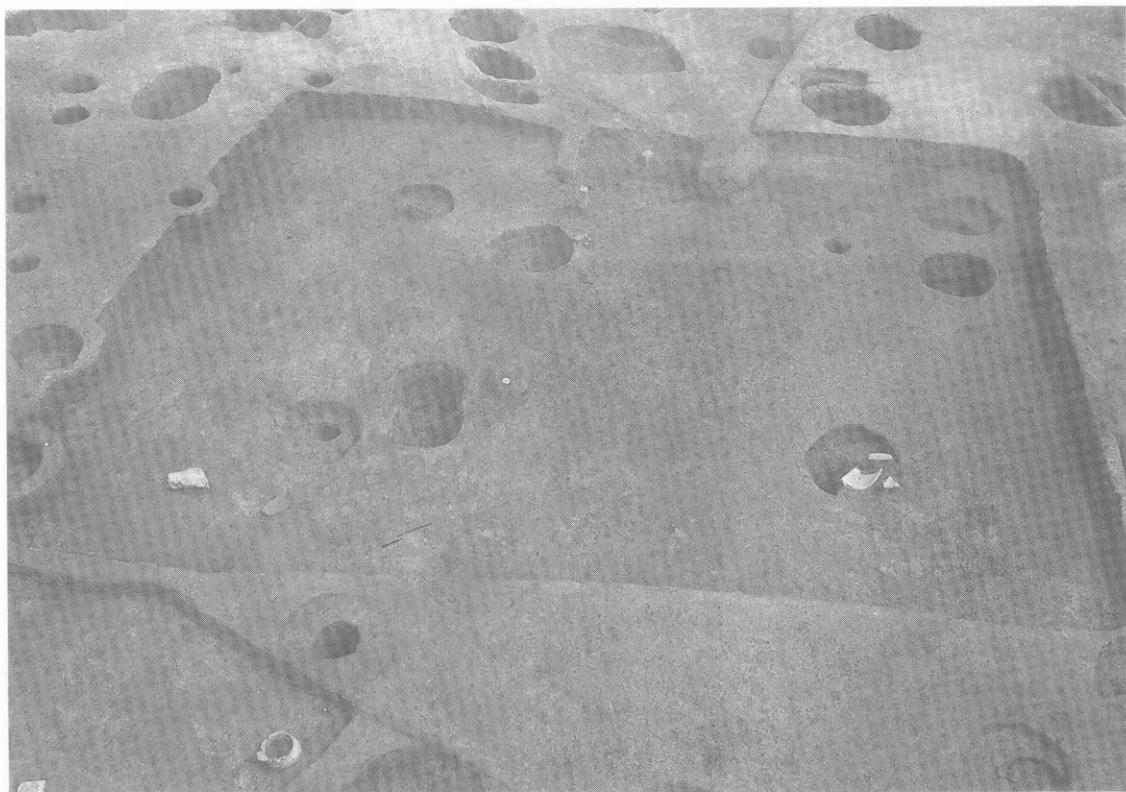
(2) 18号竖穴住居跡カマド（南東から）



(1) 19号竖穴住居跡（南東から）



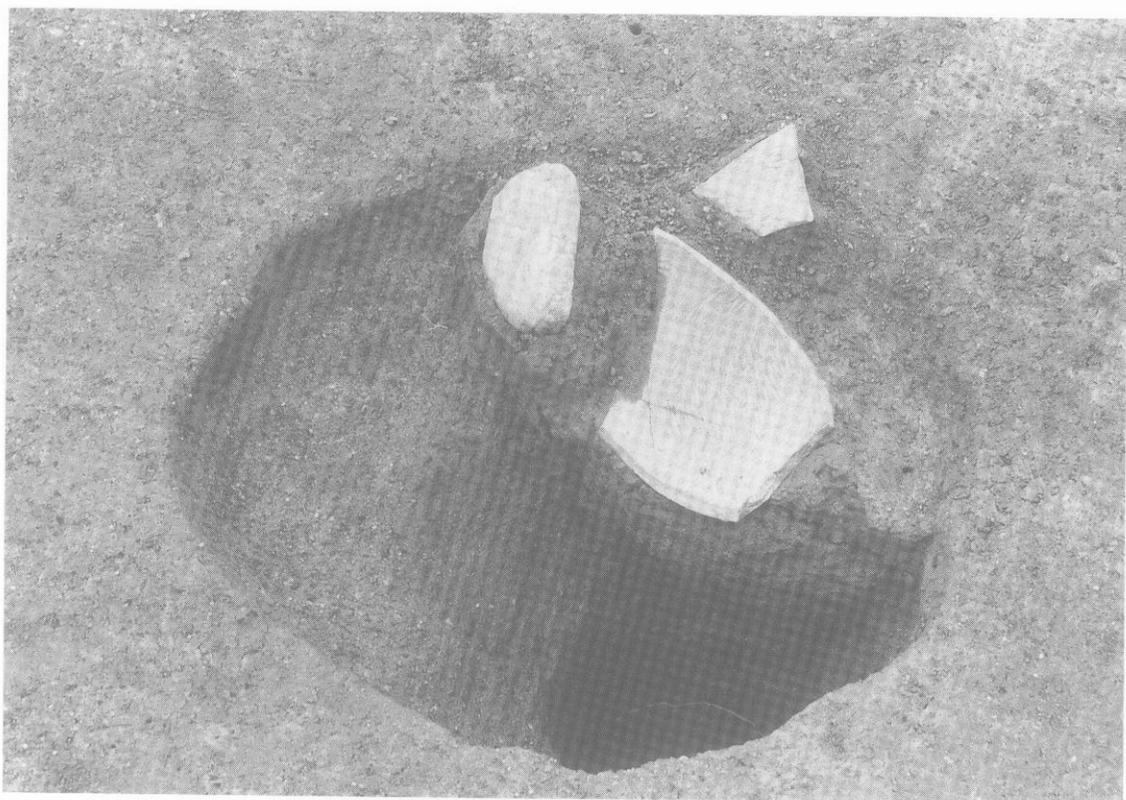
(2) 19号竖穴住居跡カマド（南東から）



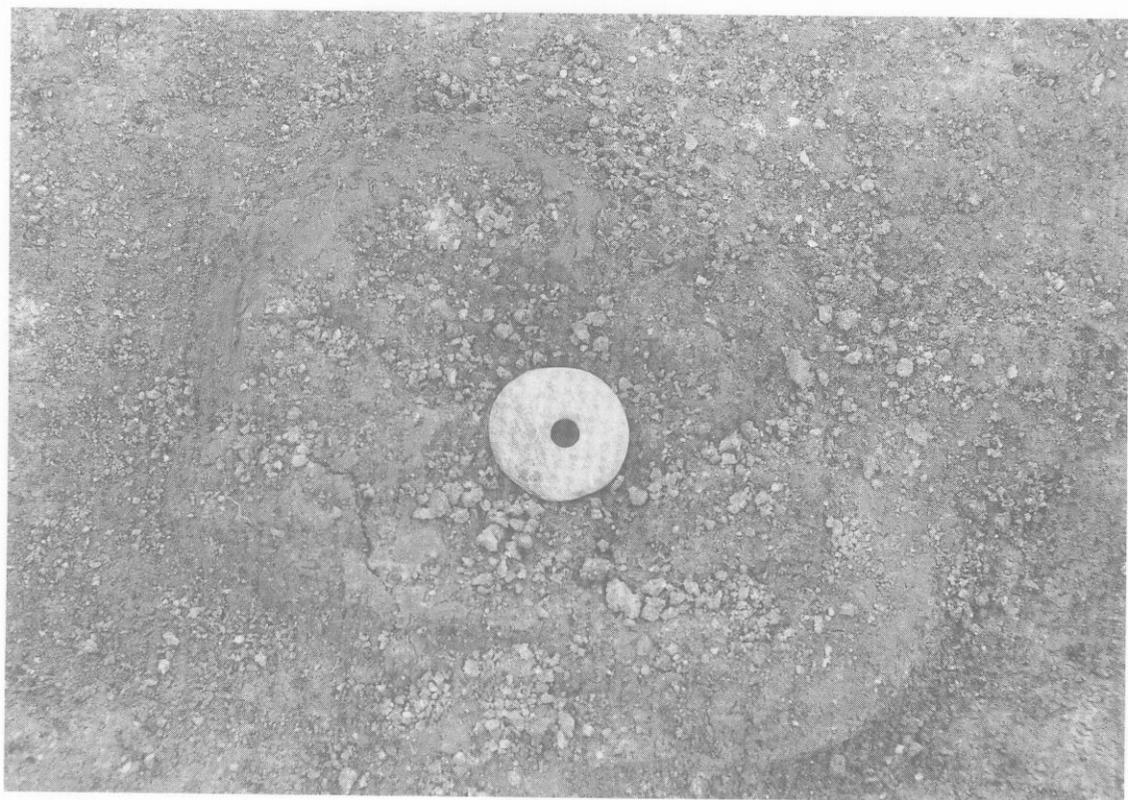
(1) 20号竪穴住居跡（南から）



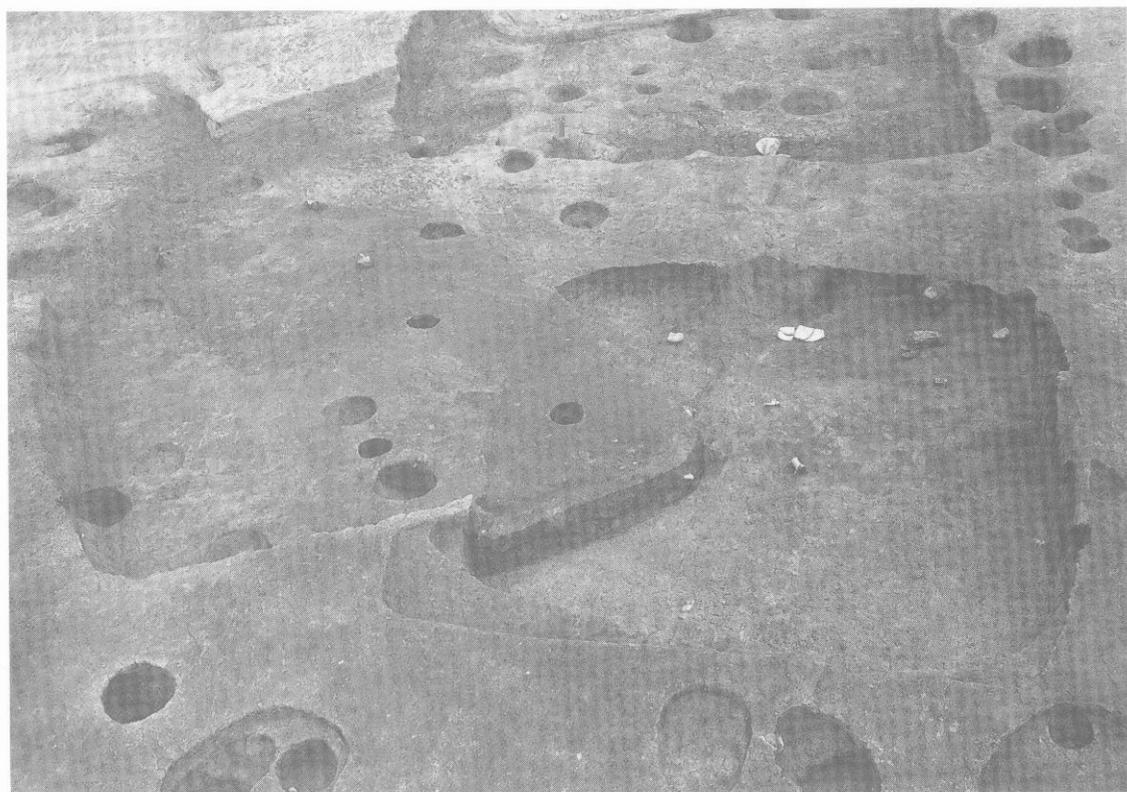
(2) 20号竪穴住居跡カマド（南西から）



(1) 20号竖穴住居跡遺物出土状態.1 (西から)



(2) 20号竖穴住居跡遺物出土状態.2 (南から)



(1) 12・21号竖穴住居跡（南東から）



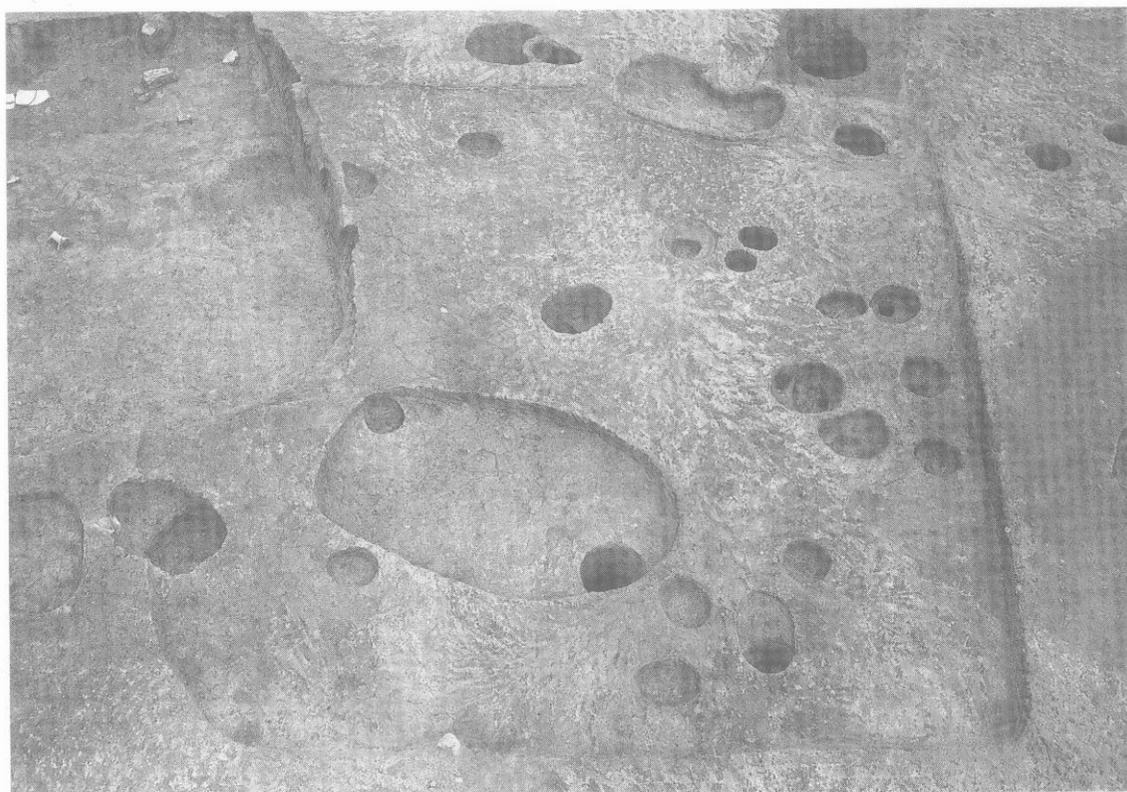
(2) 21号竖穴住居跡（南東から）



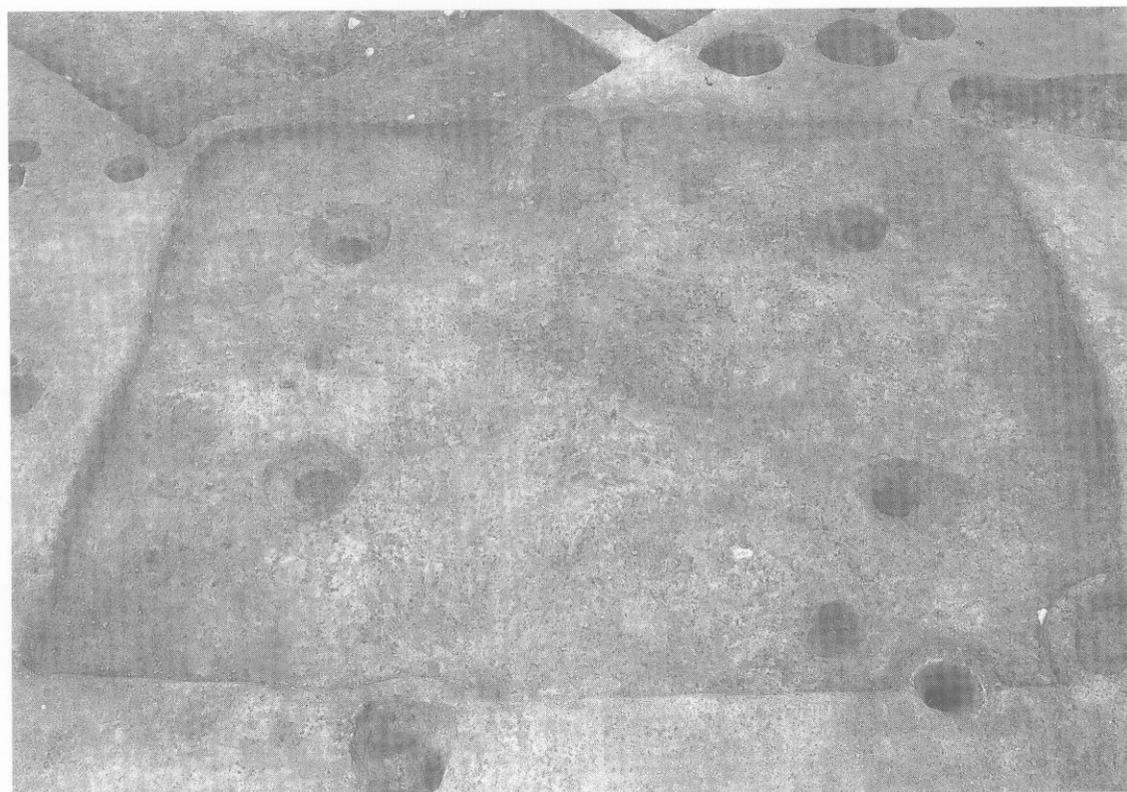
(1) 21号竖穴住居跡カマド検出状態（南東から）



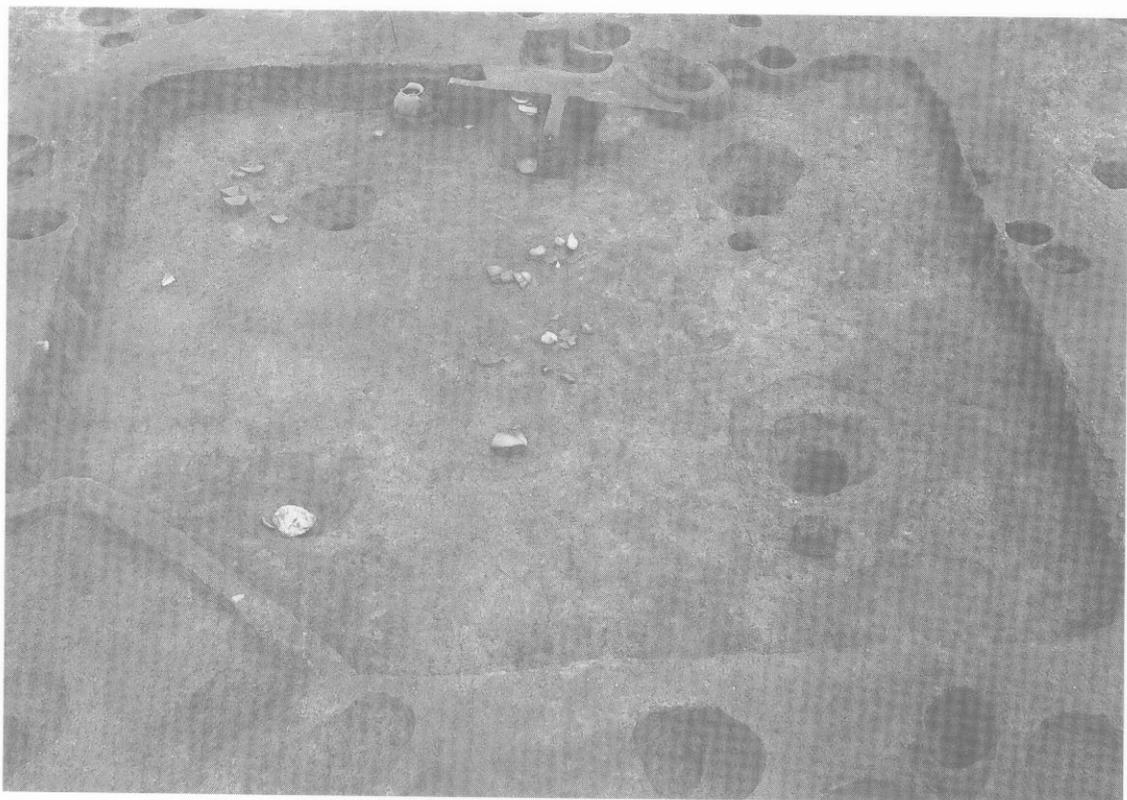
(2) 21号竖穴住居跡カマド完掘状態（南東から）



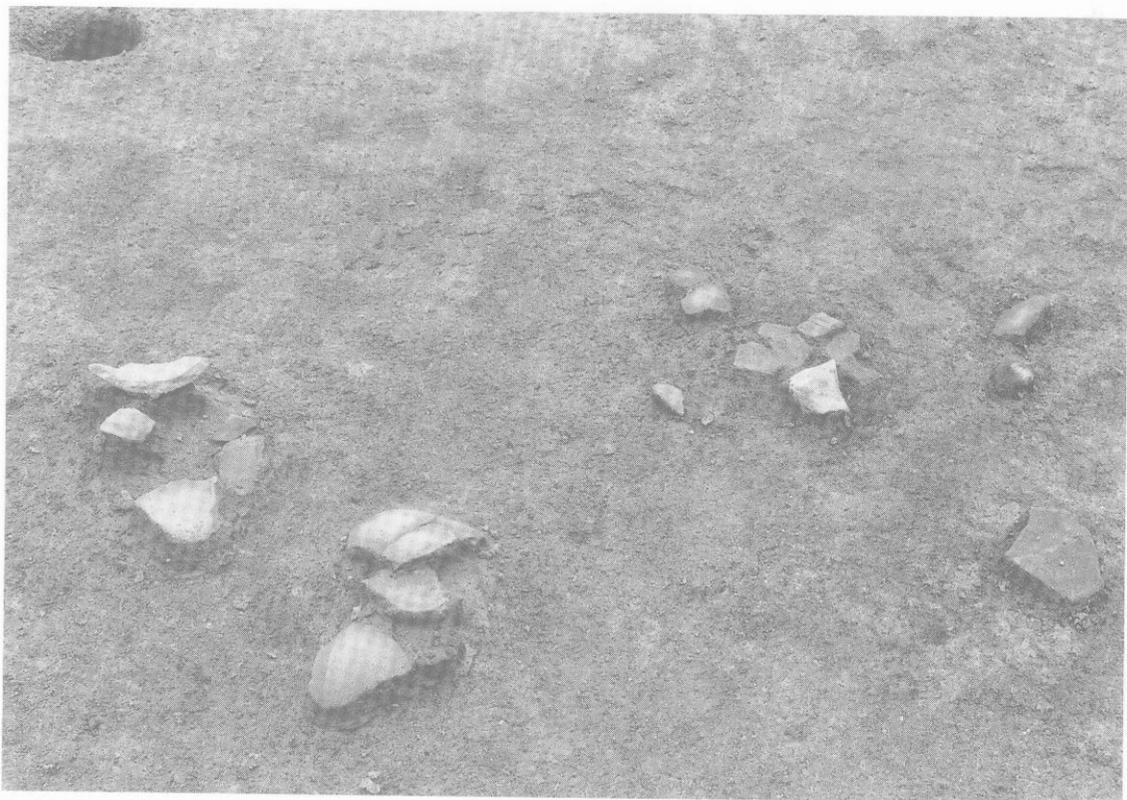
(1) 22号竪穴住居跡（南東から）



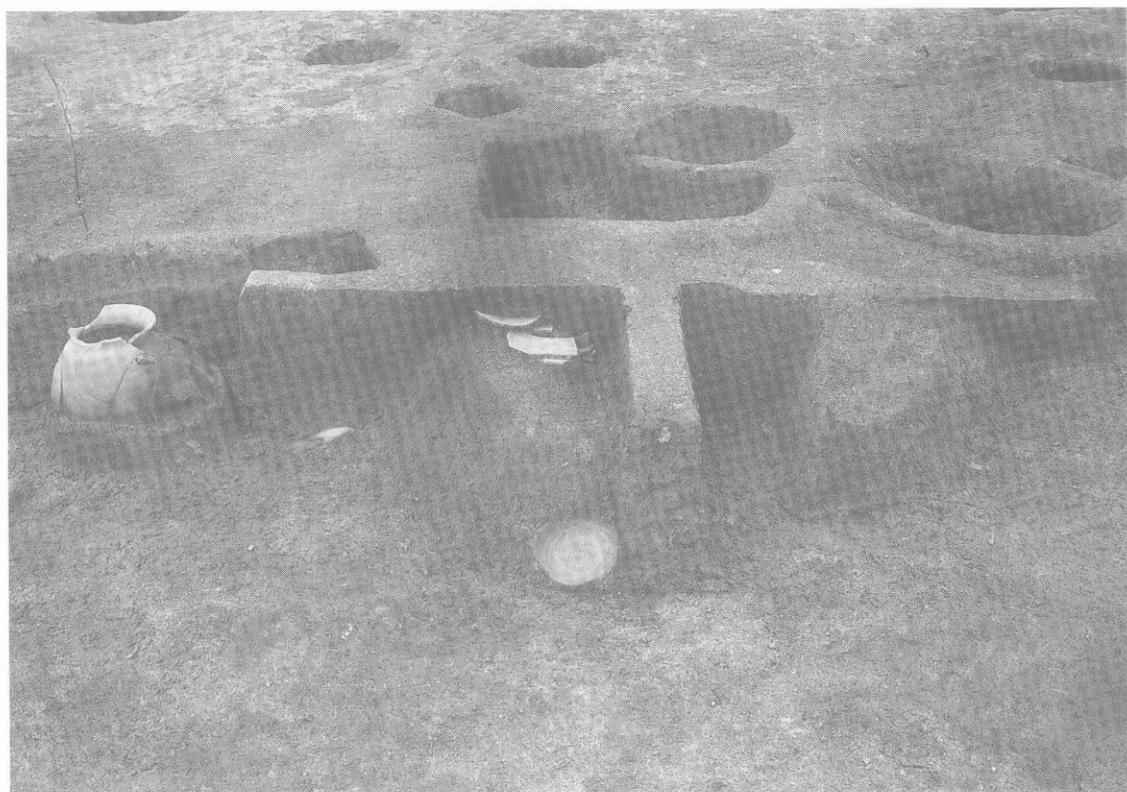
(2) 23号竪穴住居跡（南西から）



(1) 24号竪穴住居跡（南から）



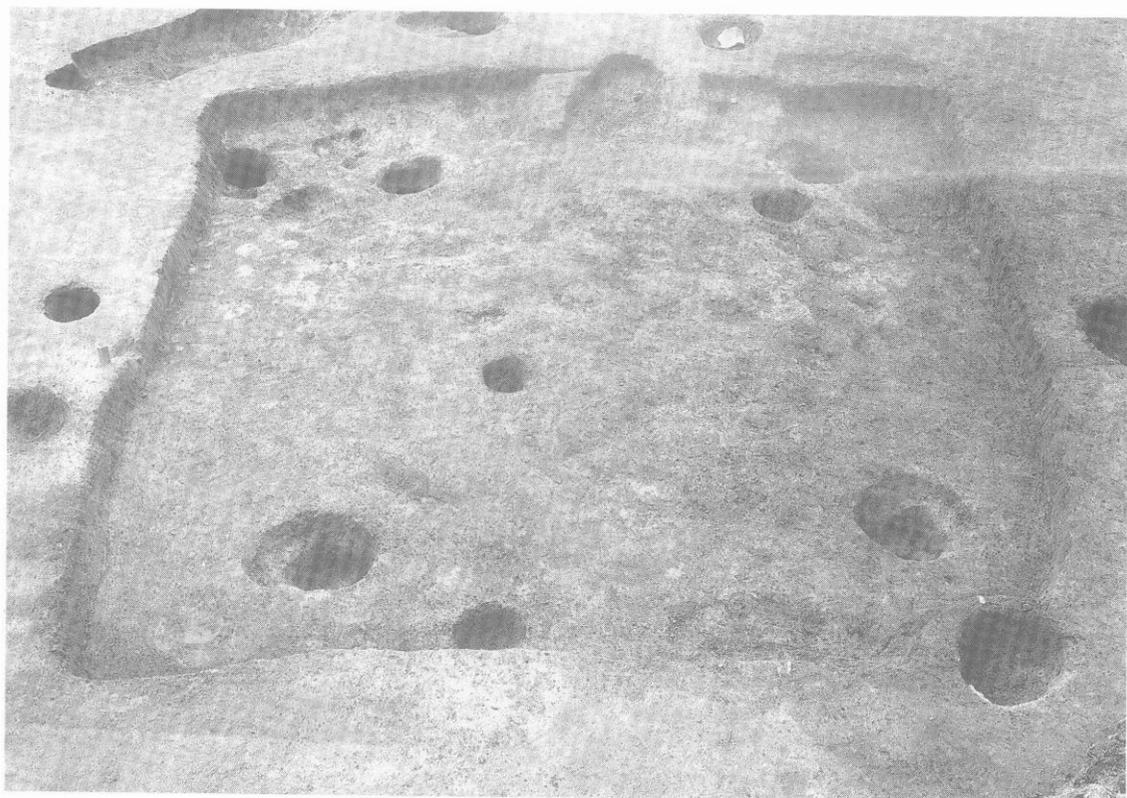
(2) 24号竪穴住居跡遺物出土状態（西から）



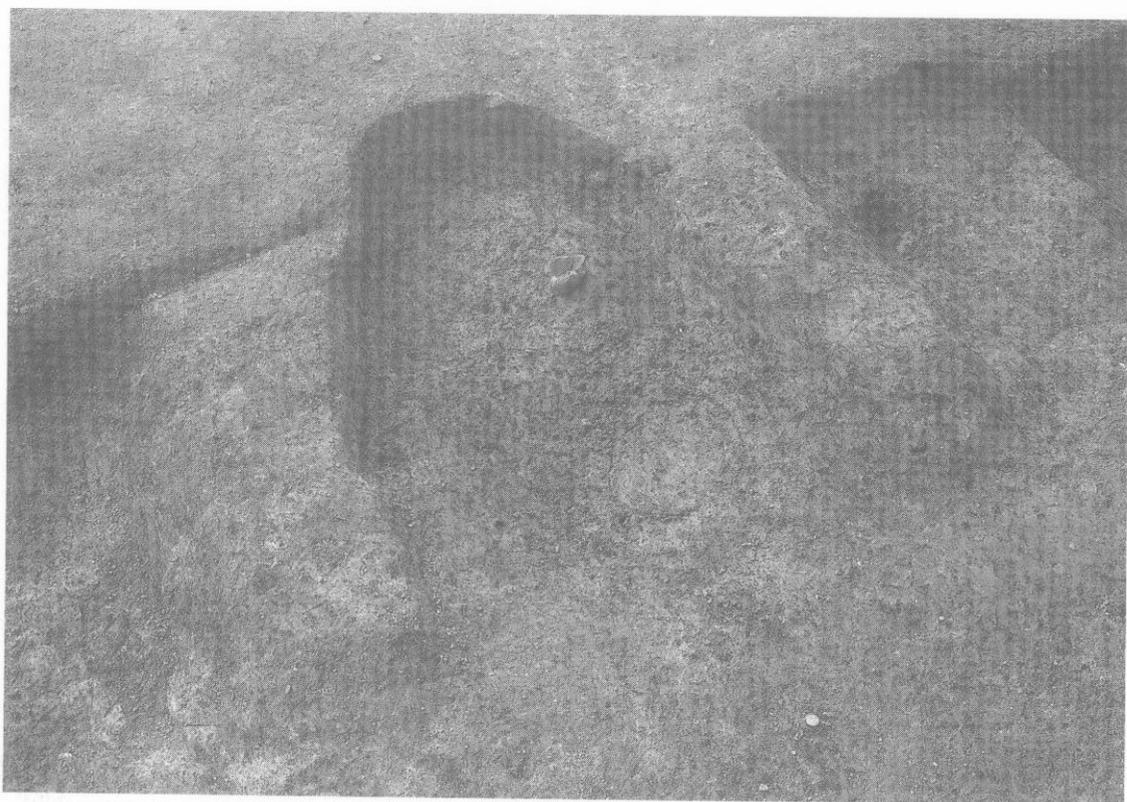
(1) 24号竖穴住居跡カマド検出状態（南から）



(2) 24号竖穴住居跡カマド完掘状態（南東から）



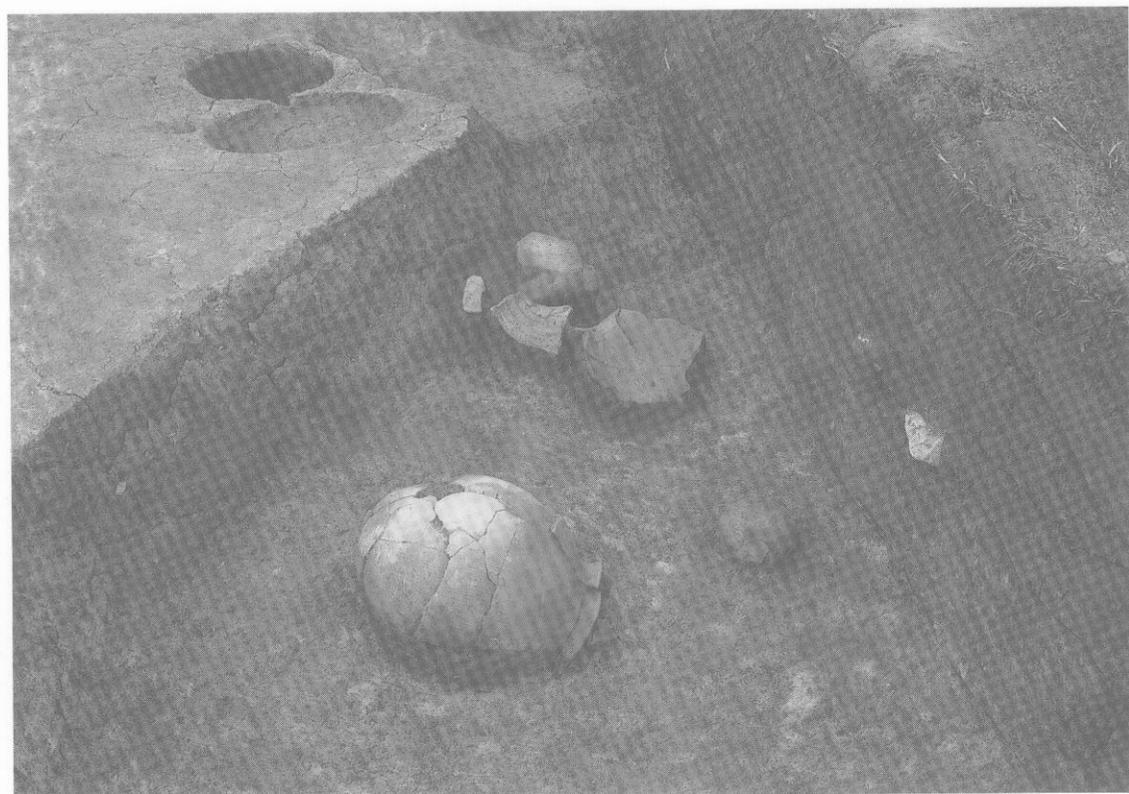
(1) 25号竖穴住居跡（南西から）



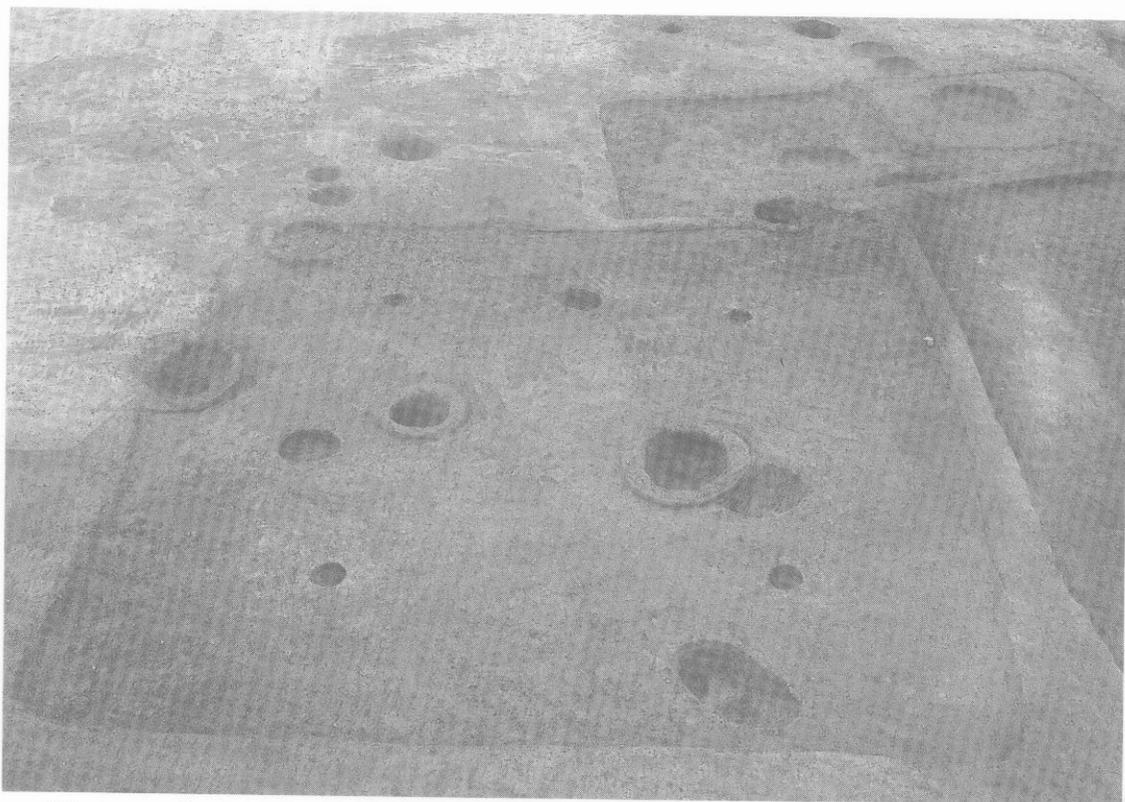
(2) 25号竖穴住居跡カマド（西から）



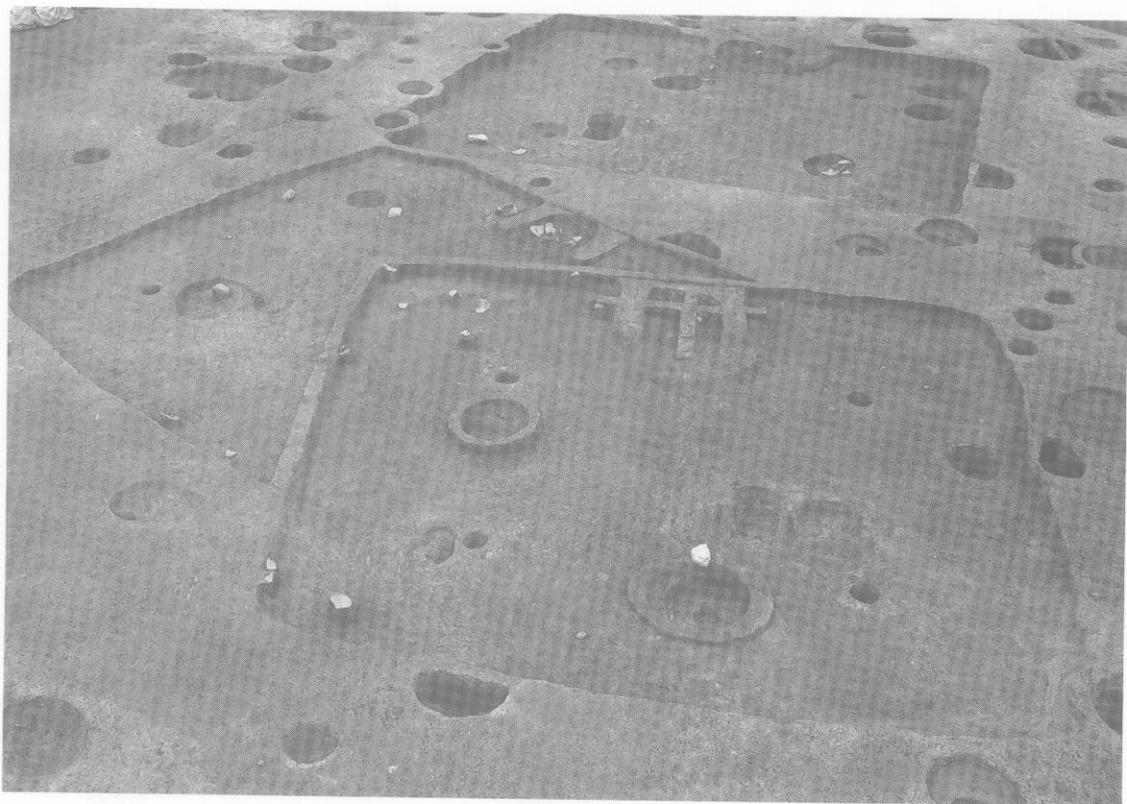
(1) 26号竪穴住居跡（西から）



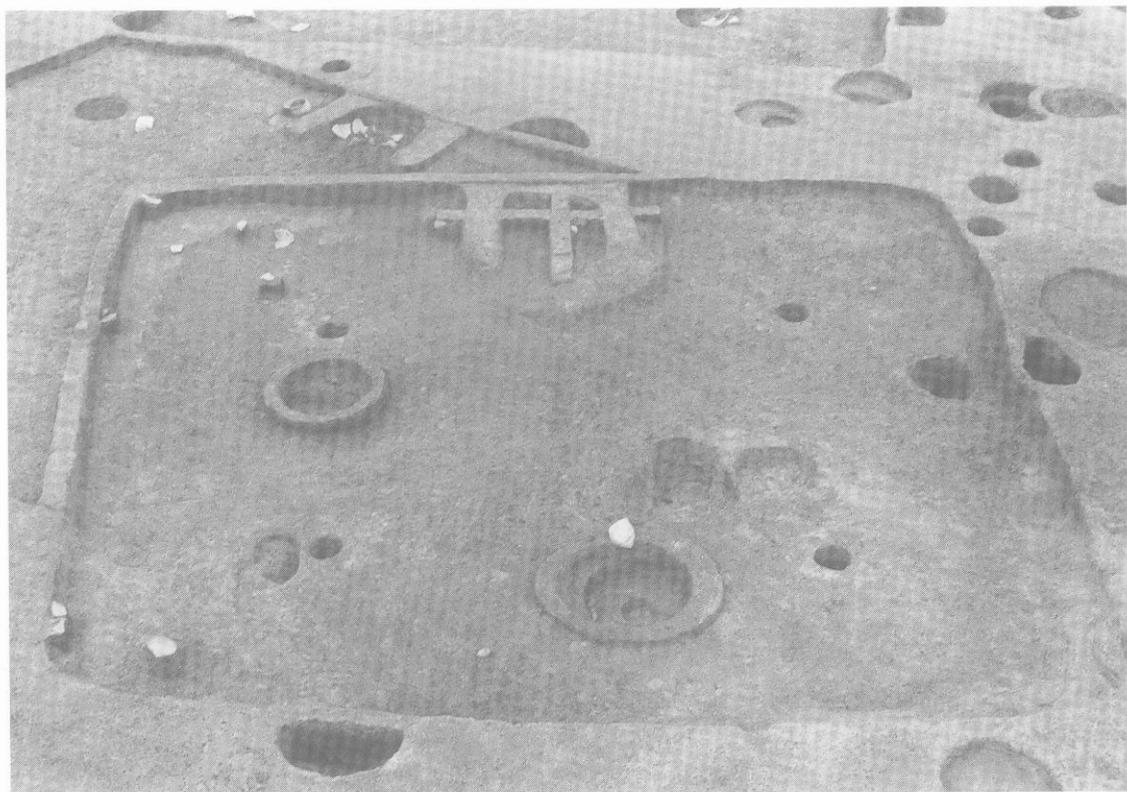
(2) 26号竪穴住居跡遺物出土状態（南から）



(1) 27・41号竖穴住居跡（南西から）



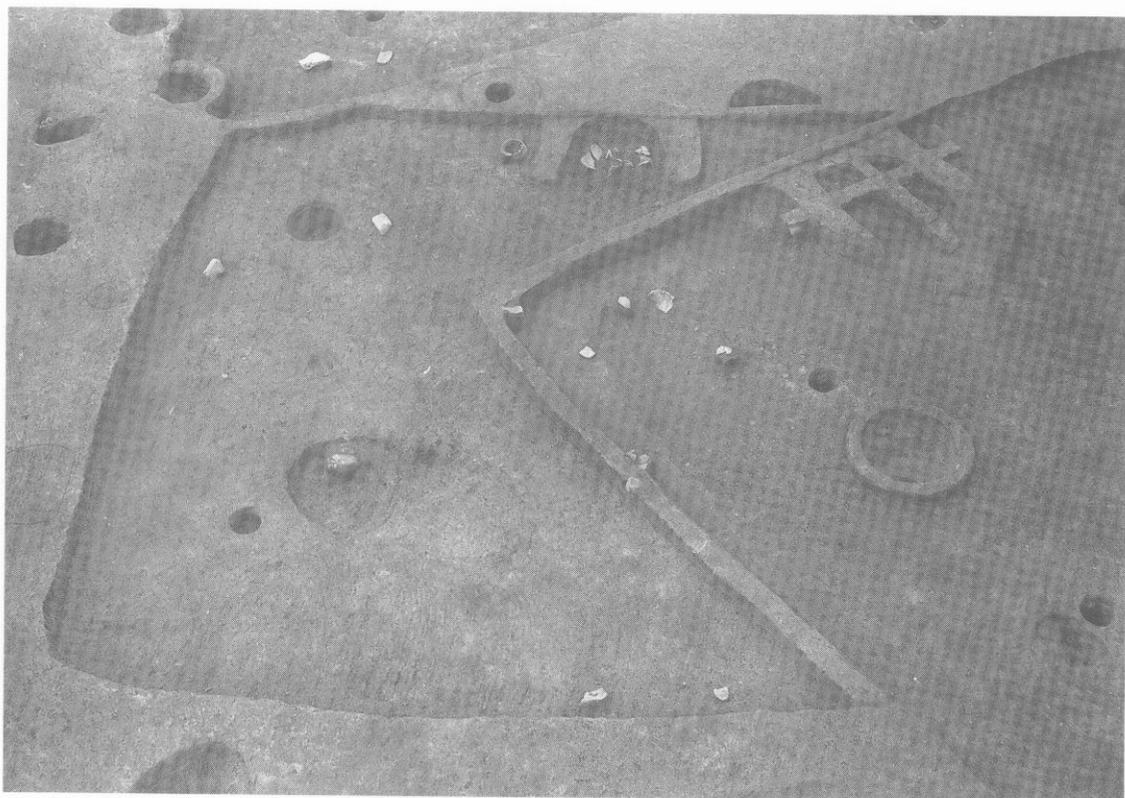
(2) 20・29・30号竖穴住居跡（南東から）



(1) 29号竪穴住居跡（南東から）



(2) 29号竪穴住居跡カマド（東から）



(1) 30号竖穴住居跡（南から）



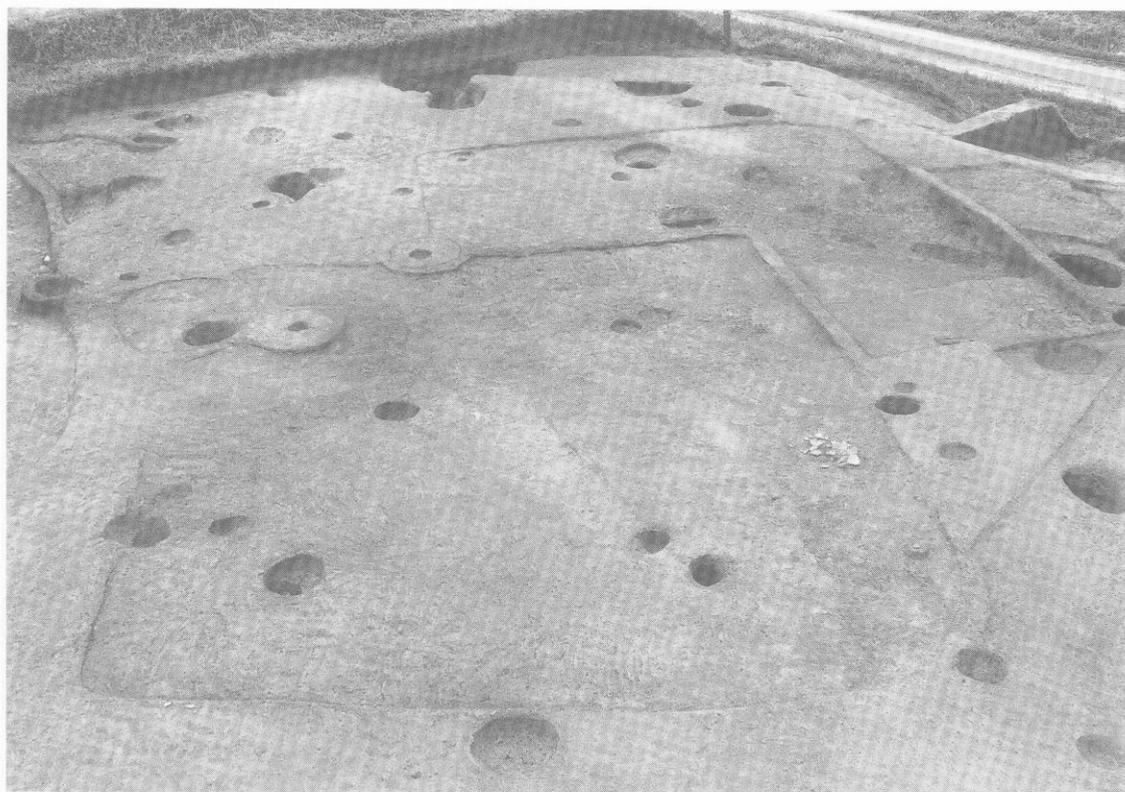
(2) 30号竖穴住居跡カマド（南東から）



(1) 33号竖穴住居跡（南東から）



(2) 35・36号竖穴住居跡（北西から）



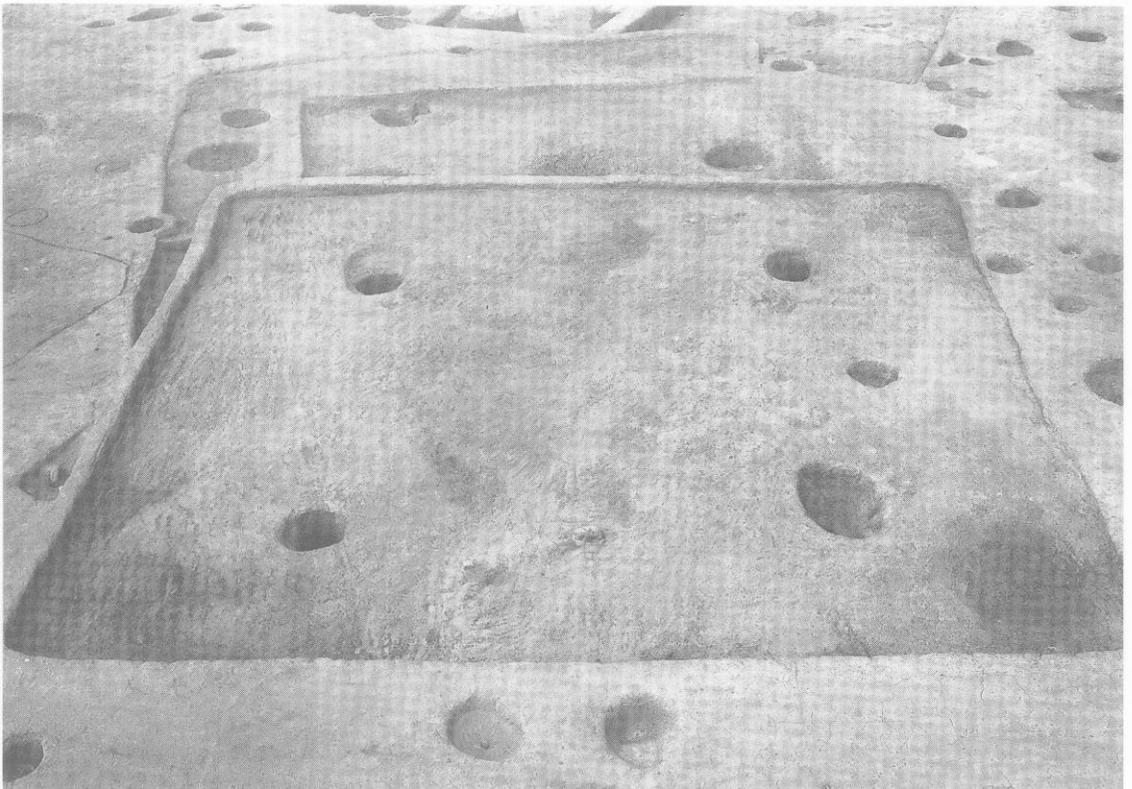
(1) 37号竖穴住居跡（北西から）



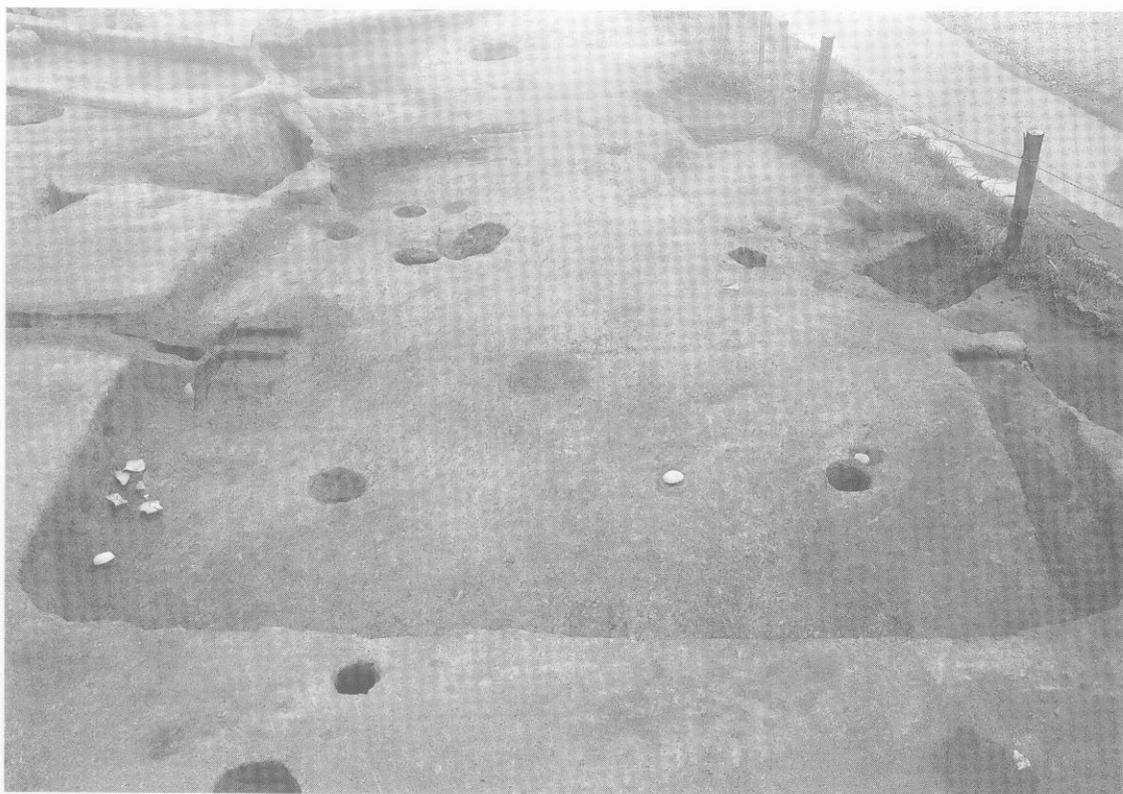
(2) 39号竖穴住居跡（北西から）



(1) 44号竪穴住居跡（南西から）



(2) 48号竪穴住居跡（南東から）



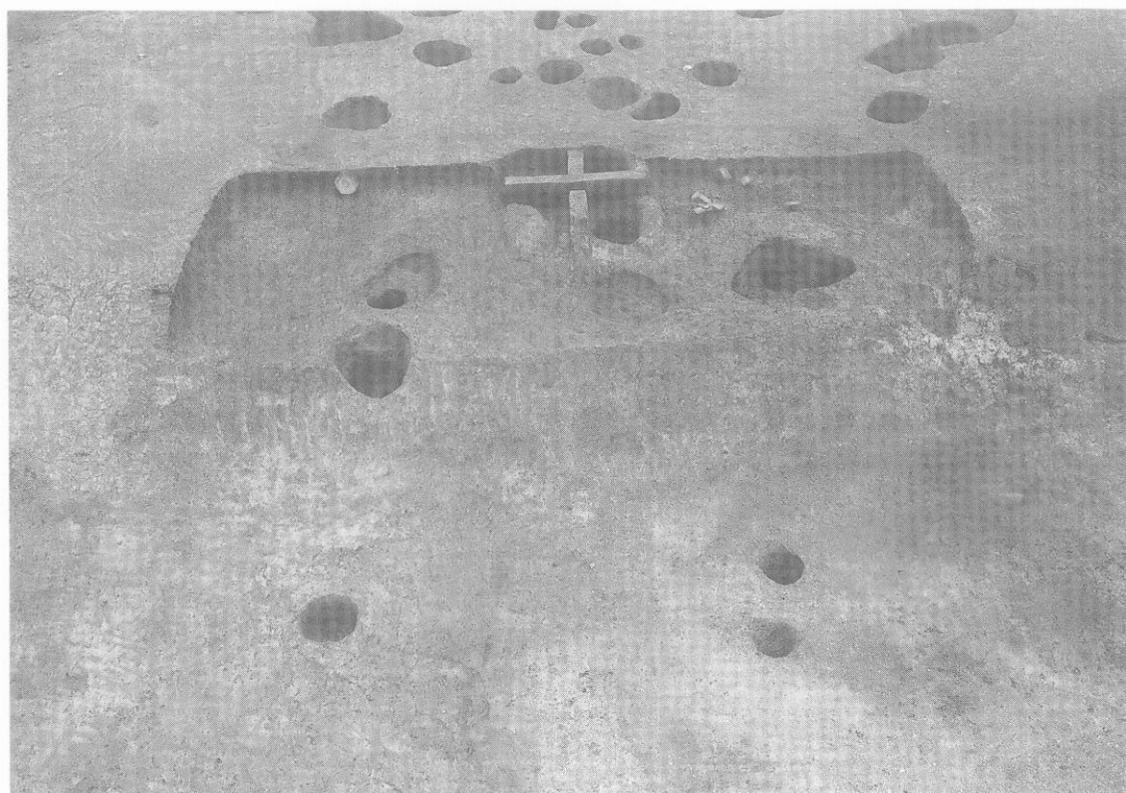
(1) 54号竪穴住居跡（西から）



(2) 54号竪穴住居跡カマド（南から）



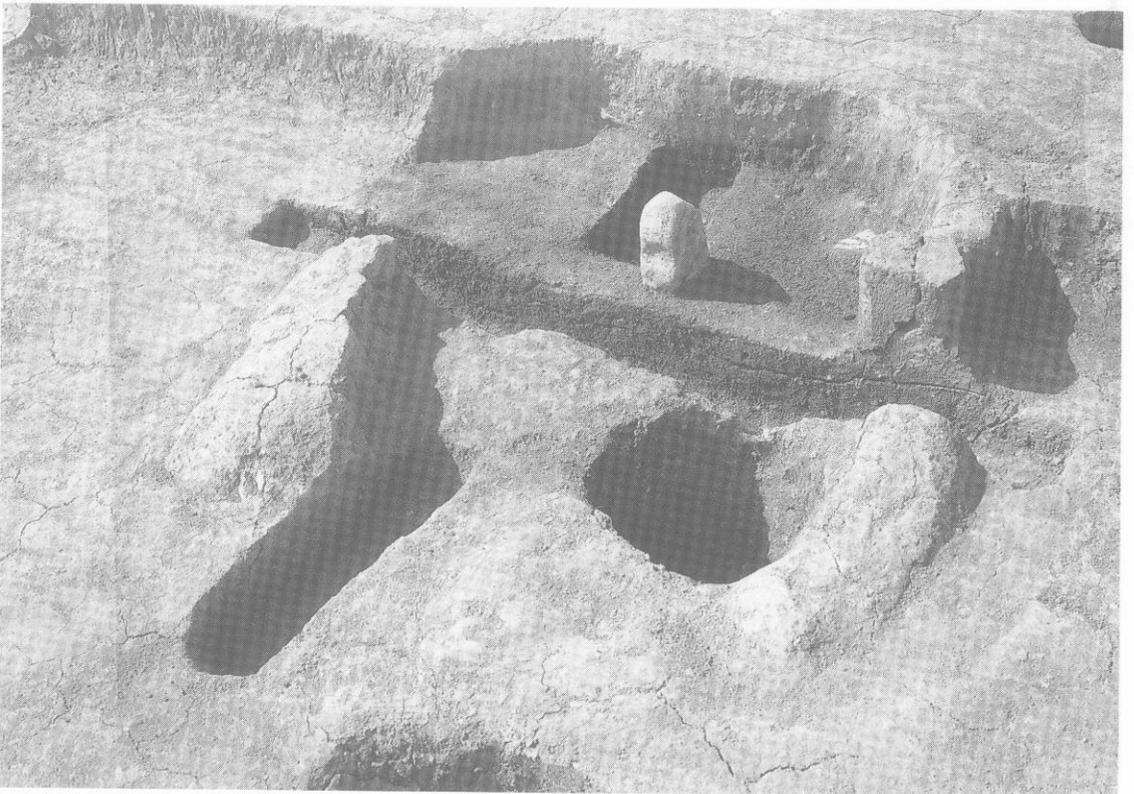
(1) 58号竪穴住居跡（南から）



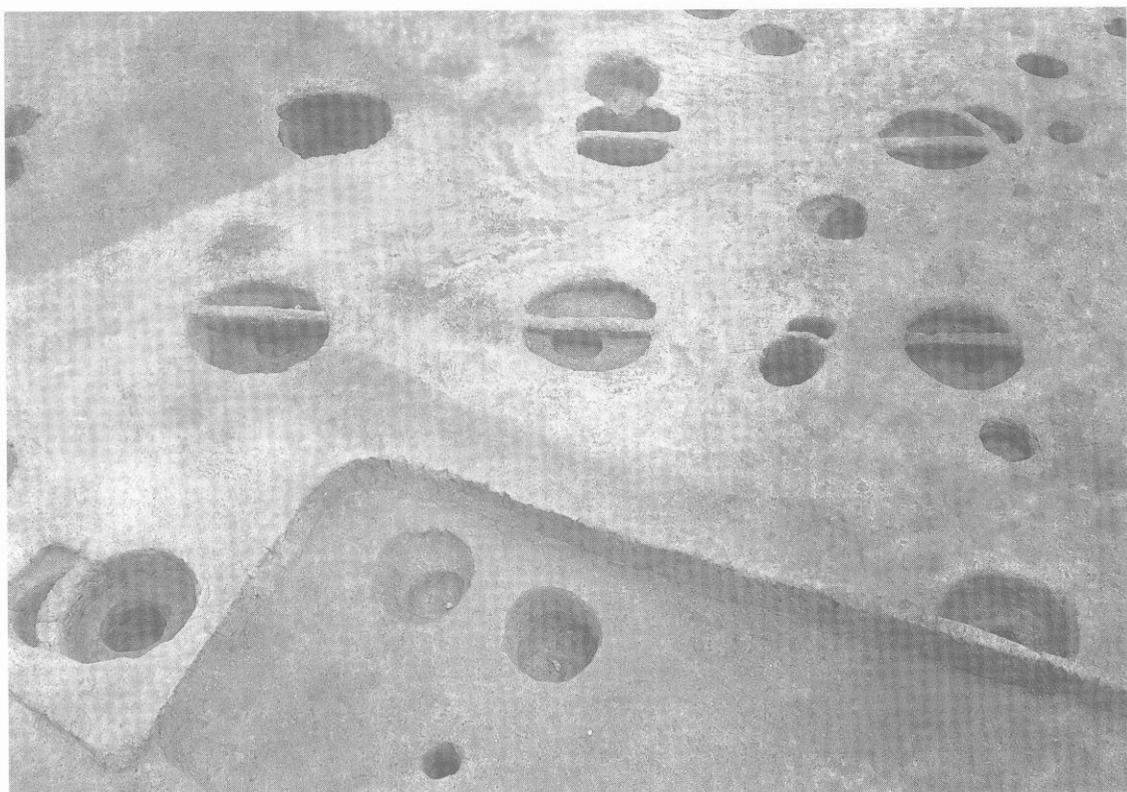
(2) 60号竪穴住居跡（南から）



(1) 60号竪穴住居跡カマド検出状態（南西から）



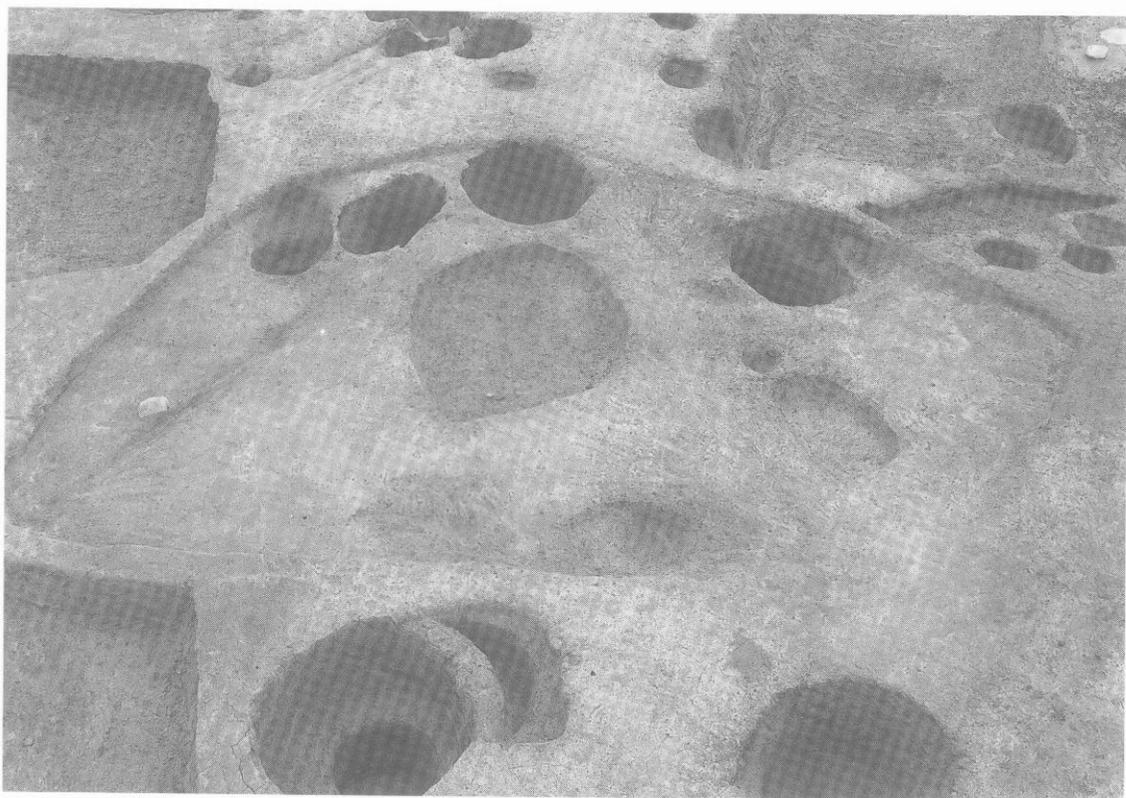
(2) 60号竪穴住居跡カマド完掘状態（南東から）



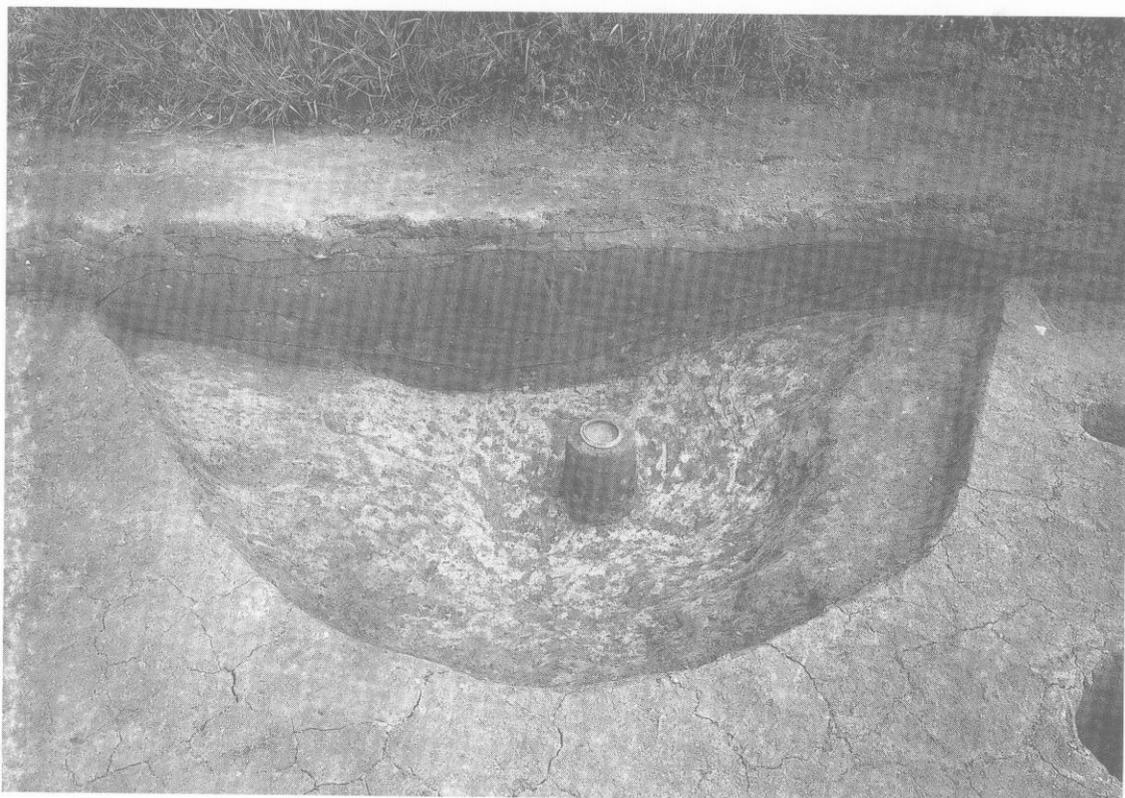
(1) 1号掘立柱建物跡（西から）



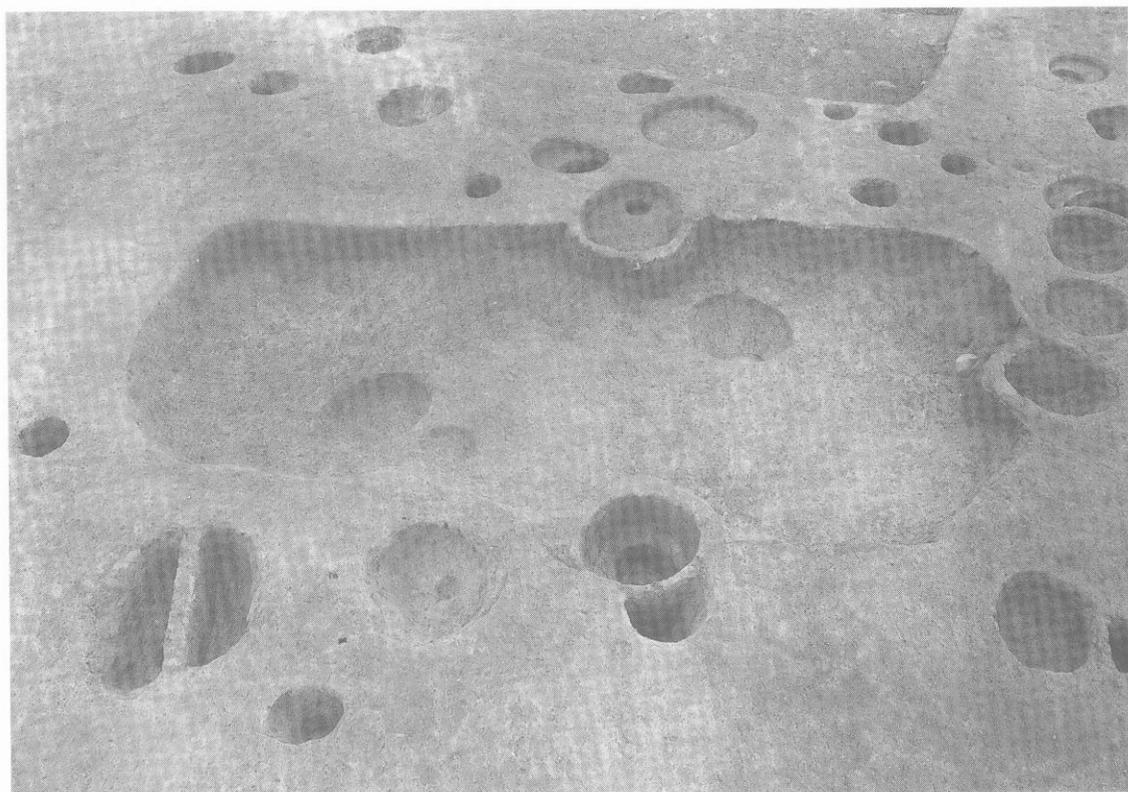
(2) 2号掘立柱建物跡（南西から）



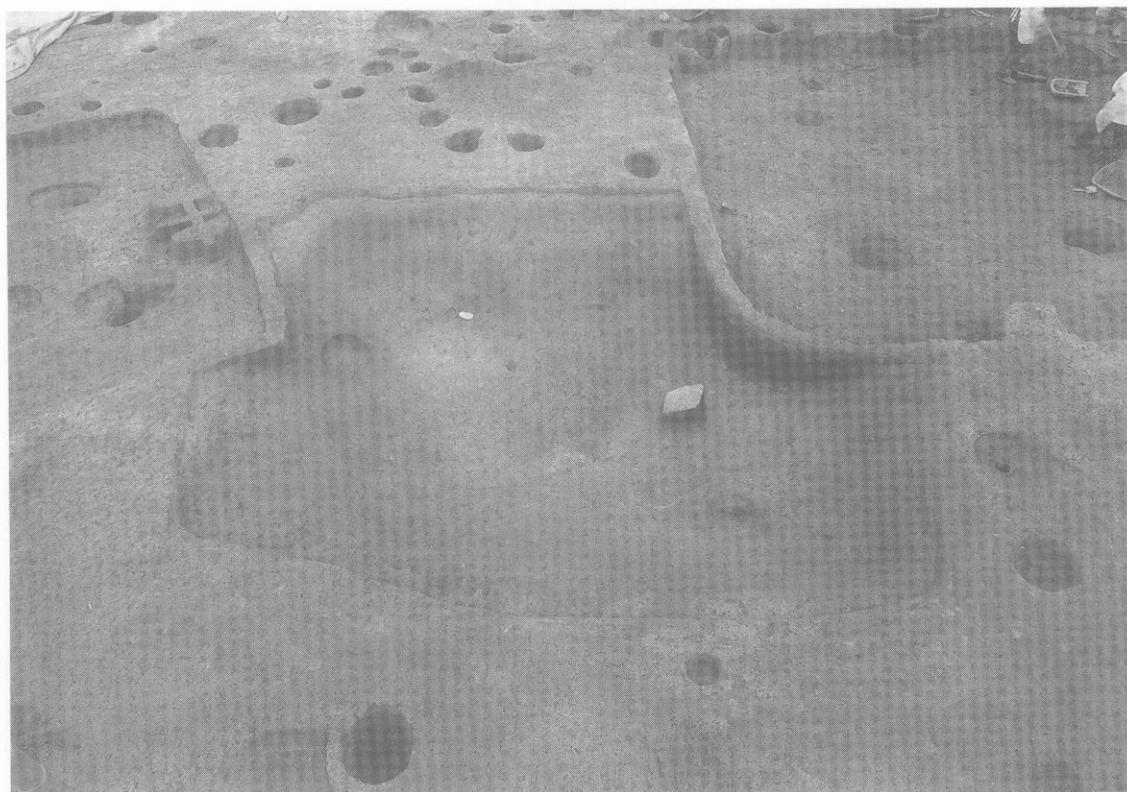
(1) 1号土壙（東から）



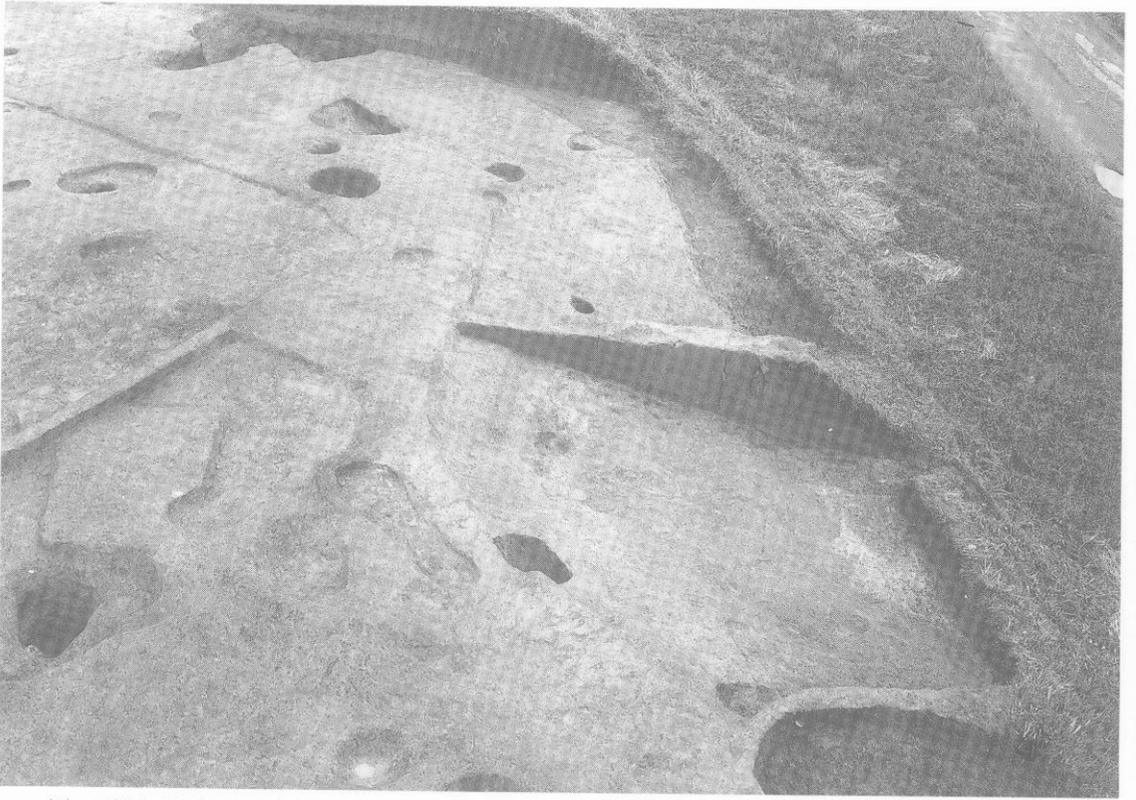
(2) 2号土壙（西から）



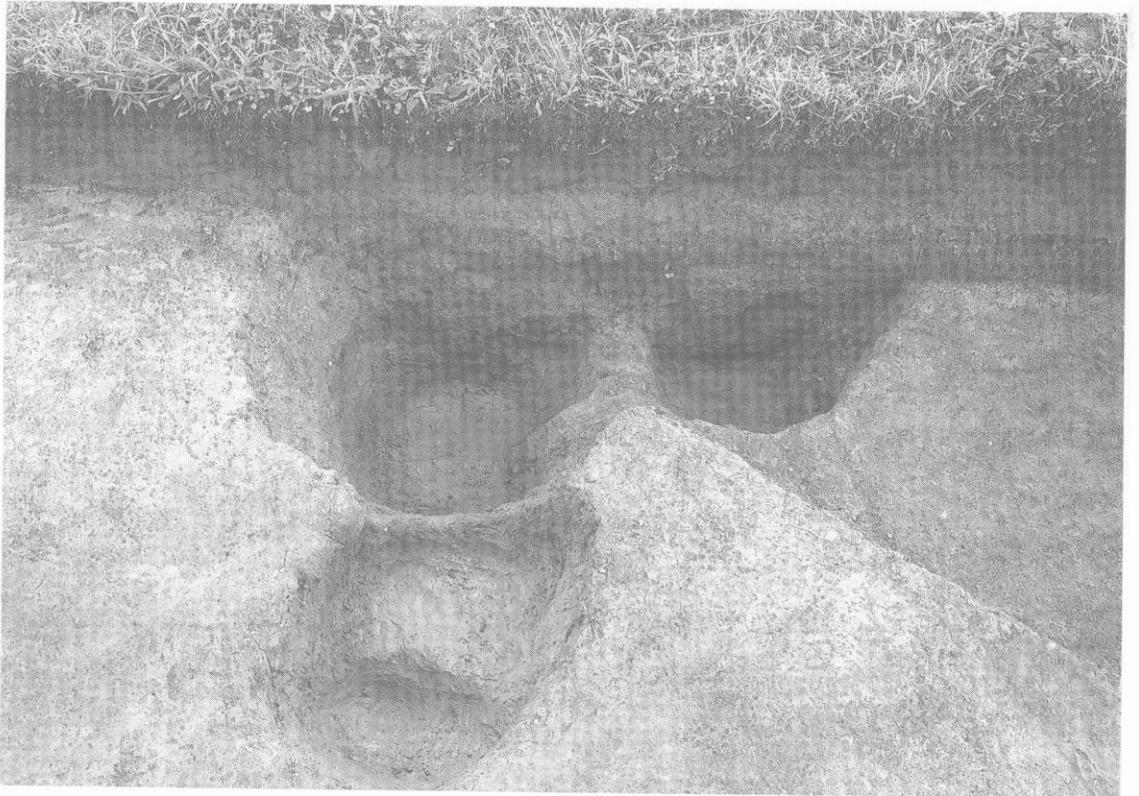
(1) 3号土壙（北東から）



(2) 4号土壙（東から）



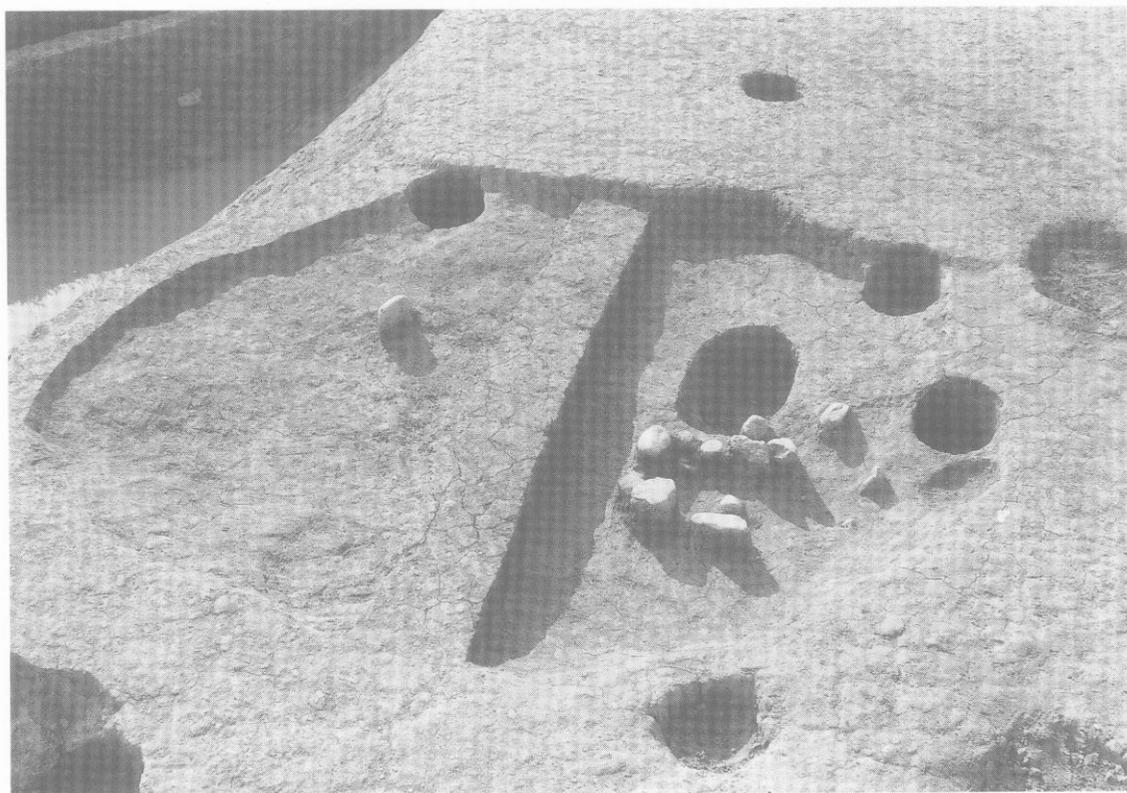
(1) 5号土壇（西から）



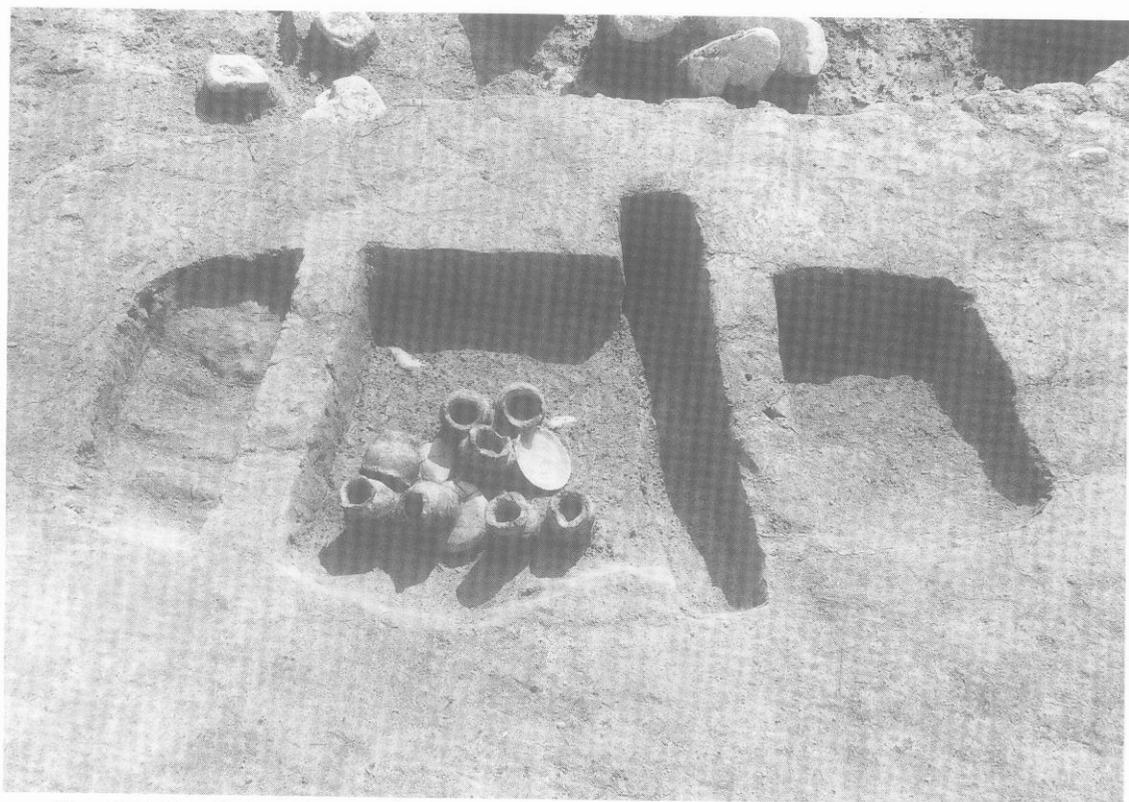
(2) 6号土壇（西から）



(1) 7号土壇（南から）



(2) 8号土壇（南東から）



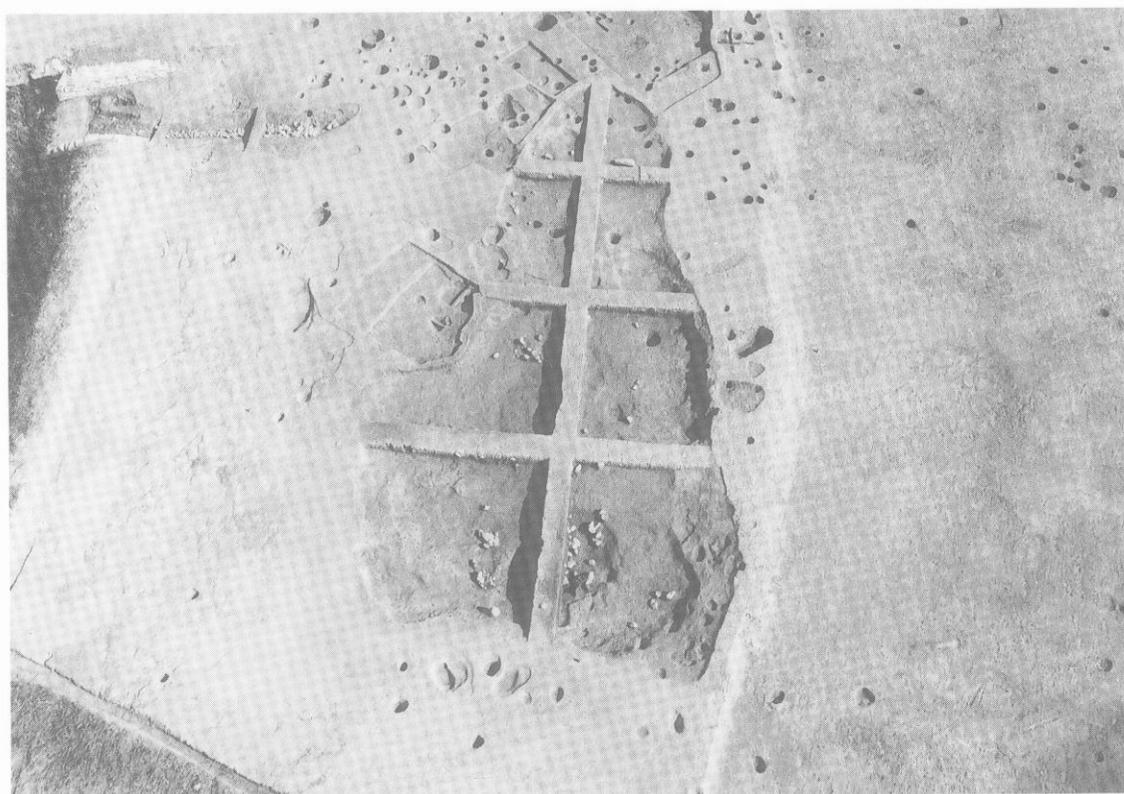
(1) 9号土壇（北東から）



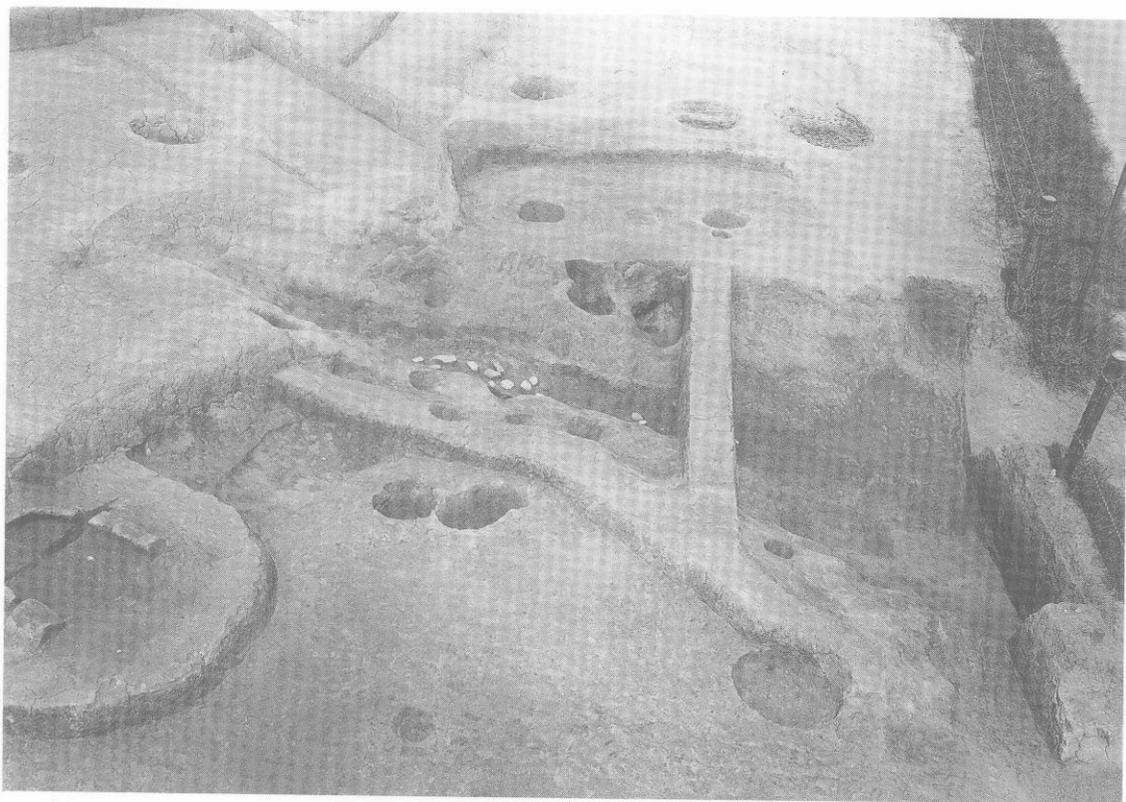
(2) 9号土壇遺物出土状態（北から）



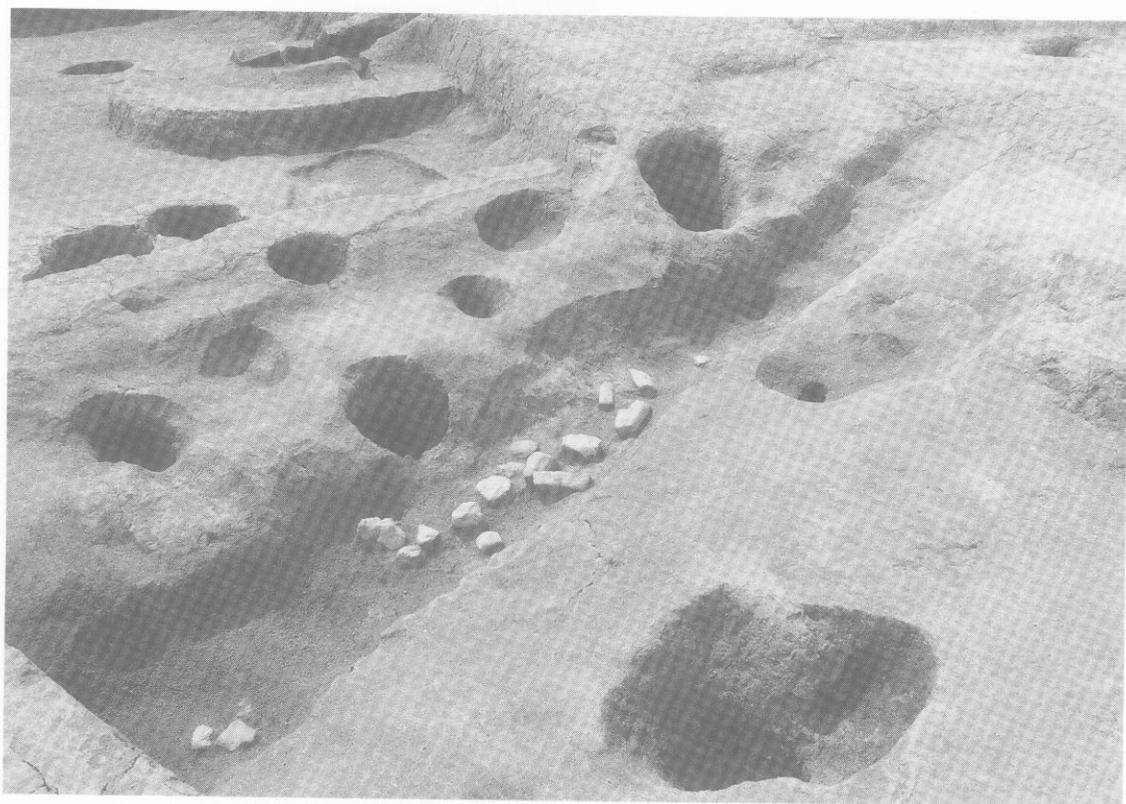
(1) 仮塚南遺跡南地区全景（北から）



(2) 11号土壌（西から）



(1) 1号道状遺構.1 (西から)



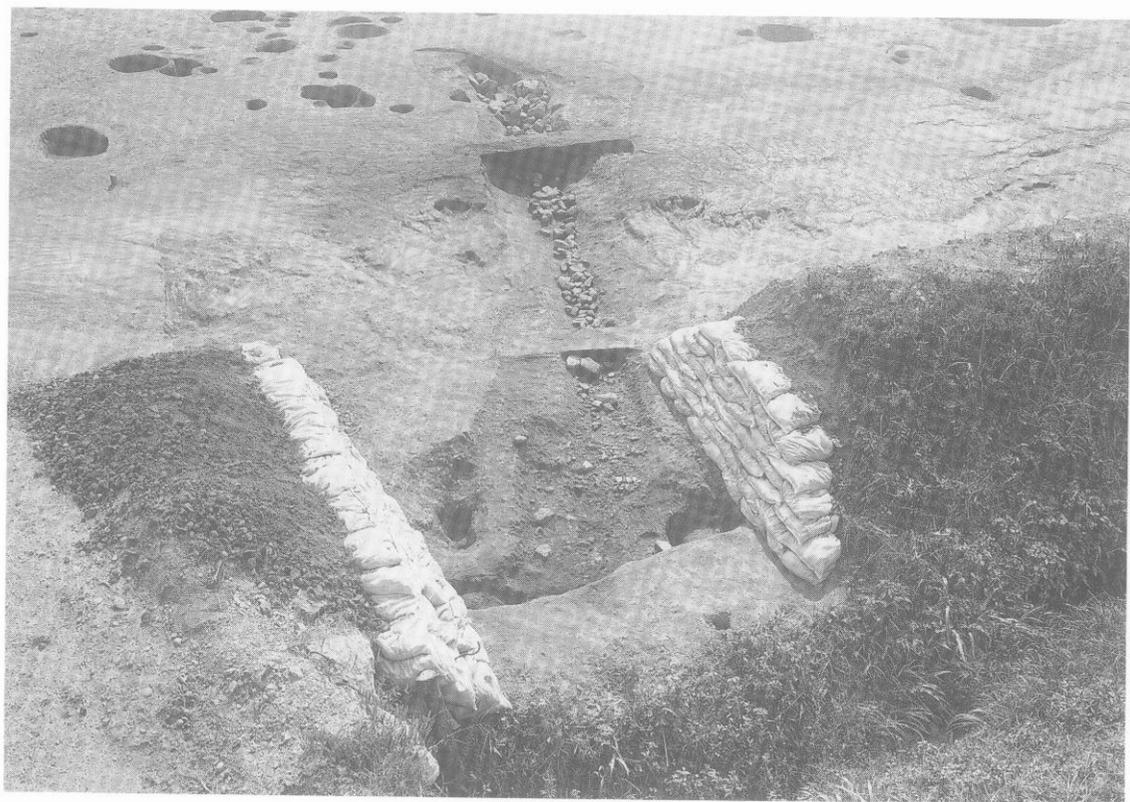
(2) 1号道状遺構.2 (南東から)



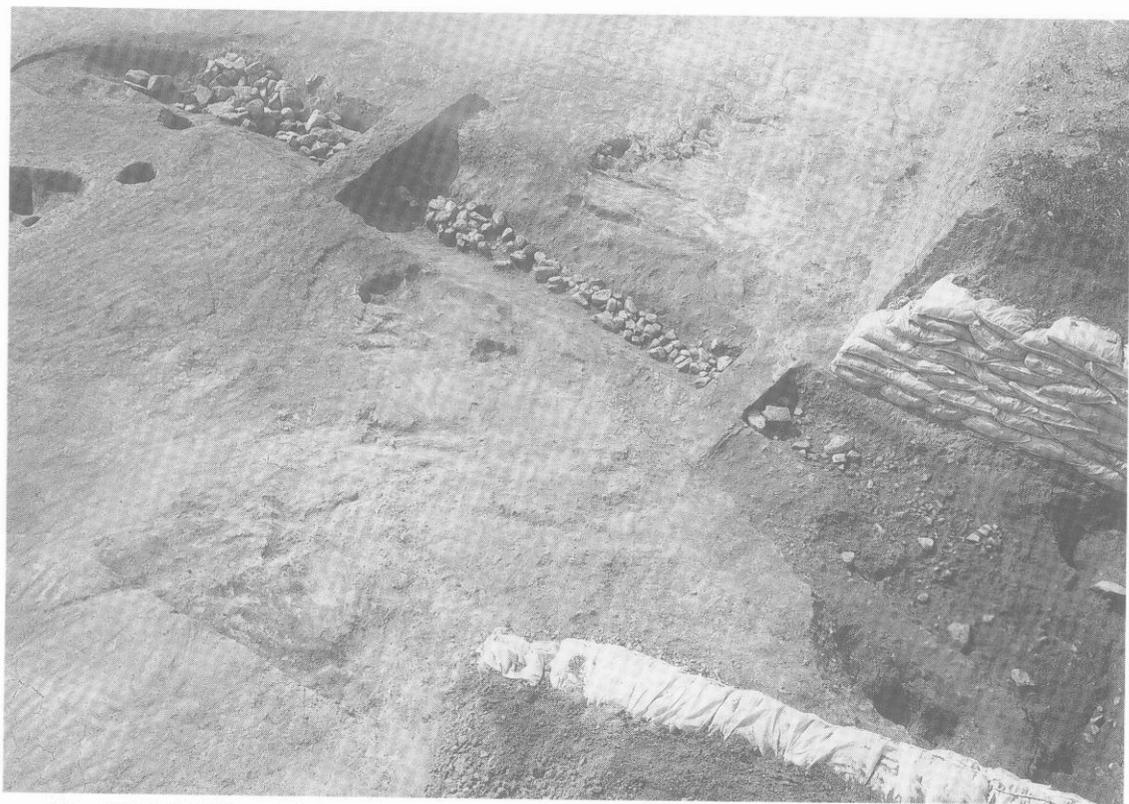
(1) 1号道状遺構.3 (北東から)



(2) 1号道状遺構.4 (南から)



(1) 2号道状遺構.1 (北から)



(2) 2号道状遺構.2 (北東から)



(1) 2号道状遺構土層断面.1 (北西から)



(2) 2号道状遺構土層断面.2 (北から)



(1) 炭焼窯跡全景.1 (北東から)



(2) 炭焼窯跡全景.2 (東から)



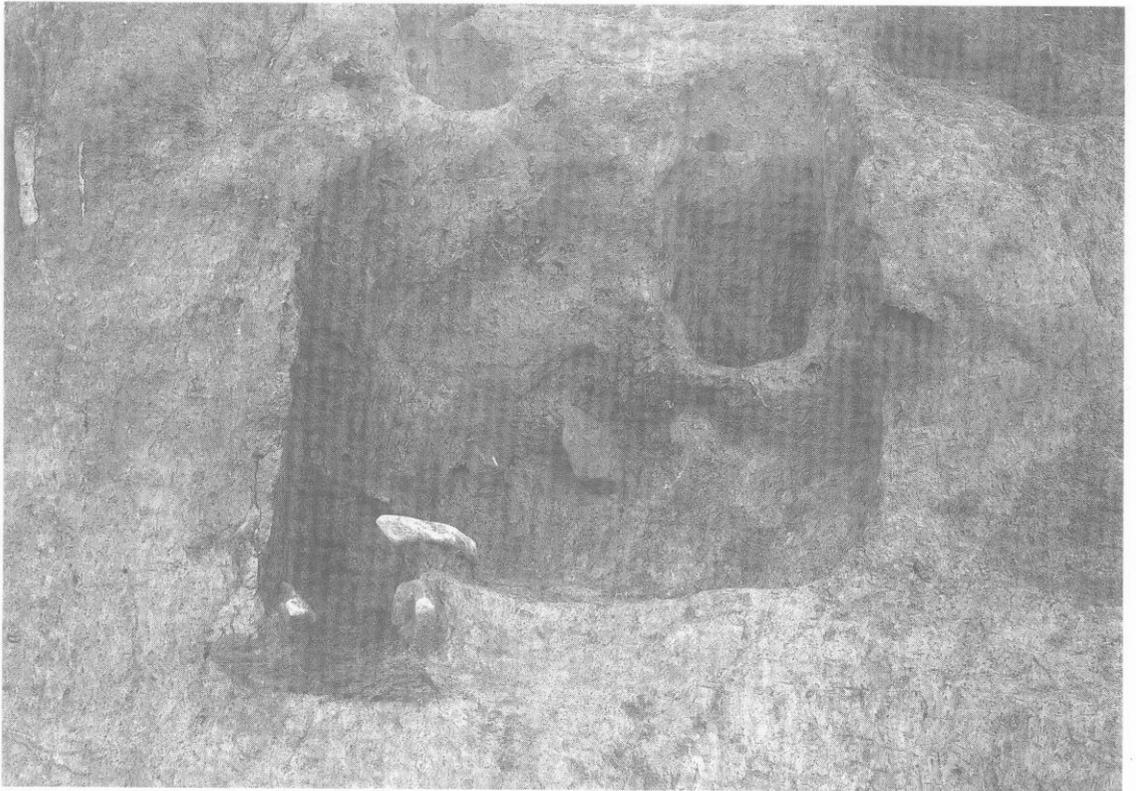
(1) 1・2号炭焼窯跡（東から）



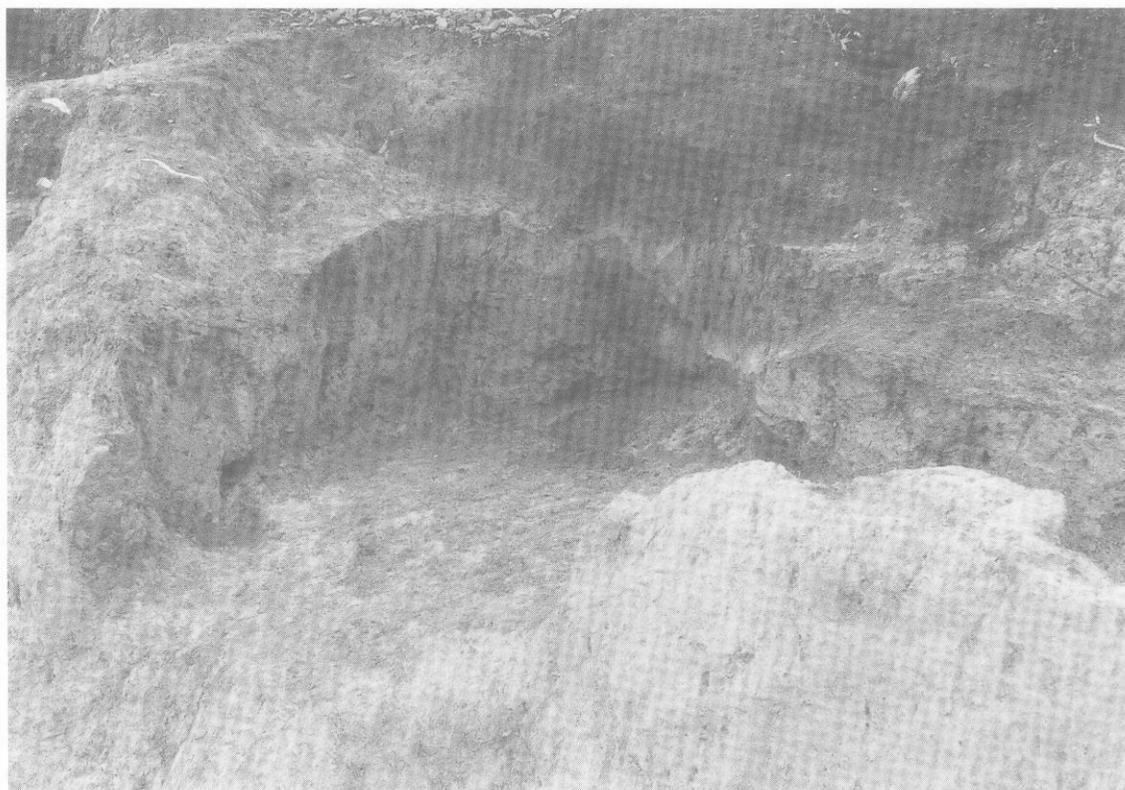
(2) 2号炭焼窯跡土層断面（東から）



(1) 1号炭焼窯跡土層断面（東から）



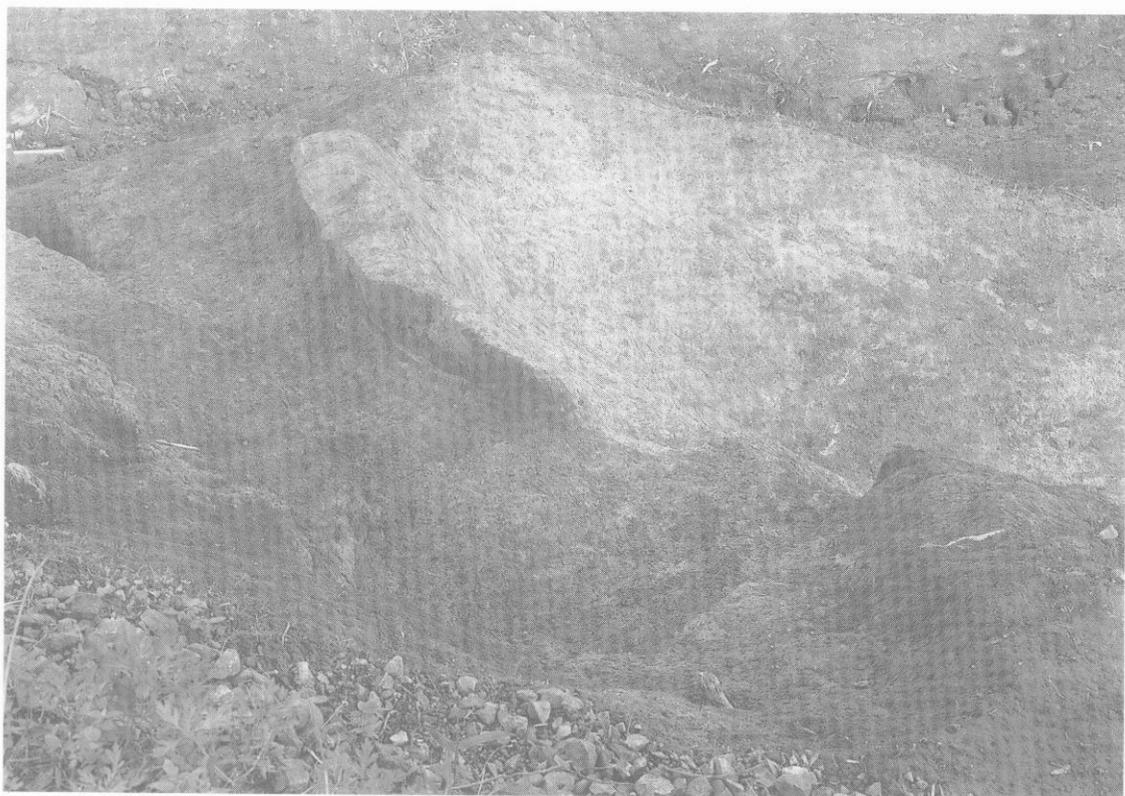
(2) 1号炭焼窯跡完掘状態（東から）



(1) 3号炭焼窯跡.1 (北東から)



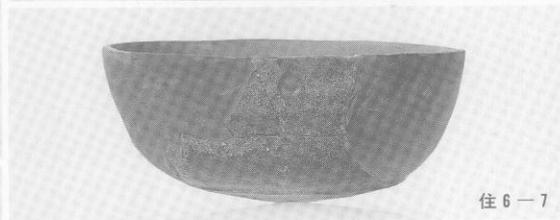
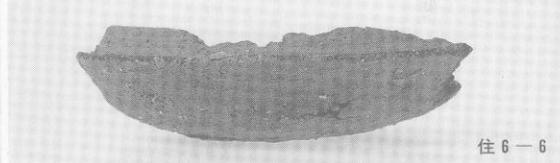
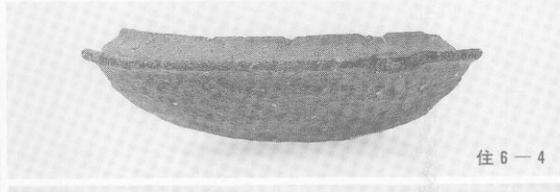
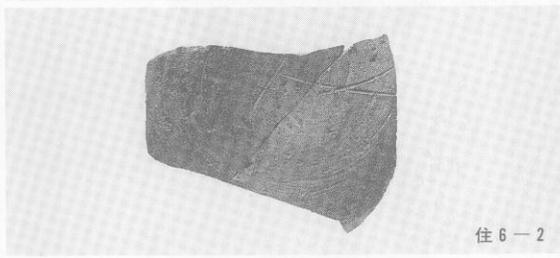
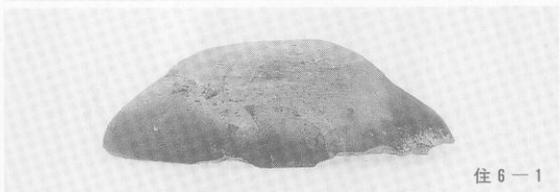
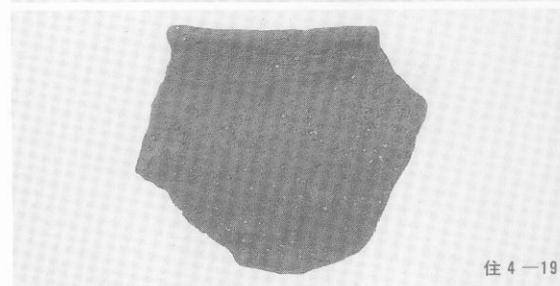
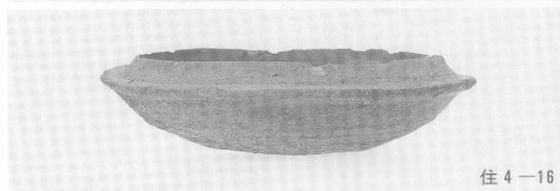
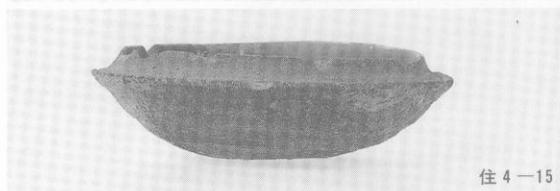
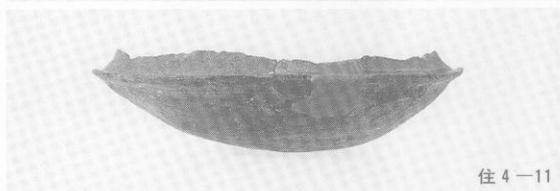
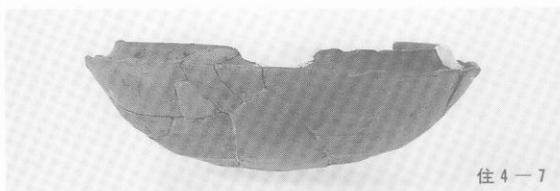
(2) 3号炭焼窯跡.2 (南から)



(1) 3号炭焼窯跡.3 (南西から)



(2) 4号炭焼窯跡 (北から)



古墳時代竪穴住居跡出土土器. 1



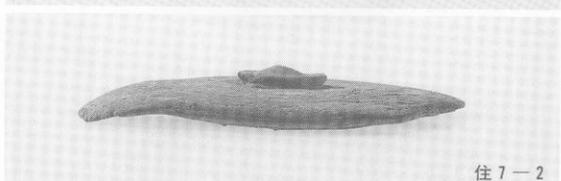
住6-10



住6-16



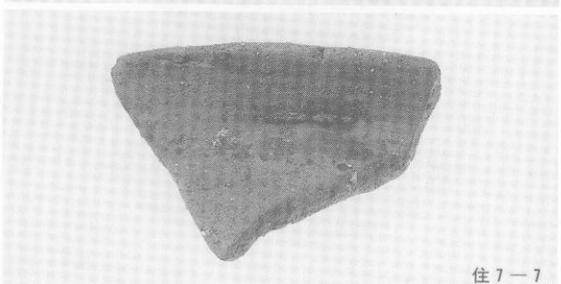
住6-12



住7-2



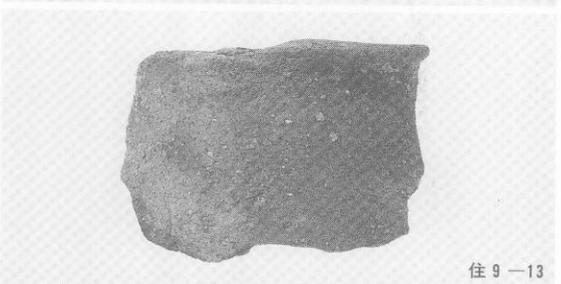
住6-13



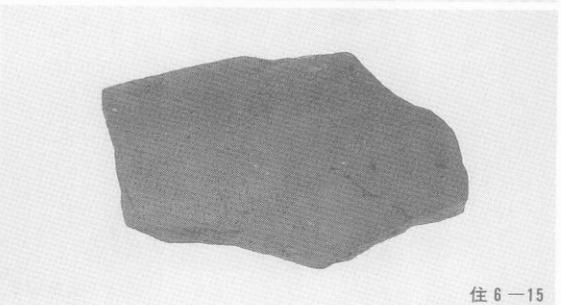
住7-7



住6-14



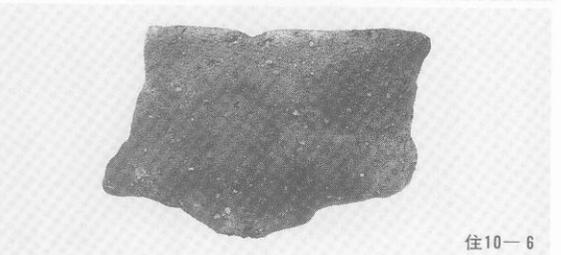
住9-13



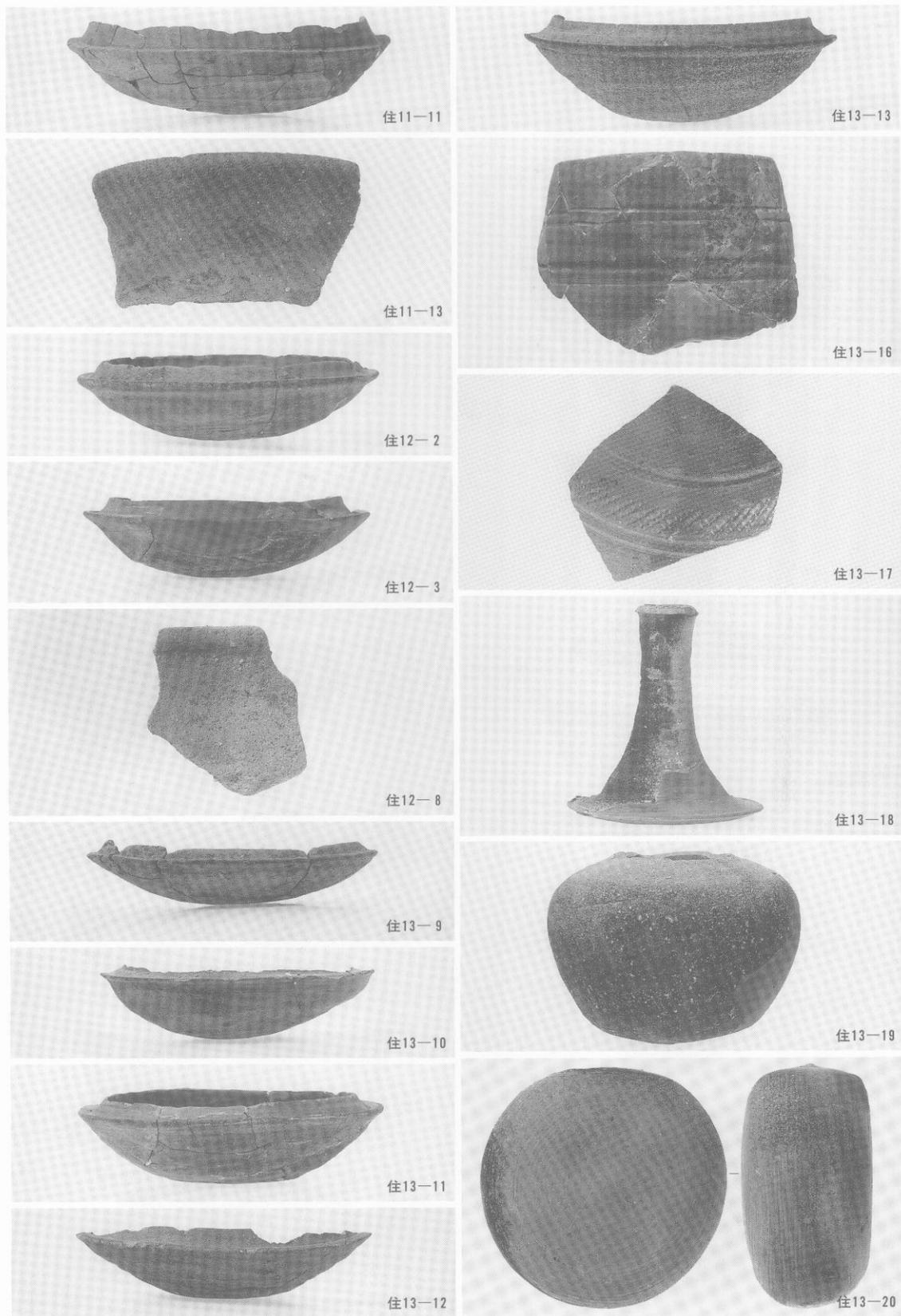
住6-15



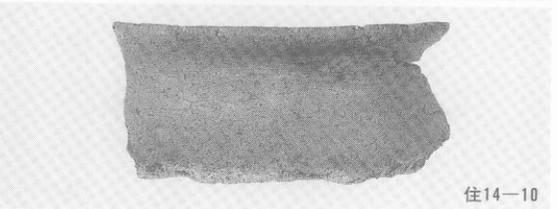
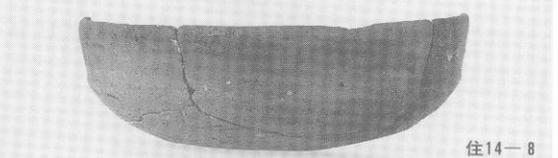
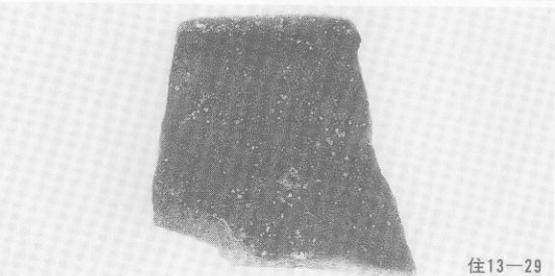
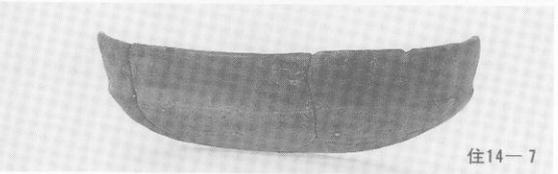
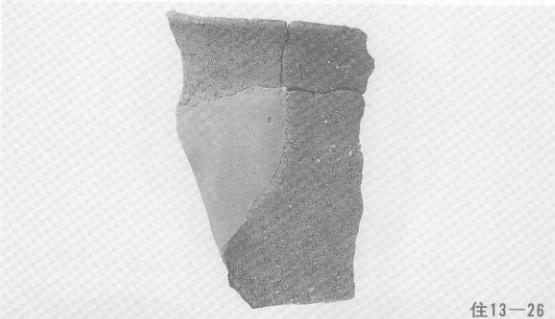
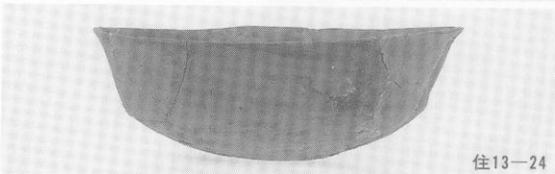
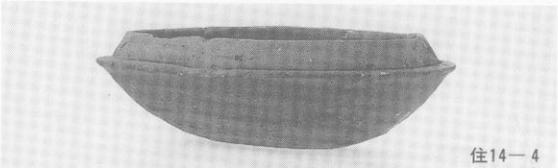
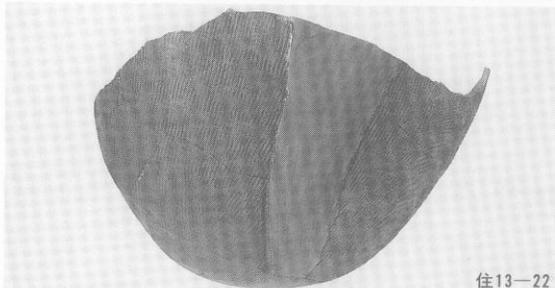
住9-14



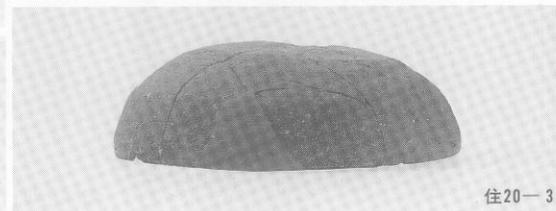
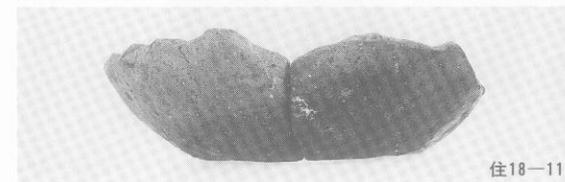
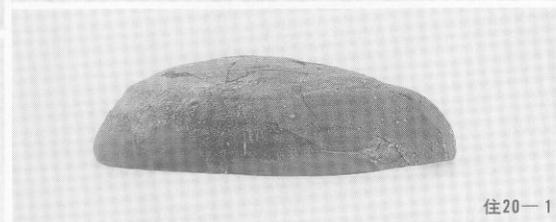
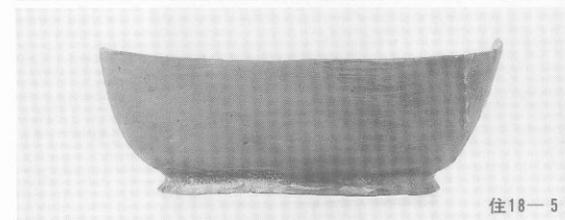
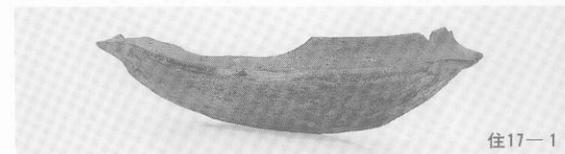
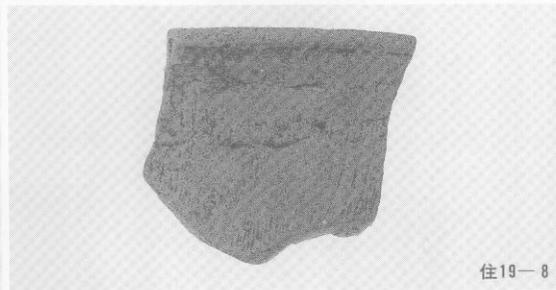
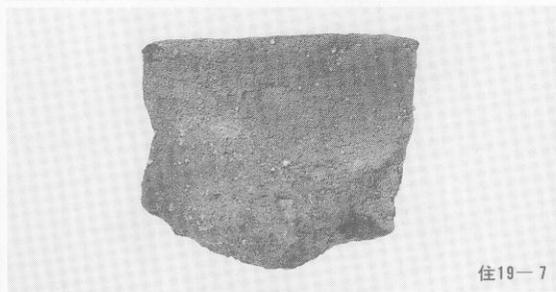
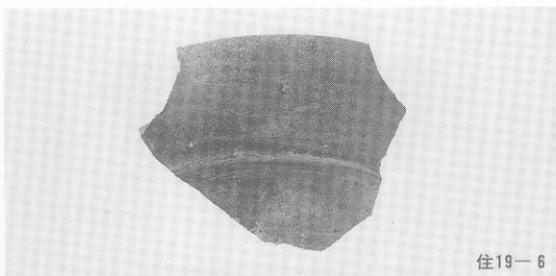
住10-6



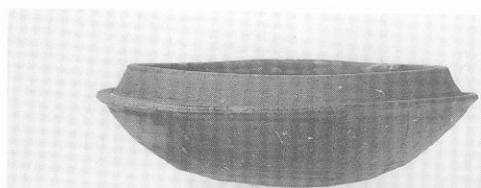
古墳時代竪穴住居跡出土土器. 3



古墳時代竪穴住居跡出土土器.4



古墳時代竪穴住居跡出土土器.5



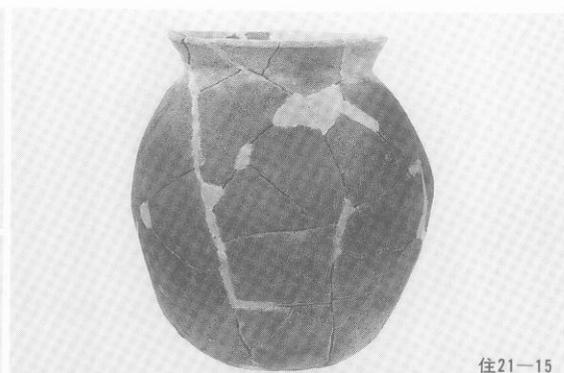
住21-4



住21-5



住21-6



住21-15



住22-1



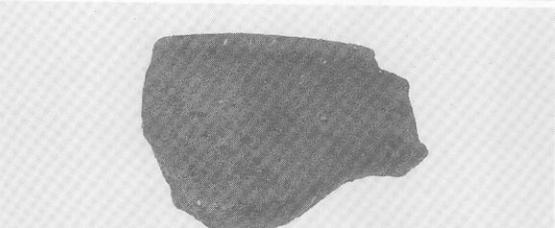
住21-7



住21-11



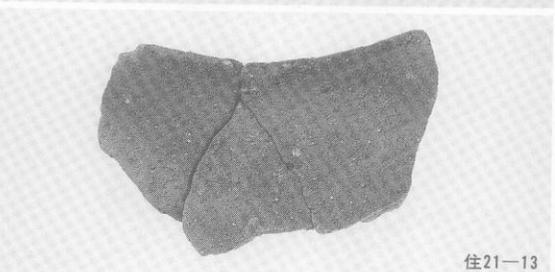
住22-5



住21-12



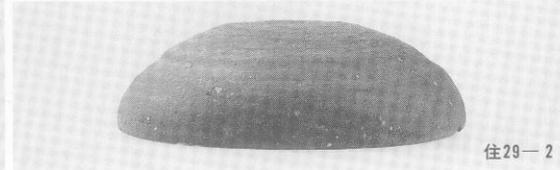
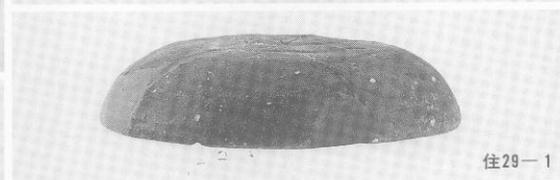
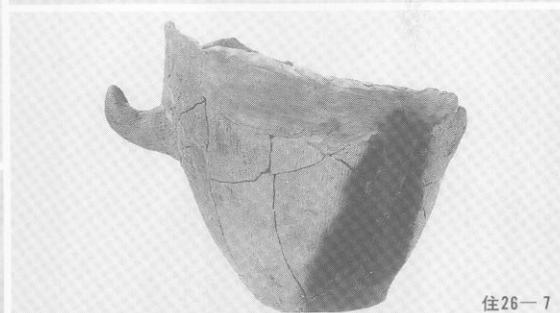
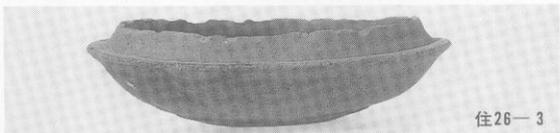
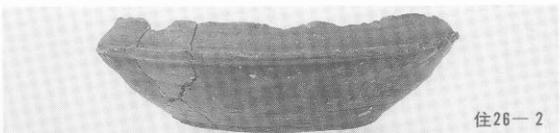
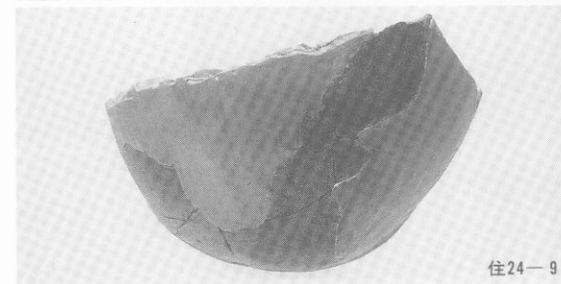
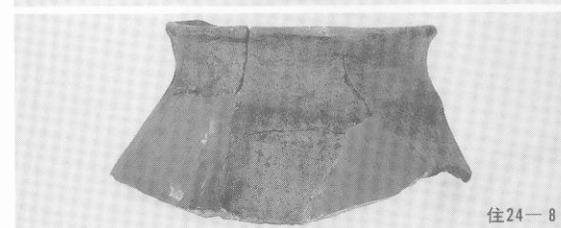
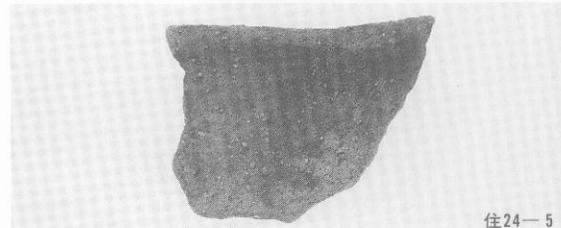
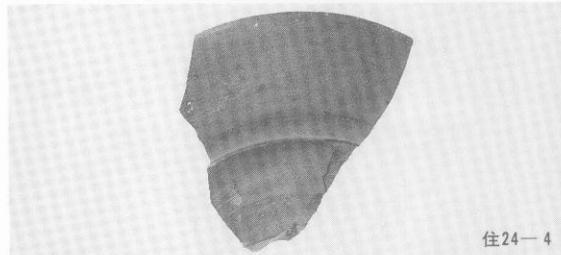
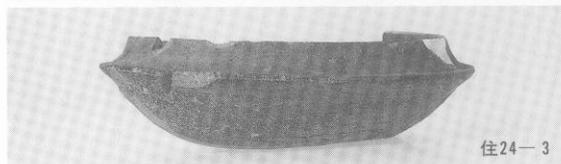
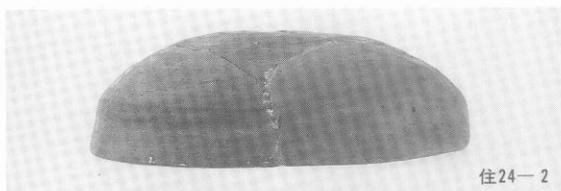
住22-6



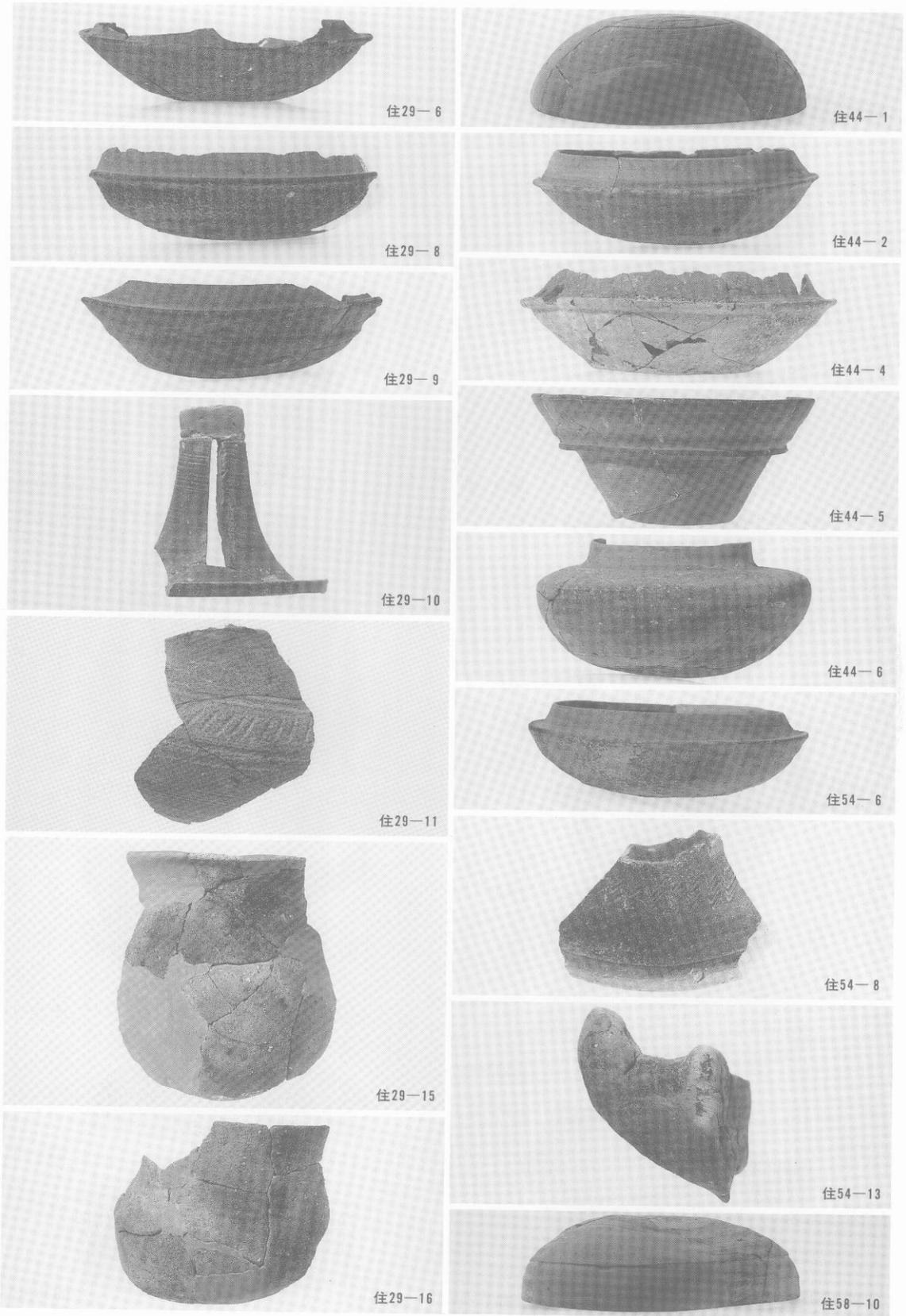
住21-13



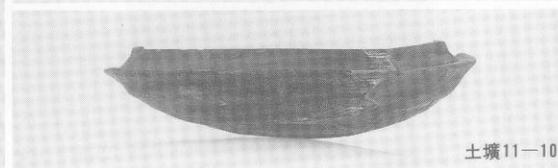
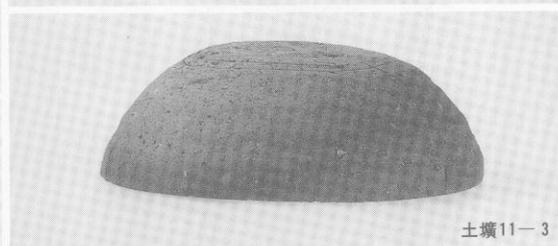
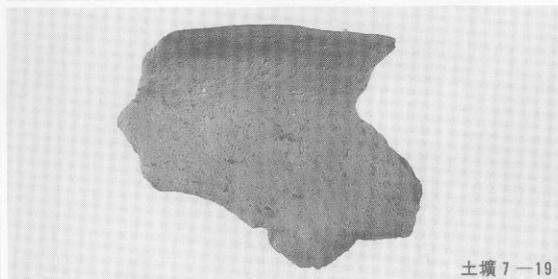
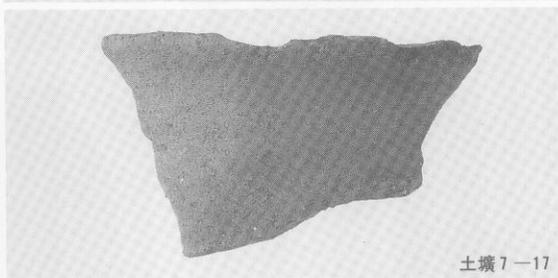
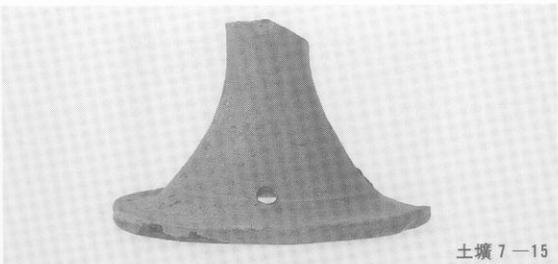
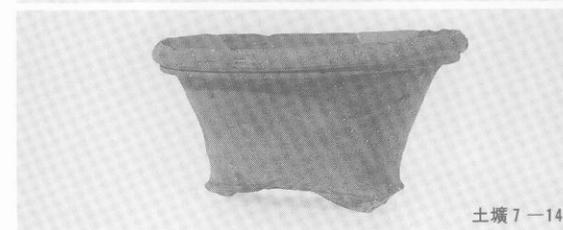
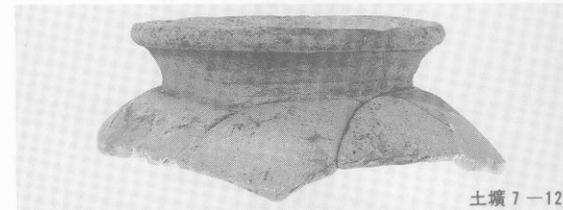
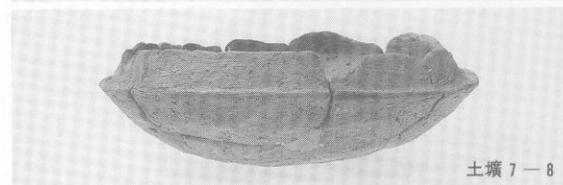
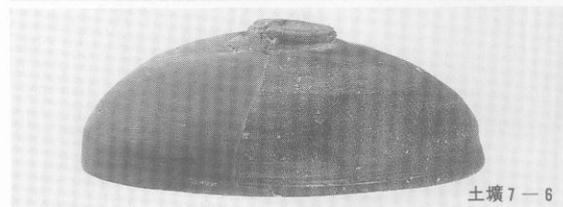
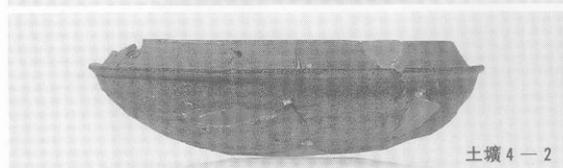
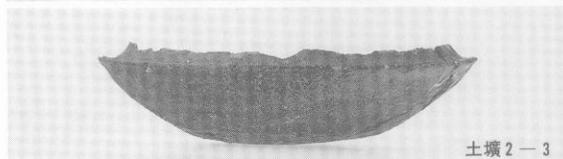
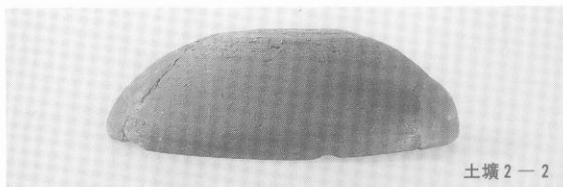
住22-7



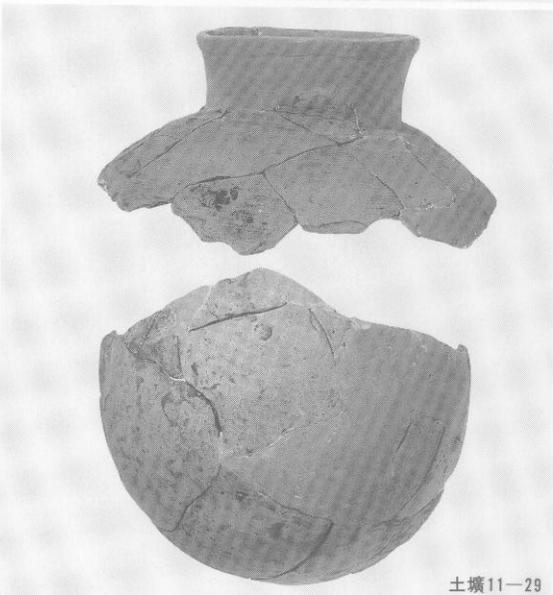
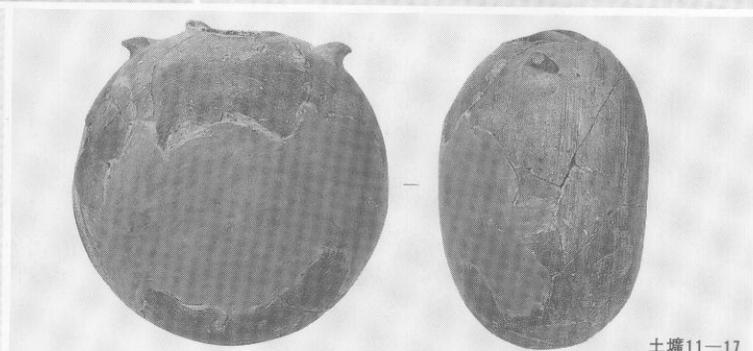
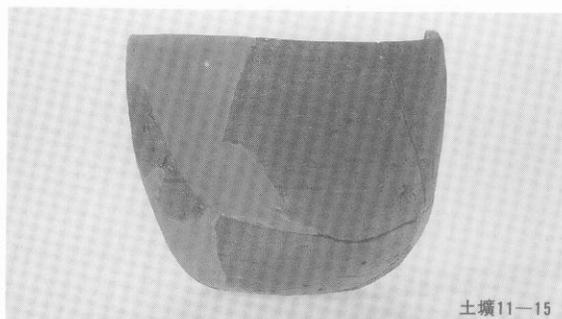
古墳時代豎穴住居跡出土土器.7

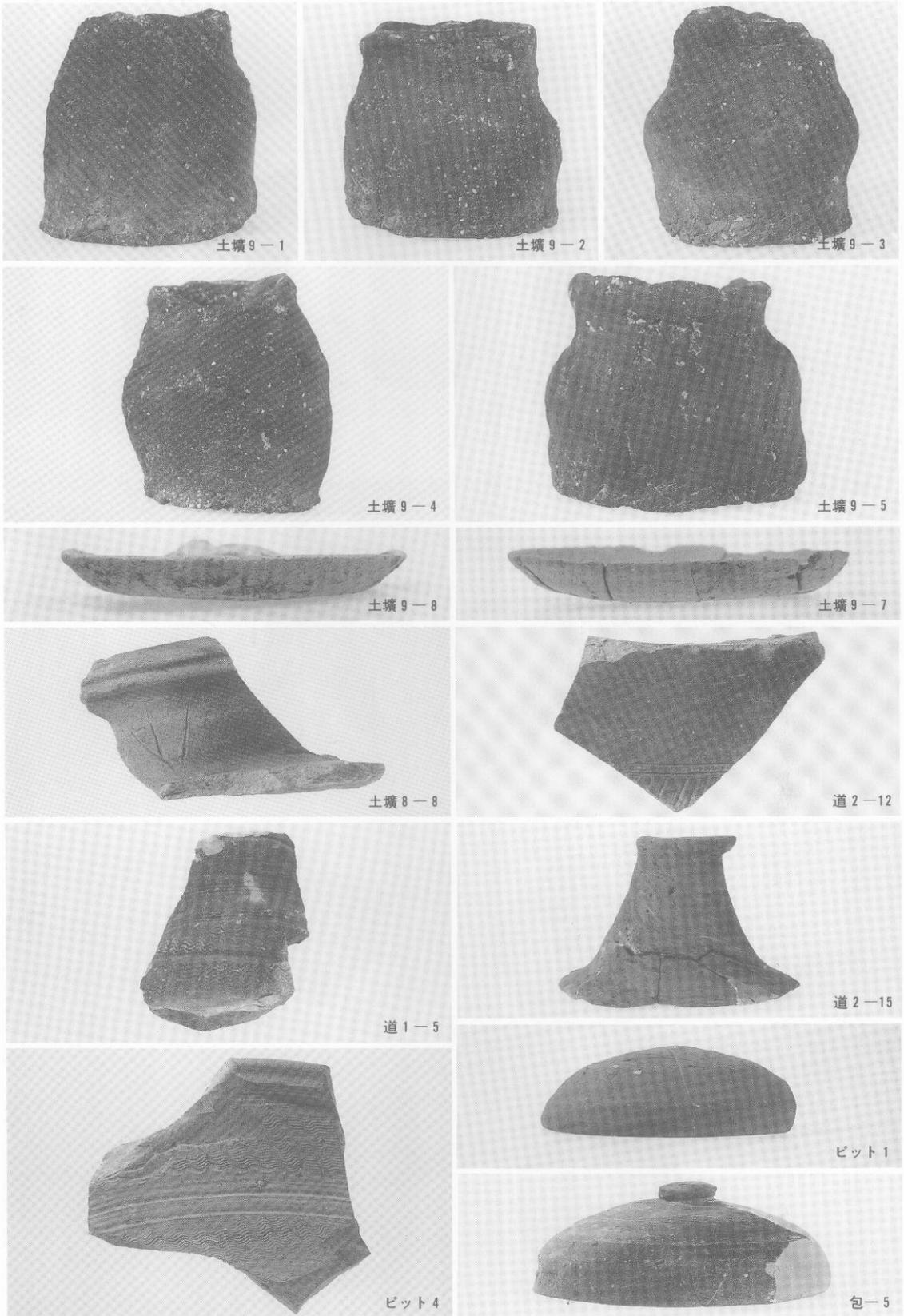


古墳時代竪穴住居跡出土土器. 8

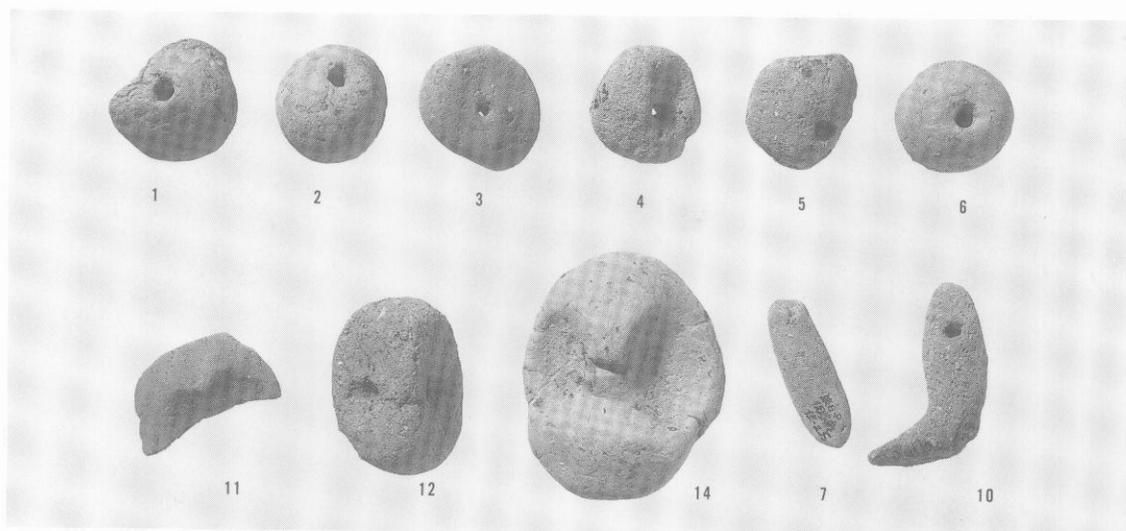


古墳時代土壙出土土器. 1

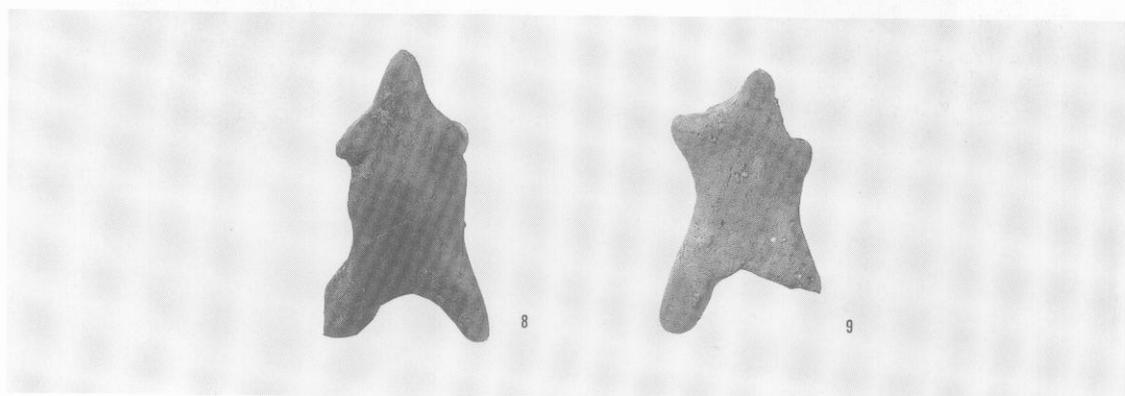




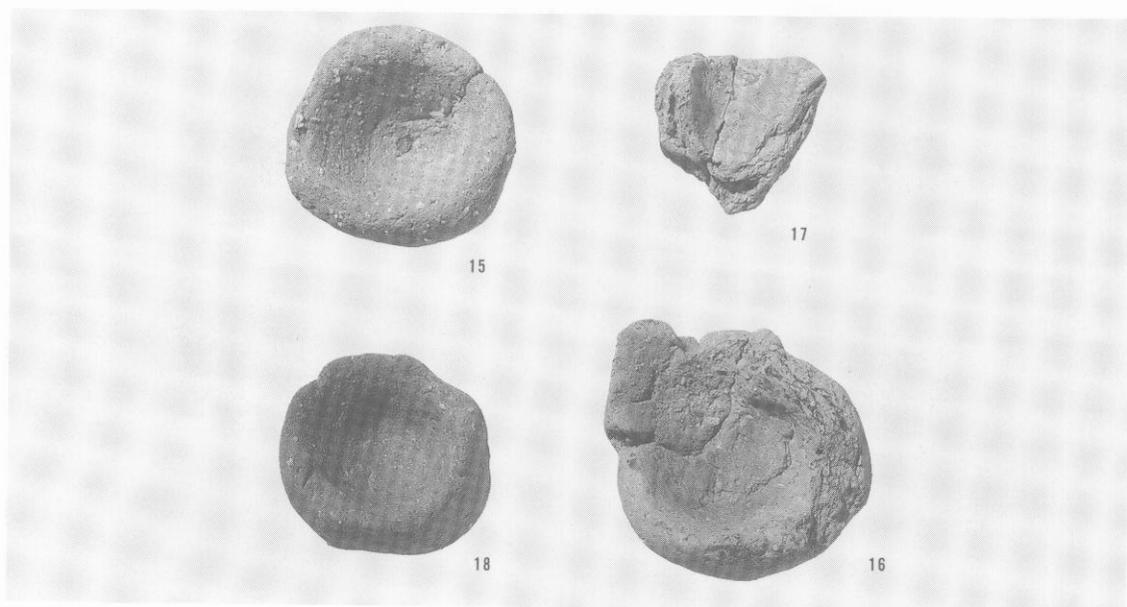
古墳時代土壙.3・道状遺構・ピット等出土土器



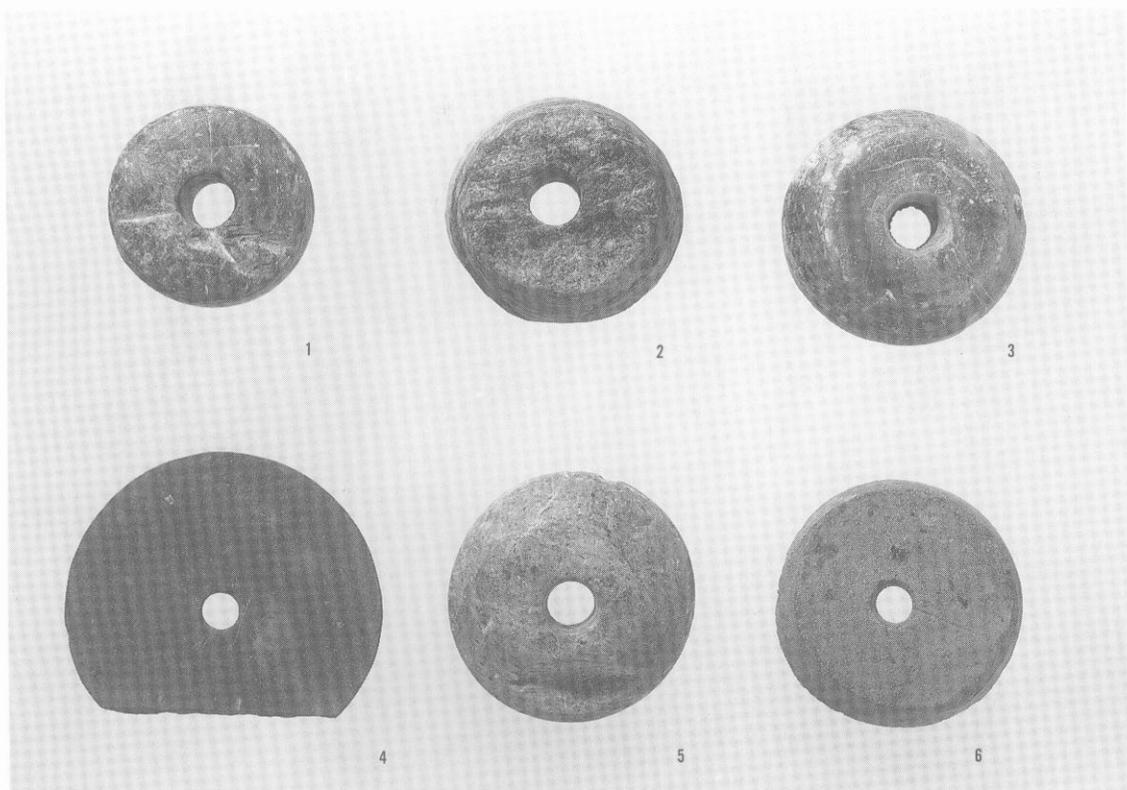
(1) 土玉・土製模造鏡・土錘・土製勾玉



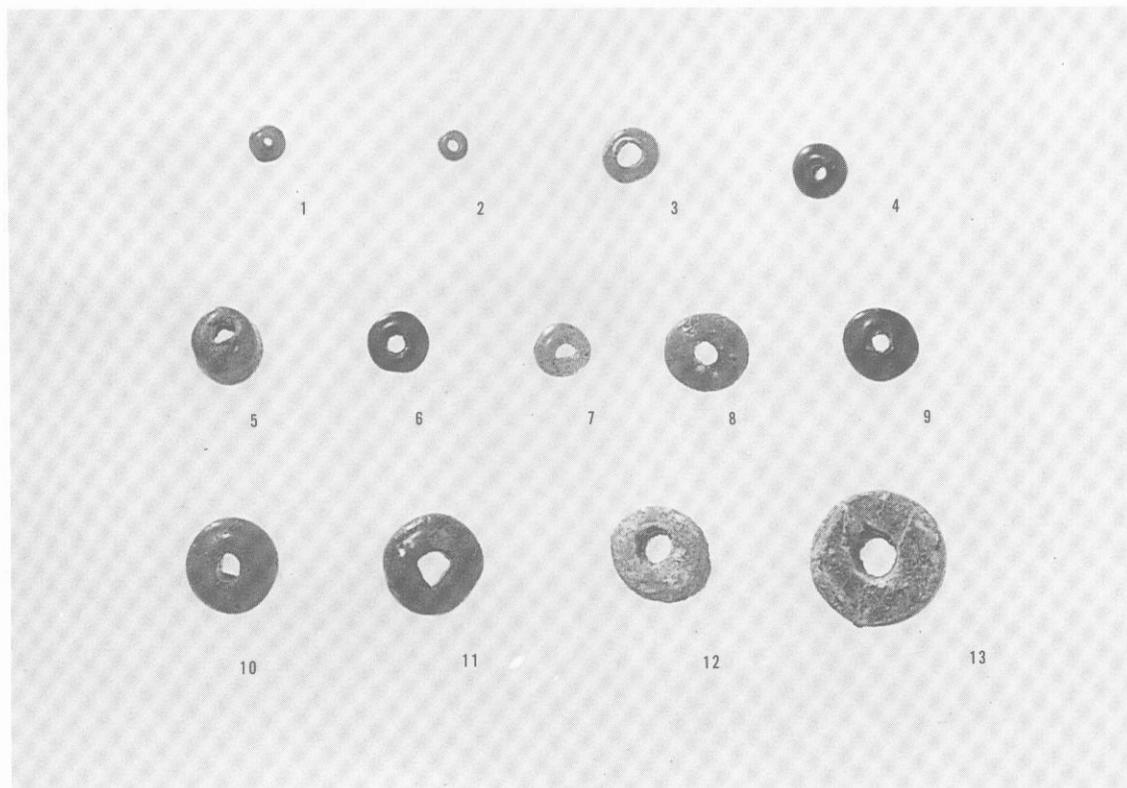
(2) 土製人形



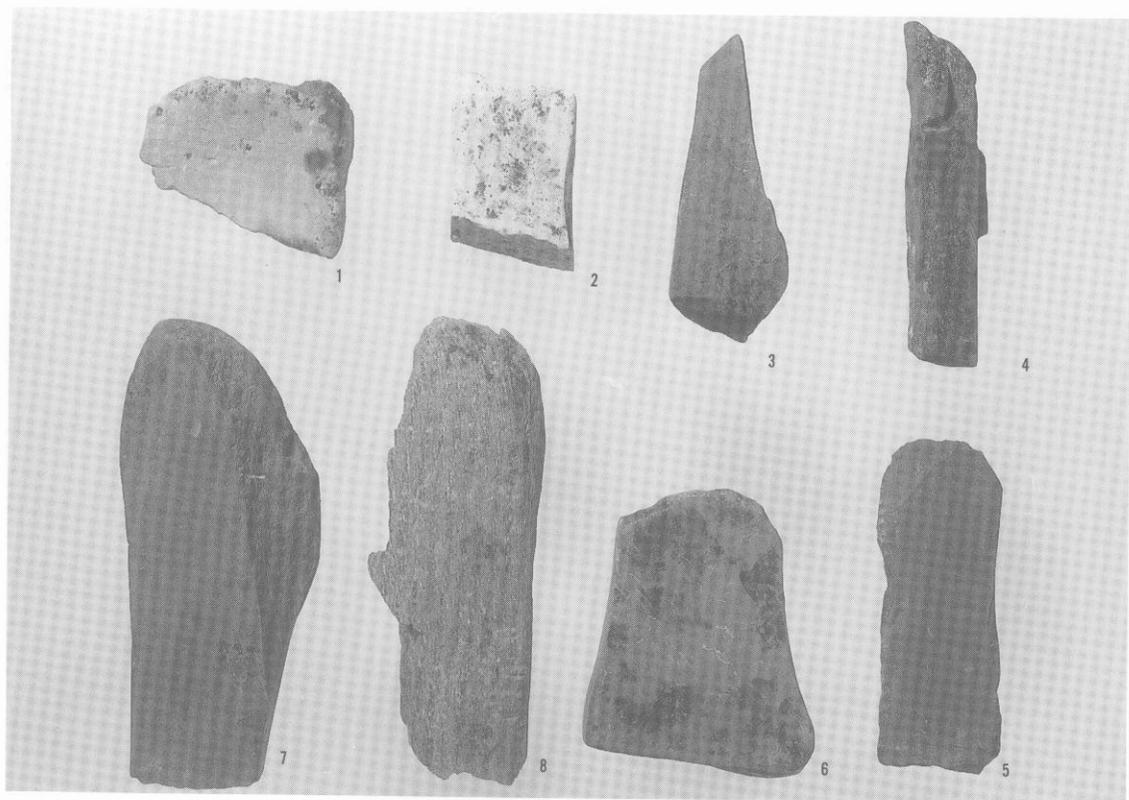
(3) 手捏ね土器



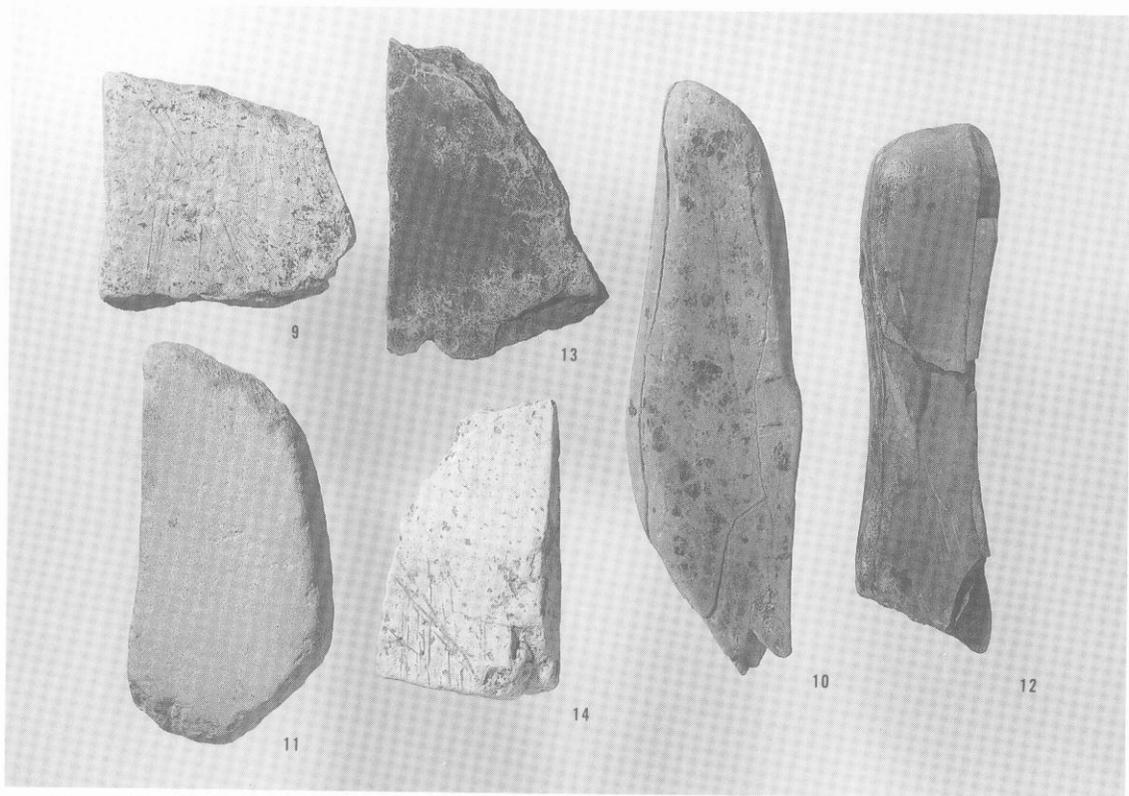
(1) 紡錘車



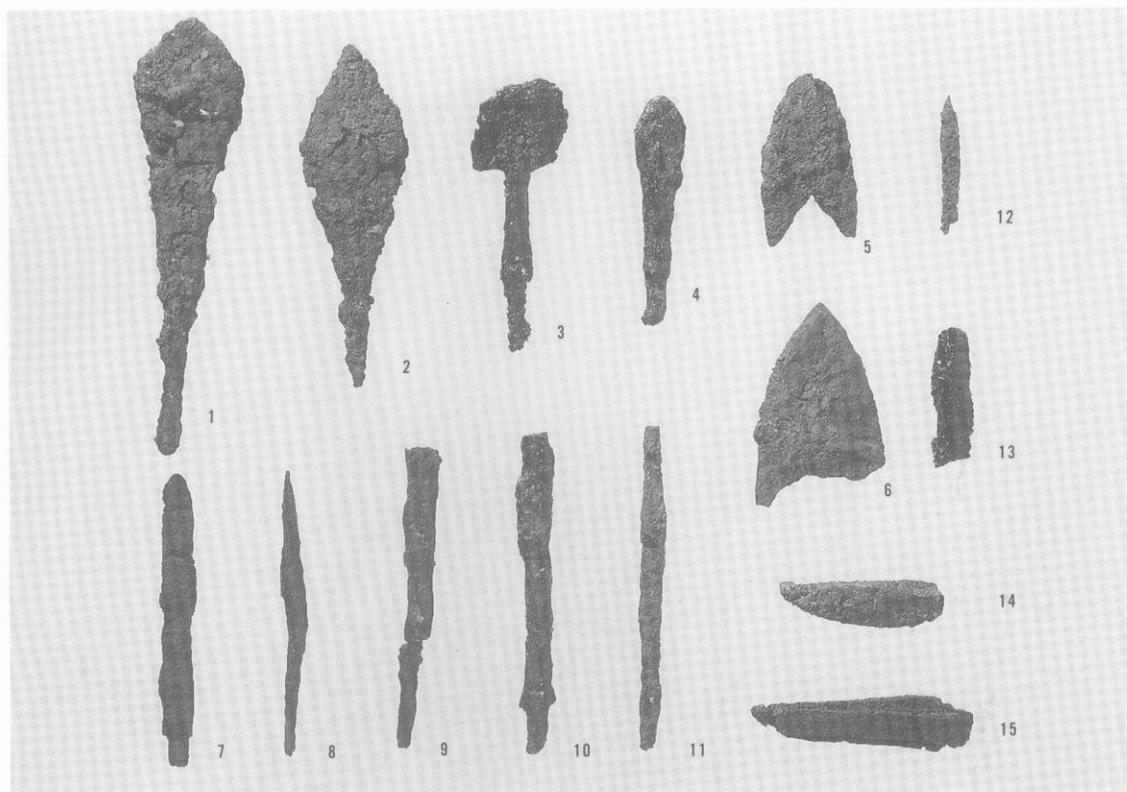
(2) 古墳時代遺構出土玉類



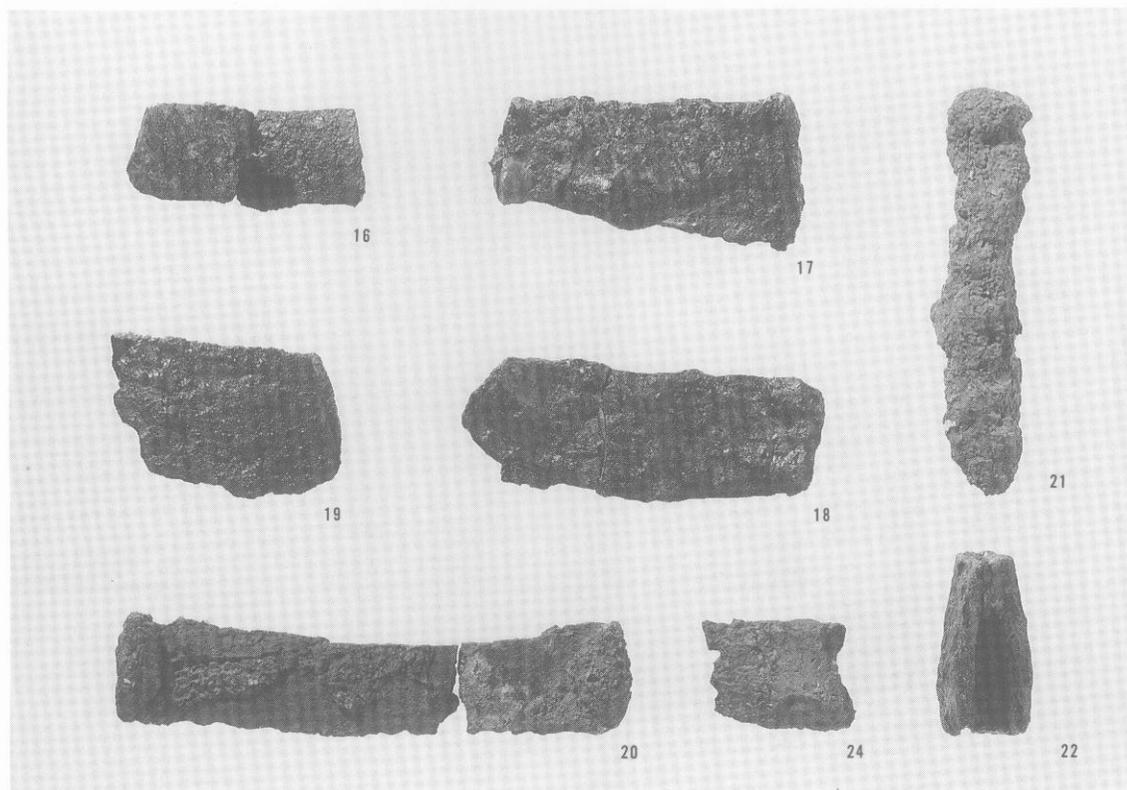
(1) 古墳時代遺構出土砥石.1



(2) 古墳時代遺構出土砥石.2



(1) 古墳時代遺構出土鉄器. 1



(2) 古墳時代遺構出土鉄器. 2



多田羅大車田出土広形銅戈鑄型



三雲屋敷出土広形銅戈铸型

報告書抄録

ふりがな	かんづかみなみいせき							
書名	仮塚南遺跡							
副書名	福岡県筑紫野市大字諸田所在遺跡の調査							
巻次								
シリーズ名	一般国道3号線 筑紫野バイパス関係埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第3集							
編著者名	水ノ江 和同							
編集機関	福岡県教育委員会							
所在地	〒812 福岡県福岡市博多区東公園7-7 TEL (092) 651-1111							
発行年月日	西暦1995年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かんづかみなみ 仮塚南	ふくおかけんちくしのし 福岡県筑紫野市 おおあざしろ たあざかんづか 大字諸田字仮塚 317～319・375・ 376・397～399 番地	402176	170335	33°27'45"	130°32'20"	19910409 19911116	4,100m ²	道路(一般 国道3号線 筑紫野バイ パス)建設 に伴う 事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
仮塚南	村落	旧石器 縄文 弥生 古墳以降	陥し穴状遺構	2種	ナイフ形石器 縄文土器・石鏃・石匙	弥生時代は後期後半 に限定される集落 で、広形銅戈の連結 式鋳型が初出土 古墳時代は6世紀後 半に限定される集落 で、11世紀の土壌が 1基、炭焼窯跡は時 期不明		
			縦穴住居跡 34軒 土壌 4基 溝 1本 谷		弥生土器 石器・鉄器 広形銅戈連結式鋳型			
			縦穴住居跡 36軒 掘立柱建物跡 3棟 土壌 10基 溝 2本 道状遺構 2本 炭焼窯跡 4基		須恵器 土師器 砥石 鉄器 土製人形			

福岡県行政資料

分類番号	JH	所属コード	213305
登録年度	6	登録番号	7

一般国道
3号線 筑紫野バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第3集

かんづかみなみ
仮塚南遺跡

福岡県筑紫野市大字諸田所在遺跡の調査

平成7年3月31日

発行 福岡県教育委員会
〒812 福岡市博多区東公園7番7号
電話 (092) 651-1111

印刷 株式会社 チューエツ福岡工場
〒812 福岡市博多区東比恵2丁目9番1号

一般国道
3号線 筑紫野バイパス関係埋蔵文化財調査報告第3集

仮塚南遺跡

福岡県筑紫野市大字諸田所在遺跡の調査

付図 仮塚南遺跡遺構配置図(1/200)

1995

福岡県教育委員会



付 図 仮塚南遺跡遺構配置図 (1/200)